



大正三年九月二十六日印刷
大正三年九月二十九日發行

有朋堂文庫
脚本傑作集下（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

伊達競阿國戲場　終

手をひき花道へかゝる、與右衛門も首を持ち行かうとする、所へ金五郎窺ひ出て。金五「ヤアお尋の歌方姫、こつちへ渡せ」 ト姫にかゝるを、三郎引廻し下手へ投げる、直に與右衛門引つ捉まへ。與右「ヤアしやうこりもなき盗人め、助け措いては後の邪魔、毒喰はゞ皿」 ト拔討にボント金五郎を斬る、此間に三郎姫花道へ行きて。兩人「これは」 與右「早うござりませ」 ト雙方よろしく見得にて幕。

う、兩親には早う死別れ、俺を父親母親とも思うて成人する中も、母が有つたら縫針も教へて、人に笑はれまい、父があつたら斯うもせうと思うた事も水の泡、剰へ古郷の地を離れ、この下總三界へ來て、刃にかゝり死ぬるとは、よく〳〵因果な生れつき、これ俺がいふ事を聞屆けて、後懇に弔うて遣つて下されや、これ〳〵頼みます〳〵、頼みますワイなう」トしやくり上け泣く、與右衛門もこなしあつて。與右「ア、現在の女房を手にかけ」三ぶ「又も女房を身代に」姫「立てる自らが切なさ」與右「これも憂世の」三ぶ「因果か義理か」與右「こなたも」三ぶ「こなたも」姫「みづからも」與右「ア、味氣なき」三ぶ「憂世の」三人「成行ぢやなア」ト三人手に手を執りハア、と泣落す、ト三郎思入有つて、與右衛門も氣を變へて。與右「これ〳〵三郎殿、この絹川は累が首代官所へ持參せん、こなたは何卒姫君をお供して、片時も早うお國許へ、追付く道筋はコレ」ト囁き。「合點か」三ぶ「なる程そんなら妹が其首を、首尾よう敵の手へ渡し、それを功に人殺の科を言拔け、必ず早う絹川殿」與右「南無阿彌陀佛」ト手を合せ、累が首を切り、死骸の袖を取つて其首を包む。三ぶ「ア、これ切めて累が其死骸、頼寺へと思へども、事顯はれては一大事、この川の名の絹川へ」ト死骸を兩人して、前なる川へ投込み、こなし有つて。與右「未來は一蓮託生」三ぶ「南無阿彌陀佛」姫「南無あみだ佛」ト三人手を合せ拜み、三郎は姫の

最前爰へ來かゝつて、何もかもとつくりと樣子は殘らず見屆けた、これ微塵も恨とは思ひはせぬ、皆前生からの因緣事と、俺や諦めてゐる程に、死三昧せずと俺が言ふ事も、マアこれ」ト脇差をもぎ取り。「聞いてくれいやい」姫「あの樣に言うてぢや、マア氣を鎭めて聞いてたもいなう」與右「三ぶ殿、おりや此方に合はす顏がないワイなう」三ぶ「サアそれも合點してゐるが、不憫なは累が臨終、アレおりやあの木蔭で念佛ばつかり申してゐたワイなう、江戸三界から此國迄、はる〴〵在所を、モウ五町か三町で此方の所へ落つく今夜、こんな憂目を見るといふも、定つた惡業であらうぞいなう」與右「すりや何かの樣子は最前から」三ぶ「オイなう、モウ出ようか〳〵とは思うたれど、來る道筋も姫君を嚴しい詮議、高尾が恨で變りし面體、その累を此方の手にかけ殺せば、死靈は立去る道理、もしも元の器量になつたら、姫君のお身代と、儕も思ひついたる故、たつた一人の妹を見殺にする俺が氣は、マアどの樣に有らうと思ふぞ、これ絹川、恨みもせぬ悔みもせぬ、昔の顏になつたを幸ひ、姫君の御身代に立て、命を全う御主人の御先途を見屆くる、せめて妹が罪滅し、死んだ跡で彼女が忠義、賞めてやつて未來迄女房と思うて、月々命日には一遍の回向をしてやつて下されいなう、スリヤ儕も滿足彼女も又、餘の人の千聲萬部より、悅んで成佛するで有らうワイなう、ア、妹めも思へば不憫なやつでござるワイな

て仰天、兩人して引起しきつと見ると、累が顏常の如く美しき顏になる。與右「ヤア扨はこの名號の功力によつて、高尾殿の執念も立去りしよな、ハア、いぢらしや可愛やなア」トちつと泣き、氣を變へ。「こりや累、魂魄こゝを去らずんば、よつく聞け、最前おれを代官所へ呼びつけしは姫君の事、はや訴人せし者有つて、首討つて渡せとある、山名宗全よりの嚴しい言付、元の面體と成つたるこそ幸ひ、其方が首を以て御身代とし此場をすまし、密に姫君をお供すれば、適れ忠義なるぞよ、サこれを未來の引導に、快よく成佛してくれいよ女房ども」ト愁の思入あつて、涙を拂ひ氣を取直し、首を鎌にて搔切らんとする、ト三ぶ最前より小蔭にかくれゐて、この時すつと出て。三ぶ「こりや絹川、其首切らぬ中、此兄にたつた一目、とつくりと暇乞させてくれいやい」トわつと泣き出る、與右衛門吃驚して。與右「ヤア此方は三ぶ殿、ホイさうぢや」ト脇差を拔き。「南無阿彌陀佛」ト腹を切りにかゝる、三ぶ歌方姫とめて。姫「マア待つてたもいなう」三ぶ「こりや待て絹川、狼狽へたか、何で死ぬのぢや、マア〳〵待て」與右「エ、三ぶ殿、何で死ぬとはこれ義理と恩とに搦まれた、女房の累を殺し、何とこなたへ此顏が、のめ〳〵生きて會はされう、放して死して下されいなう」三ぶ「オヽ尤ぢや道理ぢや、がマア氣を鎭めて俺が言ふ事聞きやれいなう、これ絹川、お館の様子知らせたさ、又妹にも逢ひたさに、尋ね下つたこの下總、

す、ト姫ウヽ、ヽと正氣づきたる科にて。姫「ヤアそなたは絹川」與右「姫君様、お心は確にござりまするか」ト姫の身體を見て思入あつて「ヤアこりやお身にお怪我はござりませぬか」姫「さればいなう、自らも肩先から切られしと思ひしが、其跡は氣を喪ひ、何事も知らざりしが、ほんに儂が身は」與右「マヽ、不思議な事でござりまする」姫「ヤアこれ絹川、日頃信心する肌身に添へし祐天の六字の名號、表具ともに斜に切れしは」與右「ヤヽ、ヤア扨は常々御信心浅からぬ祐天様のお影ゆゑ、御身に凶事はなかりしか、ハッハア、有難し〱、これに就けても不憫なは女房累が敢ない最期、アヽはやまりし、是非もなや、赦してくれよ女房ども」ト立寄り死骸を拜む。姫「ヤアそんならお内儀は殺されたか、ハアヽ扨も〱、仕様模様も有らうのに、短氣な事を爲やつたなう」與右「因果の道理とは言ひながら、姉妹共に我手にかけて、殺すこの身は何たる業、兄の三郎への言譯は、姫君をお館へお供申した上、腹掻切つて跡からおつつけ、こりや女房ども、必ず〱六道の辻で待つてゐてくれいよ」ト累が死骸に抱きつき悔み嘆く、姫も共に泣き、思入あつて。姫「吾が君を戀慕ひ、そなたを尋ねに來た故に、愛しや儚ないこの有様、せめて未來は成佛してたも」ト右の六字の名號を累が死骸の顔にあてる、ト燒酎火ぱつと累が死骸より燃上り、後にて消える、ト天井に月出る、兩人吃驚してよく〱累が顔を見

我ぢやワイの、堪忍しや」かさね「イヤ殺すのぢや〳〵」與右「イヤ何のまア」かさね「オヽ殺さば殺せ、とても添はれぬこの身の上、死んだ後でも此恨、霽さいでおかうか」ト恐しきこなし。與右「エエ情ない因果ぢやなア、大切な姫君へ過させて、御主人へどうも言譯がないワイやい、是程の事聞分けぬ豫ての氣質ではなけれども、何をいうても魂は入れかはつて、高尾の惡念が皆爲す業、三ぶ殿に番うた詞もあれど、主人へ言譯二つには、所詮叶はぬ急所の痛手、俺が手にかゝつて死んでくれい、併し本心ならぬ女房を殺す俺が心の中、どの樣に有らうと思ふぞいやい、斯ういふ譯とは露知らず、世間の人の口の端に、埴生村の與右衞門が女房累は、心も器量も惡女ゆゑ、夫に殺され死んだ後、樣々の仇をせしと、末々までも因果咄を殘さうかと、それが不憫な可愛いわいやい〳〵〳〵」ト地踏太ふみハアヽと泣く、かさねいよ〳〵募りし思入にて。かさね「エヽおのれ、戀の敵の歌方姫、取殺さいでおかうか」ト又姫にかゝる立廻にて。與右「モウこりや是非に及ばぬ」ト右の鎌を累の腹へ突込む、ト雨車雷しきりに強く鳴る、トこれより目覺しき立廻いろ〳〵有つて、鎌にてゑぐる、累くるしきこなし、七轉八倒してこける、直に鎌にて終刀をさし。「エヽこれ目前敵同士が夫婦になり、姉妹共に俺が手にかゝるといふも、前生からの結合した惡縁か、エヽ情なや。何はともあれ大切な姫君のお身の上」ト歌方姫を抱起

つてくれ、こりや女房、心をつけよ女房ども、エヽ頼むワイ〳〵」トいろ〳〵こなし有つて男泣に泣く。かさね「これ與右衛門殿、おりや何にも心は狂はぬ、違うたのはこなたの心、先刻にも其樣に涙を零して、この妾を誠しやかに瞞しやつたぞや、モウ其手は喰はぬワイなう、日頃いとしい可愛いよと、思込んだ我夫に、瞞されたと思へば憎いも又百倍ぢや、此上は姉様を手にかけて、大勢の人を殺した絹川谷藏は、埴生村の與右衛門でござりますと、代官所へ訴人して、二人ともに憂目を見せて腹癒るのぢや、エヽ退かしやんせそれ」ト驅出さうとする。與右「それやつては」姫「マア待つていなう」ト兩人立廻りにて止る、かさねこの立廻の中、右の鎌にて一枠歌方姫を斬る、姫ハアヽと後へ反りこける、與右衛門この體を見て吃驚、累が持つてゐる鎌をもぎ放さうとすれど、放さぬこなし、この揉合いろ〳〵有つて、トヾ思はず知らず累が咽笛を斬る、ト與右衛門又仰天して。與右「ヤアこりやわが身の咽笛を、ヤア〳〵〳〵これ累、怪我ぢや了簡してたもいなう」トこちらへ來て。「これ姫君、氣を確にお持ち下されませう、疵は淺うござります、姫君樣いなう」ト又こちらへ來て。「かさね、氣を慥に持つて呉れいやい」と與右衛門彼方此方うろ〳〵狼狽へまはるこなし、ト仆れ臥したるかさね起上り、與右衛門を仇と見て、恨めしきこなし有つて。かさね「こりや妾を殺すのぢやなう」與右「いや〳〵更々さうではない、コリヤ怪

しに尋ねてござるものかいなう」與右「サアそれは世上を知し召されぬ姫君ゆゑ」かされ「イヤ〳〵イヤモウ何にも聞かぬ〳〵、又其上に百兩の金、金五郎に借りたとは何で言やつた」與右「サアその入譯を、とつくり打明けなんだは、思ひちがひの俺が過」かされ「オヽ思違がしたで有ろ、思違がせいでワイなう、これ此方が可愛がる其女に要る金とは知らいでの、現在この妾が勤奉公に身を賣らうとまでしたワイなう、エヽ思へば〳〵妾が爲には讎敵の其女、食ひついてもこの恨、はらさいでおかうか」ト歌方姫にかゝる、與右衞門引廻し。與右「エヽこれ程事を分けていひ聞かすに、さりとては聞分のない、あのこゝな劫ざらしめが、これ累、なぜ其樣に物の道理を辨へぬぞ、とはいふものの思ひまはせば二人が因果、我手にかけし高尾殿の執著の、霽れぬ不思議はそなたの家で、泊り合せた其夜のしだら、夫婦の中をさかんとて、面體ばかりかそれ脚までも、生れもつかぬ不具となり、サたとへ何の樣な顏容になりやつても、三郎殿の志といひ、古鄕を離れて遙々と、此下總の草の中、作馴もせぬ百姓業、不自由な世帶を苦にもせず、誠を盡してたもる心底、心の器量は昔の百倍、これ何の愛想をつかさうぞ、こりや篤りと氣を鎭めて聞いてくれ女房ども、誠絹川谷藏が女房の累、本心五體の中にあるならば、この道理を聞分けて、姫君の御難儀といひ、この與右衞門が一生懸命の場所、恨をはらして倶々に、心頼にな

私が事を思うて下さるかと、死ぬる覺悟の其中でも、嬉しうて〱拜んでゐたワイの、が今よくよく思うて見れば、敵討を延して貰うた兄樣への義理ばかりで有つたかいなう、其義理も又忘れて、それ其樣な美しい女房を、江戸へ呼にやり、妾に難題言ひかけて、追出す心で有らうがの、エヽこなさんは恨めしい心ない人ぢやなア〱」トいろ〱恨み泣く。與右「ム、扨は最前金五郎に言うた樣子を、そなたは聞いてゐやつたか」かさね「オヽ何もかも聞いた〱」與右「フム其樣子聞きやつたら、さう思ふも無理ならねど、彼りや金五郎への僞言ぢや、何を隱さうこのお方は、足利賴兼公の許嫁、おれが古主細川家のお姫樣ぢやワイやい、疑はらして共々に、都へお供して賴兼公と御祝言までは、どうも見捨申す事はならぬ、これどうぞそなたもお力になつてたも、これ賴む〱」かさね「イエ〱そりやお前が僞ぢや、いかに瞞しよい女ぢやと思うて、又わしを瞞すのかいな、そりや噓ぢや僞ぢや〱」與右「何の俺が吾身に對して僞言いはうぞい、併し聞分けぬも尤、一たびそなたは高尾の恨の執著、同性の血筋の皮肉へ分入つて、姫君にも仇する妬の執著心は無理ならねど」ト上を仰向いて。「これ高尾殿、これ程事を分けていふのを聞分けぬとは、そりやあんまりで御座るワイの」かさね「イヽヤ其言譯は聞かぬ〱、まだぬけ〱と此上にも瞞すのぢやな、國にござる賴兼公、その許嫁の姫君が、此下総三界へ何

ける者ぢやないワイの、必ず麁相いはしやんなや、エヽ此絹川は何してぞ、早う戻つて給らぬかいなう」 トそつとぬけがけに迯出すを、かさね帶を引張つて。かさね「こりや待つしやれ、わしを欺し拔けうとしても迯しはせぬ、又ぬけ〳〵と言拔けて夫の跡を慕ふのか、エヽ腹立や妬ましや〳〵、こゝ一寸も迯しはせぬぞ」 ト襟上を引つかまへ、引返しきつとなる。姫「アヽこれ何處へも行きやせぬから、どうぞモウ了簡して下されいなう、エヽこりやマアどうなる事ぢや、アレー〳〵」 ト又迯げうとするを又引摑み。かさね「思へば〳〵憎くい女、生けおいて吾夫におめ〳〵添はさうより、殺して共に冥途の道づれ、觀念しや」 ト腰にさしたる鎌を持つて、歌方姫を殺しにかゝり、いろ〳〵兩人立廻りする所へ、向より與右衛門逸散に走り來て、累を引廻し姫を圍うて。與右「これは如何な事、かさね大切な姫君を捕へ、こりやどうするな、必ず過失せまいぞ」姫「オヽ絹川、よい所へよう來て給つたなう」 トわな〳〵震ひながら與右衛門に取つく。與右「サヽよう御座ります〳〵」 ト宥める、トかさねこなしあつて與右衛門にしがみつき。かさね「これ與右衛門殿、エヽこなさんは〳〵ノウ、この樣な妾が見ともない顏容になつた故、愛憎の盡きたは無理ならねど、明して言うて下さつたら、この樣に腹は立つまいもの、これ迄鏡を見なと言はつしやつたのは、かういふ顏を知らせまいとの志、ほんに〳〵其樣にまで

退く間、マアじつと爰に待つてござりませ」金五郎「何を」ト又切結ぶ、歌方姫本舞臺へ戻り、わなわな慄ひゐる、兩人トヾ金五郎迯ぐるを、おのれ何處までもと、與右衛門追蒐け向ふへ入る。

姫「これいノウ絹川、長追せずと早う戻つてたもいなう、ヤヽ」ト向を見て色々心遣のこなし、トかさねそろり〳〵と稻村より出かけて來る、ト又雨車しきりに鳴る、かさね何氣なき體にて。かさね「オヽこれは〳〵、絹川殿を賴ましやつた江戸の女中とはお前の事ぢやの、わしはこの近處の者、絹川の言はるゝには、追つけそこへ往く程に、ちつとの間心を注けてくれいというて、オヽほんにお痛しや〳〵、この下總三界まで戀慕うてござんした、アノ谷藏殿とは定めて深う言交はさんした間であらうなア」姫「これは〳〵誰かは知らぬがしほらしい、よう尋ねて下さつた、が更々さういふ事ではない、自ら戀慕ふ御方は」かさね「白々しい私に何も隱す事はない、有樣に言はしやんせ、何も隱す事はないワイなう」姫「さら〳〵絹川に譯のある妾では」かさね「無いと言はつしやるのか、エヽ此方はなう〳〵、先刻にからの樣子は、あれ彼の稻村の蔭に隱れてゐて、とつくりと聞いたワイの、ようも〳〵遙々の此下總まで、男を寢取におじやつたなア、エヽこなたはなア〳〵」ト嫉妬のこなしにて、きつと歌方姫をつけ廻はす、姫ふるひふるひこはがる。姫「アノそんなら此方は、あの絹川のお内儀かや、みづからは其樣な恨を受

ては、人にも何にも隱す事はない、ノウ金五郎、アレよく／＼俺を思へばこそ、遙々とこの下總まで戀慕うて來た」絹「これいなう絹川、それでは」與右「ハアテ何と心抵者ぢやないか、ぢや程にどうぞ呑込んではたもらぬか」金五郎「ムヽそりやはや友達づくの事、さう打明けて名乘る汝が身を、是非訴人せうといふ程の、又敵役でもないが、金づくばかりは何もならぬ、先刻に約束した百兩ナ、其百兩さへ今渡すなら、又呑込むまいものでもない、サ金せうか」與右「イヤ其金は」金五郎「今はないか、有るまい／＼、何の有ろぞい、アノ爰な大泥棒の盜人野郎奴が」トきつとなつてこなし。「これ汝を絹川といふ事はな、晝當つて見てとつくりどづいておいたのぢや、けれども百兩の金渡さうと吐す故、ハアヽ彼奴も以前は相撲取もして居つた事なれば、相應に貯畜も有つて、金があるまいものでもない、マア百兩引奪つて、其跡で訴人して、又褒美の金をしてやつて、二杯してくれうと思うたが、其圖へ陷らなんだ、もう此上は二人ながら訴人して、褒美の金にしてこまそ、おのれ待つてけつかれ」ト尻ひつからげ驅出さうとする、與右衞門引まはしきつとなつて。與右「おのれモウさう吐せば百年目、どうでも生けちやおかれぬワイ」ト行かうとするを又引止め、兩人立廻り、トヾ兩人刀を拔き切結ぶ、歌方姫怖がる思入にて、震ひ／＼花道の方へ行く。「これ必ずどつちへも往くまいぞ、此奴を片附けお前をお供申して立

ナ、これ爰は絹川の堤、サ人目ナ、これ人通もあるこの往還、何事も私が、アいやさ私がこの胸にナ、イヤ爰で左や右う言ふと悪い、詳しい事は、サ詳しい事は金五郎に頼んでおいたに依て、言ふと悪いノウ金五郎、何とさうぢやあるまいか」ト兩人へかけて呑込ますこなし、ト金五郎、扨は絹川かとけどりし思入有つて。金五郎「なる程さうぢや、が與右衛門、此女が今の素振、又汝が詞の五音、汝やどうでもお尋者の絹川に違はないワイ、何とわりや絹川の谷蔵に違ひはあるまいがな」與右「サアそれは」金五郎「何とさうで有らうがな」トきつといふ、ト與右衛門思案を極めし思入にて。與右「ハヽヽ、イヤこれ金五郎、何とそなたを男と見かけ頼みたいが、爰は一番俠を立てゝはくれまいか」金五郎「とは何事ぢや」與右「なる程俺は其人殺の絹川ぢや」金五郎「オ、さうであろ、汝が絹川なれば此女は、先刻に代官所へ配符のまはつた歌方姫とやら、占ひ姫とやらぢやが」與右「アヽいや滅相な、さうではないく、決してさうではないてや、かう尋常に人殺の絹川と名乘るからは何にも隠さぬ、サそなたを男と見込んだ故」金五郎「ム、そんなら俺を見込んで此姫を、まごさで異れいといふ様な事か、大方汝が頼みはそんな事であらうぞい」與右「なる程、何を隠さう此女は俺が江戸にゐる中、深ういひかはした女房ぢやワイの」トこの中かさね又密と出て聞いてゐる。累「アヽこれ滅相な、それは」與右「ハテ扨モウ斯うなつ

つて、百兩といふ金に溫まる、又こなさんも早速よい男にありつくといふもの、すりやこれ二人ながらよい鎹思案といふものぢや、ナ何と嬉しいか、ォヽ嬉しかろ〳〵」トおのれ一人呑込みゐるこなし、トこの中稻村よりかさね出て窺ひゐる、聞くたび毎にいろ〳〵思入ありて、扨は金の要る譯は此女故と腹立つこなし。姫「昨日からそなたの多と世話になり、詞を背くは定めて無得心と思やらうが、一先どうぞ絹川に逢はして下さんせ、これ賴みます、慈悲ぢや情ぢやワイなう、手を合はすワイなう」トいろ〳〵賴み拜みて泣く。金五郎「エヽめろ〳〵と忌々しい衒妻めぢや、長吼えてもどうしても、與右衞門が所へやらねば措ぬ、又否とぬかすが最後ぢや、此川へどんぶりこ、サア應といや」姫「サアそれは」金五郎「但しは否か」姫「サア」金五郎「手短かに川へはめうか」姫「サア」金五郎「サア〳〵どうぢやい」ト金五郎じり〳〵と姫をつけまはし。「エヽ忌々しい、とち女郎めが」ト踏仆す、姫いろ〳〵こなし、身體痛み苦しき思ひ、ト向ふより與右衞門走り出て、此體を見て吃驚して、本舞臺へ駈付け。與右「ヤア金五郎ぢやないか」金五郎「與右衞門か、テモ早うしかけたなア」與右「オヽシテ約束の衒妻は」金五郎「こゝへ連れて來てゐる」ト姫を引起し。「金と代物引替に」ト姫を突出し提灯にて見せる、ト姫燈火にて與右衞門が顏を見て愕りして。姫「ヤアこなたは絹川」與右「アイヤこれ〳〵、オヽ眞に爰は絹川、

ぞ慈悲ぢや、情じや、絹川に逢はせて給ひなう」ト手を合せ頼み入る。金五郎「エ、さりとては聞分のない、道々もいひ聞かすのにど執こい、これ女中樣、よう聽かんせや、こな樣が泣き浸著いて逢ひたがる、其絹川の谷藏といふ角力取は、この近邊にはマアないワ、又あつた所が人殺のお尋者ぢや、定めて大方國許で、女房にならう持たうのと、かたう言ひかはさんした事も有らう、それで此下總三界まで尋ねてごんしたといふ樣な事で有らうが、そんな科人をさがして添はうより、幸ひなよい事があるワイの」姫「何と言はしやんす」金五郎「この在所に與右衛門といふ、それは〳〵よい男がある、時にこの女房が累といふぢや、其また累といふ奴の顏かたち、イヤモウどうも二目と見られた面ぢやないワイの、そこで彼の與右衛門めが、女房の傍では可愛いの不愍のと、日頃から瞞しすかして、詮事なしに添うては居れど、どうぞ幸ひな事が有つたら、其女房の累を逐ひまくつて、よい女房としかへたいと思うてゐる矢先、今日こな樣の事を話したら、彼奴も酷い逆上者ぢや、有りもせまいにこな樣を百兩に賣つてくれい、今夜夜中迄に渡さう、したが累にはマア隱したい、どうぞ此土橋まで連れて來てくれい、金と引替にせうといふ、かた〳〵の約束で、追つ付こゝへ金持つて來る筈ぢや程に、其絹川とやらのお尋者を戀慕うて、共に憂目を見やうより、あの與右衛門が所へ行かんすれば、俺も斡旋した效もあ

造物向ふ一面の草土堤、走り附にて見附淺黄幕、堤の上後へよせて藪垣、左右藪蘆原、稻村取付けよろしく、下手床下へ向けて涙板、これに法界の水むけ取合せよろしく飾付け、都べて絹川堤の模樣よろしく有るべし、ト雨車少し雷の音にて幕開く、ト向よりかされ菰を被り走り出て、花道よき所にて息をつぎこなし有つて。

かされ「今のは確に與右衛門殿、後から追うて見えし故、藪蔭へ隱れたが、定めて妾を尋ねにか、外に用でも出來たのか、アレ彼の向ふの畑の中へ行かしやんした後姿が、此世の見をさめ、覺悟はよう極めてゐれど、今一度逢ひたい與右衛門殿、アいや〳〵この淺ましい顔貌、まだ此上に水に溺れ、どの樣な見にくい姿となり、一倍愛想を盡されうと思へば、それが悲しい〳〵わいなア」ト花道にて泣く、ト又氣を變へ。「ア、悔むまい嘆くまい、とても存らへゐられぬ此身、さうぢや〳〵」ト思ひ定めたる思入にて本舞臺へ來て、邊の小石を拾ひ、右の豆籠へ投込みゐる、ト向ばた〳〵人音する故、下手の稻村へちやつと隱れる、ト向より金五郎、歌方姫の手を引き出て、花道にて金五郎提灯を持ち出る。姫「こりやマア何處へ伴れ行くのぢやぞいなう」金五郎「何處へといふたら、俺が行く所へ行くのぢや、サア〳〵ごんせ〳〵」ト本舞臺へつれて來てこなしある、此時雨車止んで合方になる。姫「爰へ來てどうするのぢやぞいなう、どう

定めし上からは、一時も早う、さうぢや〳〵」トきつと心を取直したる思入にて、邊にある豆籠を脊負ひて、其籠へ門口にある小石を拾ひ入れ、沈みにする思入にて、又内へ入り鎌を見つけ、これを持つて佶相して表へ出ようとする、所へ與右衛門花道より戻つて來る故、見つけられては恥かしいといふ思入にて、行燈の火を吹消す、ト與右衛門門口入る、一時のきつかけにて雙方こなし有る、ト忍三重の合方になる。與右「女房ども、やう〳〵と今戻つた、かさね〳〵、こりや暗がりにして何處へ行てゐるのぢや、女房ども〳〵」ト呼び〳〵そこら探り歩く、この時かさね摺違ひ、密と表へ出て忍ぶ、ト與右衛門この音を聞きつけ「誰ぢや〳〵、そこへ出るは累ぢやないか」ト程よく累の帶を捉へる、トかさね思入あつて。かさね「さらばで御座んす」ト振切り向へ逸散に走り入る、與右衛門恂りして。與右「南無三、今のは女房かさね、それやつては」ト尻ひつからげ追うて走り入る。よろしく幕

大詰 絹川堤の段

役人替名

歌方姫	岩井亀二郎	女房かさね	岩井半四郎
博奕打金五郎	市川宗三郎	豆腐屋三郎	坂東三津五郎
絹川與右衛門	松本幸四郎		

む。花扇「エヽ忌々しいワイ、かゝらぬ事に隙費し、俺をぬつくりやり居つた、この様な化物に百兩は捌おいて、米一升でも買人が有らうかい、忌々しい衒妻め、せめてお脛でなりと腹癒よワイ」ト足にて累を蹴仆し。「ドリヤ金五郎が定めて待つてゞ有らう、思へば〳〵」トかさねを見て。「エヽ忌々しい」ト唄になり向へ走り入る、又合方になる、ト累いろ〳〵有つて、やうやう起上り、思入あつて。かさね「アヽ思へば〳〵恥かしや、斯ういふ儕が顔故に、鏡を見せぬ良人の心、其顔もせず朝夕に、可愛がつて下さんした、お情過ぎてなさけなや、なぜ打明けて有樣にいうて聞かせて下さんせぬ、又姉樣も胴欲な、現在の妹をこれ程迄に憎いのかいなア〳〵、斯ういふ事とも露知らず、今の今まで妾が身で、きりやう自慢をしてゐたのが、恥かしいやらエヽつゝとモウ、悲しいやら、此面さげて何面目に與右衛門殿に、どうマア顔が合はされう、せめて夫と同じ名の、絹川へ身を投げて、死ぬるは未來で連添ふ心、とはいひながら斷然と、思ひきられぬ輪回の綱、わしや迷ふワイなア〳〵」トいろ〳〵身悶して泣き。「わしが死んだ後では、定めし美しい女中さんを、女房に持たさんせうと思へば、そればつかりが氣にかゝり、これが迷の種ぢやワイなア、成佛もやらぬ其時は、可愛と思うて折節は、一遍の御回向賴み上げますワイなア。イヤ〳〵返らぬ繰言、いつ迄いうても同じ事、所詮絹川へ身を沈めんと、心

て。花扇「イヤ半四郎が聞いて惘れるワイ」かさね「そりや又何故でござんすえ」花扇「これいなう、こなさんを誰がマア、惣嫁夜鷹にもほしがる者はないぞや」かさね「エ、そりやマア何で其樣に」花扇「何で其樣もあつかましい、あんまり惘れて物が言はれぬワイの」かさね「エ、モウお前は味いな事を言はしやんすなう」花扇「ハア貴樣こりや鏡を見た事がないの」かさね「ハイちつと樣子が有つて、鏡見る事は良夫の戒、それで鏡見る事はならぬワイなア」花扇「如何さま、其樣子では鏡見た事はあるまい、これ此方の顏の容態をいうて聞かさうか、ぐるり高のちよつぼり鼻、しかも出齒で禿が見えて、其代り跛と來てゐるは」かさね「エ、」花扇「やエ、も凄まじい、幸ひ爰に鬘拔鏡、げふけれんごんめう不思議の御面相、とつくりと見やつしやれ」ト懷より鬘拔鏡を出し、累にさしつけ。「サアとつくりと見さつしやれ」かさね「トレ」ト鏡を見て吃驚して。「妾が顏がこの樣に有らう筈はなし、と言うて」ト四邊見廻はし、いろ〳〵こなし有つて。「あたりに人はなし」ト又鏡を見て。「妾が顏に違ひはない」ト花扇屋が持つてゐる鏡に對ひ、兩人ぢり〳〵と付廻はしにてきつと見得。「エ、情なや、わたしや何時の間に、此樣な顏になつたぞいなア〳〵、それいなア申しこりやマアどうせうぞいなア〳〵、こりやマアどうぞ爲樣のない事かいなア〳〵」ト あちこち身悶して狂氣の如になつて走り歩行く。「ハア、、、」トうつぶしに泣沈

よう留守しや」トあるき、サア御座れ／＼と喧しういうて無理に手を引つぱり橋懸へ入る、ト又合方になる、かさねこなし有つて押入より葛籠を出し、著物を出して著更へる。かさね「アヽ今代官所より急に呼びに來たも、若やこちの人の身の上の事ではあるまいか、アヽ案じらるゝことではあるぞいなア」トいろ／＼思案のこなし。「イヤ／＼モウ夜中には間もあるまい、斯うしてゐるのも心がせく、ちつとも早う支度をして」ト著物を著更へいろ／＼姿形を作る、ト奥より花扇屋出かけて來て。花扇「アヽ旅草臥で思はずぐつとやつてのけた」ト欠伸しい／＼出て來て。「サア申しお内儀樣、暇乞も濟んだなら、取極しませうかい」かさね「オヽ嘸待遠にござんせう、サアそんなら百兩の金渡して下さんせ」花扇「そりや何時でも渡しませうが、シテ其奉公人はどれに居ますえ」かさね「アイ其奉公人は、アノ妾でござんすワイなア」花扇「何をじやら／＼と、サア氣が急きます、ちやつと其奉公人を見せて下さんせ」かさね「イヤ申しじやら／＼ではござんせぬ、眞實誓文私が身を賣つて行くので御座んす」ト花扇屋亭主クツ／＼吹出し笑ひ。花扇「ムハヽヽヽこなさんそりや何をいふのぢやぞいの、それ先刻にいはんした、半四郎と云ふ代物を」かさね「さいなア、妾が事でござんすワイなア」花扇「ハヽヽヽ、滅相もない、お前は氣が違つてゐるか、あのこなさんが半四郎か」かさね「アイなア」トそしらぬ顔にていふ、亭主手を拍つ

が、よう得心して居ながら、どう狼狽へて泣いたやら、年の經つ間は射る矢より、早う戻つてもとの女房、必ず〳〵それ迄は、健で暮して下さんせ、つらい勤に身を賣るも、お前の爲と思へば、わしや喜んでいそ〳〵行くワイなア」與右「オヽよう言うてたもつた、忝ない、其志は女房とは思はぬが、昔に變る面ざしとも何にも知らず」かさね「エヽ」與右「サ何にも知らずにゐるそなた、甚い苦勞をかけるノウ、がどう有つても吾身を賣つては、三ぶ殿へ番ひし詞、與右衛門が顏が立たぬ程に、何道この事ばかりは思止つてたもひなう」かさね「それぢやというて、外に心當のない百兩の金」與右「サそれも俺がこゝに、マア急く事はないワイなう」トばた〳〵にて橋懸より歩行一人走り出て、内へ入り。あるき「申し〳〵與右衛門様、山名宗全様から繪姿を以つて、お尋ねなさるものがある程に、今ござれと御代官の命令、サア〳〵ござりませ」與右「ナニ繪姿を以てお尋者、ムウ」トぎつくりして。「イヤ追つけそれへ往く程に、マア往て下され」あるき「何を言うてぢやいな、今お前をつれて來いとの事ぢや、其樣な悠長な事ぢやござらぬ、サア今ぢや〳〵」ト與右衛門の手を引張る。與右「そんなら是非がない、行きませう」ト納戸口にある脇差はつこみ往かうとする、累ちよつと止めて。かさね「これ待たしやんせ、先刻にから言ふ通り、必ず短氣を出して下さんすなえ」あるき「サア行かんかいの」與右「さりとては忙しない、往くワイなう、女房ども

添ふ俺に改めて願ひとは、そりやマア何事ぢやぞいの」かされ「イエ〳〵外の事でもござんせぬが、日頃お前の言はしやんすには、鏡を見るな、ひよつと見るが最後、一生の縁を斷る、連添うてはゐぬ隙やると言はしやんしたに依つて、今迄はお前の其詞を守り、生家を出てから鏡を見た事はござんせぬが、妾やどうぞ其鏡が見たうござんすによつて、それで願といふは此事でござんすワイなア」與右「ムヽウそんなら何といやる、そなたは俺に暇くれいと言やるか」かされ「アイサア今宵に迫つた手詰の金、どうぞ妾が身を、勤奉公にやつて下さんせいなア」ト我が顔の變りし事を知らぬ科にていふ、與右衛門これを聞いて、其顔でどうしてといふこなし有つて、涙を呑込み思入。與右「エヽわが身とした事が、埒もない、たとへどの樣な事が有つても、そなたに勤奉公させて、兄の三ぶ殿へ俺が立たぬワイなう」かされ「さいなア、それぢやに依つて離縁の狀下さんせ、これ與右衛門殿」トちよつと泣き。「とはいふものの世の中に、女房は良夫に去られまい、暇取るまいとする筈のものを、マア縁を切れて嬉しいといふ、心を推量して下さんせ、さはいへ別れたとても、必ず心變らず可愛がつて下さんせエヽ、これが大事の別と思へば、わたしや身も世もあられぬ、悲しいワイなア〳〵」ト與右衛門の膝にしがみつき大泣に泣く、與右衛門も涙を浮べ、煙管をくひしばり、忍泣きに泣いてゐる、トかされ又氣をかへ。かされ「ほんに妾とした事

の様子は」かさね「サア顔容風俗は、江戸でいふ歌舞伎芝居の半四郎によう似てござんすといなア」
花扇「それはきつい代物ぢや、どうぞ俺が方へ相談きめませう、さうして金の望は」かさね「アイ百兩にさへ買うて下さんすりや、年は五年が十年でも、それに厭ひはござんせぬ」花扇「其噺の通りなら、隨分百兩に買ひませう、幸ひ爰に金も持つてゐるから、相談さへ極つたら、直に作れて歸にたいもの、そんならさうして下さんせ」かさね「エ、忝うござんすし、だが今いふ通り夫のある身なれば、互に得心づくの上、どうぞ暇乞する其間は、アレあの納戸で暫しが中」花扇「そんならちつとも早う手まはしを」かさね「そりやお前よりこつちが急きまする」花扇「お内儀さん、後に逢ひませう」ト唄になり、花扇屋亭主こなし有つて奥へ入る、跡しんめりとした合方になる、かさね色々思入あつて。かさね「ア、嬉しや、ほんに世の諺の通り、棄つる神あれば拾ふ神とやら、手詰になつた百兩の金、今の間にツイ調うて、さぞ與右衛門殿も悦ばさんせう、併し嬉しやと思へば悲しい憂別れ、ア、これとても男の爲、とてもの事に潔う夫に泣顔見せぬのが、別れる此身の置土産、さうぢや〳〵」ト いろ〳〵泣顔をかくす思入してゐる、ト奥より與右衛門出る、累ちやつと氣をかへ、いろ〳〵思入あつて傍へ寄り。かさね「申しこちの人、わたしやお前に少許願があるが、何と聞屆けては下さんすまいか」與右「これは改つた女房ども、現在連

ハテ面妖な、どつちへお出なされましたか、何卒コレお目にかゝりたいものぢやが」トこの中かさねフット氣のつきしこなしにて、此身を賣つて金を調へうといふ思入にて。かさね「ホヽ、ホヽそれはようマアお出なさんした、どうで見える金五郎さん、入つてお待ちなされませ」ト煙草盆を持つて出て。「マア〱一服お上りなされませ」花扇「ハイ〱いやモウ構うて下さりますな」ト又かさね茶を持つて出る。かさね「マアお茶一つお上りなされませ」ト出す、花扇屋取つて。花扇「モシ〱モウお構ひ下さるな」かさね「イヤ申し貴方はアノ吉原の女郎屋樣でござんすかいな、遙々の所をようマアお出なさんしたなア」花扇「イヤわしや今度筑波參りに下りまして、この村に懇意合があつて、一寸立寄りましたでなア」かさね「夫はマアようお寄りなされました。イヤ申し私は始めてお目にかゝつて、馴々しい事ながら、ちつと貴方に折入つてお頼み申したい事がござんすワイなア」花扇「ハイそれはマア如何樣な事でござりますな」かさね「イエ〱外の事でもないが、私が夫與右衞門と申しまするが、ちつと手詰の難儀について、急に金の要る事があつて、身を賣りたいといふ人がござんすが、今言うて今相談の出來るものでござんすかな」花扇「いやモウそれは商賣づくの事なれば、何時でも談合は出來るてな、シテ本人の年頃はな」かさね「ハイ十七八でも御座んせうか」花扇「オット年はよし、シテ其女の顏のすまひ、立入れ

す、まだ夜半までは間もあり、一寸延れば尋のびる、マア〳〵奥へ來て酒でも一つ飲ましやんせ、所かはれば品變るとやら、又よい思案も出よぞいなア」與右「イヤおりや少と爰に用がある、吾儕マア奥へ往てたも、ア丶深切な事よう言うてたもつたなう」ト累が顏を見てほろりと泣く。「併し其樣に案じてたもんな、おりや一思案うかんで、とんと心をおとしつけてゐるゾイなう、さりながらこれが此世の」ト懐より書遺を出しこなし。かさね「エ丶」與右「サ世の中はア、金の世界ぢやなア」ト兩人思入ある、ト在郷唄になり、與右衛門奥へ入る、向より花扇屋の亭主、半合羽尻からげ一本差にて出て、花道にて。花扇屋「たしかに此邊と聞いたが、向の家と見えるワイ」ト本舞臺へ來て。「チツトお頼み申しませう、與右衛門樣とは此方かな、金五郎樣といふお方がお前にと承りましたが、一寸お目にかゝりたう御座りまする」かさね「イヤ手の隙がない、歸つて下さんせ、エ丶何ぢややら邪魔らしい、奉公どころかいの、こちの家は宗旨が違ひます、さうしてアノ今はちつと取込んでゐる、マア去ておくれいなア」花扇「イヤ左樣な者ではござりませぬ、私は江戸吉原の者でござりまする、ちつと御免下さりませ、内へ入つて申しませう。イヤこれはお初にお目にかゝりました、私は江戸吉原の女郎屋でござりまするが、金五郎樣に御相談しかけました奉公人、金持つて來い此方に待て居ますとおつしやりましたが、

ざんすの、女房の私には隠さずと、どうぞ聞かして下さんせいなア」與右「これ累、今迄そなたには言はなんだが、何を隠さうアノ金五郎には、親の代から百兩といふ借がある、此中から其金を返せ〳〵といらだての催促、色々といひ延したが、切端詰つて今夜の夜中に、どう有つても其金を返さねばならぬ應對、請負ふ事は請負うたが、土か砂か見る樣に、百兩といふ大枚の金、早速調ふあてもなし、寧そ毒喰はゞ皿、破れかぶれアノ金五郎奴を」ト斬らうといふ科する。かされ「エヽ」與右「サさう思うて見ても、又外に工面のしやうも有らうかと、今其の思案最中ぢやワイなう」かされ「そんな滅法界な、無義道な事が、藥袋もない。が與右衛門殿、何のマア百兩やそこらの金、其樣に苦にさしやんす事はないワイなア、又よい思案もござんせう、これ必ずかんまへて短氣な事して下さんすなえ、其お前の短氣故人を傷めて。サアもし其事が顯れて、どんな憂目に逢はさんせうかと、本に夜の目も合はぬワイなア、今この樣な日蔭の身となつたも、皆こなさんの心から、若もの事が有つたらば、跡に殘つた妾が身はどの樣にあらうぞ、ちつとは又女房の心にもなつて見てくれたが可いワイなア」トいろ〳〵口說き泣く、與右衛門も涙を拂ひ。與右「それ程迄に俺が事を思うてたもる志、悪うは受けぬ嬉しいぞや、これ何も彼も得心してゐるワイなう」かされ「ムヽそんなら何事も聞分けて下さんしたが、エヽ嬉しうござん

恨むであらう泣くであらう、殊には義理のある女房、兄の三ぶに詞を番ひ、たとへどの様な事があつても、一生見すてまいといふた女房、義理の缺けるもお主の爲、了簡して下され三ぶ殿、こらへて呉れい女房ども、嗚呼併しせめて一筆書遺し、女房にも得心の行くやうに、さうぢや〳〵」トしんめりとした合方になる、與右衞門行燈を持つて來て、硯を取寄せ、いろ〳〵こなし有つて、書遺にかゝる、トかさね酒を買うて向より出て。かさね「さぞ待兼ねてであらう、ドレちやつと行きませう」トつか〳〵と内へ入る。「こちの人、今戻りました」ト與右衞門これに吃驚、書遺をちやつと後へかくす。與右「オヽ女房ども、今戻りやつたか、吃驚したワイなう」かさね「お前も私が戻つたに、何の吃驚する事があるぞいなア」與右「それはさうと累、酤う暇が要つたなう」かさね「アイこの在所の酒は惡いと言はしやんすに依つて、隣村迄往て買うて來やんした、此金五郎殿は何處にぢやえ」與右「金五郎は待ちかねて、疾に去んでのけた」かさね「エヽ本にマア氣の短いお方ではあるぞ、折角買うて來た酒、そんならお前、飲ましやんせぬか」與右「アヽいや〳〵俺はモウ酒どころぢや無いワイの」トしほ〳〵としてゐる、累つく〴〵顏を見て、思入あつて。かさね「これこちの人、多うお前の顏の色が惡いが、お前何とぞさしやんしたか、然してマアつひにない、日頃好な酒も嫌とは、ムヽこりや何ぞこなさん様子のある事でご

與右「金五郎、金渡そが今はない、彼方此方に預けておいた金、取集める間、今夜の夜半まで待つてたも、鐘を合圖に百兩の、耳を揃へて渡さう程に」金五「ハテそれ程にいふ事なら友達の好み、夜半までは待つてやらうが、必ず約束違はぬやう、併し累が手前、爰の内へ其妻つれて來るも俺も氣の毒、斯うしよう、絹川の土橋へ金を揃へて持つておじや」與右「オヽさうして給れば俺も勝手がよい」金五「そんなら與右衞門」與右「出會ふ所は土橋の際迄」金五「必ず約束違へぬ樣」與右「金と代物引換に」金五「念には及ばぬ」與右「金五郎後に」金五「どりや去んで夜半を待たうかい」ト兩人こなし有つて、金五郎向へ入る、唄になり跡合方彈流し、暮六の鐘鳴る、與右衞門手を拱み、じつと思案のこなし有つて、行燈に火を點し。與右「アヽ憂世ぢやなア、日外やお館の騷動ゆゑ、一旦この絹川がお供して、立退きしと風聞せし頼兼公、やはり砂川のお下屋敷におはすとも、辨なき姫君さま、女心に遙々と、慕うてお出遊ばしたか、何にもせよ一寸マアお目にかゝつて、アいや〱歪みに歪んだ金五郎奴、絹川と知られては此身の大事、姫君の御身の上、と有つて百兩の金はなし、所詮手短に金五郎めを、追つかけて討果し、姫君のお供して立退くより外はなし、オヽさうぢや」ト驅出さうとして又小戻りして。「併し如何にお主の爲ぢやとて、この儘に立退かば、嘸や跡にて女房が、何にも知らずに見捨てたかと、

屋の亭主が、筑波參りの戻りがけ、この在所に逗留して居る故、ちよつと其事を咄したら、見ぬ先から飛ついて、百兩には直が成つた、吾儕が其絹川なら渡してやる品も有らうが、絹川でもない人に渡す事もマアないといふもの、イヤモウ何ぢやか知らぬが、此間は金儲の晝になつたワイの」トこの中いろ〳〵與右衛門が、胸にぎつくり當る思入にて、途方に暮れてゐて、此時フツと氣をかへ。與右「ハテ扨そなたはよい金の蔓に取つきやつたのう、が今そなたの咄の樣子では、よつ程よい代物の樣に思はるゝワイ。金五郎、何も相談ぢやが必ず笑うてたもんな、おりや貴樣の今の咄で、見ぬ戀に憧憬れた、其女は何と俺が女房にはたもるまいか」金五「アノそんなら累といふ女房のある身で」與右「ハテ吾儕も粹の樣にもない、よう物を思うて見や、おた外聞の悪い、冬瓜にあて身くらはした樣な面、何時まで女房に持つてゐらるゝもので」金五「すりや眞實女房に」與右「ハテ何の嘘を言はうぞい」金五「ハテ色めいたワイ、面白い女房に遣ろ、遣るはやるが與右衛門、百兩といふ代物、たゞはならぬがそれ合點か」與右「そりや言はいでも知れた事」金五「そんなら金貰はう」與右「イヤ其金は」金五「無いか、あるまい、何のあらう、汝達の齒節に合ふ代物ぢやないワイ、おかん事ぢや廢にしや。どりや是から花園の亭主に會うて引合せ、久しぶりで百兩の金のお面を拜まうかい」ト立つて行かうとするを與右衛門引とめ。

つて、身の置所がなさに、江戸からうろ〳〵下總三界へ迯げて來たげな、ア丶命といふものは欲しいものぢやてな、今にでも俺が手先へ廻るが最後の助、お尋者の絹川、引縛つて褒美にする。ノウまアそんなものぢや有るまいか」與右「ム丶なる程、聞いた時には其絹川、卑怯者とも思はるれど、イヤ適れな男ぢや、ハテ何故といや、三人四人の人を害める大丈夫、それ程の魂で、何の迯隱れしてたまるものかいの、定めてそれは大切なお主のため、といふ様な事でがな有らう、マテそんなものぢやあるまいか」金五「ム丶如何さま、さう言へばそんなものかい、そんならそれは然うよ、ハテ變つた事もあるものぢや、聞いて給も、昨日絹川の堤で、年の頃十六七でも有らうが、尋常な高尚い娘が、絹川を教へてくれいと言ふに依つて、絹川はこの川ぢやと言うたれば、イヤ川の事ぢやない、絹川といふ相撲取を尋ねるもの、供をして來た者もあつたれど、昨日途ではぐれた、所は知らず道は知れず、絹川々々とあちこちと尋ね廻り、やう〳〵爰まで來た、どうぞ絹川に會はしてくれと、俺を佛の樣に手を合はして泣いての頼み、つまはづれといひ詞つき、何でも父は吉田の某と、梅若くさい生れつき、そこで俺が思ふには、こいつはよい代物が手に入つた、江戸の吉原へ賣つて遣つたら、百兩には棄てもなると、昨日の晩から此方の家にしつかりと匿うておいた、幸ひ吉原の花扇

みたうないが、これ嗅衆、何と口祝に一杯振舞はぬかいの」かさね「それは心易い事なれど、折節取つた酒はなし」與右「かさね、一走り往て買うて來てやれい」かさね「オヽさうしやんしよ」ト酒徳利を持つて出て。「金五郎さん、そんならツイ往て來る程に、緩りと咄して下さんせえ、どりや往てこうか」ト唄になり、かさね徳利をさげ、跛ひき〳〵橋懸て入る、ト跡合方、兩人こなし有つて。金五「イヤ與右衞門、外に誰も聞人はなし、貴樣に少と尋ねたい事がある、といふは外の事でもない、この四五年以前在所を出て、江戸で角力取をして居やつたといふ噂、内に居やる時分から小達者にもあり、何でもマア善い事ぢやと言うてゐたが、その時の和御寮の名乘は何というた、その名が聞きたい」與右「ハヽヽヽこれは又何事かと思うたら、仰山な物の問ひやう、成程倂身のいやる通り、上方へ登つて相撲部屋へ入つては居たが、いやモウ人に知らるゝ程な事ではないワイの、尤も其時の俺が名は」金五「絹川と言はうがの」與右「ヤ」ト愕りすることなし。金五「イヤサ絹川の谷藏といはうがの」ト屹といふ。與右「ハヽヽヽ何のいの、伊達殿や稻川殿の樣な關取なら、處の名も命けもせうが、わが名さへ碌々に忘れるやうなはした相撲、所の名折れ何のマア」トそらさぬ顏にて煙草のみゐる。金五「オヽ名告れまい、言はれまい、言はれぬ筈ぢや、其絹川といふ奴は、一人ならず三人四人、人殺の罪が廻

お目にかゝらぬ、本にマア江戸の吉原へ突出しにしても、二人と下る器量ぢやないワイの、本に本に私が樣な女房果報のある者はないぞいの、たとへ天女が天降り情所を見せかけても、七里けつぱい氣は移らぬ、ヤこれモウ氣遣の氣の字もないワイの、イヨこちの辨天、船饅頭の取楫も、今宵の風まん取掛るぞ、船玉淸めて待ち給へ」ト累をいろ〳〵落著かすこなし。かさね「そんなら其心に違はござんせぬかえ」與右「エヽ愚癡者め」ト背中を叩き宥めすかす。かさね「エエ嬉しうござんすが、女房の淺はかにツイかすりごと、これ了簡して下さんせえ、さうさへ思うてゐて下さんすりや、わしや大抵や大方嬉しい事ではないワイなア」ト與右衛門に寄添ひこなしある、兩人よろしく有つて。與右「イヤモ早速に船玉樣の御機嫌が直つて、悦ぶてノウ」ト與右衛門も累を引寄せこなしある、ト在鄕唄にて向より金六郎、大縞の丹前、前帶にて田舍の粋方の扮裝にて出て來て、ずつと內へ入る、兩人吃驚飛びのく。金五郎「ハア、こりや晝中に癡話やるな〳〵、やこれ見ともないおいてくれ〳〵」ト上手へ坐り煙草盆ひかへる」與右「何を金五郎が、じやら〳〵と面白うもない」金五「イヤお娛み〳〵」與右「イヤそれはさうと、吾身は何と思うて」金五「何とは少許金儲の筋に就いて、其方に問ひたい事があつて來たのぢや」かさね「それはマアよう御座んしたなア、お茶あげませう」ト茶を出す。金五「イヤ俺や茶はあんまり飲

與之吉がいうたのは眞の事でござんすか、モウ今更いふではなけれども、二人が間は兄様の情で、結ぶの縁の絲解けて、お前が餘所外に仇し心が出來たらば、わしや何とせう、どうせうぞいなア」ト泣く。與右「エ、わが身もマァ何の事ぢやぞいの、今與之吉がいうたのは、ありや俺が煽つてやつた其返報をして去をつたのぢや、そんな事は頓とないこつちや〳〵、わが身もよう思うて見たがよい、彼の樣な者に何の俺が、七里けつぱい〳〵、氣もないこと〳〵」かさね「イエイエさうでも御座んすまい、斯う言へば私が口から器量自慢をする樣なれど、家を出た時こなさんが言はんすには、私が願の叶ふ迄、神樣への願立ぢや、必ず〳〵鏡を見てくれなとのお前の賴み、女の身の嗜みも男の爲と誓を立て、面影さへも見ぬ樣にするはお前が大切さ、どうぞ願の叶ふ樣と、それ故鏡は見ぬけれど、江戸で生れて餘の人にでも袖褄ひかれたこの妾が、在所育ちのおそよとやらに、見かへられては立ちませぬ、わしや濟まぬワイなア〳〵」ト與右衛門に縋り泣く、與右衛門も累が顏を見て、何にも知らずに不愍なといふ思入にて。與右「ハテ扨何を藥袋もない事言やるぞいの、其方の樣な美しい女房持つてゐて、この田舍の土だらけな彼の日和臭い女に、目もやらるゝものかいの、それ其方も内を出る時、門口で顚倒て足こそ跛なれ、顏なら風俗なら、この下總一國を探したとて、そなたの樣な女が今一人有つたなら

に窓の下、お孫と與之吉ちがない、オヤ〳〵どうせうの、ハヽヽヽ、お孫それでも油斷しやんなや、藪際の茂次が娘おそよにもの」お孫「エヽ與右衛門樣何と言はしやんす、與之吉樣はそんならおそよさんにも」ト腹を立て與之吉が胸倉をとり。「エヽお前は〳〵、これこゝな惡性男め、油斷もすきもなる事ぢやないワイの、そんな爺むさい事をさんすと、お前天窓から咬つくぞえ」ト胸倉を振りまはす。與之吉「アヽこれ〳〵、其樣に腹立てずとマア待つてくれ〳〵、あの樣にいふのは與右衛門樣が、汝が事を俺にあぶせて言はしやるのぢやワイの」お孫「あぶせていふとは、そりや如何いふ譯」與之吉「へヽ爰の與右衛門樣に、疾うから惚れてるワイの、與右衛門樣も又あのおよそには、どうやらちつと氣がある樣子」お孫「そんならお前、眞實そんな事はないかえ」與之吉「何の俺がマア可愛さうに、そなたを除けて其樣な心はないワイのう」お孫「オオそれで落著きました」與之吉「まだ道々咄す事もあれば、サア お孫」お孫「そんなら與右衛門さん、大きにお喧しうござんした」與右「モウ去にやるか、又明日賴みます」お孫「サア行うかいなア」ト與之吉が手を執る。與之吉「與右衛門さん、明日あひましよ、サアおじや」トお孫の手をひきこなしある、ト在郷唄にて向へ入る、跡合方になる、かさね少し悋氣の思入にて、與右衛門の傍へ差寄り。かさね「これこちの人、眞に〳〵こなさんは〳〵、あんまりな惡性ぢやぞえ、今

アサア來やれ〳〵と、捨白にて本舞臺へ來て、右の脊負ひし荷を卸し。かさね「與之吉樣おまご樣、よう手傳うて下さんしたなア、私等は爲馴けぬ故に、お前方に振向けて、苅つておいて貰うた苅豆、家まで運ぶが二人の仕事、マア〳〵休んで下さんせ」ト煙草盆など出し、世話やく思入。與右衛門「本に二人ながら多い太儀で有つたノウ、マア煙草でも喫んで下さんせ、それからね、茶でも沸して飮ましやいのう」與之吉「イヤ〳〵モウ構うて下さんな、一服して去ます」まご「ほんに累さん、モウ何にも構うてお呉れなえ」與右「扨マア今年は十分の上作で、近年覺えぬ豊年、畦の豆さへ落零れる世の中ぢや」與之吉「さうぢやワイの、分けて又今年の豆は、怪からぬ出來いなう」トこの中かさね茶など汲んで出す。與右「その豆で思出した、これお孫よ、隱す事はないからな、與之吉とそれ密會の盆屋がなくば、何時でもこちの家を貸してやらう程に、精一ぱいちぎれ〳〵」お孫「あれ又與右衛門樣が、惡口いうて嬲つてぢや、そんな覺はないワイなア」與右「ハテあれ程浮名の立つた二人が中、隱しても人がよく知つて居るワイなア」與之吉「イヤ申し與右衛門樣、お孫と私が中を、マ其樣に噂しますかえ」與右「噂どころかい、昨夕も昨夕とてわが身達の事を謠ふを聞かぬかいやい」與之「何と謠うたえ」與右「何とやら面白う節づけて、オ、それ。お孫殿やれお孫殿、ソレ晩げも行くべいか何處に寐ろ、東枕

込んでゐるワイの」かされ「兄さんおさらば」ト手をひく。かされ「アイ」ト三人よろしくこなし、引取三重にと向へ走り入る、ト最前谷藏に跟いて出でし忍びの者、密と出て内へ入り。忍び「何でも氣ぶさいなこの戸棚」ト戸棚へかゝる、三ぶ引廻し。三ぶ「何を」ト咽首しめる、トくはへ面にて死ぬる、ト德次奥より出て行燈を突出し。德次「旦那さんこれは」三ぶ「こりや」ト抑へ。「シイー」ト兩人よろしく途端にて。幕

四ツ目　埴生村の段

役人替名

一あるき七助
一在所娘おまご
一百姓與之吉
一吉原花扇屋才兵衛　坂東鶴十郎
一博奕打金五郎　市川宗三郎
一女房かされ　岩井半四郎
一埴生村與右衛門（實は絹川谷藏）　松本幸四郎

造物平舞臺、見附赤壁納戸口、上手折廻り反古張障子屋體、いつもの藁家様の門口、繩暖簾、橋懸り菰垂塀、都て埴生村貧家の見得宜しく、在郷唄にて幕開く、ト絹川谷藏元服して百姓の世話衣裝、同じく累も世話女房の拵へにて、右の顏にて跛をひき〳〵、苅豆を脊負ひ出て來る、各鎌を持つ、跡より百姓與之吉、同じく在所娘おまご、手傳のこなしにて、同じく苅豆を脊負ひ出て來る、皆々サ

さるな、夜明けぬ中ちつとも早う旅立を」三ぶ「ザアそれも尤、言はゞ妹か一世一度、サア其方から取上げて」トとさん突付け。「妹、吾身は見れば綿帽子を被て、こりや祝言の本型をくらはしたな、マア／＼これを脱いだがよいワイの」ト累の綿帽子を取る、ト累の顔悪女に成つて居る故、三郎吃驚して。「イヤ吾身の其顔は」絹川「イヤ三ぶ殿驚く事はない、高尾殿の執著故ナ、こりや高尾殿の執著故に」トかさねに顔の變りしを言ふなといふこなし。かさね「わたしの顔が何とぞ致しましたかえ」絹川「イヤ何ともせぬ、イヤ三ぶ殿、たとへ此上累殿が、如何様な病氣が起らうとも、又面體が萬一變らうとも、ナそれ」ト累を教へ。「一旦約せし女房のこの累、イヤサこれ何にも案じる事は御座らぬぞや」ト呑込ます、ト三ぶこなし有つて。三ぶ「エ、忝ない、過分に御座るワイの／＼、何にも言ひませぬこれ絹川殿」ト手を合し。「必ず末永う見捨てゝ下さるなや」絹川「夫婦となるからは言ふには及ばぬ、いつ／＼迄も面倒見いで可いものか、ノウ累」かさね「アイ／＼嬉しうござんす」トかさね我が姿の變りしを心づかぬ思入、ト七時の半鐘鳴る。三ぶ「アリヤモウ七つ」絹川「夜明けぬ中に」三ぶ「片時も早う」ト谷藏かさね宜しく支度する。かさね「そんなら兄様」三ぶ「随分無事で」絹川「吾君の事を」三ぶ「オ、それも合點」絹川「然らばこの儘」三ぶ「ア、氣がかゝりは妹が」ト累の顔を見てしんほりとする。絹川「ハアテ呑

れぬとは、よし／＼愈々思ひ斷られずば、そなたの皮肉へ分入つて、絹川に愛想をつかさせ、そなたの身に過させるが、それでもそなたは夫婦になるか」かされ「エヽ姉樣、そりや餘りでござんせう、さう言はしやんすりや私も意地づく、アイ大事ござんせぬ、命にかけて絹川殿と添遂げまする」高尾「イヤ添はさぬ／＼」かされ「添うて見せやんせう」高尾「イヽヤならぬ」かされ「添ひまする」ト薄どろきびしくなる、かさね髻を引かれるこなしにて、鬘亂れ散亂して、きり／＼舞うて、トヾうんと仰向に倒れ伏す、ト絹川奥より走出で、右の下駄を見て。絹川「ムヽえならぬ匂は此下駄」ト百草の火を揉消し上手を見ると、かさね倒伏してゐる故、悔りして立寄り。「ヤアかさね、この有樣は何事、こりや／＼累、氣を慥かに持つてくれ、かさね／＼」ト抱起す、累の顔仕掛にて惡女に變りある故、又悔りして。「ヤアこりやどうぢや」トちやつと最前德次の持つて出たる綿帽子を顔へ打被せ、累を抱締め。「エヽまだ浮ばずか高尾殿、何事も我君のお爲と思ひ諦めて、恨をはらして下されや、南無阿彌陀佛／＼」ト十念を唱へ伏沈みゐる、ト奥より三ぶ何氣なき體にて、銚子盃持ち出て。三ぶ「サア／＼絹川殿、心ばかりの此祝言、ちよつと學びの盃事、サア／＼早う／＼」ト谷藏さあらぬ體にもてなし。絹川「イヤ三ぶ殿、斯う互に得心の上は、盃せずとも夫婦は夫婦、未來まで必然添遂げまする、必ず心遣はして下

うしてするゐてこまさうワイ」ト行燈の火にて、下駄に灸をするゐる。「これで可いワ〳〵、これ
これ累さん、用があるなら呼んで下んせ、某はマア開かうワイ」トをかしき科をして奥へ入
る、この中かさね髪を撫でつけ終ひ、いろ〳〵姿體を作りゐて、フッと又鏡に對ひこなしあつ
て。かさね「ハテ變つた薫がする事ぢやな、ハテ不思議な」トいひ〳〵又鏡臺の傍へ來て鏡を見
る、寐鳥うすどろになる、累きつと見て。「ヤア姉樣の姿がありく〳〵と、この鏡に映るは」ト吃
驚して後向く、ト屏風にかけし高尾の小袖動く、ト又びつくりして。「ヤア扨は姉樣、まだお前
はエ、浮ばんせぬなア」トこの中始終寐鳥うすどろ。高尾亡靈「オヽうかばぬ〳〵、エヽ恨めし
い妹、戀しと思ふ殿樣に添はさぬ恨山々の谷藏と、女夫にして添はす事はならぬワイのう」ト
高尾の聲にていふ。かさね「エヽ姉樣、そりやお前胴欲でござんすぞえ、お前絹川樣に恨あるは尤
なれど、思ひ思うた絹川さん、兄樣さへ了簡して女夫にして下さんすに、お前も何卒堪忍して
恨をはらし、妾をば女夫にして下さんせ」ト思入あつて。「これ拜みますワイな〳〵」ト手を
合はせ拜む。高尾「イヤ〳〵思ふ中を堰きとめて、刃にかけし絹川に、何とそなたを添はせうぞ、
サア妹思ひ斷りや」かさね「イエ〳〵何程う言はしやんしても、思ひ斷ることわしや否でござん
す、モウいひ出しても下さんすな」高尾「エ、聞分のない妹、これ程にまでいひ聞かすのに聞入

とお頼み申すは小舅殿」三ぶ「そんなら聟殿」絹川「委細は奥で」かさね「こちの人」ト恥かしさうにいふ。絹川「後に逢ひませう」ト唄になり、兩人こなし有つて奥へ入る、累うれしき思入にて、いそ〳〵として鏡臺を取つて來て、鏡に向ひ髮を撫附けにかゝる、獨吟の合方になる。かさね「エヽ兄さん忝ない、日頃の願が叶ふといふも、みんなお前の情故、死んでも忘れぬ、嬉しうござんすワイなア」トいろ〳〵こなしにて又髮にかゝる、よろしく髮なでつけ終ふ、唄の切になる、奥より德次ずつと出て。德次「扨々今夜は變つた夜さりぢや、逮夜かと思へば、やつどうどうと斬合が始る、こりや耐らぬと裏口へ迯げかけて見たれば、ちやんと仲が直つて又婚禮ぢや、何でもこりや盆も正月も、祭禮も彼岸も、亥子も初午も一つになつたやうなワイ。これかさねさん、大方要らうと思うてな、隣のお家さんの綿帽子を借つて來た、イヤそれはさうと、先刻の横柄な奴は何處に居るえ、エヽまだ去なぬさうな、お前と木綿川樣と大事の婚禮に、あんな奴が内に居ては、どうやら邪魔をしさうな奴ぢやぞえ、どうぞ去す思案が有りさうなものぢやが、フウかうつと、オツトよい思案があるぞ、此間俺にするゐると言はんした團十郎もぐさ、ちやんと袂に隱しておいた、ヘヽ、こいつで一番まじなうてこまそ」ト袂より百草を取出し、頼兼の履いて來た下駄を見つけ。「可笑しい下駄を履いてうせた、何でもよう効く樣に、どえら

たの爲には大切なるお方、いやサ御かたびらは此三ぶが命にかけて、確乎と預つたが、人を害めたこなたの身の上、望の叶ふ迄は一先本國下總の埴生村へ影をかくして、時節を待つが忠義とやらでは有るまいか」絹川「なる程、その志は辱なけれど、この絹川は彼のお方の、イヤあのかたびらの傍を離れては」三ぶ「サヽ、それもこの三ぶが、密かにお館へお供申すが、それとも氣遣はしくば、妹のこの累、人質ではない高尾が敵、一人は手放しならぬ、附けてやる」トかさねを谷藏へつき遣り。「イヤそれも面倒かい、不承ながら寧そ女房に持つて遣つて下んすまいか、スリヤこれ俺の爲にも大事のお主のこの戸棚、これ何とこの相談に乗つては下さるまいか」絹川「イヤモウ三ぶ殿の御深切、仇を情に引きかへて我君の御介抱、殘る方なき志、何しに違背致しませう、此世は愚か未來まで、添遂ぐる女房かさね」ト我方へ引つける、累うれしき思入。三ぶ「すりやァノ添うて遣つて下さるか、妹悦べ」かさね「ハイ／＼嬉しう御座んす、これも偏に兄樣のおかげ、エヽ有難うござります」三ぶ「かう心が解け合ふからは、未來の高尾が恨もあるまい、切てちよつと祝言の眞似なりともさせたいが、姉の忌中の散ら髮、イヤ累、ツイちよこ／＼と其髮結直しやらぬか、其間に奥で又絹川殿と何かの咄」かさね「アイアイそんなら私はツイ結直しおきませう」絹川「何さま我君樣のお身の上、お館の樣子、とつくり

程の谷藏、更々卑怯未練に迯げ隱れする所存でないが、どうも命の棄てられぬといふは、何を隱さう戸棚の中にましますは、勿體なくも足利左金吾賴兼公、我父は細川家の侍、故あつて浪人となり、埴生村に引籠り、土百姓にて死りし今はの際まで古主の事、何卒御恩報じてくれと父の詞、おのれやれ何をがなと、君に附添ひ年月心を碎きし所に、管領の姫君と緣邊極まる賴兼公、佞人姦者の謀計にて、姫君を嫌はせ、高尾を身請し館へ引入れ、御身持を惰弱にさせ、それを科に取つて押籠め、お家を奪はん謀と、聞き知つたるは此絹川、惡人共の餌にならしやつたは、高尾殿の身の不運、手にかけたはお家のため、君御婚禮濟まざる內死んでは、亡父へ言譯なし、サこれこゝの所を聞分けて、この敵討をどうぞ延して下さる樣、これ偏に賴み存ずる、三郎殿累殿」ト雙方こなし有つて、谷藏三拜して賴む、ト三郞横手を打ち、感心のこなし。三ぶ「ハア、道は侍の種ほどあつて、驚入つた忠義の程聞居けました、敵討は侍つて進ぜう」かさね「そんなら待つてあげて下さんすか」絹川「スリヤ唯今申した一通り、お聞居あつて」三ぶ「如何にも聞分けましたワイの」絹川「へエ、三ぶ殿、何にも申さぬ辱うござるワイの」ト男泣に悅ぶこなしにて手を合はす。かさね「兄さん、妾も嬉しうござんすワイなア」ト共に悅ぶト三ぶずつと立つて、右の戸棚に錠前をちやんと下す。累、絹川「これは」三ぶ「イヤ絹川殿、こな

ア此期に及んで待てとは卑怯、おくれたか」絹川「イヽヤおくれはせぬ、これには言譯が」三ぶ「言譯きかぬ、町人なれども妹が敵、遁しはせぬぞ」トきり込む、兩人立廻りいろ〳〵有つて、谷藏脇差を鞘ぐち拔いて投出し飛退く。絹川「抵抗ひはせぬこの通り、マア待つた」三ぶ「何を」ト又切結ぶ、トかさね最前より奥より出かけ、此時右の枕屏風を持つて、兩人の切結ぶ刀の上へかぶせ、其上へ乘り下に居る、兩人も下に居てよろしくこなし。かさね「こりやお二人とも何事でござんす、マア〳〵待つて下さんせ」三ぶ「ヤア其處退け妹、コレ汝には今日まで明さねど、姉の高尾を手にかけたは、こりやこの絹川の谷藏ぢやワやい」かさね「エヽそんなら何と言はしやんす、あの姉さんを手にかけたは、この絹川樣でござんしたか、ハア、ヽヽヽ」ト泣く。三ぶ「ヤア返らぬ事を何をめろ〳〵。サア未練なり絹川、サア立寄つて勝負〳〵」絹川「これ此通り手向はせぬ、とつくりと先づ一通り言ふ事あり」三ぶ「イヤ面倒な、何も聞く事はない」ト又切つて蒐るを、かさね縋り。かされ「これ〳〵兄樣、何かは知らねど、絹川樣の言ふ事ありとのお詞は、深い樣子も御座んせう、お氣をしづめて一通り、聞いて進ぜて下さんせいなア」絹川「オヽ累殿、よう止めて下さつた、いやこれ三ぶ殿、この脇差の鞘ながら、相手にならぬ俺が心、まだ最前あの位牌に、俗名高尾と書いてあるを知りながら、絹川といふ本名を、包まず名告る

露程も」頼兼「オヽ安堵致した」ト表に足音する。絹川「アノ足音は、イヤ大事のお身の上、どうがな、オヽ幸ひ〳〵、御窮屈ながら暫くこゝへ」ト重戸棚へ頼兼を隠す、この前より三郎門口へ戻り來て、この時すつと内へ入り、顔見合せ。三ぶ「今歸りました」絹川「ようマア早う歸らつしやつた」トもだ〳〵してゐる。三ぶ「イヤお客人、嘸お待かね、今の戸棚のがつたりは」絹川「ハヽヽいやモ其許なれば氣遣はなけれど、人目を忍ぶ伊達模樣、宵に咄した大事のお方、ヤサ命に代へぬをどり帷衣、この戸棚へ確乎と、どうぞマア預つては下さるまいか」三ぶ「ムヽちらと見た模樣の端々、そんなら今のがこな樣の」ト戸棚を見て。「へヽヽ私が性根玉を見て大事の、イヤサ大事の物を預けさんす程の中、名を知らぬもどうやら、宵に聞くも男らしうないと思うて聞かなんだ、マアこなたの名、一寸聞かして下んすまいか」絹川「これは〳〵イヤモ宵にさへお咄申さうといふた身の上、何がさて包まう樣はござらぬ、私が生れは下總の殖生村、處に絹川といふ川がごんす、それをかた取つて絹川の谷藏といふ、アイ角力取でごんすワイの」三ぶ「ムヽすりや此方がアノ名に聞えた絹川の谷藏殿か、アノ絹川の、ハテなア」ト身繕してきつとなつて。「スリヤ彌々此方が絹川の谷藏なりや、妹高尾が敵、覺悟せい」ト拔討に斬つてかゝる、谷藏立廻り、煙草盆にて刀を受止め。絹川「三ぶ殿、マア待つた」三ぶ「ヤ

や大方お案じ申した事ではござりませぬ、サア〳〵先々お入り下さりませう」ト内へ伴ひ上座に直す。かさね「これ申し、そんなら今のお咄のお方様でござんすかいなア。これは〳〵マアようお出遊ばしました」頼兼「谷藏、こゝは其方が宅か」絹川「ハイいや私が宅では御座りませねど、隨分懇意な者の所でござりますれば、お心置なう」頼兼「イヤモウ其方に別れてから、道は知れず暗うはなる、モウ〳〵大きに草臥た、こりや〳〵二人ながら爰へ來て、足でも擦れ〳〵」ト徳次じつと見てゐて、此時憤としたるこなし。徳次「エヽ何ぢやい〳〵、いけ存在な、あんまり安くすない〳〵、一貫が豆腐買ひに來ても、滅多に足を揉む樣な、徳次樣ぢやないソイ」ト無性に腹を立て、滅多に力むこなし。絹川「イヤお御足は私が撫でませう」ト足を揉み。「これ累殿、どうぞ御湯漬でも上げましたい、一寸こしらへて來ては下さるまいか」かさね「アイ〳〵合點でござんす、これ徳次、そなたも來て手傳うて給いなう」徳次「エヽ彼な横柄な奴、ほつて措かんせいなア」かさね「ハテマアおじやいなう」ト合方になり、無理に引つぱり奥へ入る。ト頼兼思入あつて四邊見まはし。頼兼「谷藏、シテ最前の者共は」絹川「ハツ吾君に仇する奴輩故、官職初め三人とも」頼兼「アノしやつぶりいはしたか」絹川「御意の通り、併しお微行の事なれば、御前のお名が出ては如何、世間を渡る相撲取の此絹川、いづく迄も相手は私一人、御前の事は

方になる、ト向より頼兼、おちよぼからげ頭巾を著、ひつしよなき形にて、件の下駄を穿き、そろ〳〵出る、少し足の痛むこなし。頼兼「ア、疲勞や〳〵、谷藏が言うたは、山谷通りを眞直にと言うたが、ア、咽が乾いてどうもならぬワイ、そこらに葛水は有るまいかいな、嗚呼これにつけても逢ひたいは高尾が事、絹川がいふには急病で親里へ行たとの事、ホンニ又太夫も太夫ぢやワイ、行くなら行くと一寸言うて遣しさうなものぢやが、この四五日は遊廓へ往ても逢はれはせず、とんと便さへせぬは、太夫が心が變つたか、嗚呼何にも變らう筈はないがな、エヱモ何卒逢ひたい事ではあるぞ、ア痛ヽヽ」ト足の痛むこなし。「とつと足は痛し、どうぞ湯を取らしたいものぢやが、オ、幸ひ〳〵、向に燈の見える家がある、マアあれへ往て、さうぢや〳〵」ト門口へ來て。「ヤイ一寸爰開けて呉れい、やい早う〳〵」德次「オイ〳〵」ト奥より出て。「何ぢや〳〵、豆腐はモウ賣切れた因つて、彼それ今最中豆を濡してゐるワイ、明朝ござれ」頼兼「イヤそんな事ぢやない、早う開けてくれいやい」德次「イヤモウ世話ぢや、明朝來う〳〵」トすげなくいふ、ト谷藏聞きつけ屛風より出て。絹川「イヤそのお聲は吾が君」ト門口の戸を開け。「イヤ吾が君樣か」頼兼「オ、絹川か」トこの中かさねも屛風の中より出る。絹川「ようマア尋ねて」頼兼「ヤレ〳〵吾が身に逢ひたかつた〳〵ワイの」絹川「イヤモウ御前より私が、大抵

爲にもなるまいし、又兄御の思はく、どうも濟まぬワイのう、殊には俺も望のある大事の身の上、この事ばかりは薩張と思斷つて下されや」かされ「そんなら何の樣に申しましても」絹川「ハテ緣と月日を待つて下され」かされ「エ、そりや酷い、胴欲ぢや〳〵」ト泣倒れ、谷藏の脇差に手をかけ。「さうぢや南無阿彌陀佛」絹川「これは如何な事、マア待つた」かされ「イエ〳〵放して殺して下さんせ、お前の心にどの樣な願があらうとも知らず、女の身で恥かしい事の數々いひ盡し、願ひ叶はぬ上からは、生きて思ひをしようより、寧そ殺して下さんせ」ト又脇差に取縋る。

絹川「マア〳〵待つしやれ」ト脇差をもぎ取り。「ハテ緣といふものは味いなもの、姉の高尾が恨みのあるこの俺を、現在の妹の」かされ「エ、」絹川「マアそれ程迄に俺が事を」ト思入あつて。「ハヽヽ、志を受けました、何にもいはぬコレ嬉しい」ト累を抱きしめる、ト奥より德次、枕屛風を持つて出て。德次「東西〳〵、片やに痛みござりますれば、勝負は追てとらせまする」ト右屛風にて累谷藏を內へ入れ引廻はす、兩人屛風の中へ入る、ト德次いろ〳〵こなし有つて、屛風に耳をあて。「ハヽヽハヽヽヽこれ累樣、モウ音がせぬな、彼の木綿川さんと累さんとは色かいな、これ〳〵誰ぞ來るか、表に氣をつけて居やんせや、おりや奥へ往てゐる程にな、エエハアヽもう音がせぬ、エうまいな〳〵、ハックヤベ〳〵〳〵」トいひ〳〵奥へ入る、合

留守は彼等三人、氣をつけて下んせや、ドリヤ往て來ませうか」ト此間に德次提灯を點し渡す。かさね「そんなら兄さん」三ぶ「よう留守しや」絹川「然らば御亭主」三ぶ「ツイ歸つて來ます」德次「そりや提灯」ト提灯を出す、三郎取つて。三ぶ「ドリヤ往てかうか」ト合方になる、三郎提灯持ち花道へ行く。「アヽ妹めがおつよう遣ればよいが、まゝよ」ト向へツイと入る、跡合方、かさねもぢ〱して茶を汲んで谷藏へ出し思入ある、谷藏もいろ〱こなし有つて。絹川「アヽこれは〱モウ構うて下さるな、扨マア不思議な御緣でお世話になつて、ハヽヽいやもお構ひ下されな」トひつしよなういふを、少し恨みしをも入にて、谷藏が膝にすがりこなしあつて。かさね「申し妾に何も言はさぬ樣、其詞は何ぞいなア、過ぎし彌生の花の頃、思ひそめたは淺草の、觀音樣の御引合、一寸見染めたお顏ばせ、春の霞にどこへやら、陽炎の見えがくれ、それから戀にこがれつゝ、合はぬ夜の目に漏る涙、ひとつ枕を何時までも、濡さぬ夜半もないワイな、それに無下ないお詞は、あんまり惨い、そりや貴方お胴慾でござりますワイなア〱」ト膝に凭れ泣く、谷藏持餘したる科にて。絹川「イヤモウその樣に思うて下んすは嬉しいけれど、角力取や淨瑠璃の太夫に、女は痛い毒ぢやとやら、わけて角力といふものは、今日こゝに居て明日は仙臺へ行かうやら、長崎へ行かうやら、住所も知れぬ身の上、生中緣を結んではお前の

愛がつておくれなされや」ト恥かしきこなしにて俯首く。徳次「ア、〳〵〳〵彼の人ぢや〳〵彼の人ぢやト手を叩く。三ぶ「ヤイ〳〵何を吐す、癡呆者めが」徳次「ハテ扨お前は甚い野暮ぢやワイなア、疾うから累さんは、主に言はず語らず我心、チ、チン〳〵」三ぶ「エ、よい加減におきやがれ」ト又天窓ぴつしやり、又小隅へかゞむ。絹川「イヤ何三郎殿、これが此方様の妹御か、扨々よい樂みがござんすなう。イヤ何かさね殿、わしは兄御の甚いお世話になりまする、よう禮いうて下んせ、時に私は一寸見て來やんせうワイ」ト立上るを、累そつと谷縅が袖をひき。かさね「申し貴方はどゝちへお出なさすんえ」絹川「イヤ同作が一人見えるはず、それで尋ねに」かさね「マア滅相な事言はしやんせ、この暗いのにお一人やりまするは、わたしや氣遣ひ、氣がすまぬ、若や迷子にでもならしやんして、又見えぬ様になつたら悪い、お作のお方がござんすまで、二年も五年も百年も、待合してござんすが、わしや可からうと思ひますワイなア兄さん」ト三郎、累のそぶりを見てこなし。三ぶ「なる程それも理、イヤ斯うしませう、俺や幸ひ買物に往く序に、其方を尋ねて來ませう」絹川「アイヤそれでも夜路といひ、お見知もあるまい、平に私が」ト立ちにかゝる。三ぶ「ハテそこらはさすものぢや無いワイノ、先刻に聞いた咄の都合、萬更夢を譃とも見違へしますまい、その上こなさんは餘り外へ出るは要らぬもの、幸ひ

る、一走り」三ぶ「ア、これ〳〵廢にしやれ〳〵、モウ淺草の戌時は疾に打つたであろ、女の夜道いらぬもの、併しそれ程氣にかゝるなら、俺がツイ往て買うて來てやろ、こりや阿呆よ、提灯ともしてくれ」德次「アイ〳〵」ト提灯取つて來て點しにかゝる、ト障子屋體より谷藏そろそろ出て來る、ト累びつくりの思入。三ぶ「ホ、こりやお客人どこへ御座る」絹川「ア、イヤ先刻にお咄申したお方の身の上、どう思うても心懸り、其處らまで往て見て來ませうと存じて」三ぶ「ム、然う思はんすも尤ぢやが。幸ひの所ぢや、妹こゝへおじや〳〵、一寸近付にしておかう、扨マア爰に居るお人は、前方おれが痛うお世話になつた人ぢやて」かさね「ム、何といはんす、そんなら兄樣、お前彼人はお近付かえ」トうれしき科にて。「オ、そりやマアお前、よいお方とお近付でござんすなア」ト嬉しきこなし色々有つて。「アノさうしてお前樣はマア、ようお出なさんしたなア」ト恥かしき思入さま〴〵ある。三ぶ「これ妹、今夜尋ねて見えた故、四五日もこちの家に、それ隨分と馳走して給や」かさね「オ、馳走せいで可いものかいなア、四五日といはずとも、いつ迄も〳〵御座んしたがよござんす、本にマア貴方ようお出なさんしたなア」三ぶ「イヤお客人、これが俺が妹でござんす、名は累といひまする、見知つて下んせ」かさね「ハイハイ妾が名は累と申します、本にマア貴方、ようお出なさんしたなア、近付になつて隨分可

アマア了簡して遣らしやれ」皆々「さうぢや、マア了簡して遣つたが可いワイの」三ぶ「エヽこれ汝、中々聞く奴ぢやないけれど、皆様の御挨拶、今日は了簡するが、重ねて必と愼みをれ」ト箒を脇へ投る、徳次小隅へ屈む。講頭「ヤ時に妹御お歸りか、何かわし共に用があるとの事、今夜は甚う遲なりました、又明日でも來て寛りと聞きませう、サア皆の衆、モウお暇申さう」講中甲「左樣致しませう、そんなら三郎殿、今宵は大きにおざうさに預りました」同乙「又明日お禮がてら參りませう」かさね「アヽ申し、何卒モそつとお咄し下さりませう、お夜食も調へかけておきました」三ぶ「何はなくともせめてお茶漬でも」徳次「あがらんかいなア、ア、アイな」三ぶ「何を獄道めが」徳次「おつとしよ」ト又小隅へ屈む。講頭「イヤ／＼藥袋もない、まだ中陰も長い事、寛りと御馳走になりましよ」かさね「左樣ならどうでもお歸りなされますか」三ぶ「ようお出なされました」皆々「サア／＼皆ござれ／＼」ト唄になり、皆々こなし有つて橋懸へ入る、ト三郎累門送りして内へ入る。徳次「旦那さん、中陰といふものはよいものぢやな、高尾さんお陰で、先づ棕梠箒は助かつた、こんどあんな事が有つたら、かさね樣又お前も死んで下さんせ」かさね「エヽ鈍なこと言うて、又叱られうと思うて、イヤ申し兄さん、姉樣の日頃お好なもの、買うて戾つて供へうと思うたが、ツイ日の暮故氣が急いて忘れて歸りました、わたしや氣にかゝ

暇が入つたであらうなう」徳次「イヽエ旦那樣、道草はたべません、寺で素麺をたべました、それからぶら〳〵歸る道で逢ひました」三ぶ「そりや誰に」徳次「逢うたワイな」三ぶ「誰に逢うたぞ」一徳次「木綿川によ」三ぶ「アヽこれ」徳次「ハテ可いワイな、木綿川よい男ぢや、成程あの娘の惚れなさつたも尤ぢや」かされ「アヽこれいなう、そりや何をいふのぢやぞいなう」徳次「南無三博多の帶、どつこいしよ」ト口に手を當てる。三ぶ「汝がいふ事は一つも譯が知れぬ、縱から見ても横から見ても、阿呆ではあるワイの、それはさうと妹、講中はまだ奥にぢや、夜食でもして進ぜたい、何ぞ調へて給らぬか」かされ「アイ〳〵、妾もさう思うて氣が急いた、何ぞお和物になるものが」徳次「おつと其用意は爰にある」ト肴籠を持つて出て。「へヽさすものぢやないワイ、大方今夜要らうと思うて、晝魚屋で一番鯛、何と一廉の法事で有ろがな」三ぶ「エヽ獄道め、汝にかゝつて樣々の恥をかかうとするワイ」ト棕梠箒にて叩きにかゝる。「おのれ如何に癡漢ぢやてゝ、あんまりぢや、少とたしなみをれ」トたゝきまはす、徳次逬け廻る、この騷動に講中皆々奥より出て、三ぶを抱止め。講中「マア〳〵待つて下され」三ぶ「イエイエ退いて下さりませ、餘り大馬鹿め、ちと性根玉にこたへる樣に」ト又擲きにかゝるを、講頭だきとめて。講頭「サア〳〵よく御座る〳〵、何日はともあれ今日は姉御の逮夜、マ

つたり木綿ぢやない、それ絹川だはよ、ア、これ私が自由になるならナア、どうぞお前と夫婦にして遣りたいワイな」累「さればいなう、妾も明暮なつかしう思うてゐたが、今日不思議に邂逅ひ、盡せぬ縁と嬉しうて、心のたけをと思ふた中、ツイ見失うたワイの、エ、つつともう辛氣な事をしたワイなう」徳次「サア何ぢや知らぬが、欲にかゝつて此樣に遲うなつた、アリヤ確かに富でも當つたと見えるワイ、滅多矢鱈に走つて行かれた、この通り旦那樣へ俺や正直にいひますぞや」累「これ滅相な、兄樣にいうて耐るものか、必ずそんな事言うてたもんなや」徳次「オツトさう頼まんすなら言ひますまい、コレ其代りに俺が常々ほしいといふ、博多の帶を買つてくだんすか」累「サアそりや如何なりとせうワイの」徳次「そんなら必ず博多を忘れまいぞえ、サア〳〵ごんせ〳〵」ト門口へ來て、戸閉めてある故無性に敲き。徳次「サア〳〵旦那さん戻つたぞ〳〵」ト三郎立つて來て。三郎「何を馬鹿めが喧しい」トいひ〳〵戸を明け。「オヽ妹、戻りやつたか、やれ〳〵待兼ねた、嘸草臥たであろ、サア〳〵入りや〳〵」ト兩人内へ入り。累「アイ漸う今になりました、お前も定めし今日は淋しかつたで御座んせうなア」三郎「イヤ〳〵さうもなかつた、留守の内は講中が百萬遍の念佛で、淋しうも思はなんだが、痛う暇が入つたなう、若い者の夜に入る迄、今度からは嗜んだがよい、大方阿房めが道草しをつたで、それで此樣に

なさんは見かけに似あはぬ優らしい心ぢやなう、それは近頃辱ふごんす、さア〳〵そんならこれへ」ト谷藏を佛前へ伴れて行く、谷藏屛風にかけてある高尾が小袖を見て恟り。絹川「この小袖の模様は」三ぶ「ヤ」絹川「見覺の目印、ムウ」ト小袖を見ようとする、小袖仕掛にて動く事あり、三郎吃驚して。三ぶ「ヤア其小袖が」ト寄らうとするを、谷藏立身にて覆ひ。絹川「イヤ御亭主、後程お目にかゝりませう」ト唄になり、雙方思入あつて、谷藏障子家體へ入る、跡合方、三ぶ色々思入あつて。三ぶ「ハテ心得ぬ、今彼の男が小袖の傍へ立寄ると、おのれと生ある如く動きしは、心の迷か但しは又、刃にかゝりし非業の死、可愛や妹、汝はまだ迷うてゐるか、オオ道理ぢや〳〵尤ぢや」ト一寸泣き。「出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛〳〵〳〵」ト佛壇に對ひ回向して泣いて居る、ト在郷唄になり、向より娘累、世話娘振袖にて、阿呆德次跡より隨いて出て、花道よき所にて。德次「これ累さん〳〵、お前の用のある時にはぶら〳〵してゐて、家の近所になると滅多無性に走らんすワイの」累「さいなう、兄様が待つてござんせうと氣が注いたら、モウ〳〵心が急いてどうもならぬワイの」德次「何を言はんすやら、此様に遲うなつたは、先刻に藏前の辻でちらりと見た、此春お前が淺草で見初めさんした角力取の、それ色男に、エヽ彼奴が名は何とやら、どうやら著物の様な名であつた、オヽそれ〳〵木綿川よ、オツト待

の樣子は」絹川「さればさ、私主人と申すは止事なきお方、遊廓の出入が意趣となり、御忍びの歸途、待伏したる惡徒ども、處は日本堤のだら〳〵下、折しも往來跡絶えし黄昏時、微行のお供と用捨すれば、弱味へつけこむ相手は三人、御主人にはかへられず三人共に」三ぶ「アノばつさりいはしたか」絹川「なか〳〵」三ぶ「ハテ小氣味のよい」ト大なき聲して膝を叩き褒めうとして、ちやつと奥へ氣をつけ。「マ咄ぢやなう。匿まひませう」絹川「すりや樣子を聞いて得心の上」三ぶ「ハテ町人でこそあれ、俺も男ぢやワイの」絹川「スリヤ眞實この身を引請けて」三ぶ「念には及ばぬ」絹川「エヽ忝ない。いやモウ其お詞を聞く上は、何を隱さう俺の名は」三ぶ「アヽいや〳〵待たしやれ、今は聞きますまい、確乎と匿まいおほせた其上では、何時でも聞かれる事、萬一外より漏れた時は、若や俺が口からと疑はれるも無益しい、ハテ此うなるも因緣づく、心おきなうサヽ横にでもなつて休んで下されい」絹川「それは千萬過分に存じまする」ト四邊を見まはし。「御亭主、見れば法事の體でもなし、御不幸でも御座りましたかな」三ぶ「アイいやモウ咄をするも涙の種、わしが妹が二人ごんすが、差次の妹は仔細あつて外へ出しておきました所、可愛い事には此間亡くなりました」絹川「さてそれはお笑止な事、嘸お力おとしで御座りませう、イヤもう袖振合ふも他生の緣、切ては一遍の回向でも致しませうワイ」三ぶ「扨々こ

中講中やはり酒飲んでゐる。三ぶ「ハヽヽヽこれは〳〵不調法な亭主ぶり、何は無くとも一つ過して下さりませ」講頭「イヤモウ食べました〳〵、モウお暇申しませう」ト皆々立かゝるを、三郎表へ氣兼の思入にて。三ぶ「イヤ〳〵申し、ア、何やらお頼み申したい事があると、妹めが申して居りました」講中甲「ハアヽそれは何であろな」乙「イヤ大方石塔の事で有らうワイなア」講頭「そんなら皆の衆、迚もの事に最そつと待つて、妹御に會うて去ませう、交際ぢや、奥で五十番くらはさうぢやないか」甲「アヽこれ講頭、たしなましやれ」講頭「いや〳〵さう言はしやんな、骨牌の數も四十八枚、則ち彌陀の御誓願、佛は見通しぢやサア皆も奥へござれ」三ぶ「そんならお講中樣、後程お目にかゝりませう」トこなし、唄になり皆々奥へ入る、跡やはり合方にて、三郎門口へ行き小聲になつて。「最前のお人そこにか、サアもう氣遣はない、サヽヽこちへ入らんせ〳〵」絹川「左樣なら御免下されませう」ト内へ入る、三郎煙草盆など出し、よろしく座をしめて熟々谷藏を見て。三ぶ「テモよい男ぢやなア、格服といひ太肉。時にマテ俺を見かけて匿まうてくれいと言はしやる其仔細は」絹川「イヤ仔細と申すは」トさして居る脇差を出して。「斯くの仕合でござります」ト三郎脇差を取り抜いて見て。三ぶ「ム、鯉口にしたふ血汐、これは」絹川「サそれぢやに依つて」三ぶ「匿まうて呉れいぢやの」絹川「いかにも」三ぶ「シテ喧嘩

をかける、絹川振返りきつと見る、捕手こそ〳〵と逃げて入る、トばた〳〵と門口へ來て戸に突當る、トばつたりと大きな音する、此音に講中皆々吃驚して。講中市「怪しからぬ音がしました、三ぶ殿あれは」― 皆々「何でござるぞいなう」講頭「何でも仰山な音でござるぞや」三ぶ「イヤありや大方犬でござりませう、雪花菜を外に出しておきましたが、又喰ひに來をつたのでがな御座りませう」― ト立つて門口を明けて見る、谷藏立つてゐる故、密と外へ出て。「ム、見れば倔強の若い人、何とてさんじたのか」― 絹川「ハヽいや殊の外道を急きまして、頓と呼吸をきらしました、御無心ながら何卒水ひとつ御振舞なされて下さるまいか」― 三ぶ「アイそれは易い事」― ト內へ入り茶碗に水を汲み持つて出て。「サヽ靜かに飲まつしやれ」― ト差出す、谷藏飲んで息をつぎこなしある。「見りや甚う取亂して、何か樣子の有りさうな風體、一體マア何處へ行かしやるのぢや」― 絹川「なる程御不審は御道理、私は主人の爲に道を急ぎ斯の仕合、何とも申兼ねましたが暫くの內」― 三ぶ「俺が家に匿まつてくれと言はんすのか」― 絹川「如何にも左樣」― 三ぶ「ム、そりやはや、事と品とに依つたら匿まふまいものでもないが、あれ見やんす通り今宅には客がある、ちつとの間こゝに待つて居やんせ、俺がよき時分に知らせませう」― 絹川「ヘイそれは忝なう存じます、宜しうお賴み申します」― ト三郎內へ入る、戸を閉めこなしある、谷藏は門口に忍び居る、この

ばれて爰が二度目、イヤこれは眞の貧僧の重食といふのぢや、ハヽヽヽ」講中市「時に今日は妹御はどつちへぞ往かれましたかの」三ぶ「されば聞いて下されませ、葬禮の時分には、取亂して供にも得立ちませず、それ故に今日阿呆めをつけて、墓參りに遣はしました、モウ追つけ歸るでござりませう」講中「それは道理〱、彼の娘も大抵の力落でないてや」講頭「それはさうと三郎殿、ちつとこなさんに尋ねたい事が御座る、というて爰にござる衆は皆内輪同然なれば、そなさん遠慮する事はござりませぬぞえ、イヤ外の事でもない此佛の事で御座る、一頻りのこなさんの放蕩で、吉原へ賣られて行かれて、大分繁昌の太夫といふ噂、アヽ幸福ぢやというて居たが、思ひがけもない不幸、アヽ誰やら味いな噂しました、高尾とやらとんびの尾とやらいふ女郎が、絹川といふ角力取に無理殺に殺されたとやら、何とやら聞きましたが、よもやそんな事は御座りますまいノウ三ぶ殿」三ぶ「ハヽヽヽはれやれ藥袋もない、左樣な事は決してござりませぬ、全體が彼奴は癪持でござりましたが、急に取詰めまして、思ひがけもない死を致しました、可愛い事を致しました。イヤ本に咄ばかりに氣を取られ、酒の燗が通り過ぎよ」ト立つて大釜の中より徳利を出し差出し、皆々に酒を侑めるこなし、しか〱捨白にて宜しくあるべし、ト向より絹川、頰被一本差にて出る、捕手一人忍んで跟いて出で、花道にてヤアと聲

三ッ目　豆腐屋の段

役人替名

一講中　八右衛門		一講中市右衛門	
一講頭　南無右衛門		一阿房豆太	坂東鶴十郎
一娘かされ	岩井半四郎	一高尾死靈付ごん	岩井半四郎
一豆腐屋三ぶ	阪東三津五郎	一伊達賴兼	阪東三津五郎
一絹川谷藏	松本幸四郎	一捕手一人	
一講中大勢			

造物平舞臺、見附納戸暖簾、佛壇まいら戸、折廻り障子家體、下手に豆腐屋の土竈釜、並に豆腐道具、牛切桶など飾りある、橋懸高塀、毎もの所に門口、佛壇の前六枚折の屏風に、紅葉の模樣の小袖を掛けあり、この小袖動く仕掛あり、幕の中より講中五六人、鉦を叩き南無阿彌陀〳〵にて幕開く。

講頭「願以此功德、平等施一切發菩提心、往生安樂國」皆々「南無あみだ〳〵〳〵」ト鉦を叩き終ひ、正面に竝よく列ぶ、ト奥より三郎酒肴を持ち出て前におく。三ぶ「ヤレ〳〵御講中樣方、誰方も〳〵多い御苦勞でござりまする、サア〳〵何はなくとも一つ召つて下さりませ」講頭「アアイヤ〳〵何も構はつしやりますな、心遣ひは無用にして下さりませ、今日は道卑の桝屋へ呼

此中にどうして提灯が御座りませう。イヤ申し〳〵燈火が有つては却て人目にかゝり惡うござりまする、暗くとも矢張そろ〳〵入らせ下されませう」　トいふ中兩人の奴、水濡になり川より這上り、左右より谷藏へ抱附くを引廻し、兩人の腕を捩上げ。　絹川「もし〳〵この土堤通を眞正に、斯う左へ取つて」　ト立廻あつて、一人を伏向にして、今一人を其上へおばしかけ。「斯う土橋がござります」　ト右兩人を橋にして歩き。「と其向ふに燈明が斯う二つ立つて御座りれます」　ト同じく兩人を燈明にする。「それを右へ取つて」　トポン〳〵兩人を放り。「お出下さませう、ア、申し〳〵お徒足ではお御足が、殊に大事のこの御下駄」　ト駕籠にかけある下駄を取つて。「これを召して」　兩人「その下駄を」　ト兩人又かゝるを、一人を引廻し一人を膝に引敷き、下駄を向へ放つて遣り。　絹川「一先づこゝを」　賴兼「そんなら絹川」　絹川「ちつとも早う」　ト官藏よろ〳〵して起上り、谷藏へ斬つてかゝるを」　絹川「何を」　ト足をぽんと蹴る、官藏たぢ〳〵とへたる、奴兩人又かゝるを、よろしく有つて拔討に斬る。　賴兼「見事」　ト扇にて絹川を花道より扇ぐ。　絹川「ハッ」　ト谷藏辭義する。　賴兼「早く來いよ」　トこの途端よろしく幕引く、賴兼悠々として向へ入る。

谷藏、重ね〴〵憎くい奴、斬つて仕舞へ」 絹川「かしこまりました、私にお任せ下さりませ。サア其頼人をそこへまき出せ」 官藏「イヽヤ誰にも頼まれた覺えはない、頃日汝に番うた廓の達引、俺が心ひとつの意地ぢや、細事いはずと、ナそれ兩人」 ト目配する。 兩人「合點だ」 ト踊三味線になる、峯平波平は絹川に蒐る、官藏は駕籠にかゝるを、絹川兩人を宜しくボン〴〵と投退けて、官藏を引廻はし立廻る、ト此間に頼兼悠々と駕籠より出て下手へ行く、兩人も起上り一緒に谷藏に蒐る、トゞどつこいと見得になり、面白き禪囃子めいたる大太鼓入の合方になる、四人樣々見事に大立あるべし、此中頼兼鷹揚にこの立廻を見て悦び居る思入、トゞ奴兩人を橋の前の川へ投込み、官藏を大袈裟に一栁砍る、官藏倒るゝ、ト谷藏溜息つき、宜しくこなし有つて。 絹川「サア〴〵御前樣、私はこゝを片づけ跡より追つきますから、貴方はこの道を眞直に、山谷通へ向け早くお越しなされて下されませ、サア〴〵早く〴〵」 トいろ〴〵氣の急くこなしにてせり立てる、頼兼これを構はず悠長なる思入にて」 頼兼「そんなら俺は先へ行く程に、必ず早う來てくれいよ」 絹川「お氣遣ひ遊ばすな、直に私が追つきます、サヽヽ片時も早う〴〵」 頼兼「そんなら行くは行くが、道は知らず暗さは暗し」 トいひ〴〵花道へそろ〴〵出かけ。「これ谷藏〴〵」 絹川「へイ〴〵」 頼兼「提灯を持ていやい」 絹川「お前樣も悠長な事おつしやりませ、

て仕舞へ」絹川「ヤイ小癪な毛二才ども、へヱヽ聞えた、こりや汝等は人を嚇して物を奪る剽掠の見習だな、へヽヽヽヽ如何に人通のない夜中なればとて、まだ暮れるか暮れぬ中から大膽な剽盗ども、ハヽアこりや奴等命がねぐさつたワイ、邪魔せずと其所おつ開いて通し居らう」ト急度見得する、此中頼兼駕籠の垂を揚げ見てゐる。官藏「イヤ絹川、わりやこの官藏を覺えてるか、先頃曲輪に於いて、日本堤で待つて居ると口ばかりの腕なしめ、一旦身が貰ひかけた傾城高尾、頼兼に請出させては武士が立たぬ、二人ともに生けちや還さぬ、觀念ひろげ」峯平「オオ俺等二人も此間、曲輪で雀躍の返報」波平「ぶつてぶつて擲のめすのぢや、胴腰するゐて早くそれへ直れ」頼兼「絹川〳〵」ト駕籠の内より呼ぶ。絹川「へイ〳〵」頼兼「官藏とは先日廓で慮外いうた奴か」官藏「左樣でござります」頼兼「ムヽ憎い奴ぢや、其奴引縛つてしまへ」絹川「なる程私がよろしく計ひます」トこちらへ來て。「ムヽ聞えた、黒澤とやら暗闇とやら、明りは知らぬお侍が、一寸この頃見ておいた火入づかみ品玉手の裡、まだ其上に伯父御とのいひ合せ、この谷藏が地獄耳へ、とつくりと突拔けたれば、此場の樣子も大概知れた、こりや又誰ぞに頼まれたのだな」官藏「イヤこいつが死ぎはの世迷言」峯平「ひかれ者の小唄」波平「べん〳〵と吐く事はないから」官藏「お念佛でもこづき出し」三人「早くくたばつて仕舞やァがれ」頼兼「こりや〳〵

ろ程〱、急度この峯平めが頑張つておきました、違ひはござりませぬ」官藏「よし〱、押籠の身の事なれば、定めて供は大勢あるまいな」峯平「なる程左樣でござります、供と申すは絹川め唯一人、跡は下部ばかり」官藏「ホウ面白い、波平を最前より吉原へ遣はし、賴兼が歸りを知らする手筈、忍歩行の事なれば、密々と此道へ來るは治定、待伏して喧嘩に事よせ、打殺して仕舞ふ積り、隨分と其方どもも氣を注けいよ」波平「畏りました」トそこらを頑張る思入、ト橋懸より波平走り出て。波平「お旦那これに御座りますか」官藏「オヽ波平か、シテ樣子は如何だ」波平「ハツ唯今賴兼を駕籠に乘せ、絹川めが引添うて大門口を出る所、先へ驅脫け韋駄天走り、追つけ茲へ參る駕籠が、則ち賴兼めでごわります」官藏「おゝ出來した〱、こりや峯平波平、谷藏めを其方兩人に任せおくから、必ず仕損じな、身は賴兼めをぶつ放す、喧嘩の仕かけは、なコリヤ」ト兩人へ囁く。「合點か」兩人「畏りました」官藏「忍べ」ト兩人の奴も頰冠して三人小陰へ忍ぶ、ト靜なる合方になる、ト賴兼四ツ手駕籠に乘り、絹川後に引添ひ出て來る、宜しく本舞臺へ來る時分、右の三人駕籠を追取まく、駕籠舁びつくりして駕籠を打捨て逃げて入る」絹川「ヤアこりや狼藉な、何ひろぐのぢや」官藏「何もせぬ、この駕籠が入用だから此方へ貰ふのだ」峯平「彼是いはずきり〱と、駕籠の中のうつそりを」波平「引ずり出して早く此方へ」兩人「渡し

二ッ目　日本堤の段

役人替名

一駕籠舁松　　一駕籠舁市
一奴波平　　一奴峯平
一黑澤官藏　桐島義右衛門　　一角力取絹川　松本幸四郎
一伊達賴兼公　坂東三津五郎

造物、向ふ一面の淺黄幕、上手に欄干附の橋ありて、向ふ一面の草土堤、都て日本堤の體、よろしく取合せあるべし、靜なる少し小凄き合方にて幕開く、ト向より黑澤官藏、尻からげ頬被にて、奴峰平を伴れて出て來て、本舞臺へ來り。

官藏「こりや峯平、この官藏が鬼貫樣に賴まれた高尾が買論、意地を持せてまんまと首尾よう身請させ、上館へ遣れば、賴兼めは放埒の科を言立て切腹させて仕舞ふ積り、爲課せたと思うたが、肝心の玉にする高尾めが行方知れず、絹川めが手にかけて殺したともいふ噂、それも知らずに登り詰めた賴兼め、先だつて山名宗全殿の計ひにて、砂川の下館へ押籠の身を以て高尾に逢たがり、今日も又吉原へうせたとの風聞、いよ〳〵それに違ひないか、何うぢや〳〵」峯平「な

ろどろきびしくなり、川の邊燒酎火燃上る、皆々これに恟りして、アレイというて傘下駄など放りすて、逃げて奥塀口へ入る、ト谷藏木蔭より出て。絹川「エヽこれ暫時の隣人、それに折惡いこの大雨」トそこらを見て、今捨てゝ行きし傘を見つけ。「幸ひこの傘、何にもせよ吾君のお身の上、まづ御先途を見屆けた上、さうぢや」ト大どろ〳〵雨車きびしくなる、花道中程まで行く、泉水の上にて燒酎火ぱつと燃える、谷藏れんり引にて本舞臺へ引戻される事いろいろ有つて屹となり。「ヤア扨は高尾殿、魂魄この川に止つて、此絹川に障碍をなすのか、エヽ淺ましい執念ぢやの、あれ程事を分けていひ聞かすに、然りとては聞分のない、これ恨を晴して浮んで下され、臨終正念南無阿彌陀佛〳〵」ト手を合せ燒酎火の方を拜む、ト川の中より高尾の聲にて。高尾「イヽヤいや〳〵深き恨は奈落の苦患、共に憂目をみつ瀨川、紅蓮の浪は池の面、浮ばぬ〳〵、金輪奈落の底迄も、此恨霽さで措かうか、エヽ恨めしい絹川殿」ト又谷藏きり〳〵引廻され、何遍も花道へ往ては引戻され〳〵して、トヾ本舞臺の眞中へ傘持つた儘にて撲乎へたり、燒酎の火の方を屹と見て。絹川「こなたはなう」トきつと見得よく　幕

を川へ打込む、ト此きつかけに雨車、薄どろにて黒蓋しめる、谷藏いろ〳〵思入有つて、血の滴りし砂などを繕ひ。○「マアこれで倭人どもの謀計の根は斷つて終うたが、落付いて居られぬは我君のお身の上、途中の警固心元ない、それ」ト花道へ驅出し、よろしく止り。○「イヤ〳〵我君の守護は、女之助樣が付添ひござれば凶事はあるまい、マアそれより鬼貫殿の謀計の根元を探るが捷計、それ」ト又本舞臺へ走り來て。「イヤ〳〵生中確な證據も握らず荒立てては、却て毛を吹いて疵、エヽこれ行くにも行かれず、ハテマアどうしたら可からうなア」ト當惑の思入、やはり此中薄どろなり、ト橋懸の方ばた〳〵と人音する故、ちよつと紅葉の木の間へ小がくれする、ト橋懸より下男料理人體の男四五人、捨白にて傘をさし出る。○「アヽこれこの高尾樣は、何處へ行かしやつたやら」△「最前賴兼樣のお歸りの後は、どうして御座つたぞ」□「いや直に部部へ入つてござつたとの事」×「それにマア家内の中に見えぬといふは、どうしたもので有らうなア」◎「もしやお狐でもつまみはせぬかの」○「馬鹿をいへ、この賑かな吉原に狐が居つてたまるものかい」△「何であらうと外へは行かしやる筈はない、捜せ〳〵」□「オヽさうぢや、此築山から泉水の邊を尋ねて見たがよい」×「イヤこの暗いのに、其許らに居やう筈もなし」◎「ハチ不思議な事ぢやてな」ト こんな事いひ〳〵 其處等尋ねまはるこなし、ト雨車ど

にたい、斯うならうとは露知らず、今の今まで悦んで、嬉しや廓の苦の遁れ、思ひ思ふた殿様の、館へ行たら朝夕も、お傍離れぬ鴛鴦の、つがひし事も水の泡、又二つには兄さんや、たつた一人の妹に、不自由な生活させまいと、樂しんだのも夢の夢、斯ういふ中にも殿様の、お顔が目先にちら〳〵と、死なぬ先から宙宇の闇、可愛の人を此世に殘し、死ぬると思へば何ぼうでも、わしや死にともない、死にともないワイなう」ト邊をのた打まはり、谷藏を恨みしこなし。絹川「これ高尾殿、何事も定まつた因縁づくと諦めて、迷はぬ樣に快う臨終をして下され」高尾「イヽヤ何程でも死なぬ〳〵、たとへ此身は死ぬるとも、魂魄この世に止り、慘い情ない絹川殿、人に報があるものか無いものか、生變り死變り、こなたの身につき纒うて恨をなさいでおかうか」トきつとなつて髪を逆立て恐しきこなし、ト谷藏も心を取直し思入にて嚴となり。絹川「か程まで分つ口解つ言ひ聞かせても、聞分のない上はモウ是非に及ばぬ、オヽ恨まば恨め、主人のお爲お家の大事にや代へられぬ、觀念せよ」ト高尾の髻を持ち引起し、刀を引拔きとどめを刺す、高尾七顚八倒して苦しみ死ぬる。「ア、何所の誰が娘かは知らねども、大國の主のお爲、不憫ながらもこの有樣、南無阿彌陀佛〳〵」ト手を合せ拜む、死骸こける、直に前なる泉水へ淘然と蹴込み、邊に人は見て居ぬかと、色々氣を配る思入よろしく有つて、トヾ死骸

身を抱へながら倒る、谷藏もどつかりと下に居る、ト篠入の合方になり、谷藏思入いろ〳〵有つて。「これ此方を身請させ、本郷のお館へ遣つては、殿樣のお爲にならぬワイなう」 高尾「ヤ、ヤアそりや何いふ譯、何いふ仔細で、サヽ、ヽヽ其譯聞かう、ムヽ聞えた、殿樣の許嫁細川の姫君は、こなたの昔のお主筋といふ事は、とうから聞いて居るワイなう、この高尾がお館へ行けば、こなたの主の歌形姫と祝言の邪魔になると思うて、それで妾を殺しやるのか、但は姫の言付か、エヽ心の狹い歌形姫、町人の身の上でも、手かけ妾はある習ひ、況して貴方は誰あらう足利の賴兼樣、エヽさもしいワイなう〳〵、胴欲な絹川殿」 ト色々苦しみながら、くどくこなし。 絹川「サヽ、其恨は尤なれど、更々さういふ事ではない、お館の惡人ども、賴兼公を失はんと、謀計の繩をかけ課せて、こなたを館へ引入るは、我君を放埓の罪に墜さん結構と聞いたるは、この絹川唯一人、サこなたを不愍ながらも手に蒐けるは國家の爲、可愛しいと思はつしやる我君樣のお爲ぢや程に、この所を聽分けて潔う死んで下され、これ賴みまする高尾殿」 高尾「いや〳〵〳〵、唯一筋に可愛いと思込んだ殿樣、お傍に居たい添ひたいと、願叶うて請出され、今お館へ行く身の上、だまし殺しに殺すとは、餘り氣強い胴欲ぢや、そりや曲がない〳〵ワイなう、とはいへ所詮叶はぬ此深手、嗚呼唯懷かしいは殿樣、最一度お顏が見て死

隨分ぬかるな」鬼貫「彼奴生け置いては後日の妨げ、其方ども出世の腰折、とかく騙すに手なし、合點か」奴兩人「畏つて御座りまする」官藏「彼が歸り路は日本堤を山谷通り」波平「先へ出しぬき歸りを待受け」峯平「有無をいはさずたんだ一討」鬼貫「必ずぬかるな」兩人「合點だ」官藏「往け〳〵」ト兩人尻からげ、向へ入る。鬼貫「この上官藏某も後詰の加勢」官藏「なる程、彼等二人で心許なし、ぼつついて」鬼貫「討取る手筈は道々謀合さん」官藏「然らば鬼貫さま」鬼貫「サア來やれ來やれ」ト兩人跡三味線にて向へ入る、ト

返し

造物、向ふ一面築山の景色、紅葉の立樹山の間々に見えて、一面の紅葉の釣枝、上手前通り泉水の流、柵など宜しく取合はせ、都て三浦屋奥庭の體よろしく有るべし、高尾谷藏に斬られ、谷藏抉り居る見得、雨車うすどろにて道具廻る。

高尾「エ、胴欲な絹川殿、妾には何の過誤、何科あつて此樣に慘たらしう殺しやるのぢや、エ、此方は〳〵、鬼かいなう蛇かいなう」ト苦しみながら色々こなし。絹川「オ、理ぢや〳〵、道理ぢやがこれ高尾殿、苦しからうが一通り、とつくり樣子聞いて下されや」ト突放す、高尾拔

殿、委細示合せたる密事の一條」トこの間絹川谷藏奥より立聞する。官藏「仕舞は砂川の下館へ押籠隱居」峯平「謀計段々首尾よう行たれば」波平「差詰め伯父御樣は家國は丸呑」官藏「其時こそは、此官藏は大名」鬼貫「兩人の者は一かどの武士に取立てくれるワ」奴兩人「うまい手つがひ」絹川「樣子は聞いた」ト谷藏出る、四人宜しく谷藏を眞中に取巻き、立廻にてよろしく見得、この途端にて。

返し

淺黄幕かぶせる、仕出四五人、思ひ〳〵の形にてそゞり歩き、捨白にて左右へ入違ひ入る、ト右淺黄幕切つておとす、三浦屋表口の體、一面の二階造り、破風作の入口、左右大格子、腰板など都て吉原揚屋の好み、入口の暖簾三浦屋と染込みあり、ト踊三味線にて、鬼貫官藏峯平波平入口より出てこなし有りて。

官藏「鬼貫公、絹川めを捕つて〆めうと思ひの外、中々強力の角力取故、なか〳〵手に合ひませぬ」鬼貫「なる程、音に聞えし相撲取なれば、中々容易くは取ひしがれまい」峯平「何でも是からは我々が言ひ合せ」波平「彼奴だまし討より外手段はござりませぬ」官藏「何さまそれが上分別、

は餘りで本の樣には思はれぬワイなア皆さん」 亭主「イヤモウ思ひがけないお身請、この樣なおめでたい儀はござりませぬ」 ト皆々いそ〳〵して嬉しきこなし、ト奥よりお安出で、娘河内も出る。 お安「殿樣おめでたう御座ります、眞に今の今迄恨んだが結句恥かしい、こちの人こらへて下さんせ。イヤ此樣なおめでたい事はござりませぬ、善は急げぢや片時も早う」 亭主「左樣とも〳〵、一時も早うお館へ」 女之助「なる程〳〵、高尾殿も一緒にとは存ずれど、これなる河内は表向象潟御前樣よりのお迎ひ、殿樣には先々お先へ、高尾殿の身の上は、亭主よろしく計らひめされ」 亭主「なる程、急度私が預りました、朋輩衆にも暇乞、一兩日は曲輪の名殘」 朋輩「サアモウ斯う儘になつたからは、少時の中別れて居るも又花香、サア皆も一緒に供しや」 女之助「然らば我君」 ト皆々立上り門口に並ぶ。 朋輩「亭主さらば」 高尾「そんなら殿さん」 亭主「又近い中に」 朋輩「近日々々」 亭主「よう入らせられました」 ト騷唄にて皆々花道へ入る、本舞臺の人數こなし有りて奥へ入る、ト奥より鬼貫官藏出る、橋懸より最前の奴峯平波平、雀躍の形にて出る。奴兩人「官藏樣」 官藏「峰平波平」 兩人「まんまと首尾よう賴家めを」 官藏「鬼貫公の謀計にて」 鬼貫「コリヤ」 ト雙方を抑へて。「聲が高い」 ト四邊を見まはし、首尾よく高尾めを、本鄕の上屋敷へ引入れさせたる彈正が實事を誠と思ひ、一ぱい食つた呆癡の賴家、はや先達て管領山名

今朝なりと、さういふ事を聞くならば、爲やう模樣も有らうもの、殿樣、妾は覺悟極めて居りまする、本に果敢ない憂世ぢやなア」女之助「イヤ〳〵左樣に思召すも御尤なれど、又どうなりとも思案もござりませう、わが君にも其樣にしほ〳〵遊ばさずと、お心強う思召したがよろしうござりまする」亭主「左樣とも〳〵、左右果報は寐て待てぢや、又どんな好い事が沸いて來ようやら知れませぬ、お心確にお持ちなされませう」ト賴兼高尾、しんなりとこなしある、ト奧より仁木編笠を取りつか〳〵と出て、下座へ直り。仁木「ハッ〳〵恐れながら仁木敎將、表立つて唯今出仕、最前より面體を編笠にて包みし無禮の段は眞平御免、女之助殿にも許し召され、右の仔細は義政公の御内意を以て、傾城高尾を室町の御館へ伴ひ來れとの御諚、則これが御墨附、いざ御覽下されませう」ト年季證文を出す。賴兼「ヤアそなたは家老仁木彈正、ドレ」ト右の證文を取り。「こりやこれ高尾が年季證文」ト雙方へ右證文を見せる。皆々「これは」仁木「イヤこりや拙者めが寸志の忠義、長居は恐れ、此笠を座敷の内を脫がぬは、人目を忍びの夜の編笠廓の習ひ、お先へお暇、我君には跡より御歸館遊ばされませう、拙者はこれより直に退出、井筒主人娘、いづれもさらばでござりまする」トこなし有つて悠々と橋懸へ入る、跡にて皆皆嬉しきこなしにて。賴兼「イヤモどうでも彈正でなければ夜が明けぬワイ」高尾「さいなア、妾

「スリヤどの様に言うても」仁木「女房去つた、證はかくの通り」ト右の塗盆の水を打あける。お安「これは」仁木「覆水再び盆にかへらず」お安「これ」ト仁木に取付くを振拂ひ。仁木「裏藤さらば」ト雙方よろしくこなし、靜かなる唄にて仁木奥へ入る。お安「ハア、、、」ト泣落す事よろしく有つて思入。「エ、胴慾な彈正殿、河内といふ娘まで、其間を今更去るの何のとは、あんまり惘れて物が言はれぬワイなう、オ、それ／＼幸ひ來て居る娘の河内、此譯いうて倶倶に、夫の心を諫めなば、娘に心ひかされて、若も止まる心も出でん、さうぢや／＼」ト奥へツイと入る、暮六つの半鐘鳴る、ト橋懸より亭主徳右衛門走り出て來て。亭主「サア／＼何より彼より、お二人樣のお耳へ入れねばならぬ事がある、殿樣々々、高尾太夫殿はどれに御座る、殿樣々々」ト内へ入り呼ぶ、ト内より頼兼高尾女之助出る。「これは／＼殿樣、高尾殿、女之助樣もこれにか、扨マア早速申上ねばならぬ事、先程のお侍樣が、親方が申する程、背丈身の代を出して、高尾殿の身請がたつた今相濟みました」頼兼「徳右衛門何といふ、スリヤ太夫が身請が、ハア、、、」ト當惑の思入にて。「コレ太夫、思ひもよらぬ其方の身請、彌々それに極よらば、この頼兼は何とせう、どうせうぞいの、これ女之助、汝もよき思案はあるまいか、太夫そなたはマアどうせうと思やるぞ」高尾「サア妾ぢやとて是がマア、夢見た樣な事、切めて昨夕

お安合點、ト德右衞門走り橋懸へ入る、跡合方、塗盆に茶碗を載せ仁木が前へ差出す、仁木右の菓子を取る拍子に、編笠の中の顏、塗盆へ映る思入にて、お安吃驚して。お安「ヤア此顏はこちの人彈正殿」トきつと盆を見る。仁木「コリヤ、シイ!」ト兩人こなし、合方きつぱりとなる。「女房裏藤、聲が高い」お安「イエ〳〵高うても低うても大事ござんせぬ」トきつとなつて疊を叩き思入あつて。「お前はなア〳〵滅相な、あの高尾殿を請出してマア、どうさしやんすのぢやえ」仁木「知れた事、身が女房に」お安「エヽ、そりやお前眞實でござんすかいなア〳〵、これ申しお前は氣ばし違ひはせぬか、あれ程迄に賴兼樣の思うてござる其中を、知つてござんすお前ぢやないかいなア、それなればこそ私をこの樣に、仲居の姿にまでして、曲輪へ入込ましやんすも何の爲、殿樣に氣を注けて、御介抱申せと言はしやんしたぢやないかいなア〳〵」トちよつ泣き。わしや又忠義ぢやと思へばこそ、可愛い娘を振捨てて、あられもない仲居奉公、それさへ有るに御主人の思うてござる彼の高尾殿を」仁木「ハテ戀に上下の隔はない」お安「エ」仁木「過ぎつる彌生、仲の町の花寄に思ひ初めたる高尾太夫」お安「何と」仁木「賴兼公の廓通ひも憎からぬ、アレあの器量、思き斷られぬ戀は曲物」お安

る所、お前様のお望の通りに」仁木「ム、太夫が身請、首尾成つたか」亭主「左様でござります、最前お渡し下されました二千兩の爲替證文を、親方へ渡しまして、則これが高尾が年季證文、引替にお受取下さりませ」ト年季證文を仁木へ渡す、仁木受取り。仁木「どれ〳〵」ト讀んで見て。「これは〳〵其方の多い働き、何をいふも火急な事、金子入用は親方が勝手次第、最前渡した證文の宛名、掛屋方にて何時なりとも受取り召され、ア、太儀々々」ト右の證文を懐中してこなしある、此前より仲居お安、背後より立聞して居る。亭主「なる程委細畏りました、去りながら斯樣に身請は濟みましたれど、まだ肝心の高尾樣へ樣子を申しませねば、お屋鋪へ上げまするは、一兩日致しましてから」仁木「イヤモ其儀は苦しうない、此證文さへ取りおけば、五日三日遲くとも、左右高尾が得心する樣に」亭主「イヤモ そこに如才はござりませぬ、それはさうと高尾樣の親方に、一寸お會ひ下されますまいか」仁木「いか樣、大枚の金子の身の代相渡す主なれば、一寸會うて何かの始末を」亭主「左樣ならば一走り呼んで參りますよ、暫く爰にお待なされて下さりませ。イヤ仲居お安や〳〵」ト此時奥を呼ぶ、お安さあらぬ體にて出て。お安「アイ〳〵何ぞござんすえ」亭主「イヤこれ此客樣に、それお菓子で煎花でもして上げましてたも、これ早う〳〵」お安「アイ〳〵畏りましてござんす」亭主「イヤ左樣ならお侍

言譯は、ヘヽ憚りながら一寸、イヤ承りたうござります」鬼貫「この鬼貫が色狂などとは、いはれざる過言雜言、何を以て慮外な下郎、おのれ其舌の根切つて切りさぐるぞ」ト屹となつては言へど、絹川そしらぬ顔してゐる故、ちやつと氣を變へ。「ムヽハヽムヽハヽヽヽヽ、トサいふは嘘ぢや、いやさナニ絹川、狂言も取り措かう、これ頼兼、先刻にから言つたのは、この鬼貫が思ひ付、十日餘りの流連遊びの趣向が盡きたで有らうと、芝居でする敵役、何と伯父大領の役はよくはまつたで有らうが、作者は則この鬼貫、何と新しい趣向ぢやないか、ハヽヽハサヽ打寛いでわつさり一獻酌ふ、酒にせう〳〵」ト此時皆々安心の思入。高尾「エヽほんに伯父御さん、そりやあんまりな惡洒落、モウ〳〵わたしや先刻にから、癪が胸まで差込んだワイなア」頼兼「イヤモウ此頼兼も肝を菜種にしたワイなう、サア〳〵そんなら奥でわつさりと飲直そ、サア〳〵皆奥へ來い〳〵」女之助「然らば奥にてわつさりと遊ばされませう」絹川「サア鬼貫樣、いざ奥へ」禿「早う往かしやんせいなア」中居「サアお出なされませ」頼兼「そんなら太夫」高尾「アイ」頼兼「サアおじや〳〵」ト騷ざ唄にて皆々奥へ入る、ト奥より亭主徳右衛門、仁木彈正矢張編笠を被り出る、やはり合方。亭主「イザ旦那樣、一寸お出なされませ、扨これへお呼出し申しましたは、別の儀でもござりませぬ、お頼みの高尾が身の上、親方へ折乘り致しました

頼兼「サア」 兩人「サアく」 鬼貫「どうぢや」 頼兼「ハツ、、、」 高尾「さうぢや、南無阿彌陀佛」 ト頼兼の短刀に手をかけ死なうとする、絹川奥よりつかく走り出て。 絹川「マア待つた」 ト止める、高尾振切り又死なうとするを無理に止め。「これマア待つしやれ高尾殿、死ぬるに及ばぬ、科人はこの谷藏」 ト高尾をつき廻はし眞中に直り。「サア鬼貫公、科人はこの谷藏めでござりまする、繩うちなりとも首なりとも、御存分になされませ」 ト嚴となつて手をまはす。 鬼貫「ム丶横合から物好な盜賊が出たものぢやな、名告つて出たれば詮事がない、汝に繩打ち引立てくれうが、頼兼は大切なる身を以つて、晝夜遊廓に流連、放埒惰弱の傾城狂ひ、この辯解はあるまいく」 絹川「イヤ鬼貫樣、いか樣伯父御は伯父御ほど有つて、頼兼公の曲輪通の御諫言、御尤に存じまするが、何にも知らぬ角力取の此絹川、人の咄に聞きはつつた文字にさへ、人の城を傾くるとやら、怖ろしい傾城、お咎めなさるゝ伯父御樣が、高尾を手に入れんとお年に似合はぬ色狂ひ」 鬼貫「ヤア」 絹川「確かな證據は」 ト高尾が懷の文引出し、さしつけ。「この文」 鬼貫「何がなんと」 絹川「へ丶怖い顏してゆべくけの散し書」 鬼貫「ドレそれを」 ト取りにかゝるを、ちやつと持かへ。 絹川「これこの手跡は、我君も御見知有らう伯父御の御筆蹟、高尾殿參る鬼貫より、頼兼樣は血氣壯んの御年若なれど、お年に不足のない伯父樣が、傾城狂の

トいひ〳〵出る、兩人驚り飛退く、ト鬼貫奥よりつか〳〵と出て上座に直り。頼兼「ヤア貴方は伯父君鬼貫公」女之助「思ひがけなきこれへは如何して」鬼貫「オ、恟りで有らう、イヤ肝が潰れう、現在の甥なれども頼兼は、室町殿と敬はるゝ身の果報、傾城遊女に性根を奪はれ、晝夜を分かね遊里のいびたれ酒、其上家の重寶蘭奢木といふ名木を寶藏より取出し、勿體なくも下駄に刻みて其方が泥脛にかけ、曲輪通ひに穿き歩くよし、先祖に對して不孝の第一、差當つて此返答は、サア頼兼何とぢや」女之助「我君、すりや貴方の召さるゝ彼の御下駄が、お家の重寶の名木とや、アノ蘭奢木とはホ、ホイ」ト當惑の思入。頼兼「サアこれも身に無二の忠臣仁木彈正左衞門が、我に與へし彼の下駄、名木とは夢にも知らず、よもや我に難儀のかゝる樣な事、彈正左衞門が致さう筈もなし、ハテどうがな」女之助「我君言譯の立たぬ其時は御身の大事、とく〳〵御賢慮を」河内「これ申し女之助樣、父樣の御身の上に、何卒難儀のかゝらぬ樣に」高尾「イエ〳〵何事もこの高尾から起つた事、殿樣の御難儀を妾に課せて、わたしを斬つてなりとも、刻んでなりとも、言譯になる事ならして進げまして下さんせ」鬼貫「へ、、、一つ穴の女狐男狐、化の皮の顯はれ口、吼えても泣いてもモウ叶はぬ、サア頼兼、言譯なくば今爰で腹を切れ、伯父の好みに介錯をしてくれう、サア薩張と腹切るか」頼兼「サ其儀は」鬼貫「但し身が手を出さうか」

のはたんと美しい女中のある所なれば、殿様よりは第一附いでござんす女之助様、氣遣で〳〵痛うアノそれ御臺様のお物案じ、殊に頼兼様には細川の姫君と、お許嫁もある事なれば、私が心に引較べて、お姫様のお心も推量してお愛しく、お迎ひに往て女之助様も、一緒に手を引合うて、連立つて歸れとの、ハイ御口上でござりますワイなア」ト始終恥かしさうに、女之助へ心意氣あり。女之助「これは〳〵、左様のお使ならば侍中でも遣はされいで、女中の身の御苦勞千萬、御口上の趣を、どりや我君に申上げうか」ト立上るを袖引止め。河内「ア、申し女之助様、そりやあんまりお氣強い、これ迄千束の文の數、一度の返事夏草の、こがるゝ身より主様に、緣を結ぶの神参り、七の社へ願がけも、儘ならぬ身は朝夕の、人目にせかれ合はす手も、逢ひた見たさに漸〳〵と來た妾をば胴慾に、思遣ないお心でござりますなア」女之助「ホ、切なるこなたの志、忘れはおかねど親々の許なければ、掟を背く不義の科、緣と月日を辛抱して、これ待つたがよいワイなう」河内「そんなら何の様に申しましても」女之助「ハテ親のゆるしの出る迄は」河内「ならぬとおつしやるのか」女之助「くどい〳〵」河内「そりや貴方あんまりお胴慾でござります〳〵ワイなア」ト女之助に縋り一寸泣く、ト女之助も持餘したる思入にて、頭を掻き困ることなし、ト奥より頼兼、高尾仲居禿つき添ひ出て。頼兼「よう〳〵色事師め、見つけたぞ〳〵」

定めしそなたは合點が行くまい、そなたに迄隱し、湯治と僞り、爰に斯うして居る事は夫の言付、我が君樣のお爲、樣子は追つて長い事、さうしてマアそなたは爰に何用あつておじやつたぞ」河内「サイなア、わたしは先將軍義政公の御臺所、象潟御前樣より御内意の御使、賴兼樣の御迎ひやら、又外にちよつと會ひたい……サアお方もあり」トもだ〳〵いふこなし。お安「ムヽなる程、御前樣のお心籠めさせられし御使者に女之助。イヤサア女のそなたを遣し遊ばしたは、ムウなる程〳〵」トいろ〳〵思入あつて。「これ娘、そんなら我君樣へお使者の趣を申上げ、サア其お取次の其お人を、爰へおこしませうさかい、とつくりと御口上を、それ其方の口からお執次の口へ、それ申しやいのウ」河内「そんなら母樣、御前へよろしう」お安「どれ呼出して遣りませうか」ト唄になり、お安奥へ入る、跡合方、河内鏡袋を出し、色々姿を作り氣象のこなしいろ〳〵あるべし、奥より女之助出て來て。女之助「我君への御使とは誰人なるぞ」トいひいひ出て河内を見て。「これは〳〵珍らしい仁木殿の御息女河内殿、ようこそ御入來、象潟樣より我君への御使とは、先以て御苦勞千萬、いざ御口上の趣、仰せ下されませう」ト慇懃に手をつきいふ。河内「エヽつつとモウ」トもじ〳〵思入ありて。「アノ申し象潟樣よりの御口上の趣は、賴兼公には此程より、廓からお歸りもなされぬよし、アノそれさうして、廓といふも

ちよつと一目逢ひたい事ぢやなア」ト煙草盆控へいろ〳〵思案のこなしある、トきつぱりとした唄になる、ト向より娘河内、奴可内をつれ、衣裝振袖屋敷風の娘の形にて、狀筥を奴に持せ出て來る。河内「これ可内や、殿樣の御座なさるゝ、其の三浦屋といふ揚屋は、モウこゝらかいなう」可内「ネイ〳〵、則向ふのでつかちない家體でござります」河内「そんなら早う往て案内して給ひなう」可内「ネイ〳〵、畏りました」ト兩人本舞臺へ來て、奴門口へ彳み。可内「誰そ頼まうぞよ、これの家體が三浦屋と申すべいか、これに賴兼公が寐まり申すとの事、則ち御殿よりの御使者だから、其由早く申上げておくりやれさ」お安「ハイ〳〵畏りました」河内「オヽ太儀々々、其方は暫く控へ歸りを待つて居や」可内「ネイ〳〵畏りました」ト橋懸へ入る、トお安こなし有りて門口へそろ〳〵來て、河内を見て吃驚。お安「ヤアそなたは娘の河内ぢやないか」河内「ほんに貴方は母さま、爰にはどうして」お安「マア思ひがけない、この曲輪へはどうして、マア〳〵こちへ入りや」ト河内を内へつれ入つて思入あつて。河内「母樣お久しうござります、先はあなたも御機嫌のよいお顏を見ましてお嬉しう御座ります」お安「こなたも無事でめでたい〳〵、シテそなたは今日こゝへはどういふ譯でおじやつたぞ」河内「サア其仔細も申上げうが、合點の行かぬは母樣のこの姿、樣子はどうでござんすぞいなア」お安「オヽわしが此形といひ、

せぬ、申し太夫様、こりやお前の禿衆を一寸貸して下さりませ、せめて禿衆で座敷をくろめたうござります、これ小枝、太夫様の代にちやつと來て給いノウ」トせき込みし思入にて、禿小枝の手をひき、無理に奥へつれ入る。高尾「エヽ、聞きともない、先刻にも官藏とやらいふ侍が、妾を貰はうの何のといふは、ありやお前の伯父御鬼貫様に頼まれて、此間も伯父御様から私が方へ來た文を、これ爰に持つて居るワイな、モヽ、煩い事だらけ、殿様、どうぞよい思案はない事かいなア」ト頼兼其の文を取つて。頼兼「ナニ伯父鬼貫より其方へこの文を、ムウ」トちよつと屹となつて、又氣を變へ。「サア座敷が沈んで面白うない、サア／＼太夫奥へ、皆も來い」皆々「まづ入らせられませう」ト皆々心意氣あつて奥へ入る、トお安獨り跡に殘りゐる、合方になる、四邊を見まはしこなし有りて。お安「アヽ、憂世ぢやなア、あられも無い、この様な仲居姿となつて廓へ入込みしも、夫彈正殿の言付、御主君頼兼公、晝夜を分かぬ廓通ひ、若もの事が有る時はお家の大事、幸ひこの裏藤は、先將軍義政公のお部屋に仕へし私なれば、室町殿のお館で、顔見知られぬを幸に、姿を變へて外ながら、わが君に心をつけよと、其日から此吉原へ、現在產の娘にさへ、筥根の湯本へ湯治と僞つてお主へ忠義、夫のいひつけ、さりながら見たい會ひたい娘の河内、母を戀しう思ふで有らう、アヽ今頃はどうして居やるであらうぞ、

「そんならこれ太夫、間をしてたも」ト高尾間をする、お安おしげよろしく酌する、この中頼兼絹川いろ〳〵盃の模様あるべし、ト仁木彈正左衛門、深編笠羽織著付にて、橋懸より出で門口にて。仁木「盃に向へば違ふ人心、忍び〳〵の遊廓通ひ、誰ぞ案内を頼まう」ト亭主德右衛門こなし有りて門口へ行き笠を覗き。亭主「ヤこれは〳〵、ようこそお出、マヽ、奥へ」仁木「アイヤ見ればお客人もあるさうな、人目を忍ぶ遊廓通ひ、座敷の中もこの編笠、取らぬは武士の面伏、ゆるし召され」トいひ〳〵内へ入る。亭主「いざ奥の離座敷へ」仁木「さ案内しやれ」ト亭主先に立ち、奥へついと入る、この中盃事して居て、女之助屹となつて。女之助「ヤア無禮なる侍、我君のこれに御座るに、笠をも取らず奥へ通る推參者、引出して面縛せん」ト追取刀にて立たうとする。頼兼「こりや待て女之助、其の短氣の病がある上に、兄義政公御教訓なされ、向後侍の心を退いて、女の心になつて物事を堪忍せよと、お命名なされた非[illegible]女之助、そちや父忘れたか」女之助「イヤ段々謝罪り入りましてござります」ト奥より亭主德右衛門走り出て、亭主「申し〳〵高尾樣、今のお侍樣は、此間から二三度お忍びでお出なされ、どうぞ高尾に會はしてくれとおつしやるけれど、お前は殿樣の揚詰、殊にお二人の間、私もどうぞと存じまして、つひに吐かぬ嘘を吐き、色々と申して居しましたが、モウさう〳〵お斷りの言ひ樣もござりま

ほんに〳〵淋しい事ばかり好で、お客の座敷が持てるものでござりませぬ、少とたしなみなさんせいなア」亭主「イヤモウ俺も有様はちつと物事を和らかに、固い事をいふまいと思うても、自墮落な事が甚い嫌ひで、ほつこり困つたワイやい、ハヽヽヽ、したが殿樣のやうに、五日も十日も流連なされては濟みませぬ、今日は是非〳〵御歸館あられませう」お安「それやつぱり青表紙ぢやぞえ、ナア太夫さん」高尾「エ、何ぢやいな憎體らしい、妾が心も知らないで阿呆らしい、何程でも返します事は、アイならぬワイなア」女之助「アイヤ〳〵高尾殿、左樣ではござらぬ、こりや德右衛門の言やる通り、一先御歸館遊ばす方が宜しいかと、この女之助も存じます」賴兼「こりや〳〵女之助、汝もそろ〳〵と堅仲間へ引込まれたな、イヤ又然うそつちが出かければ、此方も逆に出て流連をせねば張合がない、やつぱり堅藏も一興かい、サアサアお安、酒にせい〳〵」ト盃を取る、お安酌する。お安「アイ〳〵、變らぬ私がお酌、殿樣はじめ皆さん、めれんになさで措かうか、東西〳〵、さてこれより足利の賴兼公、御酒宴の始り、其爲口上左樣」ト前へ出て芝居の口上のこなしする。絹川「イヤモこの絹川も、そろ〳〵迎酒と來て居りました、ひとつお間を仕りませうかい」賴兼「絹川、サアずつと爰へ來い〳〵、一つさすぞ」絹川「へイ〳〵これは有難う存じます、一寸抑へ申しませうか」賴兼「ナニ抑へるか、

した」亭主「それ〳〵、流石は又絹川關取、えらいもので御座りました」ト皆々絹川を扇ぎ立てほめるこなしありて、皆々並よく列ぶ。禿二人「イヤ絹川、出來ました〳〵」高尾「イエモウわしや危々と思うて居たワイなア」頼兼「イヤモウ絹川の大明神、サア〳〵爰へおじや〳〵」女之助「御主君の御身に若もの事が有る時は、お傍に附添ふこの女之助が、身の過誤と相なるから、大體心遣をした事ではなかつた」絹川「イヤモ何もお心遣なさるゝ事はござりませぬ、たとへ狼藉致さうが、又どの樣な紛爭になりませうが、對手はこの絹川、傍から彼是おつしやりますと、却てお爲になりませぬ、必ず何もおつしやりますな」亭主「如何さま、こりや絹川樣のおつしやる通り、君子は危きに近よらずと、一先今日はお歸り遊ばされますが然るべう存じまする」頼兼「又相變らず堅藏と出かけたは〳〵、兎角堅うては色事はとんと呑めるものではないワイやい、ちつと碎けをれ〳〵」高尾「それいなア、ちつと揚屋の亭主らしう、人の面白がる樣に物を言うたが可いワイなア」む安「さうで御座ります、あの太夫樣と殿樣と床入の枕元へ往ても、三指で左樣然らばでは座が滅入るワイなア」む繁「此方等までが氣が詰つてなる事ぢやない、ちつと洒落を稽古なされいなア」高尾「それ御覧じませ旦那樣、わたしが常々申しませぬ事か、左右曲輪は酒と三味線と、嘘吐く事が嫌ひではとんと可けぬワイなア、苟にも子曰青表紙の本見てばかり、

物を云うたが可うごんすワイの」官藏「イヽヤ詞を飾らぬが侍の本意、事に依つて男女の論はない、たとへ撫斬提斬にしても、武士の風儀を立てねばおかぬ」絹川「そりやはや武家方には武家の風儀が有れば、傾城は傾城の風儀で、そつちから忌味からみで、高尾殿を無理に貰はうと言はんすれば、金輪際この絹川が高尾殿の尻持つて、よう遣るまいと言うたら、こなさんも武士の風儀で俺を斬らざなるまい、斬つて勝つ事を知つてござれば、又斬られて勝つ事も知つて居ります、サアすつぱりと斬つて貰ひませうかい」トきつと見得する、ト官藏も尻込のこなしにて。官藏「オヽいよ〱汝が腰押で、高尾を遣る事ならぬと吐せば是非に及ばぬ、對手にして呉れうが、身も主取を望む身の上、曲輪の中は場所が惡い、日本堤に待つて居らうワイ」絹川「如何にも面白い、吉原の外も染るや愛の花」官藏「血汐に染めなしても」絹川「傾城高尾は」官藏「得やるまいワイ」絹川「そんなら彌々日本堤で」官藏「人顔見えぬ黄昏合圖に」兩人「出會ふワイ」ト唄になる、兩人屹度見得にて、官藏奥へ入る、谷藏殘りこなしある、跡合方にて奥より頼兼、紫の置帽子、著附羽織短刀、井筒女之助角前髪羽織、傾城高尾襠衣裳、禿兩人つき、仲居お安おしげ赤前垂の形にて、跡より亭主三浦屋德右衛門、袴にて出る。お安「やれ〱絹川さん、さりとは氣疎いものでござんした」お笹「イヤモ彼の憎てらしい侍も、しゆつと消えてござん

し有つて。官藏「ムヽ如何樣、見れば健かな面構、可愛やお身も達引とやら腕押とやらで、疊の上ではよう死ねまい、黒澤官藏が手の内はマア」ト傍に有合ふ煙草盆の火入を取つて。「一寸こんなものかい」ト右の火入を握み破りこなしある。絹川「ハテ驚き入つたお手の内、力づくで行く事なら、俺も絹川といふ角力取、行かぬ事もござんすまいが、無敵流とやらの御修練、イヤモきつい事でござりますワイ」トなぶる思入にていふ。官藏「スリャ絹川、御身は此官藏に及ばぬといふ事な」絹川「イヤモ何と致しまして」官藏「アノいよ／＼さうかよ」絹川「へいから／＼」官藏「ムヽヽハヽヽヽイヤモそれはよい了簡だ、三浦屋の太夫高尾は、この黒澤官藏が手の裡で貰つたぞ、オヽ然う思つて貰はう、又ならぬといへばそれこそぢや、コヽヽこの刀の切れ味、否應の返事は一口商ひ、絹川返答はドヽどうぢや」トきつといふ。絹川「イヤこれ／＼お武家さま、尤も劍術の御修練はきついもので御座りますが、遊廓の諸譯、女郎買の意氣地は、まだ御存知はござりませぬさうな、イヤサお腹は立てられな、傾城買ばかりは、力業や劍術では、ヤモ頓といかぬものでござります、ハテ先の相手が高が女、あの酒といふものは、何處の井戸から沸いて出るやら、蒲鉾も鰹節も、海の中に居ると思うてゐる程な、甘いものなれば、男同士の達引とは頓と世界の違うたものぢや程に、お前も野暮な事を止にして、角なしに平假名で

揚屋の體、幕の内より奴峯平波平兩人、雀躍揃ひの衣裝にて雀躍を踊つて居ろ、角力取絹川谷藏、これを相手に踊りゐろ、上手に黑澤官藏、兵法指南の拵へにて控へ居ろ、ト踊三味線にて幕開く。

奴峯平「しづめてせう」奴波平「ありやさ、こりやさ、やつとせい、よい〳〵」絹川「はりさ、こりやさ、あつとせい」ト谷藏二人の奴を相手に立廻しながら踊り、トゞ兩人を見事に投げる、ト兩人吃驚して迯げて橋懸へ入る。「汝等腰骨に覺えて居らう」トこなしある、官藏きつとなつて。

官藏「ホヽ聞及んだる關取の絹川谷藏、只今の手の内ャヽ見事ぢや、三浦屋の高尾が客、賴兼とやらの尻持つて力自慢の角力取でも、今東國に誰あつて、指も得さゝぬ無敵流の開山黑澤官藏、萬戒のこの刀二尺三寸伊達にはさゝぬ、手の裡が見てもらひたい、サ絹川とやら、其處へ出て近附にならうかい」絹川「へヽヽあの俺にか」官藏「いかにも」絹川「なる程なァ、武家方といふものは立派なものぢやな、刀の講釋から先へ言うて、此絹川に近付にならうとは、近付になるなといふ謎でごんすかえ、俺も絹川の谷藏といふ小い相撲取なれども、この繁華の曲輪で侍に出合ひ、後を取つたといはれては、番附や勝負附の出る度に、人の口の端にかゝり外聞が惡い、こなさんの傍へ往て、膝と膝とを摺りつけて、へヽお知人にならうかい」官藏「オヽ面白いサア」絹川「サア」兩人「サア〳〵〳〵サア」ト兩人見得よく向へ出る、ト合方になる、官藏こな

伊達競阿國戲場　一名　紅楓累物語

大序

吉原揚屋の段
同大門口の段
揚屋門口の段
同築山の段

役人替名

一禿　市彌
一仲居お繁
一奴波平
一娵河内
一仲居お安實は仁木女房[illegible]　尾上
一井筒女之助　榮三郎
一傾城高尾　半四郎
一雀踊り大ぜい
一中間一人

一同吉彌
一奴峯平
一亭主德右衛門
一黒澤官蔵
一大江鬼貫　四郎五郎
一相撲取絹川谷蔵　幸四郎
一下男五人
一伊達賴兼　坂三津

造物平舞臺、向ふ長暖簾、左右金襖、上手中二階、いつもの所に門口、橋懸の方茶格子、すべて吉原

の、これはお主に遣る程に、久次がなき後の問ひ弔ひ、又は手前が身の上の、しがくの爲に遣つてくりよ」お富「アイそんなら主の亡き跡を」民部「弔ふ未來の門出は、不思議な緣にて身共が介錯」久次「それで願も」ト思入よろしく、皆々こなし有りて。浮「よろぼひ〳〵見送る一念、息も絕々消えて行く、此世彼世の別路や、はや曉方近き無常の鐘。ト本釣鐘、皆々よろしく、お富へ組子一人かゝるを、久次引つけ、これも刺通し、上へ乘かゝる事、この時與三郎下手に親しく見かへる、爰へ以前の喜藏出來り。喜藏「與三郎うぬ」トかゝるを、與三郎引とめ立廻り、よくとめる事、久次起直り捕手の上へ乘りかゝる、民部刀を拔いて上の方へ廻る事ありて、與三郎へこなし、與三郎默諾き、喜藏を件の井戸の中へ當込み、撥釣瓶をおろす事、下に水音どんとする。浮「あはれ果敢なきト久次引敷きし上へどつさり、與三郎お富ハツト手を合せる、民部刀を構へる、雙方よろしく木の頭きざみにつけ雙盤の責よろしく。

幕

與話情浮名横櫛　終

事、與三郎こなし有りて。與三「是も久次が忠義故、姿かはれば鎌倉へ、母の敵は源左衛門、平馬も正しくかしこへ同道」お富「誠の香爐取返し、今の夫の恨も倶に、どうぞ霽して下さんせ」民部「然ある時には穂積の家名、引興すのも一つの孝道」與三「それにて不義の汚名をはらし、其上名告つて此身の科を」民部、久次「少しも早く」ト民部差添を與三郎へ渡す事、與三郎推戴き腰にさす事、此時に喜藏かゝるを、民部あてる、與三郎に蒐る兩人を投退ける事よろしく、この中に與三郎旅形の拵へする事、床のめりやす文句の中へあしらひ、この中能き程に喜藏立ちかかるを、民部上の方の障子家體の裡へ當てて蒲團をかける事、以前の組子兩人立ちかゝるを久次引付ける、これにて兩人立廻りの仕組よろしく、一人を殺し一人を相手につかひて、上へ乘かゝり、久次よろしく。與三「ハヽア有難く頂戴仕る」久次「今ぞ此世の思出なし、とても事に久次が亡骸、首をば刎ねて取隱し」ト與三郎が以前の著附を持つて思入。「アア塵塚へ捨おかば、切られの與三は自殺して、最早此世に亡き人と」與三「世の口の端にかけさせる、骸の疵痕身代と。」トからだの舊疵へ思入ある。與三「知死期に賴も忠義の一心。」お富「胸に任せ塵塚へ。もし此事が露見せば、其與三郎を殺したは、妾が業と主張つて、亭主殺の身の罪を」ト思入。與三「出かした お富。コレ」ト財布を出し。「此金は親の情の賜物なれど、名告つて出るには不用のも

の與三、其まゝ挿つたと引起せば。ト風の音、どろ／＼の樣に、これへ早めし鳴物あしらひ、立廻つて。浮『祕藥の効驗あら不思議や。トこの中民部は喜藏を引付け一寸當る、長九郎を久次引付け、これへ乘かゝり見得よく、與三郎は蒐る兩人を投退け屹と見得、お富これを見合つてよろしく、人々見得定る事。與三「誠を盡した久次殿の勸によつて、用ひし藥に五體惱亂して」ト皆々思入、この時立まはり兩人かゝる事、與三郎これをあしらふ中に。お富「今迄顏に正々と、其疵の痕消失せて」ト思入、この中民部立廻りの中に運ぶ繪姿取あげ見て。民部「此繪姿に記せしとは。うつて變りし面貌の」久次「さ程に變るも久次が願ひ、エヽ有難い／＼」ト久次にははつきり見えぬ心いき。與三「扨こそ藥の」お富「効驗をこれで」トこの中にお富鏡を出し與三郎へ見せ。浮『さし出したる鏡にて、見れば以前に變りし面影。ト此中に與三郎、手甲脚袢を去る事、殘らず疵の痕癒える事、與三郎皆々思入よろしく。與三「オヽこりや顏ばかりかは軀幹まで」お富「それも偏に久次殿の」民部「忠義の一心達きししるし」與三「コレよく見てくれよ、此通りだ」ト與三郎、久次へ立より思入。浮『顏さしつけて手負の傍、見やり／＼、苦痛も忘れ。ト久次、軀幹の體もよく／＼見て。久次「エヽ有難い／＼、コレ見やれお富、悅べ忠義は立つた」浮『互に歡び感じ入り、しばし惘るゝばかりなり。ト皆々この中に捨白かぶせ、よろしく納まる

ます〱。如何にも彼の香爐は、山鹿毛平馬といふ侍が、赤間源左衞門といふ、强い人を語らつて、野陣が原で女を殺し、盜み物だといふ事は、香爐を預つて後で聞き、氣味がわるさに、久次殿へ賣付ける私が心、所へ海松杭の松五郎といふ人が、金は此方からまはしても、商ひはさせてやる、其代りには斷う〱しろと、味さうな口振、賴まれて今日催促に來た時に、奪合ふ機に門口で、松五郎殿に摩替へさせ、誠の品は海松杭が、赤間源左衞門の方へ持つて行つた、これより外にいふ事はねえ、何卒助けて下さりませ」民部「まだ其外に海松杭の用立てし金子を改め見る所、一兩〱我等が主人、結城家の極印金、察する所先だつて濱川に於て飛脚を殺し、金子を奪ふ盜賊は、彼の海松杭の松五郎、盜んだ金を貸附けて、正しく久次へ盜賊の、汚名を請けさせ罪を遁れん彼が存心」久次「心を碎く寶をすりかへ、其上俺へ盜人の惡名つけん下心」お富「深いたくみで」兩人「あつたよなア」淨「さらりとわかりし其樣子、いつか立聞く目あかしども。ト此中に組子兩人引つれ、以前の喜藏窺ひ居て、此時。喜藏「此家に忍ぶ與三郎、お富は亭主を殺した科人、それ引縛れ」兩人「合點だ」ト風の音はげしく。淨「あはやと民部は身構ひ、驅出る長九郎引すゑる、内に踏込む喜藏の組子。ト喜藏はお富へ立寄る、長九郎逃げんとするを民部引付ける、組子與三郎へかゝり引起す事。淨「藥の爲に總身しびれ、倒伏したる切られ

り居る事。お富「ヤ、ツイ見かけぬお武家樣」久次「オ、貴方は成川民部樣」トお富も扨はとこなし有りて、與三郎の身體へかこふ。兩人「どうしてこれへ」民部「先刻月の岬にて、計らず此家の久次に出會ひ、請取りし香爐を。隼人樣の浪宅へ持參せしに、尋ぬる仔細ある故に、とつて返して此家の内へ、參りかゝつて彼所より。與三郎と申すのは、誠に吾等が劍術の師と頼みし、隼人殿の血筋の悴。忠義によつて觀音久次が命を捨てし事までも、逐一あれより聞取つたり」お富「シテ御尋ねの其譯は」民部「先刻われ等が受取りし眞鶴の香爐は、紛るゝ如く作れども、正眞ならぬコリヤこれ贋物」ト袱紗に包みし香爐を出す。お富「ナニその香爐が」ト久次この中摺寄り見て、いろ〳〵思入、探り見る事よろしく。久次「贋物とな。ヤ、ヽ、ヽ」ト民部こなし有りて。民部「イヤ其歎には及ばぬ事。あれに窺ふ其中に、此家を窺ふこの町人、さてこそ仔細あらんずと、彼處において詮議をすれば、具さに分りし仔細こそ、與三郎が爲には僥倖の幸ひ。御身が忠義も立つといふもの」久次「ナニすりや私が忠義も立ち」お富「與三郎殿の身の爲とは」民部「サア町人、其譯一應これにて申せ」ト出かけに當し呼吸へ活を入れる、長九郎ムヽと息吹かへし。長九「イヤ〳〵先刻言つたれば、モウ言ふには及ばねえ、勘忍して下さいお侍樣」民部「申さずば斯うして言はせる、サア〳〵是でもか〳〵」トこじあげる。長九「アイタヽ、ヽ、申し

ヤヽヽ」ト思入。久次「それ故にこの如く、お富が手をかり左の乳の下」ト手疵へ思入。お富「お主を思ふ其心。少しも早う其藥を」與三「オヽ忝い久次が賜物」久次「早く血汐を御用に立て」浮「それと器へ絞込む、苦痛は厭はぬ忠義の一心、瀧津瀬流す紅も、あはれと見やる二人が、涙も共に染めぬらんトお富この中丼を持ち出る、與三郎立寄りて丼の中へ件の藥を入れる事、兩人介抱しながら、久次よろしく思入ありて、乳の下の血を絞る事よろしく有りて、與三郎お富見合はせて愁の思入、文句一ぱいにある事よろしく、此中風の音をあしらひ、床の合方をあしらふ事。お富「早く用ひて」久次「われらが忠義を」與三「オヽ何にもいはぬ忝い」浮「悅涙そのままに、ぐつと一息件の一藥。ト飲む事、床の合方よろしく、お富久次見やりてこなし。浮「うけし器の其儘に、殘る力なく服すれば、五體も惱亂與三郎、苦しみ其處へ倒れ伏す。ト此中風の音をあしらひ、文句の中に與三郎飲終ると、アット苦しみ、此中に運びし二枚折の陰へ倒れ伏す。お富「アヽこれ申し與三郎さん。ヤヽヽ、今の藥を飲むと等しく、たつての苦しみ、この熱氣は」久次「それこそ藥の正しく利き」浮「さもあらんづと躊躇ふ折柄、奧の物音に、思ひがけなく一室より、道具屋引立て成川民部。ト奧ばた〳〵物音して、成川民部裾高く引上げし著流し大小にて、以前の長九郎を下緒で括り、猿轡をはめて長九郎の襟へ、以前の財布ぶらりと下

すは」與三「お主は心が顛倒したか」お富「どういふ心か久次殿」淨『歎きが中にうら問ふ二人、手負は居直り莞爾と笑み。ト久次思入有りて起直り。久次「サヽヽ。仔細といふは此繪姿」ト以前の繪姿を出し、こなし有りて。三郎殿の面體、身軀へ數ケ所の疵が配符の表、あり〱手疵の跡を癒さんため」ト思入。與三「何といふ、そんなら俺が此疵を」お富「癒さう爲に」兩人「命をば」久次「オヽ」淨『其まゝゐざつて落散りし、守袋と隱し持つ、藥包を取出し。「サア妙藥覺が御座るか」ト與三郎へ藥包、守袋をお富へわたす事、與三郎お富藥包を見て。與三「オヽこれは日外や源氏店で、彼の藤八めが持つてゐた、海松杙松から送りし手紙の中に、封じてあつたお毒藥」お富「何か用立つ事もやと、妾が手筥の其中に、どう紛れてか在つたゆゑ、彼の佛壇の下壇へ置いたを」ト思入、此内に與三郎添書をひろげ見て。與三「酒に合せて飲む時は、直に人の命を斷つ、南蠻祕法の毒藥ながら、辰の年月揃ひたる、男子の血汐に藥を合はせ、用ゆる時には年を經し、如何なる金瘡古疵も、忽ち癒ると記したは。世にも稀なる藥の効驗」ト思入、この中お富久次の守袋の中より、色々の臍の緒書を出し見る事ありて。お富「承安二年辰年の彌生の產、年月日時揃ひしと、委しく記した臍の緒書」ト與三郎へ見せる事。與三「ムヽ。そんなら久次は此藥に」お富「合はす年だの」兩人「生れで有つたか。ヤ

謎の憎まれ口、性根の据つた女房が、其手をかりて命をば、棄つるも矢張りお主の爲」與三「俺もこなたの身の上を、聞けば聞く程不思議な奇縁、實父の血統の恩義を思ひ、其寶をば手に入れて、穗積の家を立てんとは、俺が性根と心はひとつ、よくも寶を手に入れて、親の隱家へ屆けてくれた、この與三郞は今爰で、隼人樣に逢ふにせよ、お顏は知らず此態で、何で血筋の倅だと、名乘合がなるものか。よくして吳れた、辱ないが、お富の手をかり命を棄て、忠義の道を立てるとは。俺を訴人と思込み、言譯心か知らねえが、それは知らねえ前の事、早まつた事しやつたなア」浮「早まりし此有樣と、嘆けば沈み俯す、お富もやう／＼顏を上げ。ト與三郞思入、お富もこの中愁ひの思入よろしく有りて。お富「先刻お前が戾つてから、日頃にかはるお前のそぶり、與三郞さんをひと思ひに殺せよと、手の裏かへす其一言、もしも妾が殺さずば、自身に斬うとの權幕故、如何にも妾が殺さうと、白刃を取れど義理ある與三さん。明日が日名告つて出るにせよ、たとへば搦捕られるとも、一時片時も命をば、永らへて置きたさも、情につれる女の情、さればといつて今爰で、夫と定める其人の、尙々詞は背かれず、此身は一つ亭主は二つ、絕體絕命お前を殺し、其刃物にて死なれずば、亭主殺と名告出て、罪を續けるは覺悟の前」浮「恨涙ぞ道理なる。與三「これお富の手を借り命を棄て」お富「忠義ぢやと言はしやん

元は穂積のお家にて、三代恩義の御家來筋、十七歳の春の事、朋輩喧嘩で人を害め、すでに死罪と極まりしを、お前の親御の計ひにて、命を助り資金を貰ひ、それからは町人ぐらしなれど、以前の氣が失せず、達引事の剛氣の交際、送る月日も六年前、喧嘩出入で岬へ流され、一心不亂に信心の、其御利益に我が土地へ、大赦にかゝつて歸ると其儘、お禮參りの道すがら、お前にかゝつた親旦那、仔細を聞けば奥樣には、人手にかゝつて敢ない御最期、左近樣の御切腹、穂積のお家を斷絶と、聞いて恟り南無三寶、どうぞ恩義が送りたいと、思つて暮す其中に、不圖手に渡りし鶴の香爐、左に右これを買求め、再び殿へ差上げて、お家の再興願はんと、やうやう半金才覺も、無理な工面で手に入る香爐、今日お泊を幸に、旅宿に御座る民部樣に、お渡し申せば大丈夫、まづ一方は片づいたが、サア是からが金の工面と、急いで歸り心の目算、先刻こなたが咄の中、涙金とて親御から、貰つたとある五十兩、見たが此方の因果のつくばひ、島紛失の切られ與三、殊に配符の廻つた身の上、品によつたら訴人して、貰ふ褒美も跡金の、足にならうと我家へ、急いで歸つて窺ふ中、始めて聞いた貴方の素性、恩義は深きお主の血統、その御子息を家來の身で、なんぼ手詰になればとて、どうして刃物が當てられう。汝に殺せと言つたのは、僅かの中でも抱寐して、操を破つた言譯に、この久次を殺せといふ、心の

お富、急度なつて、久次を後袈裟に斬りつける、この物音に與三郎、蒲團はね除け急度飛起き。
與三「コリヤアお富といひあはせ、俺を殺すな」久次「ム、殺す所か訴人するワ」お富「赦しておくれ」淨「モウたまらじと突蒐るを、突退け斬付け爭ふ機、肋をかけて乳の下、ぐつと貫きとばしる血汐、痛手に屈せず驅出るを、遣らじと止むるも眞の闇、絶體絶命女の一心、呼吸をめどの滅多突。ト此中にお富久次をとめる心にて、是非なく所々へ手を負はせる事、與三郎身を退けながら支へる事、すべて暗黒の模樣よろしく、文句の中にうごき有りて、久次よき程に薄傷を所々に負ふ事、トゞお富の手先を止めながら、出刃を持添へ。淨「とめる出刃を我腹へ、ぐつと突立て深手の苦痛。ト其儘久次あつと苦しみ大聲、お富與三郎思入ある事、是にて一室にありし行燈へかけたる與三郎の衣服、風の音して落ちる、是にて皆々見合はす事。淨「おほひし衣おち燈火に。與三「ヤわれと吾が手に」お富「此重傷は」兩人「ヤ、、、」と兩方より思入。淨「苦しさ耐へ聲振立て。ト久次糊紅になり起直り。久次「これ靜に〳〵」與三「これ久次、合點の行かぬお主が詞」兩人「其譯を」ト思入。久次「なる程、言はにやア久次が身の上、解るめえ。これお富。聞いてくれ與三郎。イヤ穗積の血統の若旦那」兩人「何と」ト竹笛になり思入、お富もこなしあり。久次「今こそ明かす久次が身の上、お聞なされて下さりませ。

のか弱い腕で」久次「ナニ寐鳥も同然、俺も傍から」お富「そんならどうでも」久次「燈火を持つて來い」ト是にて露土器の袖火をよき所に持つてくる。淨るり『諜し合はせる心と心、善か惡かは胸の裡、隔の障子の神ならぬ、いざ白川の夜半の鐘、勝手馴れたる下流し、取出す研石出刃庖丁、研立々々押拭ひ、夜風に一室うば玉の、闇は文なし忍足、さし足拔足窺ひより。ト本釣鐘風の音、下手に臺付の砥石、手盥へ柄杓にて水を汲み、誂の出刃庖丁を出して、研ぐ事よろしく有りて押拭ひ、お富わざと燈火を吹消し、暗がりになる思入。久次「なぜ燈火をば」ト久次さぐり〳〵、佛壇の引出より藥包を出して懐中する、この時正面の障子ばらりと引拔く、内に與三郎手甲脚袢にて、蒲團にくるまつて寐てゐる、著付は行燈へ引かけある故、闇の模樣になり、お富久次よろしく有りて、久次は耳を寄せ窺ふ、お富是非なく殺さうといふこなし、尤お富、久次を斬る心、雙方よろしく小聲にて。久次「コレお富〳〵」お富「どこにお出だえ」久次「爰に居るよ」お富「そこにかえ」淨るり『聲をしるべに突出す白刃。トお富、久次の胸先へ出刃を突かける。久次「おれだ」お富「危い事の」淨『口ではいへど女のひ弱さ、惣身に冷汗とつおいつ、久次は爰ぞと胴をすゑ、探り寄つたる暗紛れ、お富は猶も一生懸命、隙を窺ふ背後より、ぐつと一かせ斬下れば、あつと一聲七顚八倒、音に驚く與三郎、むつくと起きて起上り。ト

しておくれな、とんだ腎助だネ」久次「そんなら汝ヤア未練はねえか」お富「アイそんな人ぢやア有りませんよ」久次「よし、其性根に違ひなくば、只一思にやらかして仕舞へ」お富「エ」久次「今日飛込んだ與三郎、ありやア立派に名告つて出る男だと思つてゐるか」お富「彼の通りいふからは、何で間違あるものかナ」久次「それだから不可え、どうして〳〵、大層な事をいつたとて、高が商人の息子株、いくらすれてもお坊さんだ、中々名告つて出る根性骨があるものか、男同士の義理張で、深切らしく取留めたが、お手が入りやア關係合、よし又迯して遣つたとて、捕へられりやア矢張引合、殊に手前の以前の亭主、今目の前でまごつかれちやア、怯けた樣だが寐覺がわるい、配符の廻つた切られ與三、此方の身晴に訴人しようか」お富「そりやア餘り卑怯といふもの、一旦番うた詞もあり、それでは男といはれますまい」久次「お爲ごかしにいひ曲げて、以前の亭主を回護ふ心か」お富「何のさうでは」久次「但は俺への面晴に、我手にかけて殺して仕舞ふか」お富「サアそれは」久次「殺す事は出來ねえか」お富「サア」兩人「サア〳〵〳〵」久次「うぬはマア引腰のねえ女だなア」淨るり「心ありげな一言に。」お富「退引ならぬお前の賴、女の愚癡な心から、征にかゝる此身軀、どうなるものかな、仕方がねえワナ」久次「そんなら汝やア思案がついたか」お富「アイ、義理もへちまもあるものかな」久次「恰好今が寐入ばな」お富「併し女

勝る身の恥を。たとへお主も知つて居ようが」お富「とはいふものゝ、どうか此儘に」ト思入、與三郎お富を突退け。與三「ドレ一寐入やつつけようか」トお富じつと差俯首く。淨るり『蒲團かむりて臥にける。ト與三郎枕ひき寄せ、蒲團被り寐る事、時の鐘、床と下座の合方よろしくあしらひ、風の音、お富こなし有りて、隔の障子しめる、正面の障子も是にて閉める事、內に行燈の燈火さす誂なり。淨るり『日頃の勞れわれ知らず、結ぶ假寐の夢の間に、過ぎ來し方を思ひやり、お富はひとり寐もやらず。トお富、舞臺の方へ以前の道具の行燈をおきて、一室の內の樣子を窺ふ思入、下座の合方、よろしく時の鐘のあしらひ有りて。お富「思ひまはせば妾ほど、不幸の者はない、邪見な他人の手に育ち、藝者勤や人の世話、其浮沈み幾度か、木更津にゐる其中に、此與三さんに思はれた、心と心がゆきあうて、其惡緣が身の錆と、命の恩ある血筋の兄も、緣も何時しか絕果てて、一生連添はうと思ふ其人は、この身すがらがなれの果、義理ある今の夫へも、引くに引かれぬ二張の弓、任意にならぬが憂世といへど。あんまりしがない身の上だなう」ト此時久次暖簾口より出て。久次「お富、まだ手前寐ないのか」お富「オヤお前お歸りかえ」久次「相手のねえ獨語、熱病か狂氣ぢやァあるめえし、夜更さふけに何の事だ」お富「サアこれはナ」久次「アヽ解つた、さきの亭主の顏を見て、手前は性根が狂つたな」お富「よ

人めらが讒訴に、血筋の兄の左近殿は切腹し、實の親父の隼人樣は屋敷追放、穗積の家は絶え果てたと、來る途すがらに聞取る風聞」お富「そんなら實の兄さんも此世を去り、血筋の父御は浪人の。どこに如何して御座んすやら」與三「めぐり逢ふともお顔は知らず、如何なる宿世の」兩人「惡緣ぢやなア」ト兩人抱合ひ、愁の思入、泪おとす、時の鐘、風の音、兩人氣をかへ。與三「ア、何の事だ」ト氣をかへて。コレ夜が短いワ、早く寐かしてくれないか」ト時の鐘、これを床の淨瑠璃になる。淨瑠璃『又つぐる鐘更くる夜の、早苗にそよ〳〵涼風や、いとゞ涙の梅の雨、妻がさねして蒲團さへ、十編の菅薦まかせぬ義理に、隔つふしども障子ごし。ト右の中にお富、與三郎の姿を見て、悄々したるを憂ひてこなし、佛壇の下の押入より、好の久次の模樣つきし袷、又は單物でも、後の仕込に著更へさせる事、すべて文句の中に、こなしよろしく、與三郎著てゐる衣服を脱いで袖だたみ、脚袢を脱れといふ仕方、與三郎此まゝに居るといふ事よろしく、此中に與三郎お富兩人こなし有つて、床の合方。お富「モシ愚癡な樣だが、名告つて出ずに、何處でか一遍身をかくし、どうか爲樣はあるまいかネ」ト寄りかゝり思入、與三郎こなしあつて。與三「エ、又しても未練な事、凶狀請けて死ぬ時に死なねえとな。死ぬにも

お富「サアあんな咄を聞くこと、何から言ばうと氣がどきまぎして、ツイ咄も前後にて。アノ日外鎌倉の野陣が原で、人手にかゝつて死になすつたお前の母さん、殺した人はあれぎりに、其手がかりも知れないかえ」與三「サア俺も大方斯うだらうと心には浮んだが、それだといふて斯うかうといふ、確平した證據もなく。其中に縛られ　お主とも別れ〳〵、とう〳〵島へ行つてからは、どう思つもて方法もなく。併し島を破つて來る道で、不思議に手に入る此手紙」ト夢ざめに手に入りし密書を、叺煙草入より出して見せる、お富とりて讀む事。「先の宛には海老名の郡司、送つた奴の名を隠すは、どうで胡散と思ふにつき、彼の香爐へ心をかくるは、山鹿毛平馬といふ武士。どうでも彼奴が敵の手がかり」ト思入。お富「これは鶴の香爐を隠して江戸へ身を忍び、此秋までに鎌倉へ、上つた上で香爐を、海老名郡司へ渡さうと、約束の此手紙」ト文字を見てこなし有りて。「さうして此筆は覺のある。こりや妾が以前世話になつた、源左衛門殿の此手蹟」ト思入。與三「ムヽ。そんなら是は源左衛門か。今相生の咄といひ、乾兒をつれて鎌倉へ、モウ上つたに違はねえナ」ト思入、お富もこなし有りて。お富「お前の生の母さんを、殺した敵も」ト思入。與三「これまだ其上にこの江戸へ、本海道では人目に立つと、中仙道へまはり路の、風の便に聞いたには」ト右の手紙へこなし有りて。「此香爐の紛失より、悪

と、どうかお前さんの氣を起たせる樣でござりますが、あんまり慘いしかたと思ふから、ツイ申しました。是さい言へば用はない。モシ油斷のならねえ事を聞きましたよ、どうぞ早くお前さん、人の氣の注かねえ所へお出なされいよ」與三「案じるなよ、隨分壯健で暮すがいゝぜ」ト此中そは〳〵立かけ。甚八「併しマアお二人が、此譯の始りより、私がひよんな事をして、とうとうこんな譯になり、また思はずも今爰で。モシお富さん。若旦那」トこどゑになり、こなし有りて。「今夜も矢張り御亭主が留守でござりますぜ。それでも今日のは久次さんが、いひつけなされた蒲團だから、氣遣はなけれども。お二人さんの前でいふぢやアねえが、此與三郎さんが若旦那の時分、木更津の一件も、不圖した事からお二人が身の上、其時私も關りあひで、すでの事ぶつ殺される所を、漸う助かつて、今ぢやア斯うなつて居ますが、モウ〳〵思出すと慄として、氣色がわるくなりますが、お前さん方も、あれに懲りて氣をお注けなせえ、イヤとんだ事でござりましたねえ」ト思入。與三「これ無駄をいはずと早く行きねえ」お富「モシ。相生さん」ト與三郎へこなし有りて。「必ず他へ此事を」ト手で仕方して、沙汰なしだと思入。甚八「どう致して私が」ト兩人へこなし有りて。「お早くお休みなされましよ」ト風の音、合方、時の鐘にて、そは〳〵して下手へ入る。與三「いつでもそゝくさして居るが、賴もしい男だワエ」

を請ける。與三「俺が噂を聞いたのだらう、何も怖い事はねえワエ」ト此中大きな茶碗で一つ飲み。甚八「少し心が落つきました。イヤ怖いといへば、恐かない目に逢ひました」與三「どんな目に逢つたのだ」お富「早く咄してお聞かせな」甚八「そりやァ外でも御ざりません、さうしてこりやア」ト與三郎へこなし有つて。「お前さんにも咄さねえければならねえ事さ」ト引かけし提灯へ心づき、一寸立つて消し。「其怖いといふのは、四五日後に本宿の然る店の二階へ、私が馴染の屋敷の客人を勸めて、仕舞うて戻りがけ、表座敷の亂暴な、とつぴさつぴの大一座、私を伴れて來いといふお客があるといふ事故、何でも有難い儲口と、直に顏を出した所が、お聞きなせえ。車座にならんだ中、六七人は見た顏だと、考へ出して吃驚さ。源左衛門さんの乾兒の衆さ、もし此内に赤間の親方が居なすつたら、どんな目にあふ事かと、ぶる／＼慄へる盃を一つ請けてゐる中に、彼の黒砂の次郎藏さんが、喰しめての不問語、お前さんの咄が出て。モシお聞きなせえ」ト與三郎へ對ひ。「あなたへ種々な罪を被せて、遠い所へ憂目を見せたも、やつぱり源左衛門さんの軍略だと、私はきつぱり聞きましたよ」ト與三郎お富顏見合せ思入。お富「そんなら主を罪におとし、とう／＼島へ送つたも、矢張り根ざしは彼の人が」ト思いれ。與三「海老名へ久しう入込む風聞、なる程彼奴が所爲で有らうよ」ト思入。甚八「私が斯ういふ

橋懸より甚八、傘の印つきし貸蒲團を二枚肩に引懸け、佐野甚と記したぶら提灯をともし、下駄がけにて出て門口より入りながら。甚八「お富さん、今夜もお客ださうだが、先刻久次さんがお寄んなすつて、綺麗な蒲團を二枚、遣してくれろとおつしやつたが、ツイ人が無えので遅くなりました」お富「お前が持つてお出かえ、お氣の毒な」與三「聞いた様な聲だな」ト此中お富立つて、甚八も内へ入り、蒲團をかたへに置く事。お富「聞いた筈だワナ」ト此中に甚八も立つて内へ入り、與三郎を見て合點の行かぬ思入、與三郎は甚八を見てにつこり。與三「ムヽ、違ねえ。甚八だオイ相生さん。工面をよくして、片手間が損料屋か、うまくするな」ト甚八、與三郎を見て。甚八「エヽ。ありやア何處のお人だえ」お富「これナア」ト囁く、甚八吃驚ふるへ出し。甚八「エヽヽ。そんならあの時」ト傍へより見て。「違えねえ若旦那與三郎さん」トいひかけ、はつと口を押へ思入あつて。「モシとんだ譯で御座りましたねえ」トよろしく思入、こはごはしてゐる事。與三「ちつとは譯も聞いたらう。見やれ此態を」ト甚八戰々して。甚八「誠にお珍しい、ツイお見外申しました」お富「マア落ついてお出なねえ」甚八「落つかうと思つても、私も何だか氣になる事が有りますから、怖い様で氣味がわるくつて。それで身體が戰々しやす」お富「一つお上りな」ト茶碗をさす、甚八慄へながら。甚八「アヽヽ、有り難う」ト茶碗

是から直に川崎まで」— 長九「そんなら私は跡で何かの」— 松「首尾よく頼むぞ」— 長九「大呑込さ」— 松「これ」— ト呷く、兩人よろしくこなし有つて、長九郎は上の方へ、松五郎は此時懐中より袱紗包の香爐を出し、思入して橋懸へ入る、浪の音、時の鐘にて此道具ぶん廻はす。

本舞臺、正面より少し下へ寄せて、平舞臺九尺餘の折廻し世話家體鼠壁、眞中に暖簾口、下手へ折廻し、壁の下通り羽目板、此所に勝手道具、棚、小どりまはし土竈、暖簾の上に佛壇、これより上に九尺の障子家體開閉、この内茶壁綺麗に、下手へ撥釣瓶の草井戸、この後生垣、いつもの所へ誂へのまはし戸、すべて久次の宅奥の體、こゝに好の行燈ともし、蝶足の膳へ丼肴の道具、外に小さき廣蓋へ猪口燗徳利など、誂への通り置並べ、土瓶かゝりし箱火鉢をおいて、爰に與三郎お富兩人、行燈の傍に居て酒を飲む體、誂の合方、風の音時の鐘にて道具まはる。

ト右の合方にて。與三「それぢやァ何か、彼の久次がお主にひし隱に、百兩といふ代物を」— お富「あいサ。妾に譯も話さずに、今言うた。道具屋から買請くる約束も、金に手づかへ、海松杁の松五郎の手から、半金の五十兩をば借受けて」— ト思入。與三「それ程にまでして欲しがる代物、先刻落した其時に、見かけた形ばどうやら俺が」— お富「わたしも其時眼づいたが」— 與三「どうぞ正脈を聞きてえもんだ」— ト時の鐘、風の音、やはり右の合方になり、人音する故兩人こなし、此時

立かゝり。長九「兼てお前が頼だから、此方も右と左の手へ、金をせしめる鎹まうけ」ト以前の財布を出し。「お前が久次に貸しなされたコレ彼の金も、まだ爰に」松「それぢやア金は此方の手元に、まだ餘所外へ渡さぬのか。ム、」トこなし有りて。「其大金の商賣を、させて遣うばつかりに、此方もお主を合槌に」長九「其合槌を頼まれたが、先刻のはずみに彼の品は。お前首尾よくやらかしたかえ」松「その段取は極上々」松「誠の物はとつくに俺が」ト懐へ思いれ。長九「併し先刻の代物は、贋と知つて五十兩、どういふ心で流したのだ」松「知れた事。中々あま口な梃では、迂濶に行かぬあの久次、うまく〳〵欺いだ其上で。俺が金をば貸付けても、中々明日の朝迄には」長九「お前の方へ五十兩、私の跡金が五十兩、どうして百兩出來るものか」松「そこを附込で彼のお富を、俺が方へ引上げる、手段の壺へすつかり陷つた。其上確に今家へ、旅姿の來た奴は、慥にあいつが與三郎」長九「其與三郎は元はといへば、私の主人の息子だが。今は方々配符が廻り」松「たしかに彼奴なら島破、こいつも日明へ訴人すれば、一應元手にありつく仕事、これ」ト長九郎へ囁くこと。長九「そんなら私は跡へ殘り、家の樣子を嗅つけて、樣子によつたら明日の手筈に。さうしてお前は是から何處へ」松「首尾よくやつた此品を」ト懐中へこなし有つて。「今夜の中に彼の人へ手渡して、俺も昔の身の上に、又なり出づる手段が肝心。

ぼつ〳〵歸られねえから、さうしたら夜明方に俺が歸る。其氣で居やれ、早く戸締をしてゆつくりと寢かすが可い、俺が歸らねえ其中に與三郎どん。餘所へ行つてくれちやァ恨だよ」與三「有難い其深切、詞に甘へて世話になるとはいへ、長らくかうしては」お富「なるたけ早く戻つてお出よ」久次「承知だよ」ト此中お富ぶら提灯へ燈火をつける事、履物出す事よろしく有りて。「そんならば與三どん」與三「久次どん」久次「留守を隨分」ト此時以前の袱紗包の香爐をおとす。與三、お富「ヤ」ト兩人こなし、お富手をかけるを、久次手早く懐中して」久次「ゆつくりと咄しなせえ」ト唄になり、久次門口をぴつしやり、與三郎お富思入、久次橋懸へ入る、跡風の音、時の鍾、與三郎こなし有つて。お富「今行きがけに取りおとす」與三「袱紗に包んだ重みの代物」お富「お前の望みの」與三「どうか形も」ト思入。お富「モシ」ト囁く、與三郎こなし。與三「そんならあれを。ム丶」ト思入。お富「咄は奥で」與三「お富來やれな」ト唄になり、時の鐘與三郎お富こなし有りて奥へ入る、跡合方彈流し、時の鍾浪の音になり、門口を屋臺下手へよせて、件の腰障子の屋臺の下へ、建仁寺垣建つゞきし

本舞臺、右の家の横手の道具になる、すべて三方廻しの誂へ、半分廻す事

ト爰に以前の海松杭の松五郎、尻端折にて立身、同じく以前の長九郎、これも頰被、尻端折に

くではねえ、近所迄よ」與三「オイ〳〵久次どん。俺を一人爰へおいて、跡はお富と只二人。それぢやァ可笑な鹽梅だ、マアお前が宅に居てくれねえぢやァ、俺もかうして居られめえではねえか。コウお富、イヤお富さん。御亭主をとめねえな」お富「お前マア今夜に限つた事ではあるまいに、マア内にお出なネ」與三「俺アそれでは直に行くよ」ト立ちかける。久次「これサお前も野暮をいふものだ、お富はお前の女房ぢやァねえか」與三「それだから程が悪いワナ。今は此方が亭主ではねえか」久次「サア其以前の女房の所へ、以前の亭主が來たから、今の俺が乙に通ものがつて、餘所へ行くといふ譯ではねえ。俺ア實に用がある。外の者では有るめえし、俺に何が遠慮があるものか」お富「あんなにいふからマア可いワナ」與三「そいつは鹽梅式がわるいなア」トもじ〳〵してゐる。久次「併し湯を使ふなら使はせて、早く床を取つて寢かすが可い」ト考へ。「とはいへ俺も取付世帶だから、夜著の都合が悪い、往きがけにさの甚の宅へいひつけて、綺麗な蒲團を二枚ばかり、爰へ遣すワ」お富「さうしておくれ、お前それぢやァ託けておくれよ」久次「よし〳〵言ひつけるワ」與三「とんだものが尋ねて來て、厄介をかけるなァ」お富「何のお前、遠慮はないよ」與三「それぢやァ何でも久次さん、お前出かけるかえ」久次「今夜往かねえとならねえ譯だ」ト立戻り、お富へこなし有りて。「コウお富、もし今夜遲くなると、一人で

トこの中茶を汲み煙草盆を出す事などよろしくあつて、久次、與三郎の疵へこなし有つて。久次「なる程、お主が體の疵は。俺が體よりは又豪氣だ。どうでも寒さ暑さには」與三「滿足な體と違ひ、疵にはどうでも惱むのよ。イヤ疵と云やァ、脛に疵を持てば笹原とやら譬があるが、今爰へ來かゝる時、誰奴か後から跟けて來ると思つて、早足に急いだ機、手拭を落したから、あすこの障子が目について」ト障子へこなし有つて。「思はず其手拭屋の御亭主は、島で馴染の觀音久次」久次「それも眞面目になりたての、堅氣ではじく十呂盤染」與三「此方は人目を瓶覗き、見かけた家の嚊さんは」久次「此方が以前の女房のお富。思ひがけなく今はしも」お富「其濃淺黄重夫。義理と情の半染も」與三「くめば一河の水淺黄、流れわたつて三尺が」お富「不思議な緣で咄しあふ」久次「どうか芝居に」三人「ありさうだのう」ト三人思入、時の鐘、久次こなし有りて。久次「時に與三郎が思ひがけなく來たからは、どうかと思ふが、何よりの御馳走といふのは、此間さる旦那の所から、熱海の溫泉を樽で貰つたから、据風呂を拵へてある。そこは此邊の氣散よ、後の崕下の地面が廣いワ。コレ鐵砲の中へ少し炭をぶち込むと、直に沸くワ。コレお富、與三郎どんに湯を使はせて、何ぞ口に合ふものを拵へて饗應ふが可い、俺ァ一寸今の內、しかけた用を片づけて來るから」ト立ちかける。お富「今からお前どつちの方へ」久次「ナニ遠

ト お富へこなし有りて。「お富が事も頼みます。お富、必ず汝も見すてられるな。隨分ともに無事で暮しやれ。俺ァ是から名告つて出らァ」 ト立ちかける。「後の回向を頼んだぜ」 久次「よく名告つて出る氣になつた、いよ〳〵覺悟だ、感心したが、餘人の家ならいざ知らず、俺が所へ來るからは。まさか此儘かへされねえ、切て今夜は寛りと、爰に足を延して寢て、又其上でどうせうと、篤り相談のしやうも有らう。コレお富、手前も以前の亭主ぢやァねえか、何とか傍から口を利いて、與三が心を落つかせろよ」 お富「アレあの通り久次さんの深切を、無足にせうより寛りと、今夜は此所に心を休め、落ついて居ても可いではないかネ。何氣遣があるものかな」 與三「二人が詞は嬉しいが。他人の家なら格別よ、以前譯あるお富がゐる久次故、どうで名告つて出る身體、此方の身分は厭はねえが、後の難儀をかけるのも」 久次「イヤ其心遣尤だ、併し俺もこの近所に相應に、心易くしておく者もある事だ、滅多に爰へ踏込ませる樣な事はしねえワ」 お富「マアそれだから、落ついて緩りしても可いぢやァないかナ」 ト與三郎もこなし有りて。 與三「なる程、二人がそれ程にいうてくれるを、この儘に振もぎつても行かれねえ。此世の名殘だ、せめての事、今夜は緩り世話にならう」 久次「それが可い〳〵」 お富「マァ煙草でもお上りな」 久次「何か味いものでも拵へろな」 與三「ナニ構ひなさんな、斯うして咄すのが何よりだ」

い」お富「そんなら妾へ恨もなく」久次「この久次へも疑念をはらして」與三「そこが江戸子、男は當つて砕けろだワ」久次「遉は與三郎、感心したワ」お富「妾もそれで少しは心が落ついたワイなア」與三「されば此方の推量通り。頻に江戸が懐かしく、艱難苦勞で故郷の空、元山町の親里の、どうぞ様子が聞きてえと、昨夜尋ねて往つたればナ」ト思いれ。お富「お前の母さん父さんに、お變もないのかえ」與三「向に變はねえにしろ、此方は久離斷られた身の上、どうする事もならなんだが、不圖した譯で恩のある、親父殿に唯一言、詞を交したが此世の思出」ト思入。お富「そんならそれが泣別れ」久次「ムヽ。ムヽ。そんなら江戸へ疾くにから」與三「島を破つた配符が廻つて」お富「エヽヽヽ」ト思入。久次「コレ」トお富を制し、與三郎又久次へ囁く。與三「こんな始末よ」ト久次こなし有りて。久次「そんなら海老名のおかゝりで。ハテナア」ト思入。與三「そこで俺もこれ迄だと覺悟を極め、直に名乘つて出づる意で驅出したがナ。俺が子供の時分から、守をしてくれた忠助といふ老人が、段々譯を言つて俺への頼み、何卒一旦落延びてくれろといふ、其老人の心根が不憫だから、爰迄は忍んで來たが。矢張配符は廻つた様子、今宵の中に鎌倉へ走りつき、立派に名乘つて出る時は、江戸の親へも難儀もかゝらず。親の手前へ死恥をかゝせる事も薄らぐ道理、俺が心は臍を極めた」ト立上りかけ。「コウ久次どん」

な譯となり、此方は流人となつた時宜、こりやァ言ふにも及ばぬが。今言つた戻り船で、俺が鎌倉まで歸つた時、まだ此お富は牢を出ず、引取る人がねえとの事だ。そこで俺も以前江戸に居た時分には、兩國でお富とは心易くしやつた間。棄てゝおく其時は、據なく此女は、忌な所へ身を墮し。さうなつた時は、ツイ一寸足を洗つて、世間の交り出來ねえ身にするも可愛さうと、俺が緣邊だと引取つて、それから玆へ伴れて來たのよ」お富「聞かしやんす通り、深切な久次さんのお世話故、やう〳〵妾が身拔をして、爰へ來て居る其中にも、段々島の咄を聞けば、なか〳〵聞くより恐しい所ゆゑ、永う命は保つまい、どうで此世に亡き人と、妾は思ひ諦めて、切めては日毎に香花を、心おきなく手向るは、心の知れぬ其人へ、身を任かすより何かの事、譯を知つた其人を、力と賴んで月日を送る其中に、思ひがけなくお前に逢ひ、其面目なさ恥かしさ、何卒了簡して下さんせいなア」久次「お富からも言ふ通だ、今更俺ァ面目ねえ」この此中與三郎じつとこなし有りて。與三「イヤ其斟酌には及ばねえ、どうで此方も島にゐて、滿一年はまだしもだが、二年と命は保つめえと、行つた時から覺悟はつけたのだ。よくこそお富を引取つて、深切に世話をしてくれた、忝いと禮をいはうが、お主を惡く何思はう。またお富も、外の亭主を持たず、人に知られた觀音久次を見立てゝ、よくも亭主に持つた。それで俺も心が安

んの行く島は」久次「違ふのさ。其汐待の流人船、多くの人には間を分けて、切られ與三と肩書の、墨黒々とさげ札は、こいつは立派な惡黨と、俺が方から近付に成つてお主が身の上の」與三「其概略を咄した上。イヤ其時は此方にも、大きに世話になりやした、彼是する中出船となり、此方は傳も荒磯の、沖の小島へ送られた、其戻り船に確かこなたは」ト思入。久次「サア、聞きやれ、有難いお赦の沙汰で、程なく此方は故鄕へ歸り、古い馴染や友達も、無事に戻ればやれこれと、賴もしづくで店を借り、馴染んだ土地は觀音前、片名はやつぱり觀音の、久次と人に立てられても、以前の惡の夢もさめ。氣も入替へて堅氣暮しさ」與三「それだから目でたいといふ事よ」トお富へこなしあつて。「コウ久次どん。イヤ久次。俺が口からどうした譯だと聞くのは、何だかひけた樣で、チツト言ひにくいと思ふがな。併し聞かずにはおかれねえ。此女は如何した譯で、爰の家に居りやすえ、どうぞ譯を聞きてえね」ト久次お富思入。久次「アノ何かお富の事か」與三「さうよ」久次「ムヽ。コリヤア」トこなし有りて。「お主言やれな」トお富思入。お富「何だな。お前お言ひな」久次「エヽ手前から咄せよ」お富「マア お前からさ」ト兩人よろしく」與三「これさ、夜が短かいは、早く言やれな」久次「ムヽ。ハヽヽヽ」トよろしくこなし有りて。「こりやア斯ういふ譯よ、手前とお富と二人が間、色々と苦勞苦患して、其中不慮

拭をきる事、與三郎當百錢と浪錢を出し、手拭を取つて久次をかきのけ、門口を開けようとして。與三「お世話でござりやした」ト出ようとするを、久次とめて。久次「コォ待つせえナ」與三「なぜ止めるのだ」久次「ハテ止めねえで、俺が家だ、氣遣ないワ」與三「それでも俺ア‥‥」ト立ちかけるを、上へつきやり。久次「エ、咄があるワ、マア待つし。コレサ見て居ずと草鞋でも解いてやれな」お富「アイ」ト與三郎兩人氣味合ありて、與三郎草鞋を解く、お富笠をとつて片よせ、こなしあつて與三郎は上の方へ、久次は外を窺ひ、門を閉めて思入あり、與三郎へ對ひ。久次「コウ與三郎。俺アよもやと思つたら」お富「あの恐しい」兩人「島を破つて」與三「察してくりやれな」トお富ぎつくり思入ありてさし俯く。久次「素敵な事を遣つたな」ト思入ありて好の合方。「今もお主が身の上を、爰で咄してゐた所だ、ナアお富」お富「今宵お前に逢はうとは、眞に夢さら知らぬ事」久次「マア何にしろ壯健でめでたいの」與三「イヤ其めでたいのは此方の身の上。俺が鎌倉で罪を被て、船に乘つたは去年の今頃、風のもよりで汐待の、其時始めて近附になつた所は。ア、何とか言つた」久次「オ、俺が流されて居た所は、伊豆の岬の高島よ」與三「ム、違えねえ高島〳〵。其高島でお主に逢つたは。丁度十日程も交際うたのう」久次「さればよ」ト思入、お富こなし有りて久次に對ひ。お富「そんならお前のゐた島と。與三郎さ

ろしく、久次は行燈持ち出でて、燈火を點す事、此中に向より與三郎、三度笠合羽脚袢手甲、前幕の品にて扮裝せし體、件の笠をかざし、ばた〳〵向より一散に走り出で、直に内へ入り、慌てゝ戸を閉める、兩人共恟りして。久次「エ、恟りすらア」お富「お前は誰だえ」ト與三郎思入あつて。與三「御免なせえ」ト四邊を見まはし、手拭に心づき。「ハヽア手拭屋だの、コウ手拭を一筋くんなせえよ」久次「アイ〳〵」ト行燈出し、燈火つけて居て。「それお客だ、手拭を出してあげろよ」お富「ハイ〳〵今お目にかけますよ」與三「どんなのでも可い、早く裁つてくんなせえ」お富「それでも模樣を御覽なさいませ」ト掛けてあるのと、ほかに卷きたるを持ち出す事。與三「ナニどれでも可いワナ」ト一寸見て。「其不意氣な半染がよからう」お富「これでござりますかえ」ト卷きたるを取上げる事、此時兩人顔見合せ。「ヤどうやらお前は」與三「お富だな」お富「ほんに與三さん」久次「そんなら島を」與三「ヤこなたは久次」お富「ひよんな所で」ト思入。久次、與三「逢つたのウ」トこの中三人よろしく、與三郎を久次内へ引入れ、入れ代つて門口をぴつしやり閉る、三人よろしく思入、與三郎氣をかへ。與三「これ久次どん。何にもいふには及ばねえ、俺がかうして居るからは、お主の胸には譯は知れよう」トお富へこなし有つて。「可い樣に賴みやす。オイ嚊さん、早く手拭を裁つてくんねえナ」お富「アイ今裁るワネ」ト此中に手

主と俺よ。お主が以前藝者商賣して居る時分は、俺も其頃若い身空で、隨分心易くした其内に、不圖した喧嘩の中へ飛込み、退くに退かれぬ機になりて、對手へ大勢疵をつけ。俺も其時この通り」トからだと脚をまくり見せて。體軀も疵を受けたが。對手に卽死が二三人、其科により伊豆の島へ、流されてゐたのも凡五六年。其中お主も與三郎と、苦勞をしあうた曉が、とうとう與三郎は重い科で、沖の小島へ捨てられた、其戻船へ大赦にあひ、此方は故鄕へ新世帶、お主と二人で此通り、暮して居るのがよくせきな、因緣づくだと俺ア思ふよ」お富「そりやアお前のいふ通りさ、妾も一旦苦勞をした彼の人が、どうで島へ行くからは、あの身軀では長い事、島で命は棄ものと、思ひ諦め此通り、今はお前と夫婦になつて暮すのも、譯を知つたお前だけ、切て跡で香花を、快く手向けたさ」久次「そりやア俺も承知だは。併し前の亭主も身軀の疵、今の亭主も此通り、お主は疵のある男に緣があるワ」トこなしあつて。「併し與三郎は俺が樣な、如此毛むくじやらな脚ぢやアあるめえ。ハヽヽヽ」トこなし、お富氣をかへ。「酒があるなら燗でもつけろナ」お富「アイ支度はしてあるよ」ト時の鐘の入相を打つ。久次「モウ日が暮れるワ。ドレ燈火支度は俺がしようか」ト合方になり、お富は膳立したる蝶足の膳の上へ、小鉢茶碗丼などのせたるに、燗德利猪口を出し、火鉢へ鐵瓶をかけ、酒の支度の事、捨白よ

ト思入。松「野伏非人の金にしろ、穢多長吏の金であらうが、世間は變らぬ天下の寶、お前が頼むものだから、間に合はせた分の事。それとも借りて氣が濟まずば、直に此方へ返しなされえナ」ト久次思入。久次「イヤ返すめえ、借りておかう。遣つた後で譯を聞き、どうなるものか仕方がねえ。長くは借りねえ、明日の朝まで」松「此方は明日が明後日でも、そこは其方の勝手次第。併し判證文はしねえでも、お前も觀音久次さん、間違はあるまいね」久次「ハテ駄目を推すには及ばねえワナ」松「面白い、其詞を忘れぬ樣に。そんならば久次さん。跡へ鹽花を振んなせえよ」トこなし、唄になり橋懸へ入る、久次思入、時の鐘、跡合方彈流し、此時お富何心なく奥より出る。久次「お富今歸つた」お富「オヤお前今お歸りかえ、大層手間が取れた、どこをうそ〳〵ほつき歩いてお出だえ」トつんとする。久次「ヘン歸り早々、亭主に權つくを喰はしやアがるぜ、コウ男は外を歩くのが商賣だ、そんなにけち〳〵いふなえ」お富「それでもお前の留守へ、いろいろの人が來るからの事さ」久次「來なくつてさ、人出入の多い家が陽氣でいゝものだ」お富「ほんに其陽氣といへば、噺家の相生さんが來たから、摺物の事を言つたら、歡んで歸つたが、彼の人も此土地へ來て、貸蒲團屋をして居るとは氣が注かない、眞に縁といふものは、不思議なものだねエ」久次「そりやア然うよ、併し何が縁が不思議だと言つても、凡そ不思議なのは、お

紗包の香爐を開けようとする、海松杭も思入有つて見る故、一寸懐中して思入、合方、時の鐘。

久次「松五郎どん、何にしても此方のお蔭で、辱けねえ、これといふも先だつて、濱川のあの場所で、不圖出逢うて近づきになつた此方をば、夢に牡丹餅、五十兩投出して貸したのは。よつぽど昨夕は、出來がよかつたと見えるナ」松「何のお前。昨夕は何處へも出かけはしねえが。何處ぞの場所の資金にと、持合せた彼の金が、用に足りたは嬉しいのさ」久次「併し五十兩といふ高を借りて居て、此方の家を知らねえでは濟まねえワエ」松「私の家は言はずに措かうよ」久次「言はれねえとは如何いふ譯で」ト兩人思入。松「わしが居處をいふ時は、斯うして咄も爲難い譯さ、素人衆とは違ひますよ」ト久次ぎつくり科ありて。久次「ム、。素人と違ふといふからは」松「今では小家へ落ちやした」久次「そんならお前の身の上は」ト思入。松「其小屋者となつたのも、元はといへば木更津で、お富殿をば其以前、口説いた事が親方の、源左衛門殿の耳に入り、それから此方が疎まれて、仲間の奴には見捨られ、世間が狹さになり下り、この品川のよせ場へ來て、少し身分は下つたが、其代りには困らぬ金。昔の仇を恩にかけ、貸すといふ譯ではねえが。幸ひ茲に持つてゐたのが、素人衆の用に立てば、これで私も本望さ」ト思入、久次こなし有りて。

久次「さういふ此方の身の上とは、蔭張り知らずに、イヤとんだ咄だ。どういふ譯で今の金を」

久次「それだと言つて其金が」長九「金がなければマア其品を」ト取りに蒐るを、久次爭ふ中に、海松杭の松門口より顏さし入れながら、包金を五十兩放り出し。松「久次さん。此金を遣ひなせえな」ト久次の前へ投げる、久次取上げ。久次「そんなら手元に此金が」松「今聞いた入用には、高が半分足りねえが、樣子に依つたら跡でどうでも、マア間に合せておきなさいな」ト内へ入る。久次「ムヽ。有難い、此方も差蒐つた入用だ、樣子によらば少しの間」ト久次よろしくこなし有つて。「如何にも此方が詞に委せ、それぢやア借るぜ。サア道具屋さん。半金の五十兩、是を渡しておくからは、代物は俺が自由、又跡金も明日中に屹と調へて渡すから、さう思つてくんなせえ」ト金を渡す、長九郎こなし有りて。長九「なる程、包金で五十兩。確に受取りました。跡の所は明日中に」久次「間違なく調へて遣らうから、それ迄どうぞ待つて下せえ」長九「よう御座ります、それぢやア何分お約束の、間違はねえ樣にお賴み申します」久次「ハテ可いワナ、金を取つたらさつ〳〵と行きなせえ」長九「それでも跡が五十兩、きつとお賴み申しました」久次「エエ煩い男だぞ」長九「オイ呵られた。併しこれでお待ち申した効があつて、先商ひも出來たといふもの。併しこれもお前樣がござつた故」ト海松杭へこなしあつて。「大きに有難うござります。アイ久次さん、お喧しうござりました」トテンツヽになり、長九郎向へ入る、久次一寸右の袱

ア俺が彼の代呂物を引つかけて、遣繰にでも遣つたと思つて、此方は疑ふかは知らねえが、俺アそんな小刀細工は嫌ひな男だ。ちつと彼の品には譯があつて、買ひたいと思ふから、お主から預つて居る中に、ヤレ仲直りだの名披露のと、色々なことを頼まれて、それでこなたの方へも無沙汰になつた。彼りやァ俺が買取るから、マアさう思つてくんなせえ」長九「サアお前樣の方は、俺が引請ける、俺が買はうと、極めはつけてござつても、二兩や三兩の代物ぢやアござりません、大金の品物でござりますよ。それをば玉を引上げて、それなりけりとはをかしなもの。そりやアおまへさん、風が惡いと申すものでござります」久次「エヽ矢張氣障な事を吐しやがる。コレ代物は此通り」ト懐より出して袱紗に包みし前幕の香爐を出す。「俺が方に預つてゐるワエ。こなたの遣くりをつける迄、何で外へ代物を」長九「そんなら金をお呉んなせえな」久次「ハテ其金が爰に有りやア、直に埒を明けて仕舞ふのだ」長九「それでは私も迷惑でござります、こちらにはちと望む人が有つて、急に其方へ賣渡したうござります」久次「それでも俺が先約だワ」長九「ハテせんやくでも練藥でも、金を早く取らにやア、私の商賣にやァなりませぬ、マア代物を私の方へ」久次「ハテ俺が買ふワエ」長九「ハテお前も情の強い、そんなら金を遣しなさいな」久次「ハテ一二三日だ、待つせえな」長九「どうして〳〵、半日も待たねえ、早く金をおくんなせえ

れて、ツイ今の樣な奴に逢つても氣障だから、道をよける氣になるのさ」久次「何の彼の喜藏なんぞに、何も氣兼が入るものか、マア俺が宅へ來るが可い」松「それでもお前の所は」ト小指を出し。「レコの手前が程が惡いワナ」久次「何の構ふものかな。マア一寸一緒に來なせえな」トこんな筋の事いひながら、宅へ來る事、宅に長九郎、色々退屈の科あつて。長九「久次殿はまだ戻らぬのか、何時まで待せておくのだらう、それでも餘り久次殿もずるい人だ」ト此内あましを、門口に久次海松杁聞きゐる、海松杁こなしあつて下手へ忍び入る、久次は門口をあけて、直と入り。久次「ずるい男がどうしたえ」ト思入。長九「ヤ。これは御亭主。よく戻らつしやりました」トこなしある、久次も思入あつて。久次「オイ道具屋さん、お前も又俺が居ねえ所へ來て、何も彼是やかましく、そんなに言はねえでも、よささうなものだ」トいひかける故、長九郎きつとなり。長九「イエ〳〵いふネ、言ひますよ。此間お前樣に初めて逢つた其時は、お交際のお方が、みんな此宿の立派な衆、其中で久次さん〳〵といはれてゐるお前だから、よもやと思つて大金の品、一寸見せろとお言ひなさるから、お貸し申しておいたのだ。其時からは七日八日、あそこの內證へも來さつしやらず、そりやァお前さん、お名前にも似合ひませぬなされ方だと思ひますよ」トいふ故、久次慣として。久次「これ乙な事を言はつしやるが、それぢや

ト小指を出し。「咄しては惡い筋、委細の事は、昨夕こなたが耳へ入れた通り。又其外の委しい譯は、こいつを見れば分るのだ」ト紙入の間より疊みし繪姿を出し。「主の方へ預つておいて下せえ」ト繪姿を其まゝ取り懐中して。久次「可うございます。私が呑込みやしたとは請合ふものよ。お前方は本職だが、此方はどうも謂はゞ素人の事だから」喜藏「ハテさう言つては可けねえ。此方も確かに爰いらへまごついて來ようと思ふから、此方をば頼むのだ。コウ骨さい折つてくれるなら、冗談こではねえ、お出入をする海老名樣や梶原樣から、お前には屹とした」ト立ちかける故。久次「ハテようございます、マア〳〵どうなる事か行つて見ませう、マア任せておきなせえ」喜藏「それぢやァ何分頼んだよ」久次「ハテ可いといふ事サ」ト喜藏は引返し揚幕へ入る、この中に海松杌の松五郎、揚幕より出て來り、喜藏に行合ふ、喜藏、海松杌を見て兩方よろしく、喜藏は揚幕へ、久次は喜藏の跡見送る心意氣、捨白ある中に海松杌久次見合ひて。松五「今のは海老名樣へ出入をする、目明の喜藏だの」久次「さうよ。こなたと咄をしてゐた其中に、あの男に逢うたから、肝心の咄しかけた一件を」松五「サア私も以前は海松杌の松といはれて、隨分人にもつかうされた男だが。今は此近所へ來て、味な所でお前とも近付になつて、かうして一所に歩いても。馴染まねえ土地といふものは、世間が見ら

早く参りますよ」ト甚八立上り、お村は蒲團をかたけ。甚八「そんなら姉御。親方へよろしくお頼み申します。モシ道具屋さん、御寛とお待ちなされませ」長九「アイ〳〵」お村「お前所の女中衆も、早く代りを見付けてえものだネ」甚八「誠に困りやす。いゝのがあつたらお頼み申すよ」ト門口へ出て。「ハイお喧ましうござりました」ト此間よろしく捨白あるべし、流行唄になり、甚八お村下手へ入る、お富は火鉢へ炭をつぎなど、よろしくこなし、長九郎延つ反つして。長九「ア、此久次殿は、モウ戻らつしやりさうなものだ。モシお嬶さん、何時頃お歸りなされませうネ」お富「どうで自分の宅だから、何時か一度は歸つてくるワネ。お前の口から待たうと言つたのぢやアないか、マア氣を長く待つておいで、お前の樣な暇人でないから、構つてはゐられない、待ちなされるなら店を氣を注けておくれ、其代りお茶位は進げうワイ」長九「そりやア御馳走だネ」お富「どれお茶でも進げうネ」ト合方になり、お富奥へ入る、長九郎煙草盆を引寄せ。長九「何にしても困つたものだ」ト煙管くはへ思入、これを流行唄になり、向より觀音久次、好の服裝、日和下駄にて、この次へ喜藏、咄しながら出て來り、此跡より海松杁の松、品川宿の小屋頭の服裝、頬被にて出て來る事。久次「喜藏さん、可い所で逢ひました」喜藏「お前の宅で、先刻よつぽど待つて居たが、どうも此一件は内のレコにも」

ト お富甚八見合はせてこなし、お富氣をかへ。お富「なアに與三郎さんとやらは、近附ではねえがネ、そこに居る甚八さんから咄に聞き。それでさういうたのさ」甚八「イヤモウ人といふ者は、何處でどういふ近づきに逢はうやら、知れねえものさ。私も宅の姉御は古いお馴染で、頼まれた名弘のせめ道具を、久次さんの顔で、方々を配つてお貰ひ申すのを、お頼み申しに一寸來て、大きに長居を致しました」お富「あの配物の事は、主が承知さ。モウ五六軒遣る所があるから、跡から届けてくれる樣にと、今朝宅の人がいうて居たよ」甚八「何分よろしくお頼み申します。時に、昨夕のはお邪魔でござりませう。持つて行きませうか」お村「アイ爰にござりました、お待ちなされい」ト立つて上の方の障子屋體より、損料蒲團二枚程出す事。甚八「アイ／＼お世話でござります」ト擔げにかゝる故。お富「コレナ甚八さん、お座敷を勤める人が、そんな物をかついで見つともない。今をばさんに持せてやるワナ」お村「私が持つて往きませう」甚八「商賣だから私が持つて往くものを。そりやアお氣の毒な。さうして昨夕のお顔はえ」お富「宅の人が以前の友達、大師河原の歸りだと、三四人づれで押込んで、とう／＼昨夜夜あかしさ」お村「道理でお賑やかでござりました」お富「それぢやアをばさん、お前も今夜は家の用を足しなさいナ」お村「ようござりますかえ」お富「可いからお出よ」お村「それぢやアお願ひ申します、明日の朝

名の高いお方故、暫時の間も手放したのだ。モウそれからは七八日」トそこら見廻し。「斯うして家へ來て見れば。さして手堅い・・・」ト思入。お富「何だとえ」トこなし。長九「イヤ。手がたくお約束申した事、何ならお歸り迄待ちませうよ」お富「其方の勝手で宅の人へ貸しておいて、妾に對うてそんな事。どうとも勝手にしなせえな。併し金目の物とは一體何だえ」ト思入。
長九「エヽそりやア」ト甚八お村などへこなしあつて。「そりやァ久次さんにお目にかゝれば解る事、矢張り道具で御座りますよ」トこなし有つて煙草のみゐる、此中甚八こなし有つて。
甚八「モシ〳〵道具屋さん。どうも見た樣なんだと思つたら、お前は元山町の伊豆屋のお手代長九郎さんだネ」ト長九郎もこなし有りて。長九「さういへば此方も。オヽ兩國にござつた甚八さん。お前今こゝにゐるのかえ」甚八「左樣さ、一しきりは旅へ出て、五行亭相生というて、噺家の眞似を爲たり、方々と流れ渡り、今では女房に引手をさせ、私がかせぎは座敷へ出たり、其片手間の損料屋サ。さうしてお前疾から伊豆屋を暇を取つて」長九「サア聞きなせえ、放蕩者の與三郎にくつついて居て、どうで長い正月もあるめえと、此方から暇をとり、今ではしなれた小道具商賣。久しぶりでお目にかゝつたよ」トこれをお富きいて思入ありて。お富「それぢやア主は。彼の與三郎さんの宅に居た」トいひかける故。長九「彼の與三郎とはお近附かえ」

くお言ひだえ、譯を早くいひなせえな」長九「其譯は斯うで御座ります。私は神明前で小道具屋を致します、長屋の長九郎といふ者で御座りますが。さる屋敷の浪人衆へ、三十兩といふ金をかしまして、其方の質に金目の代物を預りましたが。サア貸した金がどうも戻らず、私も困つてネ。其代物を捌かうと思つても、結構過ぎて賣口の悪い品。そこで此品川へは、お屋敷方も方々へ來て御座る事だから、何處ぞへ嫁入をさせうと、此間持つて來た所、本宿のさる内證で、此方の旦那にお目にかゝり、其時にちつと貸してくれろ、見せる所があると言ひなさるから、大事の物だが、暫時の中と預けて置いたら、それからは其許の内證へも薩張ござらず。モウ今日が日迄七日八日になりますから、それで今の樣に申しました」ト是を聞きお富こなしありて。お富「なる程、お前のいふ所は解つたがナ、定めて其時宅の人が」トこなし有りて、若や遣繰しかといふ意氣なり。「どんな事の入用か、マアそれにやア譯があつて、其品をお前から預りもしたらうが。宅の人に限つては、ついに其樣な事で間違ひ引のない氣性、マア何にしても、主が留主では分らねえから、明日居る時に來なさいな」長九「モシ／＼そりやアお前樣のお詞だがネ、神明前から爰までも餘程ござります。何をいうても、一寸預りで時貸にせえ、三十兩貸す品物、金目の物を何時迄も、さう手ばなしては措かれませぬ、觀音前の久次さんと言つては、

なに言はずと、マア内へお入りなせえナ」ト是にて長九郎も内へ入り。長九「どうで入るがの、爰の内の御亭主は、名前さへ觀音久次といふから、正直な人だと思つたら、さりとてはずるい男だ」トこれを聞いて甚八は長九郎の顔を見て考へる思入。甚八「オイ〳〵何が家の親方がずるい男だえ」甚八、お村「譯を言ひなせえ〳〵」長九「ハテいけずるいからずるいと言つたので」トこの中に奥よりお富好の著附、巻帶、結び髪の鬘、手拭にて扇ぎながら出て來り、長九郎のいふ事を聞いて居て、此時長九郎へ向ひ。お富「モシお前、何處からお出だえ」ト是にて長九郎思入。「今彼處で聞いて居りやア、お前さん何といひなすつたえ」長九「エわたしかえ」ト險幕に恐れし體。お富「こゝに居る衆は、近所のお方や、雇ひのお婆さん、其前で家の亭主は、いけずるい男とお前言つたらう。何だな人の家へ來て、碌々に挨拶もしねえで、大きな聲で家の人の事を、どうの斯うのと、いけふさ〴〵しい、途方もねえ男だなう。マア下にゐて譯をいひなせえナ」トこなし有つて、お富下にゐる故、甚八お村もよろしく座につく事、長九郎しよげて險幕に恐れし體。長九「それぢやアお前は爰の内の、あの久次さんの」甚八「お嬶さんだワナ」ト長九郎こなし有つて。長九「それとは知らねえで、私もツイ氣が急いたものだから、眞平御免なされませ。これはお嬶さんか。お初にお目に懸りました」お富「さうしてお前、何の用で今のやうに、騒々し

三郎の姿絵を出し、こなしある。お村「それぢやア奥にお富さんが居るから、呼んで來ませう」甚八「それがいゝ、早く呼びねえ」ト立ちかける故、喜藏こなし有つて。喜藏「ア、これ〳〵待つせえ、噂さんに聞かしては、少とわるい筋だ。マア何にしろ久次に會つてからの事さ」甚八「ムムわかりやした」ト親指を出し。「宅のレコが、お富さんへ内密で、又外に女でも拵へたのかネ」喜藏「馬鹿をいはつせえ、こなたではあるめえし」甚八「私か何時女をこしらへやした」喜藏「これ隱しやんな。此頃年增の情婦が一人出來た事は。此方の帳にとまつてるぜ」トこなし。甚八「これさ親方、そんな凄味は何だか無氣味だ」お村「ぬしが言はつしやると、さう聞えるやつさ」兩人「ハヽヽヽ」喜藏「冗談は冗談、役向の配符の事だ、鮫津まで往つて後に來るから、久次さんが戻つたら、少し宅に居て下せえと傳言て下せえ」お村「ハイ〳〵さう申しませう」喜藏「それぢやア一つ走り往つて來うか」甚八「後にお出なされませ」トてんつゝになり、喜藏向へ、是にて向ふより長九郎、道具屋にて摺違ひて舞臺へ來る事、喜藏は揚幕へ入る、長九郎門口へ來り長九郎「ハイ御免なされい〳〵」ト氣を急く事。お村「何でござりますえ、騷々しい」長九「何だ、騷々しいえ。モシ久次さんに會ひてえ、久次さんは如何しなすつた」甚八「誰人か知らねえが、お前マア内へお入りなされませ」長九「わたしやア久次さんに會ひてえよ」甚八「ハテ門口でそん

おいた事もあり、それで態々來たのだが、家に居ねえぢやァ分らねえ」― お村「モウ今にお歸りでございませうよ、少しお待なされませ」― 甚八「さうしてお富さんは、何をしてお出だえ」― お村「今奥の三疊で、髪を結んで居なさるワネ」― 甚八「成程、此節の譯柄では、一人で結はねばなるめえテ」― お村「きびしい事の樣だがネ、これが眞實の事さ、女は手前でいふのが當然よ」― 甚八「イヤ嚴しいといへば。モシ喜兵衛さん、此間の川端の一件は、眞の事でござりますかえ」― 喜藏「さうさ、眞の事だが、まだ誰が爲業かわからねえのよ」― お村「ムヽそりやァ千葉家の飛脚を殺して金を奪つたとやらいふ咄だとかえ」― 喜藏「さうさ。宿場ではよくある奴さ」― 甚八「人を殺して金を取るとは、酷い奴があるものだ、定九郎なら五十兩だが、三百兩とはちつと仕事が大きいネ」― お村「さうしてお前さん、其一件でお出なされたのかえ」― 喜藏「何さ、俺ァ千葉家へは出入をせず、此一件は外に聞込んだものも有れば、此方の構つた事譯ではねえが、其盗人が知れた時は、此方の役がら、どうで係合になる仕事さ。併し屋敷の飛脚を勤むる者が、殺されて三百兩とられるとは、一體とられる者も濟まねえ譯さ」― 甚八「マァそんなものさネ、さうしてお前さんなんぞ、外に此宿に調べる事でもありましてかえ」― 喜藏「海老名樣と梶原樣から出た配符でちつと久次どんに會うた上、渡しておきたいものがあり、それで咄も有つて態々こゝへ」― ト紙入より疊みし與

鉢の傍へより烟草のみゐる、喜藏も同じく烟草盆控へ、おむら木綿やつし前垂かけ、雇噂の扮装にて立かゝり、門口に若い衆の仕出三四人、買物買たちかゝり居る、おむらこれへ商ひして居る見得、テンツヽヘ雙盤太鼓をかぶせ、賑かに幕開く。

若衆〇「齒磨と楊子をおくんなせえ」お村「アイ／＼。今出して上るよ」若衆△「オイ／＼手拭を早く裁つてくんなせえ、豆紋が可いよ」お村「今裁つて上るワナ忙しない」若衆×「三味線の絲を、十五の三を二かけ、四ツ切を二帖だよ」甚八「よし／＼、そりやア俺が出して遣らうワ」喜藏「この又久次は何處へ往つた事だ、店を打遣かして途方も無え」ト烟草をのみ居る事。若衆□「わしにも芥子玉を一つくんなせえ」お村「アイ／＼」トこの中手拭二つ切る事、齒磨、楊子、三味線絲、紙類、お村兩人捨白よろしく有つて、仕出に出して遣る。四人「アイ／＼お世話で御座りました。アイ錢を取らつしやい」甚八、お村「ハイようお出なされました、有難うござります」トこの中に仕出は品々を持ち、橋懸へ入る。喜藏「甚八さん、お前手傳ひかえ」甚八「何さ、爰の家へ用が有つて來た所」お村「私一人で間に合はねえから、主がすけてくんなすつたのだ」甚八「とんだ粹興者でござりやせうに、さア今取つた錢は、おばさんお前に渡すよ」お村「アイ／＼。やれ／＼何時でも暮方になると、混雜やつす。時にお前さんの御用はえ」喜藏「俺ア久次どんに、少し咄して

喜兵衛こなし有りて、胴巻のまゝ金を與三郎に投げて遣る、與三郎請取り思入、忠助隔てゝ。「若し人目に立ては」ト下手へ與三郎を突きやる、喜兵衛は障子を閉てる、雙方見やつてこれを木の頭。「火の用心〳〵」トよろしく時の鐘、拍子幕
與三郎は幕外に菅笠を持ち立上り、よろしく有つて、誂へ三重になり向へ行かうとする、此時揚幕より按摩出て來り、行違ひさま與三郎に行當り轉ぶ、與三郎謝るこなし、按摩捨臺詞にて幕の曳附へ入る、與三郎は右の鳴物にて、よろしく向へ入る、跡シヤギリ

九幕目　大崎久次内の場

本舞臺三間の間常足の世話家體暖簾口、上の方へ數子戸棚、暖簾口より下手へ、小間物荒物品々の棚、引出の書割、この前歯磨松緑梳油などの掛札、この前欄間より本ものの手拭地、大分下げ、この手拭と俱に金太郎の顔などつきし仕立腹掛、この下へ巻手拭地のならべし箱臺曲紐、小間物の箱ならべ、下手一間の家體前面、爰に腰障子、これへ地染手拭、小間物荒物品々紙類と記し、この脇は三尺の羽目板うちし壁、これへ天地賓、其多妙振出しの張札、いつもの所に門口、すべて品川宿觀音前久次住家の體、爰に喜藏梶原家出入目あかしの扮裝、矢立をさし、序幕に出でし噺家相生、好の扮裝、火

これ門端で犬めが吼えると、爰の家に何事かと、猶々人の思はくが。これといふも其方が可愛がるから、どうも犬めがあまえてならぬ、早く追退けて仕舞ふがよいぞ」忠助「ハイ〳〵喧しう吼えた犬は、追退けましたが。たつた一つ跡へ残りました此子犬。唯一目よう御覧なされませ」浄「いふまゝ燈火さしつける、恩愛深き縁先に、たまりかねつゝ見交はす顔。トこの中忠助燈火さしつける、與三郎此間に喜兵衛の聲を聞いて、よろしく思入有つて、此浄瑠璃文句にて相方顔見合はせる事よろしく、與三郎寄らうとするを、忠助隔てゝこなしある、喜兵衛見てこなし、兩方よろしく。忠助「旦那様、惨らしい此子狗の姿」喜兵「不憫な事とは思へども、又外の犬の目にかゝらば其身の大事、早う追遣つて下され」浄「口には言へど心には、切めて一言親と子の。ト三人よろしく思入、與三郎こなし有りて。與三「爺やァ、親父様や母さんが、嘸不孝な奴、悪い奴とも思つて御座りませうが、初は不圖した義理立から、反て此身の害となり、モウ斯うなつては仕方がねえ、みんな前生からの約束と、諦めてお免んなせえ、必ずともに恨まぬ様、お二人へ言譯してくれ、これ忠助」ト立ちかける。忠助「モシ切めて別れに唯一言」浄「無理にさしつけ障子越、見かはす顔も先立つ涙、互に何と詞さへ、出でぬ親子の別路や。與三「親父様か」喜兵「オヽ、悴」忠助「これが此世の」ト兩人よろしく思入、忠助跡より與三郎をさしつける、

るワ、ざまを見ろえ、篦棒奴」ト是を心づかひの意味合よろしく。忠助「コレお前も情ない事いはつしやるぞ。たとへ勘當しられても、育てて貰うた親御の家、其門端でそんな憎さげな詞づかひ、萬一爰に」ト此中正面の揚戸、上の方を少し揚げ、櫛の繪かきし障子を破りさし覗く模樣、少し燈火内に映ろふ事、與三郎は是を知らず、忠助此方へ向ひ。「親御達が御座つたら、わづかの間に彼の樣にも、人が惡うなるものかと思はれるだけ。お前が不孝になりますぞや」ト内の方へ向ひ。「御兩親樣御免なされて下さりませ。ありや其昔の腕白で。亂暴いふのと御赦されて下さりませ」ト思入、與三郎思はず見かへる、この中に戸少し上り、障子に少し燈の影さし、内より窺ふ體、與三郎じつと思入有つて驅出づるを、忠助よろしく止めて思入、兩人よろしく、與三郎件の風呂敷を緣先へひろげる事、件の合方時の鐘、かすめて風の音、三尺を解き、半股引脚袢などの支度よろしくする事。淨「あつかふ氣くばり耐へかね、揚戸の障子引あけて、見合はす顏は親喜兵衞。ト是にて内の障子引あけ、以前の喜兵衞顏を出す事、忠助見合ひてこなし宜しく、提灯の火に與三郎の姿を見せる心意氣、此中與三郎は脚袢などはく事。喜兵「コレ忠助よ、お主はまだ其處にゐるか」忠助「ハイ。私より旦那樣、お前さん何と思うて今頃外を御覽じますぞ」喜兵「サアそりや。今犬めが表で大層吼えた故、目が覺めて外の樣子を。

は、旅に用立つ合羽に著更。こりや親旦那が過ぎし頃、參宮なされた其時の笠を、切ては筺と思ひ、この軒下で支度して、何處へなと行かつしやりませ」與三「成程、俺が此姿形ぢやァ人目につくな、爺やァこればかりは手前が働き、有りがてえ〳〵、そんなら直に支度をしようよ」ト合方、床下座かけあひ、忠助あたりへ思入ありて、聲をひそめし心意氣よろしく、じつとなり。忠助「さうしてお前がお出のこのあらまし、親旦那樣や御老母樣へ、お咄を申上げました」トこなし、與三郎も思入あつて。與三「たとへ手前が、俺が譯をどの位言はうとも、勘當うけた俺が體、どうして〳〵二親が、何のつけに會ふものかえ」ト思入、忠助は與三郎の顏を見てよろしく思入。忠助「サアお前が言はつしやる通り、中々以ての外な親旦那のお詞。彼の不孝者めがうせをつたか。イヤそりや途方もない事ぢや、爰ら邊へまごついたら此上に、どの樣な難儀をばかけ居るか知れぬ事、人の目褄にかゝらぬ中に、手前早く行つて叩き出せ。汝も汝ぢや、それを爰へ來て、俺達の耳へ聞かす事があるものか、門端ふますも暖簾の穢れ。どこへなと勝手な所へ失せをる樣、なぜ呵りつけて歸しはせぬ、年効もない愚鈍な奴と。思ひの外に呵られましたワイのう」ト與三郎こなし、下座の合方、床とうちあはせ。與三「それ見やァがれ。俺が先から言はねえ事かえ、汝がひとり息せえはつてもどうして〳〵、エヽ可惜隙をかゝせやァが

も御苦勞樣さネ、併し私の商賣は、お蔭で餘計賣れますよ」與三「オイ湯を下つし」そばや「ハイハイ」ト湯を出す事よろしく。與三「それ錢よ」ト丼と兩方とり。蕎麥屋「これは有り難うござります。又明晩お願ひ申します」與三「早く仕舞ひなせえ」蕎麥屋「そばい〳〵、うどん蕎麥しつぽこ」ト呼びながら橋懸へ入る、かすめて風の音、捨鐘、床の合方、下座の合方あしらひ、與三郎この中四邊へ思入ありて、内の樣子などよろしく窺ふ心意氣有りて、ふり仰向き家の樣子をよくよく見やりこなし。與三「おれ一人爰へおいて、唯一目なりと親父どんに逢はせると、呑込んで往つたれど、どうして〳〵、よもや親父が會ひはしめえ。なまなかに氣がおくれる。エヽ面倒だ」ト立ちかけ、こなし有つて。「併しなア、此門口も是が見納め」ト本釣鐘、風の音、右の合方あしらひ。「ドレ此中に。ムヽ」與三「人もふす亥の子も過ぎて。」ト緣先へ提灯を其まゝおき、割竹を立かけ行きかける、縫ぐるみの犬出て吼える事、割竹にて追ひまはし、犬は下手へ逃げて入る、つか〳〵と行きかけ、提灯の燈火へ心づき、立戻り提灯を消さんとする、此中に忠助以前の形にて、小風呂敷の中へ好の品々脚絆三度笠など持つて出る故、與三郎提灯さし置き、つか〳〵と驅出るを忠助止めて。忠助「モシマア〳〵待つしやりませ、お前モウ直に行く氣であらうが、其樣な姿形では、猶更人が目をつけます。これ〳〵股引脚袢もあり、風呂敷のその中に

与三「やつぱり蕎麦にしよう」蕎麦屋「ハイ〳〵」ト緣先へ提灯をおき腰かける、この中蕎麦屋、揚笊へ蕎麦を容れ、湯を通す事、よろしく拵へする。「それぢやアしつぽこに致します」トこしらへる事。与三「汁がからけりやア湯をまはして、甘え方が可いよ」蕎麦屋「ナニ鹽梅は。吟味して上げます」トこしらへて。「へイお上りなされませ」ト出す、与三郎丼を取り見て。与三「こりやア割箸で凝つたものだの」ト喰ひながら行燈を見て。「藤の紋所で岩附屋か。いつも見かける印だア」蕎麦屋「この近所はお馴染でござります、是から四辻へ夜明まで店を張ります」ト此中与三郎喰ひながら。与三「こりやア善い鹽梅だ」蕎麦屋「どう御座りますか。イヤモウ夜鷹蕎麦とはいふものゝ、今は良い衆が召あがるから、氣を注けにやアなりませぬ。其代り元ばやりには困ります」与三「何でもそれよ」ト此中に代りする事有つて、蕎麦屋又跡を一ツ拵へる事よろしく喰ひながら。与三「オイ蕎麦屋さん」蕎麦屋「湯を上げませうかネ」与三「何時だえ」蕎麦屋「今九時を打ちました」ト与三郎が體を見て。「お前樣、夜番をしながら、時をお聞きなさるなア可笑いね」与三「エ」ト氣がつき。「それでも蕎麦屋さん、何時だといふのは、お定りの捨白だ」蕎麦屋「ハ丶丶。爰の御内では、何時でもお爺さんが番に出なさるではござりませんか」与三「その爺さんが俺に代りを賴んで、今用が有つて臺所まで往つたのだ」そばや「それぢやア代理かネ。此夜番

トこの中に與三郎忠助兩人、時廻りの心有つて上の方へ廻る、こゝで柝木を撃つ、生醉夜商人の戻りなどすべて四五人、東西より行通ふ事、縫ぐるみの犬出でて吼える事など宜しく有つて、此犬を割竹にて忠助逐ふ、仕出は禮いうて行過ぎる事などよろしく有つて、始終床と下座の合方打合はせ、與三郎忠助よろしく門口の前へ來りこなし、時の鐘。忠助「まだ旦那樣はお寐みなされは遊ばすまい、お前一寸こゝに此割竹と提灯を預けます、番の積で待つて御座りませ」與三「イヤ／＼止すが可い、却つてそりやァわるからう」忠助「ハテマァ爰に少しの中、私が一寸奥の樣子を見て參りまする、一寸待つて下さりませ」浮『何かは胸にくゞり戸へ、心あくせく入りにける。ト時の鐘、こなし有つて忠助くゞり戸の中へ入る、與三郎是非なく割竹と提灯を持ち待つて居る意、此時忠助件の揚縁をおろし、戸の内へ入る、此中に東の揚幕より夜蕎麥賣、風鈴のつきし荷を擔げ、呼びながら出て來る、犬吼えるを、與三郎割竹にて追拂ふ事などよろしく、この中に捨白よろしく。與三「なんぼこんな身形になつても、割竹で時廻を爲ようとは氣がつかねえ、飛んだ目にあはしやァがるワエ。エヽ畜生」ト犬を追ひちらす、蕎麥屋の仕出。蕎麥「饂飩蕎麥しつぽく、そばい／＼」ト呼び來る故。與三「オイ／＼可い所へ來た、一杯下つし」蕎麥「ハイ／＼。何にしませう」與三「何でも可いワ、熱くして」蕎麥「煮麵もござりますよ」

恥をさらさせるも、餘り榮譽でもあるめえから。罷にするから然う思へ」忠助「そんならアノ聞濟んで、止まつて下さりますか」與三「それもお主に免じてだ。併し斯うなつてはモウ、江戸の中には居られねえ、これから氣のつかねえ遠い處へ巢を變へようよ」忠助「オヽよく言うて下されました、お前がさういふ氣にならつしやれば。俺が思はくが御座ります。チト待つしやりませ」ト番小屋を出でんとする。與三「どこへ行くのだ」忠助「ハテお前様に餞別を致します」與三「何をいふのだ、手前に餞別を貰つてどうなるものだ」ト思入、忠助こなしあつて。忠助「コレ。是から遠方へござるお前故、贐と申したは」ト塀の内へこなし有つて。「奥にござる親御達へ、たゞ一目なとお前の姿を」與三「エ、」忠助「モシ」ト床の合方、與三郎立ちかけるを忠助止めて、又時の鐘、忠助呀く事、與三郎こなし。淨「子刻告ぐる鐘の音に、繁き往來も邂逅に、割竹曳いて走の脚、後にすご〳〵裏手より、まはる伊豆屋の表口。トこの中に忠助、與三郎へ草履を出し穿かせ、手をひき連立ち、捨白よろしく、忠助割竹を持ち、與三郎へ件の提灯を持せる事、與三郎手拭をわざと不器用に被り、共に夜番の心意氣、この中道具三方廻しにて、逆に黒塀の道具より。

本舞臺初めの道具、伊豆屋の表口の體に納る。

様にあらうと思はつしやりますぞ。それに又お前の實の父御様、母御様もお屋敷にある筈ぢやが」與三「コウ聞いてくれ、其お袋も人手にかゝつて亡くなつたァ」忠助「エヽ彼の親御も、人手にかゝつてお果なされましたとか、エヽマァどういふ事にか、親御様の縁の薄い事ぢやなァ。モシ若旦那、この爺が悪い事は申しませぬ。どうぞ俺がいふ事聞いて、名乘つて出る事はマァ見合はせ下さりませ。モシ若旦那、これ程迄に俺が、事を分けていひますに、聞分けては下さりませぬか。コレ默つて御座るは不承知か、エヽ不承知なれば是非がない、寧その事に」トこなし有りて、手拭にて我手に首を縊らうとする、與三郎慌てゝ止めて。與三「これ／＼滅相な、何をするのだ」忠助「イヤ／＼俺が詞を聞入れなくば、何卒放して殺して下され、死たい／＼」與三「エヽこれ小い時から色々と世話厄介になつたお主、さういふ事を爲して濟むものか」忠助「止めさつしやるは、俺がいふ事聞かさつしやる氣か」與三「サアそれは」忠助「聞入なくば俺は矢張り」與三「アヽこれ滅相な」忠助「そんならいふ事聞かつしやるか」與三「サア」忠助「サア」兩人「サアサア／＼」忠助「モシ若旦那、モウ生先のないこの老爺、俺を不憫と思はつしやらば、何卒名告つて出る事は罷めて下され。これ申し」淨「きゝわけて給べこれ頼むと、いふに此方もほつと溜息。與三「成程、手前がそれ程に迄言つてくれるものだから。親父やお袋に歎をかけ、世間へ

思つたに、モウ何事もこれ迄だ、名乘つて出るのが最上の分別、そこを放せ〳〵エ、」忠助「イヤイヤ、そりやなりませぬ〳〵」與三「エ、放せ〳〵」忠助「イヤ〳〵放さぬ、これ若旦那、そりやお前わるい量見でござりますぞえ」與三「馬鹿をいふなエ。これ親の首へも繩をつけ、奉公人にも難儀をば被けうよりは、男らしく名告つて出て、立派に凶狀うける心。それが何故惡い了簡だ」忠助「エ、さりとては情ない事言はつしやるの、お前今名告つて出れば、命を助かると思はつしやりますか」與三「何の命が助かるものか、惡徒の最後は斯うしたもの、行る所まで行つつけるワエ、」忠助「サ、、それが惡い、死ぬのが知れてゐる事なら、廢にして下さりませ。コレお前が今名告つて出れば、科は極つた島破、身は荒繩で高手小手、忌はしい紙のぼり、裸馬に乘せられて」浮『名もすて札の嚴しく、拔刀の槍で先拂はせ、こゝら邊を引廻される』「其時は、人が何といひますぞ。アレ〳〵見やれ、彼が元山町の伊豆屋の息子ぢや。以前江戸に居た時分は、アよい男ぢやよい子息。伊豆屋の御夫婦は果報ものと、賞めた詞の裏が來て。心一つの迷から、親も產つけぬ恐らしいあの顏は、あれが切られの與三とやらぢや、伊豆屋の子息の身の果と、謂はれ最後が其體さへ、三尺高い木のそらで」浮『大身の槍で突かるゝ苦み』「惡徒の最後はかうしたものと、お前それをよいと思はつしやるか知らねども、御兩親の其歎は、どの

袷の上へ引かけし袢纏を脱ぎ、與三郎へ著せんとする故。與三「可いワエ〳〵、打遣つておくが可い、モウ斯うなつちやァ風も引かねえ。そりやさうと、親父どのやお袋へも物を思はせ、可愛想に手前にまでも、そんな思ひをさせるのも、皆おれが心から、つく〴〵身體に愛想がつきた。今看經の音を聞き、親にも會うた心持、不思議に手前にも斯うして會ひ、これで俺も氣が濟んだ、程過ぎた其後で、こんな事がありましたと、言うて可いなら二親へ、手前の口から言うてくれよ。そりやァさうと、俺が島ぬけの事を、どうして知つて居るのだ」忠助「サア其事は今朝海老名様のお屋敷から召狀が著いて、俄に呼出し、何事かと親旦那樣が宿老方と同道で、お役所へ出た所が、お前さんのお身の上、か樣〳〵の不屆故、其方は彼が親里なれば、確に其地へ尋ね參るであらう程に、見かゝり次第搦めて出せ、若も匿しておく時は、親は固より緣者までも同罪と、いやモ嚴しいお上のいひ渡しを、旦那樣が戻る早々、俺へのお咄、モシマアひよんな事になりましたなア」與三「咄す詞に與三郎、屹と思案し駈出すを。ト與三郎始終の咄を聞き居て、この時屹と思入あつて、ソレと立上り行かうとするを、忠助とめて。忠助「モシお前、何處へござる、何處へ行かうと思ふのぢや」與三「知れた事、名告つて出るワエ」忠助「エヽ」ト縋るを與三郎思入あつて。與三「よもや俺が此江戸へ、足のついたといふ事は、誰も知るめえと

でなるといふは、よくせき薄い親子の縁。どうで彼が體軀では、島で命は終るであらう、船に乗つた日を命日と思ひ、それで營む志ぢやに依て、今日の正客は忠助其方ぢや、饗應ふ者は外にないと」淨『膳の上座に据ゑられる其苦しさ。「アヽ情ない、是がマア與三郎様が温柔しくして御座つて、嫁御でも娶らつしやれて、其披露の悦びか、初孫様の宮參り、初の節句の歡ぢやと」淨『家中が賑うて、御祝儀の赤小豆飯、御振舞の末座へなと。「坐つて喫る事ならば、嘸かし嬉しう御座りませうが、それに引かへ守育てたそのお子が、島へ行かれた今日の其膳へ。この正客にばつかりは、なりたくは御座りませぬと、俺がいへば御兩親も、理におぼしめし、何にもおつしやらいで唯しく／＼と泣いてばつかり」淨『仕出は八百屋で結構な、手を盡した本膳が。「一箸咽へ通らばこそ、毎月々々今日の日が來るのは、俺は思ひで御座るワイノ」淨『かき口說きたる繰言も、信實見えて道理なる、聞く與三郎も死がらに、しばし詞もなかりけり、忠助それと心づき。ト思入、與三郎も種々こなし有りて延つ反つ、蚊を拂ふ事などよろしく、忠助心づき。「アヽこりや氣の注かぬ、お前を捉へてわが勝手のよい事。どうも爰は溝のある爲かして、モウ蚊が少しづつ出ますワイノ。それに夜が更ける爲かひや／＼と」ト與三郎の形を見て。「お前風を引いては惡うござります、これなと引つかけてござりませ」ト

狽へとめて。忠助「アヽこれ〳〵待つしやれ〳〵、愚癡を言つたは私が不可い、堪忍して下さりませ。待つしやりませ」トこなし有つて、此中木魚の音、鈴の音聞える事。「アレ〳〵親御の安否が聞きたくば、彼の鈴の音や木魚は、お袋樣や親旦那が、碌々夜の眼もお寐らねば、奧の佛間で看經の、其お勤も後世よりは、此世のお前の身の爲を、思召してのあの回向。せめて彼の音の聞える間、こゝに御座らば二親へ、お會ひなされた樣なもの。マア下に居て下さりませ」ト思居有つていふ、與三郎もよろしくこなしある、忠助、與三郎を下に居させ。「モシ若旦那、今日は何日と思はつしやるぞ」ト思入、與三郎考へるこなし。與三「手前に言はれて氣が注いた。俺が科が流罪と極まり、彼の鎌倉から伊豆の島へ流されたは、如何樣去年の今日であつたなア」トこなし。忠助「別して今日は祥月とて、宵の中は百萬遍、同行衆を呼集め、待遇して歸すのも、皆お前の身の祈禱。其日になると大旦那やお袋樣が、座敷へ何時でも俺を呼ばつしやつて仰やるには、これ爺よ。どういふことか與三郎が、頑是ない時分から、乳母をつけてもお主に馴染み、物ごころをつけ、守して呉れたは其方ばかり。それ淺草の觀音樣、兩國の開帳よ、煙花の夜店緣日と、伴れて往くのは其方ばかり。其與三郎も成人して、男一人前になる頃に、不慮な事にて世間を兼ね、據所なく勘當中、罪を犯して鎌倉より、島流にま

と可いぢやァねえか、靜かにしやれ〳〵」ト邊へ思入して。「其島を紛失して來ればこそ、俺が育つた土地へも足踏ならず。まだ其上に今迄の、憂目に逢うた恨ある。そいつも昨夕」ト源左衞門を仕止めしと思ふ心、忠助へこなし、忠助ぎつくり。「イヤサ言ふ事はいろ〳〵ある、又俺も何彼と思ひ込んだ事も、色々あつたれど。何をいうても此身すがら、躊躇いてはゐられねえ、是から又氣を變へて、チット遠つぱしりを爲にやァならねえ。唯お主に聞きてえのは、親父さんや母さんは、御機嫌よござるか。弟の與五郎も達者で居るか、その安否を聞きに寄つたのだ」ト言うても忠助泣伏して居る故。「コレサ泣いて居ちやァ分らねえワエ、爺さんや、お袋は達者で、弟は無事で居るか、エ、コレ嘸親達も俺の事を、憎い奴だと言つて御座るだらう」ト思入。浄「いふに此方も聲うるみ。ト始終この中誂への合方へ、よき程に鈴の音ありて、跡は小さき木魚のあしらひ、忠助思入あつて與三郎に向ひ。忠助「親御の安否が聞きたいとはまだしもちや、其お心なら何故にマァ、大外れた島破、情ない事爲出つさしやつた、エヽ〳〵さりとはお前は恨しい、恨しいお人ぢやノウ」ト思入。浄「怒る眼に零るゝ涙、内には佛間に二親が、看經の聲殊勝なる。與三「今更それを言うたとて、モウ追つつかねえ咄だは。面倒だ、どうで勘當うけてる體、親父やお袋の安否も聞かずともいゝワエ。達者で居ろよ」ト往きかける故、忠助狼

れでしやつ面身體へも。此通りよ」ト膝をまくり、引つかけし手拭を除る事、忠助この中に行燈のあかりを、消したる提灯に移し、與三郎を見て思入。忠助「オヽ〳〵ヤレ〳〵慘たらしい、ア、情ねえ事を爲やがつたなう」ト思入。與三「この理由ゆゑに、此の親仁は躍起となつて腹を立て、中々江戸では寄せつけず、それで手前にも逢はねえ時宜、とう〳〵其儘勘當と、體軀ひとつを棒にふり、切られの與三と異名をつけられ、鎌倉にごろつく中。其お富といふ女をば、嚊アにして暮して居たが、又程もなく食ひ込み、こんな態で江戸へ來て、お主に會ふのも面目ねえなア」忠助「何のお前、面目ない事がござりませう。尤お前さんの勘當は、親御樣の御立腹ばかりでは御座りませぬ、それには種々。マア〳〵其事は後でお咄し申しませうが。モシ若旦那」ト與三郎へ耳語きよろしくこなし。「こんな風聞を聞きましたが。浮『耳に口。ト又呫き。眞實の事でござりますかえ」ト思入。與三「眞の事よ」忠助「エ」與三「さまでも無え事を讒訴され。そこで此身は流人の境涯、なか〳〵咄にやアならねえ憂目を見て。そこで其まゝ朽果つるのも悔しい事だと、島を破つて忍び〳〵、漸々の思ひで爰まで來たのよ」ト思入、忠助この内、聞く程悃れるこなし。忠助「そりや愈その恐しい所を脱け、あの爰へ。島紛失して御座つたか」ト當惑の思入、ハアヽと泣伏す、與三郎邊へこなしあつて。與三「コレサ〳〵、そんなに言はず

トこれにて與三郎上から出て來る樣子を見て。與三「ム、。コリヤア番小屋だな。斯うして毎晩手前が勤めるのか」忠助「イヤ然うでは御座りませぬが、何でも家持の店々から人を出して、この通り代り〴〵に勤めるので御座ります。マア〳〵爰でお咄申しまする、サアこゝへお上りなされませ」與三「可いかえ」忠助「何の氣遣はござりませぬ」ト四邊へこなし有つて、番小屋にある蒲團の塵を拂ふ事、與三郎上つて坐らうとする。「アモシ〳〵、板敷の上は薄縁ばかりで、足が痛みまする、汚なけれどこれをお敷きなされませ」與三「何の可いワ、以前とは違ふワ、これ迄の身になる迄に、種々な苦しい目に逢つたのだ」忠「いふにこなたも溜息つき。トこの中忠助、無理に右の蒲團をあてがふ、與三郎此上に坐る事。忠助「モシ若旦那、以前に變るとおつしやるが、イヤモウ變つた事だらけ。マア其變つた事の始りに聞きたいは。お前なぜ、そんな顔へ大層な疵をうけ、恐ろしい顔には成らしやりました」ト是を好の合方になり。與三「されば木更津へ預けられた其頃に。彼の土地に赤間源左衞門といふ道樂者の女房に、お富といふ女が有つて、據ねえ譯で其女をナ」トいひかねるこなし。忠助「お前其女などうか爲たのぢやな」與三「そこはマアどうでも可いワ」忠助「惘れたものだ」與三「言はれて見りやア此方が、マア〳〵少し義理のわるい譯も。そこで源左衞門といふ野郎の乾兒等が、大勢かゝつて手籠になり。そ

ト忠助番小屋へ立寄る、半助見て。半助「モウお前來たのか。今犬が吼えたつけえ、此方はどつちを通つて來た」忠助「一廻り廻つてそれから爰へ。サアこなたはマア暫く休まつせえ」半助「お前何をいふのだ、たつた今四時を打つたばかりだ、九時から代る積だ」忠助「ハテモウ可い、俺が番をするワ、貴樣はマア休みなされい」半助「夫が否だよ。さう言つてお前に勤めさせておいては。どうかすると先刻の樣にいふではねえか。俺ア九時迄勤める〳〵」忠助「これは又聞分のわるい、俺が代るといへば」半助「ハテ九時から代る積りだよ」忠助「エヽ俺が代る」半助「なぜそんな事を言ふのだ」忠助「ハテ俺が内の臺所の用は片付いた、どうで家に居た所が寐られはしねえから、今日は俺に勤めさせて下せえ」半助「さういふならどうでもいゝがの、又あとで先刻の樣にいふと否だぜ」忠助「さつきのは俺が惡い、了簡さつせえ、マア〳〵俺に替らせて下せえ」半助「色々な事をいふノウ。それぢやア俺ア八時を打つと出てくるよ」忠助「ハテマアそれも如何でも可いから。エヽ行かつせえ」トこの中半助こなし有りて、提灯へ火を點け、割竹を持ち、立つて上の方へ。半助「それぢやア一廻り廻つて行かう」忠助「アヽこれ〳〵其方は今俺が廻つて來た」半助「ハテ年寄といふものは、色々な事をいふものだ」ト割竹を鳴らしながら下手へ入る、忠助後見送り、思入有つて上の方へゆく。忠助「サア可うござります、此へお出なされませ」

から、まだ譯を知らねえも理だ、コウ爺やア、俺は與三郎だ」忠助「エ、」浮『忠助は見あげ見おろし。ト忠助よく〳〵與三郎の姿を見て。忠助「オ、さうだ、坊さん與三さんだ」ト顔を見て。「何だ、さうしてマアお前の其顔の疵は。ハ、アそんなら此間、噂に聞いたに違ひなく」與三「木更津の一件で、面も體も此通りだ」忠助「エ、〳〵情ない變り果てた其お姿」ト燈火を消す、扨はといふ心ありて、怖氣立ちし思入、あたりを窺ひ提灯を消す、時の鐘、あわてて。「マア〳〵此方へ來さつしやりませ」ト無闇に手を引張る事。與三「コレサどうするのだ」忠助「こゝでは咄が出來にくい。マア俺がよい事がござります。モシ」ト與三郎へ耳語く事。與三「ムヽつい其處か」トめりやす、この中に縫ぐるみの犬二疋程出て吼える事。忠助「エ、畜生め、提灯を消したら吼やアがる、畜生め〳〵」ト犬を逐ふ事有りて呼く、與三郎こなし有りて、天水桶の傍に忍ぶ心意氣、忠助下の方へ來る、柝木につきて三方廻しの誂に、この道具まはる。

本舞臺、眞中は九尺の番小屋板家根、よき所へ店番火の用心と記したる掛行燈へ燈火を點し、上下通し笹矢來の中より、板羽目うちし高塀、天水桶二つ程、これへ元山町裏河岸と記し、日覆より柳の釣枝、番小屋の戸一枚開きて、是に割竹たてかけ弓張を置き、以前の中助火鉢を控へ番をしてゐる、此道具納まる

と割竹ならしながら下手へかゝる、與三郎さうだといふ心意氣有つて又後へ戻りかける、忠助こなしあつて、割竹を態とひどく鳴らし行き過ぎんとするゆゑ、與三「オイ爺さん、オイ〳〵」忠助「何だ、通りへ出るのなら、先の曲角から出さつせえ、この向ふの潜りは閉切だよ」與三「さうぢやァねえ。一寸聞きてえ事がよ」忠助「時を聞くのか。まだ四時が鳴つたばかりだ」トこんな事いひながら行き過ぎるを。與三「これさ俺だよ」忠助「何だおれだ。大風な事を吐す。ハヽァ生酔か」トこなし。與三「オイ爺や。俺だよ〳〵」忠助「爺やァだ。ヘンあまつたれた事吐すな、誰だえ。ハヽァ家根富の弟の源次か、家へ歸りそびれて、お袋へ詫事してくれか。そんないゝ氣な事ぢやァねえワ」與三「コレ爺や俺だ、手前はいつも達者だナ」トこの中提灯でよくよく見て。忠助「扨は狂人か、コレ俺ァそんな汚い若い者に近付はもたねえワ」與三「エヽ解らねえ」ト側へより、邊へこなしあつて。「與三郎だよ」ト思入。忠助「エヽ」ト悄りして又よく〳〵見て。「嘘をつかつせえ、俺が育て申した坊さんは、そんな醜ねえ男ぢやねえ。アヽ俺が種々な彼の子の事を思つてるものだから、俺が氣を察して。そんな事を、併し魔のものぢやァあるめえが。一體手前は何だ」ト不審だち屹といふ、與三郎考へ、こなし有つて。與三「ムヽそれぢやァ俺が面や身體の變つた事を」トこなし有つて。「なるほど、其後お主にやァ逢はねえ

あれが本當のことならば。大事だが。よもやそんな事はあるめえ、ア、氣にかゝる事だ。火の用心〳〵」ト此筋の捨臺詞よろしく、花道より中の歩道へ渡り、提燈を持ち割竹をならし行く、この中に舞臺は靜かに道具まはる。

本舞臺三間の間、目板うち、澁塗の高塀、上へ忍びがへし、此間より植込の樹の見越、よき所に非常くゞり戸の模様、この側に箱の用水溜、これへ元山町と記したる町名札、伊豆喜とほりたる上へ、漆喰塗模様よろしく此道具になる、此間に忠助花道より中の歩道へかゝる頃時の鐘、四ツ竹の合方になり、揚幕より前幕の與三郎、好の著つけになり、三尺著流し、頬被してのそ〳〵見まはし出て來る、この中に忠助、中の歩道より東の歩道へかゝる事雙方よろしく。

與三「ア、コレ十年は一昔といふたとへがあるが。まだ漸々と六年餘り、それでせえ此近所の、大分以前とは變つた様だ」トあたりへ思入あつて。「併し變りもせうかえ、俺が身の上で知れたものだ」ト呟きながら舞臺へ來る、この中に忠助も火の用心〳〵といひながら、東の歩道を渡ること、雙方よろしく、若い衆の仕出、東西より往來ふ事二三人ありて、與三郎は舞臺にて黒塀の方をこゝだといふこなし有つて、色々見まはす思入、忠助は割竹を鳴らし舞臺へ來る故、與三郎素知らぬ風にすれちがふ事、忠助は胡散な奴と訝る事あつて、大きく火の用心〳〵

れば、頼朝公から此忠助へいひつけさしやつたも同じ事だ」所人「ハヽヽ。大層な事をいふなア」忠助「イヤ／＼笑ひ事ぢやねえテ、お役當から拍子木が渡つて、もし何事ぞあれば、其番に當つた者がカチ／＼とくらはせる。ソリヤ一同に目を覺すワ、よしか。シテ見れば今夜一晩の所は、この一町の者を寐かさうとも、起さうともマア心任せだ。コリヤ疎かにならねえ役だテ、宵の内はこなたに頼むにした所が、何にしろマア一遍廻らねえ中は役目が濟まねえ」伊之「なるほど、昔の者は義理がかたいワ」半助「それぢやア一遍廻つたら、此方は臺所で休みなせえ。九時迄は俺が番小屋へ往つて居るぜ」忠助「オヽさうさつせ／＼」伊之「わしも又色々用が有つて」ト件の鐵網の雪洞を持ち立ちかける、ト忠助此時こゝろづき。忠助「これ／＼どうしたものだ。往來へ雪洞を持出すとは。店番をする家では猶々氣を注けにやアならねえ。火の用心が惡うござる」伊之「コリヤア謝罪つた」半助「それぢやア一遍廻はんなせえ。俺等も彼處の新道から、直に番小屋へ往つてゐる」忠助「九時を打つたら俺が代るぞ」伊之「ドレ店の用を片附けうか」忠、伊「火の用心／＼」淨瑠璃『詞つがへて別れ行く。ト時の鐘、風の音になり、忠助は花道へかゝり、半助は上の方へ入る、伊之助は内の潜障子をあけて内へ入る事、誂への合方、忠助よろしく。忠助「アヽこれ何にしても今日旦那が。海老名樣へ呼つけられ、いひ渡された彼の一件。

さそんな事はお前が言つても追付かねえワナ」忠助「それでもモウ六七年前の事だ、俺が何かの譯は知つて居るから、大旦那に斯う〳〵なされる方が可いと言うたけれど、其通りしねえもんだから、今度の一件だ」伊助「サア其與五郎樣の家に御座らぬ、取込を知りながら。こなたの番に出やうが遲いと言つたのは惡かつたよ」忠助「何の與五郎さんはどうでも可いが。それよりかまだ氣にかゝることが」トこなし。伊之「エヽ」忠助「アヽ斯うなつては。後の祭だ」ト氣をおとせし思入、兩人心々に考へるこなし有つて、伊之助の方へ「さては」と思入。半助「何の事だ、そりや然うと忠助さん。今夜はの、宵の中はお前マア家の臺所も混雜だらうし、勝手に休みねえな」伊之「ムヽ。成程さうして九時を打つたら番小屋へ往つて、それからは貴樣の役となつて居るものだから」半助、伊之「それから心任せにするが可い」ト忠助考へ。忠助「なるほど然うしやうか。俺も少し今旦那へ」トこなし有つて。「何ならさうして貰はう」兩人「さうしなせえ〳〵」ト忠助考へ。忠助「イヤ〳〵たとへ然うするにしても、この夜番といふものは、疎略な役ではねえ、こりやア今度鎌倉から嚴しい命令で、銘々家持から出て勤めると極つた事だ、家の旦那もコリヤア忠助が堅い者だから、此男の役にするが可いと言つて、旦那の眼鏡で勤める役だ」伊之「そりやアさうさ」忠助「そこで先づ旦那の命令とはいふ條、鎌倉から出たお布令なれば、して見

き。半助、伊之「やこなたは其處に居たか」ト兩人こなし、忠助半助こなしあつて。忠助「コレ忠助なら忠助で可いワエ。忠助爺たア何の事だ。サア今一遍いつて見せろ」伊助「コレサ〳〵。マア可いワナ、お前の居ねえと思つて謂うたのだ。爺だから爺だと言つたらうではねえか」半助「かげでいふ事は。當時鎌倉の天下樣頼朝樣の事さへも、大天窓なんぞとやらかすではねえか、量簡しなせえ〳〵」忠助「マア〳〵さう言へば堪忍してやるがナ。いつでも俺にばかり番をさせて置くではねえか、今夜は家がちつと色々取込んでゐる事が有ればこそ、遲くなつたのだ。何時も俺よりは半時づつも遲く出張つて、九時を聞くとこくら〳〵坐睡始め、八時を聞くと白川夜船。明方には他愛なし、丁度俺と組合ふのが仕合、いつでも俺が一人で勤めて遣るのだ」半助「さう言はれりやア俺が惡いが、何時も早い此方が遲いから、ツイさう言つたのだ」伊之「マアマア理窟をいはずと可いでねえか」忠助「それでもこんな年の下の者に馬鹿にされるも」ト内の方へこなし有つて。「矢張り旦那樣がわるいからだ」トこなし、兩人は解らぬ思入して。半助、伊之「これ〳〵、そりや何をいふのだ」伊助「旦那が惡いなんぞと、滅多な事を言はつしやるな」トこなし。忠助「イヤサこりやア。此方衆も知つての通り、與三郎さんや。弟御の事で家中が亂飛亂國、とう〳〵こんな騷動になつたのも。俺が言はねえ事かえ」ト内の方へ思入。伊之「これ

よからう」伊之「これさマア默つて居さつせえ」六兵「俺は所は三田に居れど、彼所にも此家の地面があれば、この事は。やつぱり彼方でも代官所へ届けておかにやアならねえ。いづれ明日又こちらへ出張ませう」七助、若い衆「それは御苦勞で御座りますナ」皆々「そんなら明日」半助、伊之「これは御苦勞樣でござります」トテンツヽになり、六兵衛七助跡の兩人つき添ひて橋懸へ、伊之助、七助と提灯と鐵雪洞と取替へること、この中にあるべし、伊之助直に内へ入りにかゝるを。半助「これ〳〵マア待ちなされいなア」伊之「それでも俺アいそがしイワ」トいふを捉へて。半助「あの忠助殿はどうしたのだ、はやく遣してくんなせえナア」伊之「エヽこれお主も皮肉なものだ、今六兵衛さんにあの位いはれたのではないか」半助「言はれた事は言はれたが、何時も俺が少し遲く出ると、必然あの親仁が早く番小屋へ出しやばつて、今の若い奴はしつ腰がねえ、寒からうが暑からうが、年がよつても勤める所はきつと勤めるなんのと、三段目の師直を見た樣な事を言つて、若い者をせこめてならねえ」伊之「そりや誰がよ」半助「おめへの宅の師直爺が」伊之「そりやア誰の事だよ」半助「忠助爺の事だワナ」トこの中よき時分より、下男忠助好の服裝、老けたる拵へにて、割竹を持ち、伊豆喜と記したるすわうで子持筋引木番と記したる弓張提灯を持ち出て、二人が體を後で聞き居て。忠助「何がどうしたと」ト割竹で下をたゝ

より汗をかきました、殊に私は昨日の與五郎樣や、お母さんの一件を、其序に此方から旦那が發言さしやつた所が、最初にそれは筋が違ふと言つて呵られた、其跡が私へ色々とのお訊に、何だかびく〳〵して、今に胸がどき〳〵サ」若い者「とかく御代官所の事ばかりは馴れぬでは」兩人「いけぬもので御座るテナ」ト此中橋懸の方より、やつし股引の番人半助、割竹店行事といふ提灯を持ち出でて。半人「火の用心〳〵」トいひながら出て、皆々を見て。「オイ〳〵庄屋樣方はこれにお出なされるかナ」伊之「オ、お主は會津屋の半助どの」皆々「御苦勞でござるの。御大儀御大儀」半助「オイ〳〵、あの此の家の忠助爺さんは居ねえか子」伊之「今勝手元に居たつけえが、今日はちつと家も色々混雜だ」半助「混雜でも今日は店番が廻つて居るワナ」伊之「その店番の事は承知さ」皆々「大方今に出るで有らうサ」七助「こなたは組合だが不性だ、穴を埋めてやるが可い」半助「お前方がさう仰れば、どうでも可うござりますが。爰の伊豆屋は混雜な筈だ、今會所で其一件を聞きやした、家の嗣子の與五郎さんと、嫁御のお鶴さんが居なくなる、其處へもつて來て。何日か島へ流られた與三郎さんが」トいひかけるを。伊之、六兵「マ、これ〳〵、大きな聲で。靜かにさつせえ」皆々「靜かに〳〵」ト制する事、半助こなし有つて控へる。七助「時にお二人の一件は、明日仁田樣へ別に訴へる積りと致しませうナ」半助「さうさ〳〵、仁田樣なら

ながら御子息の與三郎樣には何とも彼とも」皆々「申樣もござりませぬ」喜兵「イヤモウ〳〵斯うなつたら、俺もさつぱり斷念つてしまひました、又こなさん達も、今日お役所で言渡された通り、見かけ次第搦めて出せと、後の後まで斯うした難儀をかけるといふは、詞に絕えた不所存者、これ皆の衆、彼の野良めがこの居圍にうろ〳〵して目にかゝらうとも、必ずともに囘護うて遣つて下さるな、若もの事のある時は、お前方を恨みまするぞ」伊之「そりやお氣遣なされまするな、其事は」皆々「よう心得て居ますする」喜兵「アイ〳〵何はともあれ草臥休め、茶でもあがつて歸らつしやれ」六兵「イエ〳〵、さう致しては居りますまい」皆々「お內もどうやらお取込の樣子」七助「失禮ながらこれにて」皆々「お暇致しませう」喜兵「そんなら明日會ひませう、皆の衆御苦勞で御座りました」ト喜兵衞店のくゞりへ入る、跡皆々こなし有りて。伊之「サア〳〵これから名々引取つて、內で緩りお休みなされませ、其內にも俺は昨日からの事に付、イヤモウ家中粉になりました」六兵「その御心配は御尤、私などは箕田の地面を、親の代から宿役をして居まするが、地主の事なり、聞捨にもならず、そこでお前樣方とも立合ひて、海老名樣のお屋敷へ出ましたが、左右彼所はやかましいお屋敷だてナ」七助「イヤモウちつと物の言ひ樣が惡いと、直にとつこに取つて、眼の球の出る程叱られる、私などは實は宿役は新參の事故、ぴつし

がり框など、すべて好の如く、綺麗に上の方に土藏の前面、下手に四尺程の店の脇より勝手へ通る潜戸、開閉の誂へよき所へ用水桶、これへ元山町としるしある事、すべて與三郎宅裏がかりの體、幕の内より百萬遍鐘の音、テンツヽにて風の音をあしらひ幕開く。

トこゝに六兵衛踏込を穿き、宿役人の服裝、伊之助前幕のこしらへ、七助同く宿役人の裝束、下役兩人、年かさなる者組合にて役所より戻りし體、これを伊之助が弓張提灯を持ち送り出す體、七助は鐵細雪洞を提げ、皆々立かゝり居る、喜兵衛伊豆屋主人にて老けたる拵へ、羽織著流にて幕の内にて。 皆々「南無阿彌だんぶつ〳〵、願以此功德平等施一切頓發菩提心往生安樂國」 喜兵「これは〳〵皆の衆、御苦勞でござりました」 三人「イヤモウ貴方もさぞお草臥でござりませう」 若衆「時に今日は御内にて御法事でも御座りまするか、百萬遍がござりますナ」 喜兵「されば聞いて下され、此百萬遍も彼の野良殿が、島へやられる船出の日、生死の程も分らねば、毎月〳〵今日を命日と思ふその百萬遍、親は未來の事までも思うて居るが、彼奴めは樣樣の惡業働き、今日も俄かの呼出しは、やつぱり彼奴が事に就き、こな樣方にも大きな御苦勞をかけました」 伊之「何のあなた、其御心配には及びませぬ」 六兵「年が年中お店の御厄介になります私共」 七助「この上とも何なりとも御遠慮なく、御用の筋は仰つて下さりませ」 伊之「さり

れか」ト思入、與五郎もこれに心づく事よろしく、親常書翰を見て。「未だ封目切らざる書翰。コレ」ト居並ぶ中より提灯を出す。「送りし宛名は。紅を奪ふ筆の渚へ。ム、」ト考へ。「あけを奪ふは紫の。筆の渚は正しく硯」六郎「紫石は」六郎、親常「正しく赤間の」親常「ム、。扨は風聞の」ト皆々こなし。「送りし其名は」ト又狀を見て。「ヤ。海老名彈正」ト思入。六郎「すりや海老名公より」六郎皆々「彼の者へ」親常「アこりや」ト制して。「この儀取沙汰」ト思入、チヨンと木の頭。「無用ぢやぞ」ト皆々はつと思入、與五郎苦痛の體、六郎いたはる科、親常書翰を見て考へる事、一度の仕組、きざみにつき早めし行列三重にて宜しく拍子幕。

時の鐘のつなぎにて引返す。

八幕目　元山町伊豆屋の場

本舞臺三間半、瓦葺の庇付、上の方細格子、これへ續き三間、二所へ貫木揚戸おろせし商人店夜の體、眞中の揚戸一枚あげ、この所格子になり、これへはまはり彩色に鼈甲櫛の形を描き、「御誂鼈甲品々」としろし、この下くゞり障子にて、これへ引手など誂への通り伊豆屋と記し、二階の上下白木のさゝら羽目、中一面格子窓を、上へ中分程こうりやる外へ見せ、下手にあげ緣、上下あ

の身の上」ト思入、是にて與五郎悄々とさしうつむく。親常「コリヤ面をあげい」ト與五郎顔をあげる、親常つく〴〵見やり思入、誂への合方。「ハテ曇なき汝が相貌。諺にも家に爭ふ子なければ、終に其家滅ぶるためし、なべて人の上を經書にも、孟子は性は善なりといひ。荀子は末世に性は惡なりといひ破る、是をいづれを取り何れを棄つるか。既に與三郎が所業といひ、又この者の心根も、皆それ〴〵に親なる者の教に隔はあるまじきに、善と惡との身の行ひ、ハテ分けがたき世の人心ぢやなア」ト時の鐘、こなしあつて。「コリヤ其方は、手傷をとくと手當致した上で、親許へ此方より送り屆け遣はすぞ、この儀安心致し居れ。さりながらチト其方に尋ね問ふべき仔細があれば、今宵は豊島の旅館へ伴れ參るぞ」與五「ハッ。お情厚き君の御意、いかにも御供仕りまする」六郎「さはいひながら手負ひし此者」ト思入。親常「コリヤ者共、近きに於いて用意調へ、召連れ行くべき手當致せ」皆々「畏ってござりまする」ト親常こなし有つて。親常「その方共の內跡に殘り、心靜かに手當して、直樣豊島の屋敷まで」八人「ハア丶」六郎「さはいひながら今夜のあらまし、一先當所の代官方へ申達せし其上にて、召伴られ然るべうぞんじまする」親常「イヤちと思ふ仔細もあれば屆けに及ばぬ、其儘に致しおけ」六郎「ハッ」ト此時親常袂より件の手に入りし密書を出す事、六郎見て。「シテお手に觸れし其書翰は」親常「ム丶こ

與五郎これにてム、と息吹返す科、皆々これを見て思入。與五「ム、。ハア、」六郎「こりや町人、こゝろがつきしか」皆々「心を慥に持ちませい」六郎「親常公の」皆々「御前なるぞ」トきつといふ、是にて與五郎じつと思入、本釣鐘、親常じつと見やる、好の合方、こだまのあしらひ。與五「途中の危難に迯のびる、その暗がりに深手の苦痛、氣絶致した私を、御介抱下されまする此場の體」ト邊りをよく〳〵見やり、親常へ思入あつて。「シテ君は如何なる御方樣」ト思入。六郎「在鎌倉の列侯にて、民間市中の政事職。譽田の二郎親常公」與五郎「ハ、」ト平伏せんとして苦痛の思入。親常「ア、これ〳〵。手傷の身分、差許すぞ」トいひながら與五郎が體を見て。「急所を避けし其手傷、案じる事はないぞ、心を靜めよ。コリヤ其方は何處の者、姓名は何と申すぞ、其答相ならば有體に申せ、サ、どうぢや」ト勞はり尋ぬる思入、與五郎手傷を抑へ科あつて。與五「當國武藏豊島の郷。元山町に住ひまする伊豆屋喜兵衛の忰にて、與五郎と申しまする」ト是を聞き、六郎皆々と顔見合はせ思入、親常考へて。親常「ム、元山町にて伊豆屋の忰。ハテ何等の事でか認置いた事があつたワエ。ム、、オ、それよ。其方が兄に與三郎と申す者がある筈ぢやが、親喜兵衛が勘當致し置いたであらう、さうか」與五「ハッ。御意の通りで御座りまする」六郎「其與三郎と申す者は、先年鎌倉において、海老名殿の手に搦め捕られ、伊豆の小島へ流人

親常「時も餘月に三更の、分野も納り閃めく星影。その星月夜鎌倉の、嚴命受けてかくいふ親常、世の政道の邪正を糺し、民間市中の愁訴をば、無からしめんと忍の巡檢、あれなる熊野三社の宮へ、武運祈りに旅館より、其通行に此場の體」ト六郎其外皆々へこなし有つて。「其方共何と心得るぞ」六郎「ハヽハッ。全く是なる山上にて、盗賊などに出逢ひし者が、手疵を受けし其機み、この谷間へ轉びおち、氣絶致せしものならんと」皆々「われ〳〵推量仕りまする」ト此内親常右の書翰を袂へ納め。親常「ムヽ。さもあらん。シテ手傷はどうぢや」ト此内六郎改めし體にて。六郎「ハッ深傷なれども急所をよけ、心下身内の暖り。氣脈は確かに相見えまする」親常「さすれば程經し事とも見えぬな」トこなし、近習の内より見て。三「見受けますれば血氣の若者」一「よく〳〵介抱加へし上にて」二「實否を糺明」八人「つかまつるで御座りませう」親常「イヤ手傷の上に高みより落ちたる者、苦痛を忍び耐ふる儀も、心には任すまい、何はしかれ」ト印籠を出し。「携へし此良藥」ト六郎へ科あつて。「それ。相澤六郎、彼に與へて呼びいけい」六郎「ハッ」ト印籠を受取る事、此内近習の中、上下より兩人立つて一人は上帶を解き、一人は印籠を持ち、流の水を掬ふ事、六郎笄を出し、是へ印籠の藥を引かけ、與五郎の口へ含ませ、一人は上帶にて腹を巻く事、一人は水を與へる科あつて、トヾ六郎立つてヤッと活を入れる思入、

本舞臺正面奥向に凸凹の芝山、骨組の畫心丸ものにて、是へ棕梠植ゑ、此山の上へ二段に柵、これへ所々に躑躅の花をあしらへ、榎松の立樹、赤松など丸物の高木所々に根ばかり、是へ熊笹、以前の道具より付いて上りし土堤づら、あふり返し、闇ぼかしの霞へ榎の枝を取つけ、此前へ日覆より一面の松の釣枝、上下へ高き藪疊、よき所へ木燈籠の古びしへ、王子權現神燈と記し、燈明を點じ、上下植込の見切、下の方に芝山の土堤へしらみ打ち、これへ流水の浪板、爰に王子權現神領石神井川と左右に記し、正面の啄木の木の根へ、以前の與五郎が上著の袖、好の紋つきしが、血汐に染みて引かゝりゐる事、おろし本舞臺眞中より本田の次郎親常、好の鬘割羽織大小、巡檢忍びの拵へ切草鞋、以前與五郎が銜へ落ちし密書を取上げ見てゐる立身、相澤六郎絆纏股引、割羽織大小にて控へ、以前の手負ひし與五郎髮を亂し、山の上より轉び落ち氣絶の體、この上著の片袖ちぎれてゐる拵へ、是を六郎引起せし見得、この傍に丸に本の字を篆書に記したる提灯を据ゑ、大小入りて好みの鳴物をかぶせ、見得よく迫上げ、前の土堤面へ山幕を取つけ迫上げ、道具の納りに是を切つて落す、ト爰に近習八人、揃の絆纏股引大小にて立並び、此前へ忍の箱提灯、是へ篆書にて丸に本の字を記せしを、四つ程おきならべ、この左右より紺看版の中間若い衆四人出て、上下に控へる事よろしく、かすめし夜神樂へこだまのあしらひ、誂への合方にて納る。

ぐる事あつて、與三郎鐵平の方へ行く、與三郎闇がりに源左衛門と思ひ鐵平へ突つかける白刃、鐵平身をかはせる事、爰へ與五郎入つて、過つて與三郎與五郎を一突つく、與五郎はあつと苦しみ、聲立つる機に金財布を落し、件の密書を口に銜へ苦痛を耐へる仕組に、財布を尋ねながら舞臺の谷間へまろび込む事、與三郎この内、人間違の心意氣よろしくある事、鐵平爰にて與三郎へ斬つける、兩人立廻りすべて暗がりなり、平舞臺にては、關路はこの中財布を放さず、苦しみながら二重へ匐上る事、久次暗がりに又一枷切る、關路あつと苦しみ財布を落す、關路藪疊の蔭へ轉込み、久次財布を探す意、源左衛門は二重よりおりて下の方へ、この時與五郎が落せし財布が足へ引かゝり、取上げにつこり思入、久次源左衛門思ひ〳〵の科にて、源左衛門は西へ、久次は東の歩道へかゝる事、與三郎は鐵平を二重へ追ひ上げて、源左衛門暗がりに間違へし仕組、與三郎脇差にて鐵平を一つき突く、鐵平あつと苦しむ所を押伏せ、與三郎裏むきに鐵平を刺通す、源左衛門久次兩方の花道に心々の思入、財布をもつて源左衛門につたり、久次財布を持ちよろしく科、件の匕首を持ちしまゝ兩人東西の揚幕へ逸散に入る、與三郎は鐵平を扶ぐる事、源左衛門暗がりにて間違の仕組よろしく、知らせにつき、此道具一面に迫上る。

詞、島を遁れて來るからは、どうで遁れぬ天の網、手を下すのも面倒だ、此奴が腕をたゝき折れエ、」甲乙「合點だ」ト撃つて蒐る故、かい潜りて件の竹の仕込を拔く、是に驚き駕籠の兩人はアッと云うて迯げて入る、直に源左衛門へ突いてかゝる、與三郎を突退け支へながら。源左「うぬ此上は」ト拔いて斬つて蒐る、立廻り兩人よろしく、一寸立廻つて此機に源左衛門の切拂ふ刀にて、枝にかけし自在を切る事、鍋ばつたり落ちて、ぱつと煙の烟硝火立つ、是にて月雲がくれする、暗がりの模樣よろしく忍び三重、兩人立廻り闇仕合、爰へ上の方ばた〳〵にて、以前の關路手を負ひし體にて、財布を抱へつか〳〵と迯げ出て來る、爰へ觀音久次追ひかけ出て來る、これへ源左衛門は與三郎と心得斬りつける、久次驚き身を替はせ受止める事、この中に與三郎へ關路突當る、與三郎驚き探り見て女ゆゑ掻退ける、爰へ源左衛門斬込む、この白刃關路を斬る、アッと苦しみ倒れる、この中に下手より以前の與五郎も、財布を懐中にして髮を亂し、つか〳〵と迯げ出て來る、是を鐵平追ひかけ、刀拔き持ち窺ひ出る事、この仕組の立廻り、二重の上の平舞臺と兩方へ工風あつて分れる事、久次は源左衛門が斬付けるを潜りぬけ、關路の金へ意ある仕組の立廻り、鐵平は氣を苛ち、滅多斬に斬付ける、是を與三郎は源左衛門と思ひし仕組の立廻り、鐵平こなし、この以前源左衛門密書を落す、これを與五郎思はずも取上

りまする」ト是にて駕籠の垂を上げると、中に赤間源左衛門、これを見やり。源左「この土堤にゐる毎度ゐる山あらしかと思つたら、ハヽア汝りやア新米でまだ俺を知らねえな。コレ上州はどうした。熊谷を伴れて來い、どうで通る時は遣る錢だワ」ト云つてもづう〳〵しく屈んでゐる。駕甲「これ〳〵親方を知らねえか」駕乙「あなたは赤間の」兩人「源左衛門様だワ」與三「その源左衛門どんと知つた故、駕籠を止めた新米へ。御法捨やつて下さりませ」ト思入あつて手拭を取る事、駕籠舁この中に駕籠をおろし、與三郎を見て驚く、源左衛門よく〳〵見て。源左「しやつ面の疵身體をかけ。殊に身形も野臥とも見えねえ汝が面魂、さうして汝は何處の誰だ」與三「見覺の惡りい男だ。俺だよ」源左「ヤ」與三「與三郎だ」源左「そんならわりやア伊豆の海島をば脱けて、アノ爰へ」與三「オヽサ何日が何日まで伊豆海の、それで命を果さうよりと、配所を拔出てやう〳〵爰へ」源左「さて〳〵しぶとい毛二才奴、いつかもあれ程憂目を見て、それにも懲りず島を脱け、いまだびく〳〵其態は、左程命が惜しいのか。とはいひながら二度三度、命冥加な。野郎だなア」與三「其命をば延はつて、江戸へ歸るも道を變へ、疲勞を休めた非人小家で、汝が子分の問はず語り、尾に尾をつけて罪を増し、とう〳〵此方は流人の身と、したのも汝が差略だと、殘らず聞取る返報に、疾から來るのを待つて居たのだ」源左「エヽしやらつくせえ其

闘路「放しや〱」トこの機に兩人揉合うて闘路の乳の下を貫く。「ハアー」ト苦しむ事。久次「コレ聲を立つるな。シツ〱」闘路「コリヤ私を殺してこの金を」ト思入、久次闘路を探り見て。久次「ヤ今の機に。手が外れたか」トじつと思入。闘路「アレ。人殺し」久次「コリヤモウ一寧そ」ト立廻りよろしく闘路の白刃を引つたくる、闘路手疵を押へ逃出す、久次引止め財布引出す、闘路財布の紐をとらへ、久次懐劒振上げ土堤へ上りかけ、兩人見得よく此道具ぶんまはす。

本舞臺以前の非人小屋のある土堤のかゝり、小屋へは垂を卸し、此前へ自在へ矢張り鍋かゝりゐる事此下すこしづつ燻りてゐる體、誂への通り以前の道具附の如く飾りつけあり、土堤の上平舞臺に、兩人の駕籠舁、中に客を乘せし體、棒端へ川口宿と記したる提灯を下げ、この棒端の方へまはり以前の與三郎、筵を引かけ頬被して下より支へてゐる見得、しづかなる禪の勸にて道具納る

駕籠舁「これ〱道の邪魔だワ」駕兩人「夜夜中つくな〱」與三郎「御法捨をお願ひ申します〱」トさし俯き思入、兩人息杖を入れて。駕籠甲「づう〱しい乞食ぢやアねえか」駕籠乙「中の客人を誰だと思ふのだ、何處をはし〲へ行かうが、誰知らぬ者もねえ」駕籠甲「赤間源左衛門様が、鎌倉へ急ぎの通し駕籠」駕兩人「邪魔になるワ、退きやアがれ〱」與三「さう見かけましてお願ひでござ

てはをりまするが、是はちと譯あつて、實意ある其人から、情の惠に受けたる金、一旦は預かれども、容易に遣ひ捨てられねば、それ故〳〵猶々大切に」　久次「どうで金は大事のものさ。コウお前に頼みだが、私も少し譯があつて、金がなければならぬ事が有るのだ。お前の方では容易に遣はれねえ金だらうが、此方では急になけりやァならねえ入用だ、儕が方の用さへ濟めば、お前の方へ其金は必と返す、少しの間どうぞ貸してくんなせえ」　闘路「なる程そりやァお前の方で、どの樣な入用の事があらうも知れぬが、ぢやというて此金は、その惠まれた人へ對し、どうしてマァむざ〳〵と、見ず知らずの此方樣へ」　久次「その見ず知らずの其人へ、こんな事を言出すのは、薄見つともねえが詮方つき、男が手を下げて頼むのだ」闘路「たとへ如何程頼まうと、そりや其方の勝手といふもの」　久次「されば勝手でも有らうけれど、そこが頼だ」　闘路「エヽ又してもあた執こい。重ねて言はゞ」　ト身構へる。久次「これ程いつても聞かねえけりやァ。無理にも借りるよ」　ト闘路つか〳〵と驅出すを引とめ、懷へ手を差込む。闘路「コリャ理不盡な。そこ放しや」久次「コレさう言はずと」　ト爭ふ、闘路隱し持つたる懷劍を拔き斬つける、久次身を替はせ、この手先を捉へ兩人見得よく。「そんなら刃物を持つてゐるな」闘路「さういふ汝を」　ト手を振切り突つかける、立廻つて。久次「エヽ危ねえワ。マァ刃物をば」　ト捩奪らうとする。

野郎は何者だか。オイ姉さんどうした譯だえ」 ト關路は件の財布を尋ねて科ありながら思入あつて。關路「ハイ何やら譯は分らねど、あの通りにいひ合はせ、私を捕へ無體の手籠。貴方のお蔭で助かりました、有り難うござりまする」 久次「彼奴等は悪い奴等だ。やつぱり荒かせぎと見えるワエ」 ト科あつて。「サア危ない行きなせえ〳〵」 關路「ハイ〳〵」 ト尋ねまはる科、久次も是にうつかりと此體を透し見て、一寸足許に躓く財布に手をかける、關路も是へ手をかける、兩人よろしく、關路手早く懐中して、かたへに落ちし苞へ匿したる匕首を持ち立上る、久次思入。「私は心も急けばお先へ參りまする」 ト立ちかける。久次「コウ姉さん、今のは金だの」 關路「ハイ。イヽエ」 と怖氣に立ちかける故。久次「オイ〳〵待ちねえ。一人ぢやア可危ねえぜ、定九郎ぢやアねえが、送つて遣らうといふ事よ」 關路「イエ〳〵私は金子など持つては居りませぬ。滅多な事をいうて下さりますな」 久次「それでも今の混雜に、取落したのを、俺が先へ手をかけた重みは凡そ四五十兩」 關路「エヽ」 ト思入。久次「大概そこらと知れてあるツナ」 ト關路つか〳〵と迯出すを引止め。「コレ姉さん待ちなせえ、今大勢の奴等に取卷かれた其時に、彼奴等が手へ渡らうなら、何處をどう無くなるか知れない金だ、俺が來たのが勿怪の幸ひ。そんなら俺に隱すには及ぶめえ」 關路「ハイ成程、そんなら申しまするが、如何にも金を所持致し

抱へて、是を以前の順禮、贋六部兩人、段平、子分市助幕明の悪徒立かゝり、引とめてゐる見得にて
道具納る。

關路「見れば先刻の修行者殿、最前情ある人より惠を受けてありながら、又も私をば跡追ひかけ、こりや何とする、どうするのぢや」六部△「さつきは毎度の旦那から、扱ひの錢が出た故に」順禮□「一旦あすこは見遁したが、又改めて蒔直し、それといふも」兩人「賴みがあつて」關路「すりや何者の賴みが有つて」子分段平「オヽ、其賴人は平馬樣、それ故一味の鐵平へ」市助「心が一致の此方人們が、汝の跡から」兩人「尾けて來たのだ」關路「扱は悪人山鹿毛へ、加擔なしたる悪者よな」□「それ面倒な」段平「たゝきしめろ」ト子分兩人は縫ぐるみ、順禮□、六部△兩人は關路の懷を窺ふ意、關路手を觸へさせじといろ〳〵潜り拔ける、心意氣の立廻りよろしく、此内向より觀音久次、好みの拵へ、麻裏草履頬被にて出て來り、下手に窺ひゐて、皆々關路へ立かゝる體を見て、この中へ分けて入り、一人が擊つてかゝる縫ぐるみを引奪り、皆々を撲つ事、順禮潜りぬけながら關路を引立て行かんとする、此立廻よろしく、關路件の財布を取落す事、關路はつと是にて順禮の手を振捩り取上げんとする思入、こゝを久次皆々をうち据ゑる故、皆々敵はず、ばら〳〵と上下へ迯げて入る、時の鐘、薄暗き思入、兩人よろしく。久次「何でも二人は物貰だが、二人の

は。アリヤア上總の木更津邊に居なすつた赤間源左衞門さんの事でござりますかえ」門十「オ、サ、其赤間の親方よ。此方はよく知つてゐるの、それでは近附か」與三「アイ隨分その以前、お世話になつた事もありましたよ」門十「そりやア丁度可い、知つた顏なら幸ひだ、路銀でも拵へて貰ふが可い、今に爰を通らつしやるワ」與三「そんならいよ〳〵今爰を」門十「ヤ」ト思入。與三「ム、」トじつと思入、門十不思議だつ思入、時の鐘好みの合方。「疲れてうつゝ何事も、白川夜舟で小屋の隅、青天井の草枕、まだ初物のお菰の味、筵の隙を漏る風に、ふと目が覺むれば二人の野郎、問はず語りも地獄耳。そんなら俺が此程の、憂目もやつぱり彼奴が業か」ト門十これにて扨はと科、立ちかゝるを突退け。「此奴は料簡ならぬえワエ」ト思入。門十「扨こそ汝は」ト組付くを一寸立廻つて、以前門十が使ひし竹鞘の匕首を見つけて、與三郎取上げる。「ヤイ危ねえ、それを」ト捩取にかゝる、一寸奪合ひ、この白刃を見得よく與三郎見て、思入あつて又立廻り、機に門十をポンとあてる、門十たぢ〳〵として後の藪陰へころげ込む、與三郎土堤づらの石にて右の白刃を寐刃あはせる科、時の鐘、小凄き合方にてこの仕組よろしく道具まはる。

本舞臺以前の崖づくり、辻堂の道具に戻る。ト中程より禪の勤、爰に以前の關路、菰に纏ひし脇差な

つて來た、お主に土産だ」頭門十「こりやァ有難うございます」×「さういふ肴が來ては、濁酒をごんつく奢らずばなるめえ」頭門十「買つて來い／＼。その序に土堤の内を送つて上げろ、病犬がどうもならねえ」丈助「そいつは恐れるな」×「ナニ儕が行けば眼球が魔除になりますワ」ト子分。提灯を持ち先へ立つ、非人×竹杖を持ち德利を提げる。丈助「そんなら上州」◎、丈助「達者でゐやれ」頭門十「氣を注けてござりませ」ト風の音、木魚入の合方になり、丈助◎非人×向ふへ入る、非人頭跡見送り、捨白などよろしく有つて。「やれ／＼奇特な手合だ、しかし俺も只の菰つかむりなら、斯うもしてくれめえが、俺も以前は上州者、山あらしの門十と云つては、煙つてえ男のなれの果、それで氣をつけてくれるだらう」ト貰ひし駕籠を持ち。「今源左衞門さんが通らしつたら、金の一分もくれるで有らう、食物は充分ある、貰つた肴もこの通り、どうして／＼此樂は、大名になつても出來やァ仕ねえ、三日すると忘れぬとは、よく謂つたものだなァ」ト思入、この内に後の菰垂ばらりと落ちる、内に島戻り向疵の與三郎、窶れし拵へにて、始終の樣子聞いて居た思入、門十見て。「ヤ此方は何時の間にか目が醒めたな」與三郎「アイサ。たつた今さめやした」門十「さうか素敵に疲れたと見えるの」與三「イヤモウおかげて、ぐつすりとよく寐やしたよ」トあたりへ科あつて。「モシ今ちらりと聞きやしたが、源左衞門とやらいふ人の名

鎌倉のお邸へ、少し頼まれた事もあり、夜を日についで急ぎの道中」◎「川口から通し駕籠で、追つけ爰を通らつしやるのさ、今度彼方でも相應な金儲よ」頭門士「なる程、赤間源左衛門さんといふ人は、何につけても」◎、丈助「運の強い男だてノウ」丈助「それといふのも鎌倉の邸方に、可い引つぱりが有つての事さ、モウ五六年跡の事だ、親分が世話をして置いた女をば、ちよろまかした野郎があつて、半殺の目に逢はせて、其野郎奴が體をば、相手方へくれてやり、定めし跡でおつくたばつたと思つた所、鎌倉にまごついてうせると聞き、源左衛門どんの口先ひとつで、海老名樣へ斯う／＼と吹込んだら、忽ち其野郎は繩にかゝり、憂目をあくまで見せてやるが可からうと、とう／＼其奴は流人の境界」◎「所も伊豆の離島へ流されて、さんざ憂目を見た上で、果は磯邊で寐ぐさる命、とつくに島で其野郎は、おつくたばつて終つたらう」丈助「何と可い」兩人「氣味ぢやアねえかえ。アハヽヽヽ」ト兩人思入あつていふ。頭門士「なる程、赤間源左衛門さんの勢は」子分、兩人「凄まじいものだなア」◎「今に川口からの通し駕籠で、この土堤を通らつしやるワ」丈助「大方祝儀でもくれるで有らう、待受けて貰ふが可いぜ」頭「そりやア通りさへしなさりやア、小遣を貰ふ定旦那よ」◎「時に遲くなつた、行かうぢやアねえか」丈助「ちけえねえ」ト煙管を仕舞ひ件の烏帽子箍を出し。「こりやア送つて來た手やいが振舞で、喰ひきれねえから持

主は達者ぢやナ」頭門十「オヽ加納山の親方の組子の旦那衆だね」×「こりやアお揃ひで、何處からお戻りでござります、今摺火打つて拵へた火だ、宿無の火でも汚くはござりません、一服喫んで行かつしやりませ」丈助「なる程一服して行かうか」子分◎「思の外くたびれた」ト石へ腰かけ莨のむ事。丈助「コウ見りやア乙なもので料理をして居るな」ト是にて非人頭手に持ちし裁刀へ科あつて。頭門十「これかえ。こりやア斯うさ、一昨年この土堤に行倒がありやした、それを私が取片附をした時に、廢物にならうといふ匕首を、とめておいて拵へは段々に凡そ二貫ばかりに賣つて仕舞つたが、身は今以つて此通り鞘へ入れて」ト青竹の鞘を見せ。「庖丁の代りに使つてるが、隨分よく切れますよ」子分◎「とんだ非人敵討だ」×「本名があると見えませうな」丈助「とつさんなんぞは、上州では相應に人に知られた男だのう」×「なる程。舘林から熊が谷邊で、山あらしの門十といつては、知らない者はねえ男だと、親分が咄で聞いたつけえ」頭門十「山あらしでもよんがアでも、氣の利いた化物は引込際が肝心だ」×「お孤となつて仕樣がござりません」頭門十「しかしお前方の親分の源左衞門樣なぞは、運に叶つて賣出した人ざね」×「いつでも爰を通らつしやる時は、此土堤に居る者へ、それ相應の心づけ」頭門十「この間川口の方へ逗留に行かつしやると聞きましたが、何日戻りになりますえ」丈助「昨日迄に彼地の用も片づいて、是から

な」頭門土「ハテ菜漬の香物の漬き過ぎたのを多い事貰つた中へ、鮭の頭を刻み込んで、王子で貰つて來たお餘りも一緒にして、混多煮を拵へるのだ」×「そいつは味からうワエ。それはさうと昨夜この小屋へ仲間入があつたではねえか」頭門土「馬鹿をいへ、仲間入ぢやァねえワ。年も若し、可い若い者だが身内から面をかけて疵だらけよ」×「そいつは只者ぢやァあるめえな」頭門土「されば相應に遣目のある人足だらうが、まだ宿なしに墜きつたといふ譯ぢやァねえ、遠方から路金に竭きて、夜通しに歩いて勞れはてたから、小屋の隅へ寐かしてくれないかと頼むから、可愛さうでもあり、昨夜は王子から素人に喰はせても恥かしくねえお餘りを、しこたま貰つて來たものだから、喰はないかと言つたらば。マァ何にしても寐かしてくれろといふから、其譯にしておいたら、今日永の日一日寐てゐる樣子だ。よつぽど疲れたと見えるが、何でも彼奴は江戸つ子のあがりだが、宿無の小家へ無心をいつて泊るといふは、路用に盡きたのか、併し世の中には物好な奴もあるものだなァ」×「可いワ、目の覺める迄氣儘に寐かして置くが可いワ」トこの中×は件の品を切刻み、一つの鍋へ入れる事、此内に右の鳴物になり、此事詞の中に上の方より以前の赤間の子分丈助一本差、同く子分◎汐干の場の拵へ一本差、尻はしより脚袢かけ草鞋にて、好の提灯と烏帽子籠へ入れし肴を提げ出て來り。丈助「上州、爰にゐたか」丈助◎「いつもお

本舞臺中足の高さ、棕梠植の土堤、正面よりすこし上へよせて菰張の蒲鉾小屋、この脇へ竹柱、面桶、一升徳利をこはしたる喰物入の器、梅干樽など罝並べ、此前に姿よき松の臺貫木、これへ燻りし自在をかけ、この下へ焚火鉢、この小屋の左右へ松の並木二三本づつ、この後藪だたみ、上下同じく高藪、日覆より一面に松の釣枝、舞臺前によき所へ蝕山の張物、この後切穴、爰へ冬木の梢、この間より茅萱の茂り、好みの通りにして物凄く餝付け、爰に非人頭門十、襤褸を身に纒ひ、ぼう／＼とした鬘、破れし手拭を頬被、ぼろ／＼と破れし三尺帯して、上へ菰を引かけ、非人×、同じく襤褸を引かけ、汚なき手拭頬被、兩人焚火をして自在へ鍋をかけ、この下をば焚つけてゐる、非人頭は青竹を割りし鞘へ仕込みし七首の身にて爼板にする、干葉を刻みゐる、この爼板の上へ鮭の頭のせてある事、時の鐘、木魚入の合方にて道具納まる。

非人×「オイ／＼頭、可い鹽梅に火がもえた爲か、雜炊がよく出來やしたぜ」頭門十「待て／＼、どうしてどうして、まだ思ふ樣焚かないけりやァ行かねえワ、左右宿なしの拵へる雜炊は、米も麥も方々から集めものだから、よく煮えた樣でもだまがあるワ」×「なるほどそんなもので有らう、此方はお餘りばかりで、自分で焚いて喰つて見ねえから分らねえ」頭「モウ少し煮えたら、ちつと脇へ卸してむらせて置くが可い、今俺が味え物を拵へるワ」×「コレ何の料理が出來るのだ

ト禪の勤になり、四手駕籠へ垂の上より繩を巻き、若い衆の駕籠舁二人是を擔げ、以前の藤六、百藏附添ひ駈出る、跡より下女、淸八走り跟き出て來り。淸八「惡徒奴等見つけたぞ」下女「その駕籠待つた」兩人「やる事はならぬ」ト引とめる、爰は若い衆の下男の拵へ、供男の拵へなど兩人出て。皆々「駕籠はやらぬぞ〳〵」藤六、百藏「やかましいワ、邪魔をひろぐな」下女、淸八「イヤ遣る事はならぬ」ト立廻り引戻す事、混交の立廻り、下女淸八駕籠をとめる、若い衆の供兩人もとめる、仕組よろしく、是に藤六百藏さゝへる事、爰へ赤間子分助八走り出て、淸八下女を拔刀にて追拂ふ、これに耐らず供の一巻逃出す、早めし鳴物よろしく。惡者皆々「そりや駕籠を行れ」駕籠舁「合點だ」ト舁出でる、所へ以前の與五郎、鐵平と爭ひ出て、皆々をかきのけ駕籠をとめ。與五「その駕籠やらぬ、マア待つた」丈助「ヤ。先刻の二才め」皆々「又うせたな」與五「平馬に黨せし惡徒ぢやな」鐵平「オヽ知れた事ぢや、邪魔をひろがば命がないぞ」與五「何を小癪な」鐵平「それぶつ締めろ」ト縋りつく、與五郎を藤六百藏引とめる中に、丈助は駕籠につき橋懸へ入る、與五郎を突退け、兩人も駕籠へつき橋懸へ入る、鐵平與五郎へ縫ひぐるみにて擊つて蒐る、潜りぬけ立廻る中に、懷中より以前の橐を落す。「ヤ慥に金を」ト是を聞き與五郎拾つて、懷中して逸散に橋懸へ入る、是にて知らせにつき此道具ぶんまはす。

御座りますワイなア」與五「そりやどうした事ぢやぞいのウ」下女「サアお聞きなされませ、今御老母樣やお鶴さんと御一緒に、地内の餝物を御見物なされてお出遊ばす所」清八「俄に騷ぐ大勢が、喧嘩々々といふ故に、御老母樣へ怪我をさせ申しては濟まね故、附添ふ者が手を引き申し、山續きに一手は迯げぬけ」下女「お鶴樣は猶以つて危いと思ひまして、清八殿の計ひで、お鶴さまをば駕籠へ乘せ、子僧殿や男衆が附添うて、漸く裏手へ迯げる所」清八「大勢の惡徒奴が一度に來て、駕籠に附添ふ者を逐討に、駕籠舁もぐると見え。何所をどうか雲霞」清八、下女「かついだ儘に迯去りました」與五「ヤ、、。お鶴は兎も角も、母者人にお怪我が有つては猶々濟まぬ」兩人「すこしも早う御座りませ」與五「オ、合點ぢや」トばた〳〵になり、此時上の方にて喧嘩喧嘩と人聲よろしく、與五郎上の方へ走り入る、川水の音、時の鐘にて前の道具引いて取り、淺黃幕を切つて落す

本舞臺三間の間、五尺許の高さに土堤前面の張物、尤も凹凸の赤土へ叢の書割、物凄き誂へあつて、眞中より上へ畫心に丸太、埋込の段々、此上に古びし辻堂、土堤の上へ一面の二重に柵、向ふ竹藪、上下植ごみの見切、日覆より松の釣枝、古びし石の榜示杭へ「板橋辨天道」と記してあり、道具納まる

取るまいと申したを、どうあつてもと御返金下されて、お預り申した金子の高。恰度太々講の預り金、私が今こゝに持つて居れば、これを幸ひ半を分けお渡し申すのも今の御身分、お前樣のお心を感心致して、御用に立てば何卒御辭退なされずと。お遣ひなされて下さりませ」トあたりへ思入あつていふ。關路「それ程に言うて下さるを、無下にお斷り申すのも」ト取上げ。「とはいひながら大枚を」與五「ハテ人の目褄にかゝらぬ中に、早う納めて下さりませ」關路「チエ、忝なう存じまする」ト思入有つて懐中する事、この時上の方にてばた〳〵の音する故。與五「物騒がしいあの人聲。コレ」ト囁き。「早く爰をば」關路「ハイ〳〵」ト科あつて笈摺を脱ぎてこなしあつて。「左樣なれば與五郎樣」與五「御用も御座らば我等が店まで」關路「おさらばで御座りまする」トこなし有つて、時の鐘浪の音になり、橋懸へ走り入る、與五郎こなし有つて。與五「思ひがけない關路殿にお目にかゝり、始めて聞いて驚く事ども、左近殿には御切腹。ア、これにつけても兄者人與三郎樣は、未だに伊豆の島守の、憂目に逢うて御座る事か。モウはや此世を去られしか、それといひ是といひ、如何なる宿世の因縁ぢやなア」ト思入、ばた〳〵になり、上手より伊豆屋の下女、雪踏がけにて、以前の手代清八、尻端折にていきせき走り出て。下女「若旦那與五郎樣」與五「エ、けたゝましい何事ぢや」清八「何事所か大騒ぎ〳〵」下女「大事で

も其儘永の御暇、無念に送るこの年月、御推量なされて下さりませ」與五「今日が日迄も夢いさ
さか、存じもよらぬ其大變。尤も小笹様には鎌倉でお目にかゝり、彼の香爐の質請の其折から、
お取替申せし五十兩の其金は、私が和泉屋へ逗留の其中に、御持參なされてどうあつても、返
金すれば受取りくれよと、金を差置きお歸りある。私の意では、義理のある兄の血筋の家へ、
聊かなりとも貢ぐ意と思へど、そこは武家の一轍、それ故に打過ぎしに、唯今貴方に承はれ
ば、兄與三郎殿が血を分けし貴方の夫の左近様は御切腹なされし上、穗積の家は滅却とは、言
はう様なき世の浮沈。思へば〳〵殘念至極、シテ未だお目にはかゝらねど、舅御の隼人様は」
關路「御同道申す途中にて、迷ひし道にはぐれしかど、志すその先は此吾妻路に二ヶ所の知方、
それを尋ねて足を留め、お出あらんとそれをば便に」與五「ハヽア頼もしきお志、貴方は他家よ
り御緣組なされし御身でありながら」關路「ひとたび緣を組むからは、夫の家へ立つるが貞節、
女子の常でござりまするワイなア」トこの中に懐中の胴卷より五十兩包二つ出し、手早く一
つを關路へ差出し、あたりへ思入して。與五「モシこの金を御用に立てて下さりませ」關路「ア、
イヤ〳〵。聊か路用の貯へは御座ります、どうしてマア滅相な、多くの金をこなた様から、こり
やマアそちらへ」ト戻す。與五「ハテ此金は先達つて、小笹様に御用に立つる其時に、逢つて受

出なされたお屋敷の」ト惘れし思入、與五郎こなし有つて。與五「アヽこれ〳〵淸八、お主は。私が爰へ來た事を、母樣やお鶴にもさう言うて、何か又用もあらう、儕は今に別當所へ行つて、講中の衆にも逢つた上、海老屋まで行く程に、その積でお主は先へ」淸八「ハイ〳〵畏りました」與五「早う行きやれ〳〵」淸八「それぢやァお先へ、貴方御ゆるりとお出なされませ」ト早足に上の方へ入る、與五郎邊りへ科あつて。與五「もし。どうした譯で此お姿で此地へお越しなされましたな」ト關路もこなし、合方になり。關路「お尋ねに預つて、斯う〳〵いふ時宜ゆゑにお尋ね申すも今更に、申上ぐるも涙の種」與五「シテ貴方の舅御隼人樣はじめ、兄與三郎殿の實の母御、小笹樣には何ぞお變りでも御座りましたか」關路「鎌倉と東とは近いというても國も隔たり、御存知ないも御尤、母人小笹樣には、奧樣のお執成で閉門の其中も、寶詮議のその爲に、鎌倉へお上りなされ。其折からはお前樣にもお心添で、首尾よう手に入る眞鶴の香爐を、一度下總の御館へ持歸り、殿の御覽に入れし上、禁庭へ獻上と事極まり、本國へ持參の途中にて、母樣には人手にかゝりて敢なき御最期とげられました」與五「シテ何者の爲業にか、手がかりでも御座りまするか」關路「サア是ぞといふ證據もなく、取得し寶は人手へ渡し、重々の失策とあつて、私が夫左近殿には言譯なさの御切腹、知行は其儘召上げられ、お年よられし舅御樣、妾

預る旦那が、堪忍してやれと云はつしやるから」△「了簡して遣るが可い。コレお主達も料簡しやれ」○「仕方がねえ、料簡してやりませう」□「コレ新米、この近所へ來て俺達が商賣の邪魔をすると聞かねえぞ」△「旦那のおかげて助けるのだ」四人「幸福な奴だなア」ト皆々橋懸へこなし、時の鐘になり入る、關路始終さし俯き。關路「誰方かは存じませぬが唯今の難儀、お救ひ下されまする御恩の程、有がたう存じまする、なか〳〵お禮は詞にも盡されませぬが。又あの者がこれへ參らぬ其内に、妾は爰を立去りまする、重々の御厚恩、御縁もあらば又其中お目にかゝりゆる〳〵と、お禮申すでござりませう、眞平御免なされませ」ト顏見せぬ心意氣にて禮いうて上の方へ行かうとする、この中與五郎清八こなたの床几にかけゐる、關路へ科あつて、關路ゆきかけるを。與五「アもし〳〵お女中」ト呼びかける、關路又行きかける故。「コレお女中樣、一寸お待ち下さりませ」關路「ハイ」。トもじ〳〵科あつて。「御用でござりまするか」トとまる。與五「お姿は變りはてたれど、正しくあなたは」ト考へ。「其以前元山町へ一兩度、御邸の御用が表向で、お尋ね下されました關路樣ではござりませぬか」關路「お目立ちまする上からは、お隱し申さう樣もない、如何にも穗積左近が妻、かゝる姿でこのお目もじ」。トあたりへ科あつて。「お恥しう存じまする」清八「なる程貴方は過ぎし頃、與三郎樣がまだ内を外で御座る頃、お

法があるかは知らぬが、何をいふも修行者の勝手を知らぬ故の事、マア料簡して」口「イヤ料簡ならねえ」四人「錢を出せ〱」ト此爭ひの中に向より伊豆屋與五郎、羽織著流し雪踏がけ、跡より清八手代の拵へ、棧留の袴、風呂敷を持ち出て、舞臺の樣子を見ながら早足に來り、宜しく見兼ね止めて清八へ囁く事。清八「ア、これ〱、女を捉へてどうしたものだ」與五「見れば其方達は每もこの往來へ並んでゐる修行者ではないか」口「オヤお前さんはいつも手の內を下さる」四人「旦那でござりますね」ト悄氣る、この中關路、與五郎を見て恥かしき體に顏そむける事。清八「何だか知らないが、見りやア新米の修行者だ」與五「可愛さうに料簡するが可いワ」口「そりやアお前さんのお詞だがね。こんなべん〱ら物を著て居ながら」今「私らが出張る場所へつかつかと踏込むから」兩人「商賣の邪魔になりますワな」今「それだから仲間入の錢を」四人「出させるつもりで彼是いふのさ」トこの中清八こなしあつて錢を二百出して。清八「コレ〱今日へ旦那がお通りかゝりなされて、料簡しろと仰しやるのだ、譯は何だか知らないが。サア是をもつて早く彼方へ行くが可い〱」口「それぢやア旦那がこの新米に」四人「肩を持つてかえ」清八「何で旦那が肩を持つの腰を押すのといふ譯ではねえ。通りかゝつて止めさつしやるのだ、それを持つて行けといへば」ト是にて順禮皆々へ科あつて。口「しかたがねえ、每度御法捨に

座います、そんなら邪魔のねえ中に、喧嘩仕掛で一方から」鐵平「おつ片附ける手筈は道〳〵」丈助「みんなも一緒に」鐵平「サア來やれ〳〵」ト雙盤太鼓になり、皆々上の方へ入る、ト橋懸にて。大勢「歩みやアがれ〳〵」ト早めし大拍子になり、橋懸より左近妻關路、窶れし拵へ、好の著つけ後帶、上へ坂東札所の笈摺を引つかけ、これを□老けたる女順禮の拵へ、△同じく贋六部の形、若い衆×〇二人襤褸非人のこしらへ、縫ぐるみを持ち、□△、關路を引立て出來り。□「コレ〳〵姉さん、言譯をしても駄目な事だ」△「順禮の形でゐるからは、貰溜があるに違ひねえ」四人「早く出して仕舞ひなせえ〳〵」ト口〳〵にいふ故。關路「これは又無體な事、妾は人の門に立ち合力受けし覺えもなく、往來で袖に縋り施行貰うた事がなければ、貰溜とやらいふ、其樣なお前方に取らする錢はござらぬ、滅多な事をいふまいぞ」□「何だ此奴は大層大風を吐すからは新米だな。そんな美しい新米乞食が、この邊で稼がれては俺達の咽がひるワ」△「その拵へで貰溜がねえとはいはせねえ」四人「早く出せ〳〵」關路「又しても無體な事、なる程順禮姿をして居る故に、さう言やるも尤ぢやが、妾はチト譯があつて。サア信心故に坂東の札所へ參詣をする者ぢや、修行して通る者ぢや御座らぬワイの」□「御座らうが御座るまいが、順禮の形で居るからは、おいら達が仲間へなぜ挨拶をして通らねえ」四人「なぜ仲間入の挨拶をしねえのだ」關路「その樣な

くも明後日迄には、金さへ手取れば平馬樣へ」鐵平「きつと賴みますよ」ト此中香爐を仕舞ふ事。丈助「さうして今道具屋さんが、面倒な奴に逢つたといつたは」長九「ナニ外でもねえ、私が以前奉公した主人の息子を見かけたからさ」段平「さうしてお前が」四人「主人といふはえ」長九「されば元山町の鼈甲商賣、伊豆屋の家の私は番頭」丈助「そんならお前はその以前、伊豆屋の家に奉公を」長九「左樣さ、惣領息子は大の道樂、とても末始終長い正月はあるまいと、私が方から伊豆屋を見かぎり。今は氣樂の道具屋商賣。所が惣領の與三郎は、色々な事がたゝまつて、伊豆の離島へ流し者、そこで否應なしに弟の與五郎が、伊豆屋の跡式を丸どりで、りうと極り、この權現樣へ太々講で參詣に來た樣子、顏を見合せても面倒ゆゑ、そこで今の頰被り。時に私は平塚の邸へも用を抱へてゐやす、どれ急いで行きませう」鐵平「それぢやァ香爐の一條は」長九「ハテ呑込みやした。そんなら皆さん」鐵、丈「長九郎殿」長九「ゆるりとお出なされませ」ト右の鳴物になり上の方へ入る、跡にみなく殘り。鐵平「今道具屋の話では」丈助「そんなら伊豆屋の與五郎も」鐵平「おつつけ爰へ來るどの樣子」段平「それぢやァ迂濶に彼の女を」婦六「引ぱらう」四人「手つがひが」鐵平「たとへ與五郎がうせるとも、邪魔をひろがば彼奴ぐるめに」丈助「さうしてお鶴の其外に、かの話の女が形は」鐵平「それも此方に見覺が。コレ」ト丈八へ呼く。丈助「ムヽよう御

爐を出しかける事あつて。「こなたに逢つたらくれ〴〵も、此節金が入用故、早う捌いてくれろといはれた、どうか働いて貰ひてえ」長九「それだといつてこんな賣物は、さう性急に行く譯の者ぢやアねえ」ト箱に入れしを出して見せて。「この通り何所へ往くにも持つて歩くが、斯う預つて居るかはりには、平馬様の方へも、十五兩といふもの、私が金を用立つてありますワ、賣捌きさへすれば、直々跡金をあげますワエ」丈助「さうして幾程に賣るつもりだえ」長九「本當の相場にする時は、三百兩が四百兩といつても、隨分にくゝない大名道具、しかし世間では不向な品、急に金が入用ゆゑ、ばつたりに百兩に賣つてくれろと言はつしやるから、マア百兩なら手放す積さ」鐵平「これ〳〵積りばかりで居ても、賣れないではつまるめえ」長九「サアそこで方方と見せたらば、是非〳〵買たいといふ人がありやす」鐵平「そんなら鶴の香爐を」皆々「百兩に買ふ人が」長九「きつと有るね、間違なし、しかし首尾よく賣つた其時は、私が貸した十五兩、差引いた上できつとした口錢は貰ふ積、そこに間違はありますめえネ」鐵平「そこは平馬殿に掛合はつせえ、左に右急に金が入用、何分早く賣拂ふ算段が肝心だ」丈助「シテ買人は侍か町人か」長九「ナニ大した人ではねえが、必ず外々へ渡してくれるな、是非買ひたいとかた〴〵の約束、金の算段さへ出來る時は、今夜にも譯がわかりやす。今日その人にも逢つて來ました、遲

人をなすつて、何時頃から此方の方へ」鐵平「されば國元木更津は元より、鎌倉迄にも當分は、ちつと面伏の譯がある故、身よりを尋ねて武州の熊谷土堤。四郎頭の世話になり、鄕士浪人の仲間へ入り、流れわたりて川口の、鑄鍋の釜六が組下で、名も改めて踏鞴の鐵平といふ長脇差。今度赤間源左衛門殿が、あの島へ御座つて、同道されたあの平馬は、廻り逢つて見れば昔は朋輩、色々の話も合つて、それから今度鎌倉へ身を落つける積だての」文助「なる程人の行末は」皆々「妙なものでごんすの」トこの中橋懸より、序幕の手代長九郎、道具屋の形に拵へ、小風呂敷を脊負ひ頰被して出てくる、鐵平皆々見て。鐵平「ヤおぬしは道具屋の」子分皆々「長九郎どんではねえか」長九郎「ヤ鐵平さん、赤間の子分の衆、此頃はツイかけ逢つて」トいひながら頰被をとる。文助「何だお前もこの暖かいに頰被とは」皆々「どうしたのだ」長九「ナニ今あそこで面倒な奴に逢つたからさ」鐵平「面倒な奴とは俺がことではねえか」長九「ナニとんだ事をいひなせえ。お前方に何の遠慮が」トこなし有つて床几にかける。鐵平「時にこなたどうする積だ」長九「どうするとは何の事を」文助「コレサしらを切んなさんな、平馬樣から賴まれた事が有らうがな」長九「ム丶、彼の香爐の一件かえ」文助「是々此方に逢つたら催促しやうと思つた所だ、可い所へ來さしつた」長九「可い所とはえ」鐵平「ハテ平馬殿がおぬしに」ト懷中より袱紗に包みし香

〳〵」段平「この大きなもので始めよう」皆々「やらかせ〳〵」トこの中に酒屋の亭主、燗の出來し大徳利、下物の鉢を持ち出て。亭主「サア〳〵お誂へのお下物、御酒も五合一時にお燗をつけました」段平「オツト。奇妙〳〵」皆々「サア〳〵やれ〳〵」ト是より皆々酒宴の模樣よろしく。丈助「時に川口の兄弟分、お前いよ〳〵今度は俺が親分の源左衞門さんと一緒に、鎌倉へ往かつしやるかえ」鐵平「されば、是からは鎌倉へ同道して、源左衞門殿にも世話になり、お主達にも入魂をば結ぶ爲だ、快よく飲んで下さい」丈助「そりやァ有難い、左右一人でも友達が多いのが氣が丈夫だ」藤六「マア鎌倉へ行つて見なさいまし」四人「又格別でござりますぜ」段平「時に鐵平さんは、元は侍のあがりだと聞きやしたが」四人「眞實の事でござりますかえ」丈助「眞の噓のと言つて、主はやつぱり下總の、千葉の家の知行取だ」四人「スリヤア始めて聞きやした」鐵平「斯う心易くなるからは言つて聞かせるが、國に居る時分にはかけちがひ、源左衞門殿を初め、お主達にも近づきにならなんだが、此方衆が懇意を結んでる山鹿毛平馬とは我等は朋輩、あの平馬が浪人した其時に、こつちも屋敷を梵天國よ」市助「それぢやァ平馬さんとは、のがれない間で御座りますね」百藏「それで何かの話も合ふといふもの」藤六「今賴まれた一件も、なる程山鹿毛殿へは友達の好みがひ」段平「かうありさうな」四人「ものだてなァ」丈助「しかし主は浪

木の頭、千鳥大分浪間より日覆へ立上り千鳥笛、日は段々と高く升る。「ありがてえなアレート
嬉しき科、是をきざみ、すべて一度の仕組、一聲浪の音にて宜しく拍子幕、跡シャギリ

七幕目

飛鳥橋の場
平塚道辻堂の場
王子土堤非人小屋の場
親常巡検の場

本舞臺上の方に一寸したる橋の欄干、この傍に對の奉納の石燈籠、臺石の上へ、此傍に稲荷大明神と記したる石塚、これへ續き川端の駒寄、是へ朱塗の開帳の提灯を立てあり、下手に酒肴いろいろと記したる看版障子、床几二脚直し、後一面の淺黄幕、日覆より好の釣枝、すべて王子道飛鳥橋の模樣、こゝに鐵平一本ざし、田舍道樂者の拵へ、丈助同じく二幕目の役、赤間の子分段平、藤六、市助、百藏同じ役にて、外に若い衆の茶屋男の若い衆、酒肴の道具酒宴の體、双盤太鼓にて幕明く

丈助「サア〳〵皆が思ふやう飲むが可いぜ〳〵」四人「さう言はねえでも、たらふくに吸込んだ」鐵平「時に飲むのは飲むとして、彼の頼んだ一件は、兩方ともに手筈は可いかえ」丈助「そこに間違つこは御座りやせん。サア〳〵鐵平殿が振舞だ、モウ一つづつやるが可い、飲まつせえ

「この手紙の文體では、千葉家の重寶眞鶴の香爐、盜んで江戸へ身を隱し。海老名の郡司へ知らせの手紙。うぬが名前を匿すからは」ト手紙へ科あつて。「手紙の主は胡散な奴だ。此奴は可い物を見付けたワエ」ト思入、浪の音生殺よろしく、是にて手紙巻納めて油紙へ包み、腰へ纏ふ思入よろしく、この中に向ふの日の出、二分半か三分通り上がる事、さし金の千鳥飛びかふ、與三郎思入よろしく、この中道具の後にてうんじやうなる節付かすめて船唄きこえる仕組。

船唄『やら〳〵目出たのヤア、山も見えけりゆたかな帆、幾十かへりの湊入り、ヨノオ」ト欸冬でかぶせ浪の音のあしらひ、與三郎こなし有つて。「ヤ風のもやうか聞える船歌。この邊りをば渡海の船が。ムヽ。それと見たなら便船頼み、どこぞの湊へあがつた上で」ト是にて日の出へ心づく仕組なり、宜しく日の出へ科あつて、浪の手摺へ日の影うつろふ仕かけよろしく、日の出へ與三郎じつと科。「オヽあれ〳〵日の出が閃くこの浪間」ト早めの樣な合方、浪の音。「今の夢では爲朝が放した鶴に巡りあひ。又手紙では眞鶴の香爐の在所が知れるは正夢。その幸先に日の出の吉相」ト是にて向ふ揚幕の方に鳥笛。「朝日の影によく見れば。彼處は下田。相摸の浦々」ト見渡し嬉しき思入よろしく浪の音、右の合方、日の出の方へ指さす心いき有つて。「東はやつぱり故郷の江戸。天道樣は」トうつかり立上り、よろ〳〵としてどつかり坐す思入、

宜しくあしらひ、鼓コイヤイ、この中こなし、窓蓋あけ明くする事。「ア、有難い、少しは靄が霽れるワエ」 トこなし、浪の音になり、幕明の油紙に包みし件の狀箱、さしがねにて舞臺の浪、手摺の中へ漂ふ、與三郎これを見て。「はてな、何だか爰へ流れて來るが。ハヽア金比羅へあげた神酒樽か。何だか取揚げて見たい物だ」 トこの中浪の音、段々近よる事、岩角へつらまり、手を伸ばし取揚げる事、浪の鼓のあしらひよろしく取あげる、この中波の潮煙はれし意、かざし見て。「こりやァ狀箱だ、油紙に包んで有るが、こんな物が流れて來るからは、船の往來のある所だ。何だか中をば」 ト岩角へすり附け染繩を切る事、尤も透し見て手探の心意氣、油紙を拔き箱をあけ、中より封狀を出し、波あかりに翳し見て。「こいつは唯の手紙ぢやァねえ。アア讀んで見たいものだ」 トこの中浪の音、始終好の合方有つて、向ふ正面岩山のかげより少しづつ紅絹張の日の出をあげる事、これにつゞき明くなる意。「ヤこりや夜が明けるワエ」 ト思入あつて拔き見て空へかざし抔して讀取るこなし宜しく。「飛札を以て申送り候ふ。我等事彼の香爐を隱し持ち、暫く武藏に身を忍び候ふが、何れ當秋迄には其地へ發足申すべく、就いては其眞鶴の香爐、彈正公には兼ねて御懇望と承り及び候ふ、鎌倉表へ飛越し候ふ上獻上申すべく、我等が身分の御吹擧偏に頼入り候ふ。海老名郡司樣へ。某より。ム、」 ト思入あつて、

の模様、大どろ〳〵にて淨瑠璃より道具段々に變り、よろしく納ると、此大どろにて金張の心といふ字を、日覆より巖の影へ引いて取ると、爰に以前の爲朝好の著附、繩の帶、月代伸び窶れし體、實は與三郎にて脫島の模樣、巖石の上に眠け覺めし體、かすめて本釣鐘、ボツト思入あつて。

與三郎「ヤヽ。今のは夢か。とんだ話だ」ト思入、これを誂への合方、鼓のあしらひ。「鎌倉にゐた其時から、數へて見れば三年越、身の錆からとはいひながら、海老名の屋敷に捕はれて、有る事無え事無實の罪、言立てられてすんでの事、由井が濱邊に獄門の、臺座のわかれが又助かり、沖の小島へ流されて、藻屑を刈込み漁の、その伊豆海の境界は、死ぬには勝る苦しみと、故鄕の空が懷かしく、島を脫出た丸木船、漂ふ波に碎かれて、打上げられた岩の上、命の綱と縋附き、疲れて眠もわれ知らず、姿はあり〳〵爲朝が、廻り廻つて女護の島、初夢ならば富士二鷹、似ても似つかぬ俺がなり。なんぼ家名が伊豆藏でも、かたちに伊豆の御曹司、爲朝樣たア惘れけえるワ。夢は五臟の煩ひとは、大方爰等であらうよなア」ト思入、浪の音生殺し、邊りへ科あつて。「ア、何だか箆棒に寒くなつた」ト邊へ科あつて。「船は碎けて搖流され、取著いてゐた板子さへ、どうかして仕舞つた」トあたりへ思入あつて。「一體こゝは何處だ知らん、さつぱり分らねえ、平一面汐煙、せめて方角を知りたいものだ」トこの中浪の音、千鳥笛など

歳か萬代も、妹脊は味な鴛鴦の、衾の裡へ入り給ふ。ト皆々よろしく、爲朝梅薫女正面の家體へ入る、緞帳おりる、爰へ喜平治小藤龜菊殘る。喜平「まづこれで淨瑠璃の役目が濟んだ」小藤「御苦勞さまで御座りました」龜菊「マア御酒なりと上げませう」喜平「どうして〳〵、爰は女護の島、うつかりしては居られねえ、どれこの儘に」ト立ちかけるを兩人よろしくとめて。小藤「イエイエ爰へござんす殿達は」龜菊「モウ〳〵餘所へは遣らぬぞえ」トとめる事。喜平「これは迷惑な」兩人「滅多にこゝは歸さぬワイなア」淨「稀に北風よい南風、吹くとは嬉し二人して、みつ懐の戀中の、嘘にも浮名巽なら、緣は異なものいなさ東風、色の憂世ぢやないかいな。ト小藤龜菊兩人、手踊り模樣に止る事、喜平治あしらひながら迯出る仕組よろしく。淨「踊る振にて迯出す、跡を慕うて。ト三重にて喜平治橋懸へ入る、跡兩人追つかけて入る、これにて太夫座を消し、浪の音トヒヨになり、以前の鶴黑塀の内より日覆を引いて、向ふ正面へ引いて取る、大どろどろにて道具居所にてかはる。

本舞臺眞中に誂への岩組丸もの、この周圍へいろ〳〵の海藻磯草生茂り、岩間より蘆の茂み、この前高き浪手摺、一面に舞臺前に浪布、正面の後奥深に三の手まで段々の書割、棧敷前東西水引をあほり反し浪の水引、向ふ正面一面に浪手摺、これへ遠山茂りし坂の引出、すべて伊豆相摸の沖、巖が崎

つて押寄せつらん、なんと〳〵」喜平治「ハア、」浮 されば候ふ、そろ〳〵と三つ合せてさん候ふ。ト喜平治こなし有つてノリになり。「君が弓勢軍略に、恐れ戰く弱蟲ども、とても手勢で敵はじと」浮『わけも白浪風來戎、まつくろ黑船とび乘も、集めて四十八束寧、一眼國は足長へ、肩を車に遠望の目配、しのぶ黑子へ長臂のかけ引き、喇叭ちやるめら銅鑼太鼓、鬨の聲々蛇味線も、オツトセイ、蝦夷松前のお方でも、心にふたつは何の彼是、六百餘騎を、物の數とも手練の礫、八方十方も投げつけうちつけ、腹穴つん貫き大人これ〳〵膝の皿、こいつア耐らぬ、蛛蜘の小人を散らすが如く、島の四方へ迯散つたり。ト喜平治よろしく振あつて。「其勢に寄手の奴原、殘らず討取り候らへば、御心やすかれ爲朝公」浮『島に手柄を高島や、乘地でしやべりするてけり。　トよろしく思入。爲朝「ホ、オ勇ましゝ賴もしゝ、出來した〳〵」浮『よろこび給ふ中空へ、羽を伸し渡る鶴の聲。　ト風の音トヒヨになり、誂の鶴、足に黃金の札をつけしが日覆より飛かふ、皆々見て。　喜平「ヤ、又も此土へ飛來る丹頂」　梅葉「まさしく君が」　小簾、龜菊「仰せのあつた」　爲朝「うるまの國より持歸る覺えの鶴が、亦候や南を指して飛行く體」　喜平「君の御座所を指示するしらせか」　小簾「イエ〳〵それはお二方の、妹脊を壽く」　小簾、龜菊「めでたい知らせ」　爲朝「とはいへ奇異なることの振舞」　ト立ちかゝるを。　梅葉「イエ〳〵あなたは」　ト引とめる事。　浮　鶴の千

あつて。梅薰「風むらだちと飛かふ千鳥」小藤、龜菊「汐滿つしらせかあれ〳〵」爲朝「もしや我を平家より、狙ひ討んず者共の、寄せくる知せか。それ」浄「弓弦引かけ番ふ矢の、君の跡から喜平治が。ト此中爲朝以前の弓へ弦引つかけ、出端に脊負ひし靭より箭を引出しきつとなる、梅薰女、小藤、龜菊居竝びきつと科、これにて向より八町礫の喜平治、好の著付の上へ、厚衣引つかけ、脚袢素脚、艪櫂をかたげ、ばつちやう笠を持ち。喜平治「御注進〳〵」浄「呼はる聲と諸共に。トこれを出の合方になり、喜平治件の拵へにて向より出て、花道にて。浄「逸散走りに韋駄天竺、支那韃靼、旦那のお供で琉球の、礫も八町八里半、妹が國とは妙でんす、兀良海上も鼻唄で、洒落ては居れど都では、まだどんちやんの眞最中、其處らを氣轉喜平治が、かけつけ三盃機嫌よく、うかれ磯邊を走り來る。ト花道にて喜平治よろしく振あつて、舞臺へ來て爲朝皆々も喜平治を見てこなしあつて。爲朝「ヤア誰かと思へば八町礫」梅薰「今おはなしの」女形三人「喜平治さんか」喜平治「爰は名に負ふ女護の島へ御安著ある吾君樣、御滿悅なる此場の體、おめでたう存じまする」梅薰「御注進と聲をかけ、お出ありしは心がかり」小藤、龜菊「早う樣子が聞きたいワイなア」喜平治「ハテ御注進とやらかしたは、わが君はじめ女中方へ氣を持たせた我等が計略。尤も君を大島より。落しまゐらす其跡は」ト思入。爲朝「定めて平家の討手の武士、大軍も

て、この中に右の文句、トシャン／＼遠よせになる。爲朝「最前は心なく一盞を傾けしが、如何致して此酒をこの島へ貯へあるぞ」梅薫「サアそれは徐福の昔より、島に生立つあした草と、熟す木の實を取り合はせ、造り設けし鹹草酒」小藤「そのお肴の用意さへ、梅薫女樣とわが君の、妹脊を千代もと鶚の鮨」龜菊「お侑め申す此酒も、御心に叶ひなば」三人「お嬉しう存じまする」爲朝「ハテ心深き乙女のもてなし、世にも得がたき鶚の鮨、殊更酒はあした草へ、木の實を合はせ醸せしとは、珍らしい」ト思入。淨『人の情の盃は、なほ快くめぐらして、こし方世々の語種。ト爲朝こなしある、梅薫女、小藤、龜菊、兩人もそれ／＼に待遇す心いきよろしく、爲朝盃を傾け。「その上豐後の山中にて、八町礫喜平治が、もてなす酒にさも似たり。其時の名は」ト考へ。「オヽ猿酒とやら申したり。イヤ／＼今乙女等と妹と脊の道を開かん爲の酒」ト思入。淨『猿とは禁や猿舞。ト扇を持ち立上る事。淨『われもましらの水の月、及ばぬ袂さゝ浪の、猿めでたく舞はうよ」ト右の合方にかゝり、囃子のあしらひよろしく有つて、ひとさし舞あつて。淨『汲めや鹹草酒、あしたも汲めよ盃に、妹脊も千代ときく酒、齡も延る下露の、流れの末は絶えずとうたり／＼。ト又囃子へ移りよろしく、爲朝舞の振よろしく有つて納まる。淨『祝ひ興じて舞納む。トこれにて浪の音はげしく、さしがね千鳥大分飛びかふ、皆々こなし

今配流の御身にはならせ給ふか、その譯を」女形三人「お聞せなされて下さりませ」爲朝「それぞ保元の初つ方、新院御謀反のお思立、止む事を得ぬ招により、父爲義に從うて、崇徳の君へ御味方、左府頼長が舌頭に、われが獻げし計略の、」淨「直垂の露八龍を、鎧ひし袖も只徒に、かたしく隙もあかつきの、不意に寄手の鬨の聲。「討手は淸盛、兄義朝、是非なきものは武士の」淨「箭ごろ引つめ强弓、何の用捨も雨霰。「百發百中射ておとす」淨「猶もあらてに數千の官軍。「シャ物々しき奴輩かな」淨「われ西海に在る時は、船を浮めて逆まく浪、風波の難に身を犯し、又は峨々たる山岳の、馬蹄あやふく太刀劒、今戰ひも時を得ず、あはれ君には松山に、音をのみぞ啼く濱千鳥、都を跡に滋賀の里、力なく〳〵落武者の、末さすらへに藻汐垂る、露けき袖や如何にせん。ト右の文句のかゝりより爲朝扇を持ち、軍物語の振、誂の通り宜しくあつて、よき程より愁の科へ移る事、よき程梅薫を引出す心に一寸からんで、文句の納りに兩人よろしく愁ひの思入に納まる事、小藤細菊兩人、右の銚子盃、肴の入りし緣高を持ち出て。細菊「その御心をはらすには、さもしけれども此島酒」小藤「酒は愁ひの玉箒と、世の諺にも聞きますれば」細菊「いざきこしめせ」兩人「我君さま」淨「いざきこしめせと侑むるにぞ、爲朝盃取上げ給ひ。ト此の中爲朝盃取上げる、細菊酌をする、爲朝一口飲みこなしあつ

る事、雙方振の模様よろしく。「猶幾千代も長かれと」淨「方士徐福に命ぜられ、老せぬ藥をもとめらる。ト梅薫納まる、爲朝思入あつて。爲朝「オヽ其故事は聞及ぶ。徐福は巨萬の寶をば」淨「船にたゝへてとも綱解き、わが大御國の蓬萊へ、遙けき波路いとひなく。トすこし振模様、こなし有つて。「日本の地へは著きたれど、かの仙丹を求め得ず、遂に終りを三熊野に」淨「今も古跡は著るき、徐福の宮といひ傳ふ。ト宜しく科。龜菊「その折徐福が伴ひし、女夫の童を二つに分け」小藤「この島の東西へ捨てられて、年經るまゝに妹と脊の、その語らひはしたれども」梅薫「男女ひとつに住居せば海神の祟を恐れ、南の風吹く其折は、年に一度の逢瀬さへ、一夜を千代と喞つのも、この奥島になみ〳〵の、男女の身の上にて、妾は徐福のゆかりとて、今に定まる夫もなく、それを不思議のこのお目もじ、いつ〳〵迄もこの島に止まつてたべ。わが君様」爲朝「ホヽオ切なる妹が志、過分〳〵」梅薫「サア此上は我君を、慰め參らす其爲に」ト小藤龜菊へこなし。小藤「ふつゝかながら」兩人「わたしらが」ト思入。淨「何がな心なぐさめんと、海士の小舟の棹の歌。ト小藤龜菊立つて。「おらが脊子衆はのウ、ヨウコレ、何地へ越したヨ、胸にやく鹽煙がたアえぬ、サンサのうョ、なつかしむ唱歌も鄙のしほらしや」ト兩人よろしく納まる。爲朝「ハテ珍らしき海士の小唄、面白い事であつたワエ」梅薫「シテ又貴方は何故に、

都の手ぶりそれ〴〵に」龜菊「敎へられたる其上に、共にお側に宮づかへ、お情うけよと妾らも」小藤「見たのは同じ」兩人「夢のつげ」梅薫「それ故待つて今日が日まで」三人「ようお出遊ばしたなア」ト爲朝こなし、梅薫爲朝へ思入。浄「まちあかせどもさながらに、桂男へ打つけに、あづかしじまのかね言を、いふ戀草の下萌や、顔そめ色の山つゝじ。ト右の文句の中、梅薫爲朝へくどき模樣、尤も恥かしき心いき、小藤龜菊兩人も傍より取持つ心にて、自分も爲朝へ戯るゝ心、すべて女島へ男の渡りし心よろしく、これ迄雲上なるやすらかな節づけを、くどき模樣にして、次の文句より賤の手業の機仕業によそへいふ心、この中を梅薫跡兩人へ割振り。浄「縁のいとしさ嬉しい妹脊、さすが結ぶの神さんも、ひねつて大倭唐土と、盡きぬ戀路ぢやないかいな。トよろしく納まる、爲朝思入あつて。爲朝「弓箭を取つては數萬騎も、いつかな恐れぬ爲朝ながら、まだ初陣の少女らに、取卷かれては殆ど當惑。シテこの島に女のみ、何故あつて住果るぞ、其譯語れどうぢや〳〵」ト思入、梅薫こなし有つて。梅薫「女護島なる故事を」ト團扇を持ち立上り。浄「語るも往昔秦の御代、粋な始皇の色好み、鴛鴦の衾に玉の床、閨に手を筑紫琴、しらべも愛し可愛さに、夜晝なしの娛樂を。ト梅薫よろしくやすらかな振事、この中小藤、龜菊、跳の銚子盃、高縁へもりし木の實、みさごの鮨を盛りしを持出で、酒を侑め

ふ色は唐詩にも、つらねし事も聞かざりし、梢まばゆき櫻のながめ、爰も日本の中なるかな」
梅薫「いかにもおなじ神の國、伊豆七島の中なれど、千里の浪路はるか越え」小藤「うき世に遠く
妹と脊も」龜菊「名のみ渚にかたおもひ」梅薫「こゝぞ名に負ふ」女形皆々「女護の島」爲朝「ム、すり
や扶桑國の東にありと唐書に見えたるが、遊歴するは今日はじめて」梅薫「サア始めて來ませ
し貴方こそ、まさしく伊豆の御曹司、爲朝公と疾よりも」ト爲朝思入あつて。爲朝「合點ゆかざ
る女が振舞、如何にも我は清和の末葉、六條判官爲義が忰にて、鎭西八郎爲朝なるが、某こ
の島へ渡海なすは、何人が告げたるぞ」梅薫「仔細といふは外ならず、これ御覽じて疑ひを」淨
『薫るの處女は懐中より取出す名玉、爲朝はつく〲と打見やり。ト右の内に梅薫錦の袋を
出し、中に入れたる名玉を爲朝へ渡す、爲朝よく〲見て好の合方になり。爲朝「ヤ、この名玉
は過ぎし頃、鳥羽の上皇が勅命受け、琉球國へ押渡り、放せし鶴の有所をもとめ、寧王女が
望によつて、其時鶴とかへ〲に、與へて戻りし此玉を」ト梅薫をよく〲見て。「どうしてお
ことは所持なし居るぞ」梅薫「お話申すも七日跡、其曉の夢の告に、この玉を授かりて、おつ
つけ爰へ。御曹司爲朝公のお出あれば、玉を證據におとゞめ申し、妹脊の縁むすべよと、覺め
て嬉しき夢見草」小藤「うき世に遠き嶋少女、尊きお方へお言葉を、交はすすべさへ知らざるも、

になり、花道より爲朝若衆鬘、後茶筌、半大口仕立の縫模樣の袴、好みの著附、小差衣めきし狩衣の袖を絞り、小さ刀、金剛草履、誂への重籐の弓、弦を片しへかけて釣竿を見立てし好み、これをかたげ、藤蔓編の靭と見たる魚を入れる籠を、形よくせおひ、尤も中へ箭を仕込みあるふ、右の出立にて花道へ迫出す、正面へ梅薫女、好みの振袖、衣裝の上へ薄桃の小差衣めきしを引つかけ、これへ木の葉の模樣、羽二重うへさらげ、誂への貝にて拵へし簪、小藤これに類したる好の拵へ、龜菊同く、梅薫女は女護嶋の姬君、跡兩人はかしづき少女の拵へ、梅薫女異風なる好の團扇を携へ、小藤は誂への緒環を持ち、梅薫女眞中に立身、上の方小藤、下の方龜菊と兩人坐して、右舞臺花道一度に迫上げ道具納まる。浄「八十島かけて汐路潟、うるまの國に幾日をか、龍の都に釣たれを、弓弦も戀に和らげて、矢武心を八丈と、後に傳へし妹が國、神の告ぞと御曹司。　ト右の文句にて梅薫、小藤、龜菊、花道の爲朝、雙方心々のやすらかなる振あつて、文句の納りまでに梅薫女爲朝をそれと見やり、待ちわびる心いき、振よく納まる、跡の文句にて爲朝舞臺へ來る、振になる。浄「なまめく風も南や、色の汀に着きたまふ。　トこれにて爲朝舞臺へ來る、梅薫と入替り、爲朝上に梅薫、小藤、龜菊上下より並び、見得よく納まる、淨瑠璃の合方、浪の音、鼓のあしらひ。　爲朝「ハテ麗しき此景色、巌に開く牡丹花に、爭

女之丞、尾上梅幸、市川團十郎」無思「コリヤ〳〵團十郎とは聞及ぶ、しかも身共が師匠であるワエ」通×「そんなら是は淨瑠璃觸」兩人「いよ〳〵始り」無思「其爲口上。サア來やれ」ト上手へ入る、どろ〳〵になり、心といふ文字を日覆へ引いて取る、しらせにつき淺黄幕を切つて落す。

本舞臺正面二間の茅葺、棕梠の丸木柱、上の方へ張出し、横に孫庇、下地窓に好の簾垂をかけ、壁にひゞわれ、此所はめ網代の書割、家體の前面、瓦燈口の樣に塗下げ、このまはりへ丸竹を折曲げし體、此内へ更紗の緞帳、正面見附、銀ばりへ好の彩色畫、中へ中足位に一面に床、上の方家體の下、荒磯の洞になりし岩組の張物、上の方へ畫心誂への岩組、これへ牡丹の盛り、よき所へ青石にて女人國と記したる傍示杭異形に拵へ、下手より後銀張の波、遠望の誂へよろしく、此下手常磐津連中の山臺、岩組荒磯の蹴込、舞臺前に磯際の浪板、よき所へ置並べ、日覆より櫻の釣枝、爛漫と二重に下し、すべて伊豆の七島女人島を、弓張中琉球國の寧王女配所と混じ合せたる畫面の道具、好の通り飾りつけ、右の山幕切つて落し、一聲浪の音にて道具納まる。

ト爰に常磐津連中居並び、前彈にかゝる。淨瑠璃「綿蠻たる黃鳥は丘隅に止る、人はなほ野暮を離れて憂きを身に、その配謫の爲朝を、色にやつして嶋廻り。トこれを誂へのせり出しの鳴物

の者共赦免につき、人別御調べの所、右與三郎儀は當月三日の夜、島紛失の訴へ、彼是以つて不屆至極、これによつて斯くの通り」ト人相書を出して。配符を以つてお尋ねの與三郎、津々浦々は申すに及ばず、山林幽谷詮議に及び、もし似寄の者に出會ひなば、早速からめ捕り差出すべき樣、急度申渡したぞ」漁師△「左樣なれば其與三郎と申しまする流人、島脱の御詮議」漁師○「それなる人相書を以つて御吟味で御座りまするか」無忠「いかにも重罪の者なれば、唯今より申合せて吟味致せ」漁師□「へイ〳〵仰せの趣、委細畏りました」無忠「それにて身共が役目も相濟み、此旨役所へ返答致さん、イヤサ返答致せ、身共は喋べつて空腹ゆゑ、暫時これにて辨當つかはん」ト此時ばた〳〵にて向より中通り二人、山立附の形、書物を奪合ひながら出て來り無忠太之を見て。「ヤイ〳〵かしましき、何事ぢや」ト是にて兩人無忠太を見て思入あつて。

中通◎「ヤアあなたはお役人樣」中通×「何でも怪しいこの書物」通◎「それを此方へ」通△「何を」ト兩人立廻つて◎これを取上げ。通◎「これこそ慥に萬國繪圖」無忠「その品これへ」ト右の繪を無忠太へ渡す、披き見て。無忠太「ム、何だ。淨瑠璃名題、弓張月に棹さして、女護の島へ男淺妻、淨瑠璃太夫」通×「三味線岸澤古式部、岸澤三造、上調子式松三次」無忠「どれ〳〵。相勤めまする役人、まて〳〵役人とは身共が事、ハテ面妖な、それ讀上げい」通「市川小團次、吾妻市之丞、中村歌

る事、見得よく與三郎四人かゝる。しやこ「お尋ねものの與三郎。そこ・・・」ト皆はげしくかゝり、與三郎お富を引する。皆々「動くな」ト與三郎お富へ繩かける、この見得よろしく、山おろし雙盤の責にて、よろしく拍子幕　跡シヤギリ

六幕目　淨瑠璃

弓張月の俤を　爰に寫して　嶋廻色爲朝

本舞臺向ふ一面の淺黄幕、一聲浪の音にて幕明く。

ト爰に一向無忠太、半素袍烏帽子の形にて床几にかゝり、次に若い衆三人、柿筒袍漁師の形にて控へてゐる、無忠太思入あつて。無忠太「其方共は漁師よな。斯く申す某は、梶原が家來番場の忠太が又家來、一向無忠太と申すもの、申聞かせる次第あり」漁師○「ハイ〳〵私共は此濱に年久しく住ひまする漁師仲間のもので御座ります」漁師□「仰せの趣何の御用で御座りまするやら、承はりたう存じまする」無忠「如何樣、其方共へ申渡すは餘の儀にあらず、さいつ比鎌倉出生の與三郎と申す者、人殺しの風聞、まつた千葉家の女を殺害の上、所持の品々奪取り、亂暴の擧動これあり、逃れ難き重罪につき流罪仰付けられしに、此度の法會によつて、流人

うな」ト與三郎もこなしあつて。與三「成程、手前がさういへば」ト思出し。「エヽ。見た筈だ、こりや過ぎし頃和泉屋で、はじめて其時めぐり逢ふ」お富「お前の實の母さんか。コリヤマア誰が」ト大きな聲をする。與三「コヽこれ」ト兩人思入有つて、お富あたりへこゝろを配る事。お富「血筋のしるしか今こゝへ、目にかゝれどもこともきれ」與三「あとの祭のこの亡骸」ト思入、又郭公啼く。お富「折も折とて空に音を」與三「血を吐く思ひ時鳥」お富「たれの爲業か」與三「チエヽ」ト兩人よろしく思入有つて。「忌々しいなア」ト思入、時の鐘、月雲に隱れる事、この時人音する故、兩人死骸を片寄せお富へ囁く、お富帶ひきあげ點頭く、誂への合方、上手より幕明の立衆目あかし四人、十手持ち覗ひ出てくる、跡より以前の捕手頭にて窺ふ。捕手四人「捕つた」ト與三郎お富へかゝる故、お富拂ひのける、與三郎突廻し、捕手を投退け吃と思入、これを竹笛入誂への合方、又兩人かゝる、暗がりの模様、與三郎手拭にてくるみし腰の出刃を出し思入、右の合方にて立廻り、四人は十手にてかゝるを出刃にてあしらふ、この中にお富へしやこ右衛門組付く、よろしく搔きのける仕組。與三郎早く逃げろと捨白。お富逃げられはしねえワナ、と捨白いひながら、面白き立廻りありて、しやこ右衛門お富にじやらつき心、與三郎出刃にてむね打にあしらひ、トヾ苛つて組付くを斬りのける仕組よろしく有つて、チヨンと月出

一人目あかしの服装出て。捕手「われを」トかゝる、是にてお富提灯を落し、燈火消える、此へ打つて懸る、立廻り一寸、與三郎件の捕手を引きつけ。與三「こいつはいよ〳〵」お富「モシ……」ト兩人思入有つて與三郎件の捕手をあてる。與三「氣を注けろよ」トよろしくこなし、ㇾらせにつきて此道具まはる。

本舞臺、もとの野陣ヶ原の道具になる。

トよき所に小笹の吹替の死骸倒れ居る事、時の鐘、送りにて納まる、ト又件の合方になり、上の方より與三郎、お富の手をひき、つか〳〵と出て、血汐にすべる事。お富「アレどうおしだ」ト手をはなす。與三「道が濘るか思はずすべつて」トこの時に手につきし科ある。お富「暗さは暗し。妾も何だか」ト今のはずみに足をさぐり思入、兩人よろしく有つて。與三「たしかに生血が」お富「エヽ」トこれにて小笹の死骸へ躓く。お富「アレー」トこなし。與三「エヽどうしたのだ」ト與三郎へ摺寄り。お富「たしかに人が」與三「ヤ」ト兩人見やる、これにて霞がくれ引分け、灯入の月出る、時の鐘、誂への合方、日覆にて郭公啼く、兩人よく〳〵死骸を見て。「コリヤア女の死體だワエ、慘酷い事をしやァがつた」お富「よもや意趣斬ぢやァあるまいよ、可愛さうにチエ」ト見る事、與三郎考へる、お富月かげに見る事、郭公啼く。「どこでかこれは見たや

それで心が急ぐのさ」與三「びく〳〵する事があるものかえ。手前に逢はねえ其前かた、安の野郎が家に居て、二年あまりも方々と、漂泊いては居たものよ、あの時分には高が小強請、強借の錢貰ひ、あの位の事で食ひ込んでつまるものか」お富「それは知れてゐるがネ。いつか和泉屋の一件ば、安が氣どつてそれからお前へ」與三「何の彼奴にはそれ相應な事がしてあるから」お富「それでも妾が考では、確に彼奴がお前の事を、輪をかけて喋舌つたから、それでこんなにお前をば」與三「そこは何ともいへねえワ」ト慿んな事いひながら花道へかゝる事、この中に中通り二人、以前の目あかし黒き手拭にて頰被して、西の揚幕より出て身を潜め窺ふ事、兩人咡き合ふを與三郎ふと心づき。「たれだ何奴だ」ト お富提灯をさしつける、この灯かげに兩人與三郎を見て。兩人「與三郎だな」ト打つてかゝる故、お富提灯を袖に覆ふ、與三郎兩人をくゞり拔け、一人を投げのけ、一人を取上げし逢ぐるみにて打たんとする、兩人逃げて入る。與三「何をしやアがるのだ」ト手に殘りし縫ぐるみを持ちお富へこなし、兩人よろしく舞臺へ來る事。「此間笹目が谷へ少しの内店を借りた時、氣をつけて遣つた目あかしが、昨日おれに用心しろと知らせて呉れたが」ト思入。お富「それだから氣になるワネ」與三「可いワ、どうかすりやア手前を作れて、うまれ故郷の江戸へ巣をかへるワ」お富「いつそ然うした方がよからうよ」ト此中に又

うして平馬様はこれから何處へ」平馬「一たび上方へ罷越し、ほとぼりをさまして又候や、いづれ武藏へ趣く所存、香爐を道中筋、拙者が所持して參るも危險。いづれ彼の地へ住ひを定め、書狀を以て赤間氏の旅宿迄お報らせ申す、香爐はそれ迄貴公が手許へ」源左「ようござります、それぢやアこれは確乎と預りました」ト懐へ納める事。丈助「どうでお前樣の御住居が知れゝば、直に私が香爐を持つて上方筋へ」源左「その內私は鎌倉で、梶原海老名の屋敷の所用を。又彼の一條の手筈もあれば」トこの中丈助向ふを見て。丈助「アレ〳〵向ふへ提燈の」平馬「灯影はこゝへ」源左「モシ」ト叩く。平馬「ム、この道筋を夜あけぬ中に」源左「隨分ともに平馬樣」平馬「赤間氏」源左「その內に會ひませう」ト靜かなる禪の勤になり、源左衞門丈助を伴れ上の方へ、平馬は橋懸へ入る、右の鳴物にてこの道具ぶん廻はす。

本舞臺すべて幕明の道具、夜更けし體に納まる。

ト時の鐘、好みの合方になり、東の揚幕よりお富好みの服裝、鎖にて釣りし模樣附の提灯を提げ、跡より與三郎、同く好みの服裝、頰被にて出て來り、中の歩道を渡り本花道へかゝる、內にこなし有りて。與三「コウお富、こゝ迄來りやアもウ可いワ、靜かに步け、提灯の火でも消すと始末が惡いワ」お富「それでも今日正午からの始末といひ、何だか頻りに胸騷ぎがするからね、

積の家はモウ寂滅」平馬「與三郎めは獄舎の憂目、後から冥途へ遣る程に、其時會つて泣面かわけ」源左「匿し持つた香爐を、早くこゝへ出さねえか」小笹「ヤア愚かや、卽て帝へ獻上となるべき大事の重器、女ながらも預つて、赴く途中で闇々と、汝等如きに渡さうや」源左「いけしぶとい其詞、たとへ何と吐さうと、どうで奪得る其香爐、煙も丁度たきどころ、鎌倉山につゞき野の、往來も稀な古戰場、野陣が原に卯の花の、雨の雫と消えてなくなれ」トきつと見得、ト小笹よろめき〳〵立上り。小笹「非道の刃に朽ちはつるか、思へば〳〵」源左、平馬「きり〳〵くたばれ」ト雙盤の責になり、之より兩人にて小笹を斬る事、よき程にばた〳〵跫音する故、源左衞門平馬ためらふ意にて、トゞ斬伏せる所へ、以前の金平傷を負ひし體、丈助と立廻りながら出來り」金平「ヤ小笹樣をば」丈助「汝もくたばれ」ト立廻る、この中に源左衞門平馬、小笹をトゞ斬倒し、源左衞門小笹へ止めさす、この中に平馬、金平を一刀に斬倒し、丈助もよろしく思入有つて、邊へ思入、時の鐘。源左「思ひの外骨を折らしやアがつた」平馬「確かに香左は懷中に」ト平馬丈助へ思入、丈助四邊へ意をつける事、源左衞門香爐を取出す事有りて、兩人死骸を片寄せて。源左「ム丶。紛れもなき鶴の香爐。エ丶、辱い」平馬「拾ひ返したので、ちつとは恨が霽れたワエ、赤間氏、さて〳〵貴公へ種々と骨勞をかけ申した」ト刀を拭ひ腰に揷し。丈助「さ

き合方、小笹きつとなり。小笹「これなる平馬へ加擔の者が、卑怯未練な騙討。こりや何故に手にかけしぞ」ト思入、平馬あたりへこなし、源左衛門思入あつて。源左「オヽそこに御座る平馬殿に、頼まれたとはいふものゝ、こつちも意趣ある血脈の女、それで手傳ひ殺すのだ」小笹「心得ぬ其一言、平馬はお家を窺ふ惡人、今浪々もお主の罰。殊更そちはついしかに見かけし事もなき男、何の遺恨でこの如く」平馬「オヽ其譯、俺が言つて聞かせるワ。日外名所町の和泉屋で、香爐の質請爭ふ時、強請にうせた下人めは、隼人が實の子與三郎、手前も其時思はずも、邂逅つたる覺えがあらう」源左「その與三郎めはこの俺が、手活の花のお富と不義、其懲しめに憂目を見せ、とつくに死んだと思つたら、命冥加に生延びて、せちまいあると聞くからは、日頃出入の海老名様へ、舊惡ありと讒訴をして、遲かれ早かれ繩目の恥、どうで一度は由井ヶ濱、獄門臺に恥面を、曝させるのも内證は、源左衛門様が軍略だワ」平馬「與三郎めを産んだる汝ゆゑ、此程香爐手に入つて、隼人を始め左近めが、咎めもゆりて身共は浪々、其恨をばはらさう爲だワ」小笹「チエヽ偖も根強き其謀計、たとへ悴が不義ありとも、飽まで憂目を見せるのみか、平馬へ荷擔し騙し討、謂はう様なき非義非道、思へば恨しい」ト思入。源左「喧しいワエ、汝が此度預つて、一たび本國へ持歸る眞鶴の香爐は、又も此方へ奪ひかへし、隼人親子は縛首、穗

事を」ト早めし禪の勤になり、縫ぐるみにて兩人は金平へ打つてかゝる、拔合せ一寸あしらふ、跡二人は若い衆の供廻を追込み、四人一度にかゝる事、皆々を斬拂ふ事、此へ丈助拔合せ、一寸立廻りみじかく、こゝへ皆々かゝり、混多になり、金平受太刀になり、こゝへ丈助この時斬りつける、右仕組の立廻ながら橋懸へ入る、山おろしになり時の鐘、乘物の裡より小笹脇指を持ち、件の香爐を懷中して出で、あたりへ思入有つて。小笹「駕籠の中にて樣子を聞けば、加擔の者等が今の一言、油斷ならざる今宵の仕儀、大事の名器を所持なす身體、いでこの隙に一先こゝを」トこなし有りで立ちかける、この中下手並樹の蔭より前幕の平馬、頰被り尻端折大小にて窺ひゐて、刀引拔き斬かける、小笹ちよつと身をかはす、所へ又斬つける故くゞり拔け拔合す、一寸こなし有つて立廻りて、兩人見得よくとまり。「ヤ扨こそ其方は山鹿毛平馬」平馬「恨みの小笹覺悟しろ」ト斬かける、兩人よろしく一寸立廻りて、小笹手利の模樣、平馬受太刀心になり、よろしく立廻る中に、平馬つけ入り／＼斬つけ、小笹受太刀にて立廻りながら、上の方の普請小屋の方へたぢ／＼と寄る、此時小屋の戸の中より白刃出て小笹を一かせ斬る、小笹アツと苦しむ、躊躇ぐ所へ平馬又一かせ斬つける故、小笹たじ／＼として撲然こなし、これにて普請小屋の戸板、ばら／＼と摧けて、赤間源左衞門、尻端折にて出で屹と見得、時の鐘、夜

衛門立がり、しやこ「者ども參れ」四天捕手「ハア、」ト時の太鼓になり、しやこ右衛門へ右の四人、外黒四天、捕手附添ひ上の方へ入る、しらせにつきこの道具ぶんまはす。

本舞臺、正面常足の土堤、棕梠植土提の上少し上の方へ廻して、古びたる板破目引戸の建つけし九尺の作事小屋、この傍に高き作事の榜示杭、これに扇ヶ谷御殿修理の小屋場作事方と記し、これより上へ竹矢來、小屋より下の方へ土堤の上松の並樹、本枝を打ち、日覆より同く釣枝、上下植込の砌、藪疊のあしらひ、背面黑幕、都て鎌倉野陣ヶ原の道具、中程より早めし禪の勤にて道具納まる。

トこゝに女乘物をおろし有り、前幕の金平、右乘物を回護し見得、若い衆の供廻り兩人荷をかつぎ、一人柿色の脚袢にて立かゝり、二幕目の丈助、赤間の子分にて好みの形、長脇指、中通り四人、何れも非人の拵へ。縫ぐるみにて立かゝりゐて、立廻りてよろしく止り。金平「主君の御用で東路へ此程下向の途中にて、道を遮るこの狼藉、扨は盗賊剽盜だナ」丈助「イヤ盗みを爲やう爲ではねえ、汝が送つて武藏へ下る乘物の、內の女に恨のある其人の賴みに依つて此所で待伏せ」非人△「付添ふ人足供廻りは、此方が仲間で追ひまくり」非人□「モウかうなつては嚢の鼠」非人○「逃げても逃がさぬ今夜の手筈」非人×「われも息せいはらずとも」丈助「その乘物はこゝへおき、きり／＼逃げて」五人「うしやァがれエ、」丈助「それぶつちめろ」四人「合點だ」金平「小癪な

けたならは早速に」三人「お知せ申すでござりませう」しやこ「オヽ出かす〱。尚も詮議の手がかりは、與三郎は江戸子の事なれば、武藏の土地には其面體よく存じたる者あらんと、彼の地へ申し遣はして、江戸で名家の豐國へ、彼等が人相正うつしに、認めさせたるこの姿繪、詮議の手がかりに遣はしおくぞ」トこの中に豐國畫二枚つゞき、汐干見物の場、團十郎（與三郎）梅幸（お富）の錦繪を出す。捕手〇「それぢやア是が人相書でござりますか。サア〱見やれ〱」ト受取りて。捕手×「こりや伊豆屋與三郎」四人「素的に好い男だなア」ト思入。しやこ「所が聞きやれ。それに描いたは未だ手疵を負けざる前の面ざし故、其面體へ夥しく刀傷のある奴が、則ち切られ與三郎さ」捕手×「ようござります、その面は」皆々「見覺がござります」ト此中一人お富の繪を見て。捕手〇「さうしてお富と申すこの女は」しやこ「それは彼の者の女房にて、横櫛お富と申す年増。與三郎につれ添へば罪は免れず、夫婦もろとも搦め捕らば、お富は身共が申請け女房に致す積り。尤も主人の許はないが、これは身共が一人極め、念の爲に申しおくぞ」四人「よろしう御座ります、のみ込みました」しやこ「きつとよいな」四人「ようござりますよ」しやこ「よければ愈々與三郎、召捕る手筈はその方共も」凡四天四人「心得ました」しやこ「尚も海老名公より仰せの趣、その宿々へ觸れわたさん、案内致せ」四人「かしこまりました。サア〱お出なされませ」トしやこ右

明く。

捕手○「この鎌倉で腕こきの我等が仲間を呼出し」同□「俄に御用とおつしやるは、亡命者かお尋もの」同△「見つけ次第に訴人をするか、縛つて出せが紋切形」同×「シテあなた樣は何方の」四人「御家來樣でござりますな」硨渠「其方どもを呼出し、內々所用を賴む上は、身が姓名もいひ聞かせん、某事は海老名の郎黨、品川硨磲右衞門ゆで高と申すものだ」○「さうしてあなたが」四人「御用の筋は」しやこ「其仔細はか樣ぢやテ。この鎌倉山の谷七鄕、市中は勿論、端々の町方豪家へ罷越し、組せし惡漢を語らつて、多くの金銀をゆすりとるを渡世と致す發頭人、面體身體へ數ヶ所の手疵、それ故に諢名をば切られ與三郎と稱へる由。もとは武藏の江戶生れ、舊惡もありとの事。我等が主人海老名公、搦め捕つて參れよと密かの嚴命」□「その與三郎なら私も見かけた事がござりました」△「然して今はどの邊に匿れ忍んで居りまする」○「その居所さへ知れるなら」×「押へた蜈蚣で」四人「なかまの骨折」しやこ「ハテ居所が知れゝば仔細はないが、所々方方へ住家を變へれば、某事は每日日日、かくの通りに家來を引つれ、何處彼處の分ちなく、尋ね步けど今に見かけず、それ故そち達を呼出し、若も見かけし其時は、其宿々の會所まで、知らせさせんが爲呼出したワ」○「それなら氣遣ひござりませぬ」□「仲間中へ觸をまはし」△「見つ

りつくを突除ける、お富こなし有つて隔てる、多左衛門、與五郎お鶴と兩人見得よく止めて。「いはぬ言葉の花嫁花聟」 ト兩人へこなしあつて、與三郎お富へかけ。「お富もこの末、夫婦の間を」 トほろりと思入。 與三「斷られぬ義理の與三郎」 お富「いづくの果に暮らすとも」 多左「親は泣より」 お富「血脈の兄さん」 與三「逢ふは別の」 與五「兄弟他人と」 多左「へだてる旅路も」 與三、お富「心の闇の夜」 トこの時梅八窺ひゐて。 梅八「野郎め觀念」 與三「迷ひ烏の」 トぽんと返し、與三郎兩人ほろりとこなし、木の頭。「ア泣わかれだなア」 トよろしくこなし、これをきざみについて大神樂の切をかぶせ、この仕組よろしく、 拍子幕

返し

鎌倉稻瀨川三昧の場
同野陣ヶ原の場

本舞臺正面すこし上へよせて石の六地藏、茅葺の雨除、この傍に因果車、後ろ牛垣、所々に古卒塔婆、古塚をあしらひ、松の立樹、同く釣枝、うしろ淺黄幕、こゝに碑礫右衛門、弁天 股引大小にて十手を持ち、若い衆の黑四天四人、十手を持ち附添ひ、○□△×對の著つけ脚絆、尻はしなりにて、腰に總付の十手を持ち、好みの風體、目あかし捕手のこゝろにて控へゐる、靜かなる禪の勤にて幕

の、縁もつながる笹つる裂」ト思入。お富「その臍の緒の書付の、筆に割符の合うたとは」多左「もとは都の産にて、治承の昔亂世に、かどはかされしこのお富、親の記念のお蔭にて、妹と知つて今日が日まで」與三「昨日が此方が兄だといつて。實は譯ある女房の」お富「旦那と言つたが血筋の兄さん」多左「今ぞあかした名告合」お富「五歳か三歳の頃なれば、それもお顔を知らぬ故」多左「曾我兄弟なら十八年、それにもまさる年浪は」與三「二十餘年の星霜を。生んで貰つたお母に」お富「逢へども親とは」與三「いはれぬ因果」多左「めぐる事も」お富「兩輪とならぶは」多左「兄と夫の」與三「思へばつきせぬ」三人「奇縁ぢやなア」ト此時に上の方より、以前の與五郎お鶴イみ窺ひゐる、與三郎と見合はせる事。與三「とかうする中七つの鐘、夜ふけさぶけ氣の毒な、奇異なお世話になりやした」お富「それも妾が心から、現在兄に逢ひながら、親身のはなしもならぬ時宜」多左「又よい機もあらうから、夜ふけぬ中にちつとも早く」與三「アイ、お詞に隨つて、餘計な苦勞をかけぬ中」お富「そんなら與三さん」與三「そろ〱往かうよ」ト下手へゆく、此時與五郎お鶴窺ひゐて、與三郎と顔見合せる事。與五「せめては兄の」お鶴「與三郎樣へ」トつかつかと寄る、與三郎お富この中財布をもち立上る事、多左衛門は與五郎お鶴をへだて。多左「手先をやつたら全の他人さ」ト思入。與五、お鶴「それでも一言」多左「こりや」ト與五郎與三郎へ取

倉を落ちのびて、其身の無事を思ふなら、路金の手當支度料、其出所も血緣から、身はらを分けた此方の手へ、渡るも味な金の納り、月日も經つてほとぼりも、さめた時にやア身の納り、及ばずながら助力して、資本位の事ならば、いつ何時でも否とは言はぬ、マアそれ迄は素直に取つて、この土地を離れた方が、可さうなものだらうぜ」ト與三郎こなしあつて。與三「何だか乙にからんだ異目のついた其金、氣障りだよしやせう」お富「ハテ心づくしの今のお詞、お前の身上にかゝはる風說、むそくにならぬ志」多左「但しお富が手切の爲に、遣らうと言つても此金を、やつぱりお主は受けぬ氣か」與三「お富が手切といふ事なら、初手からつけめ、貰つておかうよ」多左「それで根つきり葉つきりに。それ」ト金包五十兩を投出す、與三郎受取る。お富「そんなら妾の手切の爲に」多左「其證には證文は、俺が方から添へて遣るワエ」ト誂への守袋を投出す事、お富取上げ見て、自分の掛けしのと引合はする事。お富「ヤこれは覺えの」ト思入、トこの中與三郎五十兩の包を見て。與三「ヤこの包は元山町の」ト印鑑へ思入。與三「それは義理ある誰やらが、屋敷の女中へ取替へて、其納りは此方の手許へ」與三「そんなら弟が。ム、」ト與へ思入、この中お富守袋より自分の臍の緒と、多左衛門の守より、同じ書付添書を出し。お富「モシ是をば一寸」ト與三郎へ渡す、兩方取上げ見て。與三「ヤ、、お富が守と一對

権助、半蔵「どうしますえ」多左「知れた事、お定りの盲住居だ」皆々「サア立つたえ〳〵」藤八「それでは俺もことしかいなア」松兵「愚癡を言うても仕方がない、今迄人の器物を繩かけたる因果の廻り」藤八「こつちは永らく葛籠の憂目、果は襦袢で縛られる。ア、袷なき世の。」松兵、藤八「有樣ぢやなア」ト唄になり、皆せり立てゝ藤八松兵衛権助半蔵若衆つきそひ、この中與五郎お鶴へも多左衛門こなし有つて囁く事、この唄にて兩人奥へ入る事、時の鐘、與三郎お富こなしにて。

與三「來い」ト お富へこなし、兩人つか〳〵と。多左「これさ與三郎どん、お富待たねえか」與三「どうしたと」多左「折角しかけた高强請、萬更すてゝは歸られめえ」與三、富「ヤ」ト思入。多左「香爐がはり元利の金。それ」ト投出し。「持つて行きやれ」ト投げしを與三郎二包、お富五十兩の包を取上ぐる。與三「そんなら俺が言狀立てゝ、香爐がはりか但し又」お富「あの藤八が納りをつけう爲に大枚の」多左「些少なれども五十兩、心ばかりの趣意をたて、摘んでいへば彼の香爐、元はといへば盗み物、それを承知で藤八が、質に取込み主倒し、公事沙汰となる時は、暖簾の疵事、穩便にすませろと主人が頼み、其時序に話が出て、旦那が爲の姪なれば、至つて祕藏のお鶴殿、婿の爲には義理のある、斷らぬ緣の切られとやら、噂の人を見つけたら、身の納りをつけるやう、殊に世間の風説にも、よからぬ噂のお尋ねもの、繩目にかゝらぬ其中に、この鎌

の筥受取る事、時の鐘、下手より前幕の金平出て、門口より。金平「ハッ香爐はお手に入りますトは、一先これより御旅宿へお供の用意仕つて御座ります」平馬「身どもそろ〳〵歸宅致さう」トこなしあつて起上る事、小笹、與五郎、お鶴へこなし、與三郎お富へ思入有つて。小笹「御縁も御座らば又その内に」ト立ちかける故、與三郎お富前へ出て。與三「仕込んだ強請も香爐が、ちつと此方に入用故」お富「それも人手へ見す〳〵渡り、馴れぬ仕業もとう〳〵顯れて」與三「シテ香爐を質請する」お富「其お屋敷のお女中さまは」ト兩人小笹へこなし、小笹は與三郎お富へ思入。多左「それぞ千葉家の御藩中」小笹「穗積隼人が女房小笹」小、與三「エヽ」トぎつくり思入。お富「そんなら昨夕話に聞く」與三「誠の血筋の」お富「その母さんは」ト兩人小笹へ思入。多左、與五、お鶴「ヤ」小笹「さては幼い其時に」與五「町家の養子の」ト思入。小笹「悴はそなたか」與三、お富「思ひがけない」ト與三郎も思入、兩人よろしく、小笹與三郎をつきのけ行きかけるを、お富モシと止める、三人よろしく、小笹思入あつて與三郎をつきのけ、小笹「不孝な悴は。持たぬワイのウ」トこれを唄になり、小笹あとより、金平件の香爐の筥を持ち向ふへ入る、平馬こなし有つて上の方へ入る、與三郎お富ちつと思入、多左衛門與五郎お鶴こなし、藤八松兵衛は縛られしまゝ、權助半藏其他多左衛門こなし有つて。多左「サア權助半藏、皆の者、此上は藤八松兵衛二人を」トこなし。

金子は此通り」多左「左樣なら一寸金子を」ト手をかけうとする。平馬「屋敷の封金改むるに及ばぬ事、ア丶コレたよりに思ふ藤八は、ア丶どうか」多左「イヤ藤八は心がら、それは兎もあれ念の爲」平馬「これは如何に、疑うてこの金を」多左「改めねば不念とやら、失禮ながら」ト多左衛門包金をとる、平馬見せじと爭ふ、封目切れると中より瓦の小判出る、皆々呆れて顔見合せ、面目なき思入。多左「モシ平馬樣、コリャ緣起の百兩、御冗談なされまするな」平馬「そりやア唯の見せ金、誠の金子は外にある、香爐持參の上、屋鋪にて相渡す、必ず餘人に渡すまいぞ、身共が置主、他手へ渡さばいづく迄も故障申すぞ」小笹「若も彼是おつしやらば、お家の重器を何時の間に、御持參あつて質入なされた」平馬「サアそれは」多左「この書付をお屋鋪へ參つて、白地に仕埒を付ければ後腹病めず」小笹「いつそ荒立て詮議をせうか」平馬「それは迷惑」多左「そんなら此儘香爐をお渡しなさるゝか」平馬「サアそりやア」多左、小笹「サア」平馬「サア」三人「サア〱サア」多左「とうで御座ります」平馬「か樣な所に長居を致すと、武士道が廢る事、どうでも勝手に致せ」ト思入あつて門口へ出かける。「家來は居らぬか、エ丶何をして居るぞ、梅八〱」ト呼立つる、橋懸より中間梅八出て。梅八「モウ御歸宅で御座るか」平馬「知れた事だワ」ト邊へ思入あつて囁き、これにて梅八下手へ、平馬橋懸へ入る。「必ずぬかるな」ト敵役見合はせ思入、小笹香爐

なたも御一緒に」與五「お女中樣へお知らせ申して」多左「香爐の取引」お富「そんなら妾と與五郎さんも」與五「サアお先へお出なされませ」ト唄になり、兩人奥へ入る、平馬こなしあつて。平馬「合點のゆかぬは香爐の請主、何人なるか面談致した上の事、滅多には請けさせぬぞ」ト此時奥にて、トこの中前幕の小笹、奥より出て窺ひゐる。小笹「香爐の在所知れる上は、約束通り手形と引替」ト以前の手形を出す、平馬見て。平馬「ヤ何時の間にかは小笹殿。そんなら手形を、ム、」ト思入、トこの中多左衞門手形を受取る事、小笹は橐のまゝ金を出し。小笹「元利合せて書附通り、お役所より取寄する、時刻うつさぬ其爲に、取替へて下された」ト與五郎へこなしありて、與五郎も思入よろしく。「心づくしにつばめも合ひ此場の手詰、香爐も異儀なく受取るこの手番ひ」ト與五郎へこなしありて。「包のまゝにて御渡し申す」ト多左衞門、金を二百五十兩包みを、封目を見て。多左「確に金子は受取りました。左樣ならば香爐はお手渡し仕ります」ト小笹へ渡す事。平馬「そんなら金も調うて、其香爐を濡手で粟に、請けて行かうと申しても、手形の宛名は正しく身ども」ト多左衞門書附を見せ。多左「如何にも宛名は平馬樣」平馬「サアそれぢやに依つて身共が質請仕るを、誰が點のうち人があるまい」多左「成程御尤、併し元利合せて二百五十兩、それは御合點でござりませうな」平馬「それ承知、如何にも

なせえといへば」松兵「胸にあらうが棚にあらうが、汝が知つた事ぢやァない」權助「よう知つてゐるぞや」松兵「そりや何を」權助「何といはつしやつた、見所のある代物ぢや」松兵「まだ吐すかえ、情ない」權助「其おき主も知つて居る」松兵「ヤ」權助「それぢやに依つて出して見せる」松兵「飯炊の分際で下れ〳〵」權助「イヤ上る〳〵〳〵」ト兩人せり合ひ、松兵衞をつきのける、松兵衞踏臺より轉ぶ機に、燕の巣より香爐出る、松兵衞取らうとするを、與三郎松兵　を引つけるこの中に權助、多左衞門へ香爐を持行き、多左衞門取上げ見て。多左「コリヤ紛れもなき鶴の香爐」與三「そんなら燕の」お富兩人「巣の中へ」多左「隱した奴めは」權助、半藏「松兵衞どの」ト松兵衞をこづく。與五、お鶴「その盜人は」多左「たしかに藤八」トうぬと平馬きりかけるを、與三郎つき廻し刀を打落す、藤八迯出すを多左衞門括しあげる、松兵衞をば與五郎が引附け、若い衆の手代權助半藏などにて縛る事、平馬皆々を見て。平馬「ヤ松兵衞。藤八」藤八「五文どころか四文にならッ」松兵「身にふりかゝる」藤八「この繩目、ホオ、、、」ト泣く。平馬「何のざまだえ」ト思入。與三「サア其香爐を約束通り」多左「イヤこの請主は疾より奥に」平馬「ナニ請主が」與三、お富、平馬「外にあるとは」トこなし。多左「その請主へ一通り屆けずばなりますまい、お鶴さん、與五郎さんと一緒に、奥のお客へ此譯をおつしやつて下さりませ」お鶴「アイ〳〵、そんならあ

ものかえ、遠島船を腰につけ、あると有ゆる悪事も合點、乗りかゝつた今日の仕事、金か香爐か二ッに一つ、コウ番頭さん、可い加減に往生しなせえ、この曉はどうして呉れるよ」多左「奥聞かうより口とやら、成程すわつた物のいひ様、親御はか程に產みつけはしやるまいに、朱に交ればと譬の通り。扨もすわつた性根だなア」ト思入、この中平馬立つてお鶴を引立て往かうとする。「コリヤ平馬樣、お鶴をばどうさつしやる」平馬「ハテ預けし香爐が紛失故、鶴の香爐の其代り、お鶴は身共つれ行くワ」多左「スリヤ人質にお鶴をば」トこの中松兵衞、平馬を止めて。松兵「イエ／＼さうはなりませぬ、鶴のかはりなら、龜の甲の水入で御勘辨下さりまし」ト有合す水入を出す故。平馬「馬鹿をつくすな」ト突退ける。「サアお鶴來やれ」お鶴「イエイエ妾や」ト思入、ト平馬お鶴を引立つる、松兵衞さゝへる、權助思入あつて。權助「思ひ出した」ト仰山にいふ。皆々「エヽ吃驚するワエ」權助「その吃驚は尤ぢや、また／＼吃驚させませう。モシ大番頭樣、あのお鶴さんより眞實のお鶴さんを出してお目にかけませう」平馬「ナニ眞實のお鶴さんとは」權助「待ちなせえ／＼」ト以前の踏臺を出し。「さらばお鶴さんを出しませうか」ト燕の巢の中へ手をかけやうとする、松兵衞悔りして引止め。松兵「ア、これこれ、燕の巢の中へ手をかけて何するのぢや」權助「何であらうと俺が胸にある事だ、マア退き

て助けて下され、多左衛門樣」ト思入。多左「エヽ汝が不間をはたらく故、重荷に小づけのこの混雜、旦那へ不忠の大癡漢め」ト藤八へ思入。藤八「アヽ面目ない」トさしうつむく。與三「其奴を質に取らねえなら、此方が望の入替と……」多左「それ入替に望の品、今さしかゝつた紛失故に、渡す事はマアならねえ」與三「さういふならば矢張り兩人を……」トこなし、お富も思入あつて。お富「早く殺してお前の心を、それで休めて下さんせ、斯ういひ出すからは妾も意地」ト與三郎、お富へ立かゝるゆゑ、皆々氣をあつかふ思入。與三「それとも金で三百兩、それで無難に納める意か」多左「サアそれは」與三、お富「サア」多左「サア」三人「サア〳〵〳〵」與三「お恐ながらか但は金か、この家がはねを引合に、抱いて入るが此方の性根、この納りのつく迄は、貧乏搖もするものかえ」ト與三郎思入、この中與五郎お鶴兩人、與三郎へこなしあつて。與五「先刻から見る所、そのお姿は變れども」お鶴「お聲も覺え、物腰も」與五「正しくあなたは兄者人」お鶴「與三郎さんで」兩人「御座りませうがな」ト與三郎思入あつて。與三「コウお前方は何をいふのだ、廣い世界に似たものは、幾らもあるは總身の疵、片つらをかけ四十五箇所の刀傷、ひらだけだらけのしやつ面を、覺えて居やう筈もなし、しらばつくれても看版の、疵が異名で切られ與三、面識でもねえ俺を、馴れ〳〵しい物の言ひ樣、滅多に其手は喰ふ

たばかりで、俺もひどい目に逢うた事があるワ。その未進を汝でうめるワ、さう思へ」藤八「知らぬ知らぬ、そりやア俺は知らぬワエ」與三「手前が知らねえでも、御見物がよく御存じの事だ」ト立かゝる故、藤八いろ〳〵こなし有つて、よろしく思入。藤八「アヽこれさ〳〵。そりや弟は弟、俺は俺、其時の廻り合せ、わしの知つた事ぢやアない、みんな作者がする事ぢや。コレ〳〵お富さん、どうかして助けておくれんかえ」ト思入あつて葛籠より手を出し。「拜む〳〵」ト思入。お富「エヽお前も未練な、男らしくもござんせぬ、モウかうなれば仕方がない、覺悟して一緒に死んで下さんせ。藤八さんと一緒に殺される氣ぢやワイなア」與三「可い覺悟だ、兩人ならべて」トこの中に藤八たまらず葛籠のまゝ歩き出す事、この仕組よろしく與三郎とめて、出刃の柄で錠前をたゝき拔く、此中藤八中へ首を入れる事、錠前ぬけて蓋開く、はずみに中より藤八ころげ出る事、二重舞臺の方へ行く、與三郎追つてゆく、多左衛門、藤八を引摺ゑ、與三郎を止めて。多左「スリアどうあつても藤八を密男にして斬る意か」與三「知れた事さ」ト立かゝるを多左衛門止める、一寸立廻り、藤八震へながらよろしく蹲まる、見得よくとめて。「それとも見世の迷惑と思つて止めるこゝろなら」ト藤八へこなしあつて。「その代物を質に取る氣か」多左「それだと言つて藤八奴をば」ト思入。藤八「アヽこれ〳〵、隨分ふめますぞえ〳〵、何卒私を質に取つ

お方ぢやと、藤八さんと色になり、寐てゐた所をお前に見られ。エウ隱されぬ妾が滛奔。もし藤八さん、斯うなつては仕方がないよ」藤八「ア丶これお富どの、そりや餘り酷いぞや、其方ばかりで覺悟されてはどうなるものぞ、俺やそんなよい思ひは、只の一度でもした事はないに、情ない事をいひかけるなア」與三「サア斯うぶちまけてしまふからは、義理もへちまも構ふものか。お富を木更津から伴れて來て、圍つておいたは三年越、旦那といふはこの店の大番頭の多左衛門さん、たとへ抱寐を爲ねえでも、恐れながらと訴人して、だきこむからは其時にやア、對決なしの拘引、形見がはりの密夫は、葛籠の中の藤八だ、お富と兩人で帯紐解き、寐てゐた所を寐首をおさへ、葛籠の中へ入れて來た、この密夫のあかりを立つるか、但し此方の惡事をいひ立て、拘引の罪を被るか、術よく事を濟せるか、サア〳〵なんと動きは取れめえがな」ト葛籠の前から藤八顏を出し。藤八「そりや嘘ぢや〳〵、嘘だぞえ〳〵」與三「サア女め、あの通り吐すワ。われから痛い目をさせるのだ、野郎め覺悟しろ」ト前の穴より出刃を入れかける故、上へ首を出す所を襟上捉へ。「奴、どうして吳うな」藤八「ア丶これお富どの、そりやあんまり殘酷ぞや、其方でばかり覺悟されてどうなるものだ、わしやア其樣なよい思ひを、唯の一度も爲た事はないに、情ない事をいひかけるか」與三「エ丶いくら言つても仕方がねえ、汝か弟の海松杭めが他言つ

此方はまだ外に、葛籠の中の雜物で耳を揃へて三百兩、たつた今貸しなせえ。この質種が不承知なら、憚りながら店先で、いけどつた間男野郎、賣買にしてくれべいワ、どいつもこいつも見やァがれ」ト腰に挾みし手拭に包みし出刃庖丁を出し。「サア野郎め覺悟しろ」ト立ちかゝる故、中より藤八いろ〳〵とめて。藤八「ア、これ〳〵情ない、人殺し〳〵、助けてくれぬか」與三「やかましいワエ」ト出刃を見せびらかし、よろしく立ちかゝるを藤八蓋の方より手を出しとめて。藤八「これ〳〵平馬樣、松兵衞どん。多左衞門樣とめて呉れぬか、殺されるゾエ」與三「助けて呉れろもすさまじい、何處から突かう」トいろ〳〵思入、多左衞門こなしありて、與三郎に向ひ。多左「これ待つせえ、與三郎どん。昨日こなたに初めて逢ひ、番へた言葉もある筈だが、其舌の根もかわかぬ中、又ぞろこゝの店へ來て、俺に難儀をかける氣か。何で藤八が間夫だ、其譯をいはつせえ」ト思入、與三郎ぢつとなり。與三「オヽ間夫の證據を見せうワ」トお富を引出し。「サアお富こゝへ出ろ、汝が命は二つあつても足りねえワ、對手の野郎にしらを切られては男が立たねえ、譯があるとも無えとも有體にぬかしてしまへ」お富「あれさ靜かにおしな、妾だつても初から、お前の安否が知れぬ故、多左衞門さんのお世話になり、どうかかうかはして居れども、只の床の間の据物ゆゑ、構うては下さんせず、流石に行く末始末の賴もしさうな

體。コリヤ大切の品の盜人は、與五郎お鶴に極つたワエ」多左「イヤ平馬樣、そりやお眼鏡が違ひませう」平馬「とは又なぜに」多左「ハテ大切の品を盜取し其中へ、自分の名宛の書いてある文を入れておくといふ、そんなたはけは今時は御座りませんよ」ト平馬こなし。「よしんば又敵役がたくんでも、餘りといへば甘口な。そりやァ三十年も昔の事だ」ト松兵衞へ科あつて。多左「コレ松兵衞、お主が先刻その箱をいぢりまはし、あの半藏に質藏へ持たせて遣つた覺があらうが半藏さうか」半藏「さつき質藏へ入れました」松兵「アヽこれ〳〵詰らねえ事を喋舌る奴だ、アリヤこれではねえ、箱が違ふワエ」多左「エヽ言譯をさつしやるか、たとへ何と言はうとも、この多左衞門が白眼んだ黑星、其香爐の盜人も大方そこらに」ト敵役に目をつける、皆々こなし、藤八葛籠から顏を出し多左衞門と見合はせる、是にてチャツと顏をひく。「大概それと知れてあるぞ」ト松兵衞ぎつくり思入。「それに文を證據と言立て、與五郎殿やお鶴をば、香爐の盜人にしようとは、淺はかなこしらへ事、但しは外に嚴とした證據が御座るか」ト平馬へ科。平馬「ムヽ。サそれは」多左「證據がなけりやァ二人がよもや所爲とはいはれますまい。申しそんな物ぢやァ御座りませんかえ」ト思入、平馬こなし有つて。平馬「アイヤ〳〵たとへ其儀明白ならずとも、大切な品なくしては相濟みますまい、これは如何致す」與三「香爐が無けりやァ、

喧ましい、鶴の香爐どころかえ、亀山の化物を見た樣な。引込んでうしやアがれ」ト又引込む、この時に奥ばた〳〵にて以前の松兵衛、與五郎を引立て出る、跡よりお鶴とめながら出る、松兵衛は件の香爐の箱を持來り。松兵「誰でもかれでも用捨はねえ」お鶴「ぢやというて與五郎樣が」與五「身に覺なき言かけ事」兩人「滅多な事をいはつしやるな」ト言ひながら出て來る。多左「ヤアお前は與五郎さん、お鶴殿を引捉へ、松兵衛お主は何をさわぐのだ」松兵「何を所か、香爐が紛失しました」藤八「そりやアとんだ話ぢやな」ト顔を出す、平馬、與五郎お鶴を見て。平馬「ヤお主はお鶴、昨日の二才め爰にうせたか、不屆奴めが」ト思入、與五郎お鶴よろしく科あつてさし俯く。多左「これ〳〵お鶴殿の縁につれ、與五郎殿はおろそかにならぬお宅のお客人、手荒い事はならねえぞ、さうして香爐が紛失をどうして知つた」松兵「サアそれは。どの道平馬樣なり、又外へ賣渡すにしろ大事の代物、今質庫で改めて見た時に」ト箱を出し、中に入れたは鶴どころか、こりや天神樣の鶯鳥と、中ごは變つたのみならず、中に入つたこんな文」ト文を出すを、與五郎お鶴見てハッと思入、與三郎兩人へよろしく思入、平馬うろたへ此文を取り見て。平馬「扨こそ〳〵。與五郎樣参る、鶴より」松、樋、皆々「ヤア〳〵」トこの中平馬文句を讀む心あつて。多左「そんなら香爐の箱の中へその文がある故に」平馬「オ、いけ舌たるい此文

し有つて。與三「サア見る通の代物だ、いひ分通り三百兩貸しなされい。それとも入替に香爐を、いさくさなしに渡す氣かえ、早く方をつけてくんなせえ」多左「葛籠の中は外店外では、とんとふめない品なれど、此方の店だけ話しあひ、葛籠の中へ質種に、殘つた場合で左も右も、相談はしませうが。併し三百兩は貸難いが、殊に依つたら望の品、其香爐と入れかへに、口説を聞くめえものでもねえテの」ト思入。與三「ム、。面白い、其句が出れば居じかつて方をつけて貰ひやせうよ」ト思入。平馬「いや〳〵そりやならぬ〳〵、其香爐の置主は身共ぢやぞ、どうしてとうして外々へ、此通り金は持つて來た」トこの時藤八葛籠の中より顏を出し。藤八「これは平馬樣の仰しやる通り、たとへ書附がないにせよ、その置主に違はない、貴方の手から受取つた彼の一品、この藤八が請合ひました、松兵衛香爐をもつておじや」松兵「ハイ〳〵畏りました」ト上手へ入る、お富思入あつて葛籠の傍へ往き。お富「これ藤八さん」藤八「エ、吃驚するワイな」お富「サア藤八さん、斯うなつたら仕方がないと斷念めて、與三さんへ言譯の立つ樣に、どうとも斯うとも男らしく話をつけておくれ、さもない事なら迚も命は投出しもの、それともお前の了簡で、鶴の香爐を妾の方へおくれなら、この與三さんの顏も立ち、お方も無事で此場の納り、しつかりした返事をおしよ」藤八「それでも鶴の香爐は、平馬さまの方へ手渡しをば」與三「エ、

に御心得下さるべく候ふ、猶面談の上萬々申述ぶべく候ふ以上。藤八樣、みろぐひの松より」平馬「何につけても藤八が居らねば是も片便宜」與三「その密書が俺が手へ廻り〳〵て勿怪の幸ひ、香爐は俺が請出す、さう思つてお呉んなせえ」平馬「アヽこれ餘人では掛合ひ難い、あれ程のきつかけ、この通り摑合にするとは何の事だ、あゝ藤八はどう致した」松兵「イエサ藤八は居りませぬよ」平馬「エヽ居ないでは濟まぬワエ、爰が適恰のよいきつかけ。シテ番頭の藤八は」トこの中件の葛籠むく〳〵動くこと、權助、半藏、手代みな〳〵見て、顏見合はせ思入、平馬、松兵衞はこれに心づかず」松兵「その藤八居りませんといへば」平馬「居らぬでは事か濟まぬワ」トあたりへ色々こなし有つて。「さりとては情ない。シテ二番々頭の藤八は」トきつと思入、この時ばり〳〵と葛籠の蓋を押破り、前幕の藤八顏を出し。藤八「その藤八は爰に居る」ト皆々見て思入れ。皆々「ヤそんなら葛籠の」平馬「中には藤八」皆々「ヤア〳〵」平馬「あれ程頼んだきつかけを」松兵「扨は先からあはせた手筈も」藤八「モウ斯うなつては茶ッ茶無茶苦茶」平馬「エヽ思へば怨みな番頭藤八」藤八「御免」ト思入、與三郎見遣りて莨ふきかける。與三「奇妙な顏だナ」ト是にて藤八ちやつと顏を引込ます、多左衞門與三郎見あひてこなし、平馬松兵衞見あひて。平馬、松兵「エヽ何の事だ」ト思入、松兵衞は科あつて上の方へツイと入る事、與三郎葛籠へこな

ね」多左「そんなら葛籠の入れかへに眞鶴の香爐を」與三「左樣さ」多左「それ故二人が。乙なものが望やなア」ト平馬じつと思入、與三郎この中連尺の間より挾みし藤八の袷を引拔き出し。「それ是が捨利よ」ト多左衞門この着物を見て。多左「ハテ見たやうな」松、多「この布子」ト皆々も思入。與三「さて利はそれで澤山だらう、早く入替へてくんなせえな」トこなし、多左衞門右の著物に扨はと科あつて。多左「そんなら葛籠を入替へて、あの眞鶴の香爐を。ハテ妙なものを望まつしやるな」トこなし、平馬へ思入あつて。平馬「先刻から承れば、その汚い葛籠と鶴の香爐を入替へる、途方もねえ事を申す奴があるものだ、舌切雀なら葛籠にも緣があるが、鶴に葛籠とは句が附かぬワ、そつちは何と申さうとも、身共が品もやつぱり鶴。何でも身共が方へ質請する、早く香爐を渡さつせえ」トせり立つ。多左「隨分唯今でもお渡し申しますが、肝心の手形がなければなりませぬ」平馬「それがあるなら氣は揉まぬ」與三「その手形が無くつても、俺が方には慥な證據、手形がはりに手紙があるが」平馬「シテ又證據の手紙とは」與三「サア讀んで見さつし」ト前幕の手紙を莨入より出して松兵衞へ渡す。松兵「先達て其御地へ罷越し御咄申し候ふ彼の品質入の儀、こゝ許樣お取持にて百五十兩に御預り下され候ふ趣かたじけなく、右は下總千葉の重寶眞鶴の香爐と申し候うて大切の品故、其內に是非とも請戻し候ふ故、左樣

平馬「サテ町人といふ者は無法無體と申すもの」松兵「こんな葛籠を三百兩とは」松、權、皆々「惘れて物が言はれぬワエ」ト思入。平馬「見かける所多左衛門も彼に返答致さぬは、深き仔細があると見えるは、町家へ害なす强請の所業」與三「何だ强請だ。侍だと思つて默つて居りやア、强請とは何の事だえ、この野次馬め、すつこんでうしやアがれ」ト平馬この權幕に恐れて控へる。「サア言ぐさなしに三百兩貸してくれるか、但し又その相談が出來ねえなら、此方が望の品物、入替にして貰ひたい。オイ番頭さん、早く挨拶しておくんなせえ」松兵「これ〳〵いゝ加減にさつしやいな、何だか知れねえ此葛籠を三百兩とは何の事だ、夷子講の賣買でも、大抵相場のあるものだ、それにヤア譯も分らねえ無法ないひかけ、マア何にしろ葛籠の中を」與三「オ、面白い、葛籠の中を改めろ、代物せえ見たならば、よもや貸さねえとはいはれめえ」トこなし。松兵「オ、改めてくれるワ」皆々「改めろ改めろ」ト立かゝるを多左衛門科あつて。多左「ア、これ〳〵待つせえ待つせえ」、トデモと皆々立かゝるを。「エ、騷々しい控へて居やれ」ト皆々を制して與三郎へ向ひ。「そんなら愈々この葛籠で三百兩貸されずば、入替にしてくれろといふが、品物は何で御座る、それを聞かうかえ」與三「其品物は外でもねえ、爰の家へ疾くにから、質に來てゐる代物さ」多左「シテ質入の其品は」與三「千葉家の重寶、眞鶴の香爐を」多左「ヤ」與三「どうぞ入れかへて貰ひてえ

など宜しく、與三郎是を見て。與三「何だ此奴らァ、腕でも斬らうと言やァしめえし、びく〳〵するなえ。表にある葛籠を爰へ持つて來い」トいひながら皆々を睨みまはすゆゑ。皆々「ハイハイ」ト門口へ出て用水の上にある葛籠を門口の内へ荷ひ込む、平舞臺の眞中へ直す事。「こりやァ重い葛籠だワエ」ト舞臺眞中よき所へ直す、與三郎思入あて。與三「それ見たか、中には雜物はぎつしりと、錠前おろして預ける代物、大金にせにやァならねえワ」松兵「なる程、錠の卸りたこの葛籠、むやみに爰へ擔ぎこんだは」權助「松兵衛さん」松兵「何でも是には」平藏、三人「譯があるワエ」與三「オイ〳〵松兵衛さんとやら、其方の掛合がどうならうとも、此方の質から先へ片附けて貰はう、サァ松兵衛さん爰へ來なせえ」松兵「俺が往つたと謂つて何がわかるものか。さうしてマァ葛籠の中は何だか分らず、殊にふりの質物は取りませぬ」與三「たとへふりで有らうとも、大番頭さんは知つた顏だ」ト多左衛門へ科にて。「何でも借りて行かにやァならぬえ」多左「イヤ餘所での懇志は別の事。今持込んだ其葛籠、錠前おろして中ごは知れず、請制のねえ其代物、どうして迂濶に取られるものか」ト思入。與三「所を取つて貰ふ氣だね。此鎌倉で人も知る質兩替に油店、五德で儲ける大金持、雪の下での角屋敷、名所町の和泉屋を見込んで持込む質入の、望の高は三百兩、是非とも借りて行かにやァならねえ」ト思入。

與三「ヘイ。番頭さん、其節は大きに有難う御座ります」松兵「そんなら此人を多左衛門殿には」與三「アイ番頭さんにはお近付き」ト平馬、與三郎の素振を見て。平馬「さて／＼年頃といひ屈強の若い者、ぢやが面體といひ體へも、さて凄まじい刀疵が」權助、皆々「ヤア／＼恐しい顔の疵」トみな／＼與三郎の顔を見て仰山に惘れる事。與三「なんだ、刀疵がどうしたと、あんまりきよろ／＼面ァ見るなえ、晝狐でも逐出しやァしめえし、馬鹿な面な。これ年季野郎め、莨の火でも持つて來い」ト皆々ぶる／＼する、權助氣味わるさうに。權助「ハイお莨盆」松兵「してお前、爰へ來なすつたのは、何ぞ用でも有つて御座つたのか、言ふ事があるなら」與三「わつちやァ爰の家へ頼みてえ事があつて來やした、その頼みといふは質に置きてえ物がありやす」松兵「今聞けば質を置きに來たといはつしやるが、ふりに質をとらぬのが仲間一統の規約だが、爰の見世は二朱や一分の端質はとりませぬよ」權助「大方お前新道の伊勢吉と間違ひて來なすつたか」半藏「唯の質なら伊勢吉へお出なせえ」松兵「手前で小質は」三人「とりませぬよ」與三「やかましいワエ、此奴等ァ見くびつた事を吐しやァがるなえ、二朱や一分の悋な質ぢやァねえ、大金になる代物だ」權助「さうして代物は何處へ持つて御座つた」與三「其代物は表にあらァ、コウ若い衆、手を貸して下つし」皆々「ナニ手を假して」ト皆々手を出して恟り思入あつて懐へ手を隱す事

しやァたつた今し方、來る氣もなしにお店へ寄りましたが、ツイ藤八さんにお目に懸つて話したい事、すぐ歸らうと思ひましたが、生憎お不在でわからぬ故、ツイうか〳〵と待合はせて、内所の事もお前に知れ、モウ隱してもわるいから、寧そ藤八樣がお歸りなら賴みたい事もあり、又二つには香爐の。イヤ斯う〳〵と話をしたら分る事、よもや歸らぬといふ事はあるまいねえ」多左「何の樣子か知らねえが、モウ彼是と五時過、家の事も不用心、ならう事なら明日にもわからう、今でなけりやァわるいのか」お富「アイちつと都合がわるいから」多左「ムウさういふ事ならそれでも可いが、あの藤八は何をしてゐるで有らう」ト煙草を吸つける、誂への合方になり向より前幕の與三郎、以前の葛籠を脊負ひ出來り、本舞臺を見て。與三郎「向ふの角が和泉屋だな、よし〳〵素敵に持重りがすらァ」ト本舞臺へ來り、内の樣子を窺ひ、門口の用水桶の上へ右の葛籠を下して門口へ來り、手拭を取つて。「御免なせえ」トいひながら内へ入る、邊りを見まはしお富を見て。「ヤア女め、何をしてゐやァがる、的然こんなことだらうと思つて來た」お富「與三郎さん堪忍しておくれ、わつちやァ面目ないよ」與三「ナニ面目ねえも可いやァ、動きやァがるな、たたつ斬るぞ」お富「そんなに言はなくつても可いワな」與三「モシ誰方も御免なせえ、とんだ女つてうがお家へ舞込みましたねえ」多左「誰かと思やァ與三郎殿ぢやァないか」

右の書附引かへに、香爐をお渡し申しまする積で御座りまする、お請戻しと仰しやるからは、元利合せて金高は二百五十兩。右の手形あなた樣が御持參下さる上からは、直樣お渡し致しまする」平馬「イヤそこに一つ咄が御座るテ、右の手形をば我等が同役林木應助と申す者へ預けおきしに、急に殿の御用向にて上京なし、麁相ながら右の手形懐中いたした儘出立したれば、取戻すには時日もかゝり、其中に右の品なければならぬ時宜なれば、たとへ手形がなければとて、置主はかくいふ身共の事、金子さへ出せばよもや仔細はあるまいと存じて、それ故請戻しに參つたワエ」ト多左衞門思入あつて。多左「そりやはや間違も御座りますまいが、もと此品は藤八が呑込んで、右の印鑑をすゑた書附が御座りませぬ時は、どうも貴方へ右の香爐、お手渡し致す事はなりますまい」平馬「ムヽ」ト科あつて。「成程貴公の詞そこも尤。サア是からが掛合で御座る、初めより藤八が呑込み居る事、外の仁では話が分らぬ、シテ二番々頭の藤八は」ト松兵衞呑込まぬゆゑ。松兵「その藤八は昨夜から出まして、不在で宅には居りませぬ」平馬「これこれ松兵衞、お主も少しはきつかけを呑込んで居りさうなもの、留守だとばかりでは相濟まぬ。シテ二番々頭の藤八は」ト お富思入あつて。お富「その藤八さんに逢ひたいから、早く會はしておくれなね」多左「さういふのはお富ぢやないか。おぬしやア爰へ何時の間に」お富「アイわた

方に來さつしやれ、其中には戻るであらう」權助「しかし店は四つ限ぢや、お前爰へ來て御座つては惡いから明日の事にさつしやれ、ノウ松兵衞さん」松兵「さうぢや〳〵、ちと爰に內談もあれば」權助「サア〳〵今夜はお歸りなせえ」松、權「女が店に居ては見苦しいワイの」トお富慍として。お富「何だえ靜かにおしな、見苦しいとは私の事かえ、斯う見えてもお菰ぢやアないよ、いけ好かねえ、歸れといやア猶の事、藤八さんに逢ふ迄は川端へも出るものかな、悔しきやア指でもさして見なせえ、囃りながら女が違ふよ、お店の邪魔になりやアしめえし、意地の惡いお品だなウ」平馬「いやはや惘れて物が言はれぬ。シテ身共が香爐の一件、藤八は何を致してゐるで有らう」松兵「さればモウ歸る時分、何にしても大番頭さんを呼びませう。モシ多左衞門さん〳〵」ト此時奥にて。多左「オイ〳〵今それへ行きませう」ト出來り平馬へこなしあつて。「大きに失禮致しました」ト是にて平馬思入あつて。平馬「初めて逢ひしお手前は」多左「多左衞門と申す者で御座ります、まづ平馬樣、貴方樣には初めてお目にかゝります、シテ御用の筋は」平馬「さればさ先刻よりも此松兵衞にも申す通り、かねて質入致しおいた彼の一品、近々殿の御用につき請戾さねばならぬ時宜、それ故わざ〳〵罷越した」多左「それは有り難う御座ります、あなた樣からもお賴で、御大切な品物お預りの手形へ店の印形据ゑまして、則ち元利の金子と

んが歸らねえから、それゆゑ迎ひに來なすつたのであらう、さうだ〳〵それに違ひあるめえがね」お富「松兵衛さん何だねえ、女だと思つて馬鹿にしておくれでないよ、コウ權助どん、氣の利かぬ人だ、烟草と烟管でも貸しておくれな」權助「何だかさつぱり樣子が分らない、モシ煙草もあげるが、お前そんなに言うてはお店へ濟みますまいぜ」お富「なぜ濟まないのだえ、わたしやァ藤八さんに逢ひに來たのさ、お前がたの知つた事ぢやァないから、留守なら歸るまで待たうワな」ト莨盆を引寄せ一服のんで通らぬ思入。「エヽ烟管までつまつて居るとは、通りの惡い辻占だノウ」ト簪を取つて火皿の掃除をする事。平馬「身も先刻より藤八が歸宅致すを待ち申すが、それなるお富も藤八へ用事の趣ほとんど待草臥たワエ」松兵「イヤモウ定めし御退屈で御座りませう、店でなければ御酒一つ獻上と申す所で御座りますが、意に任せず」平馬「身共も實は其心なきにしもあらず、しかし酒はたぼでなければ飲めぬての」松兵「左樣〳〵、なま中な酌人より、お富さんのお顏を拜みながら一口やつたら、さぞ味い事で御座りませう」お富「これさ松兵衛さん、お前は程の可い人だノウ、その口車ぢやァぞつとする程惚れる氣になるが、わつちばかりは揶揄と畚にやァ乘りたくねえよ」平馬「こりや御尤」松兵「なかなか達者な者ぢやア」松兵「顏と口とは又格別、時にお富さん、藤八殿に用も有らうが、いづれ後

さんの、それ」ト小指を出して見せる、松兵衛思入あつて。松兵「ハヽアそんならお前がお富さんかえ」お富「私もお前さんのお名を聞いて居りましたが、ツイお出なされねえから、碌に御挨拶も致しません、堪忍しておくんなさい」松兵「それは互の事、しかしお前が店へ御座つては旦那の手前、多左衛門さんの思はく、何ぞ急用でも」お富「用といふのは別の事ぢやァないが、お店の藤八さんに是非お目に懸つて、ちとお話申したい譯があつて」松兵「アヽそれで夜分御座つたのかえ」ト平馬思入あつて。平馬「最前から樣子を見るに、どうか見知りある面ざし格好、たしか以前は木更津で」お富「エ」トぎつくり。平馬「オヽさうだ、物腰格好寸分違はぬお富ぢやな」お富「ほんに貴方は平馬樣で御座りませぬか」松兵「そんなら旦那さまはお富さんの身の上を、よく御存じで御座りますかえ」平馬「イヤモウずんと入魂に致した某、しかし其節風聞に聞くには、水死とやら致したと申す事、聞及んだがそれは全く世の取沙汰、まづは堅固で目出たい〳〵、シテ其節に」トいひかけしを。お富「モシ〳〵平馬さん、以前はともあれ今ぢやァ私も眞面目な堅氣、過去つた身の上話は禁句だからよしておくれよ、わたしやァ爰の藤八さんに用が有つて來たから、其積でゐておくれな、長い月日にァいろ〳〵と變るものだねえ」ト思入あつていふ。松兵「コウ〳〵お富さん、お前藤八さんに逢はうといふのは表向、實は多左衛門さ

ろかえ、團子の様な瘤をこしらへてからに」松兵「是さ、失禮致すなと申すに、どうしたものぢや」平馬「これ〳〵松兵衞、そんなら爰はお鶴が家か」松兵「何と仰しやりますえ」平馬「いやさおつりきな家ぢやと申す事ぢや」ト言紛らす、權助こなし、松兵衞制してゐる、誂への合方になり、向よりお富、好みの著つけ著流し、ぶら提灯をさげて出て來り、直に門口くゞり内を窺ひ。お富「モシ〳〵權助どん、一寸お賴み申します」ト門口を細目にあける、權助思入あつて。權助「さういひなさるのは誰方でござります」お富「アレサ私だワな」權助「もしお前さんは源氏店のおかみさん、マア内へお入りなせえまし」お富「アノ藤八さんはお内かえ」權助「藤八さんは今朝出てまだ歸らないが、用があるなら内へお入りなねえ」お富「そんならちつとの中、待つてゐてもよからうかねえ」權助「なに構ふ事は御座りませぬ」お富「お店に誰方か、御免なさいましよ」ト内へ入る、平馬松兵衞兩人はお富へ思入。「お店へは始めて參りましたが、あの藤八さんはお留守だと承りましたが、わたしやアちつとお目に懸らにやアならぬ譯で參りましたが、モウお歸りなさる時分で御座りますかね」松兵「されば其藤八殿は、晝前から用達に出られて歸らぬが、シテ權助このお方は」お富「ア丶わたしやお前さんにはお初にお目にかゝりましたが、この權助どんには每日の樣に」權助「逢ふの逢はぬといふ事かえ。モシ松兵衞さん、大番頭

だ」松兵「エ、早く片づけろ」ト呵りちらすこと、よろしく捨白あるべし、平馬此中に松兵衞を見て。松兵「これ〳〵お手前は先年木更津にて見受けたる松兵衞と申したお手代ぢやな」トいふ中松兵衞も平馬を見て。松兵「なる程其時の。お侍さま。デ御座りましたな」ト以前匿した香爐の事心づき、燕の棚をきよろ〳〵見ながら。モウ三年越前の事、大きにお見外申しました、眞平御免下さりませ」平馬「何の〳〵、兎角一人でも馴染の顔があると申すは相談もいたしよいて」松兵「シテお出なされました御用の筋は」平馬「それは別儀でない、先年質入致しおいた香爐を受戻したい儀に就いて、今日わざ〳〵參つた」ト松兵衞これにて科あつて。松兵「イヤそれは丁度よい。彼の香爐をお請戻し下さるとは、私方ももつけの仕合、ようこそお出なされました」平馬「もつともお手前には一別以來ぢやが、藤八殿には面會して話合つておいた事もあるて」松兵「左樣〳〵、たしか右の品は預りの手形が、お前樣の方へお渡し申してある筈で御座ります」平馬「サア其手形にちと仔細があつて、シテ藤八殿は如何致されたな」松兵「ヘイその藤八は」トこなし、この時奥より權助出で來り平馬を見て。權助「ヤアお前は昨日の侍だの」平馬「さういふ汝は此家の下男か」權助「オ、さうだ、吾妻の森でよくも俺を酷い目にあはしやアがつたな」松兵「これ〳〵彼方樣を何と思うてゐる、大事の〳〵お客樣、旦那樣ぢやぞ」權助「旦那どこ

燕の巣を見つけて。「あるワエ〳〵、この燕鳥の巣の中へ、鶴の香爐を出居衆に入れる、これは誰も氣が注くまい、奇妙〳〵」ト好みの合方となり、踏臺を持出てこれへ登り、件の香爐を燕の巣の中へ匿す事、捨白よろしく、この中に下手より以前の權助、科あつて下手へ忍ぶ、松兵衛いろ〳〵よろしく科あつて巣の中へ匿し、踏臺を下りて下より見上げ。「よし〳〵、どう見ても燕の巣だ、こりや誰も氣が注かぬ、あゝわれながら智慧の程適れ感心」ト又この中踏臺へのる。「又とはあるまい」トこの中に揚幕より前幕の山鹿毛平馬、羽織袴にて大小雪踏がけ、後より若い衆の中間一人附添ひ出來り、平馬家來へ呵く、家來ハツと科あつて橋懸へ入る、平馬は科あつて門口へ立寄る事、この中に松兵衛右の白きれて仕組よろしく、門口より。平馬「賴み申す」ト松兵衛吃驚して。松兵衛「ワア、」ト平馬を見て。「ヘイどちらからお出なされました」松兵平馬「身共は山鹿毛平馬と申して鎌倉の昵近、先年お預け申したる質物の事で罷越した」「ヘイ〳〵それはようお出なされました。こりや子供、お茶莨盆もつて來い」トこの中平馬上の方へ通る事、この時奥より若い衆兩人幕明の手代、調市茶を汲み出る、若い衆の手代莨盆を平馬の前へ出す事などよろしく。「これ何を勝手へばかり入つてゐるのだ、そこの踏臺を片づけさつせえ」若い衆一「ハイ〳〵」。誰が爰へ踏臺を出したのだ」若い衆二「今松兵衛さんが使はしつたの

道理こそ彼の多左衛門が邪魔をして、與五郎めを見のがす體、思へば〳〵腹の立つ、拾つた此文を玉にして與五郎奴を罪におとす魂膽の、細工はりう〳〵爲揚をさらば。見せてくれうワ」ト邊へ科あつて、右の筥の中より中籠に吹替へし鷽鳥を出し、其中へ件の文を一緒に入れて。藤八が先達つてちよろまかしたる其後へ、此文を入れておくは、後日に詮議といふ時には、文の名宛は與五郎なれば、差詰あいつへ疑がかゝり、あのお鶴にも氣を揉ませて、叶はぬ戀の意趣ばらし、味いは〳〵」トこなしあつて。「これ久助〳〵、半藏はどうした、長松は居ねえか」ト呼び立つる、半藏出て來り。半藏「エヽ、さう〳〵しい、何をお呼びなされます」松兵「これ〳〵半藏〳〵、これを道具質の棚へ上げて置かつせえ」半藏「是をかえ。それに險しう呼ばねえでも可さそうなものだ」松兵「ハテ大事の質物だから云うのだ、エヽ庫へ持つて往かつせえ」半藏「アイアイ」ト立ちかける。松兵「これ中を見る事はならねえぞ」半藏「何の見るものかな」ト小言いひながら上手の暖簾口へ入る、松兵衛後見送り。松兵「先あの方はよしと」ト科あつて又懐中より以前の鶴の香爐を出し。「併しながら此香爐、どう考へても持つて居るのは險呑だ、あゝどうぞ可い匿し所が有りさうなものだワエ」ト方々を見廻し。「神棚の燈籠の中は尤陳し、油樽の中へ入れては、取出すに手がよごれる、植木鉢の中でもあるまい」トいろ〳〵考へ、不圖

人顔見合せこなし。「ようこそお出」トこなし、三人よろしく。「なされました」トこれを二度目のしらせにて好の合方になり、三人話合の模様よろしく、この仕組にて道具ぶんまはす。

本舞臺三間の間、常足金網形の蹴込、正面暖簾口へ☆印の紺暖簾を掛け、上の方に帳面天秤など誂への通り兩替屋の店、上の方へ付家體を押出し、爰へも別間より奥への入口暖簾をかけ、下手平舞臺にして一間折廻し、油樽などの書割、爰へ風よけ障子覆ひしあかり見の油皿、あかりを點したる體、よき所へ戸棚、書状さし、質物油の諸帳面、好みの通りに引つかけあり、家體欄間へ燕の巣店へ釣つてあり、欄間外へ一間通りの塗家造二階の格子窓、庇瓦の體よろしく、下手の暖簾かけて路次より庭つゞき奥へ入口、この前箱の用水桶、これへ雪の下名所町と記し、軒口へ※の印、和泉屋と記したる暖簾かけあり、誂の通りに飾りつけ、毎時の所に門口、平舞台へ溝縁布く事、この三重に松兵衛以前の手代にて、前幕の香爐の筥を持ち、片手に以前の文を持ちゐて立身、テンツヽ角兵衛獅子の鳴物にて道具納まる。

ト稽古唄の合方になる。松兵「アヽこれどうぞして木更津から預けられてゐる娘のお鶴、手に入れようと思ふ中に、先刻見かけたあの二才め。扨は初物を占められたと思つたら」ト件の文を出し、こなし有つて。「お鶴から送つたる此文の様子では、彼奴めは許嫁の與五郎と見えるワエ。

り唄になり、松兵衛を引つぱり兩人奥へ入る、後に多左衛門思入あつて。多左「ハテたはけた奴だワエ」 トこなし、與五郎お鶴こなしあつて、お鶴も奥の方へ、與五郎はつか〳〵と橋懸の方へ行きかける。「ア、もしお待ちなされい」 ト兩人構はず立ちかけるを。「これさお二人とも、マアお待ちなされい」 ト與五郎科あつて立どまり。與五「サアお詞では御座れども、始めて參りしこの家の内」 お鶴「さういはるゝ程今更に」 與五「あたりも見られ」 兩人「面目なうて」 ト又行きかけるを。多左「是はしたりお鶴さん。與五郎さん」 兩人「エ」 トこなし。多左「心遣は及びませぬ、マア爰へ御座りませ」ト 兩人こなしあつて立戻る事。與五「そりや我等をば與五郎と」お鶴「疾よりお前は」 兩人「御存じあつて」 多左「さればさ。お鶴殿の緣組あつた伊豆屋喜兵衛殿の御子息と、一目見るから私が推量」 お鶴「そんなら何かの樣子といひ」 與五「われ等が身分を推量あつて」 トこの中三人二重へ上り。多左「左樣で御座ります。チト話したい事もあり。邪魔を拂つて留めたも、このお鶴殿は此家につながる緣の預り娘、さすれば主人の娘御も同じ事。この和泉屋の後見して店を預かる多左衛門へ御斟酌には及びませぬワ」與五「サア其お詞の尾について」お鶴「お前が今のお咄の」 ト思入。與五「とはいへ未だ此方とは懇志にあらぬ吾等が親元。初めて參つた早脚には」 ト思入。多左「ハテお鶴殿のその爲には、お前は聟の與五郎さん」 トこれにて兩

アさういふ此方は大番頭」お鶴「多左衛門さんか」ト松兵衛止められながら。松兵「ア惡い所へ」鶴、米「ようお出なされましたなァ」多左「これお主は箒を持つて誰を撃たうと思ふのだ、いやさ誰をうつ氣だよ」ト松兵衛箒を持つてうぢ〳〵しながら。松兵「エヽこりやァ。今ツイちよつと蜘蛛の巣を拂はうと思つて、それで箒を持ちました」多左「これ今日は藤八も店に居らず、帳場も空いてゐやうのに、爰へ來て蜘蛛の巣を拂はうとは、扨々お主も健な男だ、爰の事に構はずと、店をちつと氣をつけさつせえ」松兵「サア見世を氣を注けるのは當然の俺が役だが、店ばかり氣をつけても、肝心の奥が猥ゆゑ、蜘蛛の巣どころか預り娘のお鶴さんへ蟲がつきますワエ」トこの中に一寸與五郎が以前落したる、お鶴より渡したる文を拾ひ、人々に見えぬ樣に袂へ隱す事あつて。「それだから蜘蛛の巣の序に、その蟲めも叩きのめして遣らうと思つて」ト立ちかゝるを多左衛門とめて。多左「これはしたり。その蟲の譯ならば私も疾うから知つてゐる」ト與五郎、お鶴、お米思入。「これ松兵衛、お主も蟲の同類だらうが」松兵「エ」トぎつくり。多左「要らざる事に構はずと、しかけた帳合を片附けさつせえ」松兵「それだといつて見遁しては」多左「ハテ爰の蟲よりお主が頭の蠅でも逐やれといふ事さ」松兵「とはいへよくも」多左「どうしたと」トきつとなる、松兵衛こなし。お米「御座んせいなァ」トこの中お米はお鶴へ囁く、はや

さん、お前は胴慾なものぢやぞや、何やら面倒な譯があつて緣組した聟殿の方へ婚姻もならぬ時宜。段々年頃にならつしやるに、さぞ羨からうし淋しからうと意を通して、儕が日頃くどけども、つひに一度の挨拶なく。何時の時にか男を引入れさつしやつたな。それでは濟まぬ〳〵」ト科あつて與五郎へ向ひ。「これ野郎も何處からうせた」お米「マヽこれ〳〵滅多な事を言はしやんすな、このお方はお鶴さんの爲には大事のお方」松兵「その大事なお方が氣にくはぬワ、やい二才め、わりや何處の野郎だ」與五「アヽこれ〳〵滅多な事、儕はお鶴殿と何も猥な事は御座らぬぞよ」松兵「言譯はならぬワエ」ト立かゝる。お鶴「アヽこれ〳〵彼方は私の殿御」お米「お鶴さんの聟樣ぢやワイなア」松兵「イヤ〳〵嘘ぢや〳〵、お鶴さんの聟さんは江戸に御座ると聞いた許、どうして此鎌倉に居るものか。お前が私に見せつけて色をすれば、モウ〳〵此方も自暴だ、あの野郎に見せつけてお前を爰で」ト お鶴へ取つき。與五「これは無體な」ト止める事よろしく。松兵「エヽ退きやアがれ、うぬ」ト以前の棕梠箒にて撃つて蒐る、立廻りこの棕梠箒を引たくり、松兵衛またお鶴へ縋りつく、これをお米隔てる仕組よろしく、與五郎が取りし箒を引たくり、松兵衛與五郎へ撃つてかゝる、この仕組よき程に、前幕の多左衛門出て、松兵衛を突飛ばし、又蒐る所を突廻はし、よろしく止めて。多左衛門「これ松兵衛、何を騷ぐのだ」松兵「ヤ

の家へ、千葉家の重寳眞鶴の香爐が、もしも質入になりしといふ、何か話は聞きやらぬかいのウ」 ト思入。 お鶴「奥と店とは隔つ故、詳しい樣子は知れねども、昨夜ちらりと話に聞いたは」 お米「オヽ何處やらのお屋敷から、鶴の香爐が質入してあるならば、密々に請戻したいと尋ねて御座つて屋敷のお女中」 お鶴「そのお方をば直々に見請はせねど、咄の樣子が昨日吾妻の境内で、平馬づらに逢うた時に、難儀を救うて下すつた其お女中に似寄のものごし」 ト思入。 與五「それこそ的然小笹さま。スリヤあの書附を御持參にて、昨夜の内に此店へ」 ト思入。 お鶴「では其お女中は」 お鶴「御存じの」 與五「サア兄與三郎樣の實の母御、鶴の香爐紛失ゆゑ、穗積の家の難儀となり、お心遣の何かのお話、せめては彼方のお力にならうと思ふも、義理のある與三郎樣へわれらが寸志。シテ彼の品を質請なされしか」 お米「どうやら樣子は知らねども、今日また店へお出なさる約束ぢやといふ昨夜の話」 お鶴「もしも貴方が御用があらば私の部屋で」 お米「お待ちなさる其間、お鶴さんにお寐首を」 兩人「どうぞ叶へて」 ト兩人より與五郎を引立つる事。 與五「それぢやというて此家の手前が」 鶴、米「ハテマアちよつと」 ト兩人手をもつて引立つる事、よろしく捨白あるべし、此中に松兵衞窺ひ出て與五郎を突退け。 松兵「どつこい〳〵ならぬぞならぬぞ」 お米「お前は松兵衞さんか」 ト與五郎お米思入、松兵衞お鶴へ向ひ。 松兵「これ〳〵お鶴

與五「アヽこれ〳〵待たつしやれ。どうしてマァ馴々しうお主が部屋へ行かれうぞ」お米「これはマァお固いも程がある」お鶴「お前と私は親と親とがお許しなされた女夫間、誰に遠慮がござんせうぞいなア」與五「ぢやというて表向婚姻とゝのはぬ其中に、其方の部屋へおちついて話するも何とやら、若も猥な事あると人の思はく、又木更津の舅殿の手前といひ、殊にこれなる和泉屋は、儕が家とは今以て懇意ならぬ事なれば、猶更もつて儕まぬ事」お鶴「そんなら何故に私をば、早う江戸のお前の家へ呼迎へては下さんせぬ」與五「さればお主を江戸へ呼迎ふる其時は、忌でも應でも伊豆屋の跡式、この與五郎が相續をせねばならぬワイの」お米「さうした時はお前さんとは天下晴れたる御夫婦間、それをば兎や角と仰しやるは」お鶴「どうでも足らはぬ私ゆゑ、外に江戸に増花の、移心のあつての事か、そりや胴慾ぢや、御胴慾で御座りますワイなア」ト思入、與五郎邊りへ科あつて。與五「アヽこれ〳〵、お鶴殿、決してさういふ譯では御座らぬ、さりながらお主と明日にも婚姻して、伊豆屋の跡式相續すれば、はじめ儕へ義理立の御放埓が元となり、不慮な事から親々の、勘當の身とならつしやれた兄者人へどうも濟まぬ、何で有らうと與三郎樣のお身の納りつく迄は、どうも意に任せぬ時宜」ト思入あつていふ、これにてお鶴お米も得心の行くこゝろ宜しく、與五郎こなし有つて。「早速ながら聞きたいは、この和泉屋

より前幕の與五郎、著流し庭下駄を穿き、下女お米莨盆を提げ、庭下駄にて案内しながら附添ひ出て。お米「何れにもお心遣は御座りませぬ、マア〳〵是へお通りなされませ」與五「忝なう御座りますが、併しマア何の中でも、それ〴〵の禮儀もあるに、お鶴殿の部屋へ直々斯うして來ても無遠慮千萬」お米「ハテ何であらうとお鶴樣が大抵お待かねでお出なさる事では御座りませぬぞえ」與五「それでもどうやら心が後れて」トこんな事いひながら上の方へ來る、お鶴以前の形にて出て來り。お鶴「ヤ與五郎樣か」與五「おつる殿か」お鶴「ようお出でなされましたなア」お米「マア〳〵これへお出なされませ」トこれにて緣先へかけて、與五郎懷中より封を開きし文を出し持ちて。與五「昨日不思議にお前に逢うて、この鎌倉に忍んで御座る樣子も知れ、マア安心をしましたワイの」お米「私も其時いろ〳〵と何からお咄申さうかと思うた內に、あの平馬づらが邪魔になり、本意ない別れを致しました」與五「それから宿へ戻りし所、今朝早うお前から此文が來る折も折。チト儕もお前に逢うて聞きたい事があつた故、それ故わざ〳〵今日爰へ」お米「何にせえお鶴樣が、昨日はあんまり本意ないお別れ、どうぞしげ〳〵お咄がなされたいと仰しやる故、わたくしがお勸め申したそのお文」お鶴「何で有らうと爰は端近。何かの事は私が部屋へ」ト手をとり。米、鶴「ちやつとお出なされませ」トせり立てる故與五郎こなし有つて。

されませ〱」ト捨白にてとめる事、此時に松兵衛手拭に包みし物を取隕す。權助、半藏「そりやこそ何が隕ちたぞ〱」ト皆々見つけるを松兵衛其上へべつたり坐り。松兵「こりやア何でもねえ〱」ト内懐より手を出し、股間より懐中へ引込み。「ア、これ〱爰へ構はずと、モウ一邊探ねて見ろ〱」權助、半藏「それでも今のは」松兵「ハテお主たちが構つた事ぢアねえ、もしもしお庄屋さん。これ半藏〱。コレ權助〱、とかく朋輩の好みといふものは、さうしたものでは無え、ともかくも藤八を今一應さがして見やれ〱」庄屋「なる程、こんなに言はつしやる、サア〱お前方も御座りませ」權助、半藏「マア捨てゝお措きなされませ」ト思入。松兵「エエ情の強い、行かねえかい」五人「さア〱探しなさい〱」ト權助、半藏をせり立てゝ皆々下手へ入る、松兵衛後に殘り、今隕したる手拭に包みし、前幕の鶴の香爐を出し、科にて。

松兵「藤八が日外やから詐取かしておたい鶴の香爐、昨夜から彼奴めが行方が知れぬ、若もの時に可危いものと、こつそり俺が出して來たが、今の機で隕したが種を見つからぬで、幸運〱。しかしマア藤八は何所へうせたか、いつその事に是限に戻らぬ時は、また此方にも仕様があるが。マ、天狗にでもさらはれたら、しかし神隠といふ顔でもない。ア、何にしても此香爐、持つて居ても険呑だ。何處ぞへ忍ばせておかずばなるめい」ト科あつて奥へ入る、唄になり橋懸

松兵衛さんお前知つて御座らうね」 松兵「ナニ俺が知つて居る位なら氣を揉むものか、心當へは大概迎ひを出したワ」 番人〇「シテ其お心あたりにも番頭さんは」 松兵「されば居ないから安心ならぬて、これ〳〵半藏權助、まぢ〳〵して居ずと何處か藤八が入りこみさうな所を考へて見やれ、どうだ〳〵」 ト此中權助考へ。 權助「ム、分つたワエ」 ト手を打つ。 皆々「知れたか〳〵」 權助「こりやこの權助が鑑定では、なんでも店に御座つては濟まぬ事が出來たから、そこで藤八さまは」 半藏「藤八殿はどうさしつた」 權助「寺號山號とやらかしたのだ」 松兵「寺號山號とは何のことだ」 權助「云はずと知れた引負のいひわけなさに、寺號山號一目さんに隨德寺に」 ト驅落したといふ思入。 松兵「エヽ緣喜でもない事を吐しやアがる、藤八に迯げられて耐るものか。これ半藏、きよろ〳〵せずと心當を考へろ」 半藏「無理ばつかり、どうして私が」 權助「これ〳〵松兵衛さん、氣を揉まつしやるな、大方煤はきには出るであらう」 松兵「エヽ何を癡漢が」 半藏「それでもお前は氣を揉みなさるが、大番頭の多左衛門樣は平氣の平左衛門で居さつしやります」 權助「大番頭がおちついて御座るに、こなたが氣を揉むは駄目な事だ」 ト松兵衛慍として。 松兵「此奴們ア俺がいふ事用ひねえな」 權、半「それでもどう仕樣があるものか」 松兵衛「エヽ口ごたへを吐し居るな」 トありあはす棕梠箒にて權助半藏を追ひまはす、若い衆みな〳〵。 五人「マア〳〵お待ちな

締る。與三郎「からんだ悪縁」　お富「きつてもきれない」　ト與三郎の顔を見る。與三郎「命がありやア」　トお富を引寄せるを、チヨンと木の頭。「話せるなア」　トきざみよろしく。拍子幕

五幕目　鎌倉雪の下名前町質店の場

本舞臺少し上の方へよせて二重の亭家體、正面茶壁瓦燈口の塗下げ、更紗暖簾かけ、上の方建仁寺垣、家體より下手へ黒塀折廻し、此塀ごしに白壁の土藏、戸前口✲の前の印つきし質屋の體、此前に柴垣庭模樣、石燈籠など好みの通り、よき所へ栞戸、すべて和泉屋庭内の模樣、好みの通り餝付け、爰に松兵衛以前の手代前掛がけ、權助前幕の下男、半藏油店若い者、若い衆兩人△□同じ拵へ、外に番人○×、下男二人は六尺棒を持ち立かゝりゐる、皆々前幕の藤八が行方が知れぬといふ捨白よろしく、テンツヽ、通神樂にて幕明く。

ト越後獅子の合方になり。松兵衛「コレどうだよ、藤八が行方知れたかよ」　番人○「サア昨夜から何處へ御座つたも知れぬといふ話で御座りまする」　若い衆△「近所のお方も夫々に」若い衆□「庄屋樣のお盡力で」　兩人「方々を尋ねましたが、かいくれ行方は知れませぬ、コリヤマアどうした者で御座らうなア」　ト皆々この筋の白くちぐ〳〵にいふ。權助「こりやア俺が察する所、藤八さんの行方は、

の包があるぞえ」ト出す、與三郎取つて開き見て。與三郎「何だ能書があるワ、ドレ〳〵。南蠻祕法。アタリマンス、この一藥を酒にて和し服さしむる時は、人命を斷つ事卽妙なり。まつた右の一藥に辰の年月日時揃ひし男子の生血を混じ服する時は、年久しき金瘡古傷たりとも跡なく治する事神の如し。こいつは奇體な藥だな」お富「そりやアまア幸ひな、お前の顏や體の疵、治すには丁度よいではないかえ」與三郎「違ない、しかし取得る事の出來ねえのは人の生血だ、當時は俺が面や身軀の疵も仕事の資本、治さねえ方がよからうよ。時に此野郎を忍ばせ置く容物はあるまいか」ト思入、お富こなし有つて二重の押入より誂の葛籠を出し。お富「アイ丁度お誂がこの葛籠」ト與三郎、爰へ出せと仕形する、お富中に入りし風呂敷包など引出す。與三郎「中へ此奴を」藤八「コリヤ耐らぬワ」ト立廻つて中へ入れる事、兩人思入、時の鐘、藤八は葛籠の中へ入る、與三郎蓋をかぶせる事、お富あたりへ思入あるべし。與三郎「こいつを囮に明日の仕事」お富「モシそれはさうと與三さん、どういふ譯で此手紙の、千葉の屋敷の寶をお前が」與三郎「其香爐がちつと此方に入用故、コレ」ト囁く。お富「そんなら葛籠の藤八を玉に遣つて和泉屋へ」與三郎「出來合密男つゞらもたせ」お富「何角の手筈は」與三郎「寐ながらゆるりと」ト是を聞き、葛籠の中より藤八窺ひ出て。藤八「どうやら味な」ト顏を出すを、與三郎お富立寄り、ぴつしやり

りや何だえ」ト與三郎笑つて。與三郎「猪口屋藥を見たやうな物さ」お富「オヤ忌だのウ」ト投出す、この中に一通の書翰を與三郎紙入より引出す。與三郎「何だ。兄藤八様へ。海松杌の松より」ト思入ある、お富この手紙の上書を見て。お富「どうやら覺のその名宛」ト思入、この時藤八いろいろ悶躁き居て、縛られたる帯とけて。藤八「それ讀まれては」ト驅寄り件の密書を取らんとするを、與三郎手早く突廻し藤八を當る、藤八ハア、と倒れる、與三郎こなしあつて。與三郎「これなる手紙に海松杌の松といふ名は木更津で、手前も俺も怨のある奴」お富「兄藤八様とあるからは」與三郎「扨はこいつは兄弟だな」お富「道理こそ、よく似た顔つき」與三郎「とんだ奴に巡り遇ふものだ」お富「早く讀んで御覧なねえ」與三郎「ドレ」ト開き、先達つて其地へ罷越し御噺申し候ふ彼の一品質入の儀、其許様御取持にて百五十兩に御預け下され候ふ趣忝けなく、右は下總千葉家の重法眞鶴の香爐と申して大切の品故、其中に是非〳〵此方へ請戻し候ふ間、左様御心得下さるべく候ふ、猶面談の上萬々申述ぶべく候ふ、以上。月日。猶々此一藥不用に相成り候ふ間、其まゝ御戻し申上げ候ふ、よろしく御計ひ下さるべく候ふ、以上。ム、此手紙の文體では、千葉家の重寶眞鶴の香爐を質入した密書、ム、」ト藤八へ科あつて。「此奴は滅多に逃されねえワエ」トこの中お富、外の藥包に能書を添へたるを見つけて取上げ。お富「モシ爰にも藥

ア今日は如何なる悪日ぞや。ハア、」ト思入、この中に與三郎お富盃を取替はせる事有つて。與三郎「コレお富、さつき俺が亭主だと打まけて、てきぱき片をつけうと思つたを、なぜ兄だと言張つたのだ」お富「亭主といへばモウそれ迄、それよりは兄さんだと言うておいたら、又何ぞお前の力になる時の爲に、却つてよからうと、それで私があの時に」與三郎「俺もそこらと察したが、何あの時一か八か方をつけたも可つたらう」お富「それぢやというて今蔭で聞かしやんしたらば、疑はお前、霽れたで有らうがね」與三郎「さればなア、一夜も枕をかはさぬお主を、是程迄に世話をする主の意がわからねえワエ」トこの中に藤八が紙入、よき所へ落散り、中より書附など出かゝりゐる事、是を與三郎見つけて。「なんだ其處に落ちてゐるのは、紙入ぢやアねえか」ト是にてお富紙入を取上げ見る、藤八見て。藤八「ア、それは俺が紙入ぢや、明けては悪い〳〵」ト色々悶く。お富「中に何やら」藤八「ア、明けては悪い〳〵」與三郎「ドレ」ト中の書附を見て。「何だ。一、金一兩二分也、若浦樣。浪の戸樣。藝者一組。臺一つ。コリヤ大磯の書出だ」ト此中に紙包をお富取上げて。お富「コレ爰に何か包んだものが」與三郎「ドレ」ト開き見る、中に鍋の曲物へ入れし藥あり、與三郎上包を見て。「ム、海内無比。ヨルトスル。交接堂君よし製。この藥は此近所だ、オ、さうだ、畫師の程よしが頼まれて弘める藥よ」トお富の方へ投げて遣る。お富「そ

ヤモウ耐らぬ」ト迯出す帶際を止める機に、藤八の帶とけてくる〳〵と廻り、帶ひろどけになる、立廻つて襦袢一つになるを蹴返し、帶にて引縛り。與三郎「滅多に汝は迯されねえ」藤八「ハアー。そんなら私に見せびらかし」與三郎「知れた事だ。其處で存分見物しろ」藤八「ハ、ハアー」ト思入、好の合方、與三郎お富よろしく能き所の柱へ藤八を結へ付ける、此内お富白鳥の德利より、別の酒を燗德利へ移し、燗をつける事あつて。お富「與三さん、モウ何にも心遣はござんせぬ、マアゆるりとお上りな」與三郎「こいつは妙だ。たしか今聞けば此酒は、あの野郎が買つたのだな」お富「アイ奇特な人さね。モシ與三さん、今夜は家の旦那も御店に用があつて來る事ではなし、泊つてお出な」與三郎「ナニ泊れ。內所はどうでも、表向圍はれてゐるお主が家、亭主の留守にはモウ〳〵こり〳〵した」お富「アレ又矢張りそんな事、亭主といふは愛しいお前」與三郎「今夜がかゝアといひ初め。とんだ明けを追ふ奴さ、ハヽヽヽ」ト是を又新內節の合方になる。お富「サアお燗が出來た、一つお上り」ト猪口を出す、與三郎取上げて、お富酌をする事、與三郎一口飮んで。與三郎「こいつは可いワエ、あの箆棒が買つた酒を、亭主の俺が飮むといふは、思もひらもない事だ」トいひながら酒を飮むこなし。藤八「コリヤ酷い目に逢ふものだ、密男のまの字迄も行くか行かぬか知れぬ中に、此通り縛られて、買つた酒まで飮まれゝば澤山だ。ア

するがよいワイの」トいひながら手酌で自分が飲み、よろしくこなしあつて。「これ〳〵氣晴に一つおあがり」ト猪口を持行く、お富品よく拂ひのけ。お富「わたしや酒はたべぬワイなア」藤八「ハテあがる所ではあがらうがな。これ一寸〳〵」トしなだれ寄るを拂ひ除けて。お富「エヽ又してもいけ煩さい」藤八「こりやモウ暴ぢや」トかぢりつくを拂除ける、兩人よろしく、此以前より與三郎下手より忍び出て窺ひゐる事、お富蹟くを押倒し藤八乘りかゝる、此時與三郎、藤八の首筋をもつて引退け突まはす。「アイタヽヽ」ト與三郎を見て驚き。「ヤ汝は。ハアー」ト顫へること、お富、與三郎を見て。お富「ヤ。與三さんかえ」、與三郎「お富、いけづ太い野郎だなア」ト此中隙を見て迯出す藤八を引すゑて思入、藤八ふるへる事。お富「そんなら今の樣子をば」與三郎「今の所か先刻から、安を歸して裏から忍び、家の主人にお主が噺も」お富「それも詳しくお聞きかえ」與三郎「一間隔てた障子越、大抵今の概略は」お富「それで私も落ついた、よく戻つて來て下さんした、モシ色々お前にいふ事が」與三郎「俺も手前に噺があつてよ」ト此噺の中、藤八そろ〳〵這ひ乍ら下手へ迯げて行くを與三郎見つけ。「オイ番頭どん。藤八どん、こんたは何處へ」ト聲かけられて藤八ぢつと止り。藤八「一寸。尿しに」與三郎「イヤ貴樣には用がある、爰へ來やれ。來いといふに。來られずば寧そ俺が」ト立ちかゝる、是にて藤八恟りして。藤八「コリ

思入、これをなまめきし合方になり、以前の藤八、前もいくぢなく以前誂へてやりし二ツ物の廣蓋の上へ、白鳥の德利、盃、猪口など載せしを持ち、暖簾口より出て來る、お富の臺詞されぬ中に、奥より出て窺ふ體、是にてお富こなし有つて、門口の締をせんと立ち行くを、廣蓋を二重に置き、つか〳〵と行てお富へかぢりつく。「エヽ誰だえ、よしなさんせ」藤八「アヽこれ喧しういふまい、俺ぢや〳〵」トいふを振切り突退けて。お富「藤八さん、お前今迄何所にお出だえ」藤八「最前の強請の騷ぎ、臺所へ迯込んだ其中に、多左衛門殿は戻られるし、歸るには歸られず、今迄忍んで爰に居た」お富「家ではお店から迎が來る、大層店が忙がしい樣子、惡じやれをせずと歸りなさんせ、サア〳〵早くお歸り〳〵」ト逐立てるを藤八とめて。藤八「これは又お前でもないぞえ、お富さん、最前お福殿を頼んで、佃長へ酒肴を誂へて、多左衛門殿の留守事に、お前に一つ上げようと思つた所へ、強請めがうせた故、ちや〳〵無茶句。下女のお福は強請の騷ぎで、驚いた所をばおどしかけ、法をもつて宿へ泊がけに遣つたれば、多左衛門殿は店へ泊り、今夜は私が爰へ、最前の樣な惡い奴のうせぬ樣留守番して、お前とさしで一つ飲み樂む積ぢや、これお富さん、一つ上らんかいなア」ト手を引ぱる故。お富「エヽ廢して下さんせ、よい機嫌な、それ所ではないワイなア」藤八「ハテそこを一つ飲んで、わつさりと氣を發散

前に入つた質物の事で、内々聞合せたい事があつて、是非〳〵家の旦那にお目にかゝりたいと申しますが、どうも大旦那の御隱居所、笹目が谷は遠方なり、又藤八さんは今以てお戻りなされぬから、そこで貴方を呼に參りました」多左「ハテ三四年あとの質物とは、ムヽ。何所のお邸から御座つたか」權助「それからまだ今一つ用がござります、梶原樣のお邸から、明朝迄に爲替の金がお入用、六百兩持つて來る樣にと、さつき申して參りました」多左「梶原樣から御用が出たか」權助「私が思ふには、大方若殿の源太樣が梅が枝の身請の金と、鎧の遣繰に御入用かと思ひまする」多左「何を馬鹿な。何にしても行かずばなるまい」お富「それではあなた、この儘に又お店へお出なさるのかえ」多左「モウ彼是四つにもならう、どうで用が片づくと、戻るには遲くなる、今夜は店へ泊るから、戸締をして寐るが可いワ」權助「しかし大番頭さんを呼にくるには、チト不印な役廻だ」お富「又其樣な事をいはずとも、隨分途中を氣を注けて」多左「そんならお富」お富「旦那さん」多左「明日逢ふワ」ト權助提灯をつけ先へ立ち、多左衛門へ科あつて橋懸へ入る、お富思入あつて門口を締める、ホツと思入、時の鐘合方になり。お富「さつきはマア思ひがけない與三郎さん、よもや此世に存らへては御座んすまいと思うたに、命が互にあればこそ、又廻り逢ふ嬉しさも、過ぐる月日の其中に、以前に變りし今の身の上、ア、何とした者で有らうなア」ト

が兄にもせよ、又夫なら猶以て、この儘添せて遣る意、おほ方こんな事が有らうと、推量したのは今日の日まで。コリヤ今戻つた與三郎が、生脈たゞしい人ならば、後ともいはずあの人に、お主が身の上も埒明けるが、何をいつても今見た始末、向ふ疵とか切られとか、世間で風聞のある身の上、其心底をとつくりと見屆けた上、又どうか爲様模様もある程に、短氣を出さずと落ついて、俺に任せて此家に、時節を待つて居やれといふに」トお富へよろしく思入あつていふ、お富もこなしあつて。お富「それ程までに。お前の心は嬉しいが、今まで私が此身をば、任せたといふ譯でもなし、よしみもない私をば、左程に思つて下さんすお前の心根、いうて聞かせて下さんせいなァ」多左「それは今いはれねえ、マア〳〵お主が身體をどうなりと、納りのつく其時には、悉しく咄して聞せるから、案じるには及ばねえ」お富「それ程におつしやるなら、時節を待つて居やうワイなア」ト思入、此内にやはり新内の合方、時の鐘になり權助提灯をさげ、以前の男にて橋懸より足早に出て來り、慌たゞしく門口を開けて。權助「御隱居様急用でござります」お富「オヽ、お店の權助殿」多左「騒々しい靜かにいへ」權助「サアお聞きなされませ。今店へ何處やらか、立派なお屋敷の奥様といふ様なお女中と、男の侍が參りましたよ、」多左「何を此奴いひをるぞ。女の奥様男の侍はしれてゐるワエ」權助「サア〳〵そのお人が四五年

口へ出て思入あつて、内を見まはし。與三郎「併しなア、歸つた後は差對ひ」蝙蝠安「へゝやきやアがるな」與三郎「よしてくれ、そんなぢやねえワエ」ト是を誂へ新内節の合方になり、科あつて花道へ行きかけ、思入あつて蝙蝠安へ一寸呼き、懐より金を出し蝙蝠安へ遣り、行けといふこなし、蝙蝠安呑込み向へ入る、與三郎思入あつて引返し、下手の路次口へ入る、お富こなしあつてそれと立上る故、多左衛門よろしくとめて。多左「これきつさうして驅出すのは、あの與三郎が跡を慕つて行くのか」お富「エ」トつかへる。多左「サさうでなくば何ゆゑに」お富「わたしやお前に面目なさに」多左「何面目ねえ。べら坊な、そんな事は取措いてマア爰へ來やれといふに」お富「それぢやというて」多左「ハテマア此所へ來やれといふに」お富「アイ」トこなしあつて多左衛門の側へ來る。多左「さうしてお主やア面目ないといつて、どうする積だ」お富「さア お前に命を助けられ、三年この方此通り、何不足なく養うて下さんす其中へ、今の樣な人が來て、又もお前に苦勞をかけ、それを見てゐる私がつらさ、いつそ是なら木更津で、水に溺れて死んだなら、この恥辱を見まいと思ひ、それで私は」ト驅出すをよろしく止めて。多左「コレ何を短氣なそんな事を、手前を殺してすむ事なら、船から揚げた其後に、此鎌倉へ連れて戻り、粃養生から後々の、肥立つ樣にと醫者よ藥と丹精をするものかえ。今戻つた與三郎が、譬へばお主

かりの、こりやアお返し申しやす」ト前へおく、蝙蝠安こなしあつて。蝙蝠安「これさ〳〵與三公、そりやア何をいふのだ、今旦那がいはつしやるのは、お富をつれて行きたけりやア遣らうといはつしやるぢやアねえか、併し今夜オイそれと行かねえから、そこで此金だらう、ノソレよしか、マア此金を持つて今夜は歸らつし」與三郎「エヽよせ〳〵、これ許の金でどうなるものか」蝙蝠安「これさ分らねえ、手切とか足切とかいつて、判證文の取かはせする譯ぢやアあるまいし、いはゞ十四五兩無證據の。イヤサ無商賣のお主の事だ、マア〳〵金をもつて、エヽ是を資本にして。ナよしか、又どうでもなる事だワな」ト宜しく執なす思入、與三郎も科あつて。與三郎「いゝワエ解つた、お主もそんなにいふものだ。今夜は是を持つて歸らうよ」蝙蝠安「それが可い〳〵、サア〳〵行かつし〳〵」與三郎「これさ待ちやれな」ト多左衞門へ對ひ科あつて。「俺が方には言分こそあれ、何にも恩情うける事のねえ俺だが、手前が段々譯をいふから、俺は此金を持つて歸つてやらう」多左「ムヽそんなら俺が詞に任せて」與三郎「サア晝へ今夜は歸つても、お富が身體はこれ限にはすまねえよ」ト お富へ思入あつていふ。蝙蝠安「ハテそれは知れた事だ、そんなに駄目を押さずと早く歸らつし〳〵」ト多左衞門へ思入あつて。「こりやモウ大きにお喧うござりました。サ歸らつし〳〵」ト無理に迫立てる、門口へ出る、與三郎捨白にて門

書いてある山形に丸は俺がしるしだワ、それを見忘れては濟むまいが」幇間安「ヘイ〳〵イヤモ面目次第もござりませぬ」トもぢ〳〵科、與三郎こなし有つて。與三郎「何だ〳〵俺を待てと止めておいて、安にぐづ〳〵いふにやァ及ばねえ、俺が方の方はどうするのだ」多左「その譯も今つける」ト此内紙入の中より金入を出し、中より小判小粒南鐐など大分、鼻紙の上へ明けて、一寸數を概略に見るこなしあつて。「サァ與三郎殿、こなたもお富が兄だといはつしやるからは、他人と思はないから言ふのだが、見ればまだ年は若し、元より賤しい人の子とは、どうやら見えぬ褄はづれ、それに見りやァ顏は元より、總身へすさまじい刃物の疵。又過ぎし頃、このお富を助けた時、やつぱり身中に刀疵、それといひ是といひ、何か譯のある事だらう、併しこなたの妹ゆゑ、達つて連れて行きたいと云はつしやれば、隨分此方に遣りもせうが、今日まで爰へ養つて置くには、思ふ仔細が有つての事、併し此譯は今日はいふまい。何かは措いて爰に金が凡十四五兩、是を此方に進ぜるから、是で當分どうかして、堅氣になつて商賣を始めた上、定めて親御もあらうから、此末共に苦勞をば、かけない樣にさつしやるが可うござる。サァ左に右に此金をもつて、今夜はすべよく歸らつしやい」ト件の金を出す、與三郎見て。與三郎「それぢやァ妹のこのお富を、爰に引上げておくかはり。此金をもつて歸れとか、何のたつた是ば

ざんすワイなア」　ト思入あつて、與三郎へ呑込ませる心意氣にていふ。多左「ム、そんなら此方はお富の兄貴か」與三郎「アイ。取わけて義理のあるお富が兄に、與三郎切られと仇名のつく野郎サ」多左「ハテ可い兄を持つて幸福だワエ」　トお富へ思入、與三郎お富へ科あつて。與三郎「これお富、わりやア遮に無に兄さんごかしに言ひすくめるが、兄といはれりやア親同然、お主が體は俺が自由、この納りはどうつける」お富「アイ其の納りは」　トいひかけるを。多左「イヤ俺がつける。コウ兄貴、少し待つて下され」與三郎「早くしておくんなせえ」　ト居ずまふ、多左衛門、蝙蝠安へこなしあつて。多左「そつちの男、爰へ出さつせえ」蝙蝠安「ハイ」　トもぢ〳〵してゐる。多左「これ手前は安ぢやアねえか、爰へ出ねえか」ト蝙蝠安やはりもぢ〳〵してゐる。「これ安、こつちへ出ろといへば」　ト合方。蝙蝠安「ヘイー」ト據なく出てさし俯き。「ヘイ誠にお久しうござります。お目にかゝりますも面目ない譯でござります」　ト色々こなし。多左「これ安、手前マア何と思つて爰へ來た、汝が親父の甚兵衛は、永らく俺が店へ出入して、それで渡世する身分なれども、手前はよくせきに甚兵衛も見限つてか、十八の時其方を勘當、モウ運上して心をば治さうとはしないで、とう〳〵今の其身すから、蝙蝠安と世間でいはれ、忌嫌はれるを幸ひに、所々方々を強請あるき、其根性を改さねえと、疊の上ぢやア死なれないぞよ、門口の坂に

ふ所は分つてゐるけれど、今旦那がおつしやる通り、其時私は死ぬ所を、不思議な事で助けられ、身内の疵から色々と、介抱受けた命の親、その恩を仇にして、なんぼ私でも濟まぬワイなア、ちつとは憂世の人情を察してくれたが可いワイなア」與三郎「何だ、人情を察してくれろ。へエ、べら棒め、人情を察しるも事によるワエ、命の親が氣にくはねえ、命の親だ〳〵と吐すからは、どんな事をするかも知れねえ、安やい、さうぢやァねえか」お富「やつぱりまだそんな事、さつきもあれ程いふ通り、主に限つて是程でも」トいひかけるを被せかけて。與三郎「エ、よしやァがれ」お富「これマア靜かに」ト取さへ宥めるこゝろ、多左衛門これを聞いて。多左「これこれお富、うつちやつておけ、先刻から此男がいふのは一々尤だ、何にもいふには及ばねえ、始から俺が推量通り。しかし何とそつちでいはうとも、お富を爰に斯うしておくも、氣障な事のない譯は、お富が心を聞いて見りやァ知れる事だが、よもやお富も此俺に、假に一度も枕をかはし、添寐をしたとはいはれまい」トお富へ科あつて與三郎を見かへり。「しかし斯ういつても緣者の證據、こなたの方では疑つて、彼是いふのは、いはずと知れたお富が爲には」與三郎「オオ知れた事だ、俺が爲には」トいひかけるを、此中お富こなしあつていひ消す心にてとめて。お富「ア、これ兄さん〳〵」與三郎「ナニ兄だ、エ、そりや何を」お富「アイ兄さん〳〵。兄さんでご

も斷らねえ、又世話をやいた者もねえ、様子を聞いたか知らないが、丁度足かけ四年前、魚油の仕入に安房上總、銚子へ乘越す漁船へ便船して急ぐ道、浪に漂ふ一人の女、海賊にでも出遭うたのか、但し身投か助けんと、引揚げて見れば身内の疵、こいつは唯事ではねえと、心づけども仕様もなく、船へ揚げたで氣が緩み、息が絶えたを其儘に、海へ萬更又流すは、不憫と思つて色々と、手當をする中よみがへり、本腹した後譯を聞けば、仔細をつゝむお富が様子、元より身寄の者はねえと、さつぱりいふから此家に、昨日今日だと思ふ中、月日の經つは早いものさのウ」トこなし。與三郎「なる程そこは分りやした。其時助けて下された御深切は有難い、そこはお禮を申しやす。お忝なうござりまするが、それから後が氣にくはねえ、お前も見りやア店勤、大所の番頭さん、妻さんといつても無え様子、どうやらお富と差向ひ、是から後はいはねえでも知れたもんだ、女も女だ、默つて居るのは時につれ、番頭さんの襟につき、此俺をば突出しものに仕やアがるかエ、どいつも此奴も性根をすゑて挨拶をしやアがれ、何の馬鹿な面な」トどつかり坐る、お富此中立かゝつて。お富「エヽこれお前もマア、先刻から私が默つてゐれば聲高に、モシ近所の手前もござんすワイなア」與三郎「何を吐しやアがるのだえ、近所どころか事によりやア、此人の主人の所へねぢ込んで、此譯をつけるのだ」お富「そりやアお前のい

お富「近附もあり身寄もあり、打絶えて居たものを、今宵俄に訪ねて來られ、深切に世話して下さんすお前の思はく、恥しうござんす」多左「何の恥しい事があるものか、人の浮沈は色々だ、何處にどんな所縁かゝりが有らうも知れねえワ」ト莨のみながら與三郎蝙蝠安の方を見やり、蝙蝠安、多左衛門を見て少し悄氣て顔を背ける事、與三郎、蝙蝠安へ手前口開きを言へと思入、蝙蝠安は與三郎に言へといふこなしある。「モシお前方はどうで爰へ來るからは、何か用がありませう、用から先に聞きませうよ」ト與三郎こなし有つて前へ出。與三郎「其用といつて外の事ぢやアござりません、爰に居るお富が事さ」多左「このお富がどうしました」與三郎「ハテ今お前が推量の通り、私はお富の身寄の者、足かけ三年居所が知れぬ故打絶えたが、通りかゝつたこの新道、見れば立派なしまふた屋、言はずと知れた圍者、よく〳〵見れば此女、ちつと此方に色々と、込入つた譯のある女、どうした譯で爰に居やす、誰が世話をやきやした、何處へ斷つて此家へ圍つてはおかつしやる。トサア斯ういふのは本筋だが、何か此奴がお前さんにお世話にもなつたさうだ、お禮はお禮で申しませうが、一體どういふお心で世話をやいて下さるか、そこが聞たう御座りますよ」ト思入あつていふ、多左衛門こなし有つて。多左「此女の身寄といつて、どうで尋ねてござるからは、大方その句が出やうと思つた、お富を爰へ置く事は、なる程誰に

ア、桑原〱」蝙蝠安「言はなけりやア酷いぞ、サア早くいへ〱」ト藤八を捉へ胸ぐらをしめる、藤八苦しむ。藤八「ア、切ない〱、許して下さい、いひます〱」與三郎「コウ〱安や、言ふといふから緩めてやれ〱」蝙蝠安「サアゆるめて遣るから有體にいへ〱」藤八「斯うなるからは有體にいはいで、いはいでどうせう、ありや私が勤めて居る所の丁稚だ」兩人「何だべら棒め、何を吐しやアがる」藤八「イヤサ一番番頭でござりますよ」トいひながら狼狽へ迯げて入る、與三郎「何だうろたへて迯ぎやアがつたな。サア是からは手前が對手だ、有體にいつて終へ」ト詰寄る、此以前より多左衞門先に丁稚つき添ひ出て來り、門口へ來て内の樣子を窺ひ、丁稚に囁き、多左衞門丁稚に戻れといふこなし、是にて丁稚引返し入る、此途端に多左衞門此時内へ入る。多左衞門「イヤお富が口から聞かうより、俺がいつて聞かせませう」ト是を聞き與三郎蝙蝠安見て。蝙蝠安「ヤさういふお前は」與三郎「お富さんの旦那かえ」ト兩人顏見合せ居住ふ、多左衞門二重へ直る、お富よろしく科。お富「ホンニお前は旦那さん、今日はお仲間の參會ゆゑ、まだお戻りには間が有らうと思ひましたに、いつよりはお早うござりましたなア」ト何氣なき體、湯呑へ鐵瓶の湯をつぎゆかりを入れ多左衞門へ出す。多左「サア今日は仲間の衆も呑人も少い故、思の外早く濟んだが、さうして此衆はお主の身寄か、近附か」ト何氣なく聞く、お富科あつて。

安や、さうぢやァねえか」蝙蝠安「違ねえ〳〵、今お主がいふ通り、此美しい代物を、金にはあかして療治をした其上で、こんな家へ圍つて置き、唯遊ばせて喰はせて置く、そんな奇特を箆棒が、今時に何あるものか、そこは何だか分るものかな、お主も此女故にやァ偉大しい苦勞して今の身の上、切られ與三郎とか謂はれるからだ、俺も又蝙蝠安だ、モウ打ちやつてはおかれねえぜ、お主はどうする積だ」與三郎「知れた事よ、居所の知れたが幸だ、今此奴を世話をして居る野郎をばつらまへて、其筋を立つた上、お富を俺が女房にするか、または手切れと下素ばるか、俺が面を立てにやァ措かねえ」トきつと科、蝙蝠安うなづいて。蝙蝠安「違ひなし、そいつが極だ。おぬしやァお富故に手ひどい仕置も、滿足な身體ばかりか、其面へ受けた三筋の刀疵、俺も名代の蝙蝠安、三筋に蝙蝠は遁れねえ中だ、これからは俺も手傳ふのだ」ト是まで藤八始終の樣子聞く度に驚く思入、可笑味いろ〳〵あつて慄へゐる、此時密と二枚折の屏風の影より顏を出す、與三郎見て。與三郎「先刻からまじ〳〵として居やァがる此奴が、お富を世話をする野郎めの慥に友達だ」蝙蝠安「ム、よい所へ氣が注いた」ト藤八たまりかね迯げうとするを引捉へて。「手前は何處の奉公人だ」與三郎「お富は誰が世話をする」兩人「それをいへ〳〵」ト色々こづく。藤八「イヤ〳〵私は知らぬぞ、其樣な事は知らぬ〳〵。コリヤマア情ない目に逢ふことだ、

を逃げのびて、命を助り斯うした態は何の事だ、それぢやァ濟むめえ〳〵が、エヽ」トお富の胸倉を取り、色々思入あつて「サァ誰の世話で爰にゐるのだ、今聞きやァ立派な亭主があると云つたが、亭主は誰だ、何處の誰奴だそれを吐せ、それないへ、きり〳〵ぬかしやァがれ、エヽ」ト思入、お富この内ぢつと科あつて。お富「エヽモ静におしな、マァ私がいふ事もとつくり聞いた其上で、どうなとしたが可いワイなァ」與三郎「いふ事があるなら早くいへ」お富「私も其時ながらへる心ならねど、湊から海の深みへ捨つる身も、漂ふ浪の夢うつゝ、漕行く船へ引上げられ、藥よ醫者よと手厚い介抱、其お蔭にや甦り、今は斯うして居るものゝ、圍はれ女とは表向、枕かはすは扨おいて、色めいた事はこれ程もなく、今日まで暮すその中も、此家の留守を預つて、女の役の針仕事、勤著替の裾直し、樂すぎるだけ生中に、心苦しう今日明日と、過る月日も三年越、義理に迫つて暮す内、お前は此世にござんすか、但しは其時死なしやんしたか、便り聞かねば逢初めて、枕かはせた其日をば、お前の命日忌日ぞと、忘れる暇はないものを、今の樣なる怨言、そりや聞えぬ胴慾ぢや、聞えぬワイなァ」トお富思入あつていふ、與三郎煙草のみゐて。與三郎「いゝ加減にやすめろえエ、半死半生でゐるものを、醫師よ藥よと手當をして、やう〳〵達者な身體にして、斯の通り圍つて置く、誰がたゞおく奴があるものかえ、ナァ

サたつた二百でも歸る場もあり、百兩もらつても歸られねえ場所もあらア。サア俺が掛合ふのを、そつちの方で見て居ねえ。モシお富、イヤサお富さん、コレお富、久振だなア」ト手拭をとる。お富「エ、さうしてお前は」與三郎「與三郎だよ。おぬしやア俺を見忘れたか」お富「エ、エ」ト惘れる思入、藤八慄へる、蝙蝠安こなし、誂の合方。與三郎「しがない戀の情が仇、命の綱の斷れたのを、どう取留てか木更津から、めぐる月日も三年越、江戸の親には勘當受け、據所なく鎌倉の、谷七郷は喰ひ詰めても、面へ受けたる看版の、疵が勿怪の幸に、切られ與三と異名をとり、押借強請も習ふより、慣れる時代の源氏店、そのしらばける黒塀に、格子造の圍女、死んだと思つたお富とは、お釋迦樣でも氣はつくめえ、よくもお主は達者で居たなア。安やア、これぢやア一分ぢやア歸れめえぢやねえか」蝙蝠安「なる程こいつは。一分ぢやア歸られねえワエ」與三郎「コレ木更津に居たその時は、其方も亭主のある身體、それと知りつゝつかりと、はまり込んだは此方も不覺、其かはりにマア此通り」ト身體の疵へよろしくこなし有つて「身に過があればこそ、ぢつと蟄して居るを見て、源左衛門めが非道の手込、殺しもやらず斬り苛責む、其俤は此疵だワ、手前も其時海松杭に追詰められた木更津から、海へ洶然飛込んだと、聞いたる時の俺が心、今に忘れず思出し、心で念佛を申して居たに、わりやア其場

ワ、それに何だ、たつた百とは餘り人を唐變木にするなえ、べら棒め、年が年中お蠶ぐるみの身で居やァがつて、重いものと云つたら箸か煙管、枕の下へ手を入れりやァ、いふ目の出るお前のからだ、それだから貰ひに來たのだ、それに何だたつた百ばかり、扱ひだも凄じい、そつちの方へすつ込んでうしやァがれ」ト藤八「お富さん、こりや偉らう難かしくなつて來たぞえ」ト跡へ引退る。蝙蝠安「ナニ篦棒め、ぐづ〳〵吐しやァがると擲きなぐるぞ」藤八「ヤァー」ト藤八恐れる科あつて宜しく控へる、蝙蝠安よろしく捨白あつてきつとなる、お富こなしあつて。

お富「かうあんまり騷いでおくれでないよ、近所隣へ恰好がわるいワな、靜におしな、私にも歴然とした主のある體、何もおつう厭味をいはれる譯はないが、彼是と面倒だ」ト葛箱の引出より一分銀を出し紙に拈り。「サア是を持つてお歸り」蝙蝠安「それだから先刻から、此方はお妻さんに賴申すのだ。それに彌次馬に出やァがつて、何だ其面ァ」ト藤八へ思入しながら、右の金を與三郎の方へこなしあつて。「オイ兄ィ聞いたか、お妻さんは流石に苦勞人だ、あの通り段々いひなさるものだから。是をお貰ひ申して行かうぢやァねえか」ト一寸見せる、與三郎へ思入。

與三郎「よせ〳〵返してしまへ」蝙蝠安「エヽ。それでもあんなに譯をいふものだから」ト合點の行かぬ思入。與三郎「返して仕舞へといふ事よ」蝙蝠安「そんなら是でも少ねえからか」與三郎「そりやァ。

うとも、隨分わからうと思ふ筋があればこそ、來たのでござりやす、モシたんとの事ぢやァござりやせん、どうかして遣つておくんなせえな」お富「モシ今聞いてゐれば、おつに絡んだ物のいひやう、何も私の所で隱賣女や勝負事の宿をしたといふではなし、何も後暗い事はござんせぬ、しらこの町家の住居、何にもお前方につけこまれて、無心をいはれる覺はござんせぬヮイなア」蝙蝠安「そりやァ仰しやる迄もなく、これが天秤棒を肩へかけて、一貫の資本で四百儲けるといふ、しがねえ暮しの所なら、こんな事もいつちやァ來やせんが、マアお前さんなんぞは年が年中お蠶ぐるみで居なさるお前さんだ、モシたんとの事ぢやァござりやせん、どうかしてやつておくんなせえ。モシ一服貸しておくんなせえやし」トこの內よろしく藤八思入あつて、此時中へ入り。藤八「最前から私も默つて是に居つたが、何をいふにも主人の留守、どうも仕樣のない事ぢや、所で儂が扱ひぢや、甚だ輕少ではあるけれど、この儂が心ばかり、マアマア是を取つて今日は不承して歸らつしやれ」ト紙入より當百一枚出し鼻紙に包み、蝙蝠安に出す。蝙蝠安「コリヤ有難うござりまする」ト手に取り捻くつて見て。「これ見や、草鞋錢がたつた百だ。モシ有難うござりますが、こりやァお返し申します」藤八「ム、そんなら其錢は要らぬのか」蝙蝠安「いらないから返すのよ、大の男が二人來て、是を薪にしても一貫や二貫の代物はある

つて。お富「アイ誰方でござんすえ、こつちへお入りなさんせ」蝙蝠安「ヘイ眞平御免なされい」ト内へ入り。「御新造さん、此間は大きに御厄介になりました、有難うござります」お富「お前は日外やのお方、何でござんしたえ」蝙蝠安「ヘイちつと申兼ねた事ぢやァごぜえますが、又少々お願があつて參りました」お富「又お前そんな事を云つて、此間もあれ程譯をいつてあげたではござんせぬか、殊に縁もゆかりもないお前、そんな形をして度々來られては、近所の前もあり、誠に此方では迷惑でござんすワイな」蝙蝠安「そりやァモウお前さんのおつしやる通り、參られた義理ぢやァごぜいやせんが、この間モシわつちらが友達が喧嘩をして、大きな怪我をしました、そこでマァわつち等が寄つて世話をして、湯治にでも遣らうと思ひますが、御覽なさる通りの始末だから、御近所を少々づつお願ひ申しまする積で」トいひながら立つて門口へこなしあつて。「與三や、こつちへ入りやな。モシ此野郎でごぜえます、何分お賴み申します、これお禮申せお禮申せ」ト此内與三郎手拭を被りしまゝ内へ入り、下手へ小さく畏りゐる。與三郎「そりやァ大きに有難うござります」ト思入。お富「何の事かと思つたら其事でござんすか、折角のお賴ではござんすけれど、今日は生憎と旦那も留守なり、さう度々は私にもし難いに依つて、マァ今日はお斷り申しまする」蝙蝠安「モシさうおつしやつちやァ物がねえ、譬へ旦那がお留守であら

テ廢せというてどう廢されるものぢや。ア、誰に見しよと紅かねつきよぞ、みんな主への心中だて。とは有難い」ト好の合方、思入ある、お富心いきあつて。お富「ア、モシ藤八さん、そんな事いはしやんすなら、早う戻つて下さんせ」トぢつと腹立つ思入。藤八「何ぢや戻れえ、それでもお前がマア茶がはいるから、寛りとして行けというたぢやないかいの」トこなし、お富ひよんな事いひしと思入。「ア、思へば是が浮世の習ひ、一つ旦那へ奉公はして居れど、多左衛門殿は働者とはいふものゝ、よくせきに果報者なればこそ、お富さんの様な女子に思はれ、それを自由に寵愛してござるとは、よく〳〵よい月日の下に生れたと見えるワエ、ア、羨ましい事ぢやなア」トこんな事いひながら段々側へよる、お富迷惑なる科よろしく、右の合方、時の鐘、この内向より蝙蝠安先に、跡より向疵の與三郎、頰被り好みの形にて出て來り、花道にてこなしあつて與三郎「蝙蝠や、手前が此間行つたといふは向方の家か」蝙蝠安「さうよ、隨分わかりの可い家だ、行て見や」與三郎「さうして今日はどうするのだ」蝙蝠安「ナニ今日は小遣取をする積だ、マア俺が先へ行くから、手前門口に待つて居やナ」トこんな事をいひながら門口へ來て。「俺が先へ入つて段どつておいて、それから呼込むから其處に待つてゐや」與三郎「ム、よしよし」ト思入、蝙蝠安門口をあけて。蝙蝠安「ヘイ眞平御免なせえ。モシ御免なされませ」トいふ、お富こなし有

せ」藤八「ア、これこんなお世話になる事なら、何ぞお土産でも持つて來ねばならぬのぢや、アノ鈍な事してのけたワエ」ト思入あつて此内紙入より一寸二朱金一つ鼻紙へくるみ、外に一包拵へる事、此内雨車やむ。下女「ドレ私は傘を一寸戻して參ります」ト立かけるを、藤八下女を引とめ、「二朱の包を出し下手にて遣る事。「イエこんな事は」ト捨白の樣に斷る事。藤八「ハテマアよいワイの」ト仕方でよろしく一つの包を出し、酒肴いひつける心にて囁く故、廢せと下女手にて仕形する、藤八、ハテ行けといふ心意氣よろしく、下女是非なく。下女「ドレ傘を戻して參りませうか」ト傘を持ち下手へ入る事、お富これに心づかず、此内に身仕舞して終ふ事、鏡臺を片寄せて。お富「お前さん一人捨てゝ置いて、身仕舞して居りました故、お構も申しませぬ。モシ藤八さん、勘忍して下さんせえ」藤八「何の〳〵心置なく何なりともさつしやりませ、こちらも遠慮なしに煮花をば御馳走になりましたが。ア、大層によい茶だ故、どうやら浮されて今夜はどうか寐られぬ樣だワエ」お富「お前さん、うかされなさんしたら、何處やらで嘸嬉しがる女中さんがござりませうねえ」藤八「アハヽヽヽ、よしてもお吳ぢや、お富さんおだてさつしやんな」トこなし有つて少し摺寄り。「イヤ先刻風呂から戻らんした其時も、綺麗なものぢやと思つたら、今又身仕舞をさつしやたら、又格別に美しいものぢやなア」お富「エ、モよして下さんせ」藤八「ハ

し多左衛門殿には別して固いお人故、斯うした休息所はありながらも、滅多にはござらぬ樣子、所で私が呑込んで、折々は行きなされ〳〵と勸める樣にして、こつちへ泊りにおこしまする。モシ女中衆、あんな固い人でも此方へ泊りに御座つて、お富さんと睦言の痴話などといふ樣な事がござりまするかな」下女「オホヽヽヽ、どうで御座りまするか、そんな事は知りませぬワイなア」藤八「所で私が多左衛門殿にいふには、アヽしてお富さんを内密ものにしておかうよりは、表向御内儀の弘めをしてはどうぢやといふたれば。イヤあれはチト仔細あつて三年以前田舍より連れて戻つたが、私が女房にするといふ譯にも行かぬ者なれば、何處が相應な所があらば、片づけて遣りたいと、この樣にいうてゞ有つたが、どうも一圓合點が行かぬて、併しマアお富さんが何所へ緣づかうと、眞實思ふ了簡なら、隨分そりやア爰等邊にも、望人はないでもないが、斯うやつて世話をして置きながら、今更餘所へ遣らうとは、多左衛門殿の了簡が分らぬて」ト考へるこなし。お富「ホンニさうで御座んす、私もかうして三年越、深いお世話になつてはゐれど、ほんの床の間の置物同然でござりますワ」藤八「ハアそれでは彌々多左衛門殿の胴が本當かしらめて」と思入、この時下女茶を汲み持ち出て。下女「ハイお茶が入りました」ト湯呑の茶をお富の側へそつと置き、藤八へ茶を出して。「お煮花が出來ました。お一つお上りなされま

ワエ。傘を一本お貸しなされませ。是は御内室お世話になりました」トもじ〳〵立ちかける故」お富「ア、申しマアお待ちなされませ、珍らしい貴方のお出、今折角お茶の支度も致しました、マア一つお上りなされませ、其儘にお返し申しては、宅で戻ると私が叱られまする」藤八「アアモシ滅相な、お前さんを叱らせては私がすみませぬ故。そんなら折角のお志、お煮花を一つ下されませうか。ハヽヽ、併しマアお前を叱らすまいとて私が長居して、却つて多左衛門殿に私が叱られうも知れぬワエ」下女「是はしたり、内の旦那は其様な事には頓とお構はござりませぬ、誠に粋なお氣質でござりまするワイなア」藤八「サア其粋な多左衛門殿なればこそ、斯うした粋なお富さんを世話をしておかつしやるてな。とはいへ女子二人の所へ、私らが様な男が一人永居して居るのは、譬にもいふ猫に鰹節」お富「エヽ」トこなし。藤八「鰹節は本土佐ぢやが、肝心の此方がどら猫かも知れぬワイの」ト思入あつていふ、是にてお富身仕舞しながら、思はず笑ひ。お富「ホヽヽ。ほんに可笑しい藤八さんぢやワイな」トいひながら顔をしてゐる、此内下女茶を入れる事。藤八「イヤ又店向の格式などいふものは堅いもので、まづお前方も定めてお聞及でもあらうが、私共の大旦那は三年跡から、笹目が谷の別荘へ隱居さつしやれて、店はこつちの多左衛門殿を始め、私等が預つて居る故に、猶々固くせにやならぬぢや、併

の好み、下に一間上下二段の押入、上の方中窓、同く壁、船板の羽目、家臺一面大和ぶきの庇、二重の紐、腰障子一間の家臺、前面竹の打附窓、此前へ栗丸太好の門口を押出し、四ツ目垣へ卯の花の盛り、海棠の臺、實木、庭の模樣よろしく、二重よき所に箱火鉢、菓子簞笥、鏡臺など置並べある事、右の鳴物にて道具納まる。

ト下手よりお富先に藤八お福つき、件の傘を持ち出て來り。藤八「なる程、こちらが表口ぢやな、此間は是から參りました故、裏口はとんと勝手が知れなんだワエ」ト此内お富さきへ門口へ入り上へあがる事、お福莨盆を出して。下女「サア〳〵一服お上りなされませ」藤八「モウ〳〵構はつしやるな〳〵」お富「コレお茶の支度をしや」下女「ハイ〳〵」ト立つて明りのつきし行燈を出し、在合ふ土瓶の茶を汲出して。「マア是を一ツお上りなされませ」ト在合ふ菓子箱を出す、藤八こなしにて茶をとる事。お富「モシ貴方、御免なされませ」ト會釋して鏡臺を出し、お富髮を搔上げ顏を直すこなしよろしく、この内下女お福、茶拵へする、藤八煙草のみゐる、この内下女へお富顏直しながら差圖する事。下女「唯今直にお煮花が出來まする、マ一つお取りなされませ」藤八「アヽモウ〳〵構はつしやりまするな、多左衞門殿は今日は爲替仲間の參會へござつて、どうで戻りは遲うござらう、其留守へ參つて無遠慮千萬。アヽ段々雨がやみました

「藤八さんでは御座んせぬかえ」藤八「ヤお前は。オヽ大番頭の御内室ぢやな」ト思入。下女「生憎降出してさぞお困りなされませう」藤八「さて〳〵女中方は目かどの強いワエ。私は先達て多左衞門殿が家にござる其時に、一寸爰へ來事は來たが、この源氏店は同じ樣な家ばかり故、とんと氣が注きませなんだワエ」お富「モウ今にやみませう、御遠慮なしに少しやめてお出なされませ。コレお伴申しな」下女「さア〳〵お出なされませ」藤八「イヤ〳〵併し女中ばかりの所へ參つてお世話になつては」お富「何のそんなお心遣がござりませう」下女「傘もお店のが參つて居ります」お富「マア〳〵やめてお出なされませ」藤八「デハお言葉に隨ひませうかな」お富「サアお入りなされませ」ト下女お福先に立つて件の入口へ手を入れ、垣鍵を拔いて開をあける。藤八「ハヽア爰に入口が御座りますな」下女「ハイ爰は裏口でござりますよ」お富「マアお入りなされませ」トやはり雨車、かすめて右の合方にてお富先へ入る、藤八思入あつて、後より下女お福、開きより入り垣鍵をかける、是にて風の音、合方かすめて雨車になり、此道具寛やかにぶんまはす。

返し

本舞臺三間の間、常足大阪づち下地窓の欄間、上の方に三尺の床の間、是へつゞき大阪土の壁、腰張

頭の多左衛門めを仕舞ひつけるは。ム、、それには是ぢやて」トこなし有つて、以前の海松杭の松五郎が手紙にくるみし毒薬包を紙入より出して。「日外や弟の海松杭めが、何か入用だといふから、態々届けた此薬、又戻したが天の與へ、是さへ用ふれば譯はなしと。其上彼奴が爰の宅へ圍つて置くお富とやらいふ、あの美しい中年増を、此藤八が獨占。それで一生の望も足り。これが當時流行の藤八五文、奇妙ぢやてハ、、、。さう味くゆけばよいが」ト思入、此内かすめたる風の音、雨車をうすくあしらふ。「ヤァ〳〵こりや生憎ぼろついて來たワエ、いつそ爰へ入つて傘を借りようか、ア、困つたものだ、どうせうなア」トまご〳〵思入あつて手拭を出し頭へのせ、見越の枝の下にて雨を凌ぐ思入、是を流行唄になり、向よりお富、好の拵へ湯上の形、垢摺つきし手拭、糠袋を持ち、浴衣をかゝへし下女のお福つき添ひ、兩人とも駒下駄、好の傘さしかけ戻りし體、花道より出て來る、藤八それと見て態と待合せる思入。下女「申しおかみさん、此頃の日和癖にも困るでは御座りませぬか」お富「それでも甚い降はあるまいよ。しかし此傘はよく禮いうて直に戻すがよいぞや」下女「かしこまりました」トこんな事いひながら舞臺へ來る中に藤八を見つけ、お福こなし。「アレ誰方やら雨を凌いで」お富「どうやら見た樣なお方では」ト此内藤八花道の方へ行くを下女お福見て。お富「ヤお前樣は慥にお店の」下女

咡く。「斯う致してはとうで有らう」ト藤八聞いて。藤八「そりや可うござります。そこでお前樣にも申して置けば彼の品が」ト又平馬へ咡き。「斯うでござりますぢや」ト平馬聞いて。平馬「ム、ム、。スリヤあの香爐はとつくに貴樣が質藏からちよろまかして」藤八「ア、コレ」ト又咡く。平馬「イヤ面白い〳〵、さする時には其虚に乘つて、あのお鶴めを身共の方へ引上る、丁度手段の壺へはまるワエ」藤八「それでは今宵の事にも行きますまい、いづれ貴方は私が店へ」平馬「明日表向にて罷り出るぞ」藤八「そこで私は店に居りませぬが、可うござりますか、外の者が出て一應の掛合致し、所で其時貴樣では分らぬ、シテ二番番頭の藤八は何處にあるとおつしやるをきつかけに、此藤八が出てさら〳〵と片づけますワ」平馬「よし〳〵、手筈は萬事呑込んだ。然らば明日參るぞよ」藤八「よろしうござります」ト平馬此中立上るを。「ア、モシモシ平馬樣、唯今申した彼の一件」平馬「ム、。シテ二番番頭の藤八は」藤八「私が出てさら〳〵さら」平馬「コリヤ其きつかけを必ず共に」藤八「イヤ私より其許樣が」平馬「ハテ呑込んで居るワエ」ト流行唄になり橋懸へ入る、藤八跡に殘りこなし、時の鐘合方。藤八「ハ、、、。まづ香爐の一件も、あの平馬樣が手形をば取隕したが勿怪の幸ひ、丁度こつちの手筈の掛良、彼の品はわれらが手で盜出し、松兵衞にも呑込ませて置いたれば、是もよしと、此上は邪魔になる大番

其方にも申した通り、先刻彼のお鶴をば見つけた時は、恥かしながら心も空、有頂天へ魂は飛上り、直樣邸へ連歸り當人を引とめし上、赤間源左衞門を以て掛合せ、望を叶へうと思ふ所へ」藤八「そりや唯今聞いた隼人の女房が參つた故に、邪魔となつて」平馬「お鶴も其儘見遁す始末、勘平ではなけれども、する事爲す事鶍の嘴、併し其儀はどうともなるが、心ならぬは彼の書附だて、置主は麗々と身共が名を記しあれば、もしひよつと面倒な奴に拾はれては困るてな」藤八「イヤ〳〵そりや御心配はござりませぬ。何もあれより眞鶴の香爐とぴつたり書いてありはせず、言譯はどうでもなりませう」平馬「デモあの書附を以て、香爐を若も餘人が質受しては、此方の手段が」藤八「ハテ元利金二百五十兩といふ金高ゆゑ、大抵の者には、第一に其金が出來ますまいて」平馬「併しながら元利金二百五十兩へ右の書附を添へ、引替に香爐を受取る約束、其の書附をなくした故、身共が質請するにもせよ、其方が店で不承知を申しはせぬか」藤八「そりや申します。大切な品を預りました手形がなくなりました故、一應は申しますが。其時には外の者では分らぬ程に、手代の藤八に掛合はう。シテ手代藤八は何處にあると仰しやると、そこへ私が罷出、さら〳〵と埒明けまするワ」平馬「ム、賴もしい〳〵、それで身共も安心だワエ、國許よりあの隼人めが女房が罷越した時宜といひ、延々には相ならぬ ム、」トこなし有つて

の香爐を質入なしたる預り手形」與五郎「其質入せし有所は、先刻遇ひしあのお鶴が縁ある家の和泉屋にて」小笹「香爐の置主は山鹿毛平馬ム丶。此書面にて實否を糺さば」與五郎「正しく寶の盗賊」小笹「コレ密に〱」ト兩人宜しく、此仕組早大拍子にて道具ぶんまはす。

本舞臺三間の間黒塀、上に忍返し、よき所へ三尺の出入口、此上四方の板へ謎の印付け細みの三布中暖簾、此下へ竹の扉戸、爰より出入、此上にも板塀切拔窗、竹の打つけ、内より簾をかけ、下手の見切地境路次に建仁寺垣など、黒塀の下に用水桶、是へ雪の下源氏店と記したる所書、塀より見越の松、海棠など好の通り、すべて妾宅裏手の模樣、爰に青竹に拵へし涼臺据ゑてあり、中程より流行唄にて道具納まる。

ト爰に以前の和泉屋手代藤八、山鹿毛平馬の兩人立かゝり居て。藤八「モシ平馬樣、爰は私が店の大番頭、多左衛門が休息所、御遠慮はござりませぬ」平馬「ム丶扨は貴樣が店の後見致す多左衛門とやらの妾宅かな」藤八「マアそんなもので御座ります」平馬「しかし餘人に聞かせるも如何」ト竹床几を見て。「幸ひの此店先で話さうか」藤八「デハ是で承りませうワエ」ト右の床几へナけ。「扨ひよんな事をなされましたな、それでは先刻お渡し申した彼の香爐の書付をば」平馬「面目ないが取落したて」藤八「これは又お前樣も麁粗千萬、どうした者でござります」平馬「されば

郎殿」與五郎「まことに貴女は小笹樣、ようこそ爰へ」ト兩人こなしあつて。小笹「コレちとこな樣に尋ねたい事が、マア〳〵爰へ」ト是にて與五郎床几へかける。與五郎「シテ私に御用とはえ」小笹「最前其場で尋ねようとは思へども、人目もあれば其儘に、早速に聞きたいは。これ此方の外に定めし兄弟が御座らうがの」與五郎「ハヽハお仰の通り私の其外には、與三郎と申しまして、なさぬ間ゆゑ、猶以て私が爲には義理ある兄。惣領の事故に、親父樣の名跡を相續なさると極りしを、血脈の弟の私へ義理立なさるゝお心でか、うつて變りしお身持ゆゑ、窮命の爲と木更津にござる其中に、又候不慮の事起り、其風聞が江戸へも聞え、程なく親父樣が久離きつての御勘當」小笹「ムヽそんなら世間の噂に違なく、アノ與三郎殿には勘當を」ト愁のこなし。與五郎「今は此鎌倉に漂泊なされて御座ると聞き、お目に懸つて屆くだけはお力にならうと思ひ、それ故江戸から態々と」小笹「テモ優しいこなたの心根、それに引かへ不所存者の與三郎が、其爲にはコレ實の母でござるワイのう」與五郎「そんならいよ〳〵お前樣は、兄者人には血を分けた產の母御でござりましたか、思がけない此お目見」ト科あつて、以前の一札を出し。「早速ながら貴女樣へお目にかけねばならぬ品が」小笹「ナニ妾へ見せる其品とは」ト一札を出し。與五郎「モシ。これでござりまする」ト小笹取つて披き見て。小笹「ムヽ。コリヤ一札。文面には作彫の鶴

るを立廻つて引付け。「子供そばへの一文奴め、きり／＼消えてなくなれ、エヽ」ト投出す。清八、權助「イヨ親玉」ト賞める、中間逃げて入る。お鶴「そんなら必ず、與五郎さま」與五郎「その中わしが」清八「ハテマア爰は」權助、お米「マアお出なされませ」ト唄になり、お鶴、お由、權助、清八も送り心にて、長吉附添ひ橋懸へ入る、與五郎殘り、跡見送りこなしあつて。與五郎「アヽ思ひがけなき災難を、救つて下さる小笹樣は、兼て噂に聞及ぶ兄與三郎樣の實の母上。どうやら此方が身の上も、推量なされし先刻の素振、何にしろ今日此所でお目にかゝるも盡せぬ緣。アヽ是につけても兄者人に、どうぞお目にかゝりたいものぢやがなア」トこの以前、平馬がお鶴へしなだれし折、下手へ落せし手紙を拾ひ、披き見て。「ヤヽ何やら手紙が。ムヽ心ならぬ此文面、もしも噂の香爐をば。ムヽナニ／＼預り申す質物の事、一、元金百五拾兩也、但し金の無垢作、彫無銘鶴の香爐一ツ、右の品我等方へ相預り、書面の金子御用立申し候ふ處、此程御請戻しなされ候ふ趣、然る所年月相經ち候ふ故、元利〆金二百五十兩に相成候へば、右の金子並に此書面引替に、香爐相違なく御渡し申すべく候ふ、其ため一札依て件の如し。月日。和泉屋手代藤八。宛名は山鹿毛平馬樣へ、ムヽこりやよい物を拾つたワエ」ト科あつて懷中する、合方になり上手より小笹、窺ひ／＼出て來り。小笹「オヽそなたは先刻の與五

ば、此場はこのまゝ御同道を」平馬「ハテ二人の奴等を見す〳〵爰に」小笹「ハテ何であらうと主命なれば」主水「一先屋敷へお供を致して」平馬「とはいふものゝ」ト一寸立かゝるを。小笹「ハテマアお出なされませ」ト唄になり、平馬じつと思入、小笹こなし、皆々小笹へ禮をいふ心いき、主水之正附添ひ上の方へ入る、荷擔の男は此前に入る事。與五郎「オヽ思がけなき今の災難」お鶴「小笹様のおかげにて、納まるのみか憎らしい平馬づら」お米、兩人「よい氣味であつたワイなア」清八「アヽこれ〳〵壁に耳、滅多な事を謂つては悪い」權助「又災難のない中に」與五郎「お鶴殿にはマヽ爰を」お鶴「とはいへ貴方に今爰で、お目にかゝつてそれなりに」清八「ハテそれは私がこの女中へ」お米「御約束申したれば」權助「わつちも共々手引して」お米、三人「お願は叶へまする」與五郎「サ少しも早う」ト是にて皆々立上る、捨白よろしく、此時中通り一人、紺看版の中間の形にて窺ひよつて。中間「女め汝を」トお鶴へ蒐るを權助止めて。權助「ヤお鶴さんへ手をさへるは」皆々「扨は今の侍が」中間「オヽ如何にも旦那へ」ト蒐るを此内よき程より以前の金神長吉窺ひゐて、中間を突廻しきつと見得、中間見て。「ヤ邪魔立するな、この小僧めが」長吉「オヽ邪魔をしたが何とした」ト中間何をと蒐るを立廻つて腕を捩上げ。「此金神の長吉が、送つて戻るお鶴様へ、指でもさしたら料簡しねえぞ」ト振解いて締めに來

五郎へ拔かけるを小笹宜しくとめて。小笹「アイヤそこを荒だて言はぬが花、往來も繁き此境内、マア何事もこれなりに」トよろしく科あつて。「御料簡遊ばしませ」ト思入。平馬「よいワ、女の事は此儘に許してくれるワ」お鶴「エヽ有難い、是といふも貴方がこれへお出なされしばつかりに」與五郎「無事に納まる此場の一埒」五人「エヽ有難うござりまする」ト皆々小笹へこなし、平馬小笹へ思入して。平馬「其許が事をわけ扱ふ上は、彼等が事は許し遣はす。さりながら其許の夫穗積隼人を始として、重き咎を受けながら、何故あつて此鎌倉へござつた」小笹「サア其仔細と申しまするは、殿の御内意承り、紛失なしたる香爐の詮議の爲にわざ／＼是へ」平馬「ナニ香爐の詮議とは」トこなし、此内主水之正、書狀の筥より封〆狀を出し。主水「慥な證據はこの如く、御家老職より其許樣へこの添翰」ト平馬へ差出し見せる。平馬「ナニ某へ、ムヽ。ハテなア」トこなし。主水「卽ちこれなる小笹樣へ殿の御内意あつたる證跡。イザ御落手下されい」ト右の封狀を平馬へ渡す、受取つて。平馬「ムヽコリヤこれ紛もなき役所の印鑑、家老中より某へ、ハテなア」ト色々思入あつて。「たとへ如何程尋ねても、中々香爐の有所は知れまい、どうして／＼」小笹「その知れ難き品ゆゑに、平馬樣にお目にかゝり、何かの樣子も承はり、詮議を遂げよと御家老中より」平馬「ムヽそんなら身共配慮に任せて」小笹「御談じ申す仔細もあれ

五郎へ向ひ。「コレ不義といはれて旣の事、お手討とならうとした此方の身元は、サヽ何者ぢやぞ」與五郎「ハッ私は當所の者では御座りませぬ、故鄕は武藏の江戶生れ、元山町にて鼈甲渡世、伊豆屋喜兵衞が二男與五郎と申す者」ト是を小笹聞いて恂り、こなしあつて。小笹「スリヤ喜兵衞殿の御子息、與五郎殿はこなたであつたか」ト思入あつて又氣をかへ。「ハテのウ」ト思入。お米「サアお聞きなされませ、此與五郎樣へお鶴さんは、御幼少の其折から、親御と親御が御得心づく」權助「又嫁御も息子さんも、惚れて惚られて相惚の藍屋の娘お鶴さん」淸八「與五郎さんとの其間は、まだ祝言はなさらねど、とつくに極つた」三人「御夫婦中」ト小笹思入あつて。小笹「さうした時には平馬樣が、このお鶴殿へ却つて彼是おつしやらば、どうやら不義の門違ひ。相手が町人なればこそ、侍同志の事ならば、その儘にならぬコリヤ曲事、それでも貴方は彼の者を、やつぱり不義とおつしやりまするか」平馬「オヽ不義と言つても大事ない、畢竟二人が許嫁、親と親とが許したなどとは、今となつて彼奴等が言拔、身共の方が先から執心」小笹「然らば其時親元から、貴方へ何ぞ確と致した證據ばし御座りまするか」平馬「サア證據というては」小笹「證據がなければ水掛論、それでも不義とおつしやるか」平馬「サアそれは」小笹「たゞしは貴方が不義者か」平馬「サアそれは」小笹「サア」平馬「サア」兩人「サア〳〵」平馬「うぬ」ト與

身共が此鎌倉へ出立する其頃は、夫隼人は嚴しい蟄居、忰左近は牢舍の身の上、それに何ぞや其方が是へ參り、身共へ對し刃向立も氣が強い、ソリヤ誠の侍、實の武士のいふ事だワ」ト此平馬の白の中に、與五郎小笹へこなしあつて、扨は與三郎の母かと驚くこなし。小笹「シテ又誠の侍の貴方樣が、何で彼なる町人や女子供を引捉へ、唯今の樣にはなされまするな」平馬「オオ知れた事、この毛二才奴は不義者故。それ故此奴を成敗するのだ」小笹「シテ何故に不義者とは御意なされまする」平馬「其譯聞きたくば言つて聞かさう」トお鶴へ科あつて。「彼なる娘は御領所木更津の町人、藍屋善右衞門の娘つると申して、身共兼て婦妻に貰受けうと存じ、度々親共へ申込みしに、あの玉の物のと返答等閑、その中にこつそりと木更津を立退いて當所へ參り、唯今是なる二才奴とほてくろしい、とち狂ふは言語道斷、それ故に眞二つに成敗致すが如何致した」小笹「イヤそりやチト御成敗が違ひませう」平馬「どうしたと」小笹「たとへ此娘御を御所望あつて、御内室になさらうと思召すとも、そりや貴方の手前ぎはめと申すもの、其時娘の親方から、必と貴方へあげませうと、結納の取交せ、確と致した御挨拶申した事が御座りまするか」平馬「サアそれは」トぎつくりこなし、皆々思入。小笹「それが無ければ遮つて不義とは謂はれぬ此場の時宜。オホヽヽヽ、しかしマア貴方樣は兎もあれ、兩方聞いて下知のたとへ」ト與

ですむ事ではないワ」主水「でも御座りませうが、そこを只管」平馬「エ、面倒な、そこ退かつせえ」ト主水之正を突廻し、取つく權助を蹴返し斬かける故、小笹こなしあつて、つか〳〵と立寄り、主水之正も刀へ反打かけ嚴となるを、小笹平馬を隔てゝ主水之正をコレと制す、主水之正はつと控へる。小笹「マヽ申し平馬樣、暫くお待ちなされませ」ト前へ出る、是にて皆々小笹を見てホツト落つきし科、平馬見て。平馬「ヤ誰かと思へば其許は穗積隼人殿の御内室小笹殿」小笹「思がけなきこの御出會、何かは扨おきこの場の仔細、如何の譯でござりまするな」平馬「事の顚末御存知なくば、打捨おいて下されい」小笹「サア女の身にて差控へ、是なる主水に何事か事を鎭めませうと思へども御聞濟ござらぬ故。見ますればまだ年若き町家の人、其外とても女子供、例へ何の樣の不調法がござりませうと私がお謝致しまする、サア斯樣な者をお對手になされましては、御人體のすたる事、私とても武家に育ち、女ながらも侍の道をば辨へ居りますれば、見るに忍びす此場の時宜、私が扱ひまする上は、唯何事も御勘辨を偏にお願ひ申しまする」ト思入あつていふ、平馬きつとなり。平馬「默らつせえ小笹殿、侍の道を辨へて居る故見るに忍びす、女ながらも扱に入つた。へヽハヽヘヽハヽヽヽ、イヤ傍痛いワ、其許が夫隼人、又倅の左近、二人共にあの態だ、兼て禁裏へ獻上になるべき家の重寶、預りの眞鶴の香爐を紛失させ、

ば在所に居る頃より、此方が先約に申したのだ、是非とも屋敷へ伴立て行くワ」皆々「滅多にさうは」平馬「あた面倒な。それ」ト追廻はす、早めし大拍子になり、下女はお鶴をかばふ、清八は與五郎をかばふ、權助止めるを突廻され、投げられる事など宜しく、この中向より穗積隼人妻小笹、屋敷風女房の拵、長合羽旅形、跡より綾瀨主水之正、旅形の侍、脚絆股引、褄からげ大小にて、兩掛の荷物を擔げし若い衆の供男、一本ざし胸當にて荷物へ菅笠を二つ附け出て來り、舞臺の爭ひを見て。小笹「ハヽア流石は繁華の此鎌倉、何處へ行ても巷の賑、その賑しきあまりにや、何やら彼にて多くの人が」主水「立騒ぎまするは正しく口論、往來の粗相と見えまする」小笹「對手はどうやら女子の樣。それ鎭めて遣りやれ」主水「ハヽア」ト此臺詞にて舞臺皆々ハ被せかけ、皆々この中に入替りうごき有つて見得よく與五郎へ斬かける、爰へ主水之正入り一寸止める事、此中小笹も舞臺へ來り扇子を翳し此體を見る、皆々宜しく科。「アイヤ暫らく、マアお待ち下されい」平馬「ヤイ／＼身共が是なる若者をば手討にしようと思ふをば、いらざる留立、見れば兩刀手挾むからは、物の辨もあるべきに、退かつせえ／＼」主水「サヽ御腹立では御座りませうが、刀を帶し居りますれば見るに忍びず主人の差圖、それ故に分入りましてのこの扱ひ、見ますれば町人體、外には女子の事なれば、何か不調法の段は幾重にもお謝言仕る」平馬「イヽヤ謝

房に貰請けんと、手をかへ品をかへ言入れたを、それなりに此鎌倉へ身を隱すとは、胴慾なものぢやぞよ、盡せぬ縁があればこそ此所でめぐり逢ふ。國元で見た時よりは、鎌倉風の一際派出やか、コリヤどうも耐らぬワ」ト寄添ふ故。お鶴「ア、これ滅多な事をなされまするな」平馬「このまゝに伴れて行く。サ身と一緒に」ト此内皆々顏見合せ思入よろしく、平馬立かゝりお鶴を引立つる故、皆々立寄り。下女「ア、もし御寮人樣を」權助、下女「どうなされまする〳〵」平馬「身が屋敷へ伴れて行くワ」三人「どうしてさうは」平馬「とめ立致すな」ト又引立にくるを與五郎隔てゝ。與五郎「アイヤ〳〵お武家樣、マア〳〵お待ちなされませ」平馬「いらざる女が肩持顏。それとも差出る思案があるか」與五郎「されば此娘は、なる程あなたが木更津にお出なされた其時に、御執心でも御座りませうが、是には色々譯が有つて、今この儘にお屋敷へ伴れて行かうと仰しやりましても、さう自由にはなりますまい、マア其手をば一寸お放しなされませ」平馬「此奴が〳〵、若輩者の分際で出過ぎた奴。ム、旅形でうせをるは、扨は最前よりの樣子といひ、此お鶴をば引つれて此鎌倉へ逐電の、不義の對手は汝だなア」下女「ア、モシ滅多な事をおつしやりまするな」平馬「エ、また汝も出しやばるか」下女「マアお聞き遊ばせ、あのお二人樣はまだ御祝言はなさらねど、親御樣方の御約束で、疾に極つた御夫婦間」平馬「何を癡呆めらが、申さ

と是程に御寮人樣がおつしやるからは、お心根をば少しは察して」ト手を引立つる、お鶴思入あつて。お鶴「これから何卒私と一緒に」與五郎「ア丶コレ〱滅相な、どうして此儘」下女「ハテマア一寸」ト見得よく引張る、爰へ下男權助、以前の土產物の蝶々を持出て指金のやうに遣ひ思入あつて。權助「アレ〱〱蝶さへも番ひ離れず、吾妻樣のお引合」お鶴「御神前で此樣に邂逅ふのは盡せぬ緣」下女「何であらうと」下女、權助「あそこの茶屋へ」與五郎「コ丶これ放して下され」ト爭ふ所へ以前の淸八走り出で此體を見て。淸八「ア丶これ〱若旦那、どうするのだ〱」權助「退いた〱」下女「退かしやんせ」ト兩人淸八が止めるを突退け、與五郎を引張る、この中淸八お鶴を見て。淸八「オ丶眞にあなたは木更津の」權助「與五郎さんの許嫁」下女「それ故あなたを伴れ申して」淸八「さういふ譯なら仕方がある、マア〱一寸」與五郎「爰を放して」トいふ内に又引張る事よろしく、たゞ五人心々に引合うて舞臺をぐる〱まはる、此時上手より以前の山鹿毛平馬、少し醉ひたるこなしあつて出て來り、この騷ぎを見て、此時お鶴心づき驚く事。平馬「オ丶それに居るのはお鶴ぢやないか。ゲエイ」お鶴「あなたは山鹿毛平馬樣」平馬「よう是に居つてくれたなア」ト寄添ふ。皆々「ヤア〱〱」ト思入、お鶴振切り迯げんとするを、平馬捉へ。平馬「これ〱戀こがれて居る山鹿毛平馬、身共が先年人をもつて女

郎もよろしく。權助「ホンニ吾妻樣は有難いワイなア」トお鶴こなし、與五郎床几へかける、お鶴寄添ひもどかしき思入。與五郎「誠にマア思がけない所で逢ひました。シテお鶴殿には何時頃からこの鎌倉へはござつたぞ」お鶴「サア爰へ來たのも三歲越、それといふも貴方とは、父さんや母さんのお許あつた女夫の間、片時も早う貴方のお傍へ呼迎へて下さんしたら、早う祝言した上で、天下晴れての妹脊事と、樂んでゐる其中に」下女「木更津の御地頭樣の御役人、山鹿毛平馬とかいふ侍が、お鶴樣へ惚れまして、たとへ外々へ緣組がして有らう共、是非是非貰ひ請けたいと、退引ならぬ無理所望」權助「その樣子も今聞きました、何でもその平馬とやら、ひへまきとやら云ふ奴が、彼是いつて煩さゝに、そこで木更津をばお鶴樣が、家出をして行方が知れぬと言觸し、世間では氣の注かぬ御親類の店なれば、此雪の下の和泉屋へ預けられて御座るお鶴樣」與五郎「ハヽアそれで樣子が分りました。何にせいマア〳〵無事で有つた故、爰で逢はうといふものぢや、この與五郎も悅ばしう思ひますワイのウ」お鶴「それといふも貴方の方へ早う呼迎へて下さんすりや、此樣な苦勞もせぬものを、胸慾でござりまするワイなア」ト寄添ひ思入。與五郎「サアその事も譯有つて、どうも意に任せぬ時宜」お鶴「さう仰しやるはどうしても、花のお江戸は又格別、世間に幾許も美しいお女中さんが多い故」下女「何で有らう

分りましたワエ、貴方が尋ぬるお人とおつしやるは、アノ木更津で不慮な事から、御兩親樣は以ての外のお腹立で、今は御勘當の御身の上、何處にどうして御座るか知れぬ。アノ與三郎樣の行方をば」與五郎「アヽコレ何かの咄は今夜ゆつくり、お主は早く泊宿を」淸八「ドレ見立てゝ參りませう」ト右の唄になり橋懸へ入る、この中に以前のお鶴、下女、權助附添ひ出かゝりゐて、お鶴與五郎を見つけ、あれぢやと下女へ思入、權助も是を悟りしこなし、色々有つて與五郎これに心づかず。與五郎「ドレ此間に參詣して兄者人の身の行方、何かの願をさうぢや〳〵」ト立上る所へ、右の三人立より宜しくこなし、是を三味線入大拍子。權助「アヽモシ〳〵一寸お待なされませ〳〵」與五郎「是はしたり、私は往來のもの、尋ぬる事なら所の人に聞かつしやれ」權助「イエ〳〵、さうぢや御座りませぬよ」下女「あなた一寸。ソレ御寮人樣」トこれにてお鶴、與五郎へ科あつて。お鶴「オヽ違ない、あなたぢや〳〵」權助「ムヽ偖はあなたが」下女「與五郎樣でござりまするか」お鶴「オヽ與五郎樣ぢや」與五郎「わしが名を知つて御座るこなたは」トお鶴をよくよく見る。お鶴「申し與五郎樣」與五郎「オヽほんにお前は木更津の」權助「藍玉屋善右衛門樣の」助、下女「お娘御」與五郎「お鶴殿ぢやの、どうして爰へ」お鶴「アイ與五郎さん、能うお顏見せて下さりました、お懷しうござんしたワイなア」ト科あつて恥かしき思入、差うつむく、與五

と風呂敷包をわへがけにして是を擔げ、菅笠を持ち出て來り。清八「モシ與五郎樣、日は永いではお座りませぬか」與五郎「さればさ、今朝ゆる〳〵と立つたから、日の暮れる迄と思つたが、大きに早かつた」清八「しかしお草臥でござりませう。向の鳥居先で一服して參りませうか」與五郎「ム、それが可からう」トこんな事をいひながら、兩人舞臺へ來り床几へかけ、捨白あつて。清八「時に若旦那、いつも鶴が岡の太々講の時は、津の國屋が定宿でござりますが、なぜ今日は外の宿をお取りなされまする」與五郎「ハテそれには少し譯が有つて、どうで四五日は此鎌倉へ逗留せねばならぬ、雪の下へ見立てゝ宿を取らうとは思うたが、今夜はこの大磯へ泊つて、少し聞合せたい事がある故、マア其譯は今夜ゆつくりと話さうが。お主は早くそこらで宿を取つて貰ひたい」清八「ハイ〳〵夫は私が何處か綺麗な家を見立てませう、さうしてお前樣は」與五郎「休息した上で、此吾妻の明神樣へ參詣して行くつもりよ」清八「モシ〳〵此吾妻樣は、色事の御願を聞かつしやると申しますが、そんなら貴方も色の願を」與五郎「これはしたり、そんな譯ではない、この御宮は江戸の本所に勸請した、吾妻森と御神體は一つ故。それ江戸でも、若家出をした人があれば。迷兒たづぬる其初めに、吾妻樣へお參りして、それから方々搜すぢやないか、それ故に此與五郎も、尋ぬる人に片時も早う逢ふ樣にと信心こめてお參を」清八「ハ、アそれで

う」權助「一體あなたは木更津の藍玉屋善右衞門樣のお娘御なれど、どうした事にかこの鎌倉へ御出なされて、モウ今年で三年越」お鶴「それといふも木更津に據ない譯有つて。本にモウ思ふに任せぬ事ぢやワイのウ」下女「これはしたりお鶴さん、其あなたのお願を」權助「叶へる爲に神詣、よく御信心なされませ」下女「爰の吾妻の明神樣は、橘姫樣をお祀り申し、殿御は妻を戀慕ひ、權助「女子は男のために心中だてども仕ましたのかえ」お鶴「殿御の爲には命をかけ、操正しい其お方を、爰へ崇めて明神樣と。妹脊の中を結ぶの神樣、お守りなさると聞く故に、戀しいお方に」下女「早う御縁組をなさらうと、お勸め申した今日のお參り」權助「さういふ事なら權助も、吾妻樣を信心して、女の方から思はれる御利益を受けずばなるめえ」長吉「モシ／＼お孃樣、御願掛があるならば、少しも早くお參をなされませ」お鶴「オヽよういうて下さんした」下女「少しも早く御神前で」權助「俺們は御百度をあげうワイ」長吉「そんならお鶴さんの爲にかえ」權助「サアお鶴さんの爲、權助の爲に」お鶴「ホンにをかしい」兩人「權助殿ではあるワイなア」長吉「モシお鶴さん」下女、權助「サアお出なされませ」ト右の鳴物になり、お鶴、下女、長吉、權助跟いて上の方へ入る、ト『鎌倉見たか江戸見たか』の唄になり、向より伊豆屋與五郎、一本差、旅形脚袢がけ、褄からげ合羽にて出る、跡より手代淸八供の拵へ、柳行李

のお姉さん、珍しく今日はお出かけなされましたね」下女お米「どなたさんぢやと思うたら、家へ
出入の金神長五郎さんの息子さん」權助「小頭の長吉兄ィ、恰度可い一緒に行きなせえ」長吉「ア
イお供を仕やせうよ」お鶴「何であらうと鳥居まで」下女、權助「マア御休息なされませ」ト右の
鳴物にて皆々舞臺へ來る。權助「サア〳〵お鶴さん、此床几で緩りとお休みなされませ。ヤ茶屋
奴が店を明放して、居をらぬワエ、ドレ〳〵自身に汲んで飲んで來ませう」トよろしく捨白
あつて皆々床几へかける。下女「アレお鶴さん、御覽じませ、時も時とて藤の盛」お鶴「ホンニ美
しい事ぢやワイのう」トこの中長吉も腰をかけ。長吉「モシ〳〵お孃樣え、お前樣もこの吾妻樣
へ御參詣でござりまするか」お鶴「アイお參りしようと思うて來ましたワイのう、それはさうと
此子とした事が、賢い樣でも頑是なう」權助「左樣〳〵、お鶴樣を目つけて、お孃さん〳〵と家
の娘御と思つてゐるワエ」下女「エヽモお前もつけ〳〵と、お鶴樣は家のお娘御も同じ事ぢやワ
イなア」權助「そりやアモウ娘御も同じ事は、此方がいはねえでもしれてある、振袖で居なさる
から娘。今に嫁入なされて眉毛を隕せば年增となる」下女「エヽモそんな戯言いひなさんすな、
このお鶴さんはな。和泉屋の爲には跡取のお孃さんも同じ事、先達て雜司ヶ谷へ御隱居なされ
た大旦那のお配遇、去年おなくなりなされた御新造の爲には、たつた一人の姪御樣ぢやワイの

ざりまする、殊の外の大入ぢやさうに御座りまする」仕□「なる程、その爲か爰の神の地迄が繁昌ぢやてのゥ」仕出△「さうぢや、爰な吾妻樣も御利益があると見える」仕○「太さう近年は賑しくなつたでは御座らぬか」仕□「サア是といふも願が利からの事でござる」仕×「さうぢや〳〵、女が男を思うて色事の願をかけると、直に御利益があるといふ云慣はしでござるて」仕△「兎角色氣の世の中だなァ」仕□「それでは私們でもお参をしたら。ノウ太郎兵」仕○「今に色事で喰る樣になるかも知ぬワイの」仕□「時に是からは食氣の方へ趣いて」仕×「そこで一つ遣かけうかの」皆々「夫かよう御座りませう」茶屋「その食氣より飲氣の方へ、私も半口のせて下さりませ」仕○「夫でも店を斯うしておいては」茶屋「イヤ大事ござりませぬ。今朝から大分儲けましたから、祝に一つ」仕△「やりたいと云はつしやるは、餘程正覺坊と見えるワエ」皆々「サア來さつしやい〳〵」ト皆々先に茶屋男手桶を提げ、捨白よろしく橋懸へ入る、ト直に三味線入大拍子になり、向より和泉屋娘お鶴、町風振袖娘の拵へ、お米下女の拵へ、日傘をさしかけ、この次へ金神長吉、廣袖の一つ著、衫に手拭をまき、柾の下駄、花の枝へ土産物の烏帽子籠を三つ許つるしたるを擔げ、この跡より下男權助、ほつとせ鬘、好みの布子、股引、風呂敷包を脊負ひ、同く土産の菓子袋二つ許、竹にて拵へたる蝶々をかたげ出で來り、花道にて皆々こなし有つて。長吉「和泉屋

いる、多左衛門守を取上げ見るこなし、これをきざみ一聲浪の音にて。　拍子幕

四幕目

吾妻明神の場
源氏店の場

本舞臺三間の間、上の方へ寄せて石の片鳥居、これに續き玉垣、ずつと上の方へふせて連理の楠の若木、この邊り埒を結廻し、件の建札、石燈籠、玉垣、爰に吾妻大明神と記したる奉納の幟四五本立て、是に續き低き土堤の張物、この後御手洗水の流を見せ、此上へ誂の藤棚、藤の花さかりの體、下手に藤の實木、この傍に掛行燈、出茶屋の出臺、葭簀たてかけ、土堤づらへ四つ目垣、この後一面に淺黄幕、すべて相州鎌倉、大磯の梅澤の間、吾妻明神上の宮の體、平舞臺に床几二三脚、こゝに若い衆の仕出大勢、思ひ〳〵の拵にて床几にかけ、茶屋男一人、皆々へ茶を汲出して居る、大拍子の鳴物にて幕明く。

茶屋男「これは〳〵誰方もよく御參詣でござりまする、モ一つお茶あげませう」ト銘々茶を汲んで出す事。仕出○「アイ〳〵。サア皆飲つしやれぬか」仕出△「盆のまゝ其所へ置なせえ」茶屋「ハイハイ」ト盆の茶を置いて。「御緩りと御休息なされませ」仕出○「アイ〳〵構ひなさんな、急がしからうに」茶屋「左樣でござりまする、大層なお參で御座りまする、夫に又川向には大芝居がご

多左「オヽ。アレ〳〵浪間へ漂ふは確に黒髪振亂し、著類はたしかに女の樣子、まだ死きらずに浮きつ沈みつ。身投の者か、海賊の手に打込まれしか知れねども、助ける仕樣はあるまいか」船頭三人「アレ〳〵段々爰へ」多左「これ船の衆、働いた〳〵」三人「合點だ」ト此中右の吹替、花道に浮きつ沈みつして、花道際より一寸浮上り、艪櫂を入れる事よろしく、早めし合方、浪の音。皆々「しめたぞ〳〵」多左「船へ揚げた〳〵」皆々「合點だ〳〵」ト波の音、波煙はげしく、お富上著ぬげ長襦袢本水に濡れ、髪振亂し手負ひし體、苦しみながら半身現はれ。多左「扨こそ女だ」トソレと引上ぐる事、お富船へ上る事よろしく。「たしかに是は刀疵。これ氣を確に持たつせえ」ト呼生ける、是にてお富一寸眼を明くる事。「心をたしかに、これ女中」皆々「女ヤアい女ヤアい〳〵」ト呼立つる、お富弛みし科あつてがつくり落いる、多左衞門此體を見て科あつて。多左「そんなら息が」トいひながら腹へ卷きし守袋を見つけ、手をかけて科あつて。「ム、若やは是に何處の誰と、確な證據の手がかりが」ト件の守符の裂をよく〳〵目を注け見て。「どうやら覺の」ト思入。皆々「エ」ト見やる、多左衞門守袋を其まゝお富の懷へ入れて。多左「アこれ何にもいはずと」ト手早く槖の金を紙に拈り、皆々の方へ出し見せて。「それ」ト皆々へ投げて遣る、チヨンと木の頭。「船を行らつせえ」トこなし、皆々艪を立てる、お富ばつたり落

斷れよば汝には恨が」お熊「迯さねえぞ」相生「何を」ト立廻り短くあつてお熊を當て、相生逸散に橋懸へ入る。お熊「迯しやアしねえぞ」ト禪の勤になり、跡追つかけて入る、ト跡波の音になり、淺黄幕切つて落す、向ふ一面の波幕になる、浪てすりよろしく飾りつけてあり、この時上の方にて。船頭三人「エイサツサ〳〵」ト三人とも船頭にて柿の筒袖、艫櫂を立て、船の舳の方へ誂の苫を覆ひ、船舷脇べりを入れて好の押送り漁船にて出て來り。船頭○「凪が可い、急げ急げ」三人「エイサツサ〳〵〳〵」ト此船よろしく仕掛にて搖れて浪の上を漕ぎ行く模樣、浪の音はげしく早笛にて、向より波布畫心に被りしお富の吹替髮振亂し、手足をもがき浪の間より黑髮襦袢などひら〳〵出て、浮つ沈みつ流來る模樣、花道を引臺にて引く事、中程まで來る中に皆々船頭が沖を見る心あつて。船頭□「アレ〳〵見やれ、赤いものが流れるワ」船頭△、○「ちがひなし、アレ〳〵向を」三人「流れるワ〳〵」ト是にて浪幕を切つし落す。

本舞臺向ふ一面奥深に木更津沖海の遠見、舞臺よき所に苫船一艘かゝり、かすめて浪の音、コイヤイにて道具納る。

ト直に件の苫船の苫を上げ、爰に和泉屋多左衛門、長たる町人の拵へ旅形、かたへに荷物あり、供男一人控へ居る、多左衛門水死の者へ眼のつきしこなし、はやめし合方、浪の音をあしらひ。

いかえ」松五郎「よい物があつた、口を切れ」丈助「よし〳〵」松五郎「段平、それ足を持つし」三人「行かうか〳〵」ト松五郎は與三郎の胴を抱へ、段平は足を持つて、跡三人これを取まき、この中に吹替好の通りの拵にて、皆々俵の中へ荷込んで、少し首ばかり出して繩にてからげ、天秤棒を貫通して。四人「そんなら親分」松五郎「是から直に藍王屋の家へ」源左「色で商ふ下の蘇枋、その賣主の代物は、しかも赤間の源左門衛、極色よしの血まぶれ仕事」松五郎「その染賃は。小判で百兩」源左「詞の澤張、すべよく行きやァ」皆々「其の時ずつしり」源左「これ」ト本釣鐘、此時市助、百藏俵をかつぐ。「しつかり劫を強くしやれよ」トこれにてチョンと知せにつき、淺黃幕をかぶせる、ト直に禪の勤になり、上手より以前の相生、繩にて縛られし體にてその儘迯出を、お熊追つかけ出て、繩の先を捉へ引とめて」お熊「迯さねえぞ〳〵」相生「放さつせえ〳〵」お熊「どうして〳〵、手前を迯せば此方が失敗るワ、太え奴だ。汝がみんな此様な騷動をおつ始めたのだ、この起は手前だ〳〵」相生「べらぼうめ、汝が喋舌りやァがつたから、こんな目に俺があつた、やう〳〵と脱けて來たのだ、今つらまれば直に殺されるワ、放せ〳〵」ト足にてお熊が手元を蹴上げ逃出すと、お熊繩の端にて手繰寄せ。お熊「こいつは足の働く奴だな」トまた駈出すを引戻す、立廻よろしく、トヾ相生この機に繩切れる事。「うぬ繩を切つたな」相生「繩が

松五郎「さればさ、短氣は損氣、お富はさつぱり種なしだが、まだ〳〵野郎は半殺し、蟲の息でもあるこそ幸ひ、南町の藍玉屋の宅へ持かけて」源左「それをどうする」松五郎「下り蘇枋の賣物と。コレ」ト呫く、源左衛門一々聞取り思入あつて。源左「それぢやア此奴を玉にして」松五郎「百兩位は大丈夫さ」ト指を出して見せる、皆々これを見て、扨はと心づき。源左「なる程、こりやア可い思つきだ、今から藍玉屋へ押かけて」松五郎「しかし野郎が菰包にして擔げば雜作もねえ」丈助「儂們の方で始末をしやせう」源左「納屋へ往つて空俵を持つて來い」段平「そいつが一番手つ取り早い」松五郎「序に棒も持つて來い」市助「合點だ」ト上手へ入る。源左「コリヤ海松杭。御苦勞序に野郎の始末を頼んだぞよ」松五郎「こんな事は朝腹茶漬。丈助手傳つてくりやれ」丈助「オツトよしよし。思やア可笑な理窟だなア」トいひ乍ら與三郎を引立てる、松五郎與三郎の耳へ口をよせて。松五郎「これ與三郎、親分を頼んで汝が命を助けて遣るぞ、手前餘程命冥加な者だなア」丈助「それに就いてもお富は海へ飛込んだが、手前故にくたばつた女だ、念佛でも云つて遣りやれさ」松五郎「エヽ、餘計な事をいふなえ」丈助「オヽ違へねえ、ちつと差だのう」松五郎「さしと云やア手前かつぐか」丈助「そりやアどうでも僞やせうよ」源左「跡の奴等は何をして居やアがる」ト時の鐘合方にて、上手より段平、市助、百藏、米俵と天秤棒を持ち出て來る。段平「オイ松兄イ、これで可

望だらう、面を見るのも穢らはしい、よく〳〵因果な劫つくばりめ」ト嚴となつて唾を吐きかける、トばた〳〵になり、向より松五郎走り出來り。松五郎「オ、親分、爰に居やんしたか」源左「手前の歸を待兼ねた、さうして女をつれて來たか」松五郎「親分聞かんせ、あれから直に磯端へ追つかけたら、あいろも知れぬ眞の闇、とう〳〵お富を引捉へ、流石女も一生懸命、ぎしやばり廻るを騙しても、どうして〳〵動かねえ、暫く爭ふ其暇に、ざんぶり浴る高波に、ハツト一聲聞えたが、定めしお富が身を投げたと、滅多無性に索しても、皆目跡は白浪と、松吹く風の音ばかり、それで女は玉なしよ」源左「業つくばりのどぢ女め、くたばつたに違ひあるめい、若又其場を助つても、俺が眼の黑い中は、貧乏ゆるぎもさしやァしねえ」松五郎「さうして與三郎はどうしやした」源左「相手の野郎はそれそこに」松五郎「どれ〳〵」ト與三郎をよく〳〵見て。「ア、モウはやまつたな」源左「まだ死きる所へは行くめえが、何にしても女を玉なしにしちやァ事が面倒だ、せめて彼奴が居たならば、叩き責めて腹癒と、思つた仕事が間違つた」松五郎「ハ、アそれぢやァ殺す意は無つたのだな」源左「知れた事よ、彼奴を賣つた其金で、又娯も出來る積よ。エ、是といふも二才野郎め、憎さも憎し息ある中は目障だ、モウ殺しても可い時分、いつそ俺が引導を」ト刀を振上げ斬らうとする、松五郎とめて。松五郎「コレサ親分、マア待ちなせえ」源左「なぜ止るのだえ」

町、藍玉屋の家へ預けの身の上、江戸には揃ひし二親の、勘當受けた譯でもなし、夫につゞいて諸親類、この始末を荒立つて、二親へ聞かせるも不孝のみか世間の聞え、是程に苛責んだら、此方の顔も立たうから、苦痛をさせずと一思ひ、男らしくすつぱりと何故殺さねえ、弄殺は非道な仕方、それとも腕がなまつたか、男を研く性根なら、怖ずと立派に殺さつせえ、助かる心は微塵もねえ、氣後すりやァ恥の上塗、サすつぱりと殺さつしやい」源左「引れ者の小唄とやら、血迷つて樣々の寢言、これ能く聞け、今一思に殺したら、汝が勝手はよからうが、それぢやァ餘り曲がねえ、青二才で不憫だから、少も娑婆の風にあて、びこ〳〵するも僅の中、死急ぎをしねえでも、どうで汝りやァくたばる身の上、二親が在らうとも、汝が親なら犬畜生、義理も法も知りはしめえ、人並らしい口巧者、默つて居やれな、くたばりかゝつた分際で、源左衛門が手の裡を、鈍つたと吐したな、コリヤ其頬桁を斯うしてくれるワ」ト又片頬を貫く、與三郎苦しむこなし「汝はこの目球で迷はせたか」ト眼元を突く事有つて。「イヤサこのしやつ面でか、エ、癪に障らァ」ト刀にて顋を舉ぐる事あつて。「見りやァ見る程まじ〳〵と、いつその事に斯う〳〵〳〵」ト散々に斬さいなむ事あつて。「ア、是で少許は胸が透いた、是から汝を簀捲にして、果は海の藻屑となり、磯端へ打上げられ、犬や鳥の餌食となれば、定めし汝も本

ト與三郎の傍へ行き、この中丈助蠟燭へ火を移して源左衛門が傍へ持つて行く、源左衛門とつくり見て、蠟燭にて片頰を燒く、是にて動く事。皆々「野郎め、しつかりしやァがれ」ト是にて與三郎目を見開いてこなし。源左「どうだ苦しいか、なる程變つた面だなァ」トこなし、誂の合方。「ヤイ與三郎、今となつちやァ思知つたか、この木更津で隱のない赤間源左衛門と云はれちやァ、鬼でも恐るゝ男と知らず、なま若輩な分際で、よくも此面へ泥をなすつたな、密夫の成敗、是ぢやァ骨身にこたへたらう、こりや靑二才め、よく聞け、汝ばかり憂目は見せぬ、事の起はあの女だ、情の罠に罹つたが、因果同志の深い間、是から女めもしよびき出し、料理の仕樣は種々樣々、並べておいて嬲斬、泣面かはかし其上で、この段平を汝がどん腹、それが此世の別の盃、これを肴に酒でも飲まう。段平はじめ、皆の者相手になつて一杯飲みやれナ」丈助「何かに屆く親方の志」段平「切身に鹽のずた〳〵生酢」市助「それを肴に酒盛は」藤六「コリヤァ格別味からう」四人「サア〳〵遠慮なしに始めう」ト又小粒を取上る、丈助酌をする。源左「ドリヤ是から娯まうかえ。死ばりかゝつた鹽梅を見りやァ。ア、氣障だなァ」皆々「ハヽヽ、」與三郎「その腹立は理ながら、命を果すも覺悟の上、未練ではなけれども、定めし私が身の上を知つても御座らう、いふにいはねぬ譯あつて、それを知りつゝ江戸での放埒、この木更津の南

引にてぐる〱捲、亂髮にて倒れゐる、左右に丈助、段平、市助、藤六、拔刀にて立かゝり居る、誂への合方、時の鐘、鷄の聲にて道具納まる。

四人「親分、何と可い態ぢやァごんせぬか」源左「あら方此奴も半殺し、この蠟燭で面を見ろ、色氣も戀も覺めたであらう、見りやァ見る程慘憺な態だなァ」丈助「さうさねえ、生つじらけたしやつ面だが、寸斷〱に疵だらけ、今では二目と見られねえ、これぢやァ三年の戀も覺めるであらう」段平「さうよ。これからは寄つてたかつて試物、俺が刀も値打があるワエ、これで蟲が落ついた」藤六「疾うから此奴は評判で、男のよいのを鼻にかけ、女たらしも斯うなつちやァ」市助「モウお陀佛と往生するのだ、汝りやァ僅の娛で業恥を曝しやァがる、いくぢなしめ」源左「コウ黑淵よ、どうか手こねた樣だなァ」四人「何さまだ〱是ぢやァ死きれめえ」トこの中丈助二重の大蠟燭を取つて與三郎の傍へ行き、段平市助百藏三人して與三郎を引起し、丈助蠟燭の火を顏の先へ出して。丈助「どうだ野郎、思ひ知つたか。コレ物を吐せ、エ、だらけやァがるな」段平「何とまァいけ圖太い野郎めだなァ」源左「どうだ息はあるか、其蠟燭で面を焦せ」丈助「なる程、コリヤ可いワエ」ト丈助蠟燭を顏へあてうとする、風の音して消ゆる。「エ、忌々しい其蠟燭を」ト取らうとする、源左衛門思入あつて。源左「燈光が消えちやァ眞暗だ、ドレ俺が」

所、いふ事さへきくならば、汝が命は助けてやるワ」お富「エヽ穢らはしい、與三郎さんに憂目を見せ、おめ〳〵生きて居られうか、主が死んだと聞くからは、此世に心が遺らぬ、此身死んで未來で言譯を」松五郎「エヽ執念深い情を立てゝも、一寸先は闇の夜だ、死んで行く先未來とやらが知れうか、俺と一緒にマア來やれ」ト手をとる。お富「エヽ放しなさんせ」松五郎「そんならどうでも言ふ事を」お富「ふつ〳〵お前は忌ぢやワイなア」松五郎「さう云や寧そ」ト斬りかける、立廻りよろしく浪の音、葛西念佛になり、お富礫を取つて打付くる、松五郎ふり拂ひ振拂ひお富の後へ廻りしつかり組付く、此時下著脱けて吾でに天窓へ被る、お富は手早く松五郎を突退け、後の蘆間へ飛込む、水の音ドントとして水煙ぱつと立つ、松五郎この音に驚き、被りし下著を引めくり、其儘きつと見込み、やはり波の音にて此道具まはる。

返し

本舞臺元の二重の道具へ戻る、爰に源左衛門褥を敷き、二重に腰をかけ、左右へ大燭臺、蠟燭を照し、抜刀を椽端へ突立てギヤマンのコップを持つて酒宴の模樣、靑貝の大臺へ肴鉢、丼、大平鍋、其外の具いろ〳〵置並べあり、平舞臺眞中に與三郎半面血汐によごれ、體は太刀疵、惣身血まぶれにて、細

延びて下さんしたとはいふものゝ深手の惱み、多勢に一人の非力といひ、迚も命は風の灯火、是も誰ゆゑ、心の鬼が身をせめて、ひよんな憂目に逢はせしも私が科、たとへ其場は逃延びても、生のびる心ぢやない、モシ與三郎さん堪忍して下さんせ、これ此所から拜んで居るワイなア」ト兩手を合せハアト泣落す、ばた〳〵と足音する故、お富これに驚き思入あつて。「又もや追人の樣子といひ、生恥をかゝうよりオゝさうぢや」ト立上り身繕ひして、舞臺へ窺ひ〳〵行くを、大ばた〳〵になり、向ふ揚幕より松五郎逸散に出來り、お富ぶる〳〵慄へて歩かれぬ思入、松五郎窺ひ〳〵する事、危ふくすれ違ふ事二三度あつて、トヾお富躓く音に松五郎さぐり中てゝ。松五郎「あまめ逃さねえぞ」お富「お前は松さん、見のがして下さんせ」松五郎「ナニ見逭してくれ。さう味くは行かねえ、よくも親分の面へ泥をなすつたな、まだそればかりぢやアねえぞ、汝が心に覺があらう、サアうしやアがれ」お富「イエ〳〵死ぬる覺悟で出たからは、一寸も歸られぬ〳〵」松五郎「エ、強情などち女め、常が常なら情の道も知つてはゐるが、斯うなつたら日頃の可愛さ餘つて憎さが百倍、無駄をいはずと歩みやアがれ」お富「そんなら日頃の事を根に持つて」松五郎「知れた事だ、汝が體は親分に貰受け、一寸だめしに刀の錆、不憫な奴は與三郎、よつて蒐つて斬苛み、モウ今頃はくたばつたらう、それで心の雲も晴れ、是から汝が心の据

橋懸より若い衆の船頭三人出來り。船頭×◎●「コレ〳〵貴樣達は天神丸の若い衆ぢやないか」船頭●「慥に天神丸の若い衆ぢやな」船頭□「さう云ふこなたは專治丸の」船頭○△「親父さんぢやアごんせぬか」船頭◎●「オヽよい所であつたが、貴樣達を迎に來た、其譯といふは斯うぢや、今貴樣のへ所長脇差手合が七八人舞込んで」船頭●「何を尋ぬるのか、滅多無性亂暴ぢや」船頭◎「何でも怪しいから海賊ではあるまいかと、樣子を聞けば女の事ぢやげな」船頭×「その女を埋んだといふからの間違」○□△船頭「何にても急いで歸らう」三人「サアござれ〳〵」ト皆々上下へ別れ入る、知らせにつき浪幕切つて落す。

返し

本舞臺向ふ一面中遠見、海面の闇ぼかし、前の手摺地かすりへ浪の打寄に左右蘆の茂み、眞中へ誂の蘆原、この後あふりかへし人の飛込む仕かけ、日覆より松の釣枝、東西の總蓋を卸し、都て濱邊の物凄く浪の音にて道具納る。

ト向ばた〳〵になり、お富以前の形の上、綻び裂れたる下著を引つかけ、つまみを取つて逸散に走り來て、花道に躓く。お富「闇路を幸ひ迯延びては來れども、心にかゝるは與三郎さん、迯

源左「イケ泥坊め、動きやアがるな」ト與三郎お富ぎよつと思入、此時以前の子分丈助、段平、藤六、三人手燭を持ち上下より出て燈火を差出す、是にて皆々顔見合せ。お富「ヤどうしてお前は」ト源左衛門の顔を見てハッとさし俯く。與三郎「そんなら主人の」子分四人「源左衛門様だワ」與三郎「エヽヽ。ホイ」ト慄へてどつかり思入。源左「扨こそ汝が」トきつといふ、此聲に與三郎耐らず立上り駈出さうとするを、とめるを一寸振ほどくを、立廻つて見得よく引据ゑる、松五郎はお富を抑へる、源左衛門兩人の眞中へどつかりと坐して。「大それた二人の奴等、どうするか見やアがれ」トきつとなる。是にて雙方ひつぱりの見得、知らせにつき舞臺前よき所へ一面の浪幕を振落す、ト浪の音になり、上の方より若い衆の漁師、柿の筒袖栗下駄にて酒樽を提げ、竹の皮包などを繩にて結付け、三人程出來り。船頭○「ナント儀八、今日で三日の船がかり、やうやう南が晴れたから、今夜にもふけるであらう」船頭□「さればよ、追風を待つて一走と、前祝の酒盛に肴を買うたが、まだ何やら忘れた樣ぢや」船頭△「イヤモウ何を買ふにも土地の勝手は知れず、夜更ではあるし」船頭○「酒さへありやア夫で可いとして、早く船へ歸らうぢやあるめえか」船頭□「それ〳〵氣を注けて行かつし、磯先へ行くと又浴るぞや」船頭△「何にしても風が強くなつて來た、モウ彼是潮明であらうなア」船頭○「さうよ、九つ半でも有らうが」ト矢張り波の音にて

簾を捲上ぐる、爰に屏風立まはし、與三郎お富の帯屏風へかゝり、行燈を屏風の外へ寄せてある事、右の合方にて栞の外へ松五郎窺ひ寄つて。松五郎「オイ〳〵お富さん〳〵。お富さん〳〵」ト栞を叩く、是にて屏風の内驚きし物音してくり開く、と又外に叩く事、爰に與三郎帯ひろどけ下著、お富は長襦袢、下締の細帯解けし體、兩人驚き起きてうろたへる思入よろしく、與三郎慄へ〳〵起きて狼狽へながら帯を捜す、この中お富行燈の明を消し、暗がりの仕組兩人よろしく、與三郎帯を捜り取り、うろたへて締る事、お富下締をさがす意にて、手にからむ枕下の打かへ仕立の肌の守が手に觸はる故、是にて長襦袢の上締して枕下の下著を引かけ立上る、この中外にて松五郎あせりながら叩き立て。松五郎「オイ一寸用だ、お富さん〳〵」ト叩く事、お富右の間に下りたち。お富「エヽモ忙しない、今頃誰だえ」トいひながら與三郎へ囁く、與三郎戸棚へ隱れんと捜り〳〵て袋棚の襖をあけて中を索る、内に物あつて忍び兼ねる故、下の方へ行く、此所壁ゆゑ又上の方へさぐり行く事、この中外には内より明けぬ故強く押す事、開きの壺抜けてぱつたり音して、松五郎ばつたり倒込む、お富思入。「エ、誰だえ」松五郎「私だよ」お富「今頃に何の用で騷々しい寐てをるものを」松五郎「オヽよく寐たらう、しかも二人で」お富「エヽ」ト此以前より源左衛門上の方の襖を拔き窺ひ居て、この時與三郎上の方へ行く、突廻し雙方一度に

二人が間、いつがいつまで」お富「義理ある人にも、すべよく別れの、行末永う連添ふ心、よもや見捨は」與三郎「見捨はしねえが、其うちにどうかお主に」お富「エ」與三郎「殺されさうだ」トお富エヽと抓る、兩人氣味合よろしく、お富上著ぬげて長襦袢、兩人こなし有つて床の上へあがる事。唄『窓の夜雨にしつぽりと、移香のこる枕紙、解けて嬉しき卯の花の雪。ト兩人宜しく屛風を引まはす、是にて伊豫簾をおろす、時の鐘合方になり、下手より以前の松五郎窺ひ出て來る、上の方の枝折の外よりお熊、以前の形にて窺ひ出て、互にちよつと透し見て。松五郎「誰だ〱」ト小聲にいふ お熊「海松杭さんか」ト小聲にいふ。松五郎「お熊か。お主は内の様子を見てしつたか」お熊「お聞きよ、旦那が立つしやると其跡は若い衆に小遣を持たして遊びに出しをつたな、乙な鹽梅だと氣取つたから、態と私は息子が宅へ行くから、今夜は歸りませんて早う家を出て、様子をこつそり物置で聞いてゐたが、何でもかのが」松五郎「そんなら與三郎野郎が來てゐるか」お熊「部屋の様子を窺つたら、忍んでゐるに違ひはないよ」松五郎「よし〱、此方も源左衛門殿に云つかつた手筈があるワ」お熊「さうして手引をした奴はの」トいひかけるを。松五郎「マア〱それさへ聞けば可い。お主は爰に居ては惡い、早く行かつせえ」お熊「それぢやア後でまた話さう。ヤレ〱とんだ騷動をおつぱじめたのウ」ト下手へ入る、小凄き合方になり、家體の伊豫

しなせえ〳〵」ト小聲にてとめる、お富もいろ〳〵有つて。お富「放しておくれね」與三郎「ならねえ。よしなえせえ」トこの爭きまらず、兩人よろしく有て、トヾお富じつとなつて死なうとする心意氣、與三郎じつと見やり、兩人氣味合あつて。「どうでもお主やァ死ぬ氣だな」お富「アイ知れた事いなァ」與三郎「ヤ」ト是より誂へ、變つた合方。お富「思へば〳〵恥しい、文で明した私が心根、配遇ふ人や内外のものへ、機嫌氣づまをそれ〳〵に、面白をかしう取りおふせ、憂を忍ぶもお前をたより、嬉しく逢ふ日を待つ效も、あんまり氣強いお前の心根、この儘別るゝ位なら、今まで苦勞は何のせう。モシ何卒死なせて下さんせいなァ」ト思入あつていふ、與三郎もじつと思入して。與三郎「そんなら女の操を破り、義理ある男を見かへるのみか、命を捨てゝ俺への心中たてる心か、これお富」お富「アイ」與三郎「心底見えた、死ぬには及ばぬ」お富「エ、」與三郎「これ。も一つ注ぎやれ」お富「アイ」ト有合ふ以前のさしたる盃を取上る故、お富酒をつぐ事、與三郎ぐつと呑む。唄『思はせぶりに短夜を、仇に明して三布蒲團、男心の氣づよさも。ト此内兩人よろしくこなし有つて、與三郎へお富呫く、與三郎思入、件の二重へお富蒲團をしき夜具を廣げる事、與三郎もぢ〳〵と手酌にて酒つがんとするをお富とめて、トド床の上に寄添ふ、兩人よろしく右の文句一ぱいに納まる。與三郎「どうするか、しかし斯うなる

すまいな」與三郎「ハテ變る心はなけれども、いはゞ此方の迷から、お前に惡名つけさせる、それのみならず彼の人へ」ト思入。お富「エ、今更そんな」ト與三郎立かけるをお富とめる、これを唄『嬲の文字は誰が書きそめし、どうで浮氣な水莖や、ちよつとつけざしりゝの、無理な手爾波も酒の科、味な妹脊の八重結。ト右の文句のうちに與三郎こなし有つて、立歸らんとする、お富これをとめる枷に、燗徳利、猪口、下物など取出す、お富大きなる盃猪口に一つ飲みこなし、文句一ぱいに振よろしく納り。お富「サア與三郎さん、お前も一つ飲ましやんせ」與三郎「イイヤ飲むめエ」お富「とは又なぜえ」與三郎「ハテ主ある花が獨寐のところへ、夜更けて來るからは、私が心はよく／＼なと推量してくんなせえ。斯うして逢つて思のたけをいへば、私も心が晴れた」お富「サアそれ程思つて下さんす心なら、今夜はせめて爰へ寐て、私が思も」與三郎「イヤ憖い爰に長居して、情を受けりやア思が増す、それよりはモウこれ限に。お富さん、隨分達者でお出なせエ」ト件の脇差を持つて出かけるをお富止め。お富「もし」唄「エ、胴慾な戀風が、仇に嵐と吹亂ず、まつはり解けぬ藤かづら。ト兩人氣味合よろしく、口說模樣のふり、心のこなしあつてトヾお富與三郎の持ちし脇差をとり。お富「さうぢや」ト死なうとするを、與三郎慌てとめて。與三郎「かう／＼途方もねえ」ト大きくいはうとして心づき。「あぶねえ、よ

お富「アイ」ト思入。唄「顏見るからにつひそれと、思餘りて詞さへ。トお富與三郎を内へ引入れる、與三郎は手拭を取り裾の塵を拂ふ事よろしく、内の樣子を窺ひ上の方へ行く、お富は跡の柴戸を閉し、しまりをつける、思入あつて雙方顏見合ひ、氣味合よろしく、與三郎お富を引寄せ囁く、お富こなしあつて小聲の心にて。「暮れぬ中から旅立ゆゑ、何も氣遣はござんせぬ」與三郎「よくまアお前唯一人で。外に内輪の人達へは」お富「間を隔てたる私が部屋、誰に遠慮もないワイなア」與三郎「さうか」トこれを聞き、與三郎につこり思入。唄「何から先へいは躑躅、ほのめく露の仇名草。ト兩人よろしくお富與三郎を上の方へ廻し、二重の上へ手を引き伴ふ事、兩人右の文句一ぱいに、是を右の合方になり。與三郎「なる程なア、緣といふものは乙なものだの。いつか汐干の群集の中、ふと目につくは形かたち、何處の人の女房と。アヽこれ男と生れたかうけには、何卒あゝいふ女子と思うたが戀の病つき、どう思つても主ある花と、心で心を苦しめたに」お富「その心根が逹いてか、過ぎし汐干に見交はせた、多くの人とは水際も」與三郎「立つか立たぬか過る夜に、噺の寄席で仇口も、其禮文の返し事、筆にいはせて心のたけを」お富「さぞ厚皮な女子ぢやと、愛想もつかさずよくこれまで」與三郎「ナニ勿體ない、愛想所か」お富「エヽモ憎らしいその口は」唄「ゆるむ心の濁水。ト樣々眞似して寄添ひ。「申し變る心はござん

捨白の心にて工風あるべし。唄「結びかねたる夢見草、人目の關路やう〳〵と、戀の扉におとづれる。トこの中與三郎こなしあつて舞臺へ來る、相生よろしく與三郎へこなしあつて、件の籠燈明を袖に覆ひ提げて揚幕へ入る、與三郎門口へ來り、思入して門の戸を一寸おとづれ。與三郎「お富さん〳〵」ト小聲に呼ぶ、思入あつてホト〳〵と叩く、此うちに正面の伊豫簾あがる、爰にお富好みの著付、狹き袱紗帶を前にしどけなく結び、二重上の方に絹布の夜著蒲團取出し片よせあり、六枚屛風黑骨のすきや行燈へ明を點じ、好の莨盆に長煙管、莨箇、小取まはしなる肴の鉢臺、重行器の類、本道具に拵へし燗風呂など、酒宴の用意した體、盃猪口など置並べ、お富は以前のおきのが受取りし返事の文を繰ひろげ讀んでゐる見得、右始終文句の中のよき程に伊豫簾まきあげる。與三郎「お富さん〳〵」ト又こちらへ來て音づるゝ。お富「アイ〳〵」ト思入、與三郎答ありしと內の樣子窺ひこなし。唄「聞くに轟く胸の浪、立つや簾間の風そよぐ。ト與三郎邊へ思入、お富よろしくこなし有つて、さすが心とどろき、足許踏しめ、やゝ下駄を穿いて下りたち、門口へ來る事、兩人よろしくあるべし。唄「雲間を漏れて水の月。ト門口を明け、兩人よろしく顏見合せ。お富「與三郎さんか」與三郎「お富さんだの」ト是にてお富こなしあつて。お富「ようマア忍んで。來て下さんしたなア」ト手を執りじつと思入。與三郎「首尾は可いかえ」

ト本釣鐘、誂の獨吟になり、少し窓ぶたを下し暗くする事 唄「吾が妻を戀ひそむ昔妹と脊の、契かたしく袖の露、君が情に去りし世を、かこつの國に奥つぎの。 ト右の文句の内へかすめて風の音、本釣鐘、向より伊豆屋與三郎、著流し誂の袴ざしの脇差をさし、中抜草履頰被りし、以前の相生羽織をたゝみ懐へ入れ、素足雪踏がけ、誂の提燈籠へ火を點じ、忍び〳〵出る體、與三郎件の文を讀みながら出る、始終心いきよろしくあるべし、この中に。 唄「髫處女にくらべこす、操にあらぬ仇えにし。 ト花道よき所にて。 與三郎「これお主が手引でお富殿へもの言ひかはせば、猶更に思がまして今日迄も」 相生「私がお文の取遣、お媒介をしましたが、今夜は」ト親指を出し。「これが旅の留守」 與三郎「忍んで來てくれ、繁々と咄がしたいと送つた文。見れば凡夫の淺ましさ、心も空につひ爰へ」 相生「お伴申して來たれどももし」ト燈火を下に置き、指にて仕形して。「寐る事は今宵は罷になされませえ」 與三郎「可いワエ、承知だよ」 トかすめて本釣鐘。相生「モシ遲くなりますよ」 トせりたてる。 與三郎「おぬしは爰から」 ト歸れといふ仕方して。「早く行かつし」 相生「モシ今の一件、必ず二人寐る事は」 與三郎「エ、早く行けといふに」 トきつといふ。 相生「ハイー」 ト相生考へ怖氣立ちし心にて、與三郎がさしてゐる脇差を貸せといふ仕方して、どうぞ貸して下さりませといふ故、與三郎、コリヤ戻りの犬嚇しだと、この白は捨白は

めて。源左「エヽ馬鹿をいふなえ」松五郎「なぜ止さつしやる」源左「ハテこれが世間へ流布すれば源左衞門は恥の恥、たとへ二人を殺しても、穢れた面は雪がれないワエ」松五郎「ム、尤だ、さうして兄貴が思案の底は」源左「コレ」ト松五郎へ囁く。松五郎「そんなら今夜の實否を糺して」源左「アアこれ靜かに」ト思入。松五郎「ホイ」ト口を抑へる。源左「野暮な聲だぞ」トこなし、よろしく時の鐘の送にて道具ぶんまはす

返し

本舞臺三間の間、中足の家體本緣付、尤も亭座敷の模樣、四谷丸太柱、風流なる切出し欄間、砂壁つのがら窓、緣側木地にて緣の下をすかし、上の方下地窓前づら、下の家體内の横壁の張物、上の方下地窓の内襖にて出入り、正面見つけ、上の方床の間、次に四尺程の袋棚、本當に拵へ、襖開閉、銀張光琳風の彩色畫、これに續き跡したみへ一面に張壁、間に合張、和かな跳込み彩色畫、平舞臺上の方よき所へ鏽びたる石燈籠、此前のよき所へ好み春の下草、土堤板へしかけもの、後に壞れる誂、下手四つ目垣へ早咲の卯の花、其外松檜かなめ黐杯の生花を植並べ、正面の家體へ伊豫簾を下し、下の前へ出し四の道具にある丸木の柴門を押出す事、浪の音、時の鐘の送りにて道具納まる。

ういふ譯だぜ」ト一寸呟き。「ノ、それモウ〳〵、マアかうだ」源左「篦棒め馬鹿をいふな、彼女に限つてはそんな事が有るものかえ」松五郎「是さ親分、そんな事をいふから今迄いはずに居たのだ」源左「コウ手前、そりや大方彼女に無心でもいつて、彈かれた悔しんぼうであらう、俺だから可いが滅多な事をいふなえ、ハア丶丶丶」松五郎「アこれ〳〵親分〳〵、それだから人に鼻毛をよまれるのだ、川柳點にもある、旅の留守家へもごまの蠅がつき。カウお前の日にかゝる樣な姉御でもねえ、したがこんな事は聞かねえ方が可いが、餘りこんだが氣の毒故」源左「それぢやア是ぞといふ證據でもあつての事か」松五郎「親分にも似合はねえ、證據のない事を言出されるものかな」源左「さうして證據は」松五郎「慥なものは此文だ」ト以前の文を出す。源左「ドレ見せやれ」ト文を取つて見る事あつて。「そんなら先刻平馬殿が執心の娘が親元、藍玉屋へ江戸から來て居る與三郎、若もお鶴と譯があつて、平馬殿と緣組が叶はねえのかと感ぐつたら、却つて燈臺元暗し、手活の花のあのお富と、ちよくり合つてうしやアがつたか。ム丶」トきつと思入。松五郎「今夜お前が旅立つと、跡へ彼奴をば引摺込み、日比の念を嘸かし二人が」源左「エ丶。それとは知らずにおめ〳〵と、今までよくも」ト思入あつて立上り、きつと思案のこなし。松五郎「子分の奴等に觸込まし、女は固より彼の野郎をいつそ是から」ト身拵する、源左衞門と

も用を達して能い都合ぢや、何かと骨折であつた」松五郎「何さお前、兄貴が身分の出世になりやア、どうで此方も仕合といふもの」源左「これ留守中の事は何分手前に頼んだぜ」松五郎「アイ頼まれやした」源左「それぢやアモウ送るには及ばねえ、ゆつくりと酒でも飲みやれ」ト身拵して立上るを。松五郎「オイ親分、マア一寸お待ちなせえ」源左「用があるのか」松五郎「一寸耳へ入れて置きたい事がありますよ」源左「それでも旦那をお待せ申しては」平馬「ナニ源左衛門、其方に仕残した用事もあらば、身共は先へ參つて居るから跡よりお來やれ」源左「左樣なら自由ながら一足お先へお出なされて下さりませ」平馬「承知致した」松五郎「そんなら旦那」皆々「わしらも一緒に」平馬「必ずともにお待ち申す」ト唄になり、平馬向へ入る、跡合方。松五郎「コウお前、本當に留守を頼むと云はつしやるか」源左「分らないものぢやアねえか、日比兄弟の樣にも思ふお主の事だワ」松五郎「男と見かけ頼むとあれば、俺アちつとお前に折入つて言はにやアならねえ事がある」源左「ム、改つたその言分、いはにやアならねえとはそりや何だ」ト何心なく聞く、松五郎こなし有つてじつと俯く、源左衛門の床几へかけ。「いふ事とはそりや何を」松五郎「外でもねえお富どんの事よ」源左「あいつがどうした」松五郎「こんな事は云うめえとは思ふが、それについてもお前は痛い日頃から大腹中、巨細な事には構はぬ故。こなたは何も知らねえの」源左「ヤ」松五郎「斯

返し

本舞臺三間の間建仁寺垣、下手芝の植込、小高き土堤板へ紅白杜鵑花の盛、上の方に栗丸太、皮つき柱、花車なる柴門、畫心にかざり、この傍に同く杜鵑花の芝山、後淺黄幕、誂の通りの飾付、時の鐘合方にて道具納まる。

ト上の方の柴戸を披け、以前の山鹿毛平馬先に、赤間源左衞門旅支度、好みの形、一本ざし麻裏草履、跡より子分丈助、外に以前の中通り四人附添ひ、海松杭の松五郎以前の形にて附添ひ出て。丈助「それぢやァ親分、隨分共に御機嫌よく」皆々「めでたうお戻を待ちます」源左「オヽみんな達者でゐるがよい」段平「モシ供に立つた源十と竹藏は荷物を待つて」藤六「山鹿毛樣の旅宿に」皆々「またせておきましたよ」平馬「イヤモウ思ひがけなく馳走になつて氣の毒千萬な、身共も心急の儀もあれば、お主と同道致して何かの事を申談ずるであらう」源左「なる程、さうおつしやれば恰度よい折柄でござりまする」松五郎「それぢやァ旦那も御同道でござりますかね」平馬「さればの事よ、この源左衞門に咄もあれば、是非とも出帆致す積ぢや」松五郎「左樣でござりまするか」源左「コウ松や、お主が兄の所へあの香爐を預けたので、平馬樣も氣が安し、其の金

いはしやんすも理、私も濟まないとは思へども、あれ程に仰しやるもの、この取次はするものの、ひよんな事を頼まれたものぢやなア」トこなし、此時奥より丈助思入有つて出來り。丈助「おきのさん、何をしてゐなさるぞえ」おきの「アイわたしやア一寸用事があつて今爰へ」丈助「コウ味くいふぜ、あの相生と密々咄、俺も半口乘せて下せえな」おきの「エ、又そんな事、おかしやんせ、知らぬワイなア」丈助「知らざア俺が教へてやらうか」ト一寸手を引ぱる。おきの「何をしなさんすぞいなア」丈助「オヽしなさる、するのぢやぞや。ハテよい事をしてやるのぢや」ト引寄せ懐へ手を差込むを拂ひのけ。おきの「エヽ惡い事ばつかり、御新造樣へ告げるぞえ」丈助「ナニ告げる。つげるが八ほう外が濱。一寸〳〵」ト抱付くを振切り行かうとする、いろ〳〵追まはしトヾおきの袂より三本の文の中一本落ちる、兩人是に心づかず、おきの丈助を突退け奥へ入る、丈助起上り追かけ入る、此始終を松五郎窺ひ居て、邊を窺ひ〳〵出來り、右の落ちたる文を取上げ。松五郎「何だ。與三郎樣まゐる、富より。ム、こりや可い物が手に入つたリエ」ト莞爾こなしあつて懐中する、浪の音かすめて此道具ぶん廻す。

故に、もしもお前が其間で」相生「何のお前、先から其度毎に必度返事が届いてゐる」と紙入より二三通文を出して「此通り持つてはゐるがの、其中にどんな事が書いてあるか知れまいではないかえ、それをお嬢さんか何ぞならよけれども、お富さんには嚴とした。源左衛門様といふ旦那のある身の上だ。ナ可いかえ、互の爲を思つて見たら。もし此事が親玉の耳へ聞えたらそりやァ事だ、第一俺等がどんな目に遭はうも知れず、又彼の人の身分にもさはる事だ、それだから先方から來た返事をば、お富さんへ届けねエワな」ト思入あつていふ。おきの「お前の詞は有理ぢやワイなァ。其事はお嬶さんに私が言譯をする程に、何卒モウ一度此お文を急に届けて下さんせ」トいひながら文を出し、誂の金包と文と共に渡す事、相生思入あつて。相生「ムム〳〵。それぢやァ今日は届けるがね、重ねてはお斷だよ」おきの「どうぞ早く届けて下さんせ」相生「よし〳〵今日は届けて」ト懐中して右の先方から來た文をば片手に持ち「この先様から來た文も、私が持つて居ては却て悪い。こりやお前、手拭紙にでも遣つてくんなせえ、必ずお富さまへ手渡しては悪いよ、きつと斷つたぜ」おきの「アイ〳〵承知ぢやワイなァ」ト文を受取る事。相生「ドレ往て來ようか」ト時の鐘、合方になり、相生橋懸へ入る、よき程に以前のお熊婆出て下手より窺ひ、又忍ぶ事、兩人是を知らず、おきの後を見送りて。おきの「本に彼のお方の

任よ、此方の名前のねエ品だ、風に飛んでもかけ構のないのだ、よし〳〵」トこなし、此時奥にて。呼び「オイ松五郎さん〳〵」松五郎「オイ〳〵今行くワエ、それにしても」ト徳利の始末に困る思入。「ア丶これ何處ぞへこれを」呼び「オ丶松さん〳〵」松五郎「エ丶今行くワエ、忙しない」ト下手の葉蘭の茂みへ心附き。「少しの間爰へかうして」ト右の包の儘、中へ隱して。「よしよし、これで入用の時に引出すワ、ア丶これ此樣に齷齪するもこれも戀ゆゑ」呼び「オイ松さん」ト大きく呼ぶ。松五郎「エ丶思案もなく呼びやアがるワエ」ト唄になり、上手へ入る、奥より縫師おきの、幇間相生、思入しながら出來り。おきの「モシ相生さん、あのお富さんが此間からお前へお頼みなさんした彼のお文は、殘らず先へ屆いたで御座んせうな」相生「そりや屆かないで何するものか、不斷いろ〳〵とお世話になるお富さんの事なり、又先の彼の人も、私が江戸にゐた時分には、年が年中お世話になつた旦那の事。とんだ淨瑠璃の口說だが、いつか汐干の戻がけ、互に見合はす顏と顏、それから後は川端で、私の席が大入で、日延を三日の績物、お富さんも彼の人も、聞きに御座つた其時に、すべよく引合せ、其時物を言交し、それから斯うした文の取遣、文箱地藏と平内樣を俺が二役勤めて居るのだ、屆けないで何するものか」おきの「そんなら可うござんすが、お富さんが仰しやるには、此方からお文を上げても先からお返事が無い

法の書付を出し、又藁苞の中より誂の備前徳利に、保命酒と記したるを出し、こなしあつて。「則ちこの保命酒の中へ仕込んで、道ならねども源左衛門をキユウといはせて。とまづ殺すさ、仕事をするも皆誰ゆゑぞ、お富ゆゑ。そのお富がさういふ譯になれば、こりや滅多には源左衛門には呑まされねエワエ」　ト思入あつて徳利をもち。「併し高い金で買つた藥、棄てゝ終うも惜いもの、何ぞの役に立つ事があらう」　ト又藁苞に入れて。「こりや斯うして措いてと」　ト右の藥の二つの包と藥法の書付を持ち、思入あつて。「それにつけても俺が弟の藤八も、馬鹿念の入つたどぢな奴だワエ。これ金紙の包に入つたは、南蠻祕法の大毒藥。これは酒の中へ入れてから仕方がない」　ト藥紙へ入れし藥をこなしあつて。「此藥紙へ入れたのは其毒氣を消す藥。これ迄添へて遣しても、肝心の毒藥さへ今の分では不用なもの、毒消藥は猶不用だ」　ト書いてありし封しめぬ手紙を出して。「幸ひあの松兵衛に屆けうとは、藤八へ送る此手紙へ封じ込んで戻して遣らう、それが可い〳〵」　ト手紙の中へ巻込む中に風の音して、舞臺へおきし以前の藥法書、よき所へさしがねにて引いて取る、松五郎これに心づかず、手紙を見物に見える樣に懐中して仕舞ふ事あつて、件の藥法書見えぬ故、心づくこなしあつて。「ヤア〳〵今迄あつた毒藥の用方を書いた淸書を、どつちへかやつたワエ」　トいろ〳〵考へるこなしあつて。「エヽ

いふから」ト文を二三通出して見せて。「これ此通りみんな私が持つてゐるのサ」松五郎「文では悪いといふから、直ぶつつけにやらかしても今の様に。こりやァ俺が氣をひかれたのだワエ」お熊「アヽ可ねエ〳〵。おあひだ〳〵」松五郎「なぜ〳〵」お熊「これ。斯ういふ譯だ」ト呟く。松五郎「なんと云ふ、そんなら今あのお富には、疾から外に」お熊「アこれさ」ト又呟く、松五郎こなし有つて。松五郎「そりや嘘だ〳〵、今もお富が一寸した事で、源左衛門殿へやきもちを燒く鹽梅體は、どうして〳〵そんな事は」お熊「アレまだそんな事をいつてゐるのウ。そこがお前苦勞人、下つ腹に毛のないのだコレ」ト親指を出し思入あつて。「をナ、一ぱい味く喰せてゐるのだ」松五郎「ムヽ此方は一杯も喰はせられねエだけ、猶腹が立つワエ。よい〳〵こりやモウ此儘ではおかれねエワイ」ト立かけるを。お熊「アヽこれ〳〵、そんなに荒立つてはいけねエよ、私がとつくり實正を見屆けた其上で」松五郎「俺に知らせろ、骨折代は」お熊「アイ〳〵承知さ」松五郎「早く行きな」ト お熊は下手へ入る、松五郎思入。「やれ〳〵とんだ話だワエ」ト邊へ思入有つて合方になり、以前の藁苞を提げて出て。「それとは知らないで、お富はよもや俺がいふ事を聞くであらう。其時はあの源左衛門を仕舞をつけ、お富を俺が女房にして、跡式を丸〆と、鎌倉に居る弟の藤八が手をもつて買求めた此毒藥」ト懐中より叺莨入を出し、此中より藥包を二つ、藥

ト空退け。「ないワイなア」ト唄になり、お富上の方へ入る、松五郎起かへり科あつて。松五郎「今度の咄をば、あのお富めが穿ちがへ、何だか源左衛門殿へやきかける鹽梅、可い呼吸だと持込んで口說いても、けんもほろゝ、エヽ忌々しい何の事だえ」トこなし、上の方よりお熊、前幕の婆にて出て來り。松五郎「お熊か」お熊「オヽイ。オイ松さん」ト呼ぶ、松五郎振かへり見て。松五郎「これ〳〵お主も日外や始めて文を賴んだ其時に、急度骨を折つてくれるといふから、それ相應に禮をして置いたぜ。それにたゞねえのウと、さうすまして居られてはいけめえぢやァねえか、さうして文は遂けてくれたのか、お富が手へ受取つたかえ」お熊「受取つた事は受取つたが、又返されたのさ」松五郎「又返されちやァいけめエぢやァねエか」お熊「それでも始めて文を遣つた時はね、十が九つ出來さうな鹽梅さ」松五郎「十が九つ出來さうな鹽梅で」お熊「さうしてお富さんが」松五郎「何とか云つたか」お熊「此文は彼の眞實に松さんが書いたのかえといふから、アイ眞實でござりますといつたのさ」松五郎「さうするとどうした」お熊「ほんに顏に似合はぬ優しい人だとさ」松五郎「その臺詞は極可いの」お熊「嘘にも斯ういふものを呉るは嬉しいか」松五郎「ム、。ム、」トこなし。お熊「文を遣すとは今時には廿口な、時代な洒落はよしておくれ、人の目褄にかゝつては惡いと

うといふ先刻の目算、俺もその以前江戸へ行たその時分は、お前も藝者して、その時には此方も相應に間拍子がよかつたから近附になつて、萬更知らぬ顏の半兵衛といふ譯でもねえ、今いふ通り、赤間の源左衛門殿は、倦つぽい人だから、今にお前もおあひだにされて、その鎌倉の女をば爰へ引張つて來ようもしれねえぜ」お富「エヽ私が倦きられうが倦きられまい、がお前の世話にはならないよ、お前も餘程苦勞性だのウ」松五郎「所が俺ア苦勞になるよ。ぞつこんお前に惚れてゐるから、ソレ日外やから度々あのお熊婆さんに頼んで、文で大抵俺が心意氣は知れさうなものぢやアねえかな」お富「アヽもし松さん、お前彼の文は本氣かえ」松五郎「本氣でなくつてどうするものかな。これ〳〵お富さん、娘子供ではあるまいし、親分の嬶さんへ、斯う打出して惚れてゐると、男が口外したからは、だいでごつこの一か八、お前だつても苦勞人、察心もありさうなものだ、萬更恥をかゝせてくれめえの」お富「それだといつて私には、今は源左衛門さんといふ主のある此からだ」ト又行かけるを宜しく止めて。松五郎「サア其主の心が。モウ裏はらになつてゐるよ」お富「エヽ執つこい放しておくれ」松五郎「イヽや放さぬ。これどうぞ」トよろしく止める、お富思入あつてじつと留り。お富「デモ思ふに任せぬ」トじつと思入」松五郎「エヽやつぱり亭主へ」ト抱付かうとするを振切り、又寄る所を。お富「エヽそれ所では。

平馬とめて 平馬「アこれ〳〵源左衛門殿、可うござる〳〵、參る早々お富殿がひぞりかけたが彼の悋氣の角文字、いとしがられるとは。貴公は何たる果報者。アヽ身共も切て半分あやかりたいな」ト源左衛門こなし有つて四邊を見廻す、松五郎が見えぬ故。源左「モシこいつに構はずとマア奥で。サアお出なされませ」平馬「コレお富殿、こなたも奥へ」お富「イヽエ私は跡から往くワイなア」ト源左衛門は平馬をせり立つる、平馬は畜生奴と源左衛門の脊中を叩く、お富見合せ顏そむける、心々のこなし、これを唄になり、源左衛門、平馬上の方へ入る、跡なまめかしき合方になり、お富科有つて、人を待合せる意の思入。「相生さんやアノおきのへ賴んでおいた今朝の文、早く否やを聞きたいものぢやなア」ト思入、此内下手より松五郎うそ〳〵出來り、お富と一寸顏を見合す事、お富こなし有つて上の方へ行かうとするを引とめ。松五郎「これお富さん、一寸お待」ト呼とめる。お富「エヽモ恟りするワイなア」松五郎「何もさう恟りする事はねえ、マア私がいふ事を聞きなせえな」ト宜しくとめる、誂への合方。「モシ今見た通り聞いた通り、この儂が親分とか兄貴とか云つて、尊敬しておく當時マア御亭主の源左衛門殿、アノわつぱな男だ、働者だがあの人の性質で、直に物倦のする男だよ、實は鎌倉に引かゝりの女が出來て。あの地頭の役人平馬殿が、殿樣の用で旅立を幸ひ、一緒に往つて、其女の始末を付け

たと急がしかつたらうの」お富「お前も又斯うした事なら、一昨日にも一寸知らせておくれなら可いに、足許から鳥とやらで」ト思入。平馬「ム、分つた〳〵、扨は主人が急の旅立ゆゑ、そこでお内儀にはチト逆鱗の體と見えるワエ」源左「コレお富、何だえ手前は平馬様へ御挨拶でもしねえのか」平馬「アいや〳〵先刻奥で一寸逢ひ申した、さてお富殿は源左大人が江戸から苦勞して呼寄せた程有つて、扨も〳〵美しい」松五郎「オイ〳〵姉御、親分の旅立はちつと耳寄な事があつての事だ、悪う思つてはいけまいでは有るめえか」平馬「マアちつと是へかけ給へ」お富「イエ面白さうなお咄のお邪魔になつては悪いワイなア」ト思入、源左衛門平馬もよろしくこなし、松五郎松兵衛きつと科あつて。松五郎「ハ、アそれぢやア今の爰の咄が」平馬「とんだ間違だ」源左「これお富、爰にはちつと込入つた咄があるのだ、お主はマア奥へ行きやれ」お富「その込合つた耳寄の咄ゆゑ、私に聞かせては悪いのかえ。急に鎌倉への旅立といひ、嘸面白い事で御座んせうなア」源左「何だこいつは爰へ來る早々氣觸な事を吐しやアがる、サア彼方へ行けよ」お富「高が女の一人位、男の働でどうでもしなさんせといふ事さ」源左「箆棒め、おつに氣をまはしやアがる、今言つたのは平馬様へ娘を取持つ咄だワエ、」お富「知らぬワイなア」源左「どうしたと」ト立かゝる、此内に松五郎間が悪いと件の莨を提け上の方へ入る、源左衛門立ちかゝるを

私の主人和泉屋の極印が御座りますれば、兩替仲間の何方で引替にならうとも、お氣遣はござりませぬ」平馬「よし〳〵、百五十兩確に落手」ト金を源左衛門へ渡し。「鎌倉へ參り金子は貴公へ」源左「しつかりと預りました」ト松兵衛右の筥を受取り。松兵衛「さうして此香爐の質請は何日頃なされて下さりまするな」平馬「ハテそりやア何れ鎌倉へ往つた上、此方の諸用が片づき次第早速に請戻す、氣遣さつしやるな」松兵衛「お前樣のお詞なら此方も安心、左樣なら私は日の暮れぬ中少も早く」源左「道をば氣を注けて行きなせえ」松兵衛「左樣ならば平馬樣。源左衛門樣、是から直に」源左「太儀でごんした」松兵衛「その中お目にかゝりませう」ト松兵衛橋懸へ入る、兩人四邊へこなし有つて。平馬「先あの香爐を和泉屋方へこつそりと埋めて置く時は」源左「それでお前も身分の安心、是から直に鎌倉へ上る支度を」平馬「源左衛門殿、先刻申入れた婦人の一件は」源左「何の高が女ひとり、どうなりとなる事で御座りまするワナ」松五郎「何のお前さん、どんな堅い女でも靡かないといふ事はござりません」平馬「ムヽ畜類め」ト思入、此時上手よりバタバタと駒下駄の音してお富出て來り、つんとこなし、源左衛門と顏見あひ。源左「オヽお富か」お富「お前今お出かえ」トつんとしたこなし。源左「さうよ。俄に爰にござる平馬樣と、お屋敷の御用で鎌倉へ往てこにやならねえ、立饗應の意で急に思ひついた今日の催し、さぞごたご

件の銀にて拵へたる鶴の香爐を出し、源左衛門へ見せる、源左衛門受取り。源左「ム、、成程、咄に聞いたが見るは始て。是が千葉家の重器、眞鶴の香爐かな、成程こりやア結構な品だワエ」ト松兵衛もよく〳〵見て合方。平馬「其香爐の儀について複雜つた仔細といふは斯樣ちやて。先達て頼朝公南都東大寺を御建立、その供養の事につき近き中の御上京、其折から諸大名より禁廷へ家の寶を獻上と事極り、主人千葉家には一つの重寶と申すのは、往昔。下總の相馬より傳へ受けし夜光の玉と號けし名玉、これを時の帝より御懇望なさるれども、世にも得難き品なれば、此木更津の鎭守たる吾妻大明神の末社の裡へ、稻荷の神と祀籠めある事は、コリヤ世の人の知る所。此事を委くいへば、橘姫の由來を說いて開帳の言立めく故、左樣な事は申さぬが、夜光の名玉の其代りに獻上致す鶴の香爐、近く寄つて御拜とげられませう。ハ、、、」源左「なるほど委しい由來は初めて承りました。此品が彼の譯でお前が持つてござる故、兼て一味企ての邪魔になる穗積隼人。悴の左近は」平馬「二人共に咎の身の上。そうして始終は兩人とも、痛い腹は安いもの。シテ松兵衛とやら、この香爐をいよ〳〵其方へ預りくれるか」松兵衛「それ故にこそ參つたからは、お賴通り金子と引替へ。百五十兩持參致しました」源左「サアそれなれば香爐は」ト筥へ入れて手代松兵衛へ渡す、この内松兵衛うちがへより百五十兩取出し。松兵衛「金は封金、

か」松兵衛「ハイ松兵衛と申す者でござりまするが、誰方も始てお目にかゝりました」ト此内源左衛門は丈助へ囁き、丈助呑込み相生に向ひ。丈助「時に親方が爰へござつたから、是からが酒盛だ、相生先生奥へ往て座敷の支度を頼みますぜ」相生「それでこそ私の世界となりました、そのこと／＼」源左「今に行くから用意をしやれ」丈助「そんなら親分」相生「お早くお出なされませ」ト兩人はいる、この内松五郎は提げて來た藁苞を下手へ片寄せ。松五郎「サテ早速咄さねばならぬのは、日外や平馬樣が兄貴へお頼の」ト四邊へ思入して、皆々もこなし。「彼の鶴の香爐は」平馬「その眞鶴の香爐は、某が肌身はなさず所持して居るて」ト懐中へこなし。源左「シテあの仁を同道したのは」松五郎「されば、いつか話した藤八といふのが、實は私の兄でござりまする」兵衛「道理でお前は似てゐると思ひました、其藤八が參るべきでござりましたが、此節大番頭の多左衛門が、魚油仕入の事に就いて留守中ゆゑ、藤八は跡を預つて居りますれば、代りに私が參りました」松五郎「まだ其上に」ト小判の形をして見せ。「レコも直に屆けて遣しました」源左「それは手筈がよかつた」平馬「重疊／＼、然らば直に取替せませう」松兵衛「私も大事の品お預り申して戻るからは、拜見致したう御座りまする」平馬「尤な儀ぢや、これが則ち千葉家の重寶、眞鶴の香爐ぢや、とつくりと見やれ」ト懐中より蒔繪のしたる香爐の筥を出し、紐を解き紫の袱紗より

したり、お前様も取越苦勞な、まだ何だかしれやアしねえ。モシ藍玉屋がこしらへ事で、玉を隱して置く樣な、實正を突當てたら、そこは此方が男づく、私が一番乘出して忽ちかゝりをつけますワ、高が小娘一人の事、マア落ついてござりませ」平馬「何分骨折を賴み申す」丈助「もしもしあの通り親分が、平馬樣の方へは譯をつけると言はつしやるが。モシ杢兵衛さん、早く爰をば歸んなせえ」庄屋「歸る事は歸るが、既に斬られるかと思つた故、がつかり腰も拔かけて足がぶら〳〵」トそろ〳〵立上る。丈助「早く行きなせえ、長居は却つて爲にならねえ」庄屋「戻ります歸ります。扨々親方、お前が御座つたばつかりに、斬られる所を命拾ひ、忝なうござりまする、しかし饗應酒はすつぱり醒めた。ア、怖い事〳〵、なんぼこの木更津が、貝が所の名物でも、ア、恐しい拔身の馳走」丈助「エヽ何を馬鹿いはつしやる」庄屋「イヤ馬鹿は今年は切物でござつた」ト橋懸へ入る、テンツヽになり向より海松杭の松五郎、好みの拵へにて、洮の小さき藁苞を竪に提げ出る、松兵衛手代の拵へ、合羽を著て脚袢に手甲、中拔草履、旅形にて出て來り、直に舞臺へ來る、皆々見て。源左「オヽ海松杭の松五郎か、お主が來るを待つてゐた」松五郎「兄貴。平馬樣こゝに御座りましたか」平馬「オヽ松五郎殿か。シテ同道したあの者は」松五郎「コリヤア鎌倉で心易い藤八殿の名代に御座つた手代衆さ」平馬「ハヽアこりや一件の和泉屋の

申す提灯に釣鐘、釣あはぬは不縁の原。何のかのと九段目もどきの断口上、俺も平馬樣へ濟まぬ故、度々手を更へ品を更へ懸合つたら、其中に肝心の彼の娘のお鶴が、どこへ行つたか行方が知れず、何でも是は神隱との事故に、有體に申したばかり、何分親方、平馬樣へそこを宜しく執成を偏にお賴み申しまする」ト思入あつていふ。源左「ム、よし〳〵。しかし平馬樣、こりや何か先方に込入つた譯がありますワエ」平馬「それ故身共猶更存外、彼奴有德なる藍玉屋へ抱込まれ、却つて先方より扱ひ金を取り、約した詞を反古に致す、それ故彼奴めを討放くれるワエ」ト立かゝるを源左衞門一寸とめて。源左「マア〳〵お待なされい。マア待たつしやりませ、此事は初め私にもお前樣がお話はなされたが、世間並の媒介人へ大人氣なくかゝり合ふ事もねえと、それなりに聞流しておきましたが、こりやア必然その娘をどつかへ轉したに違ねえにから考へて見るに、たしか彼所の藍玉屋には、江戸から預けられてる與三郎とかいふ若い野郎、美い男でと世間の風聞」平馬「ムヽそんなら其與三郎とやら申す奴が、彼のお鶴とちよくり合つたのだな、ホイ鶴の初物を左樣な奴にしめられては、いよ〳〵武士が廢るワえ、是といふも汝が懸合がまだるい故だワ」ト杢兵衞へ立かゝる、杢兵衞驚入つたる思入。源左「これは

しあつて。丈助「山鹿毛様には今日はよく早くお出なされましたなア」庄屋「この杢兵衛などは、馳走になるかならぬ中に平馬様にお目に懸り、誠に可危な所へ主のお戻り、やれ〳〵ぴつしより汗をかきました」平馬「第一は斯うぢやて、貴公も兼て知らるゝ如く、この度身共も殿様より加増を賜はり、鎌倉へ出勤致すに就いて、未だ定まる妻もなく、閨淋しく思ふ折から、かねて其許も存じの如く、當所の町人藍玉屋善右衛門が娘のお鶴、恥しながら一目見るよりぞつこん執心、どうぞ宿の妻に致したく存じてゐる折からに、これなる杢兵衛、藍玉屋へは入魂とやら、私が申入れ媒介の儀然るべく取計らはんと、立派に請あひし故、時折〳〵に心を用ひ、過分のまひなひ賄賂をもつて、身分を捨てゝ相頼めば承知致し、先方へ首尾相なるやう媒介せんと、日々夜々に刻を延し、今日の唯今と相なつて、埒明くの明かぬのと、人を擬者に致した申譯、それ故この平馬。武士道が相立たぬ、貴公が是へ今少し戻られずば、眞二つに討放さんもの、殘念な事致したワエ」源左「それぢやア腹を立たつしやるも御有理だ、シテ又杢兵衛殿、こなたは何と平馬様へ御挨拶をしたのだ」庄屋「サア私もどうか彼のお鶴殿を平馬様へ媒介をする心なれば、段々藍玉屋へ懸合つた所が、はじめ前方で申すには、まだお鶴は年も參じませず、殊に病身ゆゑに縁組もまだ早い、殊に平馬様は御地頭の御重役、此方は町人の事なれば、下世話に

事を聞かせるであらうと、心俟に待つて居つたが、小兒を欺く唯今のいひぬけ」庄屋「デモそれは有體の事でござりまする」平馬「吐すなやい〳〵、察する所元々から事をたくみ、武士たる身共をうま〳〵と一ぱいはめた不屆奴、それへ直れ。いでぶつ放してくれん」ト刀へ手をかけ屹相して拔きかける。庄屋「ア、御免なされませ〳〵。桑原〳〵萬歳樂〳〵」おきの「何であらうと今日の事は、アレあの樣に謝てゞござりまする、御堪忍なされませ」平馬「イヤ〳〵退け〳〵、ならぬ〳〵」庄屋「これは手酷い目に逢ふものだ」平馬「うぬどうするか。覺悟致せ」ト刀を拔き嚇しに追つかける、庄屋杢兵衛迯げまはる、右の唄祭の鳴物になる、向より赤間源左衛門羽織著流し一本ざし、誂の柾の下駄、跡より丈助子分の拵へ、風呂敷包を擔げ、同く一本ざし、次に相生前幕の幇間持にて附添ひ出來る、舞臺はおきの平馬をとめ、よろしく雙方見合つて。源左「イヤナニ平馬樣、何の間違か存じませぬが、マア〳〵お待ちなされませ」平馬「イヤ〳〵退け〳〵ならぬ〳〵。ヤさういふお主は源左衛門」おきの「よい所へ旦那樣」源左「それへ往て、マとつくり譯を聞きませうか」ト これにて平馬こなしあつて床几へかける、おきの後へ控へる、庄屋杢兵衛下手に控へる、赤間源左衛門、丈助、相生、舞臺へ來り銘々床几へかける事。おきの「旦那がお出なされた事を、お富さんへお知せ申しておかうワイなア」ト上の方へ入る、丈助こな

若い者△「其悦びだと言つてこの通り、酒肴もたつひつに」同×「村方の儂們へ酒をたらふく饗應はしやるからは」四人「さて／＼氣をはられた事でござる」藤六「モウ一度座敷へついでに」段平「熱燗でモウ一ぱい宛」兩人「過して行きなせえ／＼」四人「モウ／＼澤山にたべました」若い者×「これでお暇申しませうかえ」四人「よろしく禮いうて下され」中通皆々「そこは承知。よう御座りました」ト右の鳴物にて若い衆の仕出し四人橋懸へ入る。段平「イヤ百姓衆といふ者は律義なもの、其かはり言ふ事がみなおあひだゝから」藤六「違へねえ。時に肝心の正客山鹿毛樣を」段平「座敷に一人沖の石、人こそしらじかわくまゝ」藤六「手酌で大方飲んでゝ有らう」段平「しかし今庄屋の杢兵衛親父さんが見えたによつて」藤六「又直に酒宴になるであらう」段平「何にしろ己等達は」藤六「勝手で別にやらかさうか」段平「それが可い／＼」お市、お半「サア／＼ございませいなア」ト右の鳴物にて此人數殘らず下手へ入る、舞臺へ床几を二脚直し、是にて右の鳴物活殺しよき程に上手より山鹿毛平馬著流し挾帶、大小にて庭下駄、杢兵衛庄屋の拵へ、草履を穿き、次におきの前幕の役にて平馬をなだめながら出て來り。おきの「マア／＼何事も御了簡なされませ／＼」平馬「イヤ止るな／＼、其方が存じた事ではないワイ」庄屋「どうも今更私も思案につきました、マアマア御了簡なされませ」平馬「イヤ相ならぬ、武士たる身共を嘲弄するか、今日迄は耳よりな返

織ぬける、金五郎思入有つて。金五郎「モシ〳〵若旦那。これサ若旦那」ト羽織を著せる、木の頭、與三郎羽織を被ながら藻脱の様に向を見こみ、見とれるこなしよろしく、　拍子幕

三幕目　木更津赤間別荘の場
同　濱邊の場

本舞臺三間の間常足の家體、向ふ赤壁、櫛形窓の欄間、正面誂へ塗下の瓦燈口、更紗暖簾かけあり、上手一間風流なる障子屋體、これに續き一間の床の間、この向ふ茶壁、こゝに餝付よろしく、平舞臺上の方に以前の丈助、段平、藤六、百藏、市助、何れも前幕の子分にて住ひ、此前へ酒肴の道具置並べ、ずつと下手若い衆、村方若い者にて控へ居る、お半、お市、これも前幕の在所娘にて酌して居る、いづれも振舞に招かれし體、すべて赤間別荘の體、濱祭の唄鳴物にてよろしく賑かに幕あく。

藤六「マア皆の衆、可いではないか、モウ少し寛りと飲んで行きなせえ」段平「親分が御地頭の御用を達す身分になり、心祝の今日の酒宴」お半「それ故に私等もお前方を饗應に」お市「御酒のお酌や御飯の給仕」兩人「手傳ひに來た今日のよろこび」若い者○「されば爰の親方の赤間源左衛門様は、この木更津では羽のきく親方」同□「近郷近在を男をみがく手あひが、時折ふしの折見舞」

存じで御座りませう、それ彼の深川の藝者富吉さんで御座いますワな」與三郎「何だ富吉。オヽさうか、彼奴がこの木更津へどうして來てゐるで有らう」相生「イヤモウ私も此間こつちへ來て顔を見て互に吃驚さね、併しそれからの手續で所の衆の贔屓になり、マア私も大きに幸運、そんな事や何やらで今日も取持役と出かけましたのさ」與三郎「誠に江戸の者はなつかしい、是から濱川の湊屋で一口やる積だ、用が濟んだら後から來ねえか」相生「そりやァ仰せなくとも、是非とも推參」ト花道にて咄す中、唄になり上手より以前の子分大勢、酒に醉うたる科、妻楊子つかひながら出る、跡よりお富、お熊ばゝア、おもよ附添ひ出る、相生これを見て直に本舞臺へ來て。相生「是は皆さんお早うござります、モシ御新造さん、申譯もござりませぬ、お近附にあひましてお供に後れました、眞平御免下さいまし」お富「何だね固くろしい」トこんな事いふ中、子分一人づつ與三郎と摺れちがふ事よろしく有るべし、子分の岩吉、すれちがひ乍ら懐劍を懐より出す、與三郎金五郎慄へる、皆々すれちがふ事有つて、お富と與三郎見あひ、お富扇を翳す、色合のすれちがひ有りて子分は引込み、お富、お熊、おもよ、お竹殘り、花道まで行きながら、扨は噂あるあの男かと見とれる。お熊「モシ〳〵お富さん。これサお富さん、何を」お富「エヽ」お熊「エヽモウござんせいなア」ト無理に引ぱり入る、與三郎うつかり恍惚れて羽

いふは幇間の甚八、どうして此地へ來てゐるのだ」金五郎「オヽ甚八さんか、今日はもし能く知音に遇ふ日ぢや御座いませぬか」相生「イヤモウ江戸でもお前さんのお噂たら〴〵、實は戀しくつて遙々とお後を慕うて參りました」與三郎「うまくいふ奴さ、しかしマアどういふ事で此地へ來たのだ」相生「左樣でござります、有樣は江戸に居つても、お前樣はこつちへ來ておいでなさいますし、此節は色の方もちつと隙になりますし、だからお前さんの跡を追つかけ來ました、併し是から夏期をかけては牽頭の甚八も、五行亭相生と名告つて、夜は川端へ寄席をかけ、昔噺の兩名たんまりとしめる積で參りました」金五郎「ムヽそいつは味い鎹儲だ」與三郎「さうして今日はお客で來たのか、又一人か」相生「サア今日は此木更津での、赤間源左衛門さんといふお人の内室、濱見物に行くから取持に行けと、所の若い衆に誘はれて參りました、斯ういふ片田舍にもおつりきな人も有るものサ」金五郎「ナニおつりきとはどういふ譯だ」相生「さればその源左衛門さんといふ人は、この木更津での利者、今こゝへお出なさる道で、若い衆大勢よつて酒を飲んでゐる所がござりましたらう、あの手合もみんな源左衛門さんの子分、今日姉御の濱見物といつて、取持の彼の騷ぎ、何と大層なものぢや御座いませぬか」與三郎「ムヽそいつは大層な事だね」相生「モシおつりきといふは、其姉御の事でござります、お前さんなんぞはお會ひなすつたら御

金五郎「若旦那、前方に見える岩の景色は、どうもいはれませぬ」與三郎「サアあの岩の上は、七八疊許もあるだらう、あの上で一ぱいやる所だ、何と可い岩ぢやァないか」金五郎「左樣でございまする、いやモ歩むともなしに磯邊へ參りました」與三郎「ほんにさうだね」トこんな事いひながら上手へ入る、ト直にばたばたになり、上手より相生、鰈を持ち走り出てくる、後より丁稚三太おつかけ出て。三太「これ相生さん、その鰈は俺がつかまへたのぢや、此方へ返しなさい」相生「馬鹿をいへ、俺がつきあてた、何で汝にやるものか」三太「それでも俺が見つけて捕らうとしたのだ、こつちへ遣せ遣せ」相生「何を小癪な」トをかしみの鳴物になり、立廻あつてとう鰈を蘆原へほり込む、相生三太を當てゝ向へ走り入る、三太脾腹を抑へながら起上り。三太「相生のべらぼうめ、それ」ト往かうとする、與三郎金五郎出て。與三郎「これ三太三太、手前マアそりや何の態だ、いたづらも大概にしろ」三太「いたづらぢや御座りませぬ、大きな鰈を私が見つけて捕らうとするを、相生の馬鹿面めが奪つた故、それで爭うてゐる所でございまする」與三郎「又しても惡戲ばかり、大概にしろ、そして手前は濱の湊屋へ往て、今に俺が行くから支度をしておけといひつけて來い」三太「ハイ畏りました」ト鳴物になり三太入る、相生捨白いひいひ出て。相生「オヤお前さんは伊豆屋の若旦那與三郎さんではございませぬか」與三郎「オヽさう

ざいました、お氣に觸えられずと眞平御免下さいまし」與三郎「ハテマアそんな三指では恐れる、イヤ久振でそつちの顔を見た故、どうか江戸へ歸つた樣だ、そこらで一口やらうよ」金五郎「よくございませう、久しぶりでお供致しませう、然しあの小僧どんは何時の間にやら、どう致しましたらう」與三郎「大方磯へ出て汐干の景色でも見て居るだらう」金五郎「天氣はよし、ぶら〳〵往つて見ませうか」與三郎「それも可からう」五八「モシ旦那樣、是から先は煙草の火が不自由でございます、これをお持ちなされませ」ト竹に挾みし火繩を出す。與三郎「こいつは氣が利いてるる、ソレ茶代ぐるみに是を取つておきな」五八「ア丶モシ〳〵旦那樣、こんな事を」金五郎「ハテ何もいはずに取つておきなよ」五八「そんなら戴きまする、大きに有難うございます」金五郎「サア參りませう」ト鳴物になり、東の歩道にかゝる。金五郎「時に若旦那、私はこの木更津は初めて參りましたが、イヤ風聞に聞いたよりはよつぽど佳い景色でございますな」與三郎「さうよ、こんな所が江戸に有つたら、錢儲になるであらう」トこんな捨白いうて眞中の歩道まで來ると、木なしにて道具變る、淺黃幕きつて落す。

造り物前面一面の總浪の遠見、前に常足の二重けこみとも浪、右そで山芦原、日覆より松の釣枝、よろしく道具納ろ。

に對しまして私がかやう申すは如何な樣ではございまするが、親共の代からお店の仕事をして、それで渡世をする私、大事の旦那だ、惡い事は申しませぬ、貴方のお身の上も親父から承る、大旦那與左衞門樣が、三十をお越しなされてもお子樣が無かつた故、お前樣を御養子にお貰ひなさつた其の後へ、御出生の與五郎樣なれども、御惣領と極つてゐるお前樣、あの與五郎樣は御別家と、事のきまつた時分まで、物がたいお前樣がどうした機に御放埒、御親類へお預けの身の上、それを案じて弟御の與五郎樣が御手紙だらうと、推量致して居りまする、マアこんな事は人情本などによく有る事でございます、實のお子へ義理立して、お前さんが放蕩をして、與五郎樣を名跡に立てうといふお意ではあるまいかと、どうやら私は思ひまする、そりや御實子への義理立は御尤でございまするが、お前さんは先から家へ」與三郎「これさ〳〵そりや何をいふのだ、何のあれに義理立が要るものか、第一義理といふ字を辨へてゐれば、親類や兩親へこんな厄介をかける者か」金五郎「サ、そりやお前さんは御別家なさつて、氣樂にお暮しなさるも、萬更でもなけれども、それでは世間が」與三郎「ハテ又そんな事、つまらねえ事は廢してくんな、俺も今日は退屈したから遊に出たのだ、それに詰らねえ事をいつて、醉がしちやアいけないではないか」金五郎「ホンにさうでございました、つまらない事いひ出して私が惡うご

れなら濱手へ往て汐干狩なとしませうワイなア」岩吉「それが可からう、皆も一緒に」お富「サアサア」皆々「ござんせ〳〵」ト唄になり皆々入る、ト直に與三郎丁稚をつれて出る、後より金五郎呼かけ。金五郎「モシ〳〵」丁稚「モシ呼ぶのは私等の事かね」金五郎「其處へお出なさるは伊豆屋の若旦那、與三郎さんではござりませぬか」ト與三郎振かへり見て。與三郎「オヤさういふは金五郎どんぢやァないか」金五郎「ヤこれは若旦那、誠にお久うござります」與三郎「ほんに久しく逢はなんだ、幸ひ前方に茶店がある、一寸一ぷくやりませう」金五郎「サアお出なされませ」ト鳴物おやし舞臺へ來る、此時丁稚三太下手へ入る。五八「誰方様もお早うござりました、サア一ぷくお上りなさいませ」ト茶莨盆持つてくる。與三郎「アイ〳〵構やんな〳〵。金五郎どん、何の用で此方へ來なすつた」金五郎「サアお聞なさいまし、黒戸の親類へ用たしながら成田へも參りたし、此方の方も始てゞござりますから、通つて見ようと江戸を立つ前の日にお店へ一寸參りましたら、貴方の弟御與五郎樣からお手紙が參りました、此上書の所を的に上總木更津南町藍玉屋善右衞門樣の所へお尋ね申さうと存じましたが、幸ひ此所でお目に懸りました、マアこれ御覧なされませ」ト狀を出す、手紙を取上げ。與三郎「それは大きにお世話でございました、又弟が何日の事を云つて遣したのであらう」金五郎「イヤ何の御用か存じませぬが、もし若旦那、お前様

と、行く先々が氣が變つて、餘程よく御座りますぞえ」 お富「ほんにお前は江戸ッ子だの、イヤ江戸から來るといへば、この南町藍玉屋善右衛門さんの所へ、江戸から逗留の客があるさうだが、其の客はア、江戸の何とやらいふ所の小間物屋の息子さんで、放蕩を爲竭して預けられてゐるといふ話、お前方は聞かねいかえ」 五八「成程、俺們は其お方は見た事はなけれども、大さう美い男だといふ話」 相生「ムヽそんなら江戸から來てゐる美い男とは、もしやこの相生の事ぢやござりませぬか」 岩吉「何を馬鹿な。併しその藍玉屋の家には、お鶴といふ美い娘がある筈だ」
相生「その美しい娘のある家へ、江戸の美い男の江戸ッ子が預けられて居るとは危ねいものだ」
岩吉「イヤよつ程お前は苦勞性だぜ」 相生「これ〳〵今話した藍玉屋の娘お鶴とやらは、親分が熟懇にさつしやる此濱の御領主、千葉家の役人山鹿毛平馬樣が惚れてござるといふ話、どうぞして鶴をもとめ貰ひ、ひきがしたいとやら、こいつを取持つてあげたなら、褒美をずつしりであらうぞや」子分○「そいつは耳よりな話だ、時に黑戸の若い者中より姉御の待受け贈物を披露して下んせ」 岩吉「違ひねえ忘れてゐた、これ姉御、黑戸の若い衆から魚が一舟、酒を一駄お前の所へ贈物でござります」 お熊「濱手の納屋へ受取つて、皆の衆には馳走しておきました、後に挨拶して下んせや」 お富「アイ〳〵それはマア御心配をかけました、そんなら斯うしませう、皆もこ

戸深川の藝者衆だから、こんな所はつまらないが、又折節は田舍の景色も可いもので御座いまするワな」お富「眞にお熊さんの言はしやんす通、かう出かけて見れば氣が晴れて可いといふもの、然し今濱の武藏屋で一つ過した故か大層に醉うたワイなア」お熊「ナニお前さん、濱風に少し吹かれりやァ直に醒めますワな」相生「イヤそれといふも親分が、この木更津で羽振の利く故に、源左衛門さんのお鼻さんに、近づきになりていと、その取持でこの相生なども近年の大酩酊でござりました」子分○「モシ〳〵姉御、向にも子分の同類が待つて居る樣子、サア〳〵あれへ往きませうか」お熊「何はともあれ、あれへお出なされませいなア」お富「サアござんせいなア」ト唄になり本舞臺へ來る、子分大勢出て。岩吉「姉御、最前から待兼ねた、お早うごんしたの」お富「オヽこゝへ御座んしたは黑戸の濱の衆達だの」岩吉「されば姉御がござる事は、昨日から聞えてゐた故、途中の間違ふせぎの爲に」皆々「出やんしたワイのウ」お富「ほんにお前方の其心配、マァお氣の毒な事で御座んした、モウ皆さんは構はずと、汐干狩なさんすとも、酒になさんすとも、心任にしやさんせいなア」岩吉「そのお許が出るからは、今日一日は無禮講、汐干に命の洗濯婆ア、シタガお富さんは江戸の結構な所からござつては、何處を見てもこんな田舍、慰にもなりますまい」相生「イヤたま〳〵江戸から爰へ稼ぎに來て、此土地でお世話になつて居る

るべし、辻打にて幕開く。

岩吉「なんと賑かな事ぢやねいか、斯ういうて親分を贊めるぢやねいが、この木更津で飛ぶ鳥も落ちる赤間源左衛門親分が、今度江戸から請出し伴れてござつたお富さんを、濱見物に出さつしやるので昨日からの大趣向、なんと大仕合ぢやねいか」子分○「さうよ、お富さんも親分の家に居れば、大概な大名の奥樣よりか可い、いふ目が出るの」團平「イヤ大層な贊樣だ」五八「お市ばう、大層蛤を取つたの」お市「ハイ是はお富さんが濱見物と聞いた故、それで態々汐干狩に出て、この樣に拾うてお富さんに上げやうと思うて」五八「ハイ／＼團子が燒けました」皆々「オイオイこれは御馳走だ」トこの内團八蛤に挾まれ。團八「アイタ、、、、、人殺し助けてくれ助けて呉れ」皆々「どうした／＼、氣を確に持て／＼」ト見て。岩吉「ハ、、、大笑た、蛤に手を喰つかりやァがつた、ドレ俺が除つて遣らう。時にお富さんは遲いこつちやねいか」團八「大方濱の武藏屋で飲んでゞあらう」お市「申し／＼前方へ見えるがお富さんぢやヮイなァ」皆々「オ、眞に姉御だ、オヽイ／＼」トすり鐘入、世話の流行唄になり、向よりお富妾宅の拵へ、お熊婆ア、子分大勢つき添ひ出る、花道よき所にて。お熊「モシお富さんえ、此間から旦那の源左衛門樣がお勸めなさつたが、やう／＼の事で此濱見物、しかし何不自由なく派出にして御座つた江

るで御座りませう」ト淸八向へ入る。關路「心ならぬはお國に於いて寶の紛失、折も折」良助「かてゝ加へし伊豆屋の騒ぎ、シテ玳瑁を奪ひし惡者は」關路「その惡徒を詮議の手づるに」ト呀く、良助扨はと思入、上手より千太郎件の筥を抱へ窺ひ出る、下手藪疊より丈四郎拔刀にて、月は雲隱れ、少し暗がりの模樣、丈四郎良助へ斬りかける、是をすり拔け關路身を替せる、千太郎つか〳〵と下手へ行き、良助關路上手より千太郎を當てる、丈四郎良助を突退け、此時勘太に行當り、勘太悔り心づき行かうとするを、關路支へる、千太郎此中へ割つて入る、關路窺ひ寄つて。關路「さてこそ先刻の」千太郎「放しやアがれ」ト此中かすめたる題目太鼓、丈四郎觀念と斬込む、五人の立廻り、一度關路の手へ件の筥を取る、トヾ千太郎取つて左右へ蹴飛ばしきつと見得、是にて月現はるゝ、雙方顏見合せる、木の頭、千太郎右の筥を口に啣へ、きざみについて雙盤になり、此見得よろしく。

幕

二幕目　木更津汐干の場

造り物三間の間、向ふ淺黃幕、上手梅の立樹、鳥居玉垣、眞中に茶屋床几、下手葭簀張の團子店に草鞋、紙、竹の先に火繩など差してあり、爰に五八團子を燒きゐる、すべて木更津海邊の体よろしくあ

たぢとなる。關路「これも詮議の後日の手がかり。あの良助は」ト思入、ばた〳〵になり、良助以前の飛脚にあひし體にて、連立ち走り出て。良助「あなたは關路様、これにお出なされましたか」關路「オヽ其方は良助」飛脚「お國元より火急の早狀」ト狀を出す。關路「ナニ此中へ書狀とや」ト早い合方、狀を出して讀む、飛脚は提灯をさしつける、讀終つて。「ヤヽ此文體では、兼てより父上様が御預りの眞鶴の香爐を、御寶藏の戸前をあばき、何者とも得知れず奪取り、立退きしといふ知せの文體」良助「スリヤ御預りの香爐が紛失したれば」飛脚「お家の浮沈、ヤヽヽ」關路「一先旅宿で私が戻りを」飛脚「心得ました」良助「ござれ」飛脚「ハテ」ト走り入る、ばた〳〵になり以前の手代清八出て來り。清八「ヤ御女中様は此所に」關路「さういふ此方は伊豆屋のお手代」良助「シテ與三郎さまの身の上は」關、良「なんと〳〵」清八「あなた様のお勸で、一旦元山町へお戻りなされた與三郎様、しかし今まで御放埒、親類中がそれなりには濟まぬとて、木更津の伯父御様が何事も預つて、一先藍玉屋へ預けの身の上、さもなくては世間の風説、人の噂も當座の事と、何かなしに彼地出立と事きまりまして御座りまする」關路「スリヤ與三郎様には」良助、關路「木更津へ」清八「此事お知らせ申さうと、わざ〳〵是へ驅付けました」良助「今夜の中にともかく下郎は、元山町へ立寄りませう、マア此方様はすこしも先へ」清八「左様なら仰に從ひ、お先へ參

門口を横に見たる道具、題目太鼓にて道具納まる。

ト日覆より月の出、ばた〳〵になり、向より伊豆屋手代長九郎、船頭嘉四郎兩人走り出て。長九郎「ア、息が切れた〳〵、嘉四郎アノ侍奴は」嘉四郎「土堤のまがりでとう〳〵まいた」長九郎「やれやれそれ聞いてほつと息が納まつた、何にしてもとんだ處へ與三郎の身寄の關路とやら」嘉四郎「彼奴がうせたばつかりに、何かの事がとう〳〵ばれて危い事だ、さうして與三郎はどうしたらう」長九郎「此もくが割れると直に藝者めらが、喋つたに違ひなし」嘉四郎「それぢやァ家へ歸つたらう、をしい事だがお前は是からどうしなさる」長九郎「與三郎に歸られちやァ俺は家へは歸られねえ、これといふも戀の罰だ」嘉四郎「きびしい祟りだ」長九郎「新堀ぢやァあるめえし」トばた〳〵になり、兩人足音を聞いてうろ〳〵する、向より良助走出て。良助「二人ともに爰にうせたな、今の強請騙の當人、船頭の千太郎、うぬらも一つ穴の貉、迯した先を吐して終へ」兩人「そんな事は知らぬえワエ」良助「知らぬといやァかうして」ト引立てうとする。ト右の鳴物になり三人立廻つて、トゞ長九郎嘉四郎迯込む、良助跡を追ひかけ上手へ入る、爰へ關路、勘太立廻りながら出て來り、勘太を引つけ。關路「汝が支へたばつかりに、彼の玳瑁の盜賊を」勘太「そんな事を知るものか」ト振切つて迯ぐるを、引戻して立廻よろしく、此機に勘太をあてる、其まゝたち

闕路「何かの事を頼みました」女皆々「合點ぢやワイな」ト女形みな〳〵奥へ入る、闕路、敵役残る。闕路「たとへ證據がないにもせよ、モウ此上は此方から事を糺すは千太郎」丈四郎「たとへ何といはうとも、證據なければ水掛論」千太郎「ナニ俺がしるものか」ト此時ばた〳〵になり、淺野良助、中間作助を引連れ出て來る。良助「證據の手紙は燒失しても、まだも慥な證據はこゝに。サア何もかもきり〳〵ぬかして終へ」作助「たとへどの樣に責められても、知らない事は仕方がねえワエ」良助「イヽヤさうは拔けさせねえ、謀計の樣子は勘太より、汝も加擔の餘類であらう」ト締めあげる、作助千太郎を見て。作助「アヽこれ〳〵どうかしてくれろ、知らない顔をする事は無いぢやアねえか」良助「吐かさにやいつそ」ト一寸ぼき立廻る、此内千太郎迯げんとする、良助捕へる拍子に、千太郎以前懐へすりかへし玳瑁を落す。闕路「扨こそ玳瑁」ト取上げる。千太郎「南無三それを」トひつたくり、千太郎迯げて入る、良助ソレと跡逐うて入る、闕路丈四郎残る。作助「邪魔な女め。汝から先へ」ト作助縫ぐるみにて闕路へ撃つてかゝる、丈四郎こなし有つてこれを支へ。丈四郎「無禮な匹夫め」ト拔きかけるを闕路とめて。闕路「アイヤ返つて貴方のお刀が。モシ穢れませう」トこなし、鳴物よろしく道具まはる。

本舞臺三間の間、練塀艸の土堤、内より石の鳥居、笠木を見せ日覆より松の釣枝、大音寺前、大鷲の

の、其盗人は長九郎殿、よもや知らぬとは申されますまい」長九郎「サアそれは」關路「たつてとあれば此書面を以つて、一々糺しませうか」丈五郎「サア」關路「サア」皆々「サア〳〵」關路「か程に慥な證據があれば、伊豆屋のお手代長九郎、此返答が承りたい」長九郎「なる程御尤なる仰しやりやう、其玳瑁の代物は大事の品故、與三郎樣が家から持出して御座つたを、失うてはなるまいと、心をつけて守護する番頭の白鼠、滅多に人手に渡しませうか、則ちこれに」ト以前の袋棚より出す事。關路「ナニ玳瑁が。其品これへ」長九郎「ハツ。是を御覽じませ」ト袱紗を解く、中より煎餅出る。「ヤアこりや玳瑁がいつの間に」ト取出し見て恟り。丈四郎「こりや竹村の煎餅、どうしてそれが」長九郎「いつの間にやらオヽ〳〵。ハテ面妖な。コリヤ斯うしてはゐられぬワエ」ト長九郎思入あつて奥へ入る。嘉四郎「おれも斯うしては居られぬワエ」ト同じく眞似をして嘉四郎奥へ入る。關路「其玳瑁の詮議は追つて、マア差當る與三郎殿を科におとす根ざしといふは千太郎、よも言譯はあるまいがな」嘉四郎「これが證據になるものか」ト千太郎思入、丈四郎、關路が持ちし狀を取つて火鉢へくべる、かけ煙硝ぱつと立つ、女形みな〳〵見て。女形皆々「大事の手紙を火中して」關路「覺えがなければ其密書、火中致すいはれはあるまい。是からが猶詮議、女中は爰に構はずと奥の樣子を」お兼「お氣遣なされまするな、私共がとも〳〵に」

御座りませうがな」長九郎「いかに女中のお詞とは存じまするが、か樣な事は言ふことといはぬ事、それには何ぞ慥な證據が」關路「たしかな證據はこの手紙、それ」ト藝者お吉の前へはふる。四人「ヤその手紙は」トこの中お兼上書を見て。お米「かねて申談じ候ふ通り、廓にて度々遺恨御座候ふ與三郎、何卒恥づらかゝせ申し度く候ふ折柄、千太郎が差圖に任せ、鎌倉米問屋の息子稲四郎が悴なりと。お内儀さん、このあとはお前さん」お兼「悴なりと似せものを拵へ、與三郎が戻りがけ、喧嘩じかけに致し候ふ、水練致しかんその事ゆゑ、水死と見せかけ與三郎に難儀致させ候ふ間、遺恨を散じ候ふ手段」トお吉思入あつて。お吉「どれ〳〵その跡は私が。尙又伊豆屋が家に傳はり候ふ玳瑁、屋敷の御用と申立て取出し、與三郎に科をぬりつけ、跡々にて賣拂ひ候ふ事此儀われら承知いたし候ふ。長九郎殿へ、荒倉丈四郎」ト三人思入あつて順に讀下す、この手紙長九郎が落せし思入にて面目ないといふ科、千太郎丈四郎へ態を見ろといふこなし。お米「なんとマア恐ろしいたくみごと」お兼「そんならこの元といふは」お米「丈四郎さんもやつぱり心は」ト三人顔を見合はせ。お兼、お米「あんまり惘れた手紙ぢやワイなア」關路「サア此手紙の文體では、概略様子もわかりましたで御座りませう。是でも貴方、ともどもに與三郎殿を科人ぢや、下手人ぢやと仰しやるか」丈四郎「サアそれは」關路「まだ其上に玳瑁

取つたぢやないか」嘉四郎「コウ千太兄イ、互に知り合つた中だ、そんな阿漕な事をいはずと、大概にしておくが可いぢやァねえか」千太郎「べら棒め、あれつぱかりのめくされ金で、手前が不承するか知れねえが俺はならねえ、なぜと言つて見ろ、人ひとりの命だ、四の五のいふのは面倒だ、手前も其時のかゝり合、これから會所へ一緒に歩べ」ト千太郎、嘉四郎を引立てうとする。闘路「アイヤ兩人まつた」トとめる、千太郎立とまり。千太郎「ム、行くを止めるは、奥に居る與三郎にあはせる氣か」お米、お粂「ア、もし今お前を奥へやつては」千太郎「そんなら會所へ出かけるか」兩人「サアそれは」千太郎「但しは踏込み引ずり出さうか」丈四郎「なる程これは千太郎とやらが申すも尤、コリヤ寧そ表沙汰に仕り、千太郎とやらが身抜をして、其許宿の與三郎が罪を糺さずば掟が濟むまい、コリヤ身共が申さずとも、内分に致し置けば町役人迄が不調法、どうあつても此儘には置れまい」闘路「モシ丈四郎樣、是ばかりはさう一概にも申されますまい、其の元宿を洗ふ時は、與三郎殿ばかりでは御座りますまい、まだ外にも一件にかゝり合、今更空吹く風と知らぬ顏して御座る加黨人も、そこらあたりに御座りませう」丈四郎「ナニ闘路殿、加黨人とは聞にくい、慥にそれと見極めたら、此座において承らう」トきつとなる。闘路「お望みならば申しませうが、マア第一は此方樣、又お手代の長九郎殿、お前方も此事は定めて覺えが

になり千太郎こなしあつて。「わつちが乘せた客人は、鎌倉の米問屋稻四郎の息子さん、何か此地に逗留中、玉屋の家へ馴染が出來、度々通ふ其中に、毎でも歸りはわつちが船、折しも早い朝歸り、大棧橋から押出して、淵をまはらうとする時に、後から一挺押出す小舟、見りやア嘉四郎手前であつた、不器用な踏張やう、氣を注けろといつたのが、物の間違ひ事の始り、一つ二つ言あふ中、互に客の喧嘩となり、浪に搖られて寄る舟の、舷を引寄せ擲たうとするを、振拂ふはずみに、どんぶりおつこちたは運のつくばい、俺が客人、慌てゝ飛込み探しても、折しも早い上汐で、死骸はどつかへ玉なしだ、方法がぬえから舟へ上り、相手を見りやア與三郎さん、萬更知らねえ顏でもなし、どうのかうのと理窟もいへず、達つて斯うとの賴み故、この嘉四郎にも一杯呑ませ、其場は內密で終つたが、昨夜の人の風聞には、その鎌倉の親許から、息子の行方を尋ねる樣子、もしももくのわれる時にやア、相手は伊豆屋の若旦那、わつちも共に引合に、食ひこんぢアうまらぬ仕事、それだによつて手短に、お恐れながらとやらかすか、それとも俺に路銀をくれて、遠い所へ落してくんなさるか、二つ一つの挨拶が聞きてえのだ、何とわつちが言ふのも無理ぢやアあるめえ」 ト丈四郎こなしあつて。丈四郎「なる程こりやア尤だ、表沙汰になる時は、どうでも濟まぬ此一埒。長九郎「サア〳〵 それ故にこそ此間、息子殿から內濟金を

はあるまい、仔細を申せ、ドヽどうぢや」千太郎「知れた事、あの與三郎には凶狀のある身體だワ」清八「ヤ」ト吃驚思入。丈四郎「ナニあの與三郎に罪があるとは、そりや又どうして何科が」ト心遣のこなし。千太郎「オヽサ外でもねえ人殺しだ、表沙汰にする時は、一も二もねえ息子は下手人」皆々「ヤア〳〵」ト思入。千太郎「始めは俺も知れねえ積り、僅かな金の口塞ぎ、知らねえ顔で居て見たが、この二三日は世間の噂、モウ斯うなつちやァ仕方がねえ、與三郎をつれて出て、此方の科の身脱をするのだ、與三郎」ト立ちかゝり奥へ行かうとする、清八長九郎さうはならぬととめる事一寸あつて、この折奥より關路、湊屋女房お兼、藝者お米つきそひ出かかりゐて此中へ入り。關路「マア〳〵待つた」トとめる、千太郎見て。千太郎「ヤ見りやァ立派なお屋敷さん、何でお前は與三郎の肩を持つて、イヤサ何でとめ立しなさるのだ、モシありやァ科のある體だよ」お兼、お米「シテ與三郎さんを科人とは」千太郎「ハテ科人も科人、人殺しの凶狀もち、息子株とはいはせねえワ」關路「シテ其の仔細はどういふ事で、譯を聞いたる其上で、樣子に依つては兎も角も」千太郎「そんなら女中のこなさんが、併し並々ならねえお屋敷さん、咄せといふなら其譯を」ト此中清八へ關路呫く事、清八は奥へ入る。丈四郎「身共も唯今詮議の折ふし、其の次第を承らうか」千太郎「モシ其譯といふは斯うでごぜえます」ト前へ出る、誂への合方

合ぢや」長九郎「イヤ〳〵コリヤなか〳〵貴方がたのお耳へ入れまする事では御座りませぬ。これこれ千太郎殿とやら、其事は儕も此間うす〳〵聞いた噺、一方ならぬ一大事、儕が内々扱ひませう程に、マア〳〵穏便に頼みます」嘉四郎「殊には家もあるお人、爰へ來るにやア及ばねえ、家へ行つたが可いぢやアねえか」千太郎「べら棒め、そこに如在があるものか、家へ往つて聞いて見りやア、四五日も家へは歸らねえと言ふゆゑに、みえの場所でも仕方がねえ、此方の體へ火のつく仕事だ、早く與三郎に逢してくんねえ〳〵」長九郎「これはしたり、支配人の儕が扱かうといふではないか、それに待たれぬとはどういふ譯ぢや」千太郎「べら棒め、端金ぢやア濟ねえ事だ、それだに依つて直應對、たつて汝等がせぎるなら、千太郎樣が直接だ」ト立上る、皆々捨白にてわざと止める　皆々「これはしたり、氣の短い、靜にしろ〳〵」トとめる、この物音を聞いて手代淸八も出て來り、此體を見て中へ入る。淸八「マア〳〵靜にしなされ、今奥で聞けば、若旦那に會ひたいといふお人さうなが、マアそれも支配人の長九郎殿が呑込むとあれば、暫く任したが可いではないか」千太郎「エヽ喧しいワ、べら棒め、そこを退きやアがれ〳〵」ト淸八を突倒す、是にて丈四郎態と腹立ちし科にて。丈四郎「ヤイ〳〵そこな素町人め、最前より身共押默つてうかゞひ居れば、立はだかつて無禮な奴、殊に與三郎へ逢つて會たいと申すは、並々の事で

まだ伊豆屋の息子さんがゐますから」長九郎「それぢやァどうも仕方がねえ、歸りを氣を注けてあけて下せえ」ト態と立役にいふ、此時下手より千太郎出て來り、皆々へ向ひわざとしらを切り。千太郎「モシ憚りながらお聞き申しますが、お前さん方は伊豆屋の若旦那のおつれ樣かね」長九郎「これ〳〵待たつしやい〳〵、内の若旦那を尋ねて、可怪な風體の人ぢやが何處から來たのだえ」千太郎「アイわつちかえ。わつちやァ千太郎といつて堀の小船乘さ」長九郎「そのまた堀の船頭さんが、何の用があつて來さしつた」千太郎「其の用といふは伊豆屋の息子さん、與三郎さんに逢ひに來やした」嘉四郎「オヽ誰かと思やァ千兄ィ、何の用か知らねえが、いま若旦那は、ぐつすりやつて寐て御座らァ、今の事にやァいかねえワ」ト知らぬ振にいふ、仲居もこなしあつて。女中○「ほんにさうで御座んす、與三郎さんは滅相に醉うて御座んす故、とても逢うても埒はあくまい」女中△「急な事でなくば明日の事に」兩人「なさんせいなァ」千太郎「どうしてどうして、俺が命に拘はる事だ、明日所か一時がむづかしいワ、早く會はしてくれ〳〵」ト思入あつて、嘉四郎思出したるこなしあつて。嘉四郎「なる程、お主がさういふので氣がついた、此間の船の一件か」千太郎「知れた事よ、俺が遠い所へ遣られりやァ與三郎さんも身の上だ、番頭さん、そんなものぢやァごせえやせんか」丈四郎「ナニ與三郎が身の上とは、そりや如何致した譯

があるワエ。よし〳〵」ト件の折を一つ取出し袱紗へ包み、元の通りにして袋戸棚へ入れて此方へ來り、こなしあつて。「斯うしておけば大丈夫。そりやアさうと、此方へ捲上げた今の筥は、確に中は古渡の鼈甲、こいつも大金になる代物だ、この拍子運のいゝ所から、與三郎にぶつかかり、今日は是非ともいつかの事を、表向と嚇しかけりやアこいつも金、雙方共に金づくめ、こいつはちつと舊い奴だが惣身が金で冷やアしねえか」ト思入、此時奥にて人音する故、千太郎窃と下手へ忍ぶ、矢張り流行唄の合方にて、奥より丈四郎長九郎、前幕の船頭嘉四郎、仲居みな〳〵つき添ひ出て來り。嘉四郎「これは旦那方、いつもながら御全盛でござりまするな」丈四郎「オヽさういふは船頭の嘉四郎、扨は與三郎と同道して奥へ參つて居つたのぢやな」嘉四郎「左樣でござります、貴方がたが爰に御座る事は、先刻から存じて居りましたが、送つて爰へ來て居りますれば、據所なく今迄ついて守をして居りました。モシあれは番頭さんにお聞き申したら分りませうが、あのお邸の女中は、アリヤ與三郎さんの何でござりますね」長九郎「ハテあれは彼の野良くら殿の實の兄嫁さ、いくら女が口先で歸れといつてもどうして〳〵」丈四郎「あの通りの始末では、どうでも勘當は近きにありだテ、アハヽヽ。時に嘉四郎、そつちはこれから歸るのか、どうするのだ」嘉四郎「左樣サ、私はあなた方のお供をいたしたう存じますが、

げ居つたか、エヽ忌々しい。さりながら今お米奴が此箱へ氣の注いた樣子といひ、又奥へ來て居る與三郎が身寄の關路とやらが、最前云つた詞の端、コリヤ俺が爰にこの玳瑁を持つて居ては可危いもの、何處ぞしばらくそこらへ忍ばせ所は」トよろしく邊りへ科あつて、桐の箱へ入れし玳瑁を箱のまゝ袱紗に包みしを取出し。「オヽ幸ひ〳〵、こゝの袋戸棚へ暫時の間忍ばせて、よし〳〵」ト袋戸棚の中へ隱して此方へ來り思入あつて。「斯うしておけば誰も氣の注く氣遣なし。まづ一方はこれでよし、是から行つてあのお米、存分に怨をいうてやらん、さうださうだ。といふまゝに奥の間さして入りにける」ト淨瑠璃を語りながら、こなしあつて奥へ入る、始終はやり唄の合方、この以前より下手より千太郎出かゝり窺ひゐて、此時ぬつと前へ出てこなし。千太郎「べら棒め、此間から俺を頼んで、あいつらが謀計の種をさづかりながら、俺が爰にゐるとも知らず、味い仕事させて耐るものか。よし〳〵彼奴は此方へ濡手で粟とせしめてくれう」ト思入あつて、袋戸棚より以前長九郎が入れたる袱紗包の筥を出し見て。「こいつは少と嵩ばりものだ、懷へ入れては始末がわりい」トいろ〳〵工風する事。「可いワ斯うやらかしてお脊中へ御安置申せ」ト内懷から脊中へまはし入れる。「これから跡へ何ぞお定りの替玉を入れておきてえものだ」ト思入、そばに有合ふ以前の竹村の煎餅のさゝ折を見つけ。「此奴は可い吹替

しやんとした所が猶たまらぬ、幸ひ邊に人もなし」トあたりへ科あつて。「モウ〳〵」ト後抱に〆る。お米「アレもしそんな惡い事なさると、聲を立てますよ、アレ〳〵」長九郎「モウ斯うなつたら迯しはせぬぞ〳〵」ト締る、長九郎懐に箱を入れて居る故。お米「アイタヽヽヽヽ」ト痛き思入、長九郎吃驚して手を放す、お米飛退き。長九郎「エヽ何だ聲を立てよ。コレどうも僞ないのに痛いなどと、子供ぢやァあるまいし」お米「それでもお前、懐へ何か入れてお出だね。何だか角ばつた物を入れて居なさんす儘で、それで私へ惡戯をなさんす故、どんなに痛う御座んしたから」トいはれて長九郎心づき懐を見る、此時件の箱懐より出かけゐる。長九郎「ム、此箱か」お米「モシ一寸それを」ト立寄るを身構へ。長九郎「どつこい〳〵、手をつける事はならぬぞ、此中には奇々妙々といふ品があるが、それとも其方が儕がいふ事さへ聞くならば、此箱の裡はいざ知らず、まだどの樣な珍物でも見せる意、サア返答は何と〳〵」トよろしく迯げるお米を捉へんと追廻はす、トヾお米ふりきる。お米「エヽモ執い、知らぬワイなア」ト長九郎を突飛ばし唄になり奥へ入る、跡に起直りあたりへ科あつて。長九郎「アヽ痛い〳〵。コレお米、酷い目に逢はせ居つたな、誰あらう伊豆屋の番頭長九郎ともあらう者を、斯樣な目にあはせるとは、そりや聞えぬ胴慾ぢや、これお米ばう」トあたりを見まはし、居ぬ故に。「ヤいつの間にやら迯

て上げう程に、モウ少しどこぞで待つてお出なね」千太郎「どうか急に會ひてえものだ、どうか呼び申しておくんなせえな」お兼「オヽ誰かと思へば堀の千さん、今與三郎さんはちつと間のわるい所ぢやによつて、今に私が間を見合はせ、會はせてあげよう程に、あの向の小座敷でチツト待つて居なさんせ」千太郎「そりやァお前さん、會してせえおくんなさりやァ、待たなくつてどうするものか、殊にお前さんやお米さんのいふ事だもの、何處へでも行つて待つて居やせう」お米「そんなら向の三疊で待つてゐなさんせ」お兼「サア私が案内して上げう」ト立ちかゝる、千太郎兩人へ科あつて。千太郎「そんなら申しきつとお頼み申しますぜ」お兼「サア御座んせなァ」ト流行唄になり、お兼、千太郎をつれ下手へ入る、お米殘り思入あつて。お米「ほんにマァ此間から樣子を聞けば、日外や玉屋へ初會で御座んした鎌倉のお客さんと、大川で船と船との大喧嘩とやら、どうした物の間違か、與三郎さんにとんだ災難、又その事を種にして、あの人が强請りに來たので御座んせう、どうぞ今日は與三郎さんを、切拔けさして上げたいものぢやなァ」ト思入、この時後に長九郎窺ひゐて、後よりそつとお米に抱付く。長九郎「しめたぞしめたぞ」お米「アレ誰方でござんす、惡い事なされまするな」長九郎「誰方でもない、俺ぢや〳〵」トしなだれかゝる。お米「エヽモ執こい、よして下さんせいなァ」ト振切る。長九郎「どうも其ぴん

來たのだ、コウ手段つける間、そこらで一寸待つてゐさつし」勘太「さうしてレキは何處にゐるのだ」千太郎「向ふの花屋敷だといふ事だ。コレ」ト勘太に囁き。「ナ、よしか」勘太「よし〱合點だ」ト行きかけ思入あつて。「間違うてくれるなよ」千太郎「承知だといふ事よ」ト是を流行唄になり、勘太は橋懸へ入る、千太郎は門口へ來り、うそ〱内の樣子を窺ひゐる、此時奥より藝者お米。お米「アイ〱今すぐに行くワイな、一寸待つて下さんせ」ト捨白をいひながら出て來り、千太郎を見て。「オ、お前は此間御座んした千太郎さんか」トいひ捨上手へ行かうとするを。千太郎「オイ〱お米さん、何も俺だといつて、そんなに迯げなくても可いぢやアねえか」お米「イヽエ迯げはせぬけれど、今奥でお客が呼んでよござんすもの」ト又行きかけるを。千太郎「これさ何にも怖い理窟はねえ、俺だといつて元を糺しやア、おまへ方も相應におかけに預かる元山町の伊豆屋の息子、與三郎とおんなじやうに小間物問屋の息子さん、あんまり粹が身をくつて、柳橋からごろつきの、とう〱堀の小船乘、かういふ身空になつた迚、さう見くびつたものぢやアねえ。これサこの間の一件だ、奥に來て居る與三郎さんに、一寸逢はしておくんなせえ」お米「サア爰へ呼び申しても上げうけれど、此間からの流連で何かの埒も明くまい、それに又今しがた、お邸の女中のお客が、何か眞面目なお話ゆゑ、今に呼び申し

思入。丈四郎「勝手にめされさ」ト憤としたる思入。關路「そんなら皆さん」良助「奥の座敷へ御案内」女皆々「サアお出なされませ」ト唄になり藝者お米、お吉、女房お兼先へ、關路、良助、八清跟て奥へ入る、跡より女中○△も奥へ入る、丈四郎長九郎殘りこなしあつて。丈四郎「何の事だ馬鹿〳〵しい、折角味く飲みかけた所へ、あの女奴が參つたばつかり、大きに酒が滅入つて參つた」長九郎「殊に與三郎にかこつけて持出した玳瑁の事迄けどつた樣子、どうやら此方の目算が」丈四郎「エヽ其樣に氣を揉むな。まだよい思案はさま〴〵あるワ」長九郎「何かは奥の小座敷で」丈四郎「申し談する其間」ト長九郎女中へ指圖して。長九郎「ソレお下物を取りかへて」丈四郎「飲直しに致さう」長九郎「左樣ならば丈四郎樣」丈四郎「サア來やれ〳〵」ト流行唄になり、丈四郎先へ長九郎附添ひ奥へ入る、此唄をかりて向より宵の口の千太郎、船若者のこしらへ、跡より以前のむぐりの勘太、頬被をして附添ひ出て來り。勘太「コウ其方もよつぽど分らねえ者ぢやアねえか、此間の分口はあんまり酷いぜ、こつちやア命がけの仕事をして居らア、モウちつとどうかしてくれよ」千太郎「これ靜かにいへ、邊の人が聞くワ。あの時ヤアお互に命がけだ、俺も少許ばかり可い事はしたが、そこが惡錢身につかずだ、三日が中にちやんころなしだ、所で今日は與三郎の家へしかけて、又一資金と思つたが、やつぱり流連に居ると聞いたから、そこで此方へしかけて

くものだなア」ト皆々思入、良助科あつて。良助「斯うなるからは其譯いつてお聞かせなさるのも、此座の面晴れ關路樣」長九郎「シテ與三郎と此方にはどういふ譯の」丈、長「緣つゞき」關路「いかにもその仔細といふは、與三郎殿と私が夫左近殿は血筋の兄弟」丈四郎「ヤ」ト思入、合方。清八「かねて養子の御身分とは、噂に聞いて居りましたれど、委しい事は今がはじめて」關路「與三郎樣が伊豆屋の家の養子となつた其譯は、實親隼人樣が四十二の二ッ子、藁の上から親知らず」長九郎「そんなら伊豆屋の與三郎は此方が舅の隼人殿が」お兼「血筋のお子で御座りましたか」ト敵役顏見合せ。長、丈「おもひがけない、初めて聞いたは」良助「われらが主人隼人樣は、物堅い御性質、御內寶小笹樣、御夫婦共に養子にお遣りなされてより、其後は一度も御對面なされぬ故、實の血筋の二親のお顏は元より、兄弟も御存じあらぬ事ながら、不思議な事で此間關路樣と此良助」關路「お目にかゝりし與三郎殿、色々話の其內に、聞けば伊豆屋に義理ある弟あるとの事、此程遊所に入りびたり、身持惰弱も樣子のある事、何はともあれ與三郎殿に會うて、今宵の裡に一先家へ戾さぬ時は、如何に慈愛深き親御ぢやとて、親類中の手前もあり、勘當せねばならぬとて、以ての外の御立腹、それ故參つた今日の時宜、奧へ參つて面會なし、與三郎殿に意見せうとも、よゝ御批判はござりますまい」丈四郎「サそれは」關路「申分はござりますまいがな」ト

用ゆゑ、態々元山町へ參りし所、親御喜兵衞殿にも對面致し、段々の樣子も聞けば、夜どまり日どまり、身持不埒の與三郎殿、殊には伊豆屋の家に傳はりし玳瑁まで持出しあるとの事、いづれ御用に立つべき品、その儘には捨おかれず。シテ與三郎殿には」お鶴「アノ離座敷で、皆さんと御酒で御座りますといなア」お米「與三郎さんへ御用なら」お喜「私どもが御案內」女形皆々「申しませうワイなア」良助「左樣なら關路樣、御遠慮なく奧へお越しなされて御意見なされ、とにかくお家へお歸し申すが御當人のお爲、伊豆屋のお爲と申すもの」清八「如何にも左樣仰せられて下さりまするが御得意の有難さ、何分よろしく貴方樣」長九郎「これはしたり、清八なんの汝が小差出た、あなた樣へ失禮千萬、すつこんで居りませう。伊豆屋の爲には白鼠ともいはれる此長九郎が、これ迄度々意見をいうても馬の耳へ念佛、すこしも分らぬ放蕩者の若旦那、モウ意見も諫言もおきにしたが可いワイのウ」丈四郎「如何樣、箸にも棒にもかゝらぬのらくら、その放埒者を捉へてお爲ごかしの世話やきぶり、殊には女性の御身の上、世間の聞も何とやら、他人の此方が要らざる事と、いふまいものでも御座らぬぞや」トこなしあつていふ。關路「なる程、他人の事なら捨おけども、夫が爲には肉緣ある與三郎殿、舅御樣の內意も受けし故、それ故是非に與三郎殿へ」清八「ナニ與三郎樣を」女形皆々「他人にあらぬと仰しやるは」長九郎「珍らしい事を聞

年越にも相ならうとも、そこ元も吾等とは同家中、香取潤平殿の娘御にて、鎌倉の奥勤、お暇賜はり親元へ戻られた其時は、文金島田の御殿風、その美しさ〳〵、一寸見るから其姿に身共もぞつこん惚れた故、何卒宿の妻に申請けたいと、人を以つて度々申入れたれど、お手前の親潤平には不得心で、權もほろゝな其挨拶、千葉家の某へ養女にやるとの斷りなりしが、今聞けば夫の名代に參つたとやら。折目正しい姿態は、扨は千葉家へ緣邊を」ト思入、關路こなし、良助思入あつて差出で。良助「ハテ知れた事、今では千葉家の重役たる穗積隼人樣の若旦那、左近樣の御内室、御名も改め關路樣」關路「それも父上母樣の、お許ありて女夫の固め、今は主ある此身の上」丈四郎「その主のある身を以つて、女の用なき此色里、何故これへは御座つたぞ」關路「それも今いふ御用の爲に」丈四郎「なんと」長九郎「御注文なら元山町の店へお出もなさるべきに」清八「爰へお出なされましたは」丈四郎「その御心底が承りたいな」ト思入。關路「ハテ其大切な御用をば、申附けたる伊豆屋の惣領與三郎殿、此程聞けば其以前に打つて變りし放埓にて、外を内なる身持の取沙汰、左樣な所業である時は、及ばずながら意見をも加へん爲に參りました」丈四郎「ハテせいしやうかはきな女の才に」長九郎「與三郎殿は、大切な御用の事は扨措いて、此頃の酒びたし」清八「御用向なら私共へ御注文さへ下されば、聊か間違は御座りませぬ」關路「其の御

ツトよし〳〵、御苦勞〳〵」ト件の菓子折を、長九郎受取りながら關路を見て居る、この中丈四郎、關路良助と顔見合はせ。丈四郎「オヽ珍らしや此方は慥に」トいふに關路も振返り見て。關路「オヽほんに貴方は丈四郎樣」丈四郎「まづ〳〵是へ」トこなし、關路上座に直る。清八「今日は定めて此吉原を御見物、それ故爰へ」兩人「お立寄でござりまするか」關路「いづれもの推量通り、音にも高き東の名所、出府致した折柄なれば、態々是へ見物がてら」丈四郎「スリヤそこ元にも此所へ、女子の御身で何用あつて」關路「如何にも夫の名代、お主の御用で」丈四郎「ナニ夫の名代お主の御用に。ハテナア」ト思入、良助こなしあつて。良助「アヽイヤ其儀は私がかい摘んで話を致しませう、この度關路樣が御當地へ態々御出府なされた其譯は、今度結城家の姫君樣が、我等が主人千葉家の若殿左門之助常房樣へ御緣組、定めてそれ故あなた樣にも結城家の御用人、色々御支度もござりませうが、又われ等が主人も同じ事、嫁君をお待受の其爲に、お名道具からお召の品々、イヤモウ莫大なる御支度さ」關路「お輿入なる姫君へ進ぜられる櫛笄の御用向は、元山町の伊豆屋方へ仰付けられ、尤も外の品は兎も角も、女子の髪のかざりの品は、女子の鑑識が格別と、御主人のお詞で、それ故勤むる今度の御用につきまして、參りまして御座りまする」丈四郎「なる程それにてお出の樣子がさらりと知れた。アヽ數へて見ればモウ彼是三

お尋ねなさんした故、委しうお咄し申して上げました、先刻までは私どもの二階で御酒をあがつてお出なされましたが、先刻太夫衆が誘出しに來た故に、此花屋敷へ」若い衆「それ故是へ御案内申したのでござりまする」良助「モシ奥樣へ、ツイ前方の栞が花屋敷でござりまする」關路「何はともあれ、あれなる酒席へ」皆々「サアお出なされませ」ト矢張り右の鳴物にて皆々舞臺へ來る、舞臺の女形は此中、女中○△も出て、藝者お米、下女お瀧、皆々捨ぜりふにて酒宴になり、此時湊屋女房お兼を見て科あつて。お米「オヤそこへお出なさんしたは湊屋のおかみさん」女皆々「ようお出なされました」お兼「オヤ皆さん、お揃でよかつたねえ」お吉「モシお客さまで御座りますかえ」お兼「アイ與三郎さんを尋ねてお出なされたお客樣。かのお方は此方かえ」女中「ハイ奥の隔座敷で御座りまする」女中○「アノ宮戸さんや秀さんが先棒で」お吉「いつもの通りの大酒盛」お兼「そりやマアさぞ賑かな事でござんせうなア」トお兼門口へ向ひ。「モシちやうど奥へかのお方が、サア〳〵貴方、これへお入りなされませ。モシお客樣だよ」ト是にて舞臺の女形、女中○△出迎ひ。女中「サアこれへお越しなされませ」ト捨白にてわや〳〵いふ、是にて關路、良助内へ入る、若い衆の供は一寸良助へこなしあつて橋懸へ入る、茶屋の男は提げたる折をこちへ持ち來て。供「ヘイお約束の品でござります」ト長九郎に渡し科あつて下手へ入る。長九郎「オ

敷で一つ戴きませうワイなア」丈四郎「そんなら其方共も此所に居つて取持致すか」女皆々「ハイお取持せいで何と致しませうぞいなア」丈四郎「オヽよし〳〵、殊に長九郎清八が、事をわけての挨拶ゆゑ、料簡致して遣はすワ」長九郎「そりや御料簡下されますとか、エヽ有難う存じまする」丈四郎「それお銚子のお代り」女中「アイ〳〵畏りました」ト両人立つて銚子を持ち。「お銚子だよ」トいひながら奥へ入る、藝者お米は外の銚子にて丈四郎に酌をする事、皆々よろしく捨白、是を流行唄になり、向より左近妻關路、丸髷裾模様、派手なる方の屋敷風、跡よりお兼茶屋の女房の拵へにて附添ひ、この次へ以前の淺野良助、この跡より茶屋の若い衆、竹村の巻煎餅を入れたる振出の秤を三つばかり、くご縄にて結へしを提げ、この次へ手筥の小風呂敷を持ち供一人附添ひ出て來り、花道にて向を見込み科あつて。關路「何とマア花の吾妻に聞及ぶ、わけ吉原の廓景色、四季のへだても押並べて、きそひくるわの全盛は、ほんに女子の私等さへも、おのづと心うかさるゝ、テモよい眺望ではないかいなウ」良助「如何様、貴女様の仰しやる通り、此マア繁華の廓の景色、一度は御見物遊ばすも、咄の種で御座りまする、殊に又彼のお方様も、一寸噂に承はれば、この四五日は此廓へ來て御座るとの事、それ故昨日お勧め申して態々爰へ御同道」茶屋女房お兼「ほんにあの伊豆屋の若旦那、與三郎さんの事を、今もあのお方が

せう」ト立ちかけるを手代清八とめて。清八「あゝモシ〳〵暫くお待ちなされませ、私が斯様申すはいかゞなれど、長九郎殿もマア下に居て聞いて下され。今日爰へ斯うして丈四郎様のお取持で、打つれ爰へ来るといふも、實はと申せば主人が大事、此度の御用首尾よく勤めうばかりでは御座りませぬか。また今丈四郎様が御立腹なされて、お歸りなさるといふ事、相人はやつぱり主人の與三郎様」ト女形に向ひ。「なりやお前方も與三郎様を大事と思ふならば、此場に御座つて丈四郎様のお取持してくれたが可いでは御座りませぬか」お米「なる程なア、さう云うて見れば そんな者で御座んすなア」清八「サアそれぢやに依つて皆の衆も、爰でお取持して下され」ト長九郎に向ひ。「マア長九郎殿、そんなものでは御座りませぬか」ト長九郎不承不承に煙草を喫みゐて。長九郎「なる程、コリヤ清八がいふ所が尤もぢやワエ」清八「サア尤か道理かは知らぬけれど、お前迄が一緒になつて腹を立てゝは、チト都合が悪う御座りませうぜ」長九郎「如何さま是は出違ぢや。イヤナニ丈四郎様、唯今清八が申す事、お聞の通りの始末合、何卒この者共もこれに居りまして、お取持致しまする間、どうぞ御機嫌直しに今一獻、召上つて下さりませ。これ〳〵お米さん、お吉さん、お前方も賑かにお取持〳〵」お米、お吉「アイ〳〵合點でござんす」お米「サア〳〵これからは何なりと、お座敷の浮立つやう」女中兩人「私共もお座

藝者の拵へ、茶屋の女中二人にて取持ちゐる見得、酒肴をおき列べ、太鼓の入りたる騒唄にて幕明く。

藝者お吉「モウ〳〵私共は御酒はいけませぬワイな」ト盃を下におく。丈四郎「これ〳〵お米もお吉も其樣にせずともよいではないか、たとへ此花屋敷へ與三郎につれられて來たにせよ、この丈四郎も萬更知らぬ者でもあるまい」長九郎「コリヤなる程、貴方樣が仰しやるが御尤でござりまする、殊に與三郎樣の爲にも、丈四郎樣は大事のお得意屋敷の御用人樣なりや、これ迄もおろそかにはなりませぬて」清八「アヽモシ長九郎殿、さうお前の樣に言はつしやると、內輪から事が崩れまする。サなぜというて御覽じませ、其大切な御用人樣故、お前を始め私も與三郎樣の名代、かうしてお執持に參つて居るでは御座りませぬか」お米「ほんにさうで御座んす、かうしておつき申すお客さんに、少しも分隔はござんせぬけれど、奥へ來て御座んす與三郎さんは、今日で恰度五日の流連」お吉「酒もあの樣に上つては毒ぢやに依つて、私どもがお傍に居てかけ引はするなれど、太夫衆が寄つてかゝつて、與三郎さんへ酒を侑めるそれ故に」女中〇「ほんにモウ毎度ながらお前さん方の氣あつかひは」女中△「私等がよう存じて居りまする」丈四郎「エヽつべこべつべこべと喧しい、左右あの與三郎には女がちやほや致す、あゝいふ奴がある故に、此方は何時でもお間、サア是からは仲の町へ參つて、湊屋で飲直しと致さう」長九郎「それも宜しう御座りま

らぬか」良助「オヽ左いうはお飛脚早助殿、待つて居た」ト兩人透を窺ひ擊つて蒐る、良助すかさず立廻つて。飛脚「さうして此場の爭論は」良助「爰は些細な私事」ト又立廻つて。「お國へ急ぐは御狀」ト懷中より、御兩親樣　關路と記したる書狀を出し。「隼人樣御夫婦へ」ト飛脚へ渡す、中間伴助心得。中間「それを此方へ」ト飛脚の方へ取りに行く、飛脚手早く突廻し狀を持かへ。飛脚「そんなら是を穗積樣へ」良助「此方は今の野郎が行方」飛脚「そんなら是にて良助殿」ト何をと雙方とも又蒐るを立廻つて。良助「ちつとも早く」飛脚「心得申した」ト中間を振切る、中間はたぢ〳〵として良助の方へ來る、良助中間を引付け船頭を振上げる、飛脚は逸散に向へ走り入る、一聲浪の音にてよろしく　幕

ト浪の音にてつなぎ、直に引返へす。

本舞臺三間の間、常足二重、大和葺庇附の家體、蹴込竹ざんの板羽目、上手一間折廻りの障子家體、正面茶壁、上手へよせて床の間、眞中に三尺更紗暖簾の茶立口、軒先へ四季の花色ざしの模樣つきし提灯を引かけ、いつもの所門口、是に花屋敷と記したる掛行燈、下手建仁寺垣にて見切舞臺前、流れの土手板、杜若の盛り、其外芝山に躑躅の盛り、蒲菖の下草などあしらひ、都べて廓中花屋敷のかかり、爰に荒倉丈四郎以前の侍、長九郎伊豆屋手代、淸八同じく手代にて居並び、其外お米お吉、

藩中丈四郎奴と心を合はせ、伊豆屋の息子與三郎殿へ批難をつける其目算、一から十まで聞いてゐた」勘太「そんなら何かの樣子をば」良助「オ、サ、淺い謀計の品玉の、種になつたる騙者の野郎め、迯ぐるといつて迯がすものか」ト勘太の胸倉をとる、勘太振拂ひ。勘太「エ、やかましいワ箆棒め、たとへ何といはうとも、俺が方ぢやア知らねえ事、よし又知つた事にしろ、見りやア、田舍の三ぴん野郎、何で伊豆屋の忰の肩を」良助「オ、持たねばならぬお主の緣筋」勘太「ヤさう聞いちやアたまらねえ」ト迯げうとするを良助一寸引戻し、立廻つてきつとなり。良助「ヤア死んだと見せて水底くゞり、外へ上つてのめ〳〵と、鵜の眞似ひろぐ烏より、まだいけ太い晝鳶め、汝引縛つて役所へ牽く、覺悟なせ」勘太「うぬさう吐かしやア此方も腕づく」ト拂ひのけるを。良助「何を小癪な」ト浪の音をあしらひ、兩人よろしく立廻り、爰へ以前の中間伴助、船頭の松出て來り、兩人勘太の體を見て。兩人「そこに居るのは勘太ぢやアねえか」勘太「オ、さう云ふのは先刻の二人、加勢してくれ」兩人「合點だ」ト在合ふ縫ぐるみを持つて兩人良助に擊つて蒐る、誂への鳴物になり、よろしく絡んで立廻り、よき程にこの中を勘太は摺拔け、橋懸へ迯げて入る、良助は伴助、船頭に支へられ、宜しく立廻りきつとなる、この折上手よりばた〳〵に早助一本差し飛脚の形にて走り出て來り、此體を見て。飛脚「それに御座るは良助殿ではござ

は何處に居る積だ」勘太「さうさ、俺も旦那のお供をして、一ぺいやりに行かうと思ふが、天窓が此形ぢやアいけねえ、ちよつくら束の大川橋で待合さう」嘉四郎「そんならちよつくら俺は行つて來よう。モシ旦那、長九郎さん、其中お目にかゝりませう」ト行きかける。長九郎「オイ／＼勘太が事を」勘太「頼んだぜ」嘉四郎「合點でごぜえます」長九郎「サアもし旦那」丈四郎「どうだうおしやれ」皆々「サアお出なされませ」トやはり浪の音、流行唄になり、嘉四郎は向へ、丈四郎先に長九郎、作助、船頭つきそひ上手へ入る、勘太殘り跡見送り科あつて。勘太「アノ嘉四郎には言つてやつたからは、何とか今に沙汰があるで有らう、併しなんぼ俺が泳を知つて居るといつて、こゝまで水底を潛つて來るのは、なか／＼一通りでは出來ねえ仕事、これといふのも金が欲しいばつかりだ、それに彼の丈四郎さんからたつた三兩、あの千太郎め、俺に半分わけ口を遣せばいゝが、彼奴の事だから覺束ねえ。アヽ、何だか寒くなつた、ドレ天窓をたばねの其處等で一杯やつ付けうか」ト行きかける、此以前長九郎、丈四郎などの入る頃より、駕籠の中より淺野良助窺ひ居る事、この時駕籠の裡より聲かけ。良助「ヤイ野郎め、待ちやアがれ」勘太「ナニ待てとは俺が事か」ト立どまる、駕籠の裡より淺野良助旅形大小、若黨の拵へにて出て。良助「如何にも待てといつたはお主が事」ト立塞がり。「今これなる駕籠の裡で樣子は殘らず聞いて居た、其本人は結城家の

くやつたる事なれば、別段拙者が其方へ」ト紙入より金子を取出し、紙に拈つて勘太へ渡し、同くして嘉四郎へも遣り。「些少なれども其方へも」嘉四、勘太「こりやア御褒美有難う存じます」丈四郎「これ〳〵勘太とやら、其方へ譯けて申すは。まづ今日の事は首尾よく遣つてくれたが、猶又後日に至つて、與三郎へ肩持つ奴の目にかゝらば是迄に致して、それ例にも申す百日の說法。何とやらではないか、ぢやに依つて暫く何處か遠方へ、巣を變へてはおくりやるまいか」トいふ、勘太呑込みこなしあつて、懐中にて金の數を見る事あつて。勘太「そりやアさ、お前さんがお賴なら、遠くへでも何處へでも行きはしませうが。こればかりぢやア少許と」ト天窓をかきながら思入。長九郎「イヤ〳〵それも旦那が御承知、其餘の所は萬事千太郎へかけやつて置いたれば、彼方へ掛合つて取つたが可いぢやアねえか」勘太「そりやア何方でも咄合さへ分りやア可いので御座ります」長九郎「そりや直樣話しはわかるワ。時にモシ丈四郎樣、これでみんなの安否が知れて、御同然に安心したと申すもの」丈四郎「手前も重荷を下した心地、何はしかれ其處等で一獻祝にやらうか」長九郎「それも宜しう御座りませう。コレお前方も一ぱいやらぬか」嘉四郎「そりやアモ有難うはごせえますが、わつちも千太郎の樣子が氣がかりだ、一寸行つて外ながら聞いて來ませうよ」勘太「違えねえ、樣子が分つたら俺にもちよつくら知らしてくれ」嘉四郎「さうしてお前

の船が對手だと、向ふの船へ乗移り、兼て言ひあはせて措いた通りやりかけたら、遉に與三郎も大盡子だ、穏便に濟せてくれろと、あの千太郎へ頼み故、是から跡は千太郎が、お頼み通り味く遣るに違はござりませぬ」丈四郎「味い〳〵、さうして置くのも、われら度々與三郎に、こつちの趣向を出しぬかれたる、少しは腹癒と申すもの」長九郎「私とても其通り、とかく與三郎には何かの尻尾を見つかりまする故、まづ右様に致しておけば、少しの安堵。所で先日貴方様へお目にかけると申して、宿元より取寄せおいたる此玳瑁の」ト懐中より箱入の玳瑁、甲のまゝなるを出し見せ。「其儘宿へ持つて戻らぬのは、與三郎が毎日日日の曲廓通ひ、お前様にお目にかけるといつて、持出して質入したといひ觸し、いよ〳〵彼奴が勘當とでもなる時は、こつそり捲上げ賣拂へば、一資本になります代物」丈四郎「これ〳〵長九郎、最前より押默つて其方が話を聞けば、手前が名前を申立て、其方一人よい事を致し居るな」長九郎「イヤこれは恐入りまして御座りまする」丈四郎「それも斯様致して日日の饗應、入魂に致す其方なれば、定めて心入もある事であらうな」長九郎「これは貴方のお詞とも存じませぬ、伊豆屋の手代長九郎、そこに如在があつてよいもので御座りませうか、アハヽヽヽヽ」丈四郎「時に皆の者、段々の骨折、千萬忝ない、尤も此一條は千太郎へ任せおきたる事なれば、彼の方より骨折は致すであらうが、まづ首尾よ

に取扱ふものだから、流石の與三郎も聞いては居られず、先方でも藝者を殘らず呼べとか何とか大散財さ」丈四郎「其樣子は夜前湊屋にて概略拙者も承はつた」長九郎「所へ家から、與三郎があんまり歸らぬものだから、出入方の職人金五郎が呼びに來て、あいつが口車で、とう〳〵與三郎が今朝は家へ戻るといふ事」嘉四郎「所で昨夜狂言の筋が賣込んであるものだから、こつちが先へ驅拔けて、山谷堀から歸り船、雙方見りやア見知だし、昨夜見かけた顔だから、互に乙な鹽梅で、とう〳〵漕出す川の中」勘太「わつちが乘つた其船は、此方かきの千太郎、又與三郎が乘つた船頭は」嘉四郎「側艪に入つた此嘉四郎、あはせておいた手筈から、大棧橋を突出して、眞乳の下の淵の端を押切る拍子船と船、兩方急ぐ樣に見せ、初めの相手はわつちと千太、船頭同士のいひがかり」勘太「そこへわつちがなまぶけな、喧嘩かはうと出たものだから、向の船の與三郎も、商人ながらもそこが江戸つ子、二口三口いひ合ふ中に近づく船、此方の方から立かゝるを與三郎が、持つた煙管で拂退ける所を、わつちがぶたれたと見せて、川の中へ轉がり込んだと思ひなせえ。コウ嘉四郎、これから先は俺はモウ死んだ積りだ、跡はお主が話して下せえ」

嘉四郎「サアそこで拔からねえ彼の千太郎だ、色々と此人を尋ねる積で、棹を入れたり、自身と潜つて尋ねたり、狂言たつぷりした上で、こいつは所詮しかたがねえ、斯うなるからは與三郎

が。かやう致さう、それなる包に拙者が著更の浴衣があつた、マア〳〵似合はしからずと、それなと著たがよい。ソレ出して遣りやれ」ト差圖する。中間「ハイ〳〵畏りました」ト持つて來りし包より誂の浴衣を出し勘太に著せる、船頭も立寄り手拭にて體を拭いてやりなどする事、手早くあつて。勘太「コウ松や、この繻袢をそこらへ突かけておいてくれ」船頭「オイ〳〵合點だ」ト濡れたる繻袢を邊のよき所へ干すこなし、皆々捨ぜりふ、ト是を矢張り浪の音、ばたばたになり向より嘉四郎、船頭の拵へ、走り出て來る、皆々の居るを見て直に舞臺へ驅來り。嘉四郎「オヽ、皆さん爰にでござえましたか」長九郎「オヽさういふのは船頭の嘉四郎」皆々「お主の來るのを待つて居た〳〵」勘太「嘉四郎兄イ、俺も今やつと爰へ泳ぎ著いた所だ、手前から旦那へ段取をお話申してくれ」嘉四郎「そりやアサ俺もお話申すが、手前も知つて居る通りお話申すが可いぢやアねえか」長九郎「首尾いたしたか、何とだ」皆々「様子が聞きてえ〳〵」ト是にて勘太、嘉四郎床几にかけ。勘太「モシまんまと首尾よくやつてのけたといふ其段取、マア斯ういふ譯だ、聞いておくんなせえ」ト流行唄の合方、かすめて浪の音になり。「お前さんも御存じの通り、わつちが昨夜、あの通りに身形を拵へて、鎌倉の八幡町米問屋の稻四郎の息だといつて、玉屋の家へ押上り、あの與三郎が買つて居る朋輩の女郎を買つて、何か側から大勢で大々盡のやう

が」ト長九郎、丈四郎へ科あつて。「モシ丈四郎さん、長九郎さん、こりやァ先の本讀よりはなか〳〵苦しい仕事だ、モウすこし増を貰はにやァならねえ」ト襦袢を脱ぎ水を絞り、耳より水を出したりなど宜しく科。丈四郎「そりやモ首尾よくさへ遣つてくれゝば、どうでもいたす」皆々「どうだ〳〵様子が聞きてえ〳〵」勘太「そりやァさ、一部始終の咄も爲やうが、凡そ十町餘りも泳いで來たのだ、殊に往來中だ、裸ぢやァ話も出來ねえ、何ぞ引張る物はあるめえか」長九郎「それだといつて此方も途中。さうしてゆふべ迄著てゐた著物はどうしたのだ」勘太「これさ、なんぼ俺が泳が達者でも、あの著物を著てゐちやァ、働が出來ねえワ、さうしてまご〳〵してゐる中に、人に引上げられて見ねえ、何かの事はみんなばれて仕舞ふだらう、又あの儘で泳ぎあふされず、水を食つてぶく〳〵といきやァ、お前方や千太郎に頼まれて、命ひとつ棒にふらにやァならねえ、そこで川へころげ込むと、水の底を泳ぎながら、皆脱いで襦袢ひとつになつて泳ぎつけたのさ」丈四郎「さうしてあの著類は如何致した」勘太「知れた事、流して仕舞つたのさね」船頭「ナニ流して仕舞つた、コウ伴助さん聞いたか、あの著物を流して終つたとよ」中間「そいつは惜しい事をしたな、川へ流したとあつては、此奴ばかりは利上もなるまい、モシ旦那、どうかしてお遣なされずばなりますまい」丈四郎「と申して此期に及んで致方もない

敵と申すもの」長九郎「サア私もアノ與三郎めを、家をほふり出して終へば、都合のよい事がござります故、そこでお前樣といひ合せ」丈四郎「右樣な事には素早い惡徒、千太郎へ相談致せし所、斯う／＼致せと彼が軍略」長九郎「委細は私うけたまはり、それ／＼へ申合して御座りますれば、定めて首尾よくやつたで御座りませう」船頭「そりやアモシお氣遣なされますな、わつちらが仲間の千太郎だ、遣つたものぢやアごぜえやせぬ」中間「なる程、彼奴は惡い事にかけては拔目のない奴」長九郎「しかしモウ彼是安否が分りさうなものだが」長、丈「早く樣子が聞きたいものだ」ト思入、浪の音になり、はげしく浪の花たつ、みな／＼是を見込み。船頭、中間「なんだ／＼、川の中へ大分浪が立つが何だらう」丈四郎「されば長九郎あれを見やれ、確に人が泳いで來る樣だ、一件ではあるまいか」長九郎「左樣で御座ります、どうか一件らしうござります」トこの樣な事、捨白にて川の中を見込み居る、浪の音はげしく浪煙立つて、地飛白の間へむぐりの勘太、襦袢一ツ髮振亂し、泳ぎ上る樣樣、皆々見て。「オヽ慥に勘太だ」皆々「首尾は可いか、どうだ／＼」ト皆々立上る、勘太やう／＼泳ぎ上りし科あつて。勘太「アヽ苦しい／＼、恐しい目にあつた」丈四郎「オヽさう申すはむぐりの勘太」皆々「御苦勞／＼、よく爰まで泳いで來たなア」ト皆々立より捨白にてこなし。勘太「皆樣が爰で待合せてお出なさる約束だから、爰迄泳いで來ました

拙者が囘護のまはし樣と申すもの」長九郎「イヤモシ實以てその御用を勤めまする噂が、世間へ風聞致した故か、其お姬樣の御緣付の先は。ア、何とか申しましたな」ト考へる科。丈四郎「ハテ其先方は同國の領主、千葉殿の御嫡子だワ」長九郎「左樣〳〵、其の千葉家からも御用が出て、此間色々と御注文がござりました、それといふも貴方樣のお邸より御用を承はるが御緣つなぎ、さすれば隨分あなた樣を、御意にかなふ樣おもてなし申せと主人の吩咐、それ故昨日も堀切の菖蒲から、直に吉原へお供を致しこの仕合」丈四郎「何日とは氣を變へて湊屋へ參り、廓中の樣子窺はせた所、其方が主人の悴ののらくら者の與三郎、やつぱり玉屋の二階に流連致して居るとの事、町人とは申しながら、扨々伊豆屋は手堅い身代、羨しい事ぢやてな」中間「併しなんぼ惣領息子でも、あんなに遣つてよく親御が默つてござるな」船頭「そりやァさ、今元山町でも日出の身上だ、一本や二本の金子に糸目はねえワナ」長九郎「それといふのも彼の與三郎は乳呑兒の時から私の店へ養子の身分、あの與三郎を貰ひますると、その後へ出來ましたのが弟の與五郎、實の子は出來て居ても、主人はやつぱり與三郎殿を跡とりと、わけ隔なく育てましたを、增長して箸にも棒にもかゝらぬ放蕩」丈四郎「イヤ身共も折々彼の與三郎とは一座致したが、彼奴と參る時は、どうも與三郎にばかり女が惚れて、此方はとんとお間にされる、なりや彼は拙者が戀の

ア何れも一緒に來やれ〳〵」ト矢張り以前の合方、浪の音にて本舞臺へ來り、茶屋の床几に腰をかける。茶屋「これはお早うございます、おかけなされませ」トいひながら茶を汲み持出。「あなた方も町のお歸りでございますな、今朝は川霧が深くかゝりました爲か、いつもお船のお方樣が、大分陸をお歸りでございます」ト皆々へ茶を出す。長九郎「ハヽア左樣かね、それではまだ時刻が餘程早いワエ」丈四郎「それでは彼の一件の者共が、安否のしれるも今暫く間があらう」長九郎「左樣でございます、暫時こゝで待合せて居つたら知れるで御座りませう」茶屋「それでは貴公方には、お待合せなさるお方がござりまするか」長九郎「アイサ、今道づれの人が後から來る積りさ」茶屋「左樣ならあなた方が爰にお出なさる中、一寸私は水を一杯汲んで參ります、どうぞ憚りながら店をお賴み申します」長九郎「アイ〳〵緩くり往つて來なせえ」ト茶屋爺は手桶を提げ下手へ入る、矢張かすめて浪の音、はやり唄の合方にて、丈四郎こなしあつて。丈四郎「時に長九郎、お主と拙者かやうに致して、日頃別懇に致すも不思議な奇緣と申すものぢやてな」長九郎「イヤ左樣で御座りまする、私は高が元山町にて鼈甲渡世の伊豆屋の手代、この通りいづれへでもお供致して參りまするは、全く貴方樣がお上の御用を私店へお引つけ下さつた故の事」丈四郎「何さま、此度主人結城の姫君、千葉家への御緣組、その御婚禮の御用に就いて、莫大な御用向も、

ト駕籠の方へ來て見て。「なる程咄の通り、大分疲れて寐てござる、コリヤお目の覺めた時にしやうワエ」トこなし、是を流行唄になり、茶屋は釜の下をさしくべるこなし、此唄にて向より荒倉丈四郎、著流し大小雪踏がけ、小道具屋長九郎手代の拵へ、これも著流し、伴助中間の形、松吉小船の船頭の形にてつき添ひ、捨白にて出て來り花道にて。長九郎「時に丈四郎樣、昨夜は別嬪のお世界、大分おもてなされた御樣子で御座りましたな」丈四郎「イヤサ手前などが持てる事は何日の事故、さしたる樣にも存ぜぬが、ツイ〳〵酒を呑過し、名妓と枕ならべながらも酒と討死、これには拙者も後悔致すて」船頭「それといふのもあんまり旦那が、お座敷の樣子が可い故、藝者衆まではずみが來て」中間「夜の更けるのも打忘れ、あんまり御酒がはやつた故」兩人「それ故旦那はツイとろんと」長九郎「寐るかと思ふと直に夜明さ」丈四郎「拙者抔は夜の明けたのも存ぜずに、よい心持に寐て居つたを長九郎が參つて無理矢理に引起し、これ迄つれ出したが、是は一體どういふ趣向だな」長九郎「なる程、其事は兼てお前樣と申合せた彼の一條、同腹の者へも申つけて、件の事は今朝やらかしました」丈四郎「ハヽアそんなら兼ての一條、今朝計ひめされたか、それは重疊、扨はその一件ゆゑ仲の町も素通り、山谷堀へも立寄らず、何は格別、店を出しての彼の茶屋で」長九郎「如何にも一服致し、何かの手つがひお咄いたすで御座りませう」丈四郎「サ

「アハヽヽヽ」ト駕籠の提灯を見て。「これさ駕籠屋さん、夜の明けたのに蠟燭が無駄だ、燈を消しちやアどうだね」駕甲「ちげえねえ、こいつは大笑だ、棒組、ちよつくり消して下つし」駕乙「オイオイ、あんまり急いだものだから、夜の明けたのも夢中で居た」ト明りを消し。「時に廓中の旦那は下総の方の邸の衆で、いつも馴染の旦那だが、ゆふべから通しの道中故、疲れて寐てござるが、駕籠賃は貰つたし、起し申すも氣の毒だ、何と爺さん、少しのうち爰へ置き申しておくんなせえ、なア棒組、この中ちよつと遣つて來ようか」ト飯を喰ひ思入。駕甲「ちげえねえ、腹が減つちやア仕事は出來ねえ、この中に遣つて來ようか、したが今に後のお連も爰へござる筈だ」ト此中仕出しも捨白にて。仕出△「斯う俺們達も何處かでほぞを附けずばなるめえ」仕出○「さればこゝの横町の秋葉亭と出かけやせうかね」仕出×「それよりぶら／＼兩國まで出かけやせう」仕出△「それも可からう」駕兩人「こつちも一寸やつて來よう」仕出○×「サア／＼行きやせう／＼」ト茶代をおく事あつて上手へ入る。駕兩人「モシ爺さん、頼みましたぜ」ト浪の音になり、駕籠はその儘おき、駕籠屋も續いて上手へ入る。茶屋「お靜かにお出なされませ、有難うござります」ト茶碗蓋盆など片づけ科あつて。「ヤレ／＼天道樣は有難い、まづ口明がしたといふもの、先づこの鹽梅では今日もお客がしつかりで有らうワエ。ドレ駕籠の旦那にもお茶一つ上げうか」

仕出〇「ぢいさん、何日ながらお前の店は早いの」茶屋爺「ハイこれから七月盆過迄は、朝が見世が忙がしうござります」仕出△「なる程時分がらだ、川筋が賑かだ」仕出×「違ひねえ、朝つぱらから家根船の三味線は、木母寺泊りの遊山船か」〇「但しは寺歸を送りの船か、なんと夜の引明から氣の惡い奴們ぢやァねえか」茶屋「ナニお前さん、こんな事ぢやァごぜえません、いつも私は七つ起で店を出しますが、滅相に人が出ますよ」ト皆々此樣な事をいひ居る、駕籠屋二人は汗を拭きなど色々科あつて。駕籠甲「時にぢいさん、今鳴る鐘はアリヤァ何だえ」茶屋「アイサ、アリヤァ觀音の六つでござります」駕甲「さうかえ、こいつは滅法早かつた」駕籠乙「棒組、モウ僅だ、ゆつくりいれ込んで行つても可いワ」駕甲「一ぷくやれ〳〵」ト床几にかける仕出の〇駕籠屋の體を見て。仕出〇「モシ駕籠の衆、かう見た所が吉原歸りの客人とも見えねえが、どつから乘せて來やしたえ」駕甲「わしやァ三軒屋でごせえますが、彼の旦那が何かお邸の急用だといつて」駕乙「やたらに急がつしやるから、夜中も厭はず出で來やした」ト此うち茶屋爺、盆に茶碗をのせ持出て。茶屋「サァ〳〵漸う茶が出來ました、サァ皆さん上りまし」ト仕出しの皆々へ茶を汲んで出す、茶屋爺駕籠屋にも持ち行き。「サァ茶を一つあがらつしやりませ」ト駕籠屋を見て。「オヽお前方は何日も客人をつれて來て下さる若い衆だ。年をとつちやァ埒は明かねえ、とんと氣が注かなんだ、

與話情浮名橫櫛

瀨川如皐作

序幕

大川端藥師前の場
吉原花屋敷の場
大音寺前の場

本舞臺三間の間、向ふ一面の浪幕、此前地がすり浪打よせの張物、上手へよせて古びたる地藏堂、後の方を畫心に見せ、下手に葭簀張の出茶屋、床几二三脚置並べ、よき所に榎の大樹、日覆よりも同じく釣枝、都べて大川端多田の藥師の門前より淺草川を見渡したる景色、爰に茶屋の爺、朝店を明けたるこなし、茶釜の下を焚つけ居る、吉原歸の仕出二三人床几にかけ、捨白にて莨を喫みゐる、下手に若い衆二人、旅駕籠舁の拵へにて、垂を卸せし四手駕籠、棒端に四ツ木村三軒屋と印したる提灯を點け休み居る體、淺草寺の明六ツ、浪の音、はやり唄にてよろしく幕明く。

お花トヾ伊右衛門を一刀斬る、與茂七立寄り伊右衛門の刀を叩き落す、お花又斬る、與茂七伊右衛門を蹴返す、ト仰向にこける、與茂七、次郎吉お花を傍へやり、止めを刺せといふ科、兩人死骸へ一時に乘蒐り科ある、始終うすどろ〳〵にて。次郎吉「父樣の敵」お花「夫の仇」與茂七「舅の敵お岩の仇、今こそ」三人「思ひ知つたか」ト三人一度に止めを刺す、伊右衛門手を上げ苦み、息絶える科、傳藏立寄り。傳藏「三人とも手柄〳〵」ト扇をひろげ煽ぐ、孫兵衛始終孫の次郎吉に眼を離さず、此時次郎吉を扇にて煽いだり、又天窓を撫たりして。孫兵衛「ヤイ次郎吉よ、よう父樣の敵を討たなア、強い者ぢや〳〵、出來した〳〵、お花も出來した、誰方樣も孫めを賛めておやり下さりませ」ト孫兵衛大きに悦ぶ科、此時どろ〳〵打上げる、ト下手の上より、誂への雲の上に、南無彌阿陀佛の箔紙の彫拔の文字出る、ト皆々是を見て手を合し拜み。與茂七「アレ〳〵亡執成佛得脫」ト此時又之丞少し向へ出て。又之丞「惡人亡び照月の一軸手に入る上は」傳藏「鹽冶家を再興なさん」與茂七「めでたし〳〵」ト皆々前へ出て竿になる、此時口上いひ向へ出て。口上「東西〳〵、まづ今日はこれ限」ト辭儀する、皆々一同に辭儀する、めでたく打出し。幕

いろは假名四谷怪談　終

孫兵衛「吾子の敵」與茂七「サア尋常に」皆々「勝負いたせ」伊右「ヤア雀に等しき汝等が胸中、何ぞ大鵬が意を知らんや、某この一軸を以つて、鹽冶家を引興さん所存なるワエ」又之丞「ヤア如何樣に陳じても」傳藏「お岩の死靈の告によつて」與茂七「年來の積惡露顯の上は、一軸を渡し」皆々「覺悟覺悟」伊右「ヤ小賢しい敵呼はり、達つて某に刃向はゞ、この一軸寸々に引裂かうか」與茂七「サアそれは」伊右「サア」與茂七「サア」伊右「サア」皆々「サア〳〵」ト伊右衛門科、皆々無念がる、ト此時また大どろ〳〵になり、大鼠出て伊右衛門の裾の邊を這廻る、伊右衛門苦み立竦みとなる、トゞ鼠飛上り、仕掛にて一軸を銜へ與茂七の側へ行く、ト與茂七手早く一軸を取る、鼠消える、與茂七又之丞に一軸を渡す、又之丞受取り戴く、どろ〳〵かすめる、此時伊右衛門心づきし科あり、一軸なき故。伊右「ヤア今迄取持せし一軸」ト邊を探す科あると。又之丞「其一軸これに有り」ト見せると伊右衛門吃驚して。伊右「エ、是も死靈の」ト無念の科。「モウ此上は伊右衛門が死もの狂ひ、汝ら寄たら反討だ」ト與茂七に斬つて懸る、少し立廻あり、又どろ〳〵になり、トゞ與茂七伊右衛門が肩先一刀きる、伊右衛門少したるむを、背後より次郎吉立寄り腰の邊を斬る、伊右衛門振廻り次郎吉を斬らんとする、孫兵衛ちやつと次郎吉を抱いて下手へ退く、此隙にお花伊右衛門と切合、お花危く見える故、與茂七後より又一刀きる、伊右衛門段々苦みひよろ〳〵する、

すどろ〳〵にて小兵衛の死靈乘移り、次郎吉働く、孫兵衛お花危むこなし、非人次郎吉に追ひまはされ、殘らず下手の方へ逃げて入る、お花も孫兵衛も次郎吉について橋懸へ入る、與茂七も孫兵衛親子を氣にかけて居る科にて、官藏と立廻ありてトヾ官藏を斬倒す、官藏苦しむを見事蹴返し。與茂七「老人といひ女童心元ない、さうぢや」ト與茂七こなしあつて、橋がかりへ入る、トチヨン〳〵と木入る、淺黃幕おとす

造り物、三間の間向ふ遠見に本堂庫裏、間に樹木のあしらひ、すべて深川回向院寺内の書割よろしく、舞臺の眞中に鐘樓堂、上手の方楓の大木あり、石壇の上に伊右衛門、照月の一軸を口に咬へ、拔刀を見得よく構へゐる、上手の方に小鹽田又之丞、赤坂傳藏、擬勢して居る見得、佐藤與茂七凜々しき形にて、石壇へ片足かけ、伊右衛門に詰寄てゐる、下手の方にはお花、次郎吉、これも凜々しき形にて、拔身をかまへ伊右衛門に詰かけゐる、後の方に孫兵衛も擬勢してゐる、上より紅葉の釣枝おりる、すべて回向院釣鐘堂の體、禪の勤にて道具とまる。

與茂七「ヤア大惡人の民谷伊右衛門、汝主家の名器たる照月の一軸を奪取り、此所へ匿しおく事、お岩の死靈の知せによつて」又之丞「小鹽田又之丞」傳藏「赤坂傳藏」與茂七「佐藤與茂七向うたり、サア速かに一軸を渡した上、わが爲には舅左門殿の敵、お岩の仇」次郎吉「父さまの敵」お花「夫の仇」

知らさんも計られず、今にも與茂七此邊へ來りなば」官藏「其儀なら氣遣あるな、見らるゝ如く大勢の仲間の者を賴みおれば」非人今「たとへ幾人うせうとも」非人口「皆々が加勢する程に」非人今「ここ構はずと」官藏「一時も早う」伊右「そんなら官藏、皆の者、賴んだぞよ」皆々「合點ぢや」ト伊右衞門落つきたるこなし有つて、上手へ入りきると、官藏非人捨白いうてゐる、ト向より與茂七凜々しき形にて出る、跡よりお花、佛孫兵衞、子役次郎吉を背に負ひ出る、これも凜々しき誂への形、花道よき所に立どまりて。與茂七「あれに見ゆるが回向院」お花「ちつとも早う」孫兵衞「サア御座りませ」ト四人とも本舞臺へ來る、ト非人みな〳〵四人を取卷く、與茂七こなし有つて、後の三人へ心を配り、よけて通らんとする、此時官藏前へ出て來り。官藏「與茂七久しいなア、官藏ぢやが見忘れたか」與茂七「ヤアさういふは不義士の官藏、我々が行先を妨害なすは」官藏「オヽ汝が來るを此所に待つてゐるのぢや」與茂七「エヽそりや何故」官藏「貰ひたい」與茂七「非人の事なら手の裡か」官藏「イヤ汝が命を」與茂七「こりや誰ぞに賴まれたな」官藏「オヽ伊右衞門殿に仇なす汝等、覺期して其處へ直れ」與茂七「エヽ飛んで火に入る虫けらめ、此世の暇とらしてくれう」ト身構する、ト非人皆々薪雜木を引提げて。官藏「顋たゝかさずと」非人皆々「たゝんで終へ」ト是より與茂七、大勢を相手に働く、お花孫兵衞にも非人蒐る、入亂れての立になる、此時う

りや忝い」大勢「味い話ぢやなア」官藏「イヤ味い話の序、其時はしたみでない、劍菱でたらふく〳〵」非人「のめるな〳〵」官藏「こりや飲食ばかりぢやない、いびつなりもやるワイ」大勢「そりや有難い〳〵」トこんな捨白いうてゐる、ト向より伊右衛門、以前の形にて走り出で、花道よき所へ來て、舞臺の官藏と顏見合せ。官藏「ヤア伊右衛門殿」伊右「オヽ官藏か、よい所で」ト本舞臺へ來て皆々の上手へ立つて。官藏「伊右衛門殿、夜中といひ其形は」伊右「オヽ不審尤、かねて貴公に申せし通り、喜兵衛方より申請けし五百石の墨附をもつて、師直公へありつかんと思の外、お岩の死靈の鼠めが、所々喰ひ破り反古同然、其上預け主の長藏も、お岩の爲に其場で最後、まだも頼みは彼の一軸、近日師直公の屋敷において、歌合の會興行あれば、是非高家に要るべき品、それを囮にありつく手段、それゆゑあの一軸を以つて、師直が邸へおして推參・俺が世にさへ出たら、貴殿もとも〴〵推擧して、元の武士に取立てるワ」官藏「それは重疊、かねがね貴殿のお頼み故、かく非人となつてへちまふも一軸を守護なす爲、スリヤ今夜の中に一時も早う一軸を」伊右「イヤそれにつき心がかりは佐藤與茂七、小鹽田又之丞、赤坂傳藏の三人、忍び〳〵に照月の一軸を詮議する由、まつた小兵衛の妻子、我を敵と狙ふといへども、高が女童、取るに足らねど、又してもお岩の死靈我を惱ますのみならず、若又彼奴等に一軸の有所を

元へ来りお熊の髻を摑んで立つ、お熊苦しむ、皆々これを知らず念佛申してゐる、お岩だんだんお熊を振まはす、トお熊の首抜ける、此の時皆々にれを見て吃驚して、ハアというてばらばらと逃げて入る、ト大どろ〳〵にて、お岩婆の首持つて立身になり居る、伊右衛門これを見て。伊右「エヽ斯く迄根強き嫉妬の念、ハテ恐しい死靈ぢやなア」お岩「嫉妬の念の怨の程、民谷一家類葉まで、この如く枝葉をからしたれども、まだ此上に官藏とそなたの命、見よ〳〵今に取殺さん」トお岩こなし。伊右「ヤア神力勇者に勝つ事能はず、人の盛んに祟があらうか、うぬを」ト刀を抜き切拂ふ、どろ〳〵になり、お岩よき所へ消える、ト伊右衛門すこし落つき、此時きつとなる科あつて。「此上は照月の一軸をもつて、師直公へ推して推參、これより直に鐘樓堂へ、さうぢや」ト伊右衛門刀をさし凛々しく尻引からげ、向へ入りきると、チョン〳〵と木を入れる、トこの家體後へ引込むと淺黄幕おりる、深川回向院門外のかゝり、上手へすこし塀を出す、ト下手の方より關口官藏、つぎ〳〵の垢づきたる著物、非人頭の形、跡より非人大勢ついて出で、舞臺よき所に皆々立つて。官藏「汝們にかね〴〵話す通り、俺ももとは鹽冶家の浪人、かく非人となりさがれど、朋輩の伊右衛門殿が、近々世に出る咄だが、あの人があり附くと、俺も其手筋で元の武士に取立てらるゝから、其時は又汝們にもずつしりと祝うてやる」非人〇「そ

跡に茫然として無念の科。伊右「ハア、。うぬお岩め、又しても段々と人を惱ます餓鬼修羅め、此上は汝が印を」ト門口に立置いたる塔婆を持來り、足にて踏折る、ト大どろ〳〵になる、ト上手の障子家體の内にて、源四郎あつというて苦しむ音する。伊右「たしかに親父樣の聲」ト走り寄り、障子を少し明けて見て吃驚し、ちやつと鎖し。「ヤア親父樣が縊れて」ト悧れるこなしあつて。「エ、科なき親までくびれ殺す、これもお岩のなす業か、チエ、恐しい執念ぢやよなア」ト撞とへたる、此物音に奥より婆お熊、苦しみながら出る、跡より講中みな〳〵跟いて出來り。お熊「これ〳〵忰」大勢「どうさつしやつた〳〵」トこれにて伊右衛門心づいたる科あつて。伊右「アレあの一間で親父樣が、くびれて死んで居らるゝワイのう」お熊「ナニ親父殿が」大勢「首縊つて死んだとは」トお熊皆々障子家體を覗き、皆々吃驚して。「ヤア大騷ぎぢや〳〵」ト皆々うろたへる科。伊右「これも死靈の祟なるか」講頭「そんなら矢張り怨靈がなす業かいの」ト此時又ばお熊苦しき料、伊右衛門も苦しむ。「サア〳〵責めて苦痛を助かる樣、百萬遍の念佛ぢや〳〵」大勢「それがよい、始めう〳〵」伊右「お賴み申しまする」トこれより百萬遍にかゝる、よき程にまたどろ〳〵になり、佛壇へ御燈あげんとして燈心なきゆゑ、行燈の引出明けると、其引出の中よりお岩の幽靈出て、お熊の後へ屈んでゐる、責念佛になる、トお岩門口へ行きかゝり、又

上げながら。お岩「これも悪事につらなる枝葉、民谷一家の血筋は元より、關係はせた者迄も、とり殺さいで措かうか」トどろ〳〵にて引上げて終ふ、ト上より血汐たら〳〵と流れて墨附と一緒に落ちる、伊右衛門これを見て。伊右「ハテ恐ろしや、ヤヽまだしもお岩が墨附を戻してくれたか、心根は嬉しいぞよ、忝いぞや〳〵」ト墨附を戴き懐中する、此時橋がかりより以前の郡次出て來り、直に内へ入り。郡次「サア伊衛右門殿、約束の通り參つた、シテ墨附は」伊右「恰好幸ひこれに、サア改めて御覧下されい」ト差出す、郡次墨附を取上げ改め見て、吃驚して。郡次「ヤヽこりやこれ墨附の様には見ゆれども、文字の中も裂れ〳〵、鼠が喰ひさき破れあれば、反故にもならぬ此紙を、墨附なりとは何の事」ト伊衛右門へ渡す、受取り見て。伊右「ドレ。ヤヽそんなら是も死靈の業か、チエヽ情ない、この墨附まで此様に、エヽ殘念な」郡次「伊右衛門殿、身共を馬鹿にさつしやるのか、此様子では一軸も覺束ない、やれ馬鹿〳〵しいお人だ、ドレお暇申す」ト出るを伊衛右門郡次をとめて。伊右「お待ち下されい、唯今の墨附は是非もなく候ふ、此上は一軸を御覧に入れん」郡次「イヤ〳〵モウ其一軸といふも、大方贋物でがな有らう、貴公ひとり勝手に狂はつしやれ、エヽ狂人に構ふ閑はないワエ」伊右「モシ」ト又とゞめる。郡次「エヽ放さつしやい」ト振きる、はやき唄になり、橋懸へ郡次入る、伊右衛門

れやれ嬉しや、歎きの中の悦びと、事急に相なつて參つた、しかし一軸はよけれど墨附は、あの秋山長藏に預けおいたれば、彼奴の居る所は慥に釜屋堀と申す事、是より直に參つて。あゝこれ病ほうけたれば夜分の歩行は、ハテ何としたものであらう」ト伊右衛門こなし、時の鐘合方になり、橋懸より秋山長藏非人の拵へにて、これも病耄けたる體にて出て來て。長藏「御免なさい」ト内へ入るを伊右衛門見て。伊右「ヤア長藏か、よい所へ來た、マア早速だが少し耳よりの話があつて、彼の墨附が入用だが、何と戻してくれまいか」長藏「イヤモウ戻せといはねえでも、此方から態々返しに來たのさ」伊右「オヽ、そりや幸ひ、物事が此樣に拍子よくなつて來ては、しめたものだ」長藏「こなたは占めたか知らねえが、其書物を預つた日より鼠が出て、晝夜といふ事はなく、責めて／＼これ此樣に」ト天窓の手拭を除つて見せる、ト天窓鼠にくはれし體。「鼠に噛られて誠に困り切る」伊右「そりや大方。南無阿彌陀佛」長藏「何でもお岩や小兵衛がなす業だらうよ」ト此時どろ／＼になり、ねとり遙か上よりお岩が幽靈、逆さまになつて下り、無言にて長藏の衿に卷きついてある手拭にて咽喉をしめる。「アヽ誰だ、弄戯するな」トいひながら、喉をしめられ苦しむを、其まゝ上へ引上げらるゝ、伊右衛門ヨて。伊右「ヤア／＼長藏を、あれ／＼お岩の死靈が。アヽこりや其墨附は置いてくれ／＼、あれ／＼」ト大どろ／＼にて引

になり向より三宅郡次役人の拵へにて、家來二人つれ出て來て、門口に立止り。郡次「それ案内致せ」家來「ハア。伊右衛門殿、宿に御座るか」伊右「ハア誰方でござるな」ト伊右衛門出迎ふ、こなしある。郡次「イヤ師直の家臣三宅郡次で御座る」ト内へ入る。伊右「ヤレ〳〵郡次殿、ようこそ御入來、まづ〳〵」郡次「御免下されい」ト上座へ坐る。「扨早速ながらお咄し申すは、主人師直公、望む所の照月の一軸御所持との事、二つには伊藤喜兵衛へ遣はしたる五百石の墨附、先達て喜兵衛殿より其許へ譲られたる由、それに就き近々お歌の會日に、かの二品を持參致さるれば、御抱へあらんとの儀、それ故その實否を改め參れとあつて、今宵拙者密々の使者、此旨しかと御承知下されませう」伊右「先以つて忝い貴公のとりなし、近々歌合の會興行と御座らば、いよ〳〵鹽冶家は再興ならず、不運を見限り師直公へ隨身、如何にも二品とも唯今は無けれども、後程までに取揃へまする間、左樣に思召し下され、よしなに御計ひ下されい」郡次「左樣でござらば拙者も後刻參上いたす間、間違なく取揃へ」伊右「きつと御覽に入れるで御座らう」郡次「イヤモ御墨附さへ明かなれば仔細なし、殊に殿樣の御望み、照月の一軸は宇宙の重器、風流の奇品なれば、殿にも滿足で御座るて」伊右「これは〳〵忝い御挨拶、萬事貴殿のお執成を」郡次「お賴みなくとも承知で御座る、然らば後刻、お暇申す」ト門口へ來て。「伊右衛門殿」伊右「や

オ氣遣致すな、守立てゝ大事にかけ育てる程に、心殘さず成佛いたせ、南無阿彌陀佛〳〵」トお岩聞分けて伊右衛門に子を渡す、伊右衛門取つて抱く。トお岩上手へ立つ。「オヽ泣くな泣くな、よい子ぢや〳〵」と見る内どろ〳〵烈しうなり、抱きし赤子忽ち石の地藏にかはる、伊右衛門恂りして取隕す、お岩見て。お岩「アハアハ〳〵〳〵」トお岩、伊右衛門の方へ指して心地よげに笑ひながら、上手の生垣へ消ゆる、伊右衛門苦しむ、此時奥よりお熊走り出で。お熊「オヽ悴々、又何ぞ見たか、俺も鼠が責めて〳〵、アヽ苦しや〳〵」伊右「これ母者人、今も今とてお岩が死靈、種々樣々の仇をなし、一家血筋に至る迄、この樣に苦しめるは、ハテ執念の深いものぢやなア」お熊「あゝこれさりながら、どの樣な苦しい目をしても、命さへ全うして、これ先達つて手に入りし墨附や一軸は、大事にかけて持つて居るであらうなア」伊右「イヤモ其儀は氣遣あるな、墨附は朋輩の長藏に確と預け置く、まつた一軸は回向院の鐘樓堂にかくしあれば案じる事はない、此上はどうぞ死靈の立去るやう、此苦みでは最早慾も德も要らぬ氣に成りましたワイのう」お熊「エヽモウ氣の弱い、死靈を立去らすには、神佛の力でなければならぬ、ドリヤ奥へ往て、祐天樣の御名號なと取つて來て戴かさう」伊右「ちつとも早う苦痛を遁るゝ樣、念佛を申して下され」お熊「オヽ合點ぢや〳〵、どれ〳〵」ト奧へ入る、ト唄

卒塔婆を持ち科あり。伊右「親父樣の仰せの通り、この卒堵婆をば門口へたておかば、少しは罪も滅する道理、流れ灌頂のあの傍へ、オヽさうぢや」ト伊右衞門卒塔婆を持ち門口へ出る、ト一つ鉦すごき合力になり、流灌頂の傍へ塔婆を建て、門口へ入り手を合し。「お岩小兵衞頓生菩提、南無阿彌陀佛〳〵」ト回向する、どろ〳〵寐鳥になり、燒酎火もえる、ト門口の流灌頂の眞中より、お岩の幽靈子を抱いて出る、伊右衞門見て悑りする、赤兒の泣く聲する。「又もお岩が死靈の迷ひ、殊に赤兒の泣く聲は、ハテ訝かしや」トこの中始終どろ〳〵ねとりにて、お岩の幽靈内へ入り、無言にて立つてゐる。「エヽお岩か情ない、まだうかまずに居るか、こりや能う聞けよ、汝を非義非道に殺したといふ譯ではないが、元は忠義の間違から、照月の一軸が欲しさ故、邪見にあたりし事もあり、又不慮の最期もみな因果、それから俺につき纒ひ、そちと小者の小兵衞がなす怨靈で、何事も皆間違ひし出世の手がかり、一軸や墨附は所持致しても、身のありつきもならざる時宜、コリヤ現在夫の難儀を見て、それ程あく迄うらまずと、モウよい加減に浮んでくれ、これ賴む、手を合して拜むワやい〳〵」トいろ〳〵詫言する、お岩こなしある、ト伊右衞門きゝ耳立てる思入。「ナヽ何と申す、それなる忰が、則ち身共と汝が間に出生した忰とな。ムヽ其忰を養育すれば、汝は心殘らず浮むといふか、オ

「ア、情ない、此様に成つたるも、忠義を思うてした事が、鵙の嘴とくひ違ひ、それから段々重なる惡事、今では後悔先に立たず。コレお岩、俺が惡かつた、了簡してくれよ、又小兵衛もうかんでくれ、俺が口から回向の言譯、南無阿彌陀佛〳〵」ト此時より奥より源四郎塔婆を持ち出で來り。源四郎「久しや悴、何かの事は詳しく聞いた、これ迄の惡逆は數へられず、其中にも罪なき女房お岩といひ、まつた小兵衛とやらを無實の罪にて殺した其報で、其の如くの難病、せめて後生の罪亡し、出家してくれ悴伊右衛門」伊右「思がけなき親父樣、まづは御堅勝で、それにつきまして拙者のこの難病、面目次第も御座りませぬ、しかしながら今少し望も御座れば、出家には得なりませぬ」源四郎「エ、情ない、其形になつてもまだ望の思ひたち、どうで惡い望であらうが、得心なくばたつて出家になれとは云はぬがこりや悴、この卒塔婆は私が千遍の回向をして、俗名お岩小兵衛と記し置いたれば、自分の手づから往來の道端へ建つて置けば、せめて無縁の人々が、往來に唱ふる念佛の功力によつて、罪障消滅する事もあらん、サ、門口へ建てゝおいたがよい」ト卒堵婆を伊右衛門に渡す、ト受取り。伊右「そんなら此塔婆を門へ立てゝ回向をしませう」源四郎「俺も奥へ往て、夜と共に後世をたすかるお念佛」伊右「そんなら親父さま」源四郎「悴、後かた逢ひませう」ト唄になり源四郎こなし有つて奥へ入る、伊右衛門跡に殘り、

これ、まだ出世する悴、坊主にはなるまい」源四郎「ア、まだ其様な事ばかり、悪事をなして出世がならうか」お熊「イヤ〳〵さうでない、出世の種になるものを持つて居るから、今に大名ぢや、とも〳〵に世話さつしやれ、末がよいワイの」源四郎「エヽやつぱり熱にうかされてゐるさうな」お熊「イヤ此方は何にも知らぬ故ぢや」源四郎「マア〳〵何は格別、奥へ往て足なと休めう」お熊「マア久しぶりぢや、家でゆつくりと休ましやれ、私も一緒に奥へ行きませう」源四郎「サア御座れ」ト唄になり兩人入る、トどろ〳〵になり、此時紙帳の中より伊右衛門やまひ鉢巻、やみほうけて百日鬘にて抜刀を提げ飛んで出る、此間に講中大勢出て來て。講中「こりや〳〵氣を確かに持たつしやれ〳〵」ト皆々とめる。伊右「おのれお岩め、うぬ」ト大勢にて伊右衛門をおさへ、抜刀を無理に鞘へ納める、伊右衛門皆々を見て。「ムウそんなら今のは夢であつたか、ハア情ない」皆々「コレ夢でも見たのか、えらいおびえ様ぢや」伊右「ハア、此世からなる火の車、熱湯地獄の苦みも、マア此樣にはあるまいかいやい」皆々「よく〳〵苦しいと見える、サア百萬遍にかからう」伊右「肝心の道心坊が見えぬ、私ひとかへり呼んで來よう」講中「どうぞ頼みます、その中俺們も奥で澁茶など呑んでゐよう」皆々「よからう〳〵」講頭「これ氣を鎮めてゐやしやれ」皆々「サアサア御座れ〳〵」ト講中皆々奥へ入る、時の鐘、凄き合方になり、伊右衛門科あつて。伊右

て話を聞かれたで有ろ、儕と其方との實の忰、久振で家へ戻つた其日から、何ぢややら家中へ鼠が出て、私も忰も此樣に、天窓も何處も嚙附き、大抵苦しい事ぢや御座らぬ。其許は忰が女房のおもひといふ事で御座るワイなう」源四郎「イヤモウ儕も坂東廻國に出た所が、札所〳〵で奇怪な夢ばかり、そこで一先戻つて來たのぢやワイの」作兵衛「それは丁度よかつた、マアゆつくりと休息して、百萬遍を一緒に繰らつしやれ」皆々「オヽそれがよい〳〵」源四郎「また有難いお守をいろ〳〵頂いて來ましたれば、是を忰に戴かせませう、シテ忰はどこに」お熊「今はあの紙帳の中で寐てゐまする、マア後にでも」源四郎「時に講中のお衆、奥へ御座つて澁茶でも」講中「ハイハイ勝手知つて居る故、出て呑みまする」△「時に久振ぢや、婆ア樣に何かの咄を聞いたがよいて」皆々「サア〳〵奥へゆきませう、親仁殿、後に逢ひませう」源四郎「マアござれ〳〵」ト講中皆々奥へ入る、跡唄になり。「イヤお婆、今日こゝへ戻る道々、内の樣子を講中の衆に問うたれば、か樣〳〵と詳しい話は皆聞いた、此方や忰が惡事から、因果はめぐる車の輪、前世此世の敵同士ぢや」お熊「これも忰の女房お岩の死靈がなす業にて、親子この樣に苦しめるといふは、恐しい女の一念、これも惡事の報であらう、アヽ情ない身の上で御座るワイのう」源四郎「今いうたとて詮ない事、又俺も忰に逢うて惡念を發起させ、出家にでも勸めてやりませう」お熊「アヽこれ

した通り、あれに見えるが此頃深川から引越して來たお熊婆ア樣の家ぢやが、最前から此方の話を聞けば、お熊殿の先の配偶との事、それは幸ぢや、こなたは知らぬが怪奇な事があつて、此頃は儕們も講中の事なら、晝夜これ百萬遍で責めかけて居るて」源四郎「それは早や忝う御座る、イヤ私も坂東順禮をせうと思つて、札所〳〵を打つて行くに、皆それ〴〵に不思議があつて、どうも心ならず、それ故一先家へ歸つて見た所が、前の所には居ず、うろ〳〵と尋ねる中、あの作兵衞殿に出逢ひまして、詳しい話も承はり、吃驚しながら此蛇山へ來る途で、皆の講中方に逢うて、マア大きに力を得まして御座る、マヽ直ぐに行きませうか」○「家へ行て咄しませう」皆々「サア御座れ〳〵」トテンツヽにて皆々門口へ來て。△「ヤア婆ア樣や〳〵、此方の先の配偶源四郎殿に道で遭うて、連立つて來ましたぞや」ト此聲にお熊奥より出て。お熊「何ぢや、源四郎殿が歸つたとな、やれ〳〵」ト門口へ來て。「ほんに源四郎殿ぢや、講中の衆も御太儀、この樣な時は餓鬼も人數ぢや、サア〳〵入らしやれ〳〵」ト此人數みな〳〵内へ入る、源四郎葛籠を下し、草鞋など解きて塵打拂ひ上手へ坐る、みな〳〵並よく並ぶ、皆々科で 源四郎「やれ〳〵途で講中のお衆や、あの作兵衞殿に何かの話は聞きました、何からお禮を申さうやら、大きに忝なうござります」皆々「何の〳〵、そりや互の事で御座る」お熊「時に親仁殿、定め

に變る、姿は矢張り娘の形。お岩「チエ、怨は盡きじこちの人」伊右「ヤ、、そちや女房お岩」お岩「エ、ねたましや」ト始終どろ〳〵。鼓唄『のう恨めしや根なしごと、身は浮草の種となり。伊右「今に迷うて」お岩「わが黒髪ももろ鬘、漂ふ水に浮みもやらず、遺恨は霽れぬこちの人、ともに奈落へつれ行かん、來やれ〳〵」伊右「何を」ト刀を拔き斬附けんとする途端に、お岩すがた隱す、ト大きなるお岩の顏出る、トありあふ糸車火の車となる、ト所々の南瓜みな〳〵お岩の顏と變る事誂へあり、伊右衞門おどろき、よき所へ立見になり、姿消ゆるとドロ〳〵うちあげる、ト右の飾附の道具、みな〳〵仕掛にて一時にどんてん。

返し

本舞臺三間の間、眞中二重舞臺、上の方藪の生垣、この所消ゆる仕掛あり、二重眞中暖簾口、上手に佛壇の書割、此前に鉦撞木あり、下手鼠壁、いつもの所に門口、此外下の方柳の立樹生垣、其下に流れ灌頂誂へあり、樒の花を立て、手桶に杓つけてある、すべて蛇山庵室の體にて道具納まる。トテンツヽにて向より講中大勢、あとより近藤源四郎、諸國順拜の形、葛籠負うて出て。

講中「サア〳〵御座れ〳〵」ト花道よき所にとまり。講中△「これ〳〵源四郎殿とやら、道々も咄

や、きり〳〵舞ぢや〳〵」ト千遍舞の囃子になる、ト官藏くる〳〵と千遍舞しながら橋懸へまひ〳〵入る、ト跡より犬もついて入る。伊右「アレ〳〵彼の樣に、くる〳〵まはつて行くは行くは」ト立つて門口の方へくる、トお岩伊右衞門の袖を扣へて。お岩「ア、申し、それを手にして此場を脱けうとは」伊右「何しに外へ」お岩「そりや嘘ぢや」伊右「ヤア」お岩「如何に拙い手業にも、戀の賤機をりよくば、逢うて怨の數々を」伊右「そりや誰れに」お岩「お前に」伊右「今はじめて逢うたる身共に馴々しい」お岩「イヽエ私しやとうからあなたに」伊右「スリヤ眞實に」お岩「アイ」ト伊右衞門引寄せ。伊右「可愛い奴の」トお岩を膝へ横抱にする。お岩「オヽ、嬉し」ト兩人抱付く、トこの途端に簾垂ばつたり隕ちる、ト此時下座より官藏出て來り、栞戸の外より窺ふに、兩人の姿見えず、簾垂下りてある故、扨はあの裡にといふ科にて、そろ〳〵と抜足をして入る、簾垂の隙から覗き、悄りして後へ倒れ、やう〳〵起きて此方の方へ慄ひ〳〵這うて來て。官藏「たつた今迄美しい娘と思ひの外、あの恐ろしい顔貌、それを知らずに伊右衞門が抱いてゐさつしやるは」ト不思議な事といふ科あつて。「イヤ怖い物見たしと、今一度」ト又怖怖ながら覗いて見て。「エヽ、全で化物だ」ト又ふるひ〳〵下座の方へ迯げて來り。「やれ恐ろしや、こんな所に長居は無用だ」ト橋懸へ迯げて入る、この時簾垂あがる、トお岩以前の化物の顏

ヤ今まで獨寐か」お岩「閨ぬくめ鳥、鷹の自由に」ト思入。伊右「なる心か」お岩「アイ」ト兩人寄添ふを官藏見て。官藏「ヤア〳〵こりや耐なぬ、イヤナニ伊右衛門殿、貴樣と拙者同道にて遊山に出た所が、どうやらいふ機會で、拙者家來の樣に相成つたが、何も貴樣に遣はるゝ覺えはないが、朋友の好に奴となれば增上る、此上は同格のあしらい致す、身共が心まかせだ、ナニ馬鹿〳〵しい」伊右「こりや〳〵そりや何を申す、其方は身共の家來に相違ないワイ」官藏「イヤイヤ身共家來になつた覺は少しも御座らぬ」伊右「拙者も家來に致した覺はなけれど、それ犬を牽ゐて供を致せば家來ぢや〳〵」官藏「イヤ〳〵家來は致さぬ、やめぢや〳〵、此上は貴公身共の家來にならしやれ」伊右「滅相な事申す奴ぢや、身共と汝とは、見た所が拙者は旦那顏、汝は家來面ぢや」官藏「ヤア旦那顏家來面と、面に分隔があるものか、拙者が旦那ぢや〳〵」伊右「イヤ身共だ〳〵」ト兩人爭ふ、お岩中へ入り。お岩「マア〳〵お二人とも、其樣に仰しやらずと、私にお預けあそばして、仲直りに酒一つ」伊右「なる程これも尤、今爭うたる事は水に流して養老の」官藏「瀧のみと致さうワイ、酒ぢや〳〵」お岩「宜しう御座りませう」ト是より酒盛事いろ〳〵あつて、トゞ官藏酒に醉うたる科。官藏「アヽ醉うた〳〵、アレ家が廻るワ〳〵、くるり〳〵と廻つて見えるワ」兩人「ナニまはるとは」官藏「それ〳〵まはる〳〵、じん〳〵まひぢ

て。伊右「なる程これは見事な鷹ぢや、色も白斑の顔かたち」官蔵「お氣に入つたら拳を固めて迯がさぬ様に」伊右「承知〳〵。御免下され」ト門口より入る、お岩伊右衛門と顔見合はせ科あつて。お岩「こゝは〳〵賤しい伏屋へようこそ、鷹が参つたればこそ、斯様な家へ」官蔵「鷹の餌食に掃溜へ、鶴のおりたる掘出者」伊右「賤しからざる爪はづれ、賤が伏屋に珍しい、定めて主ある花ならん」お岩「イエ〳〵、庭守る人のなき故に、存分開く野路の花、ものは言はねどそれぞとは」トこなし。伊右「しらぬ風情の霞の袖」ト思入。お岩「ひく人あらば」ト伊右衛門にしなだれる科。伊右「か」ト思入。お岩「アイ」ト袖にて顔をかくす。伊右「ハテ面白い花ぢやなア」官蔵「こりや可笑な話ぢや、鷹が取持つ色男、俺には鳶でも媒介してくれんかい、これを思へば夜鷹など買ひに行かうワエ」伊右「こりや何を申す、身共これに用事もあれば、汝は次へ行て休息致せ」官蔵「イヤ〳〵それはまたあんまり、拙者が是に居つたとて、何も邪魔にはなりますまい」伊右「イヤ〳〵ちと彼の者に、内々話もあれば、汝は場合をきつて」官蔵「でも鷹の番を致したい」伊右「鷹は身共が居ゑてをるワ」官蔵「左様なら貴方の番を致さう」伊右「イヤ身共に番はいらぬワイ」官蔵「左様なら私が番を私が手に」伊右「そりや勝手に致せ」官蔵「やつと極つた」伊右「こりや女中、今いうた通り主人はなしか」お岩「何の主人が。やもめで御座んす」伊右「スリ

木に、行儀の見ゆる鷹の有様、外へはそれな尋ね來つらん」トこなし、此時かけりになり、伊右衞門鷹狩の形よろしく、後より關口官藏立派なる奴にて、犬を牽いて出て來り、花道よき所にて。伊右「それて行く鷹の行方や穗屋の軒、たしかに彼れと見請けたり、栞を問はん案内致せ」ト合方になる。官藏「へイ／＼、御祕藏の鷹、何でもあの家に、とく／＼と見屆け參りませう」ト門口へ來て。「イヤ御免下され、ちと物が問ひたい、頼みませう／＼」お岩「ハイ／＼、どなたで御座りますえ」ト出て來て官藏と顏見合せ、官藏思入。官藏「へイ／＼ちと物が尋ねたい。ヤアヤア滅相もない美しいものだ。イヤ何ぢやて、唯今これへアノ鷹が一羽、それては參らなんだかな」お岩「ハイ唯今鷹は外れて參りまして、機嫌ようあれに止つて居りまするワイなア」官藏「ヤア／＼ほんにあれなる行燈に止まつてをるワイ、これがほんのあんど致したといふもの、此由傳へん、又そもじの美しい事も傳へん、何もかも傳へて來よう」ト花道へ來て。まづお悦びなされい、あの家の内に鷹は無事で居りまするテ」伊右「それは重疊、左樣ならば仔細なく申受けてくりやれ」官藏「アヽ申し、まだ外に美しい鷹が御座りまするて、あの樣な鷹を手にお据ゑなされたら、本望で御座らう」伊右「ナニ美しい鷹が外に居るとな、然らば拙者も見物ながら參らうか」官藏「サアかうお出なされませ」ト門口へ來り兩人覗く、伊右衞門ちよと覗き見

家の者に鼠がついて、それは〳〵晝夜苦しめるげな、何でも一通りの事ぢやないて」○「イヤモウ此方が身に關係がなけりやよいぢやないか、モウ此咄は罷めるがよい」□「どうか斯うちり毛もとが、ぞろ〳〵と鼠にひかれる樣な心持ぢや」△「サア去にませうか」皆々「サア〳〵ござれござれ」ト捨白いうてわや〳〵で入る、どろ〳〵にて舞臺の切穴より心といふ字の切拔を上へ引いて取る、この内蝶々番ひ飛んでゐる、ドロ〳〵打上げる、淺黃幕を切つて落す。

造り物、眞中九尺の二重舞臺、簾かけあり、賤が一つ家の體、周圍に南瓜の蔓這うてある、花の間に南瓜所々に出來ある、庭先には誂へて秋草いろ〳〵植ゑあり、毎もの枝折戸、すべて物淋しき秋の景色、直に獨吟にかゝる。

唄『うたかたの合鏡の月さへも、影見せぬ夜に戀人の、しらせか蜘蛛の糸車。トこれにて簾を上げる、お岩好みの娘の形にて糸車取つて居るこなしあつて。お岩「白玉か何ぞと人の問ひし時、露と答へよ人の身の、消ゆるは宵の稻妻か、ありやなしやと帚木の、はかなきものは現世の境界、たのみなき世の有樣ぢやなア」ト宜しく糸車をおき科あつて。獨吟唄「風のたよりも何處より、外れて來つらんはし鷹や。ト此時ピヨ〳〵になり、何處よりか鷹それてきて行燈へ止る、お岩見てこなし。「いづくよりかはそれ鷹の、主はたれとも白梅の、かをりとめ木やとまり

兵衛」與茂七「スリヤそれ故に此切腹、まだしも悪念發起は奇特」直助「地獄へ急ぐ置土產、いつぞや手に入る囘文狀」ト差出すを、與茂七受取り。與茂七「慥に落手、未來成佛」ト思入、よき時分に古手屋門口に窺ひて、此時つか〳〵と入り。古手屋「扨は鹽冶の」ト囘文狀へ手をかける、與茂七手早く拔身をとり斬下げる、古手屋立身にて苦しむ。與茂七「飛んで火に入る」ト刀を引く、これにて古手屋宙反りする、與茂七又見事に蹴返す、これを木の頭。直助「南無阿彌陀佛」ト引廻はす、與茂七印鑑を口に咬へ、後手に古手屋の止めを刺す、この見得よろしく。

拍子幕。

大詰　一軒家の場　蛇山庵室の場　深川囘向院寺内の場

本舞臺三間の間、正面淺黃幕、こゝに百姓の仕出し立並びゐろ、雙盤の音にて幕明く。

仕出△「ア、この空合は雪と見えるワイ、降らぬ中に一稼やりかけうか」○「よからう〳〵、サアぬらくらと蛇遣はずとやりかけませう」□「ア、これ〳〵其蛇で思出した、あの蛇山の庵室の咄を聞かしやつたか」△「聞いた段かナア恐しい咄ぢやが、あの庵には死靈の祟とやらがあつて、

りしは、奥田將監が悴庄三郎と、某仔細あつて互に著類を脱ぎかへしが、扨は身共に意趣ある奴、この與茂七ぞと取違へ、欺討に討つたるか」直助「ヤ、、、すりや大川端にて殺したは、奥田將監樣の御子息、庄三郎樣であつたか、ホ、ホイ」與茂七「扨はおのれが庄三郎を」ト詰寄る。お袖「モシ」ト與茂七を止めて。「此書遺を兄さんに逢うたらどうぞ」ト差出す、直助とつて臍の緒の書附を見て。直助「一、元宮新吾が娘そで」ト又吃驚する科あつて。與茂七「ヤ、、すりやお袖の親は元宮新吾とな」お袖「アイ」ト思入、直助手早く與茂七が捨てたる一腰にて、お袖が首を打落し、一腰を前へ投出し、どうとなる。與茂七「ヤア女房が首を」直助「サ討ねばならぬ言譯は」ト出刃を腹へ突込む。與茂七「所詮助けておかれぬ直助、さはさりながら何故に」直助「人の皮著た畜生が、往生際の懺悔ばなし、聞いて下され與茂七殿」與茂七「ヤ、、何と」ト是より竹筒入の合方、直助苦しき科あつて。直助「もとこの直助は奥田の家來、身持がわるさに主人の勘當、因果の起は此お袖、つけつ廻しつ口説いても、得心せぬのは夫がある故、與茂七を殺した其上で、此身の願を叶へんと、大川端の暗紛れ、騙討に殺したは、古主の御子息庄三郎樣と、聞いて知つたはたつた今、親姉夫の仇敵、討つてやらうと僞つて、抱寐をしたは情なや、オ、此直助が血を分けた、妹と知つた此書附、鑓一筋の親は侍、其子は畜生主殺し、末世に殘る直助權

かうとする、この途端きつかけに月出る、是にて三人顔見合せ、雙方恟りして。直助「ヤア正しく男と思ひしに」與茂七「屏風の中には女房お袖」兩人「ヤ、、こりやどうぢや」ト思入、これより本調子合方になり、お袖こなしあつて。お袖「同じ相圖に二人の夫、手引なしたは疾よりも、私が命を捨つる覺悟、只恥しいは與茂七殿、わたしが操を破りし元は、義理ある父さん姉さんの敵が討たさ、一つにはお前が存命でゐやしやんすとは、神ならぬ身の夢にも知らず、やつぱり日外や大川端にて、父さんと同じその夜に人手に罹り、死なしやんしたと思ふより、お前の怨も霽さう爲、直助殿を力と頼み、枕かはして面目ない、お前に面が會はされうか、お手にかゝつて死ぬるのが、せめてもの言譯ぞや。又直助殿には約束の養父の敵、姉さんの仇を討つたる其後にて、この書遺に添へてある、私が一人の兄さんを尋ねて、この譯いうて聞かせて下さんせ、かへす〲も與茂七樣、この世の縁はうすくとも、未來は同じ蓮の上、夫婦になつて下さりませ、頼みます頼みますワイなア」ト雙方へかけてよろしく科、與茂七思入あつて。與茂七「オオ出來した女房、養父左門殿も嘸悦びで有らう、それでこそ適れ貞心、さりながら合點ゆかぬは何を證據に某が、大川端にて人手にかゝり相果てしと」お袖「思詰めしは死骸の顔、破れ損じてそれぞとは知れねど、著物は見覺あるお前の定紋、それ故に」與茂七「ヤ、、それにて思ひ當

造り物、元の深川三角屋敷、直助宅の段に戻る、眞中に屏風たてあり、やはり捨がれ、誂への合方にて道具納まる、ト屏風の内よりお袖、書遺と片手に行燈を持ち、よき所へ出て。

お袖「水の流れと人の身は、移り變る世の習ひ、思へば因果な私が身の上、實の父さん、幼い時にお別れ申し、まだ其上に一人の兄さん、ありとばかりお顏も知らず、義理ある父さん姉さんは、非業にお果てなさんした、其敵が討ちたいばつかり、女の操を破りしからは、所詮この身は」ト思入あつて懷中の守袋より、臍の緒の書物出す、やはり時の鐘合方、下の方に直助、出刃を手拭に捲き、花道の方へ拔足にて行き内を窺ふ、お袖扨はといふ思入ありて。「この臍の緒の書物は、血を分けし親の筐、せめては是を兄樣に、私が死んだ其後で、届けて貰ふは」ト思入あつて。「これが此世の」ト科あつて行燈を吹消す、この途端、捨鉦の頭を打込み、忍び三重に變り、花道の直助出刃を口にくはへ、裾をからげ嚴と見得、上の生垣を押破り、與茂七そこへ出てよろしく科、此時お袖も科あつて屏風の内へ忍ぶ、兩人窺ひ〳〵、直助は内へ入る、與茂七とすれちがひ、入替つて互に思入あつて、屏風越に與茂七は一腰、直助は出刃にてぐつと貫く、内にはあつと叫ぶ、兩人しすましたりといふ科あつて、屏風を蹴返す、ト内にお袖、書遺と臍の緒の書物を持ち、手を負ひ苦しみゐる體、兩人左右より手をかけ、お袖を引起し貫

りやこちの人が此子に」孫兵衛「體を假りて物言ふか」又之丞「その伊右衛門こそ近藤が忰にて、親にもまさる邪道者」お花「そんなら敵は民谷伊右衛門」トお花きつとなり科、孫兵衛抑へ。孫兵衛「コリヤ女の手にあふ民谷でない、何事も俺が胸に、なア」ト孫兵衛思入あり。「たゞ此上は若旦那樣、少しも早う其藥を」又之丞「オヽ心づくしの此良藥、如何にも服せし其上にて、この一件を大星殿へ演說なさば、わが惡名も晴れし上、一軸詮議せん、氣づかひ致すな忠義の小兵衛、今ぞ良藥服用なさん」ト孫兵衛水を汲んで差出す、又之丞、小兵衛が前に渡せしソウキセイの藥を呑む科ある。次郎吉「アヽうれしや」トどろ〳〵はげしく又之丞悶絶する、次郎吉も倒れる、鳴物打上げる、よき時分に下座の方より婆お熊、米屋うかゞひ出で、此時内へつか〳〵と入る。お熊「扨こそ良藥」米屋「盜んだ又之丞」ト又之丞へかゝる、又之丞すつくと立つて米屋の手を捩上げる、皆々是を見て。孫兵衛「ヤア貴方は」お花「お足が」又之丞「まことに扨は難病全快なしたるか」お花「草葉の蔭にてこちの人が」孫兵衛「さぞよろこんで」又之丞「エヽ忝ない」米屋「なにを」ト蒐るを突廻はし、又之丞米屋をポンと斬る。お熊「ヤア人殺し」ト聲立つるを孫兵衛ちやつと引捕へ。孫兵衛「エヽ爰な魔王め」トよろしく押附ける、又之丞刀の血を拭ふ、お花右に位牌、左に次郎吉を抱へ泣おとす、この見得よろしく時の鐘の送りにて道具まはる。

手に取り見れば、これ俗名小兵衛、施主は親御のお前の名、悔りせまいか私しやモウ、其場で直に死にたう御座りましたワイなア」ト泣く、又之丞こなしあつて。又之丞「スリヤ忰小兵衛が、此世を去りし魂魄の、身どもが難病救はんと、寒氣を防ぐ衣類といひ、良藥とても業通にて、取得て我に與へしのみか、切腹までをとゞめしは、死しても竭す忠義の心底、忘れはおかぬ忝ない、さうとは知らず、我に惡名負はせし小兵衛、憎さも憎しと追詰めて、手討になせしと思ひしに」お花「そんならこちの人小兵衛殿は、ありし姿をあらはして、今迄こゝに居やしやんしたか、妻の私や子の次郎吉に、なぜに會うては下さんせぬ、わたしや會ひたい懐しいワイなア」ト泣伏してこなし。孫兵衛「オヽ尤ぢや〳〵がこれ嫁女、位牌になつたを見た汝より、現在忰が死骸をば、隱亡堀で見つけた時の悲しさは、どの樣に有らうと思やる、其上憎たらしい殺しやう、涙のありたけ泣いた上、法乘院へお願ひ申し、葬つたは今日の夕方、嫁や孫めに知らさぬは、ちつとも遲く泣かさう爲、この親仁が心の裡、嫁女、若旦那樣、御推量なされて下さりませ」又之丞「オヽ聞く程不憫な小兵衛が成行、元より正直なる生れにて、非道を働く者でなし、殺せし奴は何者ぞ」トきつとなり、誂への合方、寐鳥うすどろ、燒酎火もえる、奥より次郎吉走り出ですつくと立ち。次郎吉「わしを殺せしは民谷伊右衛門」ト子に言はす。お花「ヤアす

るか、モウ此上は汝を手討に致した上、邪魔を拂うて潔く切腹」と刀を取直し、小兵衛を膝行りながら追ひまはす、此時一つ鉦の音、せめ念佛となり、小兵衛よき所へ矗然と立つ。小兵衛「あなたの願を叶へんと、苦しい悲しい恐しい、いふにいはれぬ艱難にて、やう〳〵手に入る此藥、それにて全快なされた上、どうぞ首尾よくお家再興御なし下されませ旦那様」又之丞「何をおのれ、覺悟なせ」ト摺寄つてはげしく斬る、大どろ〳〵になる、小兵衛柱の中へ消ゆる途端に、又之丞卒堵婆を斜に斬る、ドロ〳〵寐鳥やむ、やはり一つ鉦せめ念佛になり、又之丞ぎよつとして。「ヤ、、、小兵衛を手討と思ひしに、姿は消えて此卒堵婆、ム▲俗名小兵衛、こりやどうぢや」ト思入、ばた〳〵になり、向よりお花白木の位牌を抱へ、一散に走り出て來り、門口へこけ込む。お花「舅御様、モシ孫兵衛様、コリヤマアどうせうぞいなア〳〵」トうろ〳〵して泣伏す、奥より孫兵衛松蟲の鉦を持ち、よろめきながら出て來て。孫兵衛「オヽ、悲しかろ〳〵、尤ぢや尤ぢや、おりや間がな隙がな佛壇の前で、この鉦撞木を杖柱、いつそ泣死に死にたいも、命めが自由にならず、よく〳〵業のつくばつた親父が身の上、嫁よ推量してくれ〳〵」お花「お前が最前、歸りにはお寺へ寄つて來るやうにといはしやんした故、何意なく法乘院様へ往て、親父様が願ひました品をといふたれば、方丈様がお手づから下された、この白木の位牌、不思議な事と

口へあらはれる。「小鹽田又之丞、今ぞ此世の」ト腹へ突立てうとする、此時門口の小兵衛こなしある、ト又之丞五體すくんで腹切れぬ科、又思直し腹切らうとする、この時小兵衛ふうはり立つたる誂への門口より内へ入り、又之丞の傍へ坐る、又之丞いろ〳〵あつて。「ハテ心得ぬ、手先しびれて切れぬはどうぢや」ト不審のこなし、此時初めて小兵衛を見て。「ヤヽ、ヽそれに居るは小兵衛でないか」ト又之丞思入、小兵衛のいふ事を聞取る科。「ヤヽ、何と申す、今切腹なしては犬死、手に入る良藥にて難病を全快なせし上、照月の一軸を詮議して家再興なせ。こりやヤイそれを汝に習はうか、身共はな汝故に盜賊の惡名うけ、古朋輩の手前面目なく、それ故かねての切腹ぢやァやい、うぬ」ト小兵衛見えぬ科にて。「うぬ何れへ參つた、ナヽなんと申す」ト聞く事あつて。「大切に思ふ心ゆゑ、心に思はぬ盜みを致し、良藥をも取り得たれば、これを服して全快なせとか」ト始終又之丞、小兵衛のいふ事を聞取る科ある、又小兵衛死靈の科にて、又之丞の切腹をとゞめる。「ヤア今となつて如何樣に申しても」ト又腹切らうとする、小兵衛止める。「エヽさすが賤しき下郎、汝故に盜賊の惡名受けたれば、最早これまで」ト又腹へ突立てんとする、此時ドロ〳〵はげしく、小兵衛とめるこなし。「エヽ聞譯なくまだ止めるか、下郎ながらも是迄の忠義に免じゆるし置けば、某に恥面かゝせし其上に、猶も武士道棄てさす

許盗賊でない事、身共よく存じて居る、ハテ行歩叶はぬ身を以つて、左様な爲がなり申さうか」又之丞「シテ又何故拙者めに」傳藏「たとへ其身は邪なくとも、鹽冶家中の中に左様な惡名をうけたる者御座つては、難儀の上の又難儀、家再興の邪魔に相なり、世の人口はふせがれず、其身の不運と諦めめされ」又之丞「左様では御座らうなれど、無實の罪なれば」傳藏「李下に冠、瓜田に沓。汚名は脱げぬもので御座るて」又之丞「スリヤ貴殿にも御不審が」傳藏「御縁もあらば又重ねて」ト門口へ來て。又之丞「アイヤ」トとめるを一寸振切り。傳藏「お目にかゝらう」ト科あつて時の鐘、唄になり向へ入る、跡合方にて。又之丞「思へば〳〵武運拙き者、浪々の上この難病、それにもはや歌合の日限は近づく、其上一軸の手がかりはなし、今又はからず盗人と惡名受けて、朋友の手前も恥かしく、傳藏殿と詞は誓ひたれども、この難病では當月廿日迄に全快は覺束なし、おめ〳〵と世の人に、武士の面が合はされうか、生存らへて恥面かゝんより、未來の主君へ言譯の追腹」ト脇差を取り思入あつて。「イヤ〳〵たとへ何の様な惡名受けても、一軸さへ手に入れば。といふて手がかりはなし、日限は廿日、其上難病、盗人の汚名まで受けては」ト思入。「こりやどうあつても生害致さん」ト此時一つ鉦念佛の聲、又之丞脇差抜き、袖にて拭ひ腹を切る思ある、ト薄どろ〳〵寐鳥にて、小兵衛のすがた幽靈にて、藥の包を持ち忽然と門

ヤこれは小判できつしり六兩」米屋「こゝへも一步、そんならこれは」ト兩人金を見て。傳藏「身共取かへ遣はす、金子請取つておきやれ」又之丞「すりや傳藏殿には、某が此場の樣子、難儀を救うて」米屋「そつちは六兩、こつちは一步、同じ痛い目つまらぬものだ、これお侍、こなたには言分があるになア」傳藏「ヤイ〳〵汝等商人の身を持つて、病人と申し老人を手籠に致す無法者、たゞおかれぬ奴なれども、其分に赦しつかはす、きり〳〵此家を歸り居らう」トきつといふ。米屋「ハイ〳〵歸りまする〳〵、コレ庄七殿、長居したら又どの樣な酷い目にあふも知れねえ」古手屋「イヤモウ投げられても金さへとれば言分はないぢや」お熊「これこなさん達歸るなら、其提灯をかすりに、私も隣の念佛講へ」孫兵衛「エヽ何を汝が後生三昧、八萬地獄へ眞逆さま」お熊「アイサそれは承知さ、鬼の樣な亭主がほしいから」ト三人門口に出かゝる、孫兵衛次郎吉を抱上げて。孫兵衛「これ坊よ、わりやアノほんまに父に會うたか」次郎吉「アイ」孫兵衛「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」お熊「サア行かないか」ト寺の鐘、雙盤になり、孫兵衛次郎吉をつれ奧へ入る、お熊古手屋は下座へ、米屋は向へ提灯消して入る、傳藏こなた屋米屋行きさうにして睨き合ひ、お熊古手屋は下座へ、米屋は向へ提灯消して入る、傳藏こなしあつて物をも言はず、ずつと立つて歸らうとしかゝる。又之丞「アイヤ申しお待ち下され傳藏殿、物をもいはず立出めさるは、すりや拙者奴を誠の盜賊と思召しての事で御座るか」傳藏「イヤ其

「知らぬワイな〳〵」ト孫兵衛思入、お熊次郎吉を引取り。お熊「何とどうで御座りまする、子供は正直なもの、知らぬといひますぞえ、そんなら誰が持つて來ませう、やつぱり盗人は」孫兵衛「オオ俺ぢや、この親仁ぢや」皆々「ヤア」孫兵衛「サア其品々を盗んで來たのは、南無阿彌陀佛〳〵、サア質屋の若い衆、この孫兵衛を縛りなりと括りなりとも、勝手にさつしやれ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」ト思入。お熊「エ、この親父殿は何を言はつしやる」トお熊、古手屋に目配する。古手屋「この盗人は見す〳〵知れた浪人殿、それとも盗人でないならば、四品しめて元利六兩足らず、勘定すれば盗人の」又之丞「惡名脱けるとお云やつても、金輪奈落この金は」古手屋「そんなら此方はやつぱり盗人」又之丞「何しに身共が左樣な事を」お熊「盗人たけ〴〵しいとは此方の事だ」米屋「サア孫兵衛殿、米代はどうするのだ」孫兵衛「今というてはどうも才覺が」古手屋「サア質を請けねば此方は盗人、それとも其金こゝへ出すか」又之丞「サアそれは」米屋「拂はどうする」孫兵衛「サア」皆々「サア〳〵〳〵」兩人「いつその事」ト米屋は孫兵衛、古手屋は又之丞を引捕へ。「これでもか〳〵」ト打すゑる、始終傳藏手を拱み此樣子を聞いてゐて、此時ちつと立つて米屋古手屋を見事に投げる。米屋「アイタヽヽ、此侍は何で此樣に」古手屋「これ盗人の肩を持つのか」ト立かゝるを傳藏懐中より包金を出し、兩人へ投げやる。兩人「アイタヽヽ」古手屋「ヤ

た」トきつとなる。古手屋「ハテ腹をお立なされますな、其盜人といふ譯は、もしコヽこれが慥な證據でござりますぜ」ト布子蒲團搔卷一々に指をさして。「これはみんな私方へ質に取つた代物、マアこの三品は可いが、とてもの事に藥も爰へ出さつしやるが可うござります」又之丞「こりや町人、こゝに身共が古朋輩も聞いて居らるゝに、身に覺なき無實の難題、殊に大外れた盜人などとは、おのれ今一言いうて見やれ赦さぬぞ」ト又之丞脇差を引寄せきつとなり。「こりやこの品々はな、只今も申す通り、此家の悴次郎吉が」お熊「エヽ年端も行かぬあの餓鬼が、そんなら其品を、お前もマア大槩つもりにも、ハヽヽヽ」ト思入あつて奥の方に向ひて。「これお祖父殿、小僧をつれて早う御座らつしやれ〳〵」ト孫兵衞、次郎吉をつれて出來る。孫兵衞「婆ア何を其樣にけたゝましう呼ぶぞい」お熊「呼ばないでどうするものか、ことによると爰の家の者は、殘らず盜人になる詮索で御座るワイの、エヽ何をぐづ〳〵と、其餓鬼を此方へよこさつしやい」ト次郎吉を引つたくり。「コレ小僧、あの搔卷や著物は、汝が持つて來たのか、サア有樣に云へよ」次郎吉「アイあの著物は」トいひさうにするを、お熊白眼む故おろ〳〵して。「知らぬワイなア〳〵」ト又之丞、次郎吉を傍へ引寄せて。又之丞「これ知らぬでは濟まぬ、よい子ぢや有樣に申せ、サどうぢや〳〵」トせり立てられて。次郎吉「アイあの著物は私が」ト言はうとするを又お熊白眼む。

う云はれては猶の事だ、この間からの米代一貫六百文、是非とも今宵勘定して下されい〳〵」お熊「サヽ尤でござりますよ、命を繋ぐ米の代、何を措いても無沙汰にはならぬ譯だが、見さつしやる通りの懸寄人、御病人に似合はぬ一食に、重々盛つて三四膳、それでは米代の溜るも忽ち、無理ではござるまい、親仁殿はあの通りの結構人、嫁も聟もかひしやうなし、櫂の廻らぬ身上に、重荷に小づけの藥三昧」ト又之丞へあてゝいふ科。「ほんに氣の減る程ものが要ります、米屋さん、長くとはいふまい、モウ二月三月待つておくれな」米屋「とんだ事いふぜ、どうして待たれるものか」トこの中古手屋、又之丞が引かけて居る布子、蒲團、搔卷に目をつけて。古手屋「もしちつとお免しなされませ」ト古手屋提灯にてよく〳〵見るこなし。「ヤアこれだこれだ、是に違ねえ、店の符牒もまだ其儘、もしお前樣は此品は何處から持つてお出なされました」又之丞「何處から持つて參つたやら身共も存ぜぬが、親の小兵衛が屆けたと申して、あの次郎吉が持參致したて」古手屋「エヽ左樣ならあの年端も行かぬ次郎吉が、もしまだ此外にソウキセイといふ藥包が參つては居りませぬか」又之丞「イヤこりや〳〵町人、其元の家にソウキセイを所持致し居ると申す事なら、是非とも身共が求めたう御座るが」古手屋「もし〳〵しらをおきりなされまするな。お前は〳〵、見かけによらねえ盗をさつしやりますな」又之丞「なに、ドヽどう致し

になるまでも一軸の詮議、當月二十日迄、何卒粉骨碎身なし、家再興の一義を頼む又之丞殿」又之丞「ハヽア仰せ迄もなく、拙者とても其通り、火急に迫るお歌の會、その一軸を詮議せんにも、斯の如くの難病、是非なく月日を徒らに過すも殘念、口惜しやなア」傳藏「もつとも其樣子では、あゝ心許ない」又之丞「アイヤ氣遣あるな、醫師の申すにはソウキセイと申す良藥、これを服すれば拙者が病、忽ち全快致すとの事、この良藥も此家の伜小兵衞と申す者、心あたり御座るというて、近々手に入りまする筈、お氣遣ひさるな傳藏殿」傳藏「イヤそれを承り安堵、さりながら當月の歌合を師直の方にて勤めなば、鹽冶家はいよ〳〵埋木で御座る、照月の一軸さへ手に入れば、此方にて勤むる會、さすればお家は再興、お喜びあれ又之丞殿」又之丞「天に契ひ地に伏して、當月廿日迄に手に入る事は、其元と此又之丞」傳藏「オヽ龍虎二つに其許と契をなして忠義の魂」又之丞「拙者も貴殿とちかひの金打」傳藏「アヽ尤」ト兩人金打する。〽天に通ぜよ」又之丞「奈落へ響けよ」兩人「無量にちかひて心地よし」ト兩人こなし、かすめたる禪の勤になり、向より以前の古手屋米屋、弓張提灯持ち出て門口へ來り。古手屋「孫兵衞殿、お家に御座るかな」米屋「ハイ御免なさい」ト門口をあける。「此聲を聞き婆お熊奥より出來り」お熊「ハイハイ何方から御座りました」ト兩人を見て。「こなた衆は又碌な事ぢやあるまいなア」米屋「オヽさ

つて來やれ、これ西横町のがよいぞや、そして何ぞ下物も見繕うて」ト傳藏思入あつて。
傳藏「イヤ／＼馳走は無用になされい／＼」お花「何のマア御馳走と申すではござりません、夜分と申し寒さも烈しうござりますれば。ツイ往て參りませう」ト徳利を提げて門口へ出る。
孫兵衛「これ／＼お花や、酒買うて歸りに、一寸法乘院樣へよつて、祖父がお願ひ申しておいた物を下されと、そなた持つて歸つて下され」お花「アイそりや何でござりますえ」トこの中次郎吉居眠をしてゐる。孫兵衛「何であらうと持つて來ればわかる。コレ必ず吃驚せまいぞや」
お花「エヽ何ぢややら氣味の惡い。どりや酒買うてこうか」ト木魚入の合方になり、お花向へ入る、又之丞思入あつて。又之丞「こりや／＼孫兵衛、坊主めが眠たうなつた樣子ぢや、納戸へつれて行て寐さして遣りやれ」孫兵衛「ハイ／＼、ほんに何にも知らず、子供といふものは佛樣ぢや、南無阿彌陀佛／＼、左樣ならば貴方樣、ゆるりとお話なされませ」ト傳藏に會釋して、孫兵衛次郎吉を伴れ思入あり、奥へ入る。傳藏「さて小鹽田氏、身共今宵參つたは餘の儀では御座らぬ、當月下旬にお歌合の御遊興あるよし、さすれば其節迄に照月の一軸手に入らねば、お家再興いよ／＼むづかし、それ故家中に忠義の者、指折り見れば僅か兩三人、賴と思ふ左門殿は横死、まだしも便りは與茂七なれど、これとても行方知れず、貴公と拙者兩人して、かうが舍利

今に父が歸るであらう、大人しうしませうぞや、ほんに賢い奴ではある、お花賞めてやりやいの」お花「ハイ〳〵。これ次郎吉、久振で父さんと一緒にねかするのぢや、嬉しいかや〳〵」又之丞「その子よりも第一そなたが」トお花恥しき思入。「身共も嬉しいワエ、ハヽヽヽ」ト思入、孫兵衛俯いてゐる、向より赤坂傳藏、大小打裂羽織、小提灯を燈し出て來り、門口へ來て。傳藏「頼みませう〳〵」お花「ヤこちの人が歸らしやんしたさうな」トとつかはと門口へ行き、戸を明けて。「小兵衛殿かいな、お前はマア」ト傳藏を見て。「ホヽヽ私とした事が」ト氣の毒なる科。傳藏「ナニ人違かなハヽヽ。イヤナニ女中、ちと物が尋ねたい、孫兵衛殿と申すはこちらかな」お花「左樣で御座りまする、貴方はどれから」傳藏「身共は小鹽田氏に用事あつて參つた者、ちとゆるしやれ」ト內へ入る、又之丞傳藏を見て。又之丞「ヤア貴殿は赤坂傳藏殿」傳藏「小鹽田氏、さて一別以來」又之丞「これは〳〵能うこそ御入來、まづ〳〵これへ」傳藏「然らば御用捨下されい」トよき所へ居る、又之丞膝行り出で。又之丞「先は御堅勝にて」傳藏「貴殿にも御無事で、と申したいが承はれば何か御病氣との事」又之丞「左樣に御座る、鶴膝風とか申す病にて、いまだに歩行が心に任せぬ樣に御座るて」お花「ハイお茶一つ」ト傳藏に茶を差出す。傳藏「イヤイヤ構はつしやるな〳〵」トお花、孫兵衛に呫くと。孫兵衛「オヽよう氣が注いた、一合半取

するか」又之丞「なに身共が偽を申さうぞ、あの小兵衛が屆けたに相違はあるまい」孫兵衛「すりやそれ程迄に御主人様を、忰出來した、南無阿彌陀佛〳〵」お花「オホヽヽヽ、父さんとした事が、何を言はしやんすぞいなア、又さういふ事なら早う戻らしやんすであらう」ト門口を覗いて見たりいろ〳〵するを孫兵衛見て。孫兵衛「もし〳〵若旦那様、ちとおみ足を擦りませうか」又之丞「あいや〳〵今宵は大分こゝろよい、構やるな〳〵」孫兵衛「ハテ御遠慮には及びませぬワイなア」ト又之丞の足を擦る、孫兵衛始終口の中にて念佛を唱ふる思入、靜なる禪の勤になり、向より次郎吉、三布の蒲團を繩にて括り、これを引摺り出て門口へ來り戸を明ける、トお花立つて來り。お花「小兵衛殿、戻らしやんしたかえ」ト次郎吉を見てこなし。「こちの人かと思うたりや次郎吉、そりや何ぢやぞいな」次郎吉「サヽ父さんがこれを旦那様に著せろというて、屆けさつしやつたワイのう」トお花蒲團を見て内へ入り。お花「そんなら是を若旦那様にお著せ申せと、アノ父さんが」孫兵衛「何といふ、それも忰が屆けたといふか」お花「アイ。エヽ何の事ぢやぞいな、年端もいかぬ者に、此樣な重いものを屆けずとも、なぜに主が持つて早う歸つては下さんせぬぞいなア」孫兵衛「南無阿彌。エヘン〳〵〳〵」ト紛らして思入ある。又之丞「やれ〳〵次郎吉大儀であつた、爰へ來やれ褒美取らさう〳〵」ト又之丞傍にある菓子を出して次郎吉にやり。「これ

さぬか」孫兵衛「イエ〳〵雪は降りは致しませぬが、此寒さでは病氣にさはりませうかと、私も大きにお案じ申しまするて」トお花茶碗へ藥をつぎ持つて出る。お花「お藥お上りなされませ」ト又之丞藥を服みながら。又之丞「お花、小兵衛はまだ歸らぬか」お花「モウ彼是一月餘りにもなりまするから、お暇を願うて歸る時分で御座りまする」トこの中孫兵衛は念佛を唱ふるこなし。又之丞「夫小兵衛は日雇奉公、妻のそなたは女の身として夜商ひ、その艱難の生計の中へ、かやうに長々の病氣にてのかゝりう人、それをうたてくも思はず、よう世話してくりやる深切、こりや寐た間も忘却は致さぬ、忝ない〳〵」孫兵衛「何の其お禮に及びませう、この親仁奴はお前の親子樣の御草履取、又悴の小兵衛奴はお前樣の御家來、お邸の騷動から、御家老大星樣はじめ御家中もちり〴〵、畢竟わたくし風情をも御家來と思召せばこそ、たよつてお出なされた若旦那、粗末に致してよいもので御座りませうか」トこの内お花又之丞の布子搔卷に目をつくる科。お花「アモシ若旦那樣、この搔卷や布子はどうして貴方樣、ナア父さん」ト不思議なる思入。孫兵衛「なる程これは夏中。アイヤ誰が持つて參りましたなア」又之丞「こりや最前次郎吉が持つて參つて、寒氣を防ぐ爲、身共に著る樣にというて、あの小兵衛が屆けたと申す事ぢやて」孫兵衛「エヽあの悴小兵衛が」ト思入あつて。「もし若旦那樣、そりやマアほんまの事で御座りま

私が生んだ子を譽めるぢやないが、そりやこなさん達に見せたい歴乎とした侍、それも今は浪人して、ほんに浪人といへばアノ腰抜殿の病人、まだてこねさうにない、あれが眞の穀つぶし」ト障子の内へあてゝいふ。「ドリヤ賣溜の勘定でもしませう」ト合方になり、お熊籠の蓋にある錢を持つて奥へ入る。孫兵衛「なる程、あの婆も年よる程根性が惡うなる、倅も年よつて退去するも外聞がわるさに、捨ておかばよい事にして増長りをる、これお花や、わが身もさぞ疎ましからうが、マヽ辛抱してくりやれ、又仕様もあるぢやあろ」お花「エヽ勿體ない、母さんはかひ〴〵しいお生れ故、私どもや配偶の致しまする事は、お氣に入らぬも尤でござります、それはさうとこちの人が留守の中も、くれ〴〵氣を注けて進ぜいというておかしやんした御病人樣は、今日は少しお快う御座んすかえ」孫兵衛「今すや〳〵寐て御座つたが、どうも渉らぬ御病氣、彼方へ對してもあの婆奴が邪慳故、私は氣の毒で。ほんに藥もよい時分であらうぞや」お花「ハイ〳〵溫めてあげませう」ト七輪へ土瓶をかけて煽いでゐる、と障子の内にて。又之丞「お花は歸りやつたか、孫兵衛殿〳〵」ト呼ぶ故。孫兵衛「ハイ〳〵若旦那樣、お目が覺めましたか」ト合方になり、上の家體の障子を明ける、こゝに小鹽田又之丞病體にて鉢卷、搔卷によりかゝり、木綿布子を肩に引かけてゐる體。又之丞「今宵は大分寒氣が強いが、雪でも散らつきは致

賣つておじやつた、サヽ饑じかろ、茶漬でも喰うたがよい、コレ賣溜は嘸澤山さうな」トこの中お熊籠の中の錢を見て。お花「アイ大方四五百もござりませう」孫兵衛「ヤアそりや大枚の商ひぢや、それで此方も機嫌が直つたであらう、オヽ大儀であつた〳〵」お熊「又この位の商ひせねば、水も呑まれるものではない、何處の牛の骨か馬の頭か知れもせぬ病人を、家へ引ずり込み、大抵物の要る事ではない、これお花、とてもの事に何故みな賣つて御座らぬのぢや」お花「ハイそりや明日の朝の茶漬のおかずに上げうと思ひまして」お熊「ホヽヽ、そりやよう氣が注いた、が費えな事ぢや、コレ次郎吉、お母が野郎かはいて賣殘した卵子を、早う賣つて來い、よい子ぢや一寸行つて來やゝ」ト猫撫聲をして卵子の籠を持たせ、二人に見えぬ様に次郎吉をつめる。次郎吉「ア、痛いワイのう〳〵」孫兵衛「オヽどうしやつた〳〵」次郎吉「ばゝア様が私を抓つた」お花「エヽ此子はよう嘘を、あれ程不斷いとしがつていはしやんすもの、ナニ祖母さんが其様な事を、コレ早う賣つて來やいの」次郎吉「アイ〳〵」ト泣き〳〵門口へ出かける。孫兵衛「エヽ邪慳な、うぬ」お花「アヽもし。サア怪我せぬ様に行つて來やいの」ト思入、次郎吉籠をさげて泣き泣き。治郎吉「たまご〳〵煠卵子」トいひながら向へ入る、合方時の鐘鳴る。お熊「なる程瓜の蔓には茄子のたとへ、其方の亭主ぢやが、あの小兵衛が意氣地のない所に能う似てゐるワイの、

エこなさんが回護ふ故猶腹が立つ、うぬどうして呉れう、エ、小面の憎い」ト蜆籠を持つて撲きかける。孫兵衛「この鬼婆め、何をするのぢや」お熊「うぬどうするか見やァがれ」ト笊を持つて打つてかゝる、孫兵衛止め、トヾ婆お熊と摑合ふ、佃の合方、時の鐘になり、向よりお花は世話なり、手拭を被りて前垂高からげにて、煠卵の籠を提げ出て來て直に内へ入りて。お花「ハイ今歸りました」ト此體を見て二人の間へ入り宥めて。「こりや何事で御座ります、マアマア御了簡なされませ〳〵」ト兩人を宥ある。孫兵衛「オヽ、お花か聞きやれ、この婆奴が又坊主をいぢり居るワイ」お熊「これ〳〵此方のへり出した此餓鬼、不斷わしが可愛がつてやれば可い事にして」孫兵衛「ヤイ〳〵うぬ、この坊主奴を何時可愛がつた、大福餅一つ買つて遣つた事があるか」お花「ハテモウよう御座りまする、マア〳〵御了簡なされませ、これ次郎吉、何をそなたは婆樣の機嫌を損じたのぢや」孫兵衛「また賣溜が多いの少いのというていぢりをるワイの」お熊「これ親仁殿、何も商賣ぢやもの、賣溜の事いはでワイの、こればかりは憎まれても言はにやならぬ、これ〳〵お花も今宵は何程ほど商ひしやつた」お花「ハイまだ勘定は致しませぬが、一寸御覽じて下さりませ」ト卵子の籠をお熊の前に差出す、お熊籠のなかを見て科あつて。お熊「こりやまだ賣きらずに歸つて來やつたの」お花「ハイたつた三個餘りました」孫兵衛「オヽよう

への門口、下座の方同じく誂への黒板塀あり、こゝに孫兵衛女房お熊悪婆アにて、蜆籠より錢を出し數へてゐる、親仁孫兵衛子役をかばうて捨白、合方彈流し禪の勤にて道具納まる。

お熊「これこの態は何だ、今日一日かついで歩いて、賣溜はこれ許か、大方錢をばくすねをつたであらう、サア爰へ出せ」孫兵衛「これ婆ア殿、可愛さうに子供を其樣に言はぬがよい、シテ賣溜は何程ある」お熊「これ見さつしやれ、こればかりぢや」ト百二三十つないだ錢ほり出す、孫兵衛見て。孫兵衛「ハテ五つや六つの子供の商ひ、夫程あれば可いではないか、これ坊や泣くな〳〵、オヽよく稼いだ、坊はよい子ぢやぞ」お熊「エヽこなさんが其樣にあまやかすに依つて、商ひに出ても錢をくすねて買食ばかりしをる、錢を何處へ隱した、出しをらぬか、この餓鬼は出しをらぬかやい」ト孫の次郎吉をつめる。次郎吉「どこへも隱しは致しませぬ、婆さま堪忍ぢや〳〵」ト泣きねぶる。孫兵衛「これはしたり可愛さうに、どうしたものぢや」お熊「此方はそんな結構人だに依つて、世間で佛孫兵衛といひまするワ、其子も同じ代物故、あの小兵衛も、俺は身腹痛めぬ子の爲かして、一倍間ぬけに思はれます、其奴が產へた餓鬼だによつて、うす馬鹿の筋をひかぬ樣に、根性を叩き直さにやならぬ、エヽ退かつしやれ」孫兵衛「ヤイ汝は年端も行かぬ者を、常住ぶち打擲、モウ〳〵手荒き事は俺がさゝぬ、指でもさいたら聞く事ぢやないぞ」お熊「エ

下座の門内へ忍ぶ、お袖思入あり、ト與茂七奥より出て。與茂七「お袖、主人の直助は何處へ參つた」お袖「たしかに脱れぬ用事とやらで」與茂七「他行なしたか、それは幸ひ、歸りを待受けたつた一討、さうぢや」トつか〳〵と門口の方へ行くを、お袖とめて。お袖「もし待たしやんせ、あの直助も以前は武士、殊に常から剛氣もの、大事を抱へしお前の身に、もしもの過ある時は、古主へ不忠になりませうが」與茂七「その心配もさる事ながら、今も奥にていふ通り、大切なる印鑑を彼奴に拾はれ、大事を知つたる上からは、所詮生けてはおかれぬ奴」お袖「さう思はしやんすなら、爲やう模樣は。ナモシ」ト囁く、與茂七呑込んだる科にて。與茂七「ム、すりやいよ〳〵汝が手引して、直助を討たすとな」お袖「わしが親も鹽冶の御家來なりや、私が爲にもやつぱり御主人、お爲にならぬ直助どの、殺す手引も御奉公」與茂七「出かしたお袖、シテ又相圖は」お袖「サア戻らしやんしたら、何かなしに寐酒を侑めて、正體なき折を窺ひ」與茂七「あかりを消すを相圖と定め」お袖「枕に立てし屛風ごし」與茂七「忍びよつてたつた一突」お袖「これ必ず」與茂七「相圖を」お袖「ちがへぬ樣に」與茂七「がつてんぢや」ト勇むを。お袖「これ申し」ト抑へる、兩人よろしく、時の鐘にて此模樣見得よく、道具かへし。

本舞臺三間の間平舞臺、向ふ鼠壁、眞中暖簾口、上の方折返しの一間、反古張障子家體、下の方誂

かしの御亭主」與茂七「今の御亭主」お袖「これもし」ト思入。與茂七「今宵はさぞかし」直助「ヤア」
與茂七「お喧しうござりませう」トよろしく科、唄になり與茂七お袖奥へ入る、直助跡に殘り科あつて。直助「ハテ面妖な、いつぞや淺草田甫で、ばらしてのけたと思つた與茂七、生きて居るのも不思議の一つ、そんならあの時殺したは、どいつで有つたか、よく／＼運の盡きた奴、それはともあれ彼奴か欲しがる印鑑を、師直の屋敷へ持參し、恩賞受けた其上で、厄病神で戀の敵の與茂七奴を。イヤ／＼それより寧そ手短に、此家のうちでぐつさりと」ト思入あつて、有合ふ出刃を持つて奥へ行かうとする、この時お袖出てゝ お袖「マア／＼待たしやんせこちの人」
直助「そんならわりや今の樣子を」お直「モシ與茂七殿も以前は武士、もしお前に怪我が有つては、誰を力に姉の敵」直助「ハヽヽ、お爲ごかしに文なして、以前の男の與茂七を、かばひ立する詞のはし／＼」お袖「エヽモウ男の癖にまはり氣な、一旦お前に大事を賴み、枕交はした上からは、金輪奈落お前と夫婦、モシ與茂七殿を殺す手引はこれ」ト囁く。直助「そんなら其方が、與茂七を酒に醉はして、此所へ」お袖「屏風を引いて寐入ばな」直助「相圖はおぬしが行燈の」お袖「あかりを消す折忍び寄り」直助「あの與茂七をたつた一突」お袖「もし」ト思入。直助「必ず相圖を」
お袖「ちがへぬ樣に」直助「がつてんだ」ト直助うなづく、時の鐘合方になり、直助こなしあつて

を強くずつかりと、女房を呉れとはよく言はれた、その大丈夫な氣性に免じて、この女進上せまいものでもないが、只はやられぬ望がある」直助「望といふは古風なお仕著、大概知れた紋切形、女の手切は金ところんで」與茂七「イヽヤ望といふは金ではない、場所は沙島六ぱ島、隱亡堀の闇の夜に、なかぬ烏の挑み合、其時思はず失ひし、小間物仲間の符牒の印鑑、拾つた人は此なさんと、目かどのついた道具から、女房と其品かへ〴〵に」直助「ハテ變つたものと女を引替、しかし此方は素人で、小間物仲間の符牒は知らぬが、無ければならぬ印鑑とは、この直助が白眼んでおいた」與茂七「そんならいよ〳〵こなさんが」直助「拾つて持つて居るならば、握つてゐても益ない反故、返して遣りたいものなれど、拾はぬものは是非がない、外を探すがマア近道でござりやせう」與茂七「なる程、こなたもなか〳〵以つて、一筋繩ではほぐれぬ氣性、しかし言立する時はみす〳〵知れた密夫直助、以前の身ならば女敵討、又町人なら便により、耳鼻そぐか金銀を、強請つて取るもまゝある習ひ、その兩端に拘らず、只管望むは其書物、渡さぬうちは外へは決して、此家の家にゐるじかつて」直助「顋をつらすが承知なら、そりや此方の勝手次第に」與茂七「一人の女房に二人の男」直助「ハテなア、札はどちらへ落ちるであらう」お袖「もし何事もわたしが胸に一」直助「表から見えぬ人心」與茂七「鏡に映つるものならば」お袖「さぞ耻かしい」直助「む

枕は、則ちこの品だ」ト合力になり、與茂七持來りし前幕の鰻鉤を出す、直助見て思入あり。
直助「ヤアこりやこれ日外や六ぱ島、隱亡堀で失つた」與茂七「そんならそれはこなさんの」直助「商賣道具」與茂七「其柄にしつかり直助と、あり〱と彫附けあるからは、そんなら此方の今の名は」
直助「以前はさるお邸で中間奉公、中頃は歯磨賣の直助も、今は深川三角屋敷、寺門前の貸家住ひ、店で商ふ代物は、三文花に線香の、煙も細き小商人、後生の種は賣りながら、片手仕事に殺生の、漁をふせたり沙村の、隱亡堀で鰻かき、ぬらりくらりと世を渡る、今の其名も直助權兵衛といふ、金箔のついた貧乏人だ」與茂七「そんなら此方は御家の御亭主、シテ又お袖は何故ここに」直助「此女かえ、こりや儕が女房だワナ」與茂七「ヤア」お袖「アヽもしそれをいうては」ト思入。直助「可いワイ、以前の亭主に在所を知られ、何日の何時まで其樣に、しらをきつても居られまい、與茂七殿とやら、此女は儕が嚊アさ」與茂七「そりやはや一旦この與茂七、夫婦わかれをした女、再縁するは往々あるならひ、併し未だに去狀は渡さぬからは妻女のお袖、たが許して再縁したのだ」お袖「サアさう言はしやんすも有理、譯を咄せば長い事、父さん初めお前まで、人手にかゝつて」直助「ヤイ〱今となつて百萬だら、言譯する程罪が深い、未練ないはずと此女は、儕に下さい貰ひましよ」ト直助思入、與茂七こなし。與茂七「なる程こなたも横車、おしで

助を見てこなしあつて又氣を變へ。「よう達者で居て下さんしたなア」ト思入、直助こなし有つて。直助「そんなら日外や大川端で、ばつさりやつたと思うたは」與茂七「ヤア」直助「いつも達者でおめでたう御座りやす」ト與茂七直助をよく〳〵見て。與茂七「こなたは淺草にて出會うたる、齒磨賣の直助殿、ハテ變つた所に。コレお袖、こゝは手前の家か」お袖「サアマアそんなものぢやワイなア」與茂七「シテ此人は何で今時分に來てゐるのぢや」お袖「サアあの人はなア」ト思入あつて、其處にある宅悦が置いて行きし足力の杖を取つて見せ。「オ、それ〳〵按摩ぢやワイなア」直助「ナニ俺を按摩だ」お袖「按摩ぢや〳〵、もし按摩さんになつたな。按摩さんぢやワイなア」與茂七「ハア、齒磨賣が按摩と化けたか」直助「さうさ、齒磨賣が按摩と化けるは、雷門のとんだり跳ねたりだ、以前は鹽冶の御家中も、小間物賣や袖乞と」與茂七「どうしましたえ」直助「イヤ世の中といふものは様々なものだ」與茂七「ハテ思がけなく女房の家へ尋ねあたつて俺も安堵、その上按摩まで呼んでくれるといふは、ハテ氣のついた。コレ按摩さん、一療治やつて貰はうか」直助「そんならとう〳〵按摩にするのか、これわつちやア足力療治で、無性矢鱈に踏んで〳〵踏みこくるが、それ承知なら療治さつしやるが可い」與茂七「その荒療治が此方の望み、併し足力の道具は俺が貸してやりませう」直助「こりや珍しい、そんなら道具を」與茂七「わしが持參の足力の

うに騒ぎ立てる。與茂七「何だか無性に幽靈〳〵といふが、俺が目にはさつぱり見えない、これ幽靈どん〳〵、何處にゐるのだ〳〵」直助「エヽ幽靈たけ〴〵しいとは此方の事だ」與茂七「ナニわしが幽靈だ、そりやア人違だ、わしやアそんな者ではない、マア何にしろ爰を明けて下さりませ」直助「イヤ〳〵滅多に明ける事はならぬ、幽靈に近附はないぞ〳〵」與茂七「これはしたり、一寸お目にかゝりたい事が御座ります、マア門の戸を明けて貰ひませう」ト此聲を聞いてお袖こなしあり。お袖「もし今の物言はしやんしたは、以前の夫與茂七殿によう似た聲色」直助「サアそれだに依つて幽靈だといふのだ」與茂七「もし幽靈か幽靈でないかはお目に懸れば分ります、マア〳〵爰を明けて、正體を見さつしやるがよい」ト是にてお袖直助を引退けて門口を明け、與茂七をよく〳〵ながめる思入あつて。お袖「ヤア お前はほんに與茂七殿ぢや〳〵」ト與茂七を篤と見て嬉ぶこなし、與茂七もお袖を篤と見て。與茂七「お袖か、これお主が在所を一ぺんと探したが、變つた所でハテ面妖な」お袖「エヽ私よりお前が面妖な、そんならきつと幽靈ぢや御座んせぬな、サア〳〵此方へ入らしやんせいな〳〵」ト與茂七を内へ入れ、いろ〳〵科あり。「ほんに幽靈ぢやない、正眞正當、寸分違はぬ與茂七樣ぢや〳〵、わたしやお前が人手にかゝつて、死なしやんしたと思うた故、エヽ今一足早う來て下さんしたら可かつたに、わたしや面目ない」ト直

消える、與茂七よろしく思入あつて。「扨も不思議な、ハテなア」ト科あつて門口を叩き。「申しお頼み申します〳〵」ト此聲に直助屏風を少しあけ、からだを出して。直助「オイ〳〵誰だ誰だ」與茂七「どうぞ線香を一把賣つて下さりませ」直助「アヽお氣の毒だが、線香は切ものでござります」與茂七「そんなら爰にある樒を賣つて下さりませ」直助「樒かえ、そりや滅法に高い、一本で百より安くはまからない、そしてそりや賣つてある花だ、外へ行て買はしやるがよい」ト又屏風を引立て寐る。與茂七「まだ日が暮れて間もないに、怪しからぬ早く寐たワエ、アヽこれどうぞ」トそこらを見て小兵衛の衣服を見て、よし〳〵といふ思入あり。「申し〳〵外に干してある洗濯物を、盗人がもつて行きます、あれ〳〵盗人を洗濯物が持て行くワ〳〵」トこなしにていふ、是にて直助とつかは起きて、三尺帶をしめながら門口明けて。直助「さつぱり忘れて寐て終つた、お前よく氣をつけて下さりやした」ト洗濯物を持つて内へ入らうとして與茂七を見て。「ヤア此方は慥かに」ト思入あつて。「ヤヽ幽靈だ〳〵〳〵」トとつかは内へ入る、門口をしめて戸を抑へて震うてゐる思入。與茂七「ナニ幽靈が何處に〳〵」トうろ〳〵探すこなし。直助「これ幽靈が來たワ〳〵」ト此聲にお袖も起きて來り、直助に縋りつき。お袖「エヽ氣味の惡い、何處に幽靈が居るぞいなア」直助「これ近所の衆、幽靈が出て來た、皆來て下され〳〵」トむしや

い床急ぎ、サア〳〵寐よう」ト お袖押入より蒲團枕を出しよき所へしく、直助二重より古き六枚屏風を持來り枕下へおき、門口を閉め思入あり。「サア嬶、寐ないか」お袖「アイ、わたしや最そつと夜業せうワイなア」直助「そんなら勝手にするが可い、俺も有様は赤の他人が勝手だよ」お袖「エヽモウ寐る事は寐るけれどなア」ト 思入あつて、佛壇へ手を合して拜むを見て。直助「これ今に敵を討たしてやるワサ」ト お袖が手を取るこなし、唄になりお袖思入あつて、直助に手を引かれ床の上へ上り、暫くあつて屏風を引廻す、此時向より與茂七好みの形にて一腰さし、前幕の鱣鉤を持つて出て來り、花道よき所にて思入あり。與茂七「いつぞや圖らす大切なる印鑑を失ひし其時手に入る此品に、あり〳〵名前の彫附けし、直助といふ者こそ、法乘院の門前にて、香花商ふ家なりと聞出せしが詮議の手がかり、主人に逢うて印鑑の有無を糺した其上にて、すべに依つたら蟻の穴、つゝむ大事にやかへられぬ、不便ながらも。何はともあれ、此持主に逢うた上、ムヽさうぢや」ト 思入あつて舞臺の方へ來かゝる、誂への合方、うすどろ〳〵になり、門口の所にほしてある小兵衛の著物の裾に燒酎火もえて、誂への蛇まとふ、與茂七これにきつと目をつけ科。「ヤアー陰火と共に、蛇のあれなる衣類につき纏ふは、ムヽ非業の最期に世を去りし、正しく死靈の」ト 思入ありて、つか〳〵と舞臺へ來ると、どろ〳〵打上げる、蛇も陰火も

は、酒でも飲まずば立ちきれまい、咄を聞いては此胸が、いはゞ他人の俺でさへ」お袖「イエイエお前を他人にせまい爲、女子の方からさした盃」直助「ヤア」お袖「申しモウ祝言は濟んだぞえ。親と夫の百ヶ日、今日が過ぐれば今宵から、約束通りお前と女夫に」直助「そんならお主は帯紐解いて」お袖「アイ」トよろしく科あり。直助「イヤそりや惡からう、俺もお主に有樣は、のろけきつた心から、女房になつたら力にならうと、約束はしたものゝ、よく〳〵思つて見る時は、草葉の蔭の與茂七へ、それでは其方が」お袖「操を破つて操を立つる私が心、もし其樣な事をすてゝおいて」ト又お袖酒をつぎ飲んで、又直助へ觴をさし。「マア一つ飲ましやんせぬか」直助「酒ならいくらでもお辭儀なしだ」トお袖又酌する、直助飲み少し醉うたる心にてお袖にしなだれかゝり。「成る程氣がもめるも無理ではない、たつた一人の姉さんがひよんな」お袖「サそれぢやに依つてどうぞ力に」直助「そんならいよ〳〵直助と、夫婦になつた其上で」お袖「一人ならず二人三人、討たねばならぬ仇がたき」直助「助太刀しよう」お袖「エヽ」直助「ぶつて遣らうよ」お袖「エヽすりやあの眞實に討つて下さんすか」直助「女房になるか」お袖「アイ、必ず見捨てゝ下さんすなえ」直助「とう〳〵首尾よく」お袖「エヽ」直助「イヤサ首尾よく敵を」ト脇の方へ向き舌を出したり思入あり。「アヽ素敵に醉うた」お袖「そんならモウ寐やしやんせぬかえ」直助「あり難

こまぐ便にと、思うて居たに今の噂、父さんと姉さんまで、非業にお果てなさるといふは、もし私しやどうせうぞいなァく」ト大泣、直助こなしあつて。直助「かういふ話を聞かう端か、種々様々な今日の事、これ此櫛も俺が拾うて來て、思はずおぬしが手へ渡るも、死んだ姉御が一念の」お袖「わたしに屆けて下さんしたのか、それ程迄に姉さんの、妹を思うて下さんす記念のこの櫛、今は仇なれ姉聟の」直助「その伊右衛門も武士の浪人、舅左門の仇敵、討たねばならぬ身を持つて、却つて其身が敵となれば、これ親の敵姉の仇、討つべきものは其方ひとり、何をいふにもか弱い女、エヽこれ直助も、つながる縁もあるならば、安穏に敵をば、さぞ左門殿も草葉のかげで、口惜しからう無念にあらう」ト直助こなしある。お袖「いかにか弱き女子ぢやとて、何面目に仇敵を」ト思入ある。直助「そんなら其方は、親左門殿、姉のお岩に夫の與茂七、この三人の敵をば、見事女の身一つで、その仇敵は覺束ない、俺も以前は武士奉公、二人や三人相手にも、しかぬ手ぶしは持ちながら、あかの他人で酔興らしく助太刀も、エヽこれ腕がむづくするになァ」ト合方かはつてお袖思入あつて、徳利と猪口を持ち來り、直助が傍へおき、手酌にて一口飲んで直助の前におき。お袖「サア一つ飲んで下さんせ」直助「これは御馳走、そんなら一つ注いで貰はう」トお袖酌する、直助一ぱい引受け飲んで。「なる程、女の狹い心で

程でもお前から詳しう聞かねばならぬ、サア姉さんをどの樣に慘う殺したのぢや、サ、もつと言うて聞かして下さんせ」宅悦「イエサわしやそんなに詳しくは」ト持あましたる科にて段々門口の方へ出る、お袖纒うてくる。「これは又迷惑な、有樣は私も人の咄で聞いたが、何にしてもお力おとしで御座りやす、私はモウお暇申しやす」お袖「イエ〳〵もつと聞きたい事が御座んす、何卒いうて聞かして」ト宅悦の袖を捉へる。宅悦「これはしたり、私は今夜は、大事の得意の御隱居を療治せねばならぬ、マアこゝを」お袖「イエ〳〵詳しう聞かぬ其中は、何ほうでも放す事は」直助「これお袖、可愛さうに歸してやるがよい、大體譯は分つてゐるワさ」宅悦「左樣さ、いくら喋つてもこんなものさ、やれ〳〵氣の毒な」ト花道の方へこそ〳〵と行きかけるを、直助呼んで。直助「これ〳〵療治代を持つて行かないか」宅悦「なる程肝心のものを」ト歸りさうにして。「イヤこゝが按摩の辛抱所だ」直助「これさ〳〵、足力の杖があるよ」宅悦「これも按摩の辛抱どころだ」直助「これさ道具が無くつては商賣が出來まいが」宅悦「それも按摩の辛抱どころだ」ト木魚の音合方になり、宅悦足ばやに向へ入る、直助思入あり。直助「これお袖、俺も始めて聞いたが、扨々とんだ事になつたなア」ト思入、お袖途方にくれし科にて。お袖「思ひがけない姉さんの、刃に罹つてはかない御最期、さういふ事とは露知らず、明日は是なる櫛を添へ、文を

宅悦「エヽヽ」ト宅悦悔りしてこける、お袖宅悦を捉へて。お袖「もしそりやマァ誠でござんすか、眞の事かいなァ〳〵」宅悦「サアほんの事は事だが、私は又そんな緣のある事とは知らず、うか〳〵とんだ咄を仕出して」お袖「イエ〳〵よう言うて下さんした、シテマァ姉樣には何の科があつて其樣な、どうぞ詳しい話をいうて聞かして下さりませ」宅悦「サわしも其一件には關係で。イヤ〳〵かゝより合だといふ譯ではない故、詳しい譯は知らないが、早くいふと亭主の伊右衛門殿が、そのお岩樣に厭が來て、外の女を女房にせうとしたのを、少しやきかけたから起つた騷動といふ話さ、それから其伊右衛門といふ人は、氣が違つたか、自暴になつたか、其外に二三人も人を殺し、影をかくしたが、イヤモ思出すもぞつとする程恐ろしい事が。イヤ又其筈の事ぢや、さして科もないお岩殿、それは〳〵慘い殺しやう、イヤ〳〵此話はやめにせう、何だか目先へ死骸がちら〳〵ちらついて、何にしても其民谷伊右衛門殿といふ男は強惡な侍さ」ト直助こなし、お袖口惜しき思入あつて。お袖「チエヽ如何に夫のかうけぢやとて、科もない姉さんを、その樣に慘たらしう殺すといふは、私が爲にも姉さんの敵、その伊右衛門殿の在所、いうて聞かして下さんせ、モシ教へて下さんせ〳〵」ト宅悦をいろ〳〵振まはす。宅悦「ア、これさ是さ、どうして私がそれを知るものか、こりやマァひよんな咄を仕出して」お袖「イエ〳〵何

い」宅悦「それでもお前、昨日あたり結つた頭を」直助「ナニ廿八文の出入だ」宅悦「イヤそれでも、お袖さん、一寸櫛を貸しなさい」お袖「そんなら待ちなさんせ、黄楊の櫛を取つて來て」宅悦「お前の頭にそれ程さしてゐるでないか」お袖「この櫛で頭を掻いては耐らぬけれど」ト櫛を抜いて渡す、宅悦取つて見て。宅悦「ハア此櫛はどうか見た樣な櫛だが。ト思入あつて。「さうだ〳〵思出した、此櫛について飛んだ咄が」トいはうとするを、直助いふなといふ科、お袖はこれを知らず。お袖「エヽ飛んだ咄とはどの樣な事ぢやえ」宅悦「イヤサ。一體その櫛は、お前何處から買うてさして居なさるか知らないが、そりやァ山の手の四谷町で、民谷伊右衛門といふ浪人の女房、お岩殿といふ女のさしてゐた櫛であつたが」直助「コレ此方くはしい事を知つて居るの」宅悦「知らないでさ、あの邊にゐた。イヤ療治場ぢや」お袖「そしてもし其お岩さんといふ女中は、どうぞさしやんしたかえ」宅悦「どうした段か、イヤ大騒動で御座りやした」お袖「エヽそりやマアどうした譯で」宅悦「もし世の中に怖いものといふは、やきもち深い女と人斬庖丁をさして居るお侍さ、その民谷伊右衛門といふ侍の女房、お岩といふ女が、大の悋氣から起つて亭主に殺されやした」お袖「エヽヽ」ト吃驚する。直助「こりやお袖や、そりや大變だぜ」宅悦「ハヽアそんならお前方、所緣でも御座るかな」直助「所緣どころか、そのお岩殿といふは此お袖が姉よ」

テ」直助「お坊も左右尻がすわらない様子だな」お袖「あんまり色事をかせがしやんすからの事よ」宅悦「ナニかせがせもせぬくせに、イヤ又お前となら、夜晝寐ずにかせぎたいね、イヤ此様な事をいつて、七兩二分になつてはならぬハヽヽヽ、時に療治をなされやすか」直助「折角呼込んだものを、唯もかへされまい、雑とやらかして貰ひやせうか、どうぞ強くやらかしてくんな、賴みやす」トやはり四つ竹の合方にて、宅悦捨白いひながら、直助の肩を揉みにかゝる、お袖はやはりつゞくり物をしてゐる。宅悦「イヤもし大川端の騒動は、誠に珍事ちうような事で御座りやしたぢや御座りませぬか、一體あの一件は」トいはんとするを。直助「アヽこれ〱、其話は爰では御免だ、レコがふさぐよ」とお袖へ思入、いふなといふ科するを宅悦呑込み。宅悦「ハアア彼の話は爰では禁句かな、しかしお前方が斯うして夫婦になつてゐるといふのも、仲人は人知れず俺がしたのだ、何にも今夜はしつかり御馳走に預りやせうよ」直助「ナニ夫婦といふはほんの名ばかり、まだ俺ア女房の味をしらない」宅悦「嘘をいふぜ、もし御亭主があの様な事をいはつしやるが、眞の事かえ」お袖「オホヽヽヽ眞の事ぢやワイなア」宅悦「イヤモウ惘れるワ、なる程似たもの夫婦とは、よく言つたものだ、二人ながら閻魔様の前へは行かれぬワエ」トこの様な事いひながら、直助の頭を揉みにかゝる。直助「コレ按摩さん、思ふさま頭を掻いて貰ひた

袖よろこぶこなし、直助始終盥の方へ目をつける思入。直助「こいつはけぶだワエ」ト四つ竹の合方、木魚の音になり、下座の方より宅悦頭巾を被り、前幕の按摩のこしらへにて出て來り、杖を突き笛を吹きて、門口を打通りに、花道よき所まで行きかける、ト直助。直助「オイ〳〵按摩さん〳〵」ト是にて宅悦取つて返し門口へ來て。宅悦「ハイお呼びなされましたかな」直助「オツト此方だ、入らつしやい」宅悦「ハイ〳〵御免なされませ」ト内へ入つて頭巾を脱ぐ。直助「アア足力だな、こいつ奇妙だワエ、そして按摩さん、お前見えるな」宅悦「ハイ左樣でござります」ト行燈の火影にて、宅悦直助をつく〴〵と見て。「ヤアこなさんは慥に何時やら淺草の前で逢うた、齒磨賣の直助殿ぢや御座らぬか」直助「道理で聞いた樣な聲ぢやと思うたが、其時の灸點屋だな、イヤ此奴はとんだ人を呼込んだワエ」ト此時お袖宅悦を見て。お袖「ヤアお前は宅悦樣、どうして爰らへ」宅悦「ヤお袖さんか、俺よりお前はどうして爰に、ハアそんならとう〳〵此お人を御亭主に持つたのか、蓼喰ふ蟲もすき〴〵だな」ト直助の方を見ていふ、直助むつとする、こなし有つて氣をかへて。直助「これは〳〵御挨拶だ、時にまだこなた淺草に居るか」宅悦「イヤちつと彼の邊には居難い事があつて、この頃まで本所の方へ行つて居りやした」お袖「もし本所はどの邊に居やしやんしたえ」宅悦「四谷町の近所にさ、よう〳〵一月ばかりか居ませぬ

ら、手前の手に渡るといふもの、さうでないと水の底で腐つて終ふ代物だ、コレもうぢ〳〵してゐる中、米屋の野郎が來ると煩い、野暮をいはずと貸して下つし」お袖「なる程、思うて見ればいはしやんす通り、お前が見つけさしやんしたらこそ姉樣の仕合、其上榮耀に遣ふといふではなし、細い生計の煙の代、姉さん、ちつとの間貸して下さんせえ」一寸櫛を戴く科。「サア持つて行かしやんせいなア」直助「そんなら聞分けて貸してくれるか」ト盥を眞中にしてお袖は上の方、直助は下の方、及び腰に直助櫛を受取り、矢張り右の合方、この時うすどろ〳〵になり燒酎火もえる、ト盥に漬けてある著物の袖より、誂への細く長き忌らしき手、すつと出て直助が櫛を持つてゐる袂を引く、ト直助吃驚して身體すくばる科、この拍子に櫛を盥の中へ落す、右の手を引込む、直助吐息をつきながら。「エ、不氣味な」お袖「これ何をお前は其樣に仰山な、櫛はどうしたのぢやえ」ト右の模樣、お袖が目にはさつぱり見えぬ思入。直助「櫛か、櫛は盥の中へ、ア、そんなら手前は今のを見ないか」お袖「そりや何を」直助「テモ怖ろしい」お袖「エ、」直助「いやサよい所へ隕した故、櫛に別條がないといふ事」ト此中お袖櫛を盥より取上げ、前垂で拭き。お袖「よい所へ隕ちた故」ト櫛を透して見たりいろ〳〵科あり。直助「米屋はどうともするから、マア其櫛は手前に預けておくよ」お袖「アイ〳〵そんならさうして下さんせ」トお

い、死んだ亭主へ義理を立てゝ、斯うして居ても夫婦といふはほんの名ばかり、コレおらア毎晩變な心持になるよ」お袖「エヽお前も私が願の叶ふ迄は、其の約束ぢやござんせぬか」直助「オットあやまつた、のろい奴だがどうなりとお心次第。時に御新造さん、私めは甚だ空腹、どうぞ夕飯を一膳お願ひ申しやす」お袖「ほんに夕飯前でござんす、そんなら拵へて來てあげる程に、必ず此櫛どこへも遣つて下さんすなえ」直助「ハイ〳〵畏りました」ト少しおどけていふ、お袖思入あつて。お袖「エヽ何ぢやぞいなア、ホヽヽヽどりや飯の支度せうか」ト凄き合方、一つ鉦になり、お袖暖簾口へ入る、直助殘り科あつて。直助「姉の櫛であらうが、お母の櫛であらうが、俺が手に渡つては安穩におくものか、こいつ質におかうよりは、寧その事大家の妻さんに」ト直助いろ〳〵科ある、此時奥よりお袖膳ごしらへして持つて出る。「モウ膳を持つて來たのか、これ酒の買うたのはあるか」お袖「アイ酒も取つておいたワイなア」直助「そんなら熱く燗をして來てくんな」お袖「それに如才があらうかいなア」ト德利を見せながら、落ちてある櫛を見て取上げて。「エヽあれ程姉さんが大事がらしやんす櫛ぢやといふに、此樣に捨てゝおかしやんして、ほんに男といふものは、モシこりや私が預つておくぞえ」直助「何にも借取りにするといふではあるまいし、明日は直に持たしてやるが可い、畢竟おれが鰻鉤へ引かゝつたか

今一枚の褞袍は、大家が立催促に飛んでしまふし。オットあるぞ〳〵、天道人を殺さず、いつやら斯ういふ物を拾つた」ト叺煙草入の中より前幕の櫛を出し。「コレお袖、この櫛は幾許位かすであらう」トお袖何心なく取上げ見て、思入あつて。お袖「もし此櫛は何處で拾はしやんした」直助「オヽ二三日前に、猿子嶋の橋の下で、鰻鉤へ引かゝつて上つたが、手前見おぼえでもある櫛か」お袖「ある段かいなア、この櫛は私が姉様お岩さん、母さんの記念ぢやというて、大抵や大方大事にしなさんした事ぢやござんせぬ、その上行々は私に譲つて下さんす約束、それがどうして川の中に、それにまだ不思議なは、最前庄七さんが洗うてくれいと頼ましやんした此著物、姉様が夏中著てゐやしやんした單物に、寸分ちがひは御座んせぬワイなア」直助「これ〳〵手前もよつぽど馬鹿な事をいふものだ、著物の模樣や櫛の恰好は、世間には同じ物は幾許もあるワさ」お袖「イエ〳〵著物はともあれ、この櫛ばかりはそれに違は御座んせぬ、明日お隣の伯父なと頼んで、四谷町まで屆けねば、私が心が濟みませぬワイなア」直助「エエ愚癡な事ばかり、手前が貰ふ約束の櫛だといふではないか、そんなら其の樣な無駄な事をせずとも、直に手前の物にしておくが可いでないか」お袖「イエ〳〵實の兄弟ならよけれど、義理ある姉さんの物故に」直助「なる程、馬鹿律義な事を言つたものだ、今時の女には似合はな

私が身の上、まだ其上に枕こそ交さね、今の直助殿を夫に持ちしも、何卒お二人の仇敵。モシ勘忍して下さりませ」トいろ〱科あつて。「ア、モウ日が暮れるに、庄七様に頼まれた洗濯物」ト門口の盥を内へ持つて入り、手桶の本水を入れ。「コリヤかうしておいて、明日の朝の事」ト竿にかけてある著物をさぐり見て。「此著物はまだ少しかわかぬ、コリヤもそつと斯うしておいて、どりやお御燈明でもあげうか」ト四ツ竹節の合方、木魚の音して、お袖佛壇へ燈をつけ行燈を點す、此時分上の柾垣の奥の卵塔場へ、白張りの提灯にあかりを點けて立てる、この明にて向より直助、前幕の役、川魚をとり、道具と籠を二つ三つ提げて出て來り、門口にて。
直助「これ日が暮れてあるに、乾物が取込まずにある」トいひ〱内へ入りそこらを見て。「何だこの盥の中にも洗濯物があるな、イヤ大さう稼ぐな、それに引かへ俺ア今日はあぶれて來た」
お袖「あぶれたとはえ」直助「サア聞きや、横川へ三つ四つどを伏せておいたに、めそつこにもお目にかゝらねえ」お袖「其様な事もよう御座んせう、モウ餘り物の命を取る事は、よしにして下さんせ」直助「馬鹿な事をいふな、鰻かきが殺生を罷めては、顋をつるして居ないけりやならい、コウ顋をつらすで思出した、米屋はどうした」お袖「最前持つて來る事は來たけれど、後刻までと旁々いうて去んでもらうたワイなナ」直助「それ見た事か、早速にお差支だ、かうつとたつた

ば、此子の母親で御座ります、マア聞いて下され、それは〳〵かひ〴〵しい生れ、若い身の上で、正月の薺から初めて、嫁菜蒲公英菠薐草、又は枝豆ゆで卵、あるとあらゆる出商、其艱難の中から、舅の儕們を孝行にしてくれまするて」お袖「それはマア奇特なお方で御座んすなア」孫兵衛「ハヽヽ、年がよれば愚癡になり此樣なお咄、お恥しうござりまする、アヽモウ日が暮れるさうな、どりやお暇致しませう」お袖「そんならモウお歸りなさんすか、又お寺參の次手には、休んでお出なされませ」孫兵衛「ほんに袖の振あはせも他生の縁、有り難うござります」ト門口へ出て。「サア次郎吉よ、行かうかい」お袖「ほんに父さんも待つてぢやあらう、早う歸つて、父さんに何ぞ買うて貰はしやんせ」次郎吉「これ祖父さん、父さんによい物買うて貰うて下されや」孫兵衛「南無阿彌陀佛〳〵。ハヽヽ、年よれば何かにつけの涙脆うて、サア次郎よ、祖父と一緒に、これは大きに御厄介で御座りました」お袖「ハイようお出なされました、又必ず」孫兵衛「ハイハイお邪魔さまいたしました、どれ參りませう」ト唄、入相の鐘なる、子役をつれて孫兵衛向へ入る、お袖跡見送り科あつて。お袖「ほんに彼のお人も年よつて、何ぢややら多う物案じのある樣子、とかく苦勞の娑婆世界、待たぬ月日は早いもの、今日は義理ある父さん、許嫁の夫與茂七殿の百ケ日、同じ場所にて同じ日に、親夫を非業の刃に失ふといふは、よく〳〵因果な

ござんすか、ヤア〳〵こちらへお入りなされて、休んで御座んせいなア」孫兵衛「ハイ〳〵有難う御座ります、左樣なら御免なされて下さりませ」ト孫兵衛内へ入る。「時にもし彼に干して御座りますあの著物は」お袖「ハイあれは每も洗濯を遣しまする所から」孫兵衛「ヘエ左樣で御座りますか、ハテ變つた、あれは忰めが死骸に」お袖「エヽ」トお袖吃驚する、孫兵衛こなし。孫兵衛「ハテよう似た著物で御座りまする、ヤそれはさうと、お前樣は孫に唯錢をおやり下されて、蜆はなぜ取つては下されませぬぞ」お袖「サア今日は大事の佛の百箇日ぢやに依つて、それでの事でござんすワイなア」孫兵衛「テモマアそれはお若いに似あはぬお優しい事で御座ります、それに引かへ、聞いて下さりませ、此孫めが祖母は私が後配でござるが、それは〳〵邪見な奴で、ちつと商がたるいと、年端も行かぬ此坊主めを、撲つたり抓つたり、それを見るが不憫に御座るワイなア」お袖「それはマア可愛さうに、其お祖母さんのかはり、どうぞお前さん可愛ほがつてあげなさんせ、シテお前は此近所で御座んすかえ」孫兵衛「アイこの二三町先で御座りまするが、此方樣はこの頃爰へお越しなさつた樣子で御座るの」お袖「ハイ左樣でござります、私も段々不仕合な事が御座んして、先月爰へ參りました、此樣に香花賣つたり、すゝぎ洗濯、艱難な生計、お恥かしうござんすワイなア」孫兵衛「ナニそれが恥かしう御座らう、これ艱難なくらしといへ

ぎ出て來り、門口へ來りて。次郎吉「をばさん、蜆買うて下さりませ」お熊「ア、可愛らしい蜆賣、どうぞマア買うてやりたいが、蜆は要らぬ程に、是持つて行たが可いワイなア」ト次郎吉に遣ると是を取らず。次郎吉「イエ〳〵蜆買うて下さらねば、錢は取りませぬ」お熊「ホヽヽほんに正直な溫和しい子ではある、これ其樣に思ふならかうしなさんせ、私に賣るだけ其蜆、川の中へはなして下さんせ」次郎吉「アイ〳〵そんなら川の中へ逃してやりませう」お熊「オヽさうして下さんせ、お前はマア利功な子ぢやなア」ト木魚入り合方にて、下座の門の内より孫兵衞、親爹にて老けたる拵へにて出來り、子役治郎吉を見て。孫兵衞「わりや次郎吉、又今日は蜆賣に出やつたか、あゝ何にも知らずに」ト干してある著物に目を著け、科あつて。「彼處に干してある著物は悴が死骸に」ト一寸こなし。次郎吉「祖父樣今日は蜆が賣れぬ故、晩にばゝ樣に叩かれるワイなア〳〵」孫兵衞「オヽ可愛想に、年はも行かぬ孫めに、この樣な商させて、これ案じやんな、祖父が錢をやらう程に、是を今日の賣溜ぢやと、あの鬼婆に見せて遣りや〳〵」ト懷より小錢を出して次郎吉にやる。次郎吉「あの伯母さんにも、たゞ錢貰うた」孫兵衞「ムヽそんなら何といふ、此家のをば樣に、たゞ錢を貰らたといふか」ト門口へ來て。「これは〳〵、孫めに錢下されたさうに御座りまする、ハイ〳〵有難う御座りまする」お熊「すりやお前は此子のお祖父さんで

戸板の土左に」米屋「ハアそんなら湯灌場ものだな」お袖「エヽ何ぢややら氣味のわるい」ト投出す。古手屋「ナニそんな物ぢやァないよ、これお前も野暮な事を、たとへ湯灌場物ぢやといふて、門前に住ひをしながら、それを嫌つてなるものかな」お袖「わたしやそんな物なら御免ぢやワイなァ、したが此著物は何處で買うて來やしやんした」古手屋「そりや何さ、俺們が店の流だが、あんまり汚れてるから、雜と振出して貰うて、競賣にでも出さうと思うてさ」米屋「おきやァがれ、みす〳〵知れた土左衞門の著物を」古手屋「これさ其樣な事いふまい、これ〳〵お袖さん、此男のいふ事を、必ず誠にせまいぞ、ナニ俺が湯灌場まで買ひに歩くものか、それ程に慾ばりはしないよ」米屋「あんまり慾ばらない事もあるまい」古手屋「ハテ拗胸氣をいふ男だ」ト門口にある中盥の中へ右の著物を入れ、かうしておけば可いといふ科あつて。「お袖さん、どうぞお頼み申しやす」米屋「申しお袖さん、米の代はどうで御座ります、一體置替になつて居るから、先頃の代が濟まぬ中は、米は入れ難うござりまする」お袖「アイ〳〵此方の人が戻らしやんしたなら、直に持たしてあげる程に、後まで待つて下さんせ」米屋「そりや迷惑なものだなァ、そんなら親方へは後迄といつておきますぞえ」お袖「アイ〳〵宜しうお頼み申します」ト佃ぶし木魚の音になる、兩人下座へ入る、お袖こなしある、ト向より小兵衞悴次郎吉、子役にて蜆の荷をかつ

あるが、珍しい亡者を持込んだの」米屋「阿蘭陀からでも渡りはしまいし、亡者に珍しいといふが有りはしまい」古手屋「これ此方は其萬年橋へ流れついた戸板の死骸の噂を聞かないか」米屋「その話は聞いたが、あゝそんなら今日の葬式は戸板を脊負うた、土左衛門二人のとむらひかな」古手屋「男女を戸板の兩面へ釘づけにして、どんぶりやらかすといふは、眞に世の中には惨い奴もあるものだ」お袖「どの様な悪い事して、其様な目に遭ふ事やら、ほんに氣味のわるい話ぢやなァ」△「そりやてつきり密夫の出入でござりませう」米屋「それだからお袖さん、お前も密夫はマアしない事さ」古手屋「しかし此庄七となら大事あるまい」米屋「おきやァがれ」○「お前達も其葬式を見る氣は御座らぬか」△「どうで寺へ参りますから、行つて見ませう」○「サア〱一緒に行きませう、そんならお内儀」お袖「どなたも参つてお出なされませ」トとむらひの鳴物になり、仕出し皆々下座の門の内へ入る。古手屋「時にお袖さん、お頼みといふは外でもないが、何卒この著物をざつと振出して貰ひたい」ト風呂敷包よりお岩の死骸に著いてゐた衣裳を出す。お袖「モウ日暮ぢやよつて、今から洗うたとて干る事ぢや御座んすまいぞえ」ト手に取上げて思入あつて。お袖「この著物はどうやら見覺のある。たしかにこりや儂が姉様の。モシ庄七様、こりやお前は何處から買うて來やしやんしたえ」古手屋「こりやァ何さ、彼所に乾してある著物と一緒に

て深川三角屋敷法乘院門前の模樣、爰に庄七町人の形、古手屋にて風呂敷包を持つてゐろ、米屋の若い者、叺を持ち煙草呑んでゐろ、ト門口には若い拵への仕出し花を買うてゐろ、お袖世話女房にて山刀を持ち、樒の根をまはしてゐろ、此見得テンツ、とむらひの鳴物に幕明く。

米屋「申し米を持つて參りました」お袖「どうぞ毎の所へあけて下さんせ」米屋「オツト呑込みやした」古手屋「わしが頼んだ洗濯物は、まだ干ぬかしらん」ト干物をあちこち持つて見てゐる、米屋は押入をあけて、米を米櫃へあける見得」お袖「これ庄七さん、お前もせはしない、かう曇つた日で其樣に早う乾るものかいなア、元の通りにしておかんせ」古手屋「なる程、どうして見ても爰が一番日あたりがよい奴さ」トよき所へ著物をかけておく。仕出〇「これ〱お內儀、こゝへも花を十六文がの下さい」お袖「ハイ〱只今あげまする」米屋「もし今入れた米の錢はどうなされやす、待つて居りやすよ」お袖「どうぞもそつと待つて居て下さんせ、お前には話が御座んすワイなア」古手屋「わしも急に頼みたい事があつて又來やした、何にしろ一寸お目にかゝりたいなかゝりたいな」お袖「エヽモウ忙しない、この樣に手が塞がつてゐるものを。サアお持ちなされませ」仕出△「アイ錢はそこへおきましたよ」お袖「ハイ〱。サアお前さんもお持ちなされませ」ト仕出しへ花を渡す。〇「アイ〱、モシ今日は此法乘院に葬式がござるかな」古手屋「しかも二つ

始終どろ〳〵、伊右衛門吃驚して又振上ぐる刀にて、此骸骨ばら〳〵とおちて、綺麗な戸板になり流れ行く、ト本釣鐘ゴンと鳴る、上手より直助出る、ト樋の口より輿茂七非人の姿にて、一時に出て三人きつと見得よろしく、忍び三重になる、ト是より二人行當りだんまりの立いろいろあつて、直助鰻鉤にて撃つて蒐る、伊右衛門この穂先を刀にてボンと切落す、立廻りにて輿茂七懐中より印鑑おちる、これを直助手早く取上ぐる、件の鰻鉤の先は輿茂七の手に入る、是より三人入かはり、伊右衛門の比丘籠へ一時に三人とも手をかけて上る、トどろ〳〵にて此比丘籠にお岩の目鼻つく、これを三人見て吃驚し、皆々手を放す、比丘籠おちる、トチヨンと木の頭を入れる、三人分つて此見得よろしく　拍子幕。

四幕目

法乗院門前の場
孫兵衛内之場
直助内の場

造物、本舞臺三間の間二重の世話家體、正面暖簾口、鼠壁一つ竈、引窓、上の方卒塔婆交りの生垣、この奥苔むしたる五輪の頭、塔婆などを見せ、卵塔場の體、下の方下座へ黑の練木の門を取附け、門口より軒へ棹を渡し、前幕の小兵衛の著物乾してあり、門口醤油樽に樒の花を入れ、都へ

多くつく、直助この髪の毛を拂ふ科あつて「エヽ此川には土左衛門がゐると見えて、すてきな髪の毛だ」ト髪の毛を除つて又鰻鉤を洗はうとする、ト又お岩の櫛がかゝつて上るを、手に取り見て。直助「こりや櫛だ、しかも玳瑁、よつぽどな價値だ」伊右「ナニ櫛だ、ドレ」ト伊右衛門見ようとするを直助手早く隱し。直助「アヽ符牒分は御免だ。ドリヤ仕舞はうか」伊右「そんなら其後」ト兩人立別れて。直助「逢ひませう」ト入相の鐘、みだれにて橋懸へ入る、ト伊右衛門跡に殘り、釣道具をしまひ立上る、トどろ〱になり前幕の戸板、川の中より浮み上る故、お岩の死骸見ゆる、伊右衛門きつと見てこなしあり、戸板を引上げ土堤へ立かける、トお岩死骸、手に最前乳母が隕しだ守を持つて目を開きて。お岩「エヽ恨めしいこちの人、不義密通の惡名つけ、死んだ後でも恥かゝせ、恨重なる大惡人、血縁を絶すこの守、思ひしらさん待つてゐるよ」伊右「嫉妬の念に引かされて、迷うてゐるか女房お岩、このまゝ流せば鳶や烏の餌食とならん、まづ斯うして」ト戸板へ手をかけ反すと、裏に又小兵衛の死骸ついてあり、始終ドロドロにて。「ハア、裏にあるは小佛小兵衛だな、ドレ」ト顔にかゝつてある藻をとると、小兵衛早變にて目を開き。小兵衛「お旦那、お藥下せえ」ト小兵衛手を出す、ト伊右衛門直に刀を拔き振上げ。伊右「怨念退散」ト刃を見せると仕掛にて小兵衛の衣服おちる、一時は骸骨となる、

ながら。直助「モウ隱亡堀へ來た、ドリヤかぎを入れうか」ト舞臺へ來り樋の口の方を窺ふ、伊右衞門は高土堤より密とお弓が後へおりかゝる。お弓「エヽ、乳母は可愛や水死したか、是もやつぱり伊右衞門から起る事、例へ女の細腕でも、思ふ念力恨の刃、思ひ知らさん民谷伊右衞門、チエヽ」トお弓悔しき科、後から伊右衞門、突然にお弓を突きこかす、前の川へどんぶり落ちる、浪の花散ると、伊右衞門この時編笠を脱ぐ、ト下手の直助と顏見合せて兩人こなし、きつぱりとした合方になる。直助「お前はたしかに伊右衞門殿」伊右「さういふ汝は直助か、變つた所で」ト兩人互に傍へより。直助「遭ひました、日外や四谷左門を手にかけて、立退く時に言ひ交はした、貴樣と俺は相聟同志、それから音信便もなく、今又遭うたる出合がしら、非人の女をどんぶりと、これも大方惡工み、お前もよつぽど膽玉の」伊右「オヽサ太いは互だそのかはり、俺が今でも出世したら、何時でも貴樣も一所に立身さすワ」直助「また可い事があつたなら知らせて下せえ、何時でも、惡い事なら驅出して行くよ」伊右「天上ぬけの不義非道」直助「イヤモ働きかけた鰻鉤、どうで仕舞は身を割かれ」伊右「首が飛んでも動いて見せるワ」直助「エヽ適れ丈夫な」伊右「南無三餌竿をとられた」ト釣竿をあげると入相の鐘ゴンと鳴る。直助「アヽモウ日が暮れる、どりや今日は不獵で歸らう」ト鰻鉤を川で洗ふと、それにかゝり髮の毛が

な聲だぜ、そんなら斯うせう、差當つて物はないが、こゝに鹽冶家の墨附五百石の印鑑がある、是を以つて願へば何時でも出世は出來るが、何を云うても日數を經たねえ、これを二人に預けるから、一月二月待つてくりやれ」ト懐中より墨附を出して兩人に見せる。長藏「なる程、金といつちやア一文もあるまい、殊に貴樣も日蔭の身、なる程聞屆けて預らう」官藏「その代り出世の蔓があるならば、何時なりと引上げて下せえ、俺が所は釜屋堀だ」長藏「俺もその近邊の菰被だ」伊右「俺は又蛇山の庵室まで沙汰をすれば居所は知れる、それ墨附」ト渡す、兩人披き見て。兩人「よし〳〵、慥に預つか」伊右「そんなら必ず約束したぞよ」兩人「合點だ、伊右衞門殿」伊右「又尋ねて來いよ」ト時の鐘にて兩人橋懸へ入る、ト上手に人音する、伊右衞門編笠を被り見ると孫兵衞ゆゑ、高土堤に上り窺ふ、孫兵衞は下の土堤へ來て、非人のお弓が倒れてゐるを介抱して、心をつけてやる科。孫兵衞「こりや非人の女、心を慥に持てやアい〳〵」ト呼びいける、お弓心づいたる科。お弓「さては乳母は此川へ、ハア丶」ト泣おとす。孫兵衞「こりや〳〵隨分氣を慥にもつて、マア〳〵小屋へ入つてゐやれ。エ丶可愛さうな事ぢや、心はついたか、よし〳〵」ト捨白いうて花道へかゝる、ト一つ鉦凄き合方になり、向より直助、鰻釣漁師の拵へにて、かぎ棒を持ち出て來り、兩人すれ違うて孫兵衞は向へ入る、直助は舞臺の方へ行き

て。兩人「ヤ伊右衛門殿だ〳〵」伊右「ア、これ密かに〳〵」長藏「貴様の行方を毎日探しゐるワイの」官藏「爰であうたが幸ひだ、マアそこへ行かうワイ」伊右「マアこゝへ來やれ〳〵」ト舞臺へ來り。長藏「時に伊右衛門殿、いつぞや貴様に賴まれて、お岩小兵衛が死骸を川へ流した其跡で、喜兵衛親子を貴樣が手にかけたと聞いて恟り、それからずきが廻つて來て、とう〳〵俺等二人も日蔭者となつた、元はといへば此方から起つた事、二人が難儀を外に見て、知らぬ顔してゐる事はねえぢやァねえか」官藏「それ故やけから此方を見つけ次第、二人が身の上の立つ樣に、養なつて貰はうと思うて、一ぺんと尋ねてゐたのだ」長藏「こゝで逢うたが百年目だ、白とも黒とも」官藏「譯道つけて」兩人「貰らうのだ」伊右「ヲ、二人がいふ通り尤だが、俺が喜兵衛親子を殺したは、いふに云はれぬ間違で、それもお岩と小兵衛が怨靈のなす業よ、それから俺も身の置所なく、この近邊は無宿かまひ者の多い所だ、知邊の方にやつと身を隱して居るばかりだ、どうも今では仕やうがないて」長藏「これ伊右衛門殿、しよ事がなければ此方も是非がない、二人が命を元にしてお願ひ申すと驅込んで、一から十まで註進せうか」伊右「さアそれぢやア全で物がねえ」官藏「そんなら俺們の身の上の立つ樣にしてくれるか」伊右「サア今はどうも」兩人「そんなら代官所へ」伊右「サアそれは」三人「サア〳〵〳〵」二人「どうするのだ」伊右「エ、マア大き

岸を通り、土堤前を歩み下の土堤へ上り、兩人の非人を見て。「これは非人さうだが、やれ〳〵手の内を進ぜませう」お弓「これは〳〵、お年寄の後世願と見えて、お志かたじけなう御座りまする」お槇「南無阿彌陀佛〳〵」孫兵衛「いやモウ年寄つて悴に生訣、この如く卒堵婆をこしらへ、川々へ立てゝおくのも子が可愛さ、御推量下されませ」お弓「ほんに何くも同じ親子の愛情お察し申します」孫兵衛「ヤドリヤ是からしもつへ參りませう」ト空を見て。「ア、降らねばよいが」ト一つ鉦にて上手へ入る、跡に兩人顔見合はせ、ホツト吐息つく科、此時うすどろ〳〵になり、以前の伊右衛門が守り、鼠大分來て川へ引込む、お槇見て。お槇「あれ〳〵鼠が守を〳〵」ト取らんとして、ずる〳〵と川の深みへ入る、姿見えぬ樣になり、また薄どろ〳〵にて、お弓これを見て悶絶する、ト一つ鉦、凄き合方にて、高土堤より伊右衛門編笠かぶりて、釣道具、釣籠、釣竿をかたげ、著流しにて出來り。伊右「いつの間にか隱亡堀へ來た、此川は鰻が澤山ゐるさうだが、マア竿を下して見ようか」ト眞中のあがり口を下りて、よき所にて編笠取り、釣竿を出し釣する、この見得よろしくありて、摺火を打ち貰のむ、此時向より長藏官藏、さんするな姿にて兩人出て來り。長藏「何でも此邊にゐるといふ事だ」官藏「逢うたら有無なしにやつけうぜ、どうぞマア伊右衛門に逢ひたいものぢやが」ト舞臺へ來り川岸を通り、伊右衛門を見つけ

變るは世の習とはいひながら淺ましい、現在夫喜兵衛殿、娘お梅も同日に、聟民谷伊右衛門が手にかゝり、すぎ去りしも因縁とはいひながら、どうぞ伊右衛門に遭うて、一太刀なりと恨まんと、其方も儕も此樣に、雨露を忍びて此小屋に、暮すも敵に遇ひたさばかり、推量してくりやいなう」お槙「御尤でござりまする、私とても其通り、一旦お主とあがめた貴方、殊にお育て申したお梅樣、誠の娘も同じ樣に思へば、やつぱり私が爲にも敵の伊右衛門、いつぞや討つて立退く場所に、落散つたるこの守、披いて見れば四谷の住人、馬持にて佛孫兵衛悴小兵衛とあるが證據と、則ち伊右衛門が元の生れ國所、尋ねて見れば其人は、諸國廻國に出たとの事、何を的なきこの月日、よく／＼運につきたるか、チエ、はかなき憂世の有樣ぢやなア」お弓「この樣な艱難も、皆伊右衛門が爲す業、おのれやみ／＼安穩でヤア措かうか」ト兩人悔しき科、一つ鉦合方にて、向より馬士孫兵衛、親仁の拵へにて、塔婆を持ち出來り、よき所にて。孫兵衛「アアこれ悴小兵衛が行方知れず、命あるやら無いやら、又鼻の高い人にでもさらはれたか、一向たよりの無い故に、年よつた親の役、爰ぞと思ふ川々へこの如く卒塔婆を拵へ、頓生菩提二世安樂、命があらば息災延命、俗名小佛小兵衛と、これを立つるが悴の爲、この隱亡堀は毎年けぶのある川と聞いたる故、この卒堵婆、ちつとも早く、さうぢや」ト右の鳴物にて舞臺の川の

二重下の屏風をあける、ト小兵衛伊右衛門の兒を抱いて、喰殺してゐる、伊右衛門恟りする。小兵衛「旦那様、藥を下せえ」ト手を出す、これも一刀に首を斬る、トよき所へ喜兵衛の死骸と本首出る、伊右衛門見て吃驚して。伊右「ヤ、、、扨は小兵衛と見えたるは舅殿か、これも二人が。おそろしい」ト刀を棄て尻居にへたる、ト木の頭。「執念ぢやよなア」トきざみ拍子木、この見得よろしく　拍子幕。

三幕目　深川隱亡堀の場

本舞臺三間の間、向ふ上手二間の高土堤この前一間の中土堤、これに非人小家あり、下手樋の口にあり、上り口誂への所にあり、舞臺一面の浪板、同じく浪幕を張り、よき所に芦のあしらひ、すべて深川隱亡堀の體よろしく、爰にお弓、乳母お槙兩人、零落れて非人になり焚火してゐる、ひとつ鉦、蟲の音、合方にて幕明く。

ト向より物參りの仕出し二三人、捨白をいうて高土堤へあがりながら、非人に法捨して入る。

お弓「ハイ〱是は有難う御座りまする、南無阿彌陀佛〱」お槙「今日は空も曇つてをりますので、一倍お氣が塞ぎませう、隨分大切なお身の上、お氣をお晴しなされませいなア」お弓「移り

早心おく事はなし、御安堵なされて娘御と夫婦になされて下されい」喜兵衛「ヤ、思はざる凶事、しかし拙者や娘の爲には先は重疊、めでたい吉左右」お梅「それなら貴方のお家さんは、小兵衛とやらと」お弓「密夫のあらはれ、殺されたといのう」お槇「日ごろのお願ひ、こちらの身には」皆々「めでたい〳〵」喜兵衛「しかし餘程夜も更けたれば、萬事は明日取極めませう」お梅「どうぞお願ひ」伊右「左樣致さう」お弓「わたしは奥へ、乳母と一緒に」お槇「まゐりませう」喜兵衛「拙者は是にて宿直のまどろみ」伊右「左樣ならいづれも方」皆々「おやすみなされませ」トお槇二重の下へ、喜兵衛が床敷いて屏風たてる、奥へ式禮してお弓と共に入る、物凄き合方になり、伊右衛門床の上へあがる。伊右「イヤモウ嘸お待兼で御座らう、其甲斐あつて今宵は相互に、打解けて語らひませう」ト此白の中うすどろ〳〵にて、鼠出てお梅にまとふ、ト無言にて後へ倒るゝ、伊右衛門捨白にて上手の家體へ行く、始終うすどろ〳〵。伊右「これお梅殿、其樣に恥しがる事はない、最早さし合ない、今夜はゆつくりと二世のかためを、コレお梅殿」トいふと仕掛にてお梅の身體よりお岩の顏出て。お岩「恨めしい此方の人」伊右「ヤ、お岩か南無阿彌」ト一刀に首をぽんと斬ると、よき所へお梅が死骸と眞實の首おちる、伊右衛門見て吃驚し。「扨はお岩と思ひつるに、お梅であつたか、ヤ、、、。舅殿大變で御座る、不思議な凶事にてお梅を」ト

ト長藏はお岩の死骸、官藏は小兵衛の死骸を伊右衛門に見せる、但しお岩の死骸は吹替なり。伊右衛門につたりと笑うて。伊右「ドリヤ參らうか」ト橋懸へ入る、兩人死骸を縛りつける、時の鐘よろしく此道具かへし。

本舞臺元の伊藤の屋敷になる、上手障子屋體に床を布き、其上にお梅下著にて待つてゐる體、二重の上に喜兵衛、お弓、乳母お槇ならび居る、時の鐘、しんみりとした合方にて道具とまる。

喜兵衛「最早知らせがありさうなものぢやて」お弓「さうで御座んす、さりながら產婦もあるし、家の場合が惡う御座んせうワイな」お槇「モウ御得心の上は、お案じなされますないなア」お梅「お目にかゝらぬ間は、どうも意が」喜兵衛「おちつくまい、俺も心が落つかぬ」弓、槇「おそい事で御座りまするなア」ト此時橋懸より伊右衛門出來り、栞門をあけてすつと入る。伊右「さぞお待兼でござらう、いろ／＼取込んだ儀が御座つて思はぬ遲刻」喜兵衛「オヽ伊右衛門殿か、皆が待兼ね、娘は猶の事」お弓「大抵待つた事ぢや御座らぬワイなア」お槇「サア／＼是へお越しなされませ」伊右「然らば」ト二重舞臺へ伊右衛門あがる。「何から申さうやら、先刻お内から戻りまして、家の樣子を見れば、お岩と日雇中間の小兵衛と、不義はたらき居るを見つけ、據所なく武士の習ひ、兩人ともに仕留め、諸人へ見せしめの爲に、裏手の川へ戸板に打つけ流しましたれば、最

知致した」ト小兵衛を捉へ、指を一本〳〵斬ると、此時誂へあつて小兵衛の指蛇となる、小兵衛苦しき科にて。小兵衛「ア、どの様になされても知らぬ〳〵、お岩様を殺した覺は御座りませぬ、この疑を晴らし、何卒わたくしが願の妙藥を下さりませ」伊右「ヤアのぶとい奴、妙藥所かお岩の敵は汝であらう」小兵衛「さら〳〵覺は御座りませぬ、どうぞ疑をおはらしなされて下さりませ、どうぞお願ひで御座りまする」長藏「こいつのぶとい奴、撲のめして言はせませう」官藏「いつそ殺して仕舞ふがよい」ト三人して小兵衛をぶち据ゑる、伊右衛門刀の峰打する、ト小兵衛苦しみ。小兵衛「エヽ存じもよらぬ難題に、たとへ此身は死するとも、恨は民谷伊右衛門」三人「そりや癩者の瘡うらみだ」伊右「凡夫さかりに祟が有らうか、馬鹿な事を」三人「とう〳〵往生致しました」伊右「後日の人口を脱るゝ爲、此奴の死骸はお岩と一緒に、鳶や烏の餌喰となし、日數杉戸の板がへし、浮名を流す水葬禮」長藏「なる程尤も、お岩小兵衛の姦通と」官藏「言觸したら後日の禍」伊右「遁るゝ工夫はそれ」ト差圖する。兩人「合點だ」ト兩人押入の戸を外して小兵衛の死骸をくゝり、手足を板へ打つける。伊右「お岩の死骸も其裏へ打つけて、裏手の川へ、ナア」兩人「心得て御座る」伊右「拙者は是より君が許へ、今宵は晴の緣結び」長藏「邪魔は拂うて首尾よう參つた」官藏「御遠慮なしにちつとも早う」伊右「參るで御座らう」兩人「めでたい首途に」

ト思入、この時後の押入しきりに内より叩く、ト押入の戸を明けて小兵衛を引摺り出す。「サア小兵衛奴、汝が小手が緩んでゐる故、女房お岩を殺したに相違あるまい、有様に申せ」ト是にて小兵衛悶躁く、伊右衛門見て。「ハヽア猿轡を箝めてある故、物が言へぬか、ドレ取つて遣るによつて譯を申せ」ト猿轡を取つてやる、ト小兵衛ほつと息つくこなし。小兵衛「ヤレ〳〵有難う御座ります、どうぞ御了簡下されませ」伊右「何を申す、これ料簡で事が濟まうか、女房お岩をなぜ殺した」小兵衛「エヽどうして私が、これには段々譯が」伊右「譯もへちまも有るものか、これ汝が脇差で殺してあるからは、何でも汝が手に掛けたに違はない、汝どうして」ト小兵衛を引捉へる所へ、ばた〳〵にて向より長藏官藏走り出て來て、門口へ來て。長藏「さて伊右衛門殿、めでたい事が御座るて、喜兵衛殿が今宵祝言致したいとの事、御承知なればお悦びなされい、お悦ひなされい」長藏「それ故わざ〳〵お知らせに參つた、是非ともお伴申さねば我々が」兩人「濟みませぬて」伊右「これは忝ないが、何れも大變が御座る、只今宿許に歸つて見れば、お岩が討れて居りました、詮議致せば小兵衛が脇差、殊に此者の手が緩んであれば不審の一つ、此奴に違は御座らぬ、此上は詮議致しませう」兩人「よく御座る」ト是より小兵衛を捉へ慘くする、伊右衛門兩人に指圖して。伊右「ソレそやつが指を一本〳〵斬落し、白狀させて下さい」兩人「承

始終あつらへあり、獨吟の切に行燈に宅悦火を灯す、トお岩鐵漿つけしまひ、髮かきなで、脱けたる髮の毛をあつめ、手に丸めて。「チエヽうらめしや伊藤親子、妬ましや伊右衛門殿、人に恨があるものか無いものか、檜木山の火は檜木より生ずると、われも焦るゝ胸の火焔、思ひ知らさん待つてゐよや」ト髮の毛を絞る、よき程にこげてあり、衝立の障子へ血がたら〳〵と流れる、ト障子血に染まる、宅悦見て恟り慄ふ、お岩は血の上つたる思入にて、ウントたぢたぢと件の柱へ靠れると、ハアとお岩倒るゝ、宅悦吃驚して駈寄り見て驚き。宅悦「ヤア〳〵大變大變、お岩樣、こりや最前の脇差が柱に立つてゐて、お岩樣は死んだ〳〵」ト大きに慌てる科、四邊かけまはり。「コリヤかうしては居られぬ、あの樣な悪い伊右衛門、又俺が業になるで有らう、ちつとも早くさうぢや〳〵」ト行燈蹴返し逸散に驅出で、橋懸へ迯げて入る、ト時の鐘合方になり、向より伊右衛門、提灯つけて出て花道にて。伊右「宅悦が首尾よくやれば重疊、たとへ其方がゆかずとも、あの樣な顏になつたもの、どうして女房になるものか、マア樣子を窺ひ、ソレ」ト門口へ來て窺ひ、物音せぬ故さてはといふ科にて、密と内へ入る、暗闇ゆゑ。「お岩、宅悦〳〵」ト呼べど返事なき故、行燈を出して提灯を移し邊を見る、トお岩倒れてゐる故吃驚し、抱上げて。「コレお岩、如何致した」ト見て。「ヤ見れば肩先よほどの深手、ハチナア」

て退引ならず、是非なく意にもなき不義をいひかけました、樣子は此の通りで御座りまする」お岩「チエヽ口惜しや腹立や、その意では父さんの敵も討つては下さんすまい、妬ましいは喜兵衞親子、主のある者を横戀慕、此上は逢うて恨を」ト行きかけるを宅悦とめて。宅悦「もし其顏では」お岩「ナニその顏とは」宅悦「とくに形は變つて有るぞえ」お岩「エヽどれ鏡」トこの中悔しき思ひ、宅悦手早く鏡を取つて。宅悦「ハイ〳〵」トお岩に鏡さしつける、一寸見て。お岩「ハアヽ」ト鏡を棄てゝ吃驚し。宅悦「それ見なされ、その樣な顏に」トお岩怖々顏を見て、まだ得心せず、後に誰やらゐるかと思ふこなしにて、後を見たり種々有つて、櫛を取りさして見ると吾が顏ゆゑ。お岩「ハア」ト泣出す。宅悦「有理ぢや〳〵、どうもせう事が」お岩「此上は誰を恨みん、喜兵衞親子に逢うて、存分いうて約束を變替させて腹を癒ん、それ」ト驅出さうとするを宅悦とめる、トお岩こなしあつて氣をかへ。いや〳〵この儘行くも女子の恥、髮かき上げて鐵漿つけて、存分いうて。宅悦殿、一寸鏡臺と鐵漿つけ道具を取つて下されといふに」ト腹立ちていふ、此時宅悦鏡臺と鐵漿つけ道具をもつて來る、お岩向ふを見詰め、悔しき科、鏡に對ひ、又ハアと泣く、ト獨吟になり、この獨吟の中宅悦に髮を梳かせる、産後の髮ゆゑ解けぬ科、痛いといふ思入にて自分に梳く、仕替鬘にて毛脱ける事あつて、それより鐵漿つける、この中

ひかけ、、一通りで濟まうと思うてか、伊右衛門殿への言譯、命は貰ひましたぞ」宅悦「ア、これ
これ其樣に固くなつてはモウ暴ぢや、何もかも言うて仕舞ひます」お岩「ナニ云うて終ふとは」
宅悦「いうて終ふから、其拔身を納めて下され」お岩「イヤ〳〵樣子を聞かぬ其中は、滅多に元の
鞘へは納まらぬ、サアどうぢや〳〵」宅悦「その樣に責めかけると出る事が出ぬ、マア〳〵」ト
お岩が持つてゐる脇差へ飛つき、此拍子に屏風倒るゝ。「マ、これを放して〳〵」お岩「イヤ放さ
れぬ〳〵」ト互に取合うて振拂ふ拍子に、脇差は上手の障子家體の、よき所の柱へ立つ、お岩
摺寄つて。「サア樣子はどうぢや〳〵」宅悦「外でもない伊右衛門殿に頼まれた」お岩「正々しい僞
言、こちの人が何の其樣な事頼むものか、有樣にいはぬときく事ぢやないぞえ」宅悦「正眞正
銘頼まれたのぢや、其樣子は伊右衛門殿、アノ喜兵衛の娘を女房にするにつけ邪魔になるお岩、
どうぞ密通をしてくれ、それを難につけ叩出すといふ魂膽、これまだ其上に今日喜兵衛が所よ
り遣した血の道の藥といふは大毒藥、不具に變はる藥を吞ませ、伊右衛門殿に愛想つかさせ此
方を去りこくり、跡で喜兵衛が娘と一つにならうといふ謀計で御座るワイ」お岩「ヤ、、、、そ
んなら喜兵衛となれあうて」宅悦「貧乏な世帶せうより、大金持の伊藤氏へ聟に行く意と最前の
話、それ故に儕に姦通をしてくれ、首尾よくゆけば褒美、否だといつたら眞二つと、刀を拔い

通せぬと殺すとは妙な亭主ぢや」ト宅悦舞臺へ來て内へ入り。「お岩樣、今歸りました」お岩「オヽ宅悦殿か」宅悦「ハイ時にお前樣は心持はどうで御座りまするな」お岩「イヤモウ今日は天窓といひ、顔が脱れて行くやうぢや」宅悦「それははや困つたもので御座りまする、チト脊中でも擦りませうかナ」お岩「どうぞ擦つて下され頼みます」お岩「ドレ〱商賣筋ぢや、療治致しませう、ドレ〱」トお岩の後へまはり脊中をさする。お岩「アイ〱こりやお慮外で御座ります、アヽ顔が痛い〱」宅悦「申しお岩樣え、お前さんはあの樣な邪見な伊右衛門樣でも、愛想は盡きませぬか」お岩「そりやモウ邪見な男を持つたが因果、どうもせう事がないワイなア」宅悦「隨分ありまする、この樣な撫擦つて可愛がる私と、何と相談はどうで御座りまするなア」お岩「ホヽホヽ此人とした事が、じやら〱と何を」宅悦「イヤじやら〱ぢやない眞實ぢや、それが嘘なら此通り」ト後からお岩を抱く、お岩飛退き。お岩「コリヤお前氣が違うたかエ、イヽヤ女と侮り惡戲すると許さぬぞや」宅悦「ハイ〱、でも惚れましたもの」お岩「まだ其樣な事、サ私も武士の妻、料簡が御座んす」トすつと立つて小兵衛が差して來た脇差を拔放し。「サア今一度いうて見やれ、了簡が御座んす」宅悦「アヽ短慮々々、コリヤモウ何方へ廻つても命が危い、というて首尾よくやらぬと命、又やりかけたれば命、どうしても命づくぢや」お岩「主ある者に不義い

ふ約束故、邪魔になるはあのお岩、秘藥を以つて彼の樣にかはる姿を幸ひに去つて仕舞ふ魂膽だ、コレ宅悦、貴樣にも賴がある、コレ」ト囁くこなし、宅悦びつくりして。宅悦「どうしてマア其樣な事が、そして彼の樣なものを間男が出來るものか」伊右「出來ても出來ねえでも是非賴みたい、此役目首尾よくやれば褒美の金、不承知なればしよ事がない、大事をいうた宅悦、貴樣の命は貰うたぞよ」ト刀を拔き振上げる、宅悦慌てゝ。宅悦「ア、是〳〵其樣な無理な事、あのマアお岩樣と密通しろ、せずば殺すとは胴欲ぢや、あの樣な化物と色が出來るものか、といふたら斬らんすであらう、マア可いワ承知ぢや」伊右「一寸のがれ氣に入らぬ、きつと承知か、忌なら眞二つ」ト又刀を振上ぐる、宅悦迯げまはり手を合して拜んで。宅悦「ア、此通り〳〵拜む拜む、承知ぢや〳〵、力一ぱい密通して見る、命はお助け〳〵」伊右「そんならいよ〳〵密通を」宅悦「するとも〳〵、密通をして斬らるゝは當然ぢやが、密通せぬと命がない、すれば命が助かるとは、世は逆まの事ながら承知しました」伊右「首尾よく致せ、褒美は遣はす」宅悦「承知承知」ト伊右衞門刀を納めて。伊右「無理からでも今夜の中に首尾よく致せ」宅悦「智慧を揮うてやりかけませう」伊右「そんなら宅悦待つて居るぞ」ト時の鐘にて別れる、伊右衞門は向へ入る、宅悦は舞臺へ來る、此内お岩は子を寐さし蚊を逐うてゐる。宅悦「あの樣な無理な事を、密

をしかけてあげませう」ト火鉢へ蚊くすべなどしてゐる、時の鐘、凄き合方になり、行燈を出して燈心を入れ油を差さんとして。「南無三油が絶れた、ドレ〳〵油を買うて來よう、申しお岩樣、油買うて參ります、一寸留守をお賴み申しまする、お岩樣〳〵」お岩「アイ〳〵」ト起上る、トお岩の顏誂への異形に變る、宅悦見て吃驚して。宅悦「ヤア〳〵お岩樣の顏が」お岩「酷う逆上してならんワイなア」宅悦「マア〳〵恐ろしい」トいひかゝより思入ある、お岩は心つかずゐる。「ドリヤ油を買うて來ようか」トふりむき見て。「ア、南無阿彌陀佛」ト門口へ出て。「マア〳〵どういふもので彼の樣な顏にならしやんした事ぢや、モウ一目と」ト又立歸り覗いて。「全で化者だ」お岩「まだ行かんせんかいなア」宅悦「今鼻緒を直して居ました」ト恐しいと捨白にて向へ入る、お岩立寄り火鉢の蚊燻など氣を注け、始終苦しみ居る、此時入相の鐘、合方にて橋懸より伊右衛門窺ひ出て、そつと門口より覗いて見て、お岩の顏を見て吃驚。伊右「ヤあの樣にも變るものか、コリヤ思案しかへずばならぬワイ」ト時の鐘、又門より覗いて。「全で化者だ」ト思案して花道へかゝる、向より宅悦油さし持つて戻つて來る、伊右衛門行逢ひ、宅悦悧りして。宅悦「モシ〳〵伊右衛門樣〳〵、あのお岩樣の顏が、とひやうもないものになりました、御覽なされましたか」伊右「オヽ見た〳〵、何も騷ぐ事はない、高が斯うだ、喜兵衛殿の娘を女房に貰

ア痛、爪がはなれましたワイなア」ト倒るゝ、其間に伊右衛門門へ出て。伊右「これも照月の一軸が欲しいばかりで、辛く當るも」ト思入あつて。「ドリャ一打中てうか」ト時の鐘にて向へ入る、トお岩指を押へ、轉んで苦しむ。お岩「こちの人、どうぞ其蚊帳ばかりは、どうぞ」ト起上り見て。「モウ行かしやんしたか、ア痛ヽヽ、邪見な男ではあるぞいのう、ア、顔が痛い〳〵」ト顔と指とを抱へ苦しむ、この時向より宅悦戻つて來て門口へ入り。宅悦「今戻りました。ヤお前はお岩樣、又血の道か、どうなされました〳〵」お岩「オヽ宅悦殿、今こちの人が戻らしやんして、何ぞ質に置くもの貸せといはしやんしたけれど、何も無い故斷りいうたら聞入れず、そこで私の著物脱いで上げた其上に、まだ何ぞ出せというていろ〳〵な難題ばかり、其上にあの蚊帳を出せといはしやんす故、此子が蚊に咬はれると、段々事譯いうても聞入れず、私が止めたを振切り、この樣に爪まで放して行かしやんしたワイなア」宅悦「ドレ〳〵、それは邪見なお人だ、オヽ痛みませう、何ぞ血止をつけて、エヽ情ない人ぢやなア」お岩「アヽ顔が痛い〳〵」宅悦「申し〳〵逆上して血がのぼつたら悪い、氣をおとしつけて暫くお休みなされませ」ト此時赤兒泣く、これにてお岩立つて顔を抑へ、兒を添乳せんと寐轉び蚊を逐ひ、二枚屏風を引廻す、ト宅悦いろ〳〵と捨白あつて。宅悦「ヤレ〳〵可愛さうに、蚊の澤山ゐるに、ドレ〳〵蚊燻

え」伊右「サ證據はないが、何でもをかしな素振であつた」お岩「證據もないに其樣に、難批難つけるは、こりや何ぞ御量見が御座りまするか」伊右「サア量見がある、イヤサ量見も譯もないけれど、俺が貸せといふ物を貸さぬゆゑ疑ふのだ」お岩「それぢやというて無いものがどうして」伊右「ナニまだ外に」ト伊右衛門障子屋體を見る、ト蚊帳の吊りあるを見つけて。「幸ひあの蚊帳を質に遣らう」ト立かゝり取らうとするをお岩とめて。お岩「もしこちの人、此蚊帳ばかりは堪忍して下さんせ、坊主が蚊に咬はれますワイなア」伊右「それ見やれ、子をかばひ立する顏で、やつぱり惜しいのだ〳〵」お岩「イエ〳〵何の惜しい事は御座りませぬが、坊主めが蚊にくはれまするゆゑ」伊右「子が蚊に咬はれうが、汝が死なうが構ふものか」お岩「チエヽヽ」ト伊右衛門の顏を怨めしさうに見て、わつとなきて。「そりやあんまりで御座りませうがな」伊右「何があんまりだ、忌々しい其泣面、エヽ面倒なあの蚊帳を」ト立かゝるをお岩引とめ、挑合うてトヾ伊右衛門振きる、お岩あつと倒るゝ。お岩「アヽ顏が痛い〳〵」ト伊右衛門是を構はず、蚊帳を取つて來て。伊右「ドリヤ行かうか」ト伊右衛門行くを又とめて。お岩「この蚊帳ばかりはどうぞ罷めて下さんせ」伊右「エヽ面倒な放せやい」お岩「どうぞ是は、子が蚊に咬はれます、堪忍して下さい」伊右「コヽ放しやアがらぬか」ト慘う引たくる、トお岩指の爪はなるゝ。お岩「ア痛ヽヽ

ますえ」 伊右「汝が頭の櫛簪、なんなりと出せ」 お岩「その樣な事おつやしるが、貴方も御存じの通り、あの櫛は母樣の遺物にもかへぬ物ゆゑ、今まで著て居るものを脱いでなと、間に合はして上げましたもの、何卒あの櫛ばかりは御免なされて下されませ」 伊右「よいワ、それ程な櫛なら借りぬ、そんなら外の物なんぞ貸せ」 お岩「何というて何がござりますもので」 伊右「エヽやかましいワエ、何なりと都合して出せ」 お岩「ハイ」 ト愁のこなしいろ〳〵あつて、著てゐる衣服脱ぐと淺黄の長下著になりて、衣服をたゝみ渡す。 お岩「左樣ならこれなりと、お間に合せて下さりませ」 伊右「なんだコリャ汝が著物、これが幾許貸すものか、是ぢや足りないもつと出せ」 お岩「それぢやというて無理ばつかり仰しやる、何もないものを」 伊右「喧ましいワエ、わりやそれでも好な男には貸すであらうな」 お岩「もし貴方、好な男とはそりや誰でござります」 伊右「わりや密夫があるで有らう」 お岩「エヽどうしてマア」 伊右「知るまいと思ふか、間夫があるであらうが」 お岩「モシいふ事といはぬ事が御座りまする、私が間男したといふ證據が御座りますか、シテ又いづくの誰で御座ります、サア承はりませう、これ許は承はりませねばなりませぬワイなア」 伊右「サア其人は」 お岩「その者はエ」 伊右「サそれは。オヽさうだ小兵衛としてゐるであらう」 お岩「エヽナニ小兵衛と、シテそれには證據が御座りますか」 伊右「證據は」 お岩「證據は

て來たワイの」ト捨白いひながら藥土瓶など片よせる、トきつぱりとした合方になり、向より伊右衛門手を拱み思案しながら出て、花道にて。伊右「今聞けばあの喜兵衛が、お家の重器照月の一軸を、隱し所持致すとの事、其一軸ゆゑお家の騷動、何卒掛地を工夫して取返したいものぢやが、さすればお岩を離別致し、あの娘を娶らずばなるまい。とあつて科なき女房を離縁もならず」トこなし有つて。「イヤ〳〵お家には替へられぬ、殊に最前喜兵衛よりお岩に送りし血の藥は祕藥とあつて、一日に相好變る稀代の藥なれば、猶不縁にして喜兵衛と同心なさん、ムウさうぢや」ト舞臺へ來て門口より覗き見て。「お岩今戻つた」ト内へ入る。お岩「オ、こちの人遅うござんした」伊右「お岩、アノ先刻に喜兵衛殿から遣した血の藥を呑んだか」お岩「最前からたてかけて」伊右「呑んだか」お岩「アイ、どうも逆上せてなりませぬ」伊右「南無三」ト思入あつて又氣をかへ。「コレお岩、今歸りに、なるこに可い丁半が出來ると聞いたが、久振でぶちあてゝ來よう、元手が無いか、何ぞ貸してはくれまいか」お岩「そりやモウお前さんの事、何なりと上げたいが、御存じの通り、皆あなたが質物にお預けなされて、何も無いでは御座りませぬか、それにマアどうして」伊右「コレ〳〵何にも無い、コリヤ俺に貸すが惜しいか」お岩「何のマア惜しい事が」伊右「なけりや何故貸さぬ、惜しからう〳〵」お岩「あなた、そして何が御座り

自害せうとする、お槇とめて。お弓「オヽ其方が死ぬなら私も一緒に」喜兵衛「身共もともに」ト三人死なんとするを伊右衛門とゞめて。伊右「お待ちなされ、お三人とも」喜兵衛「お止めなされな伊右衛門殿」伊右「イヤ民谷伊右衛門承知致した」三人「ヤヽ」ト三人吃驚する。伊右「しかし即刻には出來にくい、一旦宿許へ立歸り思案致し、お岩が樣子もとつくり見屆けた上、祝言致さう」喜兵衛「イヤ一旦承知と見せかけて、事を謀る御所存かな」伊右「不肖ながら伊右衛門は武士で御座る、承知致したと申すが證據、虛言は御座らぬ、武士の金打」ト伊右衛門小柄にて金打する。喜兵衛「ハアヽそれにて安堵。コリヤ娘、よろこべ御承知ぢやとやい」ト四人大きに悅ぶこなし。お梅「エヽ嬉しう御座んすワイなア」お弓「日比の願が叶うたワイのウ」お槇「お嬉しう御座りませうなア」トお梅へかけていふ。喜兵衛「マヽちよつと祝ひにソレ傍へ」ト娘を無理に伊右衛門の傍へ推遣る。お梅「父樣母さんお許しなされませ」ト伊右衛門の膝に凭れる、喜兵衛お弓側向く、伊右衛門頭を搔く、この見得よろしく時の鐘合方にてチヨン〳〵、この道具まはる。

造り物、元の伊右衛門の內、世話場になる、上の方障子を開け蚊帳を吊りある、爰にお岩以前の形にて子を寐さして藥を呑んでゐる見得、時の鐘、凄き合方にて道具とまる。

お岩「この伊右衛門殿は何をして居やしやんすやら、早う戾つて下さんせいで、アヽ痛う逆上せ

の儀ばかりは、ハテ何とも」喜兵衛「そんなら御承知ないか、女房娘」ト三人顔見合せこなし、お梅思ひきつた科。お梅「お忌ならば私は、さうぢや」ト喜兵衛が脇差を抜取り自害しさうにする、皆々とつて。喜兵衛「アイヤ伊右衛門殿、御承知ない時は娘は此の通りで御座るが」お弓、お槇「これでも御承知はないのかいなア」トいへど無言にて俯きゐる、喜兵衛三人顔見合はせ、思ひきつて喜兵衛は脇差おつ取り切腹にかゝる、伊右衛門とめて。伊右「ヤレ待つた喜兵衛殿、この伊右衛門が承知なき故、見せしめに切腹あるか」喜兵衛「イヤ〱面當では御座らぬ、死なねばならぬ拙者がいひわけ」伊右「ナニ言譯とは」喜兵衛「聞いて下され、許して下され伊右衛門殿、お岩殿とは飽き飽かれぬ間、それを割くには如何致したものならんと、娘が不憫に惡念起り、最前持して遣はしたは、血の道の藥とは嘘言、誠は一日のうちに異形の姿と變る祕藥でござる」伊右「エエ、」ト吃驚するこなし。喜兵衛「それぢやに依つて今頃は、服用したに違ひはあるまい、娘が願を叶へんと、罪なき人に祕藥を盛り、一生涯の廢人にしたも、子故の闇から闇、迷ふ心は親の因果、伊右衛門殿、死なねばならぬとは爰の事、樣子はかくの通りで御座る」伊右「アノ祕藥。ムウハテなア」ト伊右衛門こなし。お梅「わたし故大事のお岩樣、顔が變つた上からは、猶々わたしが望は叶はぬ、生存らへて戀しい人に怨まれうより、いつそ殺して下さんせいなア」ト又

まする」伊右「これは〳〵存もよらぬ事を承はる、そりや随分家柄とこひ娘御の御器量、直に承引致す所なれども、こゝに一つの難儀は、お岩が舅四谷左門、先達て何者とも知れず手にかけたる故、舅は親、この敵を討つ迄は、お岩と不縁にはなり難し、世の人口にて伊右衛門は敵が怖さ討ともなさに、お岩を離別致せしとあつては、拙者武士道は相立たず、とあつて大切な娘御、かりに夫婦の名告もならず、此儀は何とも是非もない儀で御座るで」喜兵衛「イヤ御尤ながら貴殿御承知下さらば、拙者が知行を譲り、其上で先達て手に入つたる照月の一軸、これを殿へ差上げ御加増を願ひ、何不足なく暮しなば、娘は本妻、お岩殿の一人や二人、随分養うておける事、照月の一軸を聟引出に差上げますから、御承引下さらぬか」伊右「ナニ〳〵照月の一軸、アノ。ムウ」トこなし有つて。喜兵衛「いかにも」伊右「そりや鹽冶家の重器では御座らぬか」喜兵衛「さいつ比お勅使饗應のその折から、人知れず某盗取りおきしを、それとも知らず預り主の瀬左衛門の切腹、それ故鹽冶一家の騒動、拙者未然を察し其前に暇を乞請け、師直公へ仕官し、照月の掛地も大切に所持致す、かく大事を明す上は御承引下されぬか」伊右「鹽冶の重器紛失の元は喜兵衛殿か、ムウ」喜兵衛「御不承知かな」伊右「いかにも照月の一軸は所望ながら、私も武士の端くれ、清貧濁福不義の榮華は浮べる雲、身の行末が」喜兵衛「好しう御座らぬか」伊右「こ

寛ぎ下されい」伊右「自由に致しまするて」喜兵衛「コリヤお弓、娘をこれへ」お弓「うばや、娘をつれて來て給も」ト奥にてお槇。お槇「ハイ〳〵」ト乳母お槇先に立ち、娘お梅振袖娘にて、恥しき科にて出てくる。喜兵衛「オヽ娘か、先刻より伊右衛門殿も是に御座る、マヽ爰へ〳〵」お梅「アイアイ、ようお出遊ばしました」ト嬉しきこなし。伊右「これは娘御で御座るか、イヤ毎度お邸へ參り、御馳走に相なり千萬忝なうござる」お梅「何のマアさしたる事も御座りませぬに其お詞、ノウ父様」喜兵衛「イヤナニ伊右衛門殿、他聞を憚り親子三人、ちと貴殿へ折入つてお頼が御座るて」伊右「イヤモウ斯くお世話にあひなる御自分様の事なれば、身に叶ひし事なれば」喜兵衛「聞いて下さるか」伊右「なか〳〵」喜兵衛「まづ以て重疊、シテ伊右衛門殿、別儀でも御座らぬが、これなる娘の聟になつては下さるまいか」伊右「あの拙者に」喜兵衛「如何にも」伊右「ムヽム」ト思入、合方になり。喜兵衛「この様に申入れたら、道知らずとも思召さうが、貴殿もお岩殿といふ歴乎とした妻女、殊に子中までなしたる間、引さくでは御座らぬが、こゝが下世話に申す子故の闇路が不憫に御座る、先日より貴殿を見初め、人知れず戀病、親の身ではあるにあられず、如何なる良薬名醫より、貴殿の姿を日に一度見するのが何より薬と、サ親の心を推察あつて、何卒そむけた事ながら、どうぞ娘が聟に成つて下されまいか」お弓「理も非も除けて兩親がお頼み申し

千萬忝なうござる」トこの中喜兵衛小判を洗ひ仕舞うて座に直り。喜兵衛「イヤモウお粗末な事、かく貴殿方を饗應すも、何卒伊右衛門殿の聟舅の因を結びたさ、とはいへお岩殿といふ妻ある身、押してとは申されぬが、殊の外娘が執心、身共も殆ど當惑、それ故せめてお招き申し、顔なと見せて」ト一寸こなし。「武士のあるまじき事、御推察下されい」伊右「數ならぬ拙者をさ程御懇望とは、身に餘る御厚志、民谷伊右衛門かくの通り」ト手をつき禮をいふ。長藏「イヤモウ斯う申すも異な事ながら、喜兵衛殿は名に負ふ師直の家中にて、人も知つたる武士、殊に金銀は澤山、娘は器量よし、此人に思はるゝとは、あやかり者の民谷殿、お羨しう御座る」官藏「拙者が伊右衛門殿ならば、直に承知致しまする、又女房の古いのと疊の古いはいかぬもの、アノお岩殿は子を産むし、そこら邊が古くなつて居る、まだ水揚のお娘御をかへぐ〜とは、牡丹餅で叩かれるやうなものぢや、伊右衛門殿、承引なされてよく御座る」お弓「どうぞ伊右衛門殿のお心一つ、娘がおもひを叶へて」喜兵衛「コリヤ。ハヽヽ、縁は約束事で御座るて、併し御兩所、伊右衛門殿には密々にて咄も御座れば、貴公方は奥へ御座つて今一獻召上つて下されい」長藏「然らば左樣致さう」官藏「場所が變るとまた飲めるものぢや」兩人「ハヽヽ、左樣なら」喜兵衛「これからござれ」ト唄になり、長藏官藏奥へ入る、跡に喜兵衛お弓伊右衛門三人殘りて。「サヽお

の植込、栞戸をたて、喜兵衛屋敷庭口の體よろしく、二重の上に金の盥にて喜兵衛小判を洗うてゐる、傍に女房お弓、老けたる拵へにて給仕してゐる、眞中に伊右衛門、長藏、官藏皆々酒肴取散し、馳走になつてゐる、吸物膳を据ゑゐる見得にて道具とまる、合方になる。

お弓「どなたも宜しうお上りなされませ」伊右「イヤ段々の御馳走、こまとに恐縮に存じまする」長藏「われ〳〵迄も御相伴に預り、お禮の申樣もない事で御座る」官藏「左樣で御座る」喜兵衛「これは是は御挨拶、拙者致しかゝりし事御座る故、碌々お給仕も致さぬ、只今直に相仕舞ひまする、そこへ宜しう」伊右「先刻より見受けますれば、大枚の金子をお洗ひなさる樣子、いかゞな事で御座るな」喜兵衛「イヤこれは斯樣で御座る、お恥しい事申す樣でござるが、親共より貯への金子で御座つて、度々洗ひませぬと黴が生えまするで、そこでかくの如く仕りまする」長藏「イヤイヤ何賤しい事があらうか、是位尊いものは御座らぬて」官藏「われ〳〵はつひど金銀へ黴の生えたを見た事が御座らぬ、ある黴もはがして二つに致して遣ひたい」皆々「ハヽヽヽ」お弓「サア冷めぬ中にお吸物を」伊右「これは〳〵最早お構ひ下されな、重ね〴〵の御馳走でござるて」長藏「然らばお先へ戴きます」ト吸物の蓋を取つて。「ヤア〳〵是は小判の餡かけ、小粒の切肉」官藏「ドレ、なる程結構なお吸物でござる、然らば頂戴致さう」伊右「イヤ何から何までお心遣、

い、ハ、、、、時に留守居がない、お岩を呼んで、コレお岩や〳〵」お岩「アイ〳〵」トお岩納戸口より誂への産後の拵へ、草たばね、衿に麻をかけ、弱りし體、子を抱へ出て來て。お岩「ハイ何ぞ用で御座んすか、今迄お二人がいろ〳〵な話で氣を慰めて下さんした、何時にない笑ひましたワイな」伊右「それは幸ひであつた、今又伊藤のお使まゐり、今日お志のお饗應あるというて、呼に遣はされた故、一寸御兩所と一緒に參つて來る間、隨分風に當らぬ樣にして留主してくりやれ」お岩「ハイ〳〵左樣が宜しう御座りませう、先刻私への御見舞物、殊に血の道の藥と有つて下さんしたお心遣ひ、厚くお禮を申して下さんせ」伊右「承知致した、サア羽織を著して往かう」ト上手よりお岩よぼ〳〵羽織出して來て渡す。「サテいづれも參らう」長藏「御同道致さう」お岩「お早うお歸りなされませ」伊右「ツイ歸るぞよ」ト唄になり三人つれ立ち向へ入る、跡にお岩殘り、抱いたる子を下へ寐さし、藥を煎じにかゝる。お岩「今日は南風で逆上す、この宅悦殿は何處へ往たであらう、最前喜兵衛樣より下された此藥、どうかよさうぢや、ドレそろ〳〵煎じて飲みませう」ト下手へ行かうとすると赤兒泣く故、又上手へ來て抱上げいぶりつける、この見得よろしく道具かへし。

造り物三間の間二重舞臺、向ふ古當たる墨繩の襖を立て、上の方一間の障子家體、下の方柴垣に松

おくりやれ」宅悦「ハイ／＼畏りました、左樣なら往て參りませう」伊右「大儀ながら頼みます
る」宅悦「ドリヤひとかへり往てこようか」ト唄になる、按摩宅悦向へ入る、跡合方になる。
伊右「ア、浪人の身貧に暮すよりは、師直方へ取入り立身の願ひ、其手蔓は伊藤喜兵衛、これを
頼むは易けれど、さすればお岩を不縁して、先の娘の聟とならねばならず、其時はお岩への義
理立たず、幹木に勝る梢木なしと、やつぱりお岩を」ト思入ある、ト橋懸よりお槇また出て來
て門口を入り。お槇「お許しなされて下さりませ、又參りました」伊右「イヤ何ぞ急な御用かな」
お槇「お手紙が參りました」ト出す。伊右「ハイ／＼どれ／＼」ト取つて讀んで見て。「これは／＼
お手紙の趣では、お志のことゝ御座つてお招き下さるゝとの文言、忝ない、唯今それへ參
ります、宜しう仰せ下され」お槇「ハイ／＼左樣申しませう、お待ち申して居りまする」伊右「御
苦勞で御座る」ト橋懸へお槇入る、ト奥へ向ひ。「長藏殿、官藏殿／＼」ト呼立つる、奥より。
長、官「ア、何で御座る／＼」ト兩人出て來て。伊右「イヤ外でも御座らぬ、貴方達も御案内の伊
藤氏より、又候手紙到來、文言は今日われ／＼を饗應すとの事、參らうでは御座らぬか」長藏「御
尤も、かね／＼貴公へ御話申す通り。ナ、娘御がそれで御座るからの事さ」官藏「大抵の事なら
云ふ事聞いて遣はすがよう御座る、後生と申すもので御座るテ」伊右「さうおつしやると甚だ辛

太い者ぢやぞよ、汝ゆゑ大騒ぢや」小兵衛「ハイ〳〵どうぞ御料簡下さりませ」伊右「これは〳〵お使の手前騒々しい、ソレ小兵衛奴は先づあの戸棚へ浚ひ込んでおかつしやれ」兩人「心得ました」ト無理に戸棚へ小兵衛を押込み、戸をたつる。伊右「時によろしうお禮を申して下され、いづれ後刻お禮に罷出ますると申して下され」お槇「かしこまりました、長藏さん、官藏さんもこれに」長藏「これはお槇殿、左樣なら伊右衛門殿、彼の君よりのお使かな、嘸お喜びで御座らう、ハ、ハ、、」伊右「よろしう申して下され」お槇「ハイ左樣なら誰方もちとお出なされまし」伊右「御苦勞」ト唄になりお槇橋懸へ入る。「時にいづれも御酒一つ差上げう、それ毎度の通り臺所で直燗でおやりなされて下され」長藏「それは忝ない、然らば伊右衛門殿御馳走に」兩人「相なりませう」伊右「サヽ參れ〳〵」ト唄になり兩人は奥へ入る、ト伊右衛門宅悦跡に殘り。「コレ宅悦殿、さて段々と先日より、お手前以前の好をもつて一家に同居、雜用も採込に致した所、拙者だんだん不仕合ゆゑ貴公の世話ばかり、それ故唯今小兵衛が盗取りし一藥を質物に入れ、金子今日入るゝ間、左樣思うて下され」宅悦「これは〳〵伊右衛門さま、其樣な事おつしやりまするな、以前貴方の親御兵部樣に大恩受けましたる此宅悦、同居致せば貴方のお家、私は家來も同然でござりますて」伊右「何の〳〵、時に今申す通りの譯、一寸一走り質屋へ參り、手代を呼んで來て

をお願ひ申しまするが、どうぞあの藥は私に下されませ、と申す譯は、身にもかへられぬ大事のお主の病氣に上げたう御座りまする、私がどの樣な御奉公でも致しまする、どうぞこれお願ひ申しまする旦那樣」伊右「默りあがれ素野郎め、汝がどの樣な大事な主人か知らぬが、俺も亦日雇に遣うたも、裏へ自然薯掘りにうせたを正直な者と思ひ、今迄目をかけ家來同然に致して遣はしたに、恩を仇なる人非人、こりやあの藥はソウキセイというて鹽冶家に傳はり、仔細あつて親兵部殿に賜り、大切に所持致したるを、汝が盜取り逐電致した故、親の孫兵衛も番人つけて措いたれば、家へは歸れず、それ故うろついて居る所を、お二人の目にかゝり、捕へられたるは天罰といふものぢや、サア有樣に一藥を出せ〳〵」小兵衛「どうぞ此お藥は私に下さりませ、手を合して拜みまするワイ」伊右「エヽ此奴、甘言に致せば增長る大罪人、ソレいづれも此奴をしめ上げさつしやれ」兩人「合點ぢや」長藏「サア小兵衛、きり〳〵藥を出せ」小兵衛「こゝには御座りませぬ、どうぞ」官藏「出さぬと寧そかう〳〵」ト兩人して小兵衛を酷く打擲する、伊右衛門懷中を改める、小兵衛の懷より藥出る、伊右衛門ちやつと取上げて。伊右「扨こそ大切なる一藥を、この素野郎奴、それ縛しあげて暫時窮命」兩人「合點でござる」ト無理に兩人小兵衛に猿轡を箝めて縛る、此間にて宅悦お槙も出てくる。宅悦「ヤア〳〵小兵衛、わりやマア

うござりますと、申遣はしまして御座りまする」伊右「これは〳〵毎度〳〵御心添、誠に御寸志の品々ありがたう頂戴致しまする、宅悦殿、奥へ伴ひお岩に此由申傳へて下され、ヤレ〳〵お氣の毒千萬な」宅悦「左様なら一寸お岩様にお逢ひなされませ」お槇「ハイ〳〵一寸お伺ひ申しませう、御免なされませ」伊右「サア御遠慮なくお通りなされい」ト唄になり、宅悦案内してお槇兩人奥へ入る。「ヤレ〳〵毎日〳〵の心遣ひ、喜兵衛殿の娘御、ハテお笑止千萬な」ト捨臺詞の中、向ふ揚幕より。長藏、官藏「うしやアがれ〳〵」トいひながら長藏官藏兩人、浪人者の拵へにて、小兵衛木綿やつしの破られたるを衣て、髪を亂し、一本差おちぶれたる科にて、謝り謝り出て來る。兩人「ふとい奴ぢや、うしやアがれ〳〵」ト小兵衛をひどく兩人して引摺り舞臺へ來て。長藏「伊右衛門殿宅に御座るか、小兵衛を見つけましたる故、つれて參りました」伊右「ナニ小兵衛を伴れて御座つた、それは〳〵」長藏「サア内へ入れ」ト突込む、小兵衛面目ない科、伊右衛門立腹して。伊右「コリヤ小兵衛、汝を探して居る事晝夜わかたず、人歩をかけて探ね居つたワ、サア四も五もない、家に傳はる妙藥を奪取り逐電致したる大罪、サア何處へ遣はした、所持致しをるか、サア出さぬかどうぢや〳〵」長藏、官藏「のぶとい奴、妙藥を出せ〳〵」小兵衛「ヘイヘイ旦那様、貴方に合はす顔は御座りませぬ、成程お家の妙藥は私が盜みました、無理なる事

い所ながら、其樣に申すに依つて、一兩日は相待ちくれる、きつと詮議して差出せ、かけがへのなき大切な妙藥、一兩日中に戻さぬと、汝等も手討に致すぞ」孫兵衛「イヤたとへお手討になりましても申分は御座りませぬが、何卒小兵衛奴を詮議して、委細を分けまするに依つて、御勘辨願ひ上げまする」宅悦「サア〱旦那が彼の樣に仰しやるから、ちつとも早く内へ歸つて、小兵衛を探ねる工夫したがよいワイ」孫兵衛「ハイ〱左樣なら旦那樣、お暇申しまする」伊右「きつと詮議致せ、餘日は待たぬぞ」孫兵衛「かしこまりました、ハイ左樣なら」宅悦「しづかに行かしやれ」ト茶摘唄になり孫兵衛むかふへ入る。伊右「あの親父め、ぐるで致した事と見えるワエ」宅悦「イエ〱あの孫兵衛は大抵固い奴ぢや御座りませぬテ」伊右「なか〱人は固いというても當にならぬものぢやテ」トこの時橋懸より乳母お槇重箱を提げて出來り、門口から内を覗き。お槇「お許しなすれませ」ト内へ入る。宅悦「これは喜兵衛樣のお乳母殿、ようお出なされました」伊右「毎日〱のお使御苦勞、又今日も何か御用かな」お槇「ハイ主人左樣申しまする、お家さんも段々お肥だちなされまする、承りますれば、未だお血が騒ぎまするさうで御座りまする、これは一家共より到來致しましたる毒絶の物、粗末ながら差上げまする、又これはさるお醫者より頂戴致しましたる血の道の藥、これを二三度にお上りなされますと、血が治りまして宜し

二幕目　民谷伊右衛門内の場
喜兵衛内の場

造物三間の間平舞臺、上の方折まはりの障子家體、眞中上手に一間の杉戸押入、下がかり鼠壁、眞中暖簾口、下の方板塀、毎もの所に門口を立て、幕の裡に伊右衛門御家人仕事、傘を張つてゐる、其傍に按摩の宅悦、下に四谷の馬士佛孫兵衛、伊右衛門に言譯して居る、都べて浪人者家内の體よろしく、茶摘唄に幕明ける。

孫兵衛「どうぞ御勘辨をお願ひ申します」伊右「コレ〳〵其方が悴小兵衛がな、身共が屋敷の裏の籔坂へ、自然薯ほりに參るを、風と心易うあひなり、身共が宅へ出入致し、日雇同樣に使ひし所、一昨日身が家に傳はる祕方ソウキセイの一藥、身にも代へ難き大切な藥を盜み、行方知れず、それ故其許親の事なれば、知らぬというて濟まうか、たわけ者め」宅悦「イヤモウ旦那のいふが一々道理、孫兵衛どうぞ言譯して下され、口入した儕まで迷惑しますワイの」孫兵衛「イヤ御尤ながら常から正直な小兵衛、盜み致し走る樣な者でも御座りませぬが、どう致した物の間違か、いづれ小兵衛が出ます迄、どうぞお預けなされて下されませ」宅悦「旦那、あの通りに申し居るから、何卒こゝ一兩日お待ちなされて下さりませ、私もお願でござりまする」伊右「これ待ち難

殿の最前の詞、嘘か誠かとつくりと、一緒にゐて糺したら、もしや敵も。ヤサアつい知れまいものでもない、假の夫婦になつたが可いワイの」ト呑込ます科。お袖「なる程、いはしやんすれば私もどうやら」ト直助へ目をつける、ト直助ヱ、と愕りする科ある。「表面ばかりの、そんなら夫婦」伊右「これで互に」直助「力とたより」お袖「とはいふものゝ是がマア」お岩「あきらめ兼ねる女氣の」伊右「これも有理、しかし何時までいうたとて」直助「つきぬ名殘と」お岩「つきせぬ奇緣」お袖「鴛鴦の襖に引かへて」お岩「心のつるぎ刃」伊、直「やがて本望」トにつたりと兩人思入ある、ト此時以前の非人二人窺ひ出て。非人「人殺し」ト伊右衛門直助へ蒐る、伊右衛門拔討に一人を斬る、ト直助も一人の非人の手を捩上げる、お袖お岩怖がる。伊右「敵討と婚禮の首途の血祭り」お岩「かりそめながら祝言の」ト伊右衛門脇差を見て。伊右「これが則ち色直し」ト刀の血を拭ふ。お袖「涙のさかづき」お岩「さん〳〵くどい」兩人「繰言ながら」ト死骸へ思入。伊、直「どうやらかうやら」ト兩人顔見合はせ舌を出す、お岩お袖死骸に取つき。女二人「思へばはかない」ト直助非人を見事に投げる、伊右衛門手を合はす、この途端。女二人「ハアー」ト泣落す、雙方こなし宜しく　拍子幕。

な此世の縁」一お岩「親の死骸の此場にて」一お袖「夫と共に親子四人」一兩人「さうぢや」一ト有合ふ刃物、お袖は伊右衛門の脇差にて兩人死なうとする、伊右衛門直助慌てゝとゞめ。伊右「こりや狼狽へて今姉妹が自害して、親夫の敵は誰が討つ」兩人「エ、」一伊右「お岩、親も敵も打すてゝ、夫の操も忘れたか、お袖も共にマア〳〵待て」一お岩「デモ別れたる夫婦の中、今更どうも」一伊右「サア厭きも厭かれもせぬ中にて、懐妊の身の上何しに見捨てう、舅の亡き後は元へ戻つて夫婦となれ、親の敵は討してやらう、身共が爲にも舅の敵」一お岩「そんなら是から元の夫婦、たよりになつて親の敵を」一伊右「女房の親は身共の親」一お岩「嬉しうござんす」一ト泣く。お袖「あかれぬ中はもと〳〵へ、お返りなされて敵の助太刀。私はどうでも」一ト また死なうとするを直助とゞめて。直助「ハテ今僕が申す通り、與茂七樣を討つたる敵、尋ね出して討せねば、此身の潔白立ちませぬ、どうぞそれ迄お前の命、わしに預けて下さりませ」一伊右「直助が申す通り、左右悲しい辛抱もつゞまる所は夫の爲、首尾よく敵討つ迄は、兄が許して假の夫婦」一お袖「エ、」一伊右「サアそれが則ち世を忍ぶ世間の思はく、敵の油斷討つ手段」一お袖「デモ直助殿とかりそめにも、夫婦と呼びては未來の良夫へ」一直助「立たぬも有理さりながら、憂世を憚り假の夫婦、人目ばかりで離れ離れ、夜の寐所も別れ〳〵にするが潔白」一お岩「サア妹、表面は假の夫婦なりや願ふ所、直助

が、エ、これ今一足早くばおめ〳〵と、エ、残念な」ト悔しがるこなし、直助本花道より矢張り態と足音して驅來り、お袖を見るより。直助「お前はお袖さんか、ヤア〳〵〳〵これは先刻に見覺ある提灯といひ、扨は與茂七殿は」お袖「父さんと同じ所で」直助「ヤア〳〵これは大變だ大變だ」伊右「スリヤお岩、妹お袖が夫與茂七も、此所で死するを見れば、察する所、舅の身の上危い所へ駈つけて、助太刀致した此與茂七、却つて討れし此樣子、よつぽど敵は手垂と見ゆる」直助「さうだ、南無阿彌陀佛」ト腹切りにかゝる、伊右衛門驅寄り刀を押へて。伊右「ヤア其方は瀨左衛門殿の家來直助、何故に切腹致す」直助「サア切らねばならぬ此身の言譯、安い奉公するものは心をわるく現在の御家中の娘、これなるお袖樣に横戀慕、金びら切つて與茂七と、宵に二言三言の爭論、別れて切られた與茂七殿、儂に疑ひかゝるは必定、思へば忠義の與茂七樣へ勿體ない、横戀慕と先非を悔いて此身のいひわけ、それぢやに依つて」ト又腹切らうとする。伊右「エヽうろたへたか直助、申譯は有理ながらコレ能う聞け、汝が言譯相立つは、今死ぬる命を延はりて、お袖が力となつて、與茂七が敵さがし出し、討して遣るが身の潔白」直助「それは下郎が望む所、今迄の無禮、先非を悔いて敵の助太刀」伊右「それが面晴、お岩お袖、さうではないか」お岩「父さんに別れ夫に別れてる身の上」お袖「わたしも夫に別れた身の上、夢見た樣

案じらるゝ事ぢや」ト舞臺へ來ると上手よりお袖以前の形にて、小提灯を提げ走り出で思はず行當り。お岩「オヽそなたは妹」お袖「姉さんかいなア、お前は何しに」お岩「何しに所か、父さんの歸りも遲し、其方も戻らず、案じて迎に來たワイなア」お袖「わたしも今日は別れた夫與茂七殿に逢うて、今よひは是非大川端まで行くと言はしやんした、遲い故に爰まで來たのでござんす、アヽ胸さわぎが」お岩「なんぞ凶事でも」ト下を見て「ヤア〳〵此血ワイのウ」お袖「ほんに氣味の惡い、大層に血が」トあたりを見る中、兩人一緒に左門と庄三郎の死骸を見つけ、吃驚して取つき。お岩「ヤア〳〵そりやこそ父さんが」お袖「覺えの著物、しるしの提灯、與茂七さんも此處で」兩人「こりやマアどうせうぞいなア〳〵」ト兩人よろしく大泣になり泣おとす、ト伊右衛門直助拔足にて兩花道へかゝより窺ひ居る、兩人死骸を抱起し。お岩「モシ父さん、敵は何者でござんす、これいなア物をいうて下さんせ」お袖「ほんに父さんといひ夫まで、一つ所であへない御最期」お岩「時が延びたか死きらしやんしたか、今はの際に一言さへ叶はぬ事か、エヽ淺ましい」お袖「ホンニはかない」兩人「わかれぢやなア」ト伊右衛門東の花道から、ばた〳〵と足音させ驅來り、吃驚したる科にて。伊右「夜陰に何やら女の泣聲。ヤアわりや女房お岩でないか」お岩「ヤアお前は伊右衛門殿、父さんが殺されて御座るワイの」伊右「ヤヽこりやこれ舅殿を何者

大川端の體、こゝに直助頰被にて、襦袢ひとつにて出刃庖丁を持ち、與茂七の衣裳を著てゐる庄三郎を殺し、以前の提灯落ちてある、時の鐘にてよろしく道具とまる。

直助「戀の敵の與茂七め、宵の意趣覺えたか」トとゞめを刺す、矢張り捨鐘にて蟲の音、凄き合方。「後日見咎められぬ樣に面の皮を」ト持つたる出刃にて庄三郎の顏の皮をくる〱と剝き。「刃物があつては」ト思入、塀際の溝へ隱す、ばた〱になり上の方より左門赤に染みて出る、後より伊右衞門、拔刀にて一寸立廻りあり、左門をトゞ斬倒し、とゞめを刺し。伊右「强情ぬかした老耄め、刀の銹は自業自得、ハテ可い態だ」ト直助すかし見て。直助「さういふ聲は確に民谷」ト伊右衞門も透し見て。伊右「大星瀨左衞門殿の下部直助か、どうして爰へ」直助「戀の意趣ある與茂七奴をとう〱爰で」伊右「ばらしたか」直助「お前も誰やら」伊右「女房が親の四谷左門、お岩を返さぬ其上に、國で盜んだ用金を、けどられた老耄、後日のさまたけ、それ故是非なく」直助「ちやうど揃うた人殺し、一寸のかたに面の皮をめくつて當分氣休」伊右「俺もそんなら老耄の」ト刀にて左門の顏を切りにかゝらうとする、向ばた〱人音する、兩人一寸木隱する、時の鐘、合方になり、向よりお岩手拭かぶり、世話女房の拵へにて走り出る。お岩「セウよつぽど夜更けてもあらう、此マア父さんは何をして居さしやんすやら、急に胸騷がして、エヽ

入込むは屈強の身共が門札、この姿と」庄三郎「なる程、取かへて貴方は非人の姿と」與茂七「種々に變じて家再興を、弟必ず」庄三郎「兄者人」與茂七「然らば姿をかへ〴〵に」ト手早く著類引取り、庄三郎の非人の形を與茂七著て、與茂七の町人の形を庄三郎著る。庄三郎「この提灯は」與茂七「こつちは提灯いらぬもの、これも其方へ」ト庄三郎へ渡す。「期しての面會」庄三郎「相待ちませう」ト時の鐘にて與茂七薦を被り向へ入る、庄三郎跡見送り。「この姿を仲間の者が見つけたら面倒な、ちつとも早う爰を、さうぢや」ト時の鐘にて上手へ入る、花道より左門、以前の形にて出て來て。左門「世の盛衰とはいひながら、不慮の事にて家中は散り〴〵、浪々の身の貧苦の中、二君に事へぬこの左門、それに引かへあの伊右衞門、心の邪無道の惡者、あのお岩めは添はして置かぬ、それを左や右う望み居る伊右衞門、又聟に取る與茂七は、忠義の魂あつぱれ侍、ハテ思ふ樣にも行かぬものぢや」ト思案、この時伊右衞門下の生垣より窺ひ出て、左門の行先へ石を窃と蹴倒す、これにて左門躓きこける、其まゝ大袈裟に斬下げる、左門倒れる、伊右衞門足を踏かけ止めを刺さうとするを、よろしく踏附け、刀を振上げ巖乎見得、時の鐘にて双方よろしく、此道具まはる。

造物、向ふ一面の二重の上に遠見藏屋敷のかゝり、上の方遠見に橋を見せ、下の方に橋を半分見せ、

鬮は長いのだ〳〵」皆々「よし〳〵」ト鬮を拵へて引く、庄三郎長い鬮を取る。庄三郎「俺が長い長い、客分だ〳〵」非人○「イヤこいつは飛だ目に逢うた」△□「サア〳〵行つて來よう」ト捨白、時の鐘にて大勢橋懸へ入る。庄三郎「ハテ喧しい奴等だ」ト後見送り科あり。「今日晝淺草の寺内で、師直の家中に出逢ひ、すでの事に印鑑を。其時恰好兄者人が」ト此時、時の鐘合方になり、向より佐藤與茂七以前の形、提灯提げ出て來て。與茂七「たしか庄三郎が隱れ居る所はこの近邊」ト邊を見る、庄三郎透見て○庄三郎「さういふは兄與茂七殿か」與茂七「庄三郎か。これわが身も嗜め、如何に若いというて、最前とても思慮もなく、うか〳〵身の上を氣取られ、大切な此印鑑を見咎められ、殊に師直が家中喜兵衛とやら、彼奴は知らねど此方はよう存じて居る、身が參りあはせたから仕合、氣を注きやれ、シテ照月の掛地の手懸は」庄三郎「その儀詮議の爲乞食になり、諸國の取沙汰、手がかりを求めんと存ずれども、今に以つて。最前師直の家中に近より、歌合の定日を承り、其日に詮議せんと存じた所、思はざる不覺、殊に鹽冶家の會を師直殿へ引けしも、重器紛失の失策ゆゑ、親又之丞樣切腹、みな照月の一軸より起る事、ハテ是非もない儀でござる」與茂七「又之丞樣は拙者が實父、又兵部殿は養父ながらも義心の人、とも〳〵に寶の詮議を致せとあつて、態と別れ〳〵に此姿」庄三郎「何卒師直へ近よつて一軸の詮議を」與茂七「尤も

く行かしやんせ」直助「今行くワエ。とはいへ」ト直助、與茂七、お袖、三人顔見合はせこなし。與茂七「エヘン〳〵」ト咳ばらひ。宅悦「サア出て行け」ト慘く門へ突出す、直助門口より外へこけ出てこなし。直助「この意趣晴しは歸道」與茂七「夫婦の衆、大きにお世話になりました」ト出かかる、直助は透し見て。直助「めあては提灯」トいふを。宅悦「まだ行かぬか」お袖「ほんに煩い風の神」與茂七「これ」ト與茂七お袖の手を執る、ト門口の直助。直助「ハ、クツサメ」トこの途端皆々よろしく、禪の囃子にて道具まはる。

造物、舞臺向ふ黒幕、一面の生垣、上の方に古寺の門前、傍に石塔を建て、下の方非人薦張の小屋、舞臺前涙板、柳の釣枝、こゝに以前の非人大勢ならび居る、すべて本所番場川岸の體よろしく、庄三郎同く薦被にて、皆々一緒に竹の皮に肴の骨を包み、德利酒にて飲んで騒ぎゐる見得、禪の勤にて道具とまる。

非人△「今日の樣な仕事が毎日あれば可いな、一人前に一貫文ばかりについて居るであらうな」非人皆々「サア思ひ入れ飲め〳〵」庄三郎「時に今日の仕事は俺には沙汰なしだな、何ぞ俺に馳走しろ馳走しろ」非人□「可からう〳〵、たれかれといふと面倒だ、鬮にして酒屋八百屋、燒物を集めて肴屋といくがよい」大勢「よからう〳〵、鬮だ〳〵、併し一人餘るぜ」非人△「餘つたのが客分だ、

を遣うて見ろ、アノ首はころりだ、危い事〳〵、今迄いうた廣言も、青菜に鹽のあの姿、ほんに馬鹿〳〵しい顔だのウ」お袖「身貧には暮しても、歪まぬ心のこちの人、どうしても」お熊「はんに歯磨賣の直助さん、商ひ物のかんぼくの楊枝の手前も面目ない」德兵衛「明日から何處なりと、勝手に口中一切の藥歯磨賣るが可い、あの態では藥歯磨口中ともいはれまい」宅悦「どうして裸て口中がなるもので」皆々「ハヽヽヽ」ト兩人橋懸へ入る、直助俯いてゐる。與茂七「時に入らざる事で隙取つた、何かの咄は又明日の事、出直して來よう、これお袖、必ず舅殿へ俺が話はせぬが可いぞや」お袖「とつくりと相談した上で、又父さんに逢うて下さんせ」與茂七「それが可い夫が可い、さうせうワエ。それならお熊樣、私は今夜は歸ります」宅悦「久振での御對面、今夜は逢うてあげなさんせ」お袖「あの樣に夫婦の衆が深切に」與茂七「それもさうぢやが、今夜に限つた事はないワイの」お袖「さうならどうなと」トお袖一寸ひぞるこなし。與茂七「是お熊さん、挑灯を貸しておくれ、惡いのでよい」お熊「アイ〳〵サア〳〵」與茂七「サこれが座敷代と」ト金をやる。お熊「こりや有難う」ト二重の上より挑灯を出して火を點けてやる、與茂七取つて。お袖「もし必ずえ、そしてお前の所はえ」與茂七「今の所も委しく明日の事さ」宅悦「サア灸代屋敷代、皆俺が損をするから早く出て行かしやれ」直助「居ろというても居らりやアしねえ」お熊「そんなら早

これサア〳〵灸をすゑろ〳〵」トあわてゝいふ、宅悦うろたへて直助が脊中へ袋のもぐさを大きうしてすゑる。直助「あつ〳〵〳〵抑へた〳〵」ト兩人内へ入り。徳兵衛「コレ〳〵直助、何をしてゐる。直助「オヽ徳兵衛か、疝氣が起つて今氣つけの灸をすゑてゐる所だ」徳兵衛「ナニ灸所か、貴樣は〳〵太い男だ〳〵」直助「アヽこれ〳〵邊さはりがある、今に歸る〳〵」徳兵衛「歸る、イヽヤ親方の吩咐、よく聞かつせえよ。コレ齒磨の賣溜、卸店の懸先集めて十二三兩とつて、今日で二三日家へ歸らず、其上話を聞けば女郎買に行くの、地獄買に行くの。オヽ是は爰の家で差合だ、これ皆此方の錢といふては一文もない、皆親方の金を盜んで使ふのだ、モウ〳〵親方が料簡ならぬ故、裸にして突出せといふて、二人伴で來たからは、言譯も語り譯も聞かぬ〳〵、サアサア裸にならしやれ〳〵」ト兩人立ちかゝる。直助「アヽこれ〳〵尤だ〳〵、賣溜もこれ爰に十兩ある、まだ一文も使ひはせない、こゝにある〳〵」徳兵衛「あるなら受取らう」直助「サア有るけれど今こゝで」徳兵衛「エヽ扨は地獄に入れる心だナ、いよ〳〵捨てゝおけぬ、よこせ〳〵」ト兩人して財布をとり、直助を裸にして著物も金も皆取つて門口へ出る、直助裸にされて面目ない顏してしよげてゐる、皆々よい氣味ぢやといふこなし。與茂七「なる程、人といふものは表面からは知れぬものだ、今ぽん〳〵と金びらきつたが親方の金かえ、人の物をわが物顏、あの金

これお袖、そりや何いふのだ、おつう可笑しく持かけて、人に存分氣を持たせ、金まで取つた其上に、柳流しも惘れるワ、外の野郎と見損ひ、から鐵砲のつゝもたせ、噓と誠の二つ彈、恟りする男ぢやアねえ、煙硝臭せえしやら臭い、こそばゆい事よしてくれろ、サア今貸した金を出せ、いくら男が立派でも、金といふ奴には敵ふめい、御亭主〳〵、とも〴〵に頼みます」與茂七「どういふ譯か知らねども、女に貸した金とあれば、高が知れた端た金、筋ばる事もあるめえさ」お袖「さうで御座んす、無理に借りたる金ぢやなし、金で面はる戀の餌、ハイ元より欲うは御座んせぬ、サア戻してあげやんせう、これ必ず此末、きたなびれた事いうて下さんすな、手に取るも穢はしい」ト財布のまゝ投げて遣る、直助取上げ。直助「ヤレ〳〵恐しや、すでの事に此金まで、油斷のならぬ世界だ、マア〳〵此方へ懐中しませう」お袖「僅な金を大層に、心のしれた人よりも、二世と交した大事の夫、噓にも見かへらるゝものかいなア」與茂七「すてゝおけ、世は樣々だ」ト二人寄添ふ。直助「牛は牛づれ、因果な奴們だ」ト此時ばた〳〵にて齒磨の賣子、仲間一人と德兵衛をつれだち出て來て。德兵衛「確に向の家だ、直助めがゐたら親方のいふ通りしてやらう」○「それがよい〳〵、サア早く〳〵」ト門口へ來て。德兵衛「そこに居るは仲間の直助ぢやないか」ト此聲を直助聞いて恟りし。直助「サア〳〵德兵衛めが聲だ、大變だ〳〵、

外の女中ならどうさしやんすえ」與茂七「どうと云うてどうするものか、高で買ひに來やせぬワイ」お袖「それに又どうして爰へ」與茂七「それは斯うだ、お屋敷者の地獄がある、年恰好も似より故、もしやと思うて來て見たのだ」お袖「アヽ口は重寶なものなア」與茂七「そりやお互長左衛門だ、ハヽヽヽ」お袖「ホヽヽヽ、マア〳〵久振で逢うた故、水に流して下さんせいなア」與茂七「そんなら互にこれ限にして中直り」ト四邊を見ると徳利と鉢肴のあるを見て「幸ひこゝに酒肴、媒介いらずの中直り」お袖「それが眞の水いらず」與茂七「オツト妙女夫だ」ト酒出して茶碗につぎ、二人睦じう飲んでゐる、ト暖簾口より直助窺ひ出て、此體を見て吃驚し。直助「もし〳〵御亭主御亭主、先刻にお松さんが預けた酒は何處にある〳〵」内にて「ハイ〳〵」ト宅悦出て來て、二人が飲んで居るを見て。宅悦「ヤアお袖さん、その酒は」與茂七「爰にあつたからツイ飲んだ」直助「ナニ飲んだえ、人の買つた酒を飲み、其上女をつかまれて、先刻にから立聞けば、猫に鰹魚の名告あひ、犬骨折つて鷹とやら、其方は摑んで可からうが、今夜買うたる其お袖、あんまり廻して貰ひますまい」與茂七「ムウ誰だと思うたら、以前は大星瀬左衛門が中間直助殿、見れば今では立派な形、これには譯が」お袖「譯も何にも御座んせぬ、つけつ廻はしつ私を口說く、厭と思へど今の身は、荒だていはれぬ蔭の世渡、柳流しにしてゐるたワイなア」ト直助憤として。直助「これ

與茂七「ソリヤ其方の勘定は可からうが、此方はつまらない、何でも」ト又寄る、ア、と突退ける、いろ〳〵あつて一寸追まはし、行燈の風呂敷おちる、兩人顏見合せて吃驚。與茂七「ヤア其方は」お袖「お前は」與茂七「變つた形で」お袖「恥しう御座りまする」ト與茂七慍としたこなし。與茂七「ヤイ〳〵汝はマア、こりや何の態だ」ト嚴と坐る、お袖面目なき科、合方。「汝に限つて此樣な所爲はないと思の外、畜生の樣な根性、エヽ見さげ果たる女だなア」お袖「もしこちの人、譯も聞かずに畜生とは」與茂七「畜生であるまいか、此態は何だ」お袖「サア譯を聞いて下さんせ、お前に離れて月日を送り、父さんの浪人に方便も細き煙の代、仕樣もやうも內證でこの生業、惡しう思うて下さんすな、誰に一度も終に帶解いた事は御座んせぬ、今現在のお前が證據。アレあの通りで御座んすワイなア」與茂七「そりや今は成程堅い樣だが、コレ無理な客が有つて見ろ、どうされる事か知れぬ、今眼前に俺を見ろ、すんでの事で。危い事も程來のあるもんだ」お袖「その樣にまで疑はしやんすなら、手にかけて下さんせ、父樣の爲にする事なら、君傾城もまゝある事、それとは是も變らねど、私が心の貞節は、神より外に知らぬワイなア」與茂七「ムウいつ迄云つても同じ事だ、モウ可い、了簡せう」お袖「それでお前は了簡しても、私はまだ了簡なりませぬ、私しや父樣に此樣に苦しませて、お前は榮耀にお山狂ひ、ほんに私であつたからよけれ、

もあるから、燈火は御免だ」宅悦「そんなら行燈へ忍びの風呂敷かけて」お熊「それがよう御座りますワイなア」ト行燈へ風呂敷かける。宅悦「そんなら一寸ぬすみにして」與茂七「地獄の廻しも珍らしい」お熊「それも間夫の中ぢやワイなア」與茂七「おそれたハヽヽ」宅悦「どりや一寸場合切つて」ト宅悦お熊奥へ行く、跡合方になり。與茂七「何でも顔見ぬ中が山だ、後で吃驚するものだ」トこの時お袖をお熊伴れて來て、手早く蒲團を布き。お熊「與茂七さん、それお娯み」トお袖をさしつける。お袖「どなたか能うお出なされました」與茂七「だれだか、今宵は御苦勞で御座りやす」お熊「だんまりとお話し、お袖さん、よい加減に奥の人へも」お袖「アイ承知でござんす」お熊「ドレヤ奥へ行て」トお熊は入る、與茂七煙草の火でお袖の顔を見ようとして、無性に火皿を吹く、トヾむせて。與茂七「時にお前、屋敷ださうなが、どういふ譯で此樣な勤をしなさるえ」お袖「どうというて父樣の爲で御座んす」與茂七「嘘々、可愛い男の爲で有らう」お袖「そんなものは御座んせぬワイなア」與茂七「なけりやア一寸男になりやせう」ト寄る、アヽと突退ける。お袖「其樣な事は」ト忌がる。與茂七「ナニ其樣な事は。この樣な事するから來たのだ、サア一寸手附を」お袖「アヽ申しどうも此事ばかりは」與茂七「そしてまアお前は何をしに來たのだ」お袖「サア其樣におつしやると誠に辛い事でござりまするが、誰方にも言譯いうて唯歸つてお貰ひ申しまする」

宅悦行燈を提げて出て來り。宅悦「コリヤお二人眞の咄、ちやうど奥へ床を敷いておきました」直助「ソリヤお世話で御座りまする、サア奥で話さう」お袖「然うせうワイなア」宅悦「お袖さん、おつれ申しておくれ」お袖「アイ〳〵」ト直助お袖奥へ入る、トこの時、時の鐘合方にて、向よりお熊與茂七をつれて出て、花道にて。與茂七「コウお熊さん、いよ〳〵屋敷出の堅さうが、うで御座んす、今會うたら直に知れる事でござんす」與茂七「それもさうだ、逢はぬ中が山だ」お熊「サアござんせ」ト合方にて舞臺の門口へ來て、つつと內へ入る、宅悦見て。宅悦「手前もマアよい加減に戻らぬか、家にはお客がたんとあるし、大抵忙がしかつた事ぢやねえ」お熊「サア私も早う戻る所を、アノ與茂七さんに逢うて、馬道の藤屋で久しぶりで御馳走になりやした」宅悦「それは忝ない、何處にお出なさるな」お袖「與茂七さん、お入りなされませ」與茂七「ハイハイおゆるしなされまし」ト與茂七內へ入る。宅悦「これはお久しう御座りました」與茂七「お前にもお變りなうて、ハヽヽヽ」お熊「こちの人、與茂七さんがあのお袖さんを呼んで、ひとつ飲まうと仰しやるので態々」宅悦「アヽこれ。お袖樣は奥に〳〵」ト小聲にて奥をさしていふ。お熊「さうかえ、そんなら一寸さういうて」ト與茂七と囁く。與茂七「ムヽそんなら奥に來てゐるのか」宅悦「ハイ左樣でござります」與茂七「そりや妙だ、これ併し俺も屋敷出と聞いては、少し差合

せ、日外やの騒動より夫とは別れ〳〵、父樣は浪人、しやう模樣も内所で人の酌とり、酒の座の相手になるも親の爲、君傾城になと身を賣つてと思へど、堅い父樣の目顏を忍んで此樣な形、詫はすれど心は夫へ立つる貞心、終に一度も帶解かず、それ故態と打明けて、來る客衆に譯いうて無心ばつかりいふつらさ、道理に詰つて去ぬ人や、又腹立つて歸る人、みなそれ〴〵に交際うて、勤むる胸の苦しさは、熱湯を飲む樣ぢやワイなア」トほろりとする科、直助もしをれて。直助「イヤさう段々と聞けば悲しくなる、木折で行かぬが戀の道、その道筋も樣子を聞けば忘れて仕舞うた。併し私も男だ、今お前が難儀の事を聞き、又見ず知らずの者でも、金を貸してくれる程だものを、況て以前の好みのお前、幸ひこゝに賣溜の、親方へ納める金が十兩ある、お前の心さへ解つたら、隨分貸してあげようが、寧そ手短に遣らう、しかし其處が話だ、心中見せた儂がいふ事、それでも厭か得心せぬかえ」ト懷中より財布の金を出して見せる。お袖「サア身貧にくらす父さんの、お爲になつて下さんすお前の心中、事と品によつたらば」直助「叶へてくれるか」お袖「どういふ者の張合で」直助「味にからんだ其詞、こつちも心中見せませう」ト財布を投げてやる、お袖取つて。お袖「此金を心中とばえ」直助「心おきなく遣ひなさいな」お袖「かなじけなう御座んすワイなア」直助「アヽ金の光は偉いものだなア」ト此時奥より

ござりまする」直助「そんならさうしませう、待つ中が花だ」宅悦「それからお出でなされませ」直助「オイ〳〵」ト唄になり奥へ入る、ト橋懸より三ツ大の調市、以前の形にて御用徳利と、鉢肴をもつて出て來て。調市「御免なされませ、これはお松さんが、こゝの家へ持つて來て置いてくれろといひなすつた故、置いて下さいまし」宅悦「そんなら其處へおいて行てくんなさい」調市「ハイ〳〵」ト下手へ入る、ト入替つて橋懸よりお袖出て。お袖「おゆるしなされませ」ト内へ入る、宅悦見て。宅悦「ヤアお袖さん、ようお出ぢや、今お客が來て奥で待つてお出だ。申しお客さん、お袖さんがお出でござりまする」直助「アイ〳〵」ト合方になり、奥より直助出て來て顔見合はせ。お袖「ヤアお前は直助さん」直助「お袖さん、おつう仕組んで來たらうに」宅悦「そんならお客はお馴染か」直助「五年以來のお馴染さ」お袖「恥しうござんす」トこなし。宅悦「ドリヤ燈の仕度でもしようか」直助「お袖さん、以前の事は捨てゝ終うて、モウ斯うなつたら賣物買物と、サアいふと腹が立つであらうが、物は相談だ、お前の亭主の與茂七殿は行方知れず、此間から聞けば、親の貧苦にお前の細腕、どの樣に稼いでも、稼ぐに追つく貧乏犬、轉合の相談で儂とひとつに成つて見な、此樣な見つともない事はさせぬ、とつくりとマア思案して見なせえ」お袖「サア事を分けていうて下さんすりや、私も物を打明けて話しませう、聞いて下さん

て此道具かへし。

造物、三間の二重舞臺、向ふ鼠壁、眞中に暖簾口、上の方に一間の障子家體、下の方簸疊、いつもの所に門口をたて、これに灸點所と書いた看版を出し、爰に按摩の宅悦、捨白にて茶をわかし居る、テンツヽにて道具とまる。

宅悦「ヤレ〳〵今日は灸點の忙しない日ぢや、それにマァお熊は何をしてゐるか、早く戻らいで茶まで涌しておかねばならぬ、馬鹿々々しい」ト此時テンツヽにて茶店の女房お松先に立ち、跡より齒磨賣直助、羽織著流しの形に著替へ出て來て。直助「コレお松さん、どうぞお前の働で、呼んで來ておくれ」お松「合點で御座んす、サア〳〵かうお出」ト舞臺の門口へ來り。「宅悦樣、お客をつれて來ました」宅悦「アイ〳〵そりやァお世話でござりました、サア〳〵お入りなされませ」直助「ハイ御免なさい、どうぞ灸點おろして下さりませ」トいひながら直助入る。お松「此お客は私が心易いお方、どうぞお袖樣に灸をすゑさせておくれよ」宅悦「オット承知〳〵、お前歸りがけに一寸お袖さんを呼んで下さりませ」お松「アイ〳〵、直助さん待つてお出よ、どりや往てこうか」直助、宅悦「これはお世話で御座りました」トテンツヽになり、お松下手へ入る。

宅悦「サアもし今にお袖樣が來るから、奥の座敷でお待ちなされまし、奥は人目立たぬ故奇妙で

き、われはそれより重器の詮議、今に手懸相知れず、樣子を聞けば　袖は此寺内に雇はれ、そこゝに暮すとの事、どうぞ逢うて何かの話を、何卒よい傳手がありさうなものぢやが」　ト思案の所へ、上手より灸點屋の女房お熊出て來て、與茂七を見て。お熊「ヤアお前は與茂七樣、遠い所を觀音樣へお參りかな」與茂七「オ、お熊さん、山の手に居た時は近所ゆゑ、よう逢ひましたが、此淺草へ宿替して御座つたと聞いたが、この近所か」お熊「サア段々の不仕合で、今此馬道の藪の内、灸點屋をして居るワイなア」與茂七「そりや知らぬ事だの。オヽ時にお前、この近所の事はよく知つてゞあらう、此邊は全地獄屋、圍はれの多い所だの、何ぞ面白い可笑しい事はないかの」お熊「イヽエ別に面白い事もござんせぬが、私が家へ來る子に、屋敷出の地獄があるぞえ」與茂七「ナニ屋敷出、そいつは妙だ、御殿女中の樣か」お熊「さうではないが、固い娘で滅多に帶は解かぬといふ評判ぢや」與茂七「其堅い所が賞翫だ、そいつは今から買はれまいかな」お熊「買はれる段かいなア、ツイ私が近所藪の内の法華寺の隣だ」與茂七「ソリヤ妙法蓮華經だ」お熊「直に法華でお洒落だな」與茂七「ホンニ法華の、幸ひだこれから直に。とはいへ今の印鑑を」お熊「ナニ今のやうかんとは」與茂七「すんでの所で取られる所」お熊「あの晝とんびが」與茂七「エヽ間違ひきつて居らア、ハヽヽヽ」お熊「サア行きませうか」　ト辻打にて兩人連立ち上の方へ入る、時の鐘に

印鑑を取つたのだ」與茂七「ナニ印鑑を、そんな物は存じませぬ、唯今のはアリヤ鼻紙でござりまする、それ御覧じ、鼻紙でござりまする」ト出して見せる。扇彌「なんでも怪しい彼の非人め」ト蒐らうとするを與茂七とめて。與茂七「ア、申しこの非人は氣違で御座りまするナ。狂人ぢや狂人ぢや」ト庄三郎の方へ目配でいふ、庄三郎のみ込むこなし。「サア其氣ちがひを捕へて、とやかう仰しやるお醫者様もどうやら」扇彌「なんだ」與茂七「狂人の様なお方でござりますぞえ。ソレ非人殿も斯ういふ所にうろつかずと、ちやつと外を稼ぐがよい」ト庄三郎に早う行けといふ科。庄三郎「ヘイ〳〵有難う御座ります、ドリヤ並木の方へ行かうか」ト下座へ入る。扇彌「エヽこれ折角詮議のあるアノ非人奴を」與茂七「エヽモ非人を捉へて詮議もなるまい、御人體が廢ります、ハヽヽヽ」喜兵衛「役にも立たぬ事で大分手間どつた、扇彌老、巴屋へ參つて支度致さう、サヽ來やれ〳〵」扇彌「左様致さう、今の紛擾で腹が減つたに、乞食かつたゐと捧打ぢや、ハヽヽヽ」お槇「サア參りませう、今の騒で戀しいお方を」お梅「あはれぬといふ縁であらうか」トお梅一寸しをるゝ科。喜兵衛「氣の小さい、又逢はれるワさ」扇彌「サアお出なされまし」ト大拍子にて下座へ入る、この時與茂七楊枝店に腰かけてゐて皆々を見送り。與茂七「アヽこれあぶない事で四座の印鑑、弟が」ト思入あつて。「日外やお家騒動より別れ〳〵の女房お袖、舅左門殿方へ預けお

ト錢を出してやるト。庄三郎「ハイ〳〵有難う御座りまする、旦那は好う見受けまする所が、あなたは師直様の御家中と存じまする、近々お歌の會が御座りますと承りましたが、何日頃でござりまする」喜兵衞「ムウ此非人は異な事を尋ねる、尤もお上より仰付けられしお歌の會はある筈なれど、非人の身としてそれを聞いて何に致す」庄三郎「サアそれは。何でござりまする、御祝儀に參らうと存じまして」喜兵衞「それで尋ねるのか、イヤ〳〵左様ばかりでない、察する所、鹽冶家の浪人者と覺えたり、家斷絶を根に持つて、當家の能の妨げ致す意であらう、コリヤやい此度の會は、鹽冶家で勤むべき筈なれど、大切なる墨蹟の一軸、紛失致せし失策により家退轉させ、浪人扶持ばなれし、要らざる事を問立して小癪な奴の」扇彌「かういふ奴はいつそ斯う」ト蒐るを庄三郎一寸立廻り。庄三郎「非人と思うてほて惡戯、さう手籠にもなりますまい」扇彌「何を汝が」ト立廻の中、庄三郎懐中より印鑑を隕す、扇彌手早く取つて。「ナニ四座の印鑑、さては」ト逸散に驅出す、庄三郎も續いて追行く、神樂になる、向より與茂七、小間物屋のこしらへ、荷箱を脊負ひ出て來て、此體を見て扇彌の持つてる印鑑を取上げ、突廻して舞臺へ來る。「コリヤ〳〵町人、わりや何で非人の肩もつ」ト庄三郎與茂七と顔見あはせ、互に知らぬ振をして。與茂七「コリヤ知らぬ非人なア。サア知らぬ非人なれば何の贔屓致しませう」扇彌「又何で

つ頃、娘お岩方へ遣はせし結納の金子、封のまゝ差置きしに、計らず封を切つて見れば殿の極印」伊右「ヤア」ト悔りする。左門「汝が親の民谷兵部は、心よからぬ者故、親子は一體惡事の取沙汰、なんと聟には致されまい、それ故今日の禮は又重ねて」ト行かうとするを引きとめて。伊右「それ故身共を離緣したか」左門「如何にも、渴しても盜泉の水は通さぬワエ」伊右「すりやどうあつても」左門「四谷左門は武士だワやい」ト振切り、唄になり花道へ入る、伊右衞門跡見送り無念の科あつて。伊右「どうで一應では行かぬ老耄、殊に大事を知つたる奴、あの樣子ではとてもお岩は戾しはせまい、寧その事に手短に、歸る道筋大川端、先へ廻つて、ソレ」ト引からげ逸散に向へ走り入る、上手より喜兵衞娘お梅、乳母醫者みな〳〵出て來て。喜兵衞「娘、あの人か。人品骨柄一器量ある男、あの人ならば隨分聟に」ト思入。「しかしながら、妻のある身はハテ何とも」お梅「イヽエたとへお家樣があつたてゝ、あのお方ならでは」ト思入あつて。喜兵衞「添はぬ心か」お梅「アイ」お槇「御病氣の元も此事で御座りまする」喜兵衞「ムウ今一度逢ひたいものぢや、汝も見たいか」お梅「アイ」ト恥しきこなし。喜兵衞「俺も見たいワ、ドレ」ト皆々行きかかる、ト下座より奥田庄三郎、非人の拵にて出來りて。庄三郎「ハイ結構なお旦那樣、どうぞ御法捨をお願ひ申しまする」喜兵衞「オヽ非人か、手の裡をくりれう、ソレ取して遣せ」奥瀬「サア戴け」

所存か存ぜぬが、取戻して其上に、拙者を騙り去状取り、それもお家騒動ゆゑ、事納り次第、又々お岩は戻さんと、ぬつぺりとした嘘言に乗り今での後悔、どうぞお約束の通り、縁ござるならお岩はお戻し下されぬか」左門「イヤそりやならぬ」伊右「なぜなりませぬ」左門「ハテ先達つてお家騒動の砌、御用金數多紛失、其盗賊も大概知れてはあれど、かゝる節に事荒だてたるとて詮ない事と、郷右衛門殿と申合せ、穩便には濟ませども濟みがたないは胸の裡、照月の一軸、まつた印鑑とても紛失、預主の大星瀬左衛門殿を害し、奪取つたる曲者いまだ相分らず、二つには御勅使饗應の茶の湯の折から、刷毛目の茶碗も行方しれねば、親子兄弟とて迂濶にならぬ此度の大事、御家再興を願ふ此左門、滅多に縁は結ばぬて」伊右「イヤ左門殿、味な物のいひやう召さるが、重器が紛失して金がない、瀬左衛門殿を害せし者が知れぬと、何ぞかう拙者が存じた樣な物のいひ方、まだ聟にしたる此伊右衛門が心は知れませぬかな」左門「知れぬ〳〵、ずんど知れぬ」伊右「ナゼ知れぬ」左門「ハテお身にも疑かゝりあるワエ」伊右「だまれ左門、何で此伊右衛門に疑があるのだ、餘りずはう〳〵と物をいはつしやるな、疑かゝる證據があるか、あるなら爰へ出せ」左門「ハヽヽ、盗人たけ〴〵しいと、こりや假にも親子となつたる故な、つゝみ匿すは武士の情、理非を曲げて計らうておいたワやい」伊右「そりや何を」左門「さい

て。伊右「こりや〳〵まて〳〵、身共が挨拶ぢや待て〳〵」ト左門此時伊右衛門と顔見合せ面目なき科。「まづ〳〵」ト左門を上手へ押やり。「コリヤ非人ども、これなるお侍は身共と熟懇の人、なか〳〵手の内など請ふ人でない、なれども差かゝつた凶事。ソレ酒代にしやれ」ト包金投げてやる、非人取つて。非人△「ヤアこりやお金ぢや」伊右「いひ分はあるまいな」非人△「イヤモウ何にも申しませぬ」非人皆々「有難うござりまする」伊右「禮には及ばぬ、早うせう」非人皆々「ハイハイ結構な旦那ぢやなア」ト非人皆々下座へ迯げて入る、左門迷惑の科にて。左門「これはこれは急難を救ひ下され忝ない、お禮は追つて、又重ねてお目にかゝらう」ト行きかゝらうとするを伊右衛門とめて。伊右「アイヤ暫くお待ちなされませ」左門「イヤ心も急けば唯今の金子は明日返濟申す、お禮は其節」伊右「イヤ親人お待ちなされ、親子あ間に何の一禮、唯今のはほんの寸志、必ずお禮には及びませぬ」左門「サヽヽ其樣に親子といはるゝが忌さに、禮は重ねて」伊右「禮には及ばぬ、伊右衛門が申す事、一通りお聞なされて下されぬか」左門「サアいふ事も聞く事も最早ない、お岩を遣はしたればこそ聟舅、娘を取返した上からは他人、用事はない筈」伊右「イヤ用事が御座る、どうぞお岩をかへして下されぬか」左門「ムウ」ト合方になり。伊右「左門殿、この伊右衛門にお岩を遣はされてより睦じう暮し、厭きも厭かれもせぬ間を、如何な御

まだ間もある、是から風呂へでも入つて衣裝を著かへ、商賣物の歯磨で」お松「やつしたが可いワイなア」直助「そんなら必ずお松様、晩には又一時の榮華に、千年をのびる其意で」お松「それも壽命の」直助「藥歯磨」ト賣りながら辻打にて下座へ入る。お松「まづ晩には直助さんを伴れて行くと、はねにはなるといふものぢや、それをはりに店でも片づけうか」ト茶店へ入る、大拍子になり、向より四谷左門、浪人者の拵へにて編笠を手に持ち出る、ト是を非人大勢して左門を引張り、挑合うて出る。非人大勢「了簡ならぬ〳〵」非人△「何で俺們が場所を荒して歩行のぢや」左門「イヤ〳〵今日始めて參つた者、了簡して下され」非人皆々「ならぬ〳〵、引摺つて行け〳〵」ト大拍子にて舞臺へ來る、この跡より民谷伊右衛門浪人の拵へ、五十日羽織大小にて様子窺ひながら跟いて來て、舞臺の下の方に候ひ居る。非人大勢「サア〳〵譯をつけろ〳〵」左門「イヤ〳〵其様に申されな、浪人の身のたつきなく、據なく今日始めて此所へ參り、法捨袖乞致し、未だ一錢も貰ひは致さぬ、胡論に思はゞ改めて見やれ」非人□「喧しいワエ、新米乞食の癖に、何だ一文も貰はぬ、嘘をつく奴だ、此上は汝が身ぐるめ剝いで腹を癒るのぢや」左門「これは聞分のない、衣服を剝奪らうとは、畢竟盜賊の沙汰であらうぞ」非人○「乞食侍のくせに大風な奴だ、擲きのめせ」非人皆々「合點だ」ト左門を手籠にかゝる所を、後より民谷伊右衛門中へ入りとめ

か」お松「出るだんかい」直助「ムウほんのこれが地獄で佛ぢや、エヽ有難い、そして宿はどこだ」お松「アノ藪の中の細道よ」直助「しんとして味い所だ、是から直に行かうワイ」ト此時輕業の鳴物にて花道より酒屋御用調市出て來り。調市「三ツ大御用〳〵」直助「コレ〳〵酒屋〳〵待て〳〵」調市「ハイ〳〵酒をもつて來ませうかな」直助「オイお松さん、お前案内しておくれ、俺は○印だ○印だ」お松「何の禮はいらぬが、わたし連れて往てあげうか」直助「有りがてえ。時に一寸一口飲まぬと咄が出來ない、酒屋、これ一升持つて來い」調市「ハイ〳〵爰へ持つて來ますのか」直助「ナニこゝぢやない、お松さん敎へてやんナ」お松「これサ藪の中の三軒目の家へ」調市「エ、あの地獄の看版の出た家かえ」直助「コレ〳〵お松さん、地獄にも看版があるか」お松「ナニお前こそやに看版があるものか」調市「それでも閻魔樣が灸をすゑて居る看版だ」お松「エヽ其筈さ、家は灸點屋ぢやもの」直助「とんだ間ちがひ、地獄の看版もあるめえ」調市「それでも閻魔樣が、それ〳〵お前の顏に似て居る〳〵」直助「此調市はいろ〳〵な事をいふ奴だ、うぬ見ろ」調市「ハハヽヽはらたち花だ〳〵」ト下座へ迯げて入る。直助「忌々しい調市めだ。時に往かうか」お松「よからうけれど夕方から晩の事が可いぢやないかえ」直助「なる程、晝の地獄も殘念、そんなら晩方から」お松「私が案内して藪のうちへ」直助「竹子掘に」お松「行くのかえ」直助「ハヽヽ

意氣張に、猶々思ひが」ト ちよと思入。「萬更憎くはあるめえが」ト いふを無言にて上手へ行かうとする直助とめて。「コレお袖さん、挨拶なしにふい德寺は、扨はお氣にいらずか、二日醉のお腹立を治しておくれ、どうだ〳〵」お袖「いかに此身が零落れて、此樣に流浪しても與茂七といふ夫もあり、それに何ぢや、いふ事を諾いてくれいの、又女房になつてと、あた厭らしい口惜い、モウ此後聞きともないワイな」直助「ハヽヽヽお前その樣に云つても、與茂七は大切な照月の一軸を失うた落度にて、鹽冶家其外一家中皆騷動の其元は、預り主たる大星瀨左衞門殿の大失策、寶紛失なしたれば、手に入る迄は行方知れず、今頃はのたれ死でもしてゐるだらう、それを守つて居るは、多い長才坊だ、ハヽヽヽ」お袖「エヽ憎らしい、其樣にいふ程いやさが增すワイなア」ト 振きり行くを。直助「そんなならどうでも」お袖「知らんワイなア」ト 振きり辻打にて上手へ入る、跡輕業の合方になる。直助「なる程、以前に變らぬ片意地な女だ、どうぞして手に入れたいものだ」ト 思案のこなしあり、下座より茶店の女房お松出て。お松「直助さん、最前から樣子は聞いたが、お前あのお袖樣によつぽど北山時雨ぢやなア」直助「面目ないも古いやつよ」お松「お前もマアあの子なら彼の樣に骨ををる事はないワイなア」直助「そりやお松樣、どういふ譯だ」お松「お知りでないか、あの子は地獄に出るよ」直助「エヽそんならあの地獄に出る

段の様子はあれにて承りましたが、お腹の立つは御尤ながら、何を申すも女の事、御料簡なされて下さりませ、私も同じ仲間の歯磨賣、まんざら楊枝屋とのいた中でもござりませぬ、それ故一寸御挨拶に憚りながら差出ましたので御座りまする、何卒御了簡下さりませ」喜兵衛「ムヽ見れば小商人歯磨賣、なるほど汝が申す通り、高が女の事取るに足らず、如何にも汝に免じて了簡致して遣はさう」直助「それは有難うござりまする、これお袖さん、モウ何もいひなさんな、コリヤお侍様、有難うござりまする」喜兵衛「何の〳〵、思はぬ事に手間どり、サア娘、扇彌老、參詣致さう」お梅「それが宜しうござりませう、そんなら扇彌さん、乳母」扇彌「サアお參りなされまし。とはいへ憎くい」ト意氣ごむ直助一寸とめて。直助「マアお出なされまし」ト大拍子になり、喜兵衛、お梅、お槇、扇彌上の方へ入る、直助跡見送り科ある、お袖前へ出て。お袖「直助さん、大きにお世話でござんしたなア」直助「何のお前、併しお袖さん、お前も又よい加減に邸氣質を捨てたがいゝ、昔は昔今は今、長刀さへも菜刀に變りはてるが世の盛衰、以前は鹽冶の御家中で、人も知つたる四谷左門、その娘御のお袖さん、佐藤與茂七といふ聟のあるも合點、わしも又大星瀬左衛門殿に仕へた中間直助が、今は憂世を流し賣、歯磨商ふ松谷權兵衛と、香具仲間で知られたる、匂の高い代物だ、此間からとやかうといへど少しも取上げてくれぬ心の

お槙「どれなとお氣に入つたのをお取りなされませ」喜兵衛「サア〱見やれ〱」ト店にある楊枝見るとてお袖と顔見合せ。お袖「ヤア貴方は」喜兵衛「そなたは確に四谷左門が娘でないか」お袖「伊藤喜兵衛様、お久しう御座りまする」ト合方になる。喜兵衛「ム、世の盛衰とは申しながら、以前は同家中であつたが、そもじの親四谷左門と身共とは同役、仔細あつて鹽冶家を見限り、今では師直様へ仕官の身の上、知行も以前に倍増で何不自由なき此喜兵衛、それに引かへ其方が親左門は、要らざる主人へ忠義立して、今では鹽冶家断絶同前、其尾に連なる素浪人、寄る所なく一文商ひ、ハテ笑止千萬な儀ぢやてなア」扇舞「左様〱、左右當世は名を取らうよりは徳を取れぢや、時の畫を書かぬは大損、喜兵衛様にお願申して、野官蘭の一本も餘計買うてお貰ひ申せ、ハテお買ひなされて遣はされい」お袖「ハイ有難うござりますれど、身貧に暮すも人の成行、たとへ何の様な徳があつたればとて、神は非禮を享けぬとやら、マア貴方には此楊枝は、エウ賣りませぬワイなア」喜兵衛「ハ、、、貧乏神の瘠我慢と、賣らぬとあらば強ひては求めぬ」ト慍とした思入にて。「ナニ女の小差出た、猪口才な事を」お袖「外をお尋ねなされませ」トつんとして振むく。喜兵衛「何と致した、今一言いうて見をらう、女とはいはせぬぞ」ト立かかりし所を、直助見かねて間へ入り。直助「ア、お侍様、暫くお待ち下されまし、いやモウ段

藥罐天窓にて出て來り、舞臺の喜兵衛親子を見て。扇彌「これは旦那、御寮人樣、御一緒で御參詣でござりまするか」喜兵衛「オ、扇彌老か、貴公も參詣かな」扇彌「左樣でござりまする、私も貴方が御參なら御供致しますものを、ハヽヽヽ、併しこゝで遇うたが天の與、お歸は並木の巴屋で。腰の立たぬ程やりかけませう」お槇「扇彌さんは酒の事ばかりいうてぢや」喜兵衛「ハヽヽヽ左右酒好は飲む事ばかりぢやて」扇彌「イヤモウ唐の元之山も、酒を百藥の長と賞美致しましたて」喜兵衛「イヤ、でも范魯公は酒をさして狂藥なりと惡まれたではないか」扇彌「これは閉口、旦那とかく唐を用ひて弱らせる、ハヽヽヽ」ト此時辻打になり、向より直助權兵衛木綿やつし脚袢にて、齒磨の提箱を持ち出て來り、花道にて。直助「やれ〳〵今日は薩張商ひのない日だ、自暴から矢大臣門の田樂で一盃やらかさう、ドリヤ裏門へ往かうか」ト右の鳴物にて舞臺へ來る、茶店のお松見つけて。お松「直助さん、今日は早うまはらしやんしたなァ」直助「何さ商ひの少い所から、さつ〳〵と流して來やした、時にお松さん、隣のお袖さんは健かの」お松「アイ隨分しやれてお暮しだよ」直助「さうだらう、美しい代物と譽るも野暮だが、又憎くない姿だのウ」お松「甚うおはまりだねえ」直助「イヤモウ何といはれても彼の娘の事ならだ、ハヽヽヽ」喜兵衛「ヤ娘、土產には幸ひのあの楊枝齒磨、求めて參らうではないか」お槇「それが宜しう御座りまする」

時鳴物にて向より伊藤喜兵衛、ふけたる侍のこしらへ、袴羽織大小にて、後より娘お梅振袖姿にて、次に乳母お槇ついて出て來て、花道よき所に立どまり。喜兵衛「こりや娘、どうぢや、今日は大分顔色もよい樣ぢやが、氣持は何とぢや」お梅「ハイ有難うござりまする、今日は少し宜しうござりまする」お槇「左樣でござりまする、唯ものをお案じなされまするが御病氣でござりまする故、今日は觀音樣へ參詣遊ばし、少しは浮々となされましたで御座りませうなア」喜兵衛「イヤモウ親が申すは異なものながら、祕藏娘の其方、隨分氣はうじして病氣の重らぬ樣にして呉りやれ、又汝が思ふ人も、品に依つてはあはして」ト思入あつて。「ハヽヽ何をいふにも獨身者でない故に、當惑ぢやて」お梅「サアそれ故わたしも案じ過して心も空」お槇「アヽ申し、どう致したもので御座りまする、旦那樣も承知の事なら、マア〳〵緣と時節をお待なされませ、又よい傳手も御座りまする、サア〳〵あの仲店で人形なとお求め遊ばし、お慰みなされませ」喜兵衛「それがよい〳〵、何なりと望に任す、先堂へ參つて來ようか」お梅「それが宜しうござりまする、そんなら父樣、乳母も來や」お槇「サアお歩ひなされませ」ト大拍子にて舞臺へ來る。喜兵衛「暫時これにて休んで參らう」お梅「左樣になされませ」お槇「女中さんお茶をあげて下さんせ」お松「ハイ〳〵」ト茶を汲んで來る、皆々呑み休んでゐると、上の方より醫者市ヶ谷扇彌、

八年も先、難波新地の見物に地獄があつた」地廻□「アヽこれ〳〵見せ物ぢやない、不粋な、ふせものよさせ物ぢや〳〵」上方者「そんなら密ぢやな」皆々「こそとは」上方者「こつそりと姫を賣る家ぢや」地廻△「さうよ、此方の地獄も地者の極上を内々賣るから地獄さア」上方者「分つた〳〵、併しそれも地獄の沙汰も金次第ぢや」地廻□「その金がない故火の車ぢや」皆々「違ひないハヽヽ」お松「もしもし誰方も今お話の地獄は如何でござりますな」地廻△「おれはこの寺内では顔が悪いから賣らねえのさ」上方者「この寺内にもあるかな」地廻□「イヤモウ有る段ぢやない、べた地獄ぢや」上方者「コリヤ笑しい、佛の寺内に地獄があるとは大津繪を賣る店の樣ぢや」地廻△「ごたまぜだね」皆々「ハハヽヽ」ト此時大拍子にて上の方よりお袖世話女房、前垂がけ、楊枝店の女房の拵へにて出て店へ來り。お袖「お松樣、お有難う、よう見て居て下さんしたえ」お松「オヤお袖さん、一寸というて澤山手間を取らしやんしたなア、怪しいぞえ」お袖「ナニお前、私のやうなものに誰が」お松「ようあつたぞ」ト白の中お袖は店へ上り楊枝をもんで居る。地廻□「何と皆の衆見なされたか、あの女中が今の地獄ぢやて」上方者「ヤア地獄どころか、眞の如意輪觀音ぢや、しかし心は鬼であらう」皆々「ハヽヽ」地廻△「サア閻魔堂へいつて大念佛を遣らかさう」地廻□「それが可い〳〵」上方者「ドリヤ俺も一緒に往きませう」地廻△「サア〳〵來なせえ」ト大拍子にて上手へ入る、ト此

一伊藤喜兵衛　淺尾國五郎　一與茂七女房お袖　中村富十郎
一伊右衛門女房お岩　尾上菊五郎　一小佛小兵衛　尾上菊五郎
一佐藤與茂七　尾上菊五郎

造物本舞臺三間の間、向ふ淺黄幕、上の方二王門の半分を見せ出入あり、其傍に楊枝店のかゝりいろいろ、楊枝齒みがきなど並べある、下の方には出茶屋のかゝり、葭簀の見切、舞臺床几二三脚すゑ、仕出し腰かけ茶を飲んで居る、茶店の女房お松、前垂掛にて茶を汲んで居る、都て淺草寺内の模様よろしく、三味線入の大拍子にて賑やかに幕明く。

ト仕出し參詣のこしらへにて行違ひゆく。上方者「ナント皆の衆、いつも〱觀音樣は日本一、賑しいぢやないかいの」地廻△「そりやアお前、京大阪にも此樣な寺内はないネ」地廻□「さうぢやさうぢや、毎年秋の四萬六千日の日には、賽錢ばかり一日に千兩づつあがるて、何と素敵な賽錢だらう」上方者「それも偉いが、又伊勢の山田で淺間の萬金丹と、壺屋の煙草入は大晦日一日に千兩づつの商があるさうぢや、これもどえらいぢやないか」地廻△「なんと其の商を一日賣取にしたいものだ」地廻□「慾ばつた人だ」皆々「ハヽヽヽ」地廻△「時にお前は上方の人だが、大阪にも地獄はあるか」上方者「何ぢや地獄ぢや、なんぼ大阪は廣いというても、地獄といふはないが、七

いろは假名四谷怪談

作者　鶴屋南北

序幕　淺草寺内の場
　　　按摩宅悦内の場
　　　大川端の場

役人替名

一小鹽田又之丞　嵐璃寛
一三ッ大でつち　中村駒之助
一喜兵衛娘お梅　中村梅花
一あんま宅悦　尾上傳三郎
一四谷左門　市川助十郎
一關口官藏　大谷門藏
一喜兵衛女房お弓　嵐璃光
一直助權兵衛　中村芝翫
一齒磨賣徳兵衛　市川瀧四郎
一茶店おまつ　瀬川路之助
一宅悦女房お熊　中山文五郎
一赤坂傳藏　尾上多見藏
一小兵衛子治郎吉　嵐三津橋
一小兵衛女房お花　岩井紫若
一下女お才　中村歌門
一秋山長藏　中村蘭九郎
一醫者扇彌　中村友三
一佛孫兵衛　淺尾工左衛門
一民谷伊右衛門　市川海老藏
一奥田庄三郎　尾上松助
一同行作兵衛　中村津多右衛門
一非人ちだんだの龜　中村芝藏
一ばゞお熊　中村東藏
一うばお槇　嵐かなふ

五大力戀緘 終

源五兵衛こなし有つて、三五兵衛が切首と、右の血刀を菊野が首に供へ。源五「菊野、そちが志忘れぬ、今こそとつくりと禮をいふ、遺恨ある三五兵衛を始め、仇ある奴等は皆斬殺し、其刀の血汐は手向の水、首は供物、草葉の蔭から快よう受けてたもれ、南無菊野頓生菩提」ト回向する、橋懸より千島萬太郎、出石宅右衛門、供の侍大勢、丸屋仁兵衛も供に出て。宅右「源五兵衛殿、樣子承つて則ち萬太郎樣これへ」萬太郎「源五兵衛、そちや偉い事をしたなア」家主「心ならずこの家主も」皆々「驅けつけました」源五「お悦び下されい、紛失の猛虎の劍、首尾よう詮議仕出し、則ちこれに」ト右の刀を萬太郎に渡し。「盜賊は三五兵衛、則ち死骸これ斯くの通り、此上は一刻も早う萬太郎樣は御歸國」ト首を見せ。宅右「出かされた源五兵衛殿、此上は以前の通り千島の家中」源五「イヤ拙者人殺しの科人」ト腹切らうとするを、宅右衛門とめて。宅右「腹切るには及ばぬ、劍詮議の功に依つて與五平が身の上、貴殿も諸共」源五「デモ」ト又腹切らうとする、ト寐鳥いろ〳〵にて、菊野が首源五兵衛が手に吸付きとめる、源五兵衛振拂はうとしても動かず、これを見て。皆々「アレ菊野の首が」源五「とゞめる切腹」皆々「それ程までに」ト源五兵衛思入有つて首を取上げ。源五「チエヽ、ヽ、ヽ」ト首を抱しめよろしく　幕。

い戯言、現在菊野が敵は汝、身共が取つて遣らうワイ」ト脇差を抜いて蒐る、源五兵衛立廻りにて右の脇差を叩き落す、三五兵衛刀を抜かうとして、ちやつと飛退きこなしある。源五「三五兵衛、なぜ抜かぬ、刀を抜いて身共を斬らぬか殺さぬか、サア〳〵どうぢや」ト體を突つける、三五兵衛柄に手をかけ。三五「エヽこれ切らうと思うたが、言はゞ菊野は他人、何の好みもない、敵を討つても詮ない事、こりやモウ廢にせう、助けてやらう、ハテ命冥加な奴ではある」トこなし有つて行かうとする。源五「イヤ其方が助けても、此方より」ト源五兵衛切りかける、三五兵衛すり抜ける、立廻よろしく有つて、トヾ是非なく源五兵衛まくり切にする故、刀を抜はなしチョン〳〵と打合はせ、見得になる、トどろ〳〵にて柳の葉散る、仕散にて風起りし體、合方はげしく。三五「ヤア彼れは」ト一寸と立別れ又打合して。源五「思ひがけなき此有樣」三五「誠にこれは」源五「それ虎嘯けば風騒ぐと、時ならず柳の葉を散し、動搖するは」三五「魔風疾風の風にもあらず、最早七つ寅の刻」源五「虎に寅の勢増し、陽氣を發つは劍の奇瑞に極つた」三五「何がなんと」源五「最早叶はぬ此劍」三五「イヤ汝を先へ」ト又これより立廻よろしく有つてトド刀を捩取り、源五兵衛、三五兵衛を切殺し首引つ切る、これは自身の刀にて、三五兵衛が刀は篤と淸めて鞘に納め、腰の風呂敷をほどき、菊野が首を取出しよき所に直す、本首なり、

身共を恨む事はない、檜山の火刃の銹、其身の落度ぢや、大馬鹿者奴」ト又行かうとする、源五兵衞引廻はして入替り。源五「イヤ滅多には動かさぬ、待たうてや」三五「イヤ浪人者に身共は對手にならぬ」源五「なんと」三五「汝は浪人者ぢや、扶持放されぢや、エヽ穢はしい、こりや牢人は字さへ淺ましい、穴冠に牛か午かと人に謂はれて、ムヽハヽヽヽ、ハテよく適つたものぢやなア」源五「イヤ譬へ浪人であらうが扶持放されであらうが、爲かけた劍の詮議、三五兵衞こま言吐かずと、猛虎の劍を身共に渡せ」三五「ヤ何んと」源五「汝帶する其刀は猛虎の劍に相違はあるまい」ト手をかける、三五兵衞振りはなし。三五「イヤ兩腰ともに親重代、猛虎の劍とは覺えはないぞ」源五「ハヽヽヽ、ハテ親重代とは事をかしや、先達て琉球國より送りし劍、大殿御病氣の中人知れず紛失、ハテ心得ずと奥樣のお指圖にて此度の嚴命、右の劍を差上げねばならず、所に其詮議の役目は其方身共に仰付けられしは、深き御賢慮あつての儀と、それを察して汝が心にかけし菊野に吩咐け、實否を糺さんと樣々と心を盡したはやい」三五「心を盡した菊野を何故手にかけた」源五「それも汝が計ひ、劍を取返し菊野が敵も取らにやおかぬ」三五「イヤしやらくさい奴、汝が嫌はれた腹立に菊野を殺し、其敵は身共とは血迷うたな、コリヤ其筈ぢや、性根もすわらぬへろ〳〵武士、狼狽るは尤ぢや、オヽ道理ぢや〳〵、それで跡形もな

一面障子家體、やはり踊三味線にて道具とまる、ト障子の内にてばつたりと陰打つ、ト障子引抜にてぱつと血汐かゝる、ト兩方の障子より伴左衞門、幇間作治もすわうにて出て、ばつたりこける、源五兵衞障子を開き、血刀を提げ三五兵衞をうろ〳〵尋ねまはり、奥塀口の障子の内へ入ると、仲居始め今の役人、段々と迯げて出る、内より廻し女子或は親方迎ひに來て、連れて去ぬる、樣々立かゝりて宜しく有り、少し引廻し、チヨン〳〵にて又道具まはる。

造物一面に高塀、後に二階座敷を見て、奥塀口の方に大木の柳の釣枝、正面に三五兵衞尻褰にて傘をすぼめ顔をかくし、橋懸へ行かうとして居る、刀の鐺を源五兵衞蹲うて持つてとめてゐる、この見得よろしく、又雨車合方にて道具とまる。

源五「マア三五兵衞、顔を隱しても滅多にや迯さぬ、源五兵衞が用がある」ト三五兵衞ぢつと傘をひろげ、こなし有つて立上り。三五「源五兵衞、身共に用とは何ぢや」源五「イヤ外の事でもない、此度の御用は、其方身共に仰付けられた猛虎の劍、その詮議をせにやならぬ」三五「何の浪人の其方が」源五「如何にも其劍を差上げてお國へ歸參」三五「何處へ歸參する、奴が放埒は先達て國元へ相知れ、御器の實はとうに上つてあるワイ」源五「サア身共が身の上を、汝がある事ない事を大仰に認めて、國へ知らせし故、家來與五平が上つて其樣子相知れた」三五「コリヤ

五兵衛先生、先程よりどうかお氣の滅入つた樣子にて、御酒も進まず、エヽ扨は菊野が事故」三五「サアぞつこん惚ぬいて居る菊野、死んだと聞いて餘り快くはないてや」伴左「日頃に似合はぬ、そりや何うしたものでござりまする、大將に似合はぬ〳〵、三五兵衛樣、併しお悅びなされい、源五兵衛めは、最前當所の代官へ召捕られたと承つたが」三五「まだしもそれで少許ばかり胸か開けた樣な」幇間「そこへつけ込むいさめの神樂、道具廻しか獅子廻しは如何でござりまする」皆々「コリヤ可からうワイの」幇間「そんなら獅子は何處ぢや」ト砧になり、皆々獅子廻しにて騷ぐ、所へ向ふばた〳〵にて、彌助大肌脫本すわうにて手を負ひ走り出て、本舞臺皆のゐる眞中へ來てどつとこける、皆々ヤアと愕り、三五兵衛立寄り。三五「ヤア〳〵汝や彌助でないか、何故その如く手負になつた」伴左、皆々「彌助〳〵」彌助「三五兵衛樣、源五兵衛奴がこの樣に、まだ〳〵お前を搜して居る、必ず油斷さしやりますな」三五「スリヤ源五兵衛が」伴左「菊野を殺して死暴ぢや」幇間「申し三五兵衛樣」三五「さうぢや身共は密に裏道より」幇間「お駕籠を申付うか」三五「イヤ却て駕籠は目に立つて惡い、コリヤ」ト伴左衛門に囁く。伴左「合點でござりまする」三五「早く〳〵」ト伴左衛門は奥へ入る、彌助は立上りいろ〳〵苦しみ、ばつたり仆る、三五兵衛こなし。三五「モウ此上は」ト尻引つからげる、チヨン〳〵にて又道具まはる、ト見附

與五平「ハテかはりに爲つて」源五「あの千日で」トこなしあつて。與五平「お目にかゝりませう」ト唄になり、與五平こなし有つて、代官引立て向へ入る、源五兵衛後見送り、ほろりと思入有つて、トぢやん〳〵〳〵と七つの半鐘鳴る。源五「アリヤモウ七時、此上は三五兵衛に、ムヽ」ト立上り風呂敷を出し、右の首を包み、腰へしつかりと捲き、刀を抜きて蒲團にて最前の血をぐつと拭かうとして、菊野が事を思ひ、右の血を吸ひ、跡を蒲團にて拭き、鞘へ納め。「松坂屋は確に蜆川の南側、さうぢや」トきつとなる、チヨン〳〵にて道具廻はす、踊三味線になる、是より。

造物　松坂屋の座敷の模樣になり、三五兵衛、伴右衛門、作治幇間にて、小春、萬世、房野、藝子にて三味線彈き、皆々酒飲み騷いでゐる、やはり太鼓入踊三味線にて道具とまる。

幇間「アヽ旦那、向側には人殺しがあると云うて騷いでゐる、こちら側には又色酒でこの大騷ぎ、川一つ隔てゝ、同じ騷ぎやうでも又違うたものぢや御座りませぬか」房野「ホンニ菊野さんが殺されさしやんしたげな、何といとしい事ぢやないかいなア」小春「北の新地で首さんを、滅相な」萬世「あんまり首さん〳〵といふに依て、ツイ首さんになりやんした」伴左「こりや〳〵汝等も人を欺すとあの通りぢや、用心せい〳〵」皆々「オヽ怖、私等は忌いなア」伴左「これはしたり、三

な忠義は何卒立てさせて下さりませ」源五「其方といひ菊野まで」與五平「知らぬが因果か」與五平「思へば神ならぬ身は是非に及ばぬ」ト兩人思入、橋懸より人音する、こなしあつて源五兵衛、首を蒲團の下へ匿す、與五平身繕する所へ、代官家來大勢來る。代官「勝間源五兵衛の借宅はこれか」捕手「左樣でござりまする」代官「そりや」捕手「ハッ」ト捕手ばら〳〵と入る。捕手「人殺し腕まはせ」ト取捲く、與五平こなしあつて。與五平「待受けて居る、お代官樣、櫻屋の菊野といふ藝子を殺したは、千島の家來與五平、サア寄つて繩をかけられませ」ト腕まはす。代官「イヤ〳〵藝子を殺したは慥に勝間源五兵衛と、訴人あるに、それに與五平とは」與五平「イヤお代官樣、すべて命を惜むは人間の習ひ、それに科人と名乘つて出る拙者、命づくに僞りを申さうか、但し誠の人殺を、こなたにはお助け下さるか」代官「イヤサそれは」與五平「サア與五平に繩かけた」代官「自身に名乘れば相違はあるまい、捕つた」ト繩かける、源五兵衛こなし有つて。源五「ハア、四海の政道私なし、科極れど一應は吟味を遂げ、其上にての死罪、一旦そちが繩目に逢ふとても、彼の劒を今宵中に詮議仕出して身も直に」與五平「イヤ義を見てせざるは勇なしとやら、必ず今の」源五「汝の志が過分な故」與五平「これ拙者が事はお構ひなくとも、劒の御詮議」源五「スリヤ與五平」與五平「御主人」源五「暫しが其中」與五平「此身は死罪」源五「イヤ身共が」

いろ〳〵尋ね候へども、一向〳〵申さず候處、先程伴左衛門參り候へば、我刀を教へ何やら囁き、刀を篤と見申し候間、三五兵衛が刀を御詮議なさるべく候、彌助も深切に見え候へども、三五兵衛とひとつ心に候まゝ、左樣に思召さるべく候、右何か參じ申譯致し度く候へども、今宵は宿元を出し申さず候故、文にて御詫申上げ候、委細は明晩參じ申譯致しり〳〵、何事も堪忍堪忍急ぎゝし、今日、こちの人源五樣參る、女房菊より」ト與五平此内一つ〳〵ぎつくりとする、思入ありて段々愁ひのこなし、首引寄せ。「こりや此狀をなぜ先へ見せなんだぞ、エヽ」ト泣く、與五平もきつと起上り。與五平「さうぢや」ト思入あつて駈出さうとする。源五「こりや與五平、汝や何處へ行く〳〵」與五平「人殺しの訴人」源五「ヤ」與五平「ハテ菊野を殺したは私と、我とわが身を訴人して命を棄てまする」源五「なんと」與五平「サア企計のある三五兵衛とも知らず、拙者が頼んだは此身の過失、又今の狀を聞けば聞く程、どうも恁もいひやうも、思案も胸に迫つて、コヽ此上のお情には、最前こなた樣のお詞、何ぼう狀には女房とはしてあれど、菊野はやつぱりたはれ藝子、スリヤ下手人、その下手人になつてこなた樣には劒の詮義、こりやこれお家にかかる一大事、すりや輕擧に此方樣の御身に凶事があつては、千島の家まで退轉仕りまするぞや」源五「ムヽ」與五平「ぢやに依て菊野を殺したは與五平」源五「ヤ」與五平「申し御不承ながら、此位

つたのぢや」與五平「ヤ、エ、」ト大に吃驚、ヤア〳〵と驚くこなし。「始て聞いた此方の心底、大切な劒の詮議を吩咐ある菊野とも知らずに、三五兵衛が差圖を、眞請にしたは此方の爲ぢや爲ぢやと思うた事は、却てお身の非事、劒の實否も菊野はコレ」ト首を見て。「拙者が兄と僞つて、無理に縁を斷らした故、大事を明したと思召してこの樣に、こりや何せう何とせう、樣子を聞けば聞く程、こりや皆拙者が三五兵衛に騙されたのぢや、欺瞞られたのぢや、エ、」ト髪の毛を搔挘つて、體を叩き泣く、いろ〳〵思入、科あつて。「エ、ひよんな奴を頼んでこの後悔、思へば下主の智慧で有つたかいナア」ト體を倒し、色々あつて大泣、源五兵衛もこなしあつて。

源五「エ、これ憎い奴とも思はれぬ身共へ忠義、これにて菊野が心底も」ト思入あつて炭櫃の下より、最前の引裂いた狀を取出し、繼合はせならべて見て、與五平に構はず狀を讀む。「心ならず候故文にて申上げら〻、誠に先程は心に思はぬ愛想づかしを申上げ、御腹立たせ察しら〻、これは貴方樣お國元の兄御樣、なぎさ樣とやら申すお姫樣を御同道にて、この御方樣と祝言さきねば、源五兵衛樣の命にかゝはる事故、縁斷つてくれいと段々のお頼み、そこを乘込み三五兵衛がいろ〳〵と申し、最前の退狀も三五兵衛が書きし、思はぬ愛想づかし候も皆々義理詰にて、三五兵衛には身を任し申さず候まゝ、必ず〳〵お腹立てさせ下さるまじく候、猶又仰の事

て」與五平「こなたに知らさず縁を斷らした」源五「アノ最前の時宜何もかも」與五平「三五兵衛樣のお指圖」源五「ヤア」與五平「菊野に心をかけた體に見せ、段々とのお志」源五「スリヤ彌々三五兵衛が」與五平「こなたの心とは雪と墨」源五「ヤア〳〵扨は」ト與五平が胸倉を取つて引寄せ。「コリヤ三五兵衛に欺瞞られたワイやい」與五平「なる程、これ此方を欺したのも、やつぱり此方の爲を思うてぢや」源五「コリヤ」ト又領髪を取つて引付け。「奴は樣子を知らねどもな、此度のお役目は、三五兵衛と同道にて、當所へ上りし抑々より、萬事につけて心得ぬ彼が心底、猛虎の劍の詮議は、外よりは彼奴をと心を付くる折柄に、菊野にうつ惚れ萬太郎樣をたらし、樣々と口說けども菊野は忌かり、身共を無理に相方と賴むを幸ひ、劍の實否はこの手筋にてと、存じつゝいた其席にて、身共を打擲　剩へ、今浪人となつたも彼奴が爲業、殊に國へも身共が事を、惡し樣にいひ送りしは、これ菊野が意趣ばかりでなく、身共が氣ぶさい、そこを察して菊野に賴みし詮議の綱、よもやと心見定めしに、俄に變じた最前の時宜、誓ひを立てし三味線の、五大力も書直し剩へ破つたは、誠に三五兵衛と枕を交はし、この事を明したと、思ひ詰めて身共が手にかけた」ト首を引寄せ。「この菊野を馬鹿正直な汝が賴みを幸に、三五兵衛が計ひとは知らなんだワイやい」與五平「エヽ、そりや誠の武士と思うた三五兵衛は」源五「惡事の段々、奴を僞

手にかけ其科で、これ」ト巨燵櫓を教へて。「あの樣に若旦那源五兵衞樣には、大阪の千日で獄門に懸つて御座ると、國へ歸つて親旦那に、これ申上げられるものと思うてゐやしやるか、源五兵衞樣イヤ若旦那」源五「ム、なる程、樣子を知らねば國許の親人を始め一家中汝迄も、只菊野が色香に迷うて、身持放埒と思ふも道理、又この如く討放したも、女の心が變つた腹立と存ずるであらうが、何を却々さういふ源五兵衞ではない、これには言ふに言はれぬ、お家の爲になる深い思案が有つての事」與五平「ヤレ〳〵さうとは見えぬ、どう言つても菊野に迷うて居やしやる、これ此方にかはつて三五兵衞樣の御心底は賴もしい、如何に朋輩の好みとて、それはそれは御親切な適れのお侍、お國許へも此方の身の上をお知らせ下され、其御狀が著すると否や、親旦那の仰せにて、拙者は大阪へ上り、直樣三五兵衞樣のお目に懸り樣子を申したれば、則ち此方のお差圖で、互に上り詰めて居る戀中、百萬陀羅の意見せうよりは、菊野に逢うて斯う斯うして、緣を斷らすが捷徑と、お國の上布煙草まで、土産にやれとそれ〴〵にお心をつけられ、菊野さへ思ひ斷らせば、自然と此方の心も直り、御無事でお國へ歸られると、横目と僞り役人を拵へ、此與五平めはあなた樣の眞實の兄と僞り、菊野に逢うて段々と賴み、否といふのを無理矢理に、往生づくめに緣を斷らしたのぢやワイの」源五「ナニ何といふ、アノ三五兵衞と相談に

に抱留め。與五平「イヤ〳〵そりやならぬ」源五「面倒な、なぜ止めるのぢや」與五平「アさうさすまい爲に此草鞋三度笠、路銀も持つて來たは、こなたを夜の中に立退かさうと、狼狽眼で驅付けたのぢやワイノ」源五「ハヽヽヽ遉は下郎、身共も勝間源五兵衛、卑怯未練に逃隱れせうか、千島の家風を知らぬか、癡呆者めが」與五平「イヤたはけといふは此方の事」源五「なんと」ト落ちてある裸人形の首を取上げ、巨燵の櫓を取つて其上に載せ、こちらへ來て。與五平「ありや何ぢや」源五「ヤ」與五平「假にも忌々しい獄門首。これ千島の家風と自慢して、お家のお名を下し、親御の恥辱を思はぬ心か。エヽ情ない源五兵衛樣、この與五平は幼い時から御奉公申し、親御樣諸共譜代の家來ぢやぞえ、此度大阪へ上つたも、此方の身の上、一部始終お國へ相知れ、親御源次兵衛樣のお腹立、まことお手討とも言うて御座る、この與五平めが段々お願ひ申しまして、お氣遣ひなされますな、下郎めが大阪へ上つて、若旦那源五兵衛樣に御意見申して、お心をお改めさせ、洗上げた元の武士にして、歸國仕りまするで御座りますると申上げたれば、親旦那にも俄に御立腹のお顏も變つて莞爾と、與五平出來した、遉は譜代、其方悴に篤と意見を加へ、心を改めさせ連れて歸つてくれ、身共とても年寄つて、今役に立つべき悴めを、萬更手討にしたい事はないと、眼の内潤んで仰しやつたを、知らぬ此方は名告つて出て、剩へ言交した女を

與五平「エ、嬉しやまだ内に御座るかいの」ト悦ぶ、源五兵衛透し見て。源五「ヤイ〳〵汝や家來の與五平でないか」與五平「源五兵衛樣」ト傍へ行かうとして、ちやつと表の戸を諦め、こなし有つて、つか〳〵と源五兵衛が傍へ行て。「申し是を穿いて」ト草鞋を渡し。「此笠で顔を隱して」ト右の通り懷中より金を出し。「少々路銀も用意してある、サア〳〵夜の明けぬ中に、一先ここをちやつと〳〵」源五「馬鹿め何をするのぢや」與五平「何をするとは落付きすぎる、かういふ間も召捕に。エヽこれノウ立退く用意さつしやれませいノウ」源五「ム、扨は何ぞ樣子を聞いたか」與五平「聞いた所か曾根崎新地は、上を下へとまぜ返して居る、ぢやに依つて此方を」源五「スリヤ源五兵衛が噂があるか」與五平「不憫や菊野を、短氣な事をさつしやつたノウ」ト泣く、源五兵衛こなし有つて。源五「可いワ、噂があればモウ隱すに及ばぬ」ト又立上り巨燵を引まくり、炭櫃を退け下より以前の首を出し。「與五平、こりや是を見い」ト與五平が傍に置く、與五平一目見て。與五平「南無阿彌陀佛〳〵」ト心意氣の愁い。源五「何と憎い女郎めぢやないか」與五平「エエ」源五「與五平、親人へ忠義を忘れな、頼んだぞ」ト急度いひ行かうとするを、與五平引止め。與五平「これ〳〵源五兵衛樣、こなたは何處へ行くのぢや」源五「知れた事、言替はしても菊野は賣女、身共は浪人、女郎めをぶち放した科人、名告つて出るワイ」ト行かうとするを、無理やり

入りかゝり此體を見て、ぶる／＼顫うてゐる、源五兵衛、彌助を見て内より血刀を差出し、顏にて拭けと教へる、彌助怖々手拭にて拭く、源五兵衛刀を鞘に納め、彌助が履いてゐる下駄を又直せといふ仕方、彌助始終怖々下駄を直す、源五兵衛右の下駄を履き、傘を持つて花道へしづしづ行きかゝり、彌助こなしある、此内始終雨車。源五「翠帳紅閨に枕ならぶる妹脊中も」ト謠を謠ひ、靜かに向へ行く、彌助顫ひながら。彌助「人殺ぢや／＼」ト叫る氣でも聲の出ぬ思入、源五兵衛戸屋の際にてふりかへり、平舞臺をちよつと見る、宜しく幕。

ト内にてどん／＼と靜かに早太鼓、道具の知らせまで打つてゐる、チヨン／＼を切掛に合方、本釣鐘にて幕開く、ひやうばん／＼にて切。

造物　初手の貸座敷にて、平舞臺に行燈を點しあり、向より源五兵衛、初手の形にて矢張り傘さし出て來て、本舞臺へ來て表の戸を明け、ずつと二重舞臺へ上り、燈火を掻上げ、足許にある最前の躶人形を見て踏碎く、首ころりと落ちる、こなし有つて菊野が首を捩放し、又手を放し、持つてゐる狀をずた／＼に引裂き、二つの蒲團櫓を除け、菊野が首腕狀もろとも炭櫃を引出し、其下へ打込む、この中始終合方、釣鐘荐りに撞いてゐる、源五兵衛よろしく有りて、巨燵を元の通りにして、其傍に坐して思案する、よき所へ與五平、草鞋三度笠持つてうろ／＼出て、ずつと内へ入る、源五兵衛を見て。

え」―菊野「それでも逢はねばどうも氣が濟まぬワイな」―女房「サア私も氣が濟まぬは最前の時宜、源五兵衞樣が嘸腹立つて御座るで有らうと案じてゐます、これも三五兵衞樣とお前の樣子、わざと知らすまいと思うた故、それはさうと菊野さん、お前は又源五兵衞樣を、眞實に退くのかいなア」菊野「何のマア、ちつと譯があつての事なれど、マア緩りと、これ申し拜みます、一寸遣つて下さんせいなア」ト此内雨車になる。女房「それでもアレ〳〵雨も降るし、今夜は廢にして、氣の濟まぬ事があるなら、幸ひ〳〵」ト硯を取つて來て。「こゝに硯がある、其樣子を書いてやらしやんせ、お輕に確乎と持してやるワイなア」菊野「そんなら文を書かうかいなア」女房「夜の更けぬ中早う」菊野「文よりは直に逢うて」女房「ハテそれでは惡いワイなア」菊野「エヽ辛氣な、よう文を書く事ではあるぞ」ト下に居て文を書きかける、ト女房こなし有つて。女房「ドレわしやお輕を爰へ遣さうか」ト誂への唄になり、お崎奧へ入る、菊野思入有つて狀を書く中、向ふより源五兵衞尻からげ、袖にて雨を覆ひ出て來る、この唄の中本舞臺へ來る中、菊野狀を書き終ふ、源五兵衞内へツヽと入る。菊野「源五兵衞樣か、これ」ト取つくを、それなりにぐつと引寄せ、刀を拔いて搔首にする、すわうにて菊野が首、狀を持つてゐる手諸共に、源五兵衞が袴に取付いてある、それなりに構はず死骸を蹴仆す時、橋懸より彌助、高下駄傘にて出て來て

兩出し。「二人を頼んだ雇賃」ト二分宛渡す。諸喜平太(實はかご舁)(實は仲居お浪)「忝ない、雇はれ仲居のお浪もお國の娘御」お浪「駕籠の太郎助殿が横目の役」與五平「按配よう行つた上は」兩人「元の姿に」ト花道にて手早く上著を脱ぐ、二人共に世話形になり、與五平も衣裝羽織を脱ぎ、若黨の形。與五平「これも御主人源五兵衞樣を大切に」ト此内本舞臺より三五兵衞門口へ出かけ、見てゐて手を叩き、仕方にて早う去ねとこなし、與五平これを見て。「これお二人ともに早う」兩人「お暇申しまする」ト先へ入り、與五平こなしあつて少し立戻り、花道にて。與五平「御朋輩の好みとて、段々の」三五「ハテ」ト仕方、與五平思入あつて。與五平「何かは緩りと、さうぢや」ト向へツイと走り入る、始終この中合方、三五兵衞もこなしあつて。三五「モウ餘程夜が更けたさうな」ト菊野が傍へ行て。「菊野、必ず明日の晩、合點か、身共も歸らず、居續けで待つて居る、どりや奥へ往て又飲まうか、お身も來やれ」菊野「マア〳〵先へ往かしやんせ」三五「然らばお先へハヽヽヽ。これ早うおじやえ」ト唄になり、三五兵衞奥へ入る、菊野立上り色々こなし有つて、門口へ驅出さうとする、所へ女房お崎つか〳〵と出て、表の戸をしめる。女房「菊野さん、何處へ行かしやんす」菊野「お崎さん、どうぞ老松町へ烏渡やつて下さんせいなア」女房「イエ〳〵お前を何處へも出すなと、最前のお客や三五兵衞樣の吩咐、それに老松町へ行かしやんすは、惡からうぞ

可い」菊野「イヽエ唯一言源五兵衛樣に」三五「モウ可い可い、心底見えた」菊野「サア其心底を。どうせうぞいなア〳〵」トうろ〳〵する、與五平は無性に悦び。與五平「これで源五兵衛が身の納り、諸樣喜平太樣も、早くこれへお出なされて、菊野にお禮を仰しやれ」ト兩人も下りて來て。喜平太「菊野殿忝なうござる」諸「奧樣の仰付けられた身共が役目も相立ち」與五平「お國への歸參」三五「身共も亦」皆々「この樣なめでたい事が有らうか」菊野「この樣な悲しい事が有らうかいなア」ト泣落す。三五「これ〳〵、この上は一時も早く諸殿を。ナア御合點か」ト與五平もこなし有りて。與五平「なる程、御祝言を取急げば身共はお暇、菊野、禮はゆつくりと、お二方の旅宿へ」三五「それが可い〳〵」與五平「然らば諸樣、喜平太樣」兩人「そんなら旅宿へ」與五平「お供仕らう」ト科あつて、菊野を見て又寄立り。「菊野、きなきなと思ふまい、虁子に似合はぬ、其樣に泣て、アヽ愚癡な、これ身共が請合ひ、こちらの身分さへ納れば、先程もいふ通り、又如何樣とも、それを樂みに必ず煩はぬやうにナ。とはいふものゝ一筋に思込んだを」三五「これ」と與五平思入あつて。與五平「ム、又逢はう」ト合方になり、與五平、諸、喜平太をつれ門口へ出て、花道へ行き半にて立止り、こなしあつて。喜平太、諸「申しまんまと首尾よう」與五平「三五兵衛殿の指圖にて二人を賴んだ」ト懷より紙入を出し、金一

つなら右いふ通り、身共を御存分に如何とも〳〵」源五「三五兵衛殿、いよ〳〵菊野と」三五「互に心底打明けてしつぽりと」源五「あの心底を」菊野「イヽエさうぢや」ト寄らうとするを、三五兵衛引廻はし、最前の三味線を見せ。三五「これ起請がはりの此三味線」ト源五兵衛これを見て。源五「三五大切、ムヽこりや五大力を直して」三五「三五大切と菊野が身共へ」菊野「これいなア」ト言はうとして、二階を見て、又與五平科ありて。「サアこの三味線の。エヽ胴慾な」ト思はず持つてゐる煙管にて三味線を叩く、皮破れる、三五兵衛引めくる。三五「忝けない」ト懐へ入れる、菊野も心づきはつとこなし。源五「三味線は藝子の魂、こりや誠に」彌助「モウ破れかぶれぢや」ト行かうとするを、源五兵衛又とめて。源五「ムヽ是非がない、身共もふつつりと思ひ斷つた」ト立上る。菊野「イエ〳〵それでは」トこなし有るを、三五兵衛だき止め。三五「これ源五兵衛も思ひ斷つたと〳〵」ト二階へかけていふ、菊野エヽと泣く。「サア是からは誰憚からず菊野は身共が女房にしても、點の打人はあるまい〳〵」彌助「イヤ有るこの彌助が」トまた摑みつきに行くを、源五兵衛きつと止めて。源五「コリヤ遊里の女は、あゝしたものぢや」彌助「デモ見す〳〵」ト又きつとなるをこなし。源五「ハテ人ではないワイ」ト唄になり、源五兵衛思入有つて、彌助を止めながら向へ入る、菊野こなし有つて、つか〳〵と驅出さうとする

らぐら煮かへる様なワイなア、これが又娼妓なら千人萬人の中に誠を立てるはたつた一人、其一人はと思ふ事もあれど、藝子だてら餘り無茶ぢや、同じ家中の御連中に、これ見よがしに、如何に三五兵衛様が粋ぢやというて、あんまりな爲方ぢや、どうも濟まぬ〳〵ぞ」ト舞臺を叩いてにえる。菊野「エヽ何ぢやいの彌助殿、何も知りもせいで、これいなア」ト源五兵衛にかけて。「段々様子のある事、そりやお前も合點が行くまい」ト二階を見て。「サア合點して退いて下さんせ、私や斷然と思ひきつて居るワイな」源五「そりやどうなりと其方が心任せに致してくれうが、又身共も頼んだ。イヤ其方が頼んで斯うなつた源五兵衛、身にも命にもかへぬ大切な、アイヤ大切な金銀を打込んで、其金の威光で口說き落す事も、何程もある格、身共は又其大切な、サア金銀が拂底ゆゑ、菊野大切な金銀がない、それ故汝に迷うてゐる、それを首尾よう、イヤ三五兵衛と中よう添とげなりと、どうなりと」菊野「アイそりやお前の敎へ。イヤお前の敎への通り」ト與五平にかけて。「敎へられぬワイなア、わしや三五兵衛様に、ナアお前に」ト科あり。彌助「コリヤマア釋迦でも耐へられぬ、源五兵衛様、お前が了簡さつしやりましても、どうも此彌助が、寧そ」ト摑みかゝりに行くを。源五「ハテ扨其様に立騒がいでも言ふ事は言はれる、マヽ鎭まつてゐるよ、大事ないワイ」彌助「エヽこれ」トこなし。三五「源五兵衛殿、お腹が立

たか」ト菊野物言はずに思入あり、三五兵衛こなし有つて。三五「イヤ〳〵源五兵衛殿、菊野に何にも仰せられな、サア存分にさつしやれ」源五「ヤ」三五「踏躙りなりと擲ちなりと、この三五兵衛を心任せに、こりやこれ日外こなたを、道頓堀の富田屋に於て、身共が打擲致した通りに存分に召され、手向も致さず、一言の申分も御ざらぬ」源五「そりや何故に」三五「菊野故」菊野「イエ〳〵それ最前私に」三五「ハテ默つてゐや、大事ない〳〵、武士の身の上なれど、和女故なら何とも思はぬ、結句かまひ立すると、猶源五兵衛殿がお腹が立つワイ」菊野「エヽさうぢやない、わしや源五兵衛さんに」トこなしある、此中兩方の中二階を開く、東の方には與五平、西の方には最前の娘渚喜平太をつれ、樣子を聞いてゐる。三五「これ」ト菊野に與五平を見せる、與五平こなし、菊野思入。菊野「サアどうも有樣には」源五「菊野、先程大身の客ぢやといふて、駕籠までも釣らせ迎ひに來たは、其三五兵衛殿か」菊野「イエ〳〵そりや外に」ト與五平を見る、與五平こなし有つて。三五「イヤなる程、外の客ぢやというて呼寄せたは此三五兵衛、漸う菊野も今夜は得心致した」菊野「何のマア私は」ト與五平二階より拜む。「サアどうも言ふに言はれぬ義理といふ枷がかゝつてな」三五「口說落してたつた今新枕」源五「ヤ」彌助「アレ新枕ぢやといな〳〵、エヽこれ源五兵衛樣、どうしたものぢや、彼いふ事を聞いては、俺でさへ胸がぐ

悄々行かうとする。亭主「それちやつと掃出しておきやえ」ト彌助マア〳〵と有つて、しか〳〵止める中、障子家體より。三五「ハテ扨何の歸らう、さうとめいでも是非今宵は泊るといふに」トいひ〳〵出て源五兵衛を見て、わざと吃驚のこなし。「ヤア悪い所へ源五兵衛殿」源五「これは三五兵衛殿」皆々「ひよんな場合になつたワイの」三五「ハテ大事ない、酒にせう〳〵」亭主「ハイハイ可うござりませう、それお銚子〳〵」女房「それ何ぞ肴を調へさしやんせいな」仲居「マア息つぎにお煙草を」と莨盆を持つて行く。小糸「火があるかいな」亭主「早う肴をこしらへて上げませう」仲居「お前方もちやつと三味線を取つてお出な」女房「燭臺も持つておじや、早う上げねばならぬぞえ」トこの樣に聒しういひ〳〵亭主、女房、仲居、小供、わや〳〵いうて奥へ入る、源五兵衛こなし有つて又下に居る、彌助もこなし有つて。彌助「テモきつい請の違ひやう、あんまり現金な奴等ぢやな」ト矢張力みゐる、三五兵衛こなし有つて。三五「菊野〳〵、これへ來やれ、何を、髱を直さいでも可いワイ、帶をするのにぐづ〳〵と埒のあかぬ」トいひ〳〵障子家體より、菊野を無理につれて出る、菊野前帶の解けた儘にて、源五兵衛を見てハッと思入、三五兵衛傍へ突きやる。三五「ハテ其樣に恥かしい事はない、ハテ初心なものではあるワイ」彌助「アレ〳〵彼の態を御覧じませ」源五「菊野、そちや何ぢや、そちや彼の一室で今迄寐て居つ

オこの彌助が廻しこそして居れ、金は此通りぢや」ト最前の二兩の金を出し。「何程なりと取れ、取りさらせ」ト肩脱になり、じやうらく組んでやかましういふ。源五「彌助モウ〳〵可い、何も言やんな、高で女ぢや」彌助「デモあんまりお前を踏付けましたさかいで」源五「サア〳〵可いてや、こりやお崎、亭主十兵衛を呼べ」女房「ハイ〳〵申し〳〵こちの人、ちやつと御座んせいなア」亭主「オヽ〳〵何ぢや、騒がましい、女房ども何いふ事ぢや」トいひ〳〵出る。女房「ソレ來てぢやワイなア」ト源五兵衛を敎へる。亭主「ほんに源五兵衛様」源五「外の事でもないが、先達て身共が拂殘り、此家に借は如何ほど有つたの」亭主「ハイそれは確かコウッ一兩二分で御座りませう」源五「ム、一兩二分」彌助「源五兵衛様、二兩ござりまする、お使ひなされませ」ト投つてやる、源五兵衛取つて。源五「彌助、この金子暫く借用して苦しうないか」彌助「其金で面はらしやりませ、大事ござりませぬ、一體お前は結構なさかいぢや」ト此内源五兵衛金の包を開き。源五「これに金二兩ある、一兩二分引いて、跡二分は家内へ祝儀に取つておきやれ」亭主「へエそれは有難う存じまする、慥に請取りました」源五「彌助、身共はモウ歸らうワイ」彌助「エヽ」亭主「モウお歸りなされますか、ようお出なされました」女房「表も締めてモウ寐ようかいな」彌助「お前それでは菊野さんに」源五「何の逢はいでもよい、又翌の晩に出直して來るワイ」ト

つた事を、お前方は知らしやんせんのぢやワィな」ト女房も共に呑込ます。彌助「現在居てぢやのに、あんまりな」源五「可いワィ、彌助、去んだら去んだにしておけ」トこなし有つて下に居る。「お崎、煙草盆貸してくれぬか」女房「アィ奥や二階へ皆出てある、お輕空いてあるかいの」仲居「イエ〳〵皆塞がつて御座りまする、それに臺所に火もなし」彌助「こりやモウ見る事聞く事が、むかついてくるワィ」源五「ハテ火がなければ煙草も呑むまい〳〵、其かはりに何でも大事ないが、彌助にも飮ましたい、酒一つ飮まうか」女房「イエ〳〵肴は何にも御座りませぬ」源五「肴がなくばツィ鮓でも大事ない」仲居「申し鮓は最前取りにやりましたら、モウ切れたと言ひましたワィなア」源五「ムウそんなら酒も飮むまい、こりや〳〵小糸、房野、どうぢや少許こゝへ來てくれぬかい、切ては汝達なと咄相手に」女房「イエ〳〵この子達は、まだ奥のお客を仕舞はずぢやワィなア」小糸、房野「源様モウ去にんかいな」ト彌助地團太踏んで。「モウ氣體が悪いぞ、忌々しいワィ、何て妛な茶屋はお客を潰すのぢや、こりや何か源五兵衛様があてゝあるさかい、請が悪いのぢやな、イヤ拂ひをさつしやれぬに依つてかいやい、いとしぼさうに如何に今浪人ぢやとて、さうは見せつけぬものぢやワィ、これも大方菊野様が退いたに依て、屆けてあるのぢや有らう、エヽ今迄の義理を知らぬか、可い大事ござりませぬ、其かはりに俺が拂はう、オ

五兵衛構はず。源五「ハテ可いワイ、菊野が心は身共は存じて居る」彌助「アレまだそんな緩い事をいうてぢや、菊野さんは疾に魂が反つてあるワイな」源五「魂が反つたとは」彌助「ハテ心が腐つて、モウお前が厭になつたのぢや、其證據は、これ此退狀で御座りませぬか」源五「そりや何ぞ譯が有らう、身共がとつくりと言うておいた事も有り、今更どうして彼が心がかはるものか」彌助「アヽお前に金を持たせたいなア、能いお客ぢや、うか〳〵と瞞されるも知らず、お前の鼻毛で菊野さんの下ぐゞりが出來る、エヽ齒痒うて〳〵、お侍に似合はぬ、餘りかひ性がござりませぬぞえ」源五「ハテ扨其樣に苛々いはずと一つ飮まう、來やれ〳〵」ト彌助やはりしかじかありて、本舞臺へつれ立ち、ずつと內へ入る、所へ女房お崎、仲居おかる、藝子小糸房野皆皆出て。女房「エヽ源五兵衞樣」ト吃驚のこなし。源五「こりやお崎けたゝましい、お崎なんぢや」女房「イヤ能うお出なされました」ト皆々こなしある。源五「菊野はどうぢや、來て居るか」女房「アイ、いゝえ」源五「どうして來ぬな」彌助「イエ〳〵來て御座りまする、お崎樣噓らしい、最前俺が送つて來た、今夜は爰の揚、しかも跡付にまでしてあるもの」女房「サアそれは」彌助「見す見すの事をいうてぢや、氣の惡い奧にで有らうがの」女房「イヤ菊野さんは、確に最前去んでぢや有つたと思うたが」小糸「イヽエ奧にぢやワイな」女房「エヽこれ」仲居「ほんに去んでぢや有

のぢやぞいなう」三五「ハテツイ斯うぢや」ト無理矢理に三の字を上へつけ、力といふ字に扁を附けさす。「斯うすりや可いぢやないか」菊野「これは五大力」三五「三五大切、ナント身共に乘かへるといふ、汝が起請同前ぢや」菊野「ほんに三五大切と。それでは」三五「滅多には消さぬ」ト三味線を片側に直し。「此上は」ト手を取つて連れて行かうとするを。菊野「どうするのぢやぞいな」三五「ハテ得心ぢやないか」菊野「サア得心は得心ぢやけれど、ほんに今夜はお前も知つてぢや通り、氣がもや〳〵して、どうやら辛氣なに依つて、何卒明日の晩に」三五「ム、そりや明日の晩に違なう」菊野「サア〳〵此方は明日の晩に極めておいて、お前の大事を」三五「イヤさう味うは乘れぬワイ」菊野「イヽエイなア氣のわるい、まだ外に何やかや尋ねたいことがあれば」三五「幸ひあの一間で」菊野「咄すばかりぢやぞえ」三五「帶紐解かずにか」菊野「雜魚寐するは藝子の習ひ」三五「そんなら菊野」ト手を執つて。菊野「アレやつぱり忙しなう」三五「デモ聞く事があるぢやないか」菊野「それぢやに依つて」三五「マアおじやいなう」ト無理に菊野をつれて障子の内へ入り、是よりしつぽりとした長唄になる、向より源五兵衞、彌助最前の狀をひろげ見せながら。彌助「源五兵衞樣、お前どう思うて御座りまするぞ、かういふ退狀を見ては、濟みますまいぞえ〳〵、この彌助でさへ腹が立つて〳〵なりませぬワイなア」トいひ〳〵出て來る、源

ど、若し女夫になつてお國へ行た折、同じ家中で朋輩の源五兵衛様と、顔見合はさねばならず、それも一旦退いたに依つて、私や構はねど、お前はどうも味なものぢやないかいな」三五「イヤイヤそりや氣遣ひはない、殊によると身共は國取大名になる」菊野「エ、」三五「サア今迄の様に、千島の家中ではゐぬ、途方もない出世をして見せる、もし又それが行損うても、何んな事があつても源五兵衛が」ト言はうとしてチヤツと。「サア源五兵衛とは顔は合はせはせぬ、一ツにも居ぬワイの」ト菊野思入有つて。菊野「そりやマア耳寄な事ぢやなア」三五「耳寄どころか浮み上る事ぢやて」菊野「サア其浮み上る出世、お前が大名にならしやんすといふ、何ぞ慥な事があるかへ」三五「ある〳〵、定木判木で押したといはうか、石橋を叩いて渡るより丈夫さうな事ぢや」菊野「サア其譯はどういふ事ぢやえ」三五「其様子は此度の御用」ト言はうとして。「イヤ滅多には言はれぬ」菊野「そんなら嘘ぢやな」三五「イヤ僞ではない、大眞實」菊野「さう言うてやつぱり私を欺さうとは、テモ怖い三五兵衛様ではあるワイな」三五「イヤ菊野、身共が出世するに違はない、其譯は滅多に言はれぬ大事の事、それが聞きたくば」ト手を執つて。「サ、思ひが叶うた上でいうて聞かさう」菊野「そんならそれに違はないかえ」三五「何の違があらう、汝も違がなければ幸ひこの三味線へ」ト筆を執らせ書かさうとする。菊野「滅相な、此三味線に何を書く

菊野「オヽ三五兵衛様、まだ爰にかいなア」三五「菊野、三味線を持つて、醉うたな〳〵」菊野「心は醉はぬけれど、むしやくしやするので」トこなし有つて、三五兵衛三味線を取り見て。三五「其三味線には悪戯書」菊野「エこれかえ」三五「五大力とは」菊野「コリヤ歌の外題、今日晝餘所の藝子様に教へて貰うた五大力、古い歌なれど、とんと知らずに居たワイなア、それを忘れぬ様に彈うと思うて、滅相な見やしやんせ、三味線へ書いておいたワイな」三五「五大力とは、エヽ住吉ぢやなア」菊野「實に住吉や淺澤の、尊き寺と聞くからに」ト唄に紛らす。三五「菊野、源五兵衛を退いた汝の心は」菊野「サアさつぱりとしたワイな」三五「何を嘘らしい、やつぱり心が殘つて有らうが」菊野「そりや萬更殘らぬでもないワイなア、丁度殿達でもさうぢやげな、何ぞかはりが出來る迄は、どうしても思うてゐるものぢやといなア」三五「ハアあの代りの出來るまで」菊野「私が様な者は大體の事では」三五「イヤ出來る」菊野「エヽ」三五「早速今爰で出來てある」菊野「そりや何を言はしやんすぞいな」三五「菊野、一體この三五兵衛は汝に、イヤこりや言はずとも、これ迄とつくりと合點の筈、一旦武士の意氣づく、思ひ斷つたといふものよ、源五兵衛さへさつぱりと譯が立つたからは、身共が意に隨うても大事あるまいがな」菊野「サア私もこれ迄段々思うて下さんすお前、寧そ面あてに」三五「ヤア〳〵」菊野「とサア思うてはゐるけれ

生づくめ、何と氣味がよからうが」彌助「イヤけうといもので御座りまする」三五「彌助大儀ながら其方は、これを菊野が渡したと、源五兵衞に届け、先達ていひ合せた通り。とつくりと、合點か」ト狀を渡す、彌助取つて。彌助「お氣遣ひなされますな、一旦請合うた此彌助、ささものぢや御座りませぬ」三五「忝ないこりや」ト紙入より小判二兩出し。「些少ながら其狀の飛脚賃ぢや」彌助「こりや二兩では高い飛脚賃」三五「大事ない、取つておけ」彌助「マア忝ない、そんなら此狀早う源五兵衞へ」三五「それが肝心」彌助「一走り往て參りませう」ト唄になり、彌助狀を持つて向へ走り入る、三五兵衞跡見送り。三五「是からが理詰で、菊野が身共に靡かにやならぬ」トうまいと言うて科、橋懸より磯谷伴左衞門、三幕目の侍にて出て來て。伴左「これは三五兵衞殿、先程より松坂屋に相待ち居りました」三五「伴左衞門、先達つてお身に申合した、これこの」ト我刀を敎へ囁く。「ナ、千里一飛出世のあだて」伴左「サア其儀に就いて、拙者方より手筋もあれば、これ」ト伴左衞門又三五兵衞に囁く。三五「如何にもそれは祝著、萬事はとつくと後程」伴左「然らば松坂屋に相待ち居る」三五「大分機先がよし、おつと今宵は身共が立ちや、松坂屋で戯けめされ」伴左「それは忝ない、三五兵衞殿」三五「伴左早く〳〵」伴左「ハツ」ト唄になり伴左衞門引かへし橋懸へ入る、所へ奥より菊野、最前の三味線さげ、酒に醉うた體にて。

ツイとでよいワイな」三五「そりやどうなりと、時に宛名は、しつかりと勝間源五兵衛様參る、櫻屋菊野判、イヤ判には及ばぬ、ドレ〳〵」ト取つて篤と讀んで與五平に見せる、與五平仔細らしく見て。「これで可からうかな」與五平「大方可からう」ト三五兵衛取つて篤と封じ。三五「サア表書をして急用」菊野「何の遅うても大事ない事を」トよろしく書く内、與五平三五兵衛顔見合せこなし。「さうして此文は、誰に持せて遣るのぢやえ」三五「そりや身共が密に遣はす者がある」ト状を取り。菊野「申し兄御様、お前のお頼み、源五兵衛様の御身の上、どうぞ無事にと思ふから、彼の通りの文は上げるものよ」與五平「これそなたの御恩は一生忘れぬ」菊野「アヽ癪が差込んで來たワイな」與五平「ヤアそれは」三五「これ〳〵そこを弱つては」ト與五平にかけていふ。「菊野、酒で押せ〳〵、御舍兄も心のつかぬ、奥へ伴ひ、憂ばらしに一つお侑めなされい」與五平「イヤ何菊野、サア大事ないワ」菊野「こりや醉はにやどうもならぬワイ」三五「オヽそれが可い〳〵」ト騒唄になり、與五平こなし有つて、菊野を伴ひ奥へ入る、三五兵衛殘り、いろ〳〵思入有つて。「時に此状を、幸ひ彌助が來て居る筈ぢやが、彌助〳〵」ト呼ぶ、奥より。彌助「オヽオ俺を呼ぶは誰ぢや」トいひ〳〵出て。「ヤア三五兵衛様、今の首尾は可うござりますか」三五「大極上々、まんまと離縁状は、これこの如く書かしたてや」彌助「そんなら菊野が得心して」三五「往

の離縁状を書くのかえ」三五「縁断つたといふ確な證據」菊野「どうやらそれでも」與五平「ハテ一旦國へ立歸つた上では、身共が呑込んで居るワイ」菊野「もし源五兵衛様が誠に。イヤアノ縁断るのぢやに依つて」三五「離縁状が肝心」ト菊野思入あつて。菊野「わたしや胸に痞へて、どう書いてよいやら、一向書けぬワイな」三五「そんなら身共が言うてやらう、仰書にしたがよい」與五平「三五兵衛様、お世話ながら、弟めが、ナ、とつくりと得心致す様に」三五「承知でござります、サア菊野」ト菊野筆紙を取上げて、これより仰書にかく。三五「マアそこへ一寸一筆申上まゐらせ候、是迄はそもじ様の段々の御しんの程、嬉しく存じまゐらせ候へども、何いふ事やら俄に秋風、とんと忌になり申候、七里けんぱい此上は、必ず〱逢ひに來ておくんなえ」與五平「なる程」菊野「これでは」三五「ハテとつくりと聞える様に書かぬと、源五兵衛が爲にならぬ」與五平「左様〱」ト菊野始終こなし有つて。菊野「さうして何ぢやえ」三五「逢ひに來ておくれなえ、最早私は斷乎と思ひきつて居るワイの、オヽ好かんオヽ嫌ひ、縁断つたぞえ。アヽ是ではどうやら可笑しい文句ぢやなア」菊野「エ暫く遠ざかりまゐらせ候でよいワイな」與五平「イヤ〱暫くでは悪からう」三五「一寸遠ざかりまゐらせ候」菊野「申しそれで可いかえ」與五平「サア承知〱」三五「一寸遠かりまゐらせ候。二人モウそれでは可からう、恐惶謹言、イヤそれではない、めでたく〱」菊野「なんのめでたい事が有つて、

源五兵衞樣の御身の爲になる事なら、最前から兄御さんのお頼み、わたしや能う合點が行きましたワイなア」與五平「ヤア／＼そんなら眞實得心して」菊野「アノ私が退けば、親御樣の御機嫌も直り、渚樣とやらと夫婦にならしやんす、源五兵衞樣のお身の納りとあれば、兄御樣のお頼の通り、緣を斷ります退きます、かういふ心の中を、推量して下さんせいなア」ト菊野いろ／＼思入有つて。與五平「オヽ道理ぢや／＼、よう得心してたもつた、それでこそ源五兵衞も命を助る、身共も悅び、忝ない／＼」三五「菊野出かした、逍は里に育つた故、物事辨へ有つて、三五兵衞感心／＼、身共一旦汝に心をかけ、富市での時宜、何でも源五兵衞めをと思うたが、又得心して見れば竹馬の朋友、武道にかゝる義理でもなく、高で色の道、當つて碎けと、今ではさつぱりと思ひ斷つて、左右源五兵衞が爲になる事なら俱々に世話する、これさ御舍兒、とてもの事に菊野が思ひ斷つたといふことを、源五兵衞に見せずば、渚殿と滅多に夫婦にはなるまいぞや」與五平「なる程左樣、併し色里の事は不案內の拙者なれば、宜しうお指揮を」三五「然らば菊野」ト硯卷紙を取つて來て菊野にあてがひ。「源五兵衞へ離緣狀を書いて遣りや」菊野「エヽ」三五「ハテかういふ仕宜を、微塵芥子ほども知らさぬが祕密、何かなしに厭になつて退いて仕舞ふといふ一通りの離緣狀を」與五平「こりや書いたものでなければ、弟めが得心致すまい」菊野「そんならあ

やワイな」與五平「サアどうぞ譯がなけりヤ、言交はされまい、そりや身共も聞かいでも知つてゐるが、菊野、言交はした源五兵衞が、和女よもや憎い事はあるまいがの」菊野「知れた事、憎うて人に惚れるものかいな」與五平「その可愛い源五兵衞ぢやに依て、身共がいふ通りに緣を斷つても」菊野「退く事はなりませぬ、否でごさんすワイなア」ト立上り奥へ行かうとするを引止め。與五平「待つた菊野、そちが源五兵衞と緣を斷らねば、親人の手にかゝつて死ぬる、又緣を斷れば命は助り出世するが、その善惡は心一つぢや、諄うは言はぬ、どちらへなりと返事聞きたい」菊野「サア思ひまはせば廻す程、一旦を離別ねばならぬ譯なれど」與五平「それ程合點が行てあるぢやないか」菊野「ぢやというて」與五平「ハテ源五兵衞の身が納つた上では、有る緣ならば手かけ妾になりと」菊野「エヽ」與五平「又其時は相談の上仕樣もあらう、是が眞の憂世の義理と情、念斷つて」菊野「そんなら一旦源五兵衞樣の身が納つたら」與五平「身共が請合ひ」ト此時三五兵衞橋懸より出かけ、最前より樣子を聞いてゐて、此時。三五「菊野、こりや得心して緣斷つてやらねばなるまい」トいひ〳〵内へ入る。與五平「ヤア三五兵衞樣」三五「御舍弟の樣子は承つた、段々の御心遣ひ推察して、何とも氣の毒千萬」與五平「忝なう存じまする」ト菊野、三五兵衞を見て思入有つて。菊野「なる程、得心して緣切りませう」三五「ヤ」菊野「サア〳〵色々思案をして見れば、

も面目、殊に主命重き仰せ、時に源五兵衞は此大阪で逗留の中、菊野、そちと言ひかはして役目も疎畧、剰へ愚かしい萬太郎樣の御機嫌まで損ひ、身持さん〴〵と國許へ相知れ、親人の御立腹、不屈至極の源五兵衞、國へ呼寄せ手討にせんと老の一徹千島の侍、止めても止らぬ氣強いお性質、そこを彼のなぎさ樣が、段々親人を宥めて、どうぞ祝言したい、夫婦になりたいとお詫に、遉の親人もお主筋なれば、漸々と得心して、奧樣よりの付人にて、橫目の喜平太殿が渚樣を同道、身共もろとも大阪へ上つたは、源五兵衞に篤と意見を加へ、なぎさ樣と夫婦にせねば、親人の御機嫌よりは、御主人への申譯、さもなければ源五兵衞は手討に逢ひ、命を失ふばかりでなく、親人も身共も腹を切らねばならぬ時宜、さすれば是迄千島の家中にて、數代續きし勝間の家も退轉、其元はと言へば菊野、そちに源五兵衞が迷ふたばかり、親兄弟から世の人人、一家中の迷惑、たとへ死んだ後でも、阿呆の馬鹿者、人でなしと笑はれるのが口惜い、そこをとつくり合點して、氏神よりは和女を賴む、どうぞ源五兵衞と緣を斷つて貰へば、弟が心も自然と直り、なぎさ樣と祝言して、國へ歸れば親人の悅び、腹切る所か出世の御加增、サアそなぢやに依て菊野、そなたに此兄が別けての賴み」菊野「緣を斷れとは、そんな同慾なこと」與五平「どうぞ得心して」菊野「源五兵衞樣に言交はしたは、まだ間はなけれど、大分譯のある事ぢ

の茶屋へ來て、そちに逢うて打入つて賴みたいといふは、あの渚樣の事」菊野「エ、」與五平「イヤ大切な國元のお役人、又渚樣にも」ト思入有つて。「御兩所共に、菊野に一寸でもお逢なされたら宜しう御座りまする、此上は拙者か取計ひ仕りまする間、矢張アノ二階へお越し下さりませう」喜平太「然らば身共は渚樣を伴ひ、二階に相待ち居る」渚「とかく宜しう賴むぞや」與五平「畏りました」渚「そんなら」トやはり合方にて、渚喜平太をつれ、菊野こなし有つて、元の二階へ上る、與五平こなし有つて、又菊野が傍へ來て。與五平「菊野、あのお侍はお國の横目役、又なぎさ樣といふは、聞いての通り萬太郎樣の從弟、御家門のお娘御、源五兵衞が爲にはお主筋、其なぎさ樣と奧樣のお差圖にて、源五兵衞と許嫁」菊野「エ、そんなら今のお娘御は、源五兵衞樣と許嫁でござんすかえ」與五平「何んと冥加に叶うた有難い事ではないか」菊野「何のそれが」ト思入有つて。「存じませせぬワイなア」トこなし。與五平「菊野、源五兵衞と緣が斷つて貰いたい」菊野「エ、」ト大きに悔りして。「ヤ始めて逢うた兄御樣、私にをり入つて賴みたいといはしやんしたは」與五平「弟と緣を斷つて貰はう爲」菊野「そんなら今の許嫁の渚樣とやらと」與五平「なる程、女夫にせねば、弟源五兵衞命がない」菊野「エ、、、そりや何で、どういふ譯で」與五平「此度の役目首尾よう仕課せ歸國すれば直に祝言、渚樣と夫婦になれば源五兵衞が身の大慶、親兄弟も一家中

に」與五平「如何にも」ト菊野こなし有つて、右の二品を與五平が傍へ持つて往て。與五平「マア此お土産はお返し申しまする、私も藝子、ちと譯が有つて譬へ誰方でも」與五平「イヤ〳〵身共が頼みたいといふは、全く色がましい儀ではない」菊野「それでも何やら」與五平「イヤ此家の花車、菊野にちと咄があれば、皆をつれて暫く爰を」女房「ハイ〳〵合點でござりまする」皆々「粋を通して」女房「どりや奥へ參りませう」ト合方になり、皆々奥へ入る、跡に與五平菊野殘り、與五平土産物を又菊野へ差遣はし。與五平「菊野、今もいふ通り、これは身共が志ぢや程に、是非其許に」菊野「義理をかけるはお客の常、高で藝子の私に、お侍さんのお頼みとは」與五平「なる程道理」ト思入あつて上手の中二階へ向ひ。「お二人とも苦しうござりませぬ、サア〳〵是へ〳〵」ト中二階より渚、振袖娘の形にて、喜集院喜平太、羽織野袴、目附の形にて、兩人出て來る、與五平まづ〳〵と菊野を上手へ直し、菊野が下の方へ坐る、菊野始終合點の行かね科。菊野「申し貴方方はえ」喜平太「イヤ身共は千島の家中、喜集院喜平太と言うて、萬事横目役を相勤むる者」渚「わたしは又渚というて、萬太郎樣とは從弟同士」菊野「何の事やら頓と合點が行きませぬワイなア」與五平「菊野、合點の行かぬ筈、身共はこれ何を隱さう、其方が深う言かはして居る勝間源五兵衛が眞實の兄」菊野「エヽ、そんならお前は源五兵衛樣の」與五平「サア兄の身共が逐度來ぬこ

崎さん、約束は内方ぢや有つたかいな」トいひ〳〵出る、女房お崎立上り。女房「アイ〳〵、お前一寸なりと逢ひたいと待兼ねでござる、ちやつと向ふへ往きいなア」ト勸める、菊野こなしあつて。小糸「菊野さん、老松町かえ」菊野「三五兵衛様かと思ふたら、さうでもないさうな」トこちらへ坐る。菊野「アイ老松やら老梅やら、とんと分らぬワイなア」與五平「心を盡した効有つて、菊野殿のお出、忝ない〳〵、サア〳〵これへ〳〵」トこなし有つて、皆々しかぐ〳〵ある。彌助「お崎さん、菊野様を貰うて來たかはりに、何ぞよい肴で」女房「酒所か、新造様でも私が立てるワイなア」彌助「そりや忝ない、そんなら臺所で重兵衛様と一緒に飲みかけうか」トいひ〳〵奥へ入る、此内與五平盃取上げ。與五平「始めてなれば菊野、こなたへ御慮外申さうか」菊野「ハイお載き申しませう」ト盃を取上げる。與五平「さて〳〵聞いたよりは美しい、櫻屋の菊野と名に立つも理り、身共も初めて逢うて、此様な嬉しい事はない」トこなし。「ほんにそれ」ト風呂敷包を取上げ、一つ〳〵出し。「是は粗末ながらお國の名物上布、こちらは國分煙草、かう近づきになる印までに、身共が土産ぢや、何卒貰うて下されうなら千萬喜びまする」菊野「これはマア始めてお目にかゝりました私へ、結構な此お土産、忝なり御座りまする。そんなら貴方は」與五平「千島の家中」菊野「エ、」與五平「イヤこなたにチト折入つて頼みたい事がある」菊野「アノ私

與五平「如何にも〳〵、國許へ來る萬歳とは違うて、藝子の謳ふ萬歳は、中々面白いワイ」小糸房野「そんならお前は大和で」與五平「滅相な、俺は西國九州者だ」小糸「それでも國許の萬歳より面白いと言はしやんすで」房野「それで大和かといふ事いなア」女房「何のいなア、貴方は九州の千島家の御家中」仲居「源五兵衞樣や、三五兵衞樣も一緒のお國、それで菊野樣を御註文で、今夜の約束ぢやワイなア」與五平「それ〳〵肝心の身共の望みの菊野は何ぢや、なぜ遲い、畢竟菊野に逢はうばかりに、飮みともない酒を飮んだり、藝子を呼んだり、早う逢はしてくれぬ事かい」女房「サイなア、菊野さんに逢ひたいと仰しやる故、廻しの彌助を頼んで、今夜は是非此方へ見える樣にしておきました」與五平「さういふ事なら一時も早うどうぞ」仲居「イヤモウ追つけ見えませうワイなア、それまでまア一つ上れいなア」與五平「イヤ〳〵さう酒飮んでは、言ふ事が言はれぬ」皆々「菊野さんに甚いこりやうぢやな」與五平「行李か葛籠か知らぬが、何でも菊野に逢はうと、最前から、アヽ待たるゝ身より待つ身になるなとは、よう言うたなア」ト待つはつらいの唄になり、向より菊野駕籠に乘り、彌助ついて出來て。彌助「サア〳〵申し、是非ならぬ菊野さんを、この彌助が働きで貰うて參じました」女房「それは忝ない、彌助殿きつと恩に著る、待兼ねてござる、ちやつと菊野さんを」彌助「合點でござりまする」ト駕籠を內へ入れ垂を揚げる。菊野「お

え」源五「そりや合點して居る、彌助太儀」彌助「ハイ〳〵旦那モウお休みなさりませ」ト此内に駕籠舁上げる、彌助三味線箱持つ。菊野「モシ眞實に來る程に、ツイ起きなされや」源五「サヽ可いてや〳〵」菊野「オヽ辛氣」彌助「サア早う遣つて貰はうぞや」ト唄になり、菊野駕籠に垂を下し、駕籠は向ふへ入る、彌助跡に隨き入る、源五兵衛跡見送り思入あつて。源五「アヽ若輩な女に稀な者、一大事を打明かし頼んだれば、心得ました仕課せませうと請合ひ、其上三味線に五大力と書き、誓ひまで立てるとは、ハテ氣性な奴ぢやなア」ト感心のこなしよろしく有つて、チヨン〳〵にて。

幕

三幕目

造物平舞臺、見附三間の間、眞中より上手へ障子家體、長暖簾、東西に中二階折廻り障子、毎もの所に門口、出來島屋といふ掛行燈かけ、右平舞臺に菊野、小糸、房野、藝子にて三味線彈いて居ゐ、與五平着附羽織、田舍武士にて鉢を叩き拍子取つてゐる、お崎女房の形、お吉仲居にて酒を侑めてゐる、この模樣萬歳の唄にて幕開く。

仲居「サア〳〵お大盡樣、一つ上らんかいなア」女房「あなたは萬歳は酷うお氣に入りましたかな」

ませぬ、最前宅へ歸んだ所が、親方が私を呼つけて、今夜は菊野を是非とも大重へやらにやならぬ、汝が働きで今夜揚を貰うて來いと言はれました」菊野「さうぢやと言うて、今時分から他へ往く事は、こちや忌ぢや、どうなりと言うて下さんせいなア」彌助「それに如才が有らうか、ちよぼくさ言うても一向きかぬ鐵鏇親父、その上お前が爰に居てぢや事を、感づいて居る樣子、若し爰へ親方が來をると、重ねてからの爲にもならぬと思ひ、それで迎ひに參りました、今夜の所は私に面じて、どうぞ戻つておくれなされませ」菊野「イエ〳〵何ぼうお前の言はんす事でも、今頃は歸ぬる事は。コレ拜むワイなア」彌助「イヤ此方から拜みます、さうでないと中に立つた柱で、迷惑なは私一人、何とせう知らぬ」ト術なきこなし。源五「彌助があの樣に言ふを、片意地は惡からう、今宵の所はマア歸つたがよい」彌助「一遍戻つてさへおくれると、又どうなりと致しますれど、親方のかうけに、さしもの私も降參でござりまする」源五「主と病には是非がない、歸つたがよい」彌助「エヽ旦那が彼の樣に仰しやつてぢやワイな」菊野「そんなら歸なにや惡う御座りませうかいな」源五「オヽさうしやれ、彌助が術ながるぢやないか」彌助「目立つては惡いと、駕籠もたせて來ました、サア駕籠の衆、早う頼みますぞえ」ト駕籠舁ハイ〳〵と舁寄せる、菊野腹立てながら駕籠に乗る。菊野「モシ七時時分に來る程に、叩かしておくれなさんな

それ故頼むといふは爰の事ぢやワイなう」ト菊野思入あつて。菊野「よう云うて下さんした、それ程の大事を打明けて下さりまする貴下の心は、起請誓紙を貰うたより嬉しう御座りまするワイなア」源五「すりや合點がいたか」菊野「アイ合點が行たが、意氣張の強いァノ三五兵衞、ついした事では」源五「打解けさするはそなたの働き」菊野「命に代へて」源五「スリャ帶紐解く氣ぢやな」トこなし、菊野思入有つて、三味線箱と硯を持つて來て、三味線を出し、裏皮へ五大力と書く、ト五大力の唄になる、書き終ひ。菊野「これ見ておくれなされ」ト見せる。源五「ム、すべて女の人手に渡す文の封じに、開かすまいと認める五大力」菊野「さいなア、お侍樣の魂はお刀」源五「町人の魂は算盤秤」菊野「藝子の魂は三味線、其三味線の封目堅う、心の誓は五大力」源五「外へ大事は漏さぬといふのか」菊野「アイお前のお頼み、三五兵衞が胸の裡」源五「首尾よう聞いた其上で」菊野「やがて逢はうぞえ語ろぞえ」源五「マアそれ迄は暫しの中」菊野「別れのやうに思はれて」源五「ナニ馬鹿な事を」菊野「をしき筆とめ〳〵ぢやな」ト兩人思入、こなしある、ト向より彌助、駕籠一挺つらせて、急がしさうに走り出て、門口の戸を敲き。彌助「菊野さん〳〵」菊野「彌助どん、何の用ぢやえ」彌助「何ぢやあらうと一寸明けておくれ」菊野「エ、けたゝましい何ぢやぞいなア」トいひ〳〵門の戸を明ける、彌助入る。彌助「何ぢや所ではござり

て貰ひたい」菊野「私が心を見屆けた上、どう有つてもと言はしやんすは」ト思入あつて。「可うござります、如何にもお客拵へませう、たとへ何の樣な忌なと思ふ人にでも」源五「帶解くか」菊野「イヽエ」源五「ヤ」菊野「帶紐解いて抱かれて寐る事が、お客を拵へる事でもあるまい、たとへ帶紐解かいでも勤の一得、口先ばかりであのの物のと言紛らし、手管といふはお侍さんの謀計ぢやワイなア」源五「ムヽ面白い、其手管ではよもや仕損じはせまい、その客といふは三五兵衞ぢや」菊野「エヽ」ト合方になり、源五兵衞こなしありて。源五「かうばかりでは合點が行くまい、一通り聞けや、身共と三五兵衞が大阪へ上つたは、千島のお家に無くては叶けぬ大切な猛虎の劒詮議の爲に、其劒の詮議も三五兵衞が押して願ふ所存は、おのれが底意に深き企計ありと親人の仰せ、それ故わざ〳〵罷上るこの源五兵衞、さりながら是ぞといふ證據もなき故、迂濶に詮議もならず、もし荒立てゝ詮議なさば、却つて劒を破却するか、人手に渡らば。デは合點が行くまい、萬一其劒を打折るか、又は海川人の知らぬ所へ沈めて仕舞へばお家の大事、サア客を拵へてたもといふは爰の事、下地から惚れて居るこそ幸ひ、何卒三五兵衞が口から言はすか、これぞといふ證據になるべき書いたものといふか、又は少しにてもそしり走り、そなたが聞出して給るならば、それを手蔓に詮議し出し再び歸參、

様もない、過分なぞや」 菊野「オヽ可笑しやの、お前様が嫌がりなさるを無理無體に、此方から頼んで斯うなつた事、何のお禮に及びませう、心のとゞきしだけは御不自由はさせまいと思うても、知つて居なさる通り座敷一通りの私、お客というてはこしらへねば辛氣な事ばかり、其上却て今の様に、お前様に心遣をさせまして、言譯もない事。それはさうと、私をよびにおこしなされた其用といふはえ」 源五「別儀でもない、他に語らぬ一大事の事を」 菊野「エヽ」 トこなし。 源五「いやで有らうが何卒客をこしらへて給らぬかといふことぢや」 ト菊野思案して。

菊野「姫御前の教草は、稚い時に寺子屋で聞いて、よう覺えて居りまする、何ぼう卑しい勤の身でも、このお人より外は一生連添ふまいと、心に錠を卸したからは、小町の女中様や、お屋敷の姫御前も同じ事、お前さんより外に肌觸れまいと思うてゐる私に、客をこしらへてくれいとはえ」 源五「合點は行くまい、其委細といふは、源五兵衛が身に取つては大切な事なれど、心底見拔いたそなたぢやに依つて」 菊野「イヽエ聞かして下さんすな」 源五「なぜに」 菊野「サアお前の身に大切なる事を、私が聞いた其跡で、何處からどう廻つて、主の大切な事を他外の人が言ふまいものでもない、其時には遉が勤の身、もしや私が口から漏れたやうに思うておくれなされはせまいが、どうも私の心が濟まぬワイな」 源五「其誠を聞いたからは、どう有つても客を拵へ

源五「彌助〳〵、何ぢや」彌助「イヤ〳〵何にも旦那のお聞なさるゝ事ぢやござりませぬ」源五「一寸と聞いた所が、菊野が身請さうな、是に金子が一兩二分、それでよい樣に」ト投つてやる。彌助「イヱ申しそれでは」ト氣の毒なるこなし。源五「ハテ扨身共次第にしておいたがよい」ト彌助金を取つて。「へ、、、、とつとモウこんな事を、貴方のお耳へ入れると、菊野樣が大抵氣の毒がつてぢやござりませぬけれど、私も此間は振廻しが惡うて、ツイハ、、、、そんならマア、是をお預り申しませう」源五「然らばそれでよいか」彌助「可い段か、よう過ぎてござります、イヤよい次手に仲人は宵の程」家主「更けぬ間に我等もお暇申さう」源五「左樣ならお歸りなされい」菊野「彌助殿、ようごんしたえ」彌助「菊野さん、これから跡でしつぽり」家主「火の用心を」ト源五兵衞、菊野を見て彌助と顏見合はせ。二人「ようなされや」ト表へ出る、家主仁兵衞は橋懸へ入る、彌助は花道よき所にて。彌助「此金が一兩二分。是から此方の目論見が。コウツ。兩方摑む鎹儲け」トうなづく〳〵、チヤント唄になり、彌助向へツイト入る、源五兵衞菊野そこらを片づけ。源五「菊野、今日遣はした文、屆いたであらうな」菊野「アイたとへ文は參じぬと言うても、毎晩來る事は知れてあるぢや御座んせんかいな」源五「イヤ改つた事ながら、日外ふとした事が緣となり、それから身共を如才もなく、大切に致しくれる其方、なか〳〵禮のいひ

うて居る、彌助手酌にて引受け飲む。彌助「イヤモウかうした所は、とんとお二人の宿這入見るやうな、さらば祝うて私が」ト表より。家主「泉は其儘、盡きせぬ宿こそ目出たけれ」ト謳ひながら内へ入る、皆々見て。菊、彌「もしあなたは何處から」源五「お家主様ぢや」家主「最前から表へ來かゝり、あんまり物が騒ぐので、何事やらかすと思うて立聞してゐれば、宿這入の藝子、そこで我等が祝儀の小謠、つきせぬ宿へ茶の入花、女中ソレ中よう添ひとげる所の名は老松町、物事丸屋仁兵衛が座敷、居くろめる様にさつしやりませ」菊野「ほんに見かけによらぬ氣の輕いお家主様」彌助「お持せの入花で、家移り茶漬はどう御座りませう」源五「ハヽヽヽコリヤ面白い、酒宴の宿這入」彌助「混雑になつた此座敷」家主「强者の交り」ト菊野をゆびさして。彌助「頼みある中の茶漬かな」ト謳ふ。皆々「ハヽヽヽ」家主「どれ〳〵我等も相伴せうかい」ト酒をのむ。彌助「時に宵から餘程の間ぢや、俺が影が見えると菊野さんの爲にならぬ、私はモウ歸りますワイ」菊野「そんならさうして、又明日の朝毎時の樣に駕籠遣して下さんせや」彌助「そりや呑込んでをりまする」ト菊野をこちらへ連れ來て。「宵から言はうと思うてゐましたが、場合が惡うて言ひそゝくれて居ました、今夜身印が」ト指五本見せる。「これだけ御座りまするが、可いかえ」菊野「そりや二三日の中に」彌助「サアその二三日がもちやつかうかと思ふのぢやが」

仕、コリヤ忌でも上りませねばなりますまい」源五「然らば身共は、御飯頂戴仕りませうの、イヤ最前家主の持つてわせられた香の物が、其處にあらう、取つておじや」彌助「イヤそりや私が」ト立たうとするを。菊野「彌助殿、さうしておいで下さんせ、こゝへ來てこんな事するのが、俺が樂み、お前は退屈にあらう、酒でも飲まんせいなア」彌助「如何樣、源五兵衞樣の傍で世話女房するのがお前樣の樂み、そんなら私は左平次せずと、手酌でそろ〳〵遣りかけう」菊野「それがよいワイな」ト彌助筒茶碗にて酒を呑む、菊野そこらを尋ねて窓の引繩に括付けし香の物を心づかず、顏に行中り恟りする。菊野「アレエ、」ト飛退く、兩人も吃驚。源五「何ぢや〳〵」彌助「何で御座りまする、吃驚するワイなア」菊野「それでも誰やら冷い手で、わしが顏を撫でたワイなア」ト源五兵衞笑うてゐる。彌助「何を云ひなさるやら、誰がマア冷い手で顏を撫でてよいものか」トいひ〳〵右の香の物を見て。「ハア、よめた、もし今の正體は」ト右の香の物をぶらつかし。「レソで御座りまする」菊野「モシありや何ぢやえ」源五「香の物の化物、ハヽヽヽ鼠の政道に難澁致し、引窓の紐に括付けておいたのぢや」彌助「この香の物は如何なる科にや繩目の恥、さぞや苦痛で有らうなう」ト笑ひながら香の物を下す、菊野取つて見て笑ふ、此前より家主仁兵衞、片手に小提灯、又片手に土瓶さげて來て内へ入りかゝり、この體を見て門口に窺

菊野「これ其樣にすると惡いワイなア」彌助「オツトこりやあやまつた」ト三味線箱を目八分に構へ、菊野が前へ持つて來て。菊野「瀧の水は彌助殿、お肴は私が進上ぢやワイな」トいひ〳〵風呂敷を取り、蓋をあけ、中に延紙を敷き、三味線の上に大きなる鯛と蛸を載せてある、源五兵衞見て。源五「鯛の濱燒に蛸の櫻煮、これはきびしいお持せぢやな」菊野「マアこちらへ出さうかいなア」ト懷の延紙にて持添へ、蛸を引上げ難儀なこなし。「こりや何うせうぞいなア」源五「待つたり〳〵、蛸のおき所は」ト刀懸を見て引寄せ、刀をのけ。「ソレ爰へ引上げたり」菊野「アイ〳〵」ト蛸を刀掛へ引かける、源五兵衞鯛をつまみ上げ。源五「この鯛はどうせう〳〵」ト置所に困りし體にて。「オヽ有るぞ〳〵、菊野、その挾箱の中に膳があらう、持つて來やれ」菊野「アイ〳〵」ト挾箱より茶碗飯櫃を載せた膳を取出し。源五「飯櫃を除けて、此鯛をかう直すのぢや」ト膳の上に鯛を置き。彌助「見りや飯も有り、貴方は御酒は上らず、此肉で御飯あがりませぬか」源五「イヤ〳〵最前家主殿が持つてわせられたれど、望みにない故、取片づけておいたのぢや」菊野「そんなら何時お前樣は飯を上つたえ」源五「今朝茶漬たべた儘ぢや」菊野「その樣になさるとお毒でござりまする、些少ばかりでも上れいなア、ドレ私がお給仕致しませう」ト三味線箱の風呂敷を前垂にして、茶碗に飯を盛り、鯛を載せて膳をすゑる。彌助「菊野さんの給

御遠慮は御無用〳〵」ト立ちあがり。源五「然らばモウ御座りまするか」宅右「近日お尋ね申しませう」源五「よくお出なされました」ト宅右衛門表へ出る、皆々こなし。宅右「家主の内方にしてはどうか」ト菊野を見る。「大阪は繁華ほど有つて、借錢乞まで派手なものぢやなア」ト唄になり宅右衛門入る。源五「やれ〳〵術ない目をさした事で有つた」菊野「わたしも眞似はしんどうてならぬワイなア」彌助「菊野さんの婆で、ハア〳〵思うて汗をかいてのけた」菊野「併しまんまと瞞して去なした、戻つて來てぢやあるまいかいなア」源五「イヤ〳〵瞞して去したと思ふは不覺、今歸りがけに言うた一言では、萬更覺らぬでもない」彌助「左樣でござりまする、派手な借錢乞と、少し狂言を殘して去なれました」源五「彌助、そりや何ぢや」彌助「瀧の水一瓶、われ等がお見舞」ト股ぐらより德利を出し見せる、源五兵衛取つて見て。源五「これは忝ない、併しこりや內から燗でもして來たか」彌助「イヤ〳〵冷でござりまする」源五「それに又この溫りは」彌助「ハヽヽ、聞えた、最前入る時に隱し所に困り、私が酒藏へ忍ばせ置きましたが、そんなら私が精分の強いので燗が出來たので御座りまする」源五「オヽ道理で可笑しい歩きやうぢやと思うた、菊野が燗なら猶以てよからうな、ハヽヽ、まづ酒は出來たが、肴は何處から出ようぞ」菊野「彌助殿、わしが箱下さんせ」彌助「ハイ〳〵」トこかげより出し、引提げて來ようとする。

も屈んでござる、則ち後に居らるゝ御息子といふは、この御家御の實子でござります、所へ仁兵衛殿がにじり込みましたとの事、御覧の通り仁兵衛殿は甚だの結構人なれども、内方は生れついての爪長でござれば、か樣に度々の催促に、拙者も困入り居りまする」宅右「イヤモウ家主の結構に、女房のわゝしいは今時の流行物で御座る、ハテ苦々しい儀で御座る」彌助「イヤ〱苦々しからうが甘からうが、此方樣には構はぬ、親父の結構人と母者の爪長と、此家の事で毎日毎日の夫婦喧嘩、亂騷ぎでえす」菊野「こちの主の樣な、せりふなしでは世帶がつまらぬに依て參じやんす」彌助「是非とも今夜は參用して下さりませ」源五「なる程段々の御道理の申分、併し手前も少々工面致し居れば」彌助「エヽ工面と言うたら、無心でござりませうがな」菊野「これいなァ無心をあてにせぬがようござる、今時のお客は惡洒落で、一向あてにはならぬワイな」トいふを、源五兵衛彌助いろ〱紛らす、菊野心づきて。「イヤ惡洒落な事いはずと、サア早う譯立てゝ下さんせいなァ」彌助「折角親子づれで來たからは、算用して貰ひませう、源五兵衛殿、どうでござります」ト思入、源五兵衛こなし、宅右衛門氣の毒なる體にて。宅右「イヤ最前より餘程の長座、拙者最早お暇申さう」ト立あがる。源五「これは折角お越し下されしに、よからぬ事をお聞かせ申し、氣の毒千萬に存じまする」宅右「何の〱、唯今の御身分では有るべき事、

を括りつける科、三味線箱を後へ隱す、此間内には源五兵衛宅右衛門よろしく、よき時分に。菊野「ゆるしやりませ、源五兵衛樣は内に御座るかな」トいひ〳〵腰をかゞめ入る。彌助「何でも今夜はお目にかゝらにやなりませぬ」ト後より彌助入る、源五兵衛兩人を見て驚くこなし。菊野「イヤ〳〵何にも吃驚さつしやるな、高で借錢乞で御座んす」ト源五兵衛へ呑込ます。彌助「オヽ母人の言はるゝ通り、何も彼も算用して貰はにやなりませぬ」菊野「オヽさうぢや、息子のちよち兵衛がいふ通り、爰へござんしてから三十日餘りの座敷代、ノウさうぢやあらうがの」ト彌助へこなし、彌助又そればかりぢやない、米代も有ると、飯喰ふ眞似する。菊野「オヽさうぢや飯代」ト又彌助を見る、彌助味噌摺る眞似する。菊野「おむし代」ト彌助を見る、彌助木をわる眞似する。「木代、さうして又」ト彌助を見る、彌助鹽醤油の仕方は出來ぬ故、困つたる思入、菊野も困りしこなしにて。「さうして又、アノそれ、オヽさうぢや、廿四日廿五日の天神樣の約束、庚申さん初午の日柄も無茶苦茶にして貰つては濟まぬに依て、何ぢやあらうと今夜中にせりふして下さんせにやなりませぬ」ト思入あり、宅右衛門こなしある。宅右「イヤ源五兵衛殿、最前のお家主は甚だの深切、それに引かへ内方は、ハテ嚴しい催促でござる」ト源兵兵衛思入有つて。源五「そりや其筈て御座る、この内方は家付の後家でござる、それであれ少し腰

う存ずる故、次手ながらお咄申す」ト菊野これを聞き腹立てる。源五「右縁組の儀は私不承知で御座る、と申すは御家門の息女を妻女に申受けましては、源五兵衛は女房の蔭で立身致したなどゝ申しては、武士道が立ちませぬ、それ故婚禮の盃は、其儘等閑に致し、右の御用につき出阪取急ぎ打過ぎまする」ト菊野、よし〳〵とうなづく。宅右「さるに依て御歸參の上は、早速御祝言の盃をなさるゝが、御親父への御孝行かと存じまする」源五「委細畏りまして御座る」ト菊野これを聞き腹立てるこなし、血相して入らうとするを。彌助「申しお待ちなされ、腹の立つは尤ぢやが、お前が今入つては、源五兵衛樣の爲にならぬ、それよりは彼の毛才六を去した後で、存分言うたがよう御座りませう」菊野「ほんにさうぢやなア、したが何したら去くさらうぞいな」彌助「何うといふたら。オヽよい思案があるぞ、幸ひの其頭巾で顏を隱し、お前は家主の婆になつて、家賃から米鹽まで、仕送りの催促がよう御座りませう」菊野「滅相な事いはんす、遂度そんな事いうた事がないワイな」彌助「そこは私がお前の息子になつて」ト菊野に囁く。菊野「そんなら無茶苦茶にいふ程に、よき樣に賴むぞえ」彌助「そりや呑込んでをりまする、マア帶も前へ廻して、コウ腰を屈めて入るのぢやぞえ」ト婆の樣にして見せる、菊野笑ひながら帶を前へ廻し、身拵する、彌助酒德利の置所に困り、思入有りて德利を股間へ隱し、紐

て居難い、幸ひ土瓶を持つて歸り、熱い茶と汲みかへて參じませう」源五「これは〳〵重々の御苦勞」家主「イヤ申し貴方、ゆるりとお話なされませ、源五兵衞樣、後程お目にかゝりませう」ト唄になり、仁兵衞土瓶を提げ橋懸へ入る、この唄をかりて向より菊野、著流し袖頭巾、跡より彌助、木綿やつしにて三味線箱と酒德利を、振かたげにして出て來て、花道よき所にて。

彌助「菊野さん、毎晩〳〵見る顏、ちつとやそつと遲いというて大事か、其樣に走らずと、靜かに歩いたが可うござりませう」菊野「彌助殿何を言はしやんすやら、此方急きやせぬけれど、お前が遲いのぢやワイな、堪忍して下さんせ」トこんな事いひ〳〵平舞臺へ來る、宅右衞門源五兵衞しか〴〵ある。宅右「シテ其御詮議の筋は、まだ手がかりも御座らぬか」源五「イヤ其儀も少し心當りが御座れども、並々ならぬ詮議の品故、甚だ心を痛めて居りまする」宅右「それにつけても此度お國一件、伯父御の惡心、家中の内にも惡人の輩は殘らず滅亡致し、殿樣のお血筋に御家督と相極りながら、彼の今一品の劍が出ねば、足利殿より御免許も御座らぬとあれば、此儀御承知で御座らうな」ト此内菊野表より窺ふ。源五「なる程承はりしお國の一件、それ故毛頭油斷は仕らぬ」宅右「まだ其上に先達て貴殿とお許嫁ある殿の御家門、非上氏の御息女渚殿、此度貴殿の儀を御聞及びあつて、甚だお案じなさるゝ由、お目附甚五右衞門殿の噂、お痛はし

取りませぬ、矢張正金で返濟さつしやれ、此金をお渡し申さうと存じ、一寸參つたので御座る」ト右の金子、源五兵衞が傍に置く、思入あつて。源五「朋友の交りは筆墨のごとしと申すに違はず、不所存な拙者をお見捨なく、忝なう存ずる、併しお氣遣下さるな、これに居らるゝは、則ち老松町住人丸屋仁兵衞と申す、この人のお世話になり、此座敷も自分の掛屋敷でござるを、豫め取繕ひ當所の住居、鹽味噌薪に至るまで、段々の親切、詞にも述べられぬ時宜、それ故隨分心易う暮しをりまする」宅右「委細承つて安堵仕つた、ム、然らばそれに居さつしやるが家主殿で御座るか」家主「ヘイ左樣でござりまする」宅右「扨々世には賴もしい人もあるもので御座る、拙者また不禮の段御免下されい」家主「これは〳〵痛入りまする、イヤモウ家主ではござれども、折々は奴になり飯炊になり、又或時は源五兵衞樣の按摩も仕まする、お求めなされてずんど御損のない家主でござりまする」宅右「唯今の樣子承り、御不自由はあるまいなれど、これは拙者が志、平に御用立下されい」源五「左樣あるを無下なう御返濟もいかゞ」宅右「御遠慮は御無用」源五「然らば暫時借用申しませう」ト右の金子を懐中して。「か樣に貴公のお世話に相なりまするに就きましても、何卒歸參の儀を願ひ居りまするが、今に於てかの詮議の」ト言ふを宅右衞門、家主へこなし、家主思入あつて。家主「イヤモウお侍同志の交際は、氣の張つ

右衛門顔見合せ。源五「これは宅右衛門殿」宅右「源五兵衛殿、其後は打絶えまして御座る」源五「先づ先づ」ト宅右衛門しか〴〵ありて上の方へ坐る。「扨お懐かしく存ずる、何よりお話申さうやら、まこと日外やふと致した事で、唯今のこの體、面目次第もない儀で御座る」宅右「誠に手前も其座に居合はしながら、萬太郎樣のお詞をかつて、三五兵衛の傍若無人、何と申さう詞もない儀、それ故其儘に打絶えまして御座る、其段御免に預りませう」源五「これは〳〵御挨拶、忝う存じまする」ト此挨拶の中に、宅右衛門煙草入を出し、煙管に煙草をつぎ、吸はうとして火のないこなし。源五「お莨盆に火がない、可内なぜ火を入れぬ」家主「ネイ〳〵」ト火がない・故に困つたこなしにて、火打箱を見て、取つて來て忙しなく火を打ち。「さらば一服召上がられませう」源五「切火とは能く氣が注いた」宅右「召使は甚だ綺麗好と見えまする」ト家主、あたりの筒茶碗に茶を汲んで持つて來る、宅右衛門源五兵衛しか〴〵挨拶あつて。源五「シテ其許夜分にお出下されたは、御用向でござるかな」宅右「イヤ〳〵さして用事と申すでも御座らぬが、日外の砌よりお屋敷へお立寄も叶はず、卅日餘りの御難儀、何か御不自由にあらうと存じ、みつぎと申すではないが」トいひ〳〵紙入より金包を出し。「これに金子一兩二分、しかも小粒で六切御座る、これを用立ませうから、御歸參の節返濟なされ、併し申さぬ事は聞えぬ、切米では請

宅右「今教へてくれたは確かに此家ぢやが、頼みませう〳〵」家主「日が暮れてあるワイ、どうれどうれ」宅右「イヤちつと物が尋ねたう御座る、この邊に先月から借家致さるゝ、勝間源五兵衛殿と申す仁は御座らぬか」ト源五兵衛これを見て。源五「いや〳〵どうやら聞き馴れた聲でござる、以前の朋輩どもで有らう、仁兵衛どの、御苦勞ながら口上請取つて下されい」家主「合點でござりまする。源五兵衛殿はこれで御座りまする、何處からござりました」宅右「然らばこれで御座るか、手前儀は出石宅右衛門と申す者でござる、源五兵衛殿御在宿でござらば、一寸御意得たいと言ひ入れて下され」家主「ハヽヽ、暫く待つて下さりませ」トこちらへ來て小聲になり。「留守つかうて去しませうか」源五「イヤ〳〵彼の仁は拙者日頃から昵懇の朋輩ともでござる、苦しう御座うぬお通し下されい」家主「そんなら通しませうか」トいひ〳〵羽織を脱ぎ尻をからげる、源五兵衛見て。源五「仁兵衛殿、仰々しいそりや何をさつしやる」家主「以前の朋輩衆が尋ねて在せたに、一僕が無くては濟まぬ、そこで我等假の可內と化たぢや、遠慮なしに遣はつしやれ」ト奴のやうにして門口へ來て。「どうれ。ネイ〳〵、これは〳〵宅右衛門様でござりますか、ようこそお出下さりました、主人源五兵衛宿に居ります、此方へ、ネイ〳〵お通り下さりませう」宅右「然らばゆるしやれ」家主「ネイ〳〵、斯うお出下さりませう」ト源五兵衛宅

夜食も大事あるまいと思うて持つて來た、もし香の物も出し立ちや、上りませぬか」源五「イヤイヤまだ空腹にも御座らぬ、後程食べます、膳部は其儘片寄せて下さりませう」家主「ハテ後は後の事、マア一膳上りませ」トいひ〳〵其處等を見まはし。「南無三、大和風呂に火が消えたさうな、さうして土瓶は何處に御座りまする」トいひ〳〵そこらを探す。源五「イヤ〳〵お騷ぎあるな、土瓶は茶がわるうならうかと存じて、用意致しておきました」ト日向につりあり。家主「こいつは理窟ぢや、どれ〳〵」ト土瓶をいらうて見て。「エヽしやん〳〵と冷盡つてあるハハヽヽヽ」源五「イヤ〳〵餘寒嚴しうても最早二月、逆上致して惡いから、隨分火のないがよう御座る」家主「デモ古い茶では毒ぢや、そんなら明けて來て上げませう、併し其間飯櫃や香の物を爰に置いたら、鼠が喰ひませう、どこぞへ片づけて置かうにも膳棚はなし、どうしたら可からう」源五「それは拙者宜しう取計ひませう、此方へ遣はされませ」ト香の物を取り、引窓の細引に括りつけ、膳と飯櫃を挾箱へ入れて。「かう致しおけば、鼠の引く氣遣はござるまい」家主「出來た、香の物が八幡場のお子をやつてゐるので、内は眞の闇ともなりにけり」ト淨瑠璃にていふ。「ハヽヽヽどれ火を燈してあげませう」ト唄になり、家主火打箱を取寄せ、火を打ち行燈へ點し、兩人しかぐ〳〵捨白あるべし、ト橋懸より出石宅右衞門、羽織袴にて來る、門口へ來て。

ござる、無用心なお人ぢや」源五「イヤ〳〵たとへ何ぞ盗つて帰つても苦しう御座らぬ、拙者が物とてはこゝに御座る大小と、そちらの空挾箱ばかり、この蚊帳呉蓙に至る迄、貴公のお世話で借りました、其外は丸行燈、大和風呂、火打箱、煙草盆、是ぢやと申して皆其許の物、取られてからが手前何とも存ぜぬ」ト此内家主こなしにて横手を打ち。家主「ハア、遉はお侍程あつて、諂ひのない、扨々さつぱりとしたものぢやなア」源五「ハ、イヤ座興は格別、誠に不圖致した御縁で其許のお世話になり、二月越に卅日餘り、家賃と申し殊に朝夕までか様に自身にお運び下さる段、御深切と申さうか、お禮の申様も御座らぬ、私儀身不肖ながら千島の家中勝間源五兵衛、兩手を突いてこの通り當座の御禮、首尾よく歸參も致さば、唯今の御恩は急度謝しませう、千萬忝う存ずる」ト辭儀する、家主迷惑さうにして。家主「サァお手上げられませう。これはマァ改つた御禮に痛入りまする、愛縁より奇縁とやらいふもの、お前樣の事と言へば、悴が事より大切に存じまする、二月は愚かこの上四月五月、乃至一年でも二年でも、ゆつくり思うて御座りませ、又座敷代を遣らねばならぬなどと、苦にせぬがよう御座りまする、一文半錢取らいでも大事ない、これ何處ぞ漏るなら直してあげませう、其内にも歸參ある樣に、及ばずながら私も神佛を祈りませう」源五「千萬お志忝なう存じまする」家主「彼是いふ中暮前、

や貰ひさへすりや可いのぢや」家主「サアそつちは貰へば可からうが、こちらは與らねば可いぢや、何ぼうなりと喋舌れ〳〵」今「エヽ忌々しい、錢にならぬ所でてん〳〵天滿の神子の」〇「あつたら所で破太鼓を叩かうより、テン〳〵天滿の神子の振袖」ト兩人踊りながら橋懸へ入る、家主跡を見て。家主「神子どのもお神樂が上らぬので、踊り舞うてゐられた、イヤ内にござりまする」ト戸を開ける。源五兵衛「誰ぢや〳〵」家主「誰といふたら丸屋仁兵衛家主でござりまする」源五「これは〳〵お家主樣、ようお出下さりました」家主「イヤ〳〵矢張其儘、私への御遠慮御無用」トいひ〳〵源五兵衛が傍へ坐る。源五「唯今表で何やら聒しう申して居つたが、何事でござりました」家主「イヤ何と申したら、これの門口で物貰と拙者少々挑みましてござる」源五「ホヽシテ物貰は歸りましたか」家主「鶴の一聲、去ねというたら迯げて去ました」源五「最前から門口で聒しう申して居つたれども、貴公のお出下さる時分にお目にかゝらば、歸して下されうと存じ、打やつておきました」家主「ハテこな樣は不精なお人ぢやナア、けれう手樣がよい時に來たらこそ、用でも有つて參られねば、どうさつしやる」源五「イヤモ貴公がお出下されずは其儘に捨置き、日が暮れうが初夜にならうが、打遣ておきまする、何處ぞでは歸ります」家主「ハテ悠長な事をいふお人ぢや、彼奴等は米貰もあり、又中には手許にある物を引つかけて行く晝鳶も

刀掛に二腰ともに掛けてある、門口には物貰ひ、一人は裸身にて汚れたる白張を著て、女形の張鬘を著、土の鈴を持ち踊つてゐる、一人は乞食の形にて、破太鼓を叩いてゐる、この見得在郷唄にて幕開く。

乞食○「テン／＼天滿の神子の振袖、鈴を袂に控へた」トいひ／＼太鼓叩いてゐる。同△「控へたぞやさし、振袖鈴を袂に囃した」トこれにて兩人喧しう言うて、この間に橋懸より家主丸屋仁兵衛、著附羽織にて日光膳に色々取載せ、これを持つて出る。家主「ヤイ／＼汝等は爰を何處ぢやと思うて、てん／＼天滿をやつて居るぞ、通れ／＼」ト是にて兩人踊をやめ。○「アイ聞いたか、内から何とも言はぬに、表から通れとは、こいつ新しい」△「表から通れといへば、差詰内へ通らにやならぬ、來い／＼」ト兩人内へ入る。家主「コリヤ／＼待ちをれ、内へ入つても借座敷の事なれば何にもない、コリヤ見い、飯まで此樣に持運ぶ事ぢやに依つて、米は固より錢一文もない、役に立たぬ所で口叩かうよりモウ行け／＼」○「旦那さん其樣に言はずと、煙草なりと遣つて下されませ」家主「此奴樣々にねだりかける、こりややい、一體汝等は目が明いてあるかないか、この門口の書附が見えぬか」トさげ板を敎へ○「偏屈者借錢乞物貰ひの者無用と、しかも假名で書いてあるぞよ、これが汝等の目にかゝらぬか」△「懸つても懸らいでも、こつち

様にすげなうさしやんすぞいなア、エヽもそつと此方へ寄りんかいな、オヽ辛氣」トこれを聞いて三五兵衛、うつゝの様になり、聞耳立てゝゐる、正平太は知らずに思入あつて。正平太「然らば三五兵衛様、この御狀きつと源次兵衛様へお届け申しませう間、源五兵衛様へ宜しく仰せ上げられ下さりませう、隨分貴方様にも御機嫌よく、何卒首尾よう萬事相調へ、御歸國を相待ち居りまする」トこんな事挨拶してゐる、三五兵衛一向耳へ入れず、障子家體の間へしづ〳〵聞耳ながら來る、正平太いろ〳〵挨拶しても、三五兵衛挨拶せぬ故、段々三五兵衛について同じく來る。正平太「三五兵衛様〳〵」ト何ぼう言うても聞入れず、同じ障子の内を覗かうとする、障子の内の燈火、内にて吹消す、正平太この時。「申し三五兵衛様」ト大きな聲していふ、三五兵衛吃驚し、ぐんにやりとなる、この途端にて。

幕

二幕目

造物　一面の平舞臺、見附赤壁、唐紙押入納戸口、上手の方筋違ひに障子家體、橋懸り、例もの所に門口、さげ板にして「偏屈者借錢乞物貰ひ無用」といふ書附あり、右舞臺上手に挾箱一つ、大和風呂、丸行燈直しあり、源五兵衛著流しにて呉座を敷き、蚊帳の内に枕をして本を讀んでゐる、傍に

やる、源五兵衛奥塀口の障子家體へ入る、お市あとをながめ、菊野が置いて行た鏡袋と延紙を取上げ、わが懐より紙を出し一緒にして。お市「女中と違うて藝子様は、これだけ世話が多い」ト鏡袋延紙を障子家體へ投り込み、ぴつしやりと障子さし、息をつぎ思入ありて奥へ入る、橋懸より奴正平太、ぶつ裂羽織股引大小にて狀箱を持ち出て。正平太「笹野三五兵衛様はどれに御座る、お國許より火急の御狀でござりまする、三五兵衛様〱」三五「ナニお國許より火急のお飛脚とは」トいひ〱出て正平太を見て。これは〱正平太」正平太「三五兵衛様、お國許勝間源次兵衛様より、貴方様と御子息源五兵衛様への此御狀」ト狀箱を出す。三五「身共もお國許へ書狀遣はさうと存ずる所へ、幸ひ〱」ト狀箱を取つて披き見て。「ム、コリヤこれ大殿修理太夫様を毒害致し、其上お家を押領せんとせしは、伯父御兵部卿江本丹藏と相知れ、御成敗は今川大炊様、跡目相續の儀もお家の血筋助作殿、萬事納り御目出たにつき、彼の紛失の猛虎の劔、一時も早う詮議し出し、歸國せよとの源次兵衛殿の御狀。コリヤ源五兵衛に見せるに及ばぬ、返事は則ち唯今奥にて認めおいた此狀、國許源次兵衛殿へ、大儀ながら引返して届けてくりやれ」正平太「スリヤ此狀をお返事と申し、源次兵衛様へ渡せば可うござりまするか」三五「如何にも、確乎と渡してくりやれ」ト此時上手の障子家體の内にて。菊野「申し源五兵衛様、なぜ其

から知れてあるけれど、外にお禮の言ひ樣がなさに、折角切つた指も仇事ぢやと言うて、私故に其御身にさせまして、此まゝではどうも。得心して下さんせねば寧そ」ト源五兵衛が刀に手をかける、宜しくとめる。源五「待て菊野、それでお主の眞實が見えた、源五兵衛承知した」お市「菊野樣、承知ぢやといな」菊野「そんなら眞實に承知しておくれたかえ」ト源五兵衛、菊野が手を執り。源五「親が滿足に生付けた五體の指まで切つての汝が禮。承知した」ト指を懐へ入れる。お市「菊野樣、今のを見なしやんしたか、指を戴いて承知ぢやといな」菊野「源五兵衛樣、何にも申しませぬ、エヽ、忝なうござんす」ト源五兵衛に寄添ふ、源五兵衛思入。お市「おつと其手を放すまいぞ、雨降つて地固まる、縁を結ぶは此常陸帯で」ト前垂を外し、紐にて菊野を源五兵衛が身體へぐる〱巻にする、源五兵衛迷惑なこなし。お市「サア源五兵衛樣、思ひよらぬ新枕、アノ北座敷へ」源五「イヤモウそれには及ばぬ事」お市「及ばぬでは菊野樣の氣が濟まぬ、サア〱ちやつとお出なされませいなア」ト源五兵衛を無理に立たす、源五兵衛菊野を抱へながら、勿怪な顔にて立上り。源五「そんなら此儘で行かうか」お市「サアお出なされませ」ト突きやる、源五兵衛ひよろ〱として止り。源五「アヽ儘よ、今迄は主人持、今宵からは浪人の源五兵衛、明日の晝迄ゆつくりと」ト菊野と顔見合せ思入あり、唄になりお市、源五兵衛を突き

れぬ最前の仕宜」菊野「それぢやに依つて、このお禮のいひ樣は」お市「思案極めておかしやんしたかえ」菊野「其思案は」ト邊りの枕を取つて來て舞臺に直し、源五兵衛が刀を拔き指を切る。兩人恟り。源五「これは何事をした」お市「痛みはせぬかえ」トいひ／＼兩人よろしく介抱する、菊野「イエ／＼大事ござんせぬ」ト思入ありて邊の指を拾ひ、紙に包み源五兵衛が前におく。「これ取つて下さんせ」源五「ヤ」菊野「賤しい私に頼まれた事、忌とも言はず聞いておくれなされた其上に、お屋敷の仕居さへ叶はぬやうにした元の起りは淺はかな私から、今更何とお禮の言ひやうがなさに、眞實惚れたといふ心の誓でござんすワイなア」ト源五兵衛思入あつて。源五「最前頼まれたは僞なれど、其禮の言ひ樣がなさに、指まで切つて」菊野「アイお國には歷乎とした嫁御さんのある事も聞いて居ますけれど、大阪にある間はせめて私を女房に。イヤ女房は過ぎる、飯炊ぢやと思うてお傍に置いて、エヽ申し」お市「けうとい物ぢやワイなア、いひ合はせ色事を、底心からの惚れやう、遉は北の藝子樣程有つて、達引が格別ぢや、よう惚れた、指は愚か腕でも首でも切つて上げいなア、能う惚れたなア」源五「イヤこれお市、其樣に傍から囃し立てな、身共が承知やら不承知やら知れもせぬもの、指一本でさへ迷惑致しをるに、腕や首を貰うてどうするもので」菊野「そんなら私が惚れたがお氣に入りませぬかえ。お氣に入らぬは初

の傍へ行かうとするを、源五兵衛コリヤと引廻はしてとめる、菊野、源五兵衛を見て泣落す。
三五「イヤ最前より由ない事で座敷の不興、萬太郎樣所をかへて飲直さうで御座りませぬか」萬太郎「それも可からう、そんなら是から亭へ往て、藝子どもには三味線鼓弓、我等は夜弓と出かけう」三人「これは一興でござりませう」萬太郎「サア皆來い」三五「御前の御意を申す三五兵衛とて事に。御意ぢや」ト扇にて源五兵衛を打く、菊野、源五兵衛思入あつて、三五兵衛じろりと見て。「ハヽヽ」ト唄になり、この一件殘らず入る、跡合方、源五兵衛菊野殘る、皆々入つて仕舞ふ、お市障子家體より出て、兩人の傍へ來て菊野が袖を控へ。お市「最前からの樣子は、皆聞いて居ましたが菊野さん」ト菊野、お市を見る、お市は源五兵衛を敎へ。「お氣の毒なものになつたなア、さうしてマア仕舞はどうせうと思うてぢやえ」源五「ハテよいワ、か樣な難儀になつたら賴まれまい、又難儀にならぬ事ならば賴まれうといふ樣な、二筋な賴まれやうはせぬ、菊野、何にもきな〳〵思ふ事はない、御前を遠ざけられてというて、さしたる失策でもない、又御機嫌の直る事も有らうはサ」菊野「わたしを案じさすまいと、何程其樣に仰しやつても、三五兵衛づらのお傍に居る中は」お市「ほんにさうで御座んす、源五兵衛樣の御難儀も、元の起りは三五兵衛樣がお前を口說かしやんしたを、得心せぬ故とは見す〳〵知れてありながら、さうとも言は

ツ何れも萬太郎様の御意ぢや、源五兵衛を打つしやれ」 ト三人はつと源五兵衛が傍へ行き、扇を持つて、 三人「御意ぢや〳〵」 ト源五兵衛を散々に打つ、菊野驚き源五兵衛に取付き。 菊野「源五兵衛様、思ひがけない此様子、かうならうとは知らず、由ない事を頼んで」 ト言はうとするを、源五兵衛、菊野を引きつけ。 源五「コリヤ何にも言ふな、言譯するもかうならぬ先の事、一旦侍が頼まれては擲たれても立通すが千島の國の氣性ぢやワイやイ」 菊野「ぢやと言うて見す見す」 源五「サア見す〳〵知れた二人が間を、御存じない萬太郎様はお腹の立つは御尤、それぢやに依て擲たれても何ともないワイやい」 ト菊野を突きやる。 菊野「エヽ」 ト身を震はし源五兵衛を見て。「堪忍して下さんせ〳〵」 ト源五兵衛を拜み泣く。 三五「ハヽヽヽ、何といづれも、色男といふものは女の不愍がるもので御座る」 三人「左様で御座る」 トこちへ參る、三五兵衛入替つて源五兵衛が傍へ行き。 三五「源五兵衛、女故に打擲せられ、本望であらうなア、菊野、そちも嬉しからうな、萬太郎様大切な役目を受けながら、遊所の女に魂を奪はれた源五兵衛、お國への聞え、暫く御遠慮仰付られずばなりますまい」 萬太郎「如何様さうぢや、ヤイ源五兵衛、大事の用に登つて居ながら、散々の身持、國への遠慮、身が目通りへは暫らく叶はぬ」 菊野「そんなら源五兵衛様は」 三五「暫く御前へは叶はぬワイ」 トきつといふ、菊野心意氣あつて三五兵衛

ト行て三五兵衞を見る、菊野やはり默つてゐる。三五「しぶとい女め」ト矢張萬太郎へして見せる。萬太郎「ほんにねつから物言はぬな、何ぼう物言はずとも、身請して國許へつれ歸り、汝と一緒に御隱居とは何うあらう」三人「どうぢや〳〵」三五「こりや屈強な思召、あなた樣と一緒に押込隱居、それとも忌か、菊野どうぢや」ト此間源五兵衞始終煙草のんでゐて、この時。源五「イヤ憚りながら菊野が儀は、たとへ身請なされてもお心には隨ひませぬ」ト向ふへ出る。左十郎「ムム萬太郎樣が身請なされてもお心に隨はぬとは、源五兵衞殿シテ其樣子は」源五「イヤ外でもない、菊野は拙者が合方」三五、三人「ヤア」源五「それ故身請は御無用とお止め申すのさ」萬太郎「ヤアそんなら菊野は汝が情婦か、我折れ」ト少々氣味惡きこなし、三五兵衞大事ないと押へる心にて。三五「源五兵衞、愚かしうても萬太郎樣は御主人の片破、其御主人の前とも憚らず、菊野はお身が合方といふからは」源五「金輪際いづく迄も」ト菊野が手を持ち引寄せる、三五兵衞きつとなつて氣をかへ。三五「御覽なされましたか、ハテほてくろしい儀ではござりませぬか」萬太郎「ハテほてくろしい儀で御座る」皆々「御主人を踏付けて、餘りと言へば法外千萬」三五「萬太郎樣の惚れてござる菊野を、横取した源五兵衞」ト打擲する事をして見せ。「惡つくい奴ぢやござりませぬか」萬太郎「惡い段か、俺が伽せうといふ菊野を横取した源五兵衞、皆寄つて擲け〳〵」三五「ハ

一向煽動てゝぢや、お徳さん早枝さん、お前も爰へお出んかいなア」お徳「それでも俺等に呼ばしやんせぬに依つて、遠慮して往かぬワイ」早枝「北の首さま程有つて、言うても御繁昌ぢやなア」源五「ハテ扨お身達もその様におだてゝ、悄氣らすないやい」トこなし、こちらの方には。三五「イヤ萬太郎樣、この菊野が儀は、如何取計ひませうな」萬太郎「如何というたら、よい樣に取持て」三五「ハツ然らば其通り申付けます。ナニ菊野、これにお出なさるゝ萬太郎樣、日外より其方を甚だの御執心、御大身に身を任せば、そち達の果報といふもの、有難いと思うてお伽申したがよい、なんとお伽がよう御座りませうが」萬太郎「お伽がよい〳〵、マアちよつと爰でお伽をして見よ」ト菊野に寄添はうとするを。菊野「申し悪戯なさんないなア」ト突きやる。萬太郎「三五兵衛、ねつからお伽さゝぬぞよ」三五「サヽよくござりまする、暫くお控へ下されませう。菊野、イヤサ萬太郎樣がお心おかけなされた其方、なぜお請申せぬぞ」菊野「御大身であらうがお大名で有らうが、人といふものは心意氣ばかり、愚かしい萬太郎樣をたらしこみ、三五兵衛樣、お前マアさもしい」ト源五兵衛煙草のんでゐる、咳拂して紛らす。「イヤさもしい妾等、お大身とは釣合はぬワノなア」三五「スリヤいよ〳〵萬太郎樣のお心に隨はぬか」トおれがいふ通りを言へと萬太郎へ敎へる、萬太郎合點して。萬太郎「スリヤ彌々萬太郎樣のお心に隨はぬか」

殿、お褒のお詞有難う存ずる、拙者先程より餘り盃が廻らぬ故、煙草ばかり喫んで居つた、菊野公のおもひざし、さらば一つたべようか」トいひ〳〵こちらへ出て。千代「ドリヤ私がお酌致しませう」トこちらにて酒盛になる。三五「何と萬太郎様、あれに居ります菊野、あなた様に少し氣の有るやうな體ではござりませぬか、御前には何と思召されまする」萬太郎「何を嘘らしい」ト恥かしき思入。三五「イヤ〳〵眞實でござりまする、何かさしおきこれへ呼びませうか」萬太郎「來るなら呼んで見い」三五「ハッ。菊野、萬太郎様のお召しなさるゝ、是へ參れ」ト菊野聞かぬ顔にて、源五兵衛、早枝、皆々と酒宴の體、これは都て大座敷にて、兩方へ別れて居る座敷の模様なり。左十郎「菊野、最前から萬太郎様のお召、これへ來やれ」伊平太「そちらの座敷ばかりに、へばり附いて居らずと、早く來やれ〳〵」皆々「早く來やれ」トやかましういふ、菊野思入あつて。菊野「オヽやかまし、そちへ來いなら往くけれど、爰にも盃が纏れてある、もちつと待つておくれ」トきつといふを。源五「これはどうしたものぢや、例へ如何様な事が有らうとも、萬太郎様のお召とあれば、早く往て御機嫌に入るやうにしやれ」菊野「そんなら往ても大事ないかえ」源五「大事ない〳〵」菊野「お前の許しならドレ往かうかいなァ」ト立つてこちらへ來る。左十、伴左、伊平「ヨウ〳〵源五兵衛殿のいふ事は聞なり様々」トおだてる。菊野「オヽ可笑し、

言はぬと泡盛で言はすぞよ」 伴左「泡盛とはようござります、サア是で飲め〳〵」 ト大きなこつぷを菊野の前に置く、菊野むつとして洋盃を取上げ。 菊野「おとはどん、一つ注いでおくれい」 トおとは酌する、菊野飲まうとするを源五兵衛とめて。 源五「待て〳〵、モウよい。イヤなに各各、菊野が座敷脱けて居つたは斯うで御座る、拙者暫く酔面の間を介抱頼みました、それ故お座敷の事を缺き、申譯もない時宜、彼奴が不調法は私にめんじられ、何卒御免を」 伴左「ア、すりや菊野が詫言は其許よりさつしやるか、ハテ變つた所から御挨拶でござるな、ハテ御深切な儀でござる」 ト口々やかましういふ。 三五「これは何れも騒がしい、お靜りなされい〳〵、源五兵衛殿ぢやと言つて、藝子の挨拶を致されまいものでもない、ナア菊野」 菊野「左様ぢやさうに御座りまする」 ト素氣なくいふ。 源五「これさ菊野、左様にすげなう言はずと、萬太郎様各々方の御機嫌なほし、わつさりと一つ飲みやれ」 菊野「アイそんなら此盃で、思ひざしにせうかいな」 伴左「思獻とは可からう、一つ注げ〳〵」 トおとは酌する、菊野酒を飲む中に。 三人「おもひざしとは何處へ行かうぞ」 ト口々にいふ、菊野飲み終ひ。 菊野「宅右衛門様、御慮外ながら上げうぞえ」 ト敵役皆々顔見合せ。 伴左「出石宅右衛門殿へ、菊野が思ひざしとは、よう〳〵宅右衛門さま〳〵」 トほめる、宅右衛門最前より片隅へ寄つてゐて、此時。 宅右「これは〳〵伴左衛門

の子達でなければ、何時でも笑はぬ程にの、お千代どんお盃をまはさんかいの」ト酒盛になる。伴左「時に最前から源五兵衛殿が見えぬが、どれへ參られた」三五「誠に源五兵衛殿は何をして御座る。ハツ萬太郎様、源五兵衛が居りませぬが、これへ呼びませうか」萬太郎「ホンニ最前から見えぬ、これへ呼べ〳〵」三五「ハツ〳〵。源五兵衛殿はどれに居やる、萬太郎様のお召、源五兵衛殿〳〵」皆々「源五兵衛殿〳〵」ト呼立てる、橋懸の障子の内より。源五「ハツ〳〵」トいひ〳〵手拭にて手を拭きながら出て來て。伴五「貴殿にはどれへお出なされた、萬太郎様のお待兼で御座る」源五「イヤ失禮ながら暫く醉面、眞平御免下さりませう」トいひ〳〵よき所へ坐る。三五「萬太郎様へ申上げませう、源五兵衛がこれへ參りました、シテ御用はな」萬太郎「其用はおりや知らぬ、汝や覺えぬかい」ト此内後の襖明け菊野出て來て、そこら見まはし早枝お德が傍へちやつと坐る、三五兵衛皆々これを見て。伊平太「見つけたぞ〳〵、菊野、わりやどれへ參つたぞ」菊野「私やどつこへも行きやせぬもの、何いひなさるやら」伴左「何處へも行かぬものが、襖の彼方から何で出て來た」左十郎「源五兵衛殿が出て來ると、其方がこちらから出て來るとは、どうやらをかしい様子だぞよ」三五「菊野、わりや何處へ行て居つた、有様に言へ。ハツ萬太郎様、有様に白させませうな」萬太郎「オヽ白させい、菊野、わりや何處へ入つて居た、有様に

る。伊平太「二人ともに今夜は是非歸るか、然らばこれでぐつと飲め」ト茶碗出す。綾「伊州様、又龍かいな」伊平太「龍であらうと蛇であらうとサア〳〵飲め」ト酒をつぐ、綾飲んで。綾「左十様上げますぞえ」左十郎「イヤ〳〵押へよ〳〵」小傳「そんなら私が間せう、おとは殿注いでおくれ」トおとは酒をつぐ、小傳飲む。綾「お市さん、一寸でも來たからは何卒歸しておくれ」伊左「イヤイヤたつた今來て、去なうとはならぬ〳〵」トお徳向へ出て。お德「申しいなア、今夜ばかりはどうぞ私に預けて、去してやつておくれなされ」小傳「其代りに姫御前の、得舞はぬ舞と踊を二人してお見せるワイなア」早枝「姫御前のよう舞はぬ舞とはこりや珍らしい、早う見たいワイなア」トこの中小傳、綾に囁き、お鹿がしてゐる緋縮緬の抱帯取つて來る、綾は舞子の日傘を取つて來て、右のひしごきを傘のぐるりへ卷き、小傳綾上著を脱ぐ、下の白無垢をくゝりにてぐつと裾をからげ、おとはおかるが前垂を取つてしてゐる、お千代これを見て、舞子の手拭を頭へ卷き、これを見て舞子の扇を持ち、右の日傘を取り双方へ並び。小傳、綾「住吉様の四社のお村で扇を拾うた、ハレヤア」ト住吉踊をいろ〳〵ある、トヾ。綾「これから淡然約束のぬけそ踊が所望ぢやが合點か」小傳「オヽ扨合點ぢや」ト是より雀踊の三味線になり踊り。小傳「綾さん」綾「小傳さん」兩人「サツサ。そつとせい」ト兩人踊りながら橋懸へ入る、皆々笑ふ。おとは「あ

造物平舞臺、一面の筋違ひに赤壁、大床の間掛物あり、奥堺口の方に一間の障子家體、橋懸も一間の障子家體、それより奥の方へ筋違ひに大襖、これに好みあり、右平舞臺上の方に千島萬太郎、笹野三五兵衛、出石宅右衛門、市塚左十郎、仲居おとは、おかる、酒盛の體、下座の方に磯谷伴左衛門、安松伊平太、仲居千代、舞子お鹿酒盛の體、藝子お徳、早枝三味線彈いてゐる、舞子おかのお鹿、派手なる事を舞うてゐる、この見得この唄にて道具とまる、兩人よろしく有つて舞納める。

皆々「よう〳〵、出來ました〳〵」伴左「萬太郎樣、彼等に御褒美のお詞を下しおかれませう」萬太郎「遣はさう〳〵、ヤイ蜆貝、二人ともに爰へ來い、今の褒美は俺が持合せの」ト兩人の手を持ち。「琉球芋を遣らう」ト引寄せうとする、突飛ばし。舞子兩人「こちやそんな事知らぬワイなア」ト ぴんしやんして此方へ來る。萬太郎「この國の名物を知らぬか、エヽ汝等はきつい馬太郎ぢやなア」ト橋懸より富田屋彌吉出て。彌吉「小傳樣も綾樣も、どうやらかうやら一寸伴れて參りました」ト此中橋懸より小傳、綾、藝子の扮裝にて出て來る、皆々見て。千代「これいなアお前方でせうらいになつてゐる、よく來ておくれたなア」小傳「みな堪忍しておくれ、今夜は綾ばうも私も河作の揚ぢやワイなア」綾「來難い所ぢやけれど、おすま樣に呑込ませ、一寸來たといふ樣なものぢや」お徳、早枝「小傳樣、綾樣、爰へお出いなア」ト皆々捨臺詞にて小傳綾よき所へ坐

れたからは、一寸も後へよらぬが、惣體北の廻男の習ひでござります」三五「小氣味よい奴だなア」ト奥にて鳴物入山姥のとまりになりて。奥にて大勢「ヨウ〳〵出來ました〳〵」彌助「奥の舞、山姥の山巡り、我等は又此お金でナ茶屋巡り。三五兵衞樣へ手見せの働きは」ト最前の狀を取り引破り。「これで今夜の工面はがらり」三五「出來した」彌助「是から有る事無い事、見る目かぐ鼻の私」三五「身共は奥へ入り、かの馬鹿人形を遣うて、そろ〳〵娯みませう」左十郎「誠に三五兵衞殿のからくり」三今「水銀のしかけよう」三五「細工はりう〳〵、さらば仕上をお目にかけう」ト唄になり思入有つて皆々入る、跡合方になり、奥塀口より菊野、奥よりお市出て、兩人顏見合せ。お市「菊野さん、最前は具合よういたぢやないかえ」菊野「お市樣、お前迄いろ〳〵の世話、したが源五兵衞樣があの樣に言うて下さんしたので、三五兵衞樣の方は病脫がしたワイなア」お市「さつぱりとした樣なけれど、意地の強いお屋敷樣の御氣質」菊野「ほんにさうぢやワイなア、萬一源五兵衞樣の大事になるまいかなアお市樣」お市「一つ叶へば又二つ、菊野樣」菊野「辛氣な事ぢやなア」トよろしくチヨン〳〵にて。

返し

ト彌助氣味惡ながら眞中へ出て。彌助「譯といひましては御座りませぬ、菊野さんは評判の石部金吉、これ迄方々のお客が、色々と言うてぢやけれど、其方は大嫌でござります、源五兵衞樣は元より、あの子にさういふ事が有つたら、彌助が知らぬといふ事がござりませぬ、どういふ事で源五兵衞樣と、譯のある樣に仰しやりまするぞ」三五「譯のあるといふは、菊野源五兵衞兩人が口から、か樣〳〵でござると只今ほざいたワ」彌助「エヽそんなら菊野樣と源五兵衞樣とが、一向惚れるワイ、今日も明日も明後日も、明後々日も醒め果てた」伴左「然らば其方は實正知らぬか」彌助「藝子樣の色事を、廻男に隱くすとは」ト小判の形をして見せる。「レソを離れまいと思うて、テモ吝嗇い源五兵衞樣、こりや餘程まうけ損うたワイ」ト三五兵衞紙入より小判包を投出し。三五「それ取つておけ」ト彌助右の金を取上げ。彌助「このお金は」三五「菊野を取持つ骨折代」彌助「そんなら貴方も菊野樣に」三五「ぞつこん惚れて惚れぬいてゐるこの三五兵衞、これ迄樣々口說いても取合はぬこそ道理、腐り合うた兩人、どうも身共武士が立たぬ、菊野を身共に取持たば、まだ其上に如何程でも、金子は愚か望み次第」ト彌助思入あつて。彌助「ようござりまする、源五兵衞樣を退して、菊野樣を取持ちませう」三五「われその詞に違ひはないか」彌助「廻男冥利、下駄さげぬ法もあれ」三五「いよ〳〵確と取持つか」彌助「櫻屋の彌助、私が賴ま

親が病氣で有らうが、今夜中は歸さぬ、さう思うて居れ」伴左「今夜中は愚か、今月中も居續だ、歸る事はならぬワイ」彌助「それはお前樣、中々無理でござります、何程お客が大事でも、親の病氣をかまはずと座敷が勤めて居られませうか。その樣に仰しやらずと、どうぞ今夜の所は」三五「ならぬワイ、奴は大方菊野が開きをひろぐな、エヽ聞えた扨は源五兵衛と菊野が中の世話やいてをるか」トきつといふ、彌助ハイ〳〵と身を縮める。伊平太「それ故四の五のと申すので御座らう、寧そぶち殺して」ト刀に手をかける、彌助飛びのき。彌助「エヽ申し〳〵こりやマア何でござりまする、最前聞いて居れば、源五兵衛樣と菊野樣が中を世話やくの何のと、合點が參りませぬ」三五「こいつしら〴〵しい、面に似せぬ太い奴だ、菊野と源五兵衛が中を、奴が知らぬといふ事はない、何時からの事で何處で出會ふ、有樣にぬかしをらう」彌助「ハイ、、、、」左十郞「吐し樣が違ふと、うぬ痛い目をするぞよ」伴左「痛い目が望みなら、如何樣とも療治して吳れう」左十郞「それが忌ならきり〳〵と吐し居らう」ト三人きめる、此間彌助始終びく〳〵としてゐる。彌助「エヽ申し〳〵、とつとモウ其樣に口々に言うて、狼狽へさせて下さりますな、お侍樣にかう取捲かれては、何ぼう肝玉の太い私でも、何やら夢中で御座りまする、其樣に言はずと私がいふ事も聞いておくれなされませ」伴左「吐かす事があるなら是へ來てきり〳〵ぬかせ」

貴殿のお詞次第で如何樣ともなる馬鹿殿の萬太郎樣、玉に使ふは適れの御思案」三五「併しながら一筋ではいかぬ源五兵衛、まさかの時はこれ」ト皆々に囁く。三人「心得ました」ト思入、此時橋懸の門口より彌助狀を持つて戻つて來て。彌助「どうぞ座敷の工面がよければよいが、仲居衆に逢ひたいものぢやが。おとは樣お千代樣」ト奥を見て呼ぶ。伴左「ヤイ〳〵仲居どもを呼ぶは何者ぢや」彌助「私は北の櫻屋の者でござります」伴左「櫻屋といふは菊野が家でないか」彌助「ハイ左樣でござります」左十「是れは狀を持つて居るか、何用あつて參つた」彌助「ハイ此狀菊野樣に急な用が有つて」伴左「何だ菊野に用が有つて、狀を持つて來たとは合點がゆかぬ、其狀これへ持つて來やれ」三五「伴左衛門殿、其狀これへ取つて來やれ」彌助「こりやあなた方の御覽なさる樣な狀ぢやござりませぬ」伴左「ハテ扨こつちへ遣せ」ト狀を引つたくり、彌助を引きのける、彌助氣味惡き思入、伴左衛門狀を渡す、三五兵衛披き見て。三五「急ぎ申入れ候、私事今晩は殊の外氣分あしく候間、お市樣へ斷り申し、座敷の首尾あしからぬ樣にして、此文とゞき次第早々御歸り待入り〳〵かしこ。菊野殿へ、母より。何と何れもお聞きなされたか」三人「怪しい狀にござります」三五「母親の病氣というて、一寸も早う歸らうといふ菊野めがこしらへ事、大概知れた事ぢや、ヤイ此狀は僞りで有らうがな、菊野が揚の客といふは此三五兵衛ぢや、母

障子の中へ入る、跡に三五兵衛奥を見てゐて口惜しき科、お市と顔見合せ、煙草吸付ける、お市思入、ト奥より左十郎、伴左衛門、伊平太つか〳〵出て。三人「三五兵衛殿」三五「いづれも」左十郎「日頃から毛蟲と思うた源五兵衛が唯今のしだら」伴左「我には最前菊野が口から承つたが、よもやと思ひ窺ひし所」伊平太「唯今の仕宜を見て」三人「惘れはてました」トお市最前より氣の毒なこなし。お市「ホヽヽ、何と誰方もお聞きなされましたか、菊野様とした事が、何隠さいでもよい事を、隠して貴方にもお腹を立て、イヤお腹はお立てなさるまいけれど、私迄も大體悪い事ぢやござりませぬ、イヤかうなされんかえ、菊野様への面當に、南地の首さまをお世話申しませう、誰が可からうぞ、京扇屋の宮様か住吉のきとく様か、鹿様にせうか、ほんに藝子様の事はおとはがよう知つてゐる、奥へ行て尋ねて參じませう、誰様がよからう」ト紛らすこなしにて奥へ入る、始終合方、三五兵衛煙草のみ終ひ。三五「各方もお聞の通り、面目次第も御座らぬ」左十郎「三五兵衛殿、こりや御思案なされずばなりますまい」三五「思案というて外にはない、身共を今まで馬鹿にした女め、其上今の如く是見よがし、兩人が今の有様、この返禮は身共が胸に」伴左「シテ其御思案は」三五「生得愚かな萬太郎様、何事も身が言葉次第、あの馬鹿物をたらしこみ、源五兵衛めに恥辱を與へ、菊野めが泣顔をたつた今見せませう」伊平太「なる程、

お前に隱したのは、三五兵衞樣を始めお屋敷は皆內方へお出るによつて、それで隱した程に勘忍しておくれえ、三五兵衞樣も其替りに、お慮外ながら私が急度よいのを世話して進げう程に、今迄の事はとんと川へ流しておくれえ」源五「それいふに及ばぬ事、左樣な事根葉に持つ三五兵衞殿ではない。イヤ何こゝな粹め、唯今菊野が申す通り、何れなりとも餘の藝子をとり〴〵お世話申さうから、菊野の事はさつぱりと思ひきつて遣はされたが、可ささうなものゝ樣に」トこの樣な事いふ中より。三五「默らつしやれ〳〵、エヽ喧ましいワイ、最前からほひ〳〵と、住吉街道の物貰見るやうに喧しい和郞だ、身不肖ながら國許よりお指圖を請け、大切な詮議に參つた身共、其許の樣な賣女藝子に魂を奪はれるやうな侍ぢやないぞ、餘り身共を馬鹿にさつしやるな」ト不興なる體、三人顏見合はせ思入、源五兵衞氣をかへ科あつて。源五「三五兵衞殿御免なされい、拙者餘程喰醉ひまして何を申したやら、とんと存ぜぬ、暫く御免の蒙つて醉ざましと致したい、サア菊野、いつもの樣に介抱賴む」トいひ〳〵菊野が手を執り奧塀口の方へ行かうとする、この前よき所より奧にてきどすを謳うてゐる。三五「源五兵衞菊野、スリヤいよいよ兩人は」ト此時奧にて唄『あれ蟲さへも番ひはなれぬ揚羽の蝶。と唄ふ、源五兵衞思入ありて。源五「つがひ離れぬ我々二人。三五兵衞殿後刻」ト唄になり菊野が手を引き、奧塀口

ト菊野こなし、三五兵衛少々急いたる心意氣にて。三五「そりや聞き事でござる、シテ深間といふは何奴で御座る、御存じならばお聞かせなされ」源五「なる程、左樣御意あればお咄申さう、菊野が深間といふは」三五「深間といふは」源五「面目ないが身共ぢやて ハ、、、、」ト扇にて顔かくす、菊野嬉しさうに此方向く、三五兵衛惘れたる體にて。三五「何と言はつしやる、菊野が深間といふは、源五兵衛殿その許か」源五「餘人へ必ず御沙汰御無用に存じまする」ト三五兵衛思入。三五「イヤ／＼そりや嘘だ／＼、手前菊野に執心だと聞いて、忌がらさうと思うて、愚弄らうとしやるのか、嘘だ／＼」菊野「イヽエ嘘ぢやござんせぬ、源五兵衛樣とは疾から譯があるけれど、誰にも知らさぬおもひ合ひ、お前が種々というてお吳れるを、すげなう返事したは、かういふ譯がある故で御座んす、三五兵衛樣、必ず腹立てゝ下さんすなえ」三五「ムヽ然らばいよ／＼菊野が」源五「疑はしくば證據をお目にかけう、サア菊野、かうばれるからは苦しうない、爰へ來い／＼」菊野「そんなら行ても大事ないかえ」源五「三五兵衛殿は粹ぢや、大事ない大事ない」ト靠れかゝつてゐる、三五兵衛これを見て憤とする科。お市「ほんに是はマア、思ひがけないに依つて、最前から挨拶にも出ませなんだ、何時の間に何處で出來たぞいなア」源五「何處であらうと彼處であらうと、言はぬが祕密、何とけうとい物か／＼」菊野「お市さん、これ迄

ハヽヽヽ」源五「さう見える〳〵、時に其大好物のお馴染が有らうが、拙者には何故お隠しなさるゝな」三五「アイ隠すではないが斯うでござる、舊冬迄は馴染の女郎もござつたれども、唯今ではチト外に」ト菊野を見て思入。「イヤサ外に存寄の女が有つて、彼の馴染の女郎も、何時しか遠ざかりました」源五「ハテそれは御執心な儀でござるな」三五「時に其執心の女めに、手を入れ足を入れ段々と口説きますれど、今に於いて得心致さぬ根強い女め、拙者も殆ど困入つて居るて」源五「シテ其女めは、やはり侍女の類でござるかな、いはつしやれ〳〵」三五「さう問はれてはどうか言ひ難いやうなれど、てんぼの皮言うて退けう、必ず笑はつしやるな、身共が執心の女といふは」源五「女といふは」三五「こゝに居る」源五「こゝに居る」三五「菊野めで御座る、ハハヽヽヽ」ト扇にて顔かくす、菊野ぴんとしてあちら向く、お市源五兵衛思入。源五「ハア扨は貴殿の御執心といふは菊野でござるか、よう〳〵菊野様、惚られさま〳〵」三五「おだてさつしやるな〳〵。所に彼め、ハテ意地強いやつ、様々に口説いても、今に於て其返事致さぬ」源五「イヤそりや其筈の事、かれには急度した深間が御座る、貴殿には御存知ないか」三五「イヤ〳〵彼女事は、北の新地は勿論、當所新町まで篤と聞合した所が、色がましい者はないと承つて居る」源五「サヽそりや大きな御了簡違ひ、確とした深間があれば、所詮貴公のお心には、ナア菊野」

「申し三五兵衛様、私をお尋ねなされたは、急な御用でござりますかえ」三五「なる程汝を尋ねたは」ト菊野を見、又源五兵衛を見て。「イヤさして急な用でもない」トこなしある。源五「お市を尋ねなされたは、扨はお馴染とやらの御用向かな」三五「これは源五兵衛殿は酒機嫌のしるし、つひにない洒落詞をやらしやる、ハヽヽヽ、時に源五兵衛殿、手前其許大切なる御用につき、當所の屋敷へ參り、方々の遊所へ立寄りまするも、彼の大切なる一品を」トいはうとする、源五兵衛邊を紛らすこなし、三五兵衛も思入あつて。「サア彼の大切に致す萬太郎様が、奥方住の江御前の御舍弟なれば吾々が守護致し、當所に御逗留なさるゝも、下世話でいふ智慧付のため、拙者を乳母の樣に思召して御座るゝは、氣の毒なもので御座る」源五「生得愚かしいお產れ、不斷お傍に御座る貴殿、御心配の段推察仕つてをります」三五「これは〳〵御挨拶、それに就きましても遊所へ御出の砌は、みめよき女を御覽なさると困つたものでござる」源五「イヤ〳〵これは三五兵衛殿のお詞とも覺えぬ、賢愚ともに色情は計られぬものと承る」三五「ハア然らば其元の樣な、四角四面な偏屈な仁でも、色は棄てられぬものでござるかな」源五「捨てられてよいものか、堅いといふは」ト刀を見せて。「この手前、拙者とても同じ人間、貴殿ぢやと申して萬更お嫌ひではあるまいと存ずる」三五「イヤモウさう言はれては一言もない、大好物でござる、ハ

る、ハヽヽヽイヤ菊野、汝が頼事諾いて遣はしたから、又身共が頼事も聞いて貰はねばならぬが合點か」菊野「そりやモウ何でも聞くに依つて必ず今の事を頼むぞえ」源五「サヽよいてやよいてや」ト此内奥にて。三五兵衛「お市〳〵、お市はどれに居る」トいひ〳〵出て來る、三人思入あり、よろしく座を改め、この中笹野三五兵衛奥より出で、お市を見て。三五「お市これに居るか、最前から尋ねをつた、源五兵衛殿もこれに御座るか、菊野もこれに居つたか」菊野「アイ」源五「イヤ三五兵衛殿、御存じの通り拙者一醉もたべませぬ故、萬太郎樣がお好の泡盛、こみ付けられて甚だ酩酊、やう〳〵醉を醒さうと思うて、失禮の段御免下されい」三五「なる程、酒參らぬ其元、泡盛は切なう御座らう、然らばこれにて御休息なされ、萬太郎樣の御前は、身共よろしく取計ひませう」源五「それは忝なう存じます」トこなし、菊野立つて奥へ行かうとする。三五「菊野待て、そちやどれへ行く」菊野「アイ御座敷が淋しからうに依つて」トまた行かうとするを。三五「ハテ扨座敷には藝子ども、仲居も居れば可いワサ、お身はこれに話しやれ、ハテマア下に居やれ」菊野「源五兵衛樣、こゝに居ても大事ないかえ」三五「ハテ源五兵衛殿が、お身がこれに居つたというて、何の大事があらう、マア下にゐやれさ」ト手を持つ、お市中へ入る。お市「これ菊野樣、あの樣に仰しやる程に、マア下に居いなアート菊野を無理に下におき。

は御座りませうけれど、頼れてお呉なさらぬと、どうも今夜は座敷に居られませぬワイなア」お市「如何さま、最前の樣に皆樣へ言はしやんした事が、嘘ぢやと知れたら、三五兵衞樣が猶聞いてゞはあるまいし」菊野「それぢやに依つてこの樣におしつけて頼むのぢやワイなア」お市「申し物いはぬあの子が、これ程に頼んでぢやこと」菊野「どうぞ聞入れて」兩人「おくれなされませいなア」ト源五兵衞思入あつて。源五「ム、すりや今夜の所が拔けられぬから、どう有つても押付けての頼みか」菊野「アイ貴方樣より外に」お市「この棒はきゝませぬワイなア」源五「これは又迷惑千萬、よいは兩人が頼み、どうなりと致してくれう」菊野「エヽそんなら頼まれておくれなさるかえ」お市「得心してあげなさるかえ」源五「サア頼まれてやるが、表向ばかりぢやぞ」菊野「アイ、三五兵衞樣の手前を、譯のある分にさへ言うておくれると可いワイなア」源五「サアそれで可い事なら、どうなりとも言うて遣はす」菊野「そんなら彌々さうぢやぞえ、エヽ嬉しいお市さん、とんと痞がおりたワイなア」お市「俺まで氣がさつぱりした、最前源五兵衞樣が否と仰つた時は、こりやマアどうならうと大抵案じた事ぢやないワイなア」菊野「さいなア、私もひよんな事言ひ出し、後へも先へも行かなんだに依つて、寧そ驅落せうかと思うたワイなア」源五「ハヽヽヽ、客にくどかれ返事に困り、驅落せうとは。じとのない所か、流石賣女の派手と思はれ

いふ、源五兵衛思入有つて。源五「辰巳屋の口上はハテ變つた口上な。菊野は未だ若輩な事なれば、前後の辨へなく、唯今の樣な儀言ひ出さうとも、お市迄が同じ樣に藥袋もない事をいひ出す、何ぼう表向でも內向でも、身共は大切な御用を蒙り、大阪へ罷越して居る身分、殊にか樣なむくつけな侍が、若輩な女を捉へて抱いて寐たの、イヤ色ぢやのと。エヽ馬鹿な事いふワイ」トお市思入有つて。お市「それ見やしやんせい、大方かうで有らうと思うた、菊野樣、お前どうせうと思うてぢやえ」菊野「どうと言うて賴みに思ふ源五兵衛樣は、お忌ぢやと仰しやる、詰らぬものになつたワイなア」お市「詰つても詰らいでも」ト源五兵衛を見る、源五兵衛向ふ見てゐる。「どうも仕樣がないもせぬもの」菊野「無いではすまぬ」ト源五兵衛を敎へる、お市も源五兵衛を敎へ、賴めといふ科見せ。「濟まぬワイなア」トいろ／＼氣を揉む、菊野思入あつて。菊野「私が身の切なさに、源五兵衛樣のお身に心もつかず、ひよんな事いひ出して、嘸お腹が立ちませうが、そこを何卒堪忍して、今言うた樣に表向の所はマア色ぢやというてさへお呉れなさるとよい事ぢや程に、藝子一人助けると思うて、申しこれぢやワイなア」ト拜む。源五「これは又迷惑千萬な、藝子といふは僞り、誠は敵討の助太刀してくれいといへば、二言とはなけれど、どうもはや今の樣なこつ恥かしい事は」ト菊野が形を見て。「餘り馬鹿らしい」菊野「サアさうで

く言やれ」菊野「サア其口上は、アノ。頼まれておくれなされませ」源五「何をいふ、辰巳屋からの口上が、頼まれて呉いとは何事ぢや」菊野「サア其譯は。マア下に居て聞いておくれなされませいなア」ト合方になり、宜しくありて。「奥へ來て居やしやんす三五兵衛様が、疾から私に惚れたの何のと言うて下さんすけれど、どういふ事やら私や三五兵衛様が嫌ひで〳〵ならぬワイなア、それで今迄斷りいうても、爰に居やしやんすお市様や、奥にござんす伴さんや、左十様までを頼んで、退引ならぬ今夜の切端、得心せぬは外に情夫でもある様に、問ひつめられて詮方なさ、如何にも深う譯のあるお方といふはナ、源五兵衛様で御座んすと言ひましたワイなア」トこなし。お市「わたしも爰にゐる所で、左十様や伴様へ、貴方と譯のあるといふ返事は、ハッと思うて後で聞けば、三五兵衛様をはじめ皆様も、常から貴方を怖がつてござるに依つて、源五兵衛様と譯があるというたら、此後三五兵衛様も言出す事はあるまいと、思うて言うた彼の子の頓智、御迷惑はあなたお一人」菊野「常から物堅い貴方、この様な自堕落な事、お忌で有らうが、三五兵衛様がお國へお歸りなさるゝ迄、表向の色になつて、わたしが難儀を救うておくれなされませ、其代りにいやらしい事は爲や致しませぬ、申し源五兵衛様、一生御恩に被る程に、皆様の手前は今頼んだやうに、譯のあるやうにして見せてお呉れなされませ」トぐづ〳〵

思入あつて。お市「ハイ辰巳屋のお使はお使でござりまする」源五「何をいふぞい、是は菊野、最前から座敷に居らぬと思うたが、何事であるぞ、萬太郎様を始め三五兵衞殿もお尋ねなされた、早く奥へ行きやれ」菊野「ハイ參じますは參じますけれど、お市様、今のをなア」トこなしある。お市「サア今のをなア」ト思入。源五「ハ、、、何ぢややら、兩方から今のをなアとは何の事ぢや」お市「サア今のをなアと申しましたは、オ、それ、辰巳屋からのお使の事でござりまする」源五「サア其使に早く逢ひたい、どれに居る」お市「サア其使は」源五「其使は」お市「サア其お使様は爰にでござりまする」ト菊野を敎へる。菊野「お市様、つゝとマア何云ふぢやいなア」ト思入。源五「何ぢややらとき〳〵と、エ、こりや身共を嘲弄るな、よい機嫌な者共ではある」ト苦笑ひする、兩人氣の毒なこなし、お市、菊野に今の事を言へといふ仕方する、菊野いや〳〵お前言うてくれいといふ仕方、兩人よろしく有つて、思はず源五兵衞と顏見合はせ。お市「ホ、、ホ、」菊野「ホ、、、」兩人「ホ、、、」ト氣の毒さうに笑ふ。源五「何の事だ、さしてをかしくもない事を。エ、辰巳屋の使は玄關へ廻つたか、ドレ」ト奥へ行かうとする、お市、源五兵衞が袖を控へ。お市「イヤ其お使の口上は、菊野様が聞いてござりまする、これ爰へ來て今の口上をとつくりと言はしやんせいなア」源五「ム、菊野が其口上を請取つてをるか、何の事ぢや早

菊野「お市様、北と南は隔てもあれ、聞及んだお前の深切、日外からお屋敷様で内方へ來る私、馴染もないものを可愛がつて下さんすお前、何の隱しませうぞいなア、御推量の通り三五兵衛様が執かう口説かしやんすのが忌さに、返事に困つて源五兵衛様に譯あると言うたのぢやワイなア」お市「大方さうぢや有らうと思うた、さうして其様子は源五兵衛さまに咄してあるかえ」菊野「何のいなア、今の様に言はれたに依つて、日外から三五兵衛様も氣味わるがつてぢや源五兵衛様、それでツイ言うたのぢやワイなア」お市「滅相なお方ではあるぞ、さういふ事を源五兵衛様に言はずに措いて、若し三五兵衛様が直にお尋ねなされた時には、變なものにならう程に、今の様子を源五兵衛様に咄しておいたが可からうぞえ」菊野「ほんに然うぢやなア、そんなら源五兵衛様に咄して來うワイなア」お市「アヽこれいなア、立ちながら咄もなるまい、殊に座敷に御座る所を、お前が呼んでは目に立つ。お千代、吾身ちよつと源五兵衛様を呼びましておぢやいなう」お千代「アイ〳〵」菊野「これお千代殿、マア今の事は何にも言はずに措いて下さんせえ」お千代「菊野様、富市のお千代、そんな事知つてるワイなア」ト奥にて潮來節を謳ふ、お千代奥へ入る、お市菊野しか〴〵あるべし、ト奥にて。源五兵衛「辰巳屋からの使とは、何用ぢや知らぬ」トこの様な事いひて出て來る。「お市、辰巳屋から身に逢ひたいとは何者が來てをる」トお市

る事ぢやないワイなア」左十郎「何れもお聞なされ、千島家の御家來勝間源次兵衛殿の御子息、我我が毛蟲どの」伴左「日頃から四角四面な源五兵衛殿、かやうな遊所などへ參る様な仁ではないが、愚かしい萬太郎様に、世俗の儀を御覽に入れん爲、かやうな所へも折々の鬱散」伊平太「左様で御座る、チンプンカンで我々へも意見なさるゝ源五兵衛殿が」菊野「其偏屈な堅くろしい、氣帳面なお方が、一向可笑しいものぢやワイな」左十郎「スリヤ源五兵衛殿がお身の情夫か」三人「興がさめる」ト奥より仲居お千代出て。お千代「申し〳〵貴方がたは見えぬと言うて、萬太郎様がお尋ね、ちやつとお出なされませいなア」左十郎「萬太郎様のお召ならば、參らずばなるまい、又この様子三五兵衛様に」伊平太「そりや間を見合せての事に致しませう、サア〳〵お出なされませ」ト合方になり、三人奥へ入る、お市菊野を向へつれ出で。お市「菊野様、何程お前が誠らしう言はしやんしても、どうも私や合點がゆかぬ、源五兵衛様はお屋敷中でも物堅い噂、こつちへお出なされても、遂ぞ新造様ひとりお呼なされた事も、其上彼方の奥様といふはお國のお血筋、急度したお家柄、御祝言はなけれど、それさへお嫌ひなさるゝ彼方、又何ぼうお前が隱しても、源五兵衛様と譯のある事なら、素振目遣ひ、萬更私ぢやというて知らぬ事はない、三五兵衛様への返事がなさに、ツイ言はしやんしたので有らうがな、私に何のかくす事はないワイなア」

伴左「イヤ座敷は抜けぬ、菊野、お身に用が有つて」三人「これへ呼出したのさ」菊野「ム、お前方は俺への用と仰しやるは、先日からお市様に聞いた三五兵衞樣の事かえ」お市「菊野樣、彼方がたも色々と仰しやる事ぢや程に、何卒よい樣に返事しておくれいなア」菊野「サアお前が段々言うてぢや事なれば、唯といひたいけれど、どうもならぬ譯があるワイなア」亭主「どうもならぬ譯といふは、外に色があるといふのか」左十郎「北の新地でとつくり聞合せた所に、汝に深間はない、今時の藝子に似合はぬ甚だ堅いものぢやと聞及んで居るさ」お市「菊野さん、あの通りぢやワイな、河治や三丸屋でとつくりと聞いて御座るさかい、嘘は吐かれぬ、お前の返事は無いに依つて、どうやら私がすてゝ措くやうで濟まぬワイなア、外にどうかゝう譯があるか知らぬけれど、それはそれ、これはこれとなりさうな事ぢやぞえ」トこの間菊野思入ありて。菊野「サア其事は、どんな事が有つても言ふまいとは思うてゐるけれど、言はねば三五兵衞樣、お前方やお市樣が濟まぬ樣な口振さうぢやに依つて、言ひます程に、必ずぱつとならぬ樣にしておくれや」お市「そりや私が呑込んで居る、さうしてお前のきつしり樣の名は何といふぞえ」三人「早う聞して呉いノウ」菊野「サア其方は千島のお屋敷、源五兵衞樣でござんすワイなア」皆々「ヤアヤア」ト思入。菊野「常住お前方と一座しても、一寸見つけられぬ樣にするのは、大抵氣の揉め

芋鮹汁ぢや、早うこしらへて給も」喜兵衛「南無三、吸物の工面が違うた、可いワ、仕かけておいたのは後へ廻せ」ト庭の方を見て。「龍助、急に鮹洗うてたも、ドレ拵へうか」トいひいひ料理場の方へ入る、彌吉、武助もついて入る、ト奥より市塚左十郎、磯谷伴左衛門、安松伊平太、三人して市左衛門お市をつれて出る。三人「兩人とも一寸來やれ〳〵」ト向へ出る。お市「申し何で御座りまするぞいなァ」伴左「何とは知れたこと、三五兵衛殿がよく〳〵に思はつしやればこそ我我への頼み、菊野が返事はどうぢや」伊平太「三五兵衛殿は御年輩といふでもなけれど、御大身の御身分なり」左十郎「菊野が應といへば幸福といふものぢや」お市「サアそれは私も色々といふて見ますけれど」トぐづ〳〵いふ。左十郎「市左衛門、お市ばかりに言はずと、其方がなぜ媒介たぬぞ」亭主「イヤモウ私は色事の方は、人に勸める事も大不調法にござりまする、いや申し彼是いはうより、寧そ菊野樣を呼んで、直に仰つて御覽じませぬか」左十郎「いか樣それがよい、市左衛門、座敷の間を見合せ、呼んでこい〳〵」亭主「ハイ〳〵左樣致しませう」お市「イヤモ今時はお客樣方が、惡洒落なによつて、私等よりしつかり言うても、賢いお子達で御座りまする」伴左「然らば我々が菊野へ直に申した上で、お市呑込んでをるか」ト此内菊野奥より出て。菊野「お市樣、わたしをお呼びなされたはお前かえ。伴樣、伊州樣、左十樣にかう座敷をぬけなさつたなァ」

廻し男彌助、木綿やつし半合羽廻しの他行の拵へ、捨白にて橋懸の入口より入つて來る。武助「彌助殿戻らんしたか」彌助「ハイ芝居は先刻に果てたけれど、太左衛門橋の彌吉に逢うて、それで隙が要りました」武助「菊野樣が用があると言うてぢや有つた、おとは殿に聞いて上ぎよ。おとは殿〳〵」ト呼ぶ、奥よりおとは狀を持つて出て。おとは「アイ〳〵。オヽ彌助殿、最前から待つてゐた、菊野樣がいうてぢや事には、此狀を見て大儀ながら北へ去んで來てほしいと言うてぢやあつたぞえ」彌助「そりやお世話でござりました。此狀を見て北へ去んで來てくれいとは、アノ子にくさじの曰はなし、何ぢや知らぬ」ト合點行かぬながら、狀を披き向へ持つて出て。彌助「今夜は去ぬる程に、何となりとも場合をして貰うて下さんせや、きつと〳〵頼むぞえ、彌助殿、菊野。又なんぞ癇癖に觸つたか知らぬ」ト狀を懐へ入れて。「おとは樣、私は北へ去んで參じますさかい、菊野樣に此通りを言うておくれなされませ」おとは「そりやお前御苦勞ぢやな、そんなら去んで上げておくれえ」トいひ〳〵入る。武助「彌助殿、アヽ今から北へは大儀なものぢやノウ」彌助「イエさうもござりませぬ、したが更けぬ中ドレ〳〵往てかう」ト橋懸の方へ行きかけ。「北へ往て來る程の間に、難地へ往てこまさう」トこの樣な事いひながら門口へ出て行く、始終踊三味線、奥は方々にて手をたゝく。彌吉「これ〳〵喜兵衛、左十樣のお好みで、例の

お前に頼んでおく程に、戻らんしたら此狀渡しておくれえ」とは「アイ〳〵、わたしが必然渡すワイな」ト狀を受取る。菊野「急用ぢや程に、間違はぬ樣に早うしやと言うておくれ、頼んだぞえ」千代「サア皆早う座敷へ來ておくれいな」菊野「アイ〳〵、サア皆お出んか」お德「菊野樣、お前顏拭きんかえ」菊野「わしやこの形でよいはえ」早枝「どうでも北の首さんぢや、生地でも目立つワイな」菊野「こちやいや、おだてゝぢや」仲居「サア〳〵行ておくれ」トこんな事いひ〳〵菊野、お德、早枝、お鹿、おかの、お駒、皆々奥へ行く、仲居お千代おとは三味線箱持つて跟いて入る、お市しか〴〵ありて臺所へ來て。お市「喜兵衞、お吸物の引かへはよいかえ」喜兵「ハイ可うござりまする」トいふ中獻立の貼紙を見て。お市「御膳迄の間に、お屋敷から來た泡盛を出せとおつしやつたぞえ」武助「ハイそりや燗場へ吩咐ておきました、時にお供の方は理窟にしてくれいと仰つてござりまする」お市「そりや毎時の樣にしておきやいなう」武助「今夜のはお振舞並ぢやに依つて、ちつと氣をしてくれいと仰つてござりまする」喜兵衞「とつとモウ今は理窟でよい樣な事もあり、又惡い事もあるぢや」ト天窓をかく。お市「それぢやと言うて、又喧しいとわるい、武助よい樣にしておきや」トこの中奥にて手を叩く。「それお手が鳴る、子供は居やらぬかいなう。ハイ〳〵〳〵」ト返事しながら入る、彌吉も返事して入る、踊三味線にて、

つて來いというて下さんせ」男「合點ぢや〳〵」ト橋懸の方より門口へ出て行く、これは臺所の模樣、立かゝつてのいひ合せにあるべし、ト奥よりお千代、おとは、仲居にて出て來る。とは「サアサアお德樣、早枝樣、どなたもお出なされたぞえ」千代「おかの樣もお鹿樣も一緒に臺所へお出」早枝、お德「モウ皆樣お揃なされたかえ」千代「こちの旦洲は短氣ぢや程に、早う拵へて居いえ」とは「さうして菊野樣は何處へ行てぢやえ」お德「菊野さんは何やら用があるというて、小座敷の方へ往てぢやあつたワイなう」お鹿「何ぞ用なら呼んで來うかえ」とは「イエ〳〵大事ない、お前方は座敷へ行く拵へしなえ」お駒「座敷へ行くは面白けれど、左十郎樣の髭で摺附けられるのが嫌ぢやワイなア」トこの中奥よりお市、花車の扮裝にて中の間へ出て來る。お市「おとは、お千代、何處に居やるぞいなう」ト皆々を見て。「二人ながら此に居るかいなう。早枝樣、お德樣、ちやつと拵へて行ておくれいなア」早枝「サアさう思うて私もお德樣も、顏出してゐるワイなア」お德「菊野樣も一緒に座敷へ行くかいなア」菊野「アイそりや今行くけれど、わしや此狀が北まで持つて行て貰ひたい、彌助殿呼んでお呉んか」ト武助臺所にてこれを聞いてゐて、仕切の唐紙をあけて。武助「彌助殿は芝居を見てくると言うて出てござりました」彌吉「戻られたらお前へ知らせうかえ」菊野「エヽつゝとモウ、急な用があるのに、爰に居てくれたがよい。おとはどん、

いひ〳〵門口へ入る、ト路次より奴提灯を持ち、殘らず出て來て。奴〇「先づ旦那は片附いた」奴△「これから寛りと寐てくれうぞ」奴皆々「それが可い〳〵」トこんな事言ひながら、奴皆々入口へ入る、路次は内よりしめる。

返し

右の道具門口より西へ引いてとる、東は觀音開にて、西手の門口を橋懸の切幕の所へ行くやうにして、門口の出入になる。

造物二重舞臺、三間の間より上手は見附障子、この三間の間の所に見切の唐紙、これは綟子張、下手の方は臺所の見得、膳組土竈、欄間の所に獻立の書附貼つてあり、よき所に大きなる八方、すべて臺所中の間の見得、方々に丸提灯、右中の間にお德、早枝藝子の扮裝、お鹿、おかの舞子の形、お駒振袖娘、この五人指角力がき引のやうな事して遊んでゐる、臺所には喜兵衛料理人にて、金杓子を持ち立つてゐる、武助木綿やつし、彌吉息子の形にて、そこらを手傳うてゐる、この見得騷ぎ唄にて道具納まる。

喜兵衛「お吸物の下をもつと焚いて貰はう」肴屋「オツトせう」喜兵衛「鳥治へ往て最前の鶴を早う持

一市塚左十郎　宗三郎　一喜集院喜平太　宗三郎
一女房おさき　柏崎

造物平舞臺一面に格子、眞中に大きなる入口、內に富田屋といふ暖簾かけあり、西の方客路次、右路次口に富田屋亭主市左衞門、著附袴にて手燭を持ち辭儀してゐる、千島萬太郎、著附羽織おろかしき若殿の扮裝、笹野三五兵衞、勝間源五兵衞、藝妓小傳、出石宅右衞門、市塚左十郎、磯谷伴左衞門、安松伊平太、皆々著附袴羽織、藏屋敷侍の扮裝にて立つてゐる、これ等一人づつ、奴紋附の箱提灯を持ち隨いてゐる、これは富田屋の路次へ入りかけてゐる見得、幕の中にて芝居矢倉太鼓しころの鳴物にて幕開く。

亭主「每度ながらお越下されまする段、有難う存じまする、これよりお通り遊ばされ下されませう」三五兵衞「市左衞門御案內申すか」亭主「へイ〳〵」三五「萬太郞樣まづ〳〵」若殿「皆來い〳〵、案內せい」ト亭主市左御門先へ案內して入る、若殿萬太郎ツイと入る、笹野三五兵衞皆々へ一寸目禮して。三五「源五兵衞殿、いづれも」皆々「まづ〳〵」ト同じく目禮する、三五兵衞先へ段段に思入あつて路次へ入る、やはり家來つれて入る、ト橋懸より肴屋、肴籠抱へ忙がしさうに出る。肴屋「えらいもの忘れておいて、すつての事に料理人に眼玉もらはうとした」トこんな事

五大力戀緘

役人替名

一千島萬太郎	坂東重太郎
一廻し男彌助	中山文五郎
一笹野三五兵衛	片岡仁左衛門
一若黨與五平	嵐三五郎
一藝子菊野	芳澤いろは
一仲居おかる	吉藏
一安松伊平太	眼兵衛
一磯谷件左衛門	駒藏
一舞子お鹿	菊三郎
一舞子おかの	槌松
一娘渚	永藏
一藝子ふさの	駒太郎
一藝子小絲	芳澤國松
一同小春	山下國松
一仲居とは	五郎市
一富田屋喜兵衛	源藏
一富田屋武助	長六
一出石宅右衛門	中山榮藏
一藝子綾	中山文五郎
一富田屋お市	三桝德次郎
一勝間源五兵衛	尾上新七
一富田屋彌吉	大治郎
一仲居お吉	吉藏
一出來島や十兵衛	眼兵衛
一丸屋仁兵衛	三保吉
一藝子萬世	菊三郎
一藝子早枝	永藏
一藝子小傳	三八
一娘おこま	駒太郎
一藝子お德	芳澤國松
一仲居千代	源之助
一富田屋市左衛門	新藏
一代官半十郎	源藏
一幇間作治	長六

權八「ア、小紫が」長兵、八内「この體は」重三「敵同然の本莊が、其落胤の八重梅殿」小紫「とても此世で添はれぬ惡緣」權八「すりや小紫は本莊が落胤にて、我とは添はれず二つには、おちゑ殿への言譯に、迚も死ぬ氣で有つたかえ」八内「親と夫へ義理を立て、遖れ貞女」小紫「閑心様に貰うた一卷、これを手柄に未來は永う」ト重三一卷を權八にやる、權八見て。權八「こりやこれ神妙劍、これも偏に汝が働き」長兵衛「氣遣しやるな、未來の夫婦請合うて」八内「比翼の契り、必ず見すてゝやつて下さるな」小紫「嬉しうござんす」トこの中に橋懸より土手助先に黑羽織の捕手六人、密々出て來り窺ひ居て此時。土手助「それ」ト門口明ける、皆々ばら〳〵と入る。大勢「人殺しの權八、動くな」ト取卷く、皆々よろしくきつとなる。「先づ今日はこれ限り」ト打出し。幕

俠詞花川戸　終

名にて、助太夫樣橫死の場所に落散りありしこの長光」 權八「その一腰を尋ね出す迄と、未練に命存らへしが、今有所知れる上は、此世に思ひおく事なし、其一腰を差上げて、未來の父の御勘氣の、お詫を頼むは長兵衞殿、サア八内には立寄つて、主の敵と身共を討て」 八内「いふにや及ぶ」長兵衞「イヽヤ此場で敵討はなるまい」 八内「そりや又何故」長兵衞「こなた一人は敵を討ち、助市樣は養父を討たれ、誰を敵と討ちまする」 八内「ヤ」長兵衞「一緒に討たずばなるまいがな」八内「イヤモ助市樣は下郎がお供してござる」 長、權「すりや又何處に」 八内「オヽこれに」 ト片肌脱ぐ、八内戒名を書きたる襦袢片袖を見せる。 權八「ナニ。異當觀喜信士」 長兵衞「俗名 本莊 助市とは」 權八「すりや兄者人は」 八内「あなたの實心察しあり、委細を書遺くこの御狀」 ト前幕の書置を出す、權八開き讀む事有つて。 權八「スリヤ討つに討たれぬ義理故に、兼て覺悟で有つたよな、とは知らずして兄者人、御宥されて下されい」 八内「御主人方の仇敵、權八覺悟」 權八「いざ立寄つて」 トぢつとなる。長兵衞「これ」 ト支へる、權八合掌する、八内懷中の袈裟を權八に著せる。長、權「これは」 八内「これで下郎が敵討、貴方は致し助太夫、また爰には助市樣の菩提を弔はん、御本家の跡ねんごろに」（編者云、この臺詞誤あるべし、本のまゝ）長兵衞「適れ忠義な」 ト感心のこなし、二階ばた〳〵。小紫「南無阿彌陀佛」 ト障子引拔く、内に小紫自害してゐる、重三一卷を持ち介抱してゐる。

たのか」權兵衛「オヽそれで先刻の」長兵衛「惡持づくりも」權兵衛「離縁の僞」ト ちゑ「モシあの子の事を頼むぞえ」長兵衛「何にもいはぬ」ト手を合はす。權兵衛「駕籠を遣つて下され」ト三重になり、權兵衛跟いて駕籠向ふへ入る。八内「サ此上は長兵衛殿、妹を恩には著せねども、白井權八お渡し下され」ト長兵衛思入有つて。長兵衛「なる程、權八渡しませう」ト手早く一腰を取つて腹切らうとする、八内止める、此時權八二階より降立ち。權八「ヤレ長兵衛殿犬死あるな」ト出る、八内見て。八内「ヤア珍らしや權八殿、日外や遠州濱名家にて、御主人本莊助太夫樣を討つて立退く主人の敵、イザ立寄つて勝負〳〵」權八「名乘るまじとは思へども、大恩請けし長兵衛殿、自殺とあるに力なく、名乘つて聞かす承はれ、仔細有つて過ぎつる夜、如何にも本莊助太夫を討つて立退きしは、斯くいふ白井權八」八内「さてこそな」權八「下郎に似合はぬ健氣な働き、敵と討たれ遣りたいものなれど、望み達するそれ迄は大切な命、不憫ながらも返討だぞ」八内「お主筋とて用捨は致さぬ」權八「何を小癪な」八内「覺悟さつしやれ」ト八内斬つてかゝる、權八同じくあしらひ、三味線入の紙調にて兩人立廻り、長兵衛思入ありて。長兵衛「ヤレ二人とも早まるまいぞ」權八「イヽヤ放した」八内「そこ退いた」ト兩人立廻りよろしく、權八、八内が持ちし刀に目をつけ屹と見て。權八「ヤこれぞ尋ぬる備前長光、どうして汝が」八内「この一腰こそ日外や濱

兩を出す、長兵衞手を取つて。長兵衞「アイヤ〳〵お志は忝ないが、其許樣から其金子借受けましては、長兵衞が」八内「ハテ立つも立たぬも跡での事、差當つたる貴殿の難儀、此場を濟して」長兵衞「イヤサそれでは」勘八「これ〳〵そんなら外に」喜助「金があるかえ」長兵衞「サア」八内「マア何にせい此金を」長兵衞「サどうもそれでは」八内「ハテ扨何の。サ、町人金子受取れ」勘八「これはこれは有難う」兩人「これさへ取れば」八内「言分あるまい、男を立つる長兵衞殿、金子の枷に兎や角すれば、増長つたる兩人ども、痛い目させる所なれど、赦してくれる早く歸れ」喜助「イエモウ〳〵きり〳〵と歸りたう御座りまする」勘八「左樣ならば此儘に」ト怖々兩人とも表へ出る。兩人「はや〳〵お暇申しまする」ト合方になり、兩人捨白をいひながら橋懸へ入る、此時長兵衞ぢつと思入あつて。長兵衞「思ひもよらぬ八内殿が、大枚のあの二百兩、何と禮さへ長兵衞が」八内「イヤ〳〵それには及びませぬ、役に立つたるあの金は」トこの中路次より權兵衞窺ひ出る、四手駕籠一挺舁いで出て、此時權兵衞門口より。權兵衞「男を研く長兵衞が、難儀を見かねて八内と、相談づくで妻のおちゑが」ト門口をあける。長兵衞「ヤそんなら女房が」ト駕籠の垂を上げる、おちゑ乘つてゐる、ちゑ「こちの人、お前の男が立てさせたさ」八内「又一つにはお主筋の小紫殿を身請の爲、可愛や妹は遊里の勤」長兵衞「こりや親父殿の無得心も、かうせう爲で有つ

さ今渡してやらう」ト合方になる、長兵衛先に喜助勘八出て來り。喜助「モシ長兵衛さん、今に今にと仰しやりますが、モウ四が打ちましたぞえ」長兵衛「四つは承知よ、有樣は他へ言つて遣つた金、先は留守かもそこは知れない、何ならこな樣達先へ歸るがよい、儕が方から持せて遣らうは」勘八「そりやモシ長兵衛さん、ちつとお詞が違ひますぞえ、今に渡さうと仰つてからモウ二時餘り」長兵衛「サア俺も待せる氣ぢやないが、辨じないで氣の毒、かうせう、我々こなさん達と三浦屋へ一緒に往て」喜助「コウ〳〵調市子供が使に來やしまいし、わしらで解らないで殘して往かれて立つものかな」長兵衛「なる程言やるとそこもある、そんなら此樣達の了簡で、とても の事に明日まで待つて貰つて下さるまいか」喜助「勘八さん、こいつは分らない咄になつたの」勘八「構ふ事はない小紫を誘いて行くべい」ト立ちかゝる。長兵衛「イヤ小紫を遣つては立たないぞ」兩人「そんなら金渡すか」長兵衛「サアソリヤ」兩人「そびいて行かうか」長「サア」三人「サア〳〵サア」兩人「面倒なそびいて行くべい」ト立ちかゝる、長兵衛耐らず兩人を引戻して見事に投げる。兩人「長兵衛、俺們を」トかゝる所へ若黨八内奥より出て來り、二人を引退け。八内「こりや待て町人、手詰なりやこそ汝達に、シテ其金子の高はどれ程」勘八「小紫が身の代」喜助「二百兩さ」八内「身共只今渡してくれう」兩人「へヽイ」ト尻込する、合方、八内懐中より胴巻の二百

盒は權八樣の親御の形見」ト閑心「スリヤ此品を親の記念と所持する權八、扨は我が大恩の武術の師範、兵太夫殿の實子にて有つたか、ムヽ」小紫「この香盒を見てお前の吃驚、何ぞ樣子のある事かいなア」閑心「小紫、今日只今寺西閑心、そちが事斷然思ひきつた」小紫「エヽ」閑心「證據は則ち神妙劒、白井の家にはなけねばならぬ此一卷、お事が手から權八に渡さん、たとへ敵の血筋たりとも、これを手柄に再びもとの緣の品、屆けて永く添ひ遂げやれ」小紫「そりや御眞實に」閑心「寺西閑心は武士だ」小紫「エヽ嬉しう御座んす」ト家來出て。家來「お旦那お迎ひ」閑心「小紫さらば」ト門口へ出る。小紫「そんならモウ去にやしやんすか」閑心「藤浪や流れすぐなる操川、嬉しいか」小紫「アイ」ト戸をぴつしやり締めて。閑心「提灯やれ」ト唄になり閑心入る、跡に小紫思入有つて。小紫「男づくで長兵衛さんが、こちらの事をそれと言はずに、お世話にして下さんす其間違から、おちゑさんの悋氣口論、傍で見る目の切なさ悲しさ、それのみならず現在敵の權八さん、とてもこの世で添はれぬ惡緣、閑心さんのお情で貰うたこの一卷、主へ屆けて未來の約束、やつぱり死ぬると覺悟して、せめて一筆」ト卷紙へ一寸書きかゝる、ト奥にて。喜助、勘八「申し長兵衛さん、どうなされて下さります」トこの聲にて卷紙をチヤツと隱して立廻はる、唄になり思入有つて硯箱を持ち二階へ上る、ト奥にて。「サアどうで御座ります」長兵衛「オヽ

迄といつても二時でござりまする」兩人「御面倒ながら今からお待ち申さうと思つて、それで參りました」重三「さういふ事なら、奥に親方も居さつしやるから、會うて咄合もしなさるがよい」兩人「そんならさう致しませう」重三「一ぱい呑みなさい」ト重三先に兩人ついて入る、ト二階より小紫降りて參り、邊りへ思入あつて。小紫「先刻にから樣子を聞くに權八さんは、父さん助太夫樣の敵、さすれば添ふに添はれぬ惡緣、こりやマア何としたもので有らうなア」トこの中閑心出かゝりゐて。閑心「よき思案借してやらうか」小紫「ヤアお前は閑心さん」ト立つて行かうとする、閑心裾を押へ。閑心「待て小紫、とても添はれぬ權八に、無駄な心中立てうより、身共が心に隨へば、親の敵も討せてやるは」小紫「エヽ穢はしい、何のこなたに從ふもので、たとへ親の敵ぢやてゝ、權八さんにどう手向ひがなるもので、モウ〳〵言うて下さんすな、聞く耳ないぞ」閑心「親の敵の權八には心中立て、我には飽まで情ない女、モウ此上は」ト拔きかける、小紫止めて。小紫「こりやどうさんす」閑心「しれた事、白井にゆかり杜若、其紫の色もさめ、興もさめたら落花微塵、人の花といけては措かぬ」ト斬りかける、小紫アレイ〳〵と逃廻り、あり合ふ物を投つける、危き立廻り、この中小紫懷より香盒をおとす、閑心手早く執つて。「こりやこれ見覺ある香盒、模樣は名にしちがの鹽竈、これを所持する其方は」小紫「この香

しかし、身請の事は三浦屋まかせ、併し、あの権八と、今更きれろと言つたとて、私が抱への女郎ではなし、身請の事は三浦屋まかせ、併しあの権八と、今更きれろと言つたとて」閑心「サそこを断らせる工風が有るワ」長兵衛「ナニあの断らせる」閑心「工風はこれだ」ト懐より袱紗に包みし一巻を出す、皆々見て。重三「さうしてそりや」閑心「奇兵の秘書、諸流に渉る眞妙劍」長兵衛「エ」ト思入、この時二階の障子を明け、権八出て窺ふ。閑心「この巻ぢや権八も、よもや切らずばなるまいぞ」重三「スリャ其品が日頃から、権八殿が尋ねてゐる」閑心「眞妙劍の一巻だは」長兵衛「如何様、それぢや色戀より、事によつたら小紫と」閑心「きれる話もお身が働き」長兵衛「デモおいそれとは」閑心「いかにも合點、いづれ返事は一間を借りて」長兵衛「否か應かを」重三「閑心様」長兵衛「吉左右次第で眞妙劍」閑心「アノ権八に」ト二階へ思入、不圖権八と顔見合はせる、権八ちやつと障子をしめる、長兵衛一巻へ思入。「待つて居るぞよ」ト唄になり、閑心土手助奥へ入る、長兵衛重三に呫き奥へはいる、橋懸より判人勘八、若い衆喜助出て來り。勘八、喜助「長兵衛様宅かな」重三「誰だ〳〵。オ、吉原の衆か」ト兩人内へ入り。喜助「イヤ小紫様の事に就いて」兩人「わざ〳〵参りました」重三「其事なら親分が呑込んで、三浦屋へ渡りをつけて、晩迄に残金を渡すつもりで」勘八「そこで御座ります、何ぼ長兵衛様でも、金づくは間際になつては、何のかのと間違も出るもので御座ります」喜助「モウ晩

長兵衛「モシ閑心様、貴方の家來と仰しやれど、此奴めは私へ近附になる印だと、コレ面へ熨斗まで挾んで私に下さつたでは御座らぬか」閑心「サそりや」長兵衛「そりやとは覺えの悪い、忰を突出す上からは、貰つた奴は私が存分。しかし親父が追善に、精進ならぬ生ものは、不遠慮ながらこの奴、生しておかぬが則ち弔ひ、天窓の傷が癒えようが、餓鬼と此奴をかへぐに、料理はうとする、侍顫へる。侍「こいつは耐らぬ」ト逸散に逃げて向へ入る、土手助思入。土手助「ア、もし〳〵お旦那、小僧を斬るとこの奴は、長兵衛殿に斬られます、家來一人をお助けと思召して、どうぞ其子の命をお取なさるゝは、ヘイ〳〵〳〵。モシ親方、有樣は左のみの傷でもごさりませぬ」ト膏薬をめくつて見せる。長兵衛「無駄をぬかすな、ドレ息の根を」トたちかゝる。閑心「長兵衛待ちやれ」長兵衛「どうしました」閑心「忰が命助けて遣らう」ト長松を俎板より下す。重三「そりやよい思召で」長兵衛「さう言はずとも是非に忰が」閑心「イヤよく〳〵思へば、生先ある忰が命、取るも無益、餓鬼を斬るよりまだ外に」長兵衛「外に斬るとは、權八と小紫が手をきつて貰ひたいといふ事か」閑心「流石は長兵衛よく見ぬいた」長兵衛「大方そこらで御座りませうよ」閑心「男を立つる長兵衛へ、この閑心が、折入つて頼みといふは小紫、是非とも身請は身共が致す、

突出す男氣は、流石は伊達衆の幡隨長兵衞、こゝは寺西閑心が、義理にも此儘この忰、助ける事と思はうが、そこを助けぬ生質、涙をかけては白柄組へ、刀の手前身が立たぬ、馳走に任せ庖丁するぞよ」長兵衞「御念に及ばぬ餓鬼めが命、お手を下され存分に、サ切つしやい突かつしやい。コレ長松、汝も幡隨長兵衞が子だ、一度死んで二度と死なゝい、百まで生きる者もあり、又生れて直に死ぬもある、汝が六歳でくたばるも、皆それ迄の約束だ、其俎板の上で死ね、泣づらかはくは見つともない、どうで死ぬなら笑うて死ね」長松「アイ笑つて死にます、これをぢ様、鯉や鰻は跳ねるけれど、おりや強いからはねずに死にます」重三「アレあんな氣性な息子殿、どうして傷はつけさせねえ、切るなら閑心俺を切れ、其子は重三が」ト長松へ思入、長兵衞支へて。長兵衞「これさ極樂、おぬしや此方へ、ハテマア退きやれよ」ト重三を突退け無理に制して。「サア閑心樣、庖丁さつしやい」閑心「ドレそんならば馳走に任せて」ト立上る、皆々思入、長兵衞抑へて。長兵衞「コレ。サアすつぱりとやらつしやい、町人づれの私等と違ひ、閑心樣のお手料理、忰が骨は跡で骨灑、其代には下された、面にあたりの有る奴は」ト土手助を引捉へ、出刄を取つて立かゝる、土手助顫へて。土手助「ア、これどうするく」トぶるくして恐れる。侍「こりや庖丁で危ないく」ト同じく顫へる。閑心「長兵衞、汝は身が家來をまだ此上に何とする」

ては朋友の手前へ立たぬ、殊に相人は男一疋長兵衞が忰故、猶更すみ申さぬさ、町人ながらも性根をすゑ、身が侍を立てよくりやれ」長兵衞「ようござります、貴方様が仰しやらいでも、昨夜のしだらは私も薄々聞いて居ります る、大方今日は御沙汰が有らう、但しは貴方へ私を召さるゝ事かと待ちましたに、却つて御自身入らしつて、恐入つたる長兵衞が、始末方にてこずつて居りまする、と申してお侍様を私がどうして〳〵お立申す事は」閑心「出來ぬと申すか」長兵衞「ヘイ左樣も申しますまい、貴方のお氣には適ひますまいか存じませぬが、此長兵衞が御返答は」トあたりを見て。「ヤイ其俎板をこゝへ直せ」ト合方になり、半助淸吉有りあふ大俎板を閑心が前に直す、この中長兵衞奥へ入り、直に長吉をひん抱へて出て來り、此俎板の上へ載せ。「さうして居ろ、サ閑心樣、長兵衞が忰の長松、御家來衆の謂はゞ敵、貴方のお顏を立てる爲、其俎板でお手料理、煮るとも燒くとも刺身でも、旅と違つて江戶前の、この長兵衞が生の魚、貴方の差した太刀の魚、親が見る前細作り、骨の出ぬ中骨付は、私へも妻へも閑心樣、夫婦が腹へ納めてやるは、かたみと分けて貰ひたう御座ります」半助、淸吉「親分そりや又」長兵衞「默つて居ろえ」重三「頭、こりや小紫さんのやら腹立をこゝへ廻して」長兵衞「ハテそりや合點だ、さう見た故に此餓鬼の、命惜まぬ長兵衞が」閑心「氣性は聞けどこれ程には、よもあるまいと思ひの外、吾が子

來を一人進上する、武士の小者のしやつ面へ、生疵受けちや寺西閑心、刀の手前相立たぬ、此趣をとつくりと長兵衛へ申聞かせろ」半助「こりやなる程」兩人「親分へ」ト奥へ行かうとする。

重三「イヤ言ふにや及ばぬ、相手は俺だ。寺西殿、儕が相手だ、少分ながら幡隨長兵衛が乾兒の二才、見かけはのろけた野郎でも、十萬億土へ勇みの端棒、極樂重三を閑心殿、御不承ながら相手にさつしやい」閑心「イヽヤ汝にや取合はない、是非とも此由長兵衛へ」重三「ハテ長兵衛は知らぬ事、わしを相手に」ト身體をさしつくる。閑心「由ない事を」ト突退ける。重三「そこを重三が」ト又寄るを侍さゝへる、重三擲仆す、半助淸吉も立騷ぐ、此時奥より長兵衛つかつかと出て來り、重三を拒へ。長兵衛「是はしたり、怎うした者だ」重三「親分、構はつしやるな〳〵」半助、淸吉「モシ彼の閑心殿がね」長兵衛「よいはさ、俺に任せておけ、重三、マア〳〵そちへ往け」ト鎭める、これにて皆々捨ぜりふにて控へる、長兵衛、閑心が前へ來て。「これは貴方が寺西閑心樣でござりますか、則ち私が幡隨長兵衛めでござります、見苦しい所へよう入つしやりました。騷がずと茶でも入れろえ、氣の注かない奴等だ」閑心「アイヤ心遣は無用にしやれ、すりやお手前が男と呼ばるゝ幡隨長兵衛、なる程立派な男ぢやワイ、身共は寺西閑心といふ者、委細聞いたか存ぜぬが、餓鬼が爲出したほて調戯、取上げるも大人氣なけれど、此儘に濟まし

を明け。「これは寺西閑心様、ようお出なされました」ト辭義する。閑心「ムヽ其方は長兵衛が若い者、吉原で折々逢うた極樂の重三とやら、シテ幡隨は宿に居るか」重三「お先觸が有つた故、奥に待つて居られまする、マアお上りなされませ」閑心「それは重疊、然らば免しやれ」ト内へ入り。「こりや家來ども、其釣臺をこれへ持て」侍「畏りました」ト宰領して内へ持込み、よき所へ置く。閑心「こりや伴五は後に殘り、其外の者共は歸つて、後程に迎ひに參れ」若黨「ハツ」ト若い衆は向へはいる。重三「シテ幡隨長兵衛に何の御用で態々と」閑心「近附にならうと思うて」重三「それで寺西」兩人「閑心。樣が」閑心「知る人にならうと思ひ、心ばかりの身が手土産、聞けば長兵衛には一子が有るげな、男の子なら恰好よひ手遊と、持せ參つた釣臺の其手土產、取次いでくりやれ。伴五其品」侍「畏りました」ト油單をとる、釣臺の中より土手助、返し前の奴にて、天窓より血に染みたるを白布にて卷き、これに水引結び熨斗つけてあるを、介抱して引出す、土手助唸りながら出てよき處へ倒れる、皆々思入。半助「何だ〳〵、見りや手負の面へ熨斗をつけて」清吉「これを息子へ」兩人「進物とは」重三「定めし斯うと思つてゐました、土手でそばえた奴が腦天、ぶち破したを根に持つて、持込んで御座つたの」閑心「如何にも昨夜日本堤で、身共が家來が素天邊、此通りに打破られ半死半生、先の相手が長兵衛が祕藏の餓鬼が所爲ゆゑ、家

いかいな」清吉「ハテお前の事だといつて親分が呑込んでゐるに、何の構ふ事があるもので、屋形船に乘つた氣で落ついて居なさいな」半助「それよ、親分の後にや私們がついて居らア、怖い事はちつともないワナ」重三「イヤ〳〵向も白柄組の閑心だ、身請しかゝつた女郎が横へきれたを、態々幡隨長兵衛が所まで、恥をかきには來ない筈だ、こりや昨夜息子殿が、奴の天窓を打わつた其尻宮を持つて來る量見と見えるワエ」小紫「そんなら私が事ではなうて」重三「大方それに違ひあるまい、そんなら頭の耳へ入れずに」半助「おいらが寄つてせごしてやるべい」清吉「それが可い〳〵」ト鉢卷をしにかゝる。重三「これさ〳〵、それも來ての樣子次第、無闇に打つてかゝるまいぞえ」兩人「オイ〳〵、用意をして措くべい」重三「何にしろ小紫さん、お前は奥へ行くがよい」小紫「アイ〳〵、そんならわたしや長兵衛さんに一寸この事」重三「いやさ言はずに」小紫「さうざんしたね」ト小紫ちよつと笑ふ、神田祭になり奥へ入る、向より寺西閑心、羽織衣裳大小にて、以前の侍つき添ひ、跡より仲間の若い衆二人にて、油單をかけし釣臺をかつぎ出て來り門口へ來る、内には三人六尺棒と鳶口など用意して隱し、いろ〳〵ある。閑心「長兵衛宅はこれと申すか」侍「左樣でござります」閑心「案内致せ」侍「かしこまりました。賴まう〳〵」半助、清吉「そりや閑心だぞ〳〵」ト騷ぎ立ち。重三「これさ、あれ程言つておくのに」ト宥め、門口

ヨお母さんとヨウヨ、ホウヤウホウー」ト囃し立てる、是にて兩人飛起き。長兵衛「コレ」ト長松を引抱へ。「こつちへ來い」ト唄になり、長兵衛ツイと奥へ入る、跡におちゑ殘り。ちゑ「ほんに今の子供には油斷も隙もならぬワイな」ト思入、この中半助窺ひ出て。半助「今のを見ちや」トおちゑが後より抱つく、吃驚して拂退け。ちゑ「エヽ誰かと思へば」ト又半助寄る所を天窓をぴつしやり。「酒を飲んだの」トおちゑツイと奥へ入る、跡より半助も入る、ト直に向より侍一人絹羽織袴股立にて足早に出で來り、門口へ來て。侍「頼まう／＼」ト二階にて小紫。小紫「アイアイ」ト梯子へ出て。「モシお前は必ず其處に居て下さんせえ」ト權八にいふこなし、合方にて下へ降りて來る、門を叩き。侍「コレ頼まうぞえ／＼」小紫「アイ／＼、何の用でござんす」ト明ける。侍「長兵衛殿の宿にない、寺西閑心左様申す、只今それへ參る間、他行致されぬ樣にと申しておくりやれ」小紫「アイ／＼さう申しんせう」侍「よいな、承知致したな」ト引返して向へ入る、小紫思入。小紫「アノ閑心が爰へとは大方私が。モシ重三さん／＼」重三「オイ／＼」ト奥より出で來る、半助、淸吉も跟いて出る。半助、淸吉「小紫さん何だえ／＼」ト小紫心遣ひなる思入にて。小紫「もしいなア、閑心が所から、長兵衛さんに今會ひに行く程にと言うてよこしたワイナ」重三「ナニ閑心が今來るとかえ」小紫「サア的然わたしが事で有らうと思ふが、可いかいな可

大事ないぢやござんせぬか」長兵衛「サアさう言やアそんなものだが、泊つたら明日はやく歸れ」ちゑ「其樣に大せうこいせいでも可いワイなア」ト長兵衛が呑んで居る煙管を取つて。「一服のませなさんせ」長兵衛「ム、洒落だの」トおちゑ又一服つけて長兵衛へ與り。ちゑ「久振で歸つて見れば、何處も彼處も埃だらけ、本に女子のない家といふものは、定めし洗濯物もたまつて居ようし、香の物も見まひたし、ドレマア爰らを一ぺん」ト暖簾口に掛けたる箒を取つて來て、そこらを掃いて梯子の方へ來り。「大方二階も埃だらけで有らう」ト梯子を掃きに上る、長兵衛見つけて其儘引おろし。長兵衛「コレエ、去られた亭主の内へ來て、二階を掃く者があるものかえ」ちゑ「それでも埃が」トいふを箒を取つて追まはし。長兵衛「そりや〳〵〳〵お見舞申すは」ト裾をまくる、おちゑちやつと坐り。ちゑ「アヽこれ調戯しなさんすな」ト長兵衛より寄添ひ。長兵衛「堪忍しろ〳〵、本に女房といふ奴はよいものだ、どうでもてんや者より味は生そばだ、ムムよい匂ひだ」ちゑ「ヘンお辱けなうござります」長兵衛「親父の家に居る中に、何も怪しい事はなかつたかえ」ちゑ「面妖、男といふものはそんな事をいうてから、父さんが居やしやんすし、一寸二階へ」長兵衛「よく二階へ行きたがるな」ちゑ「それでも誰ぞ來た時は」長兵衛「ハテ吾が家だは、誰も遠慮はない」ト兩人横になる、この中長松目を覺し起上り、これを見て。長松「お父さんとヨウ

ぬ其所へ、色々な事を人さんが言うて聞かす、何の私をしやくるのぢやと思うて居るけれど、居ぬ内に家の勝手さへ違ふもの男の心は猶の事、ひよつと此儘去られたら、マアどうせうと思ふワイな」　トこの中合方。長兵衛「なる程、女といふものは解らないものだぞ、これおぬしや何年添うてゐる、大概俺が氣も知つてゐさうなものぢやないか、モウ少時の中の事だ、ヨウ今日はマア親爺をつれて早く歸れ」　ちゑ「サアさう言はしやんすりや可い樣なものぢやけれど。モシお前は痛う苦勞でもあるか、疲れなさんしたぞえ、何をマア其樣に、苦勞があらば私にも咄して聞かして下さんせ」　ト氣遣ふ思入。長兵衛「喧ましいワイ、ようべり〳〵〳〵と口を叩きやがるは、苦勞は俺が好んでするのだ、構はずと行きやがれ」　ちゑ「アイ行くはいな、何のそれを其樣に叱らずと可い事を、行くは行くけれどもな。申しこちの方、わたしやお前に一寸」長兵衛「ナニ言ひたい事がある、何だ早く言つて歸れ」　ちゑ「サア其いひたい事はな」長兵衛「きり〳〵いへ」　トこの内最前より長松はおちゑに抱かれ寐てゐる、おちゑ此時包を枕にさして、密と下へ寐かして長兵衛が傍へ寄り。　ちゑ「久振でござんすワイな」　ト思入、長兵衛煙草のんでゐる。長兵衛「久振だと言つて、今出て行くと言つたものが、どうしてそんな事が。そして親父の年忌だ」ちゑ「何の父樣はお前より通り者ぢやワイな、それぢやに依つて今夜泊つて、明日早う歸つても

ヤモウ私も是から内に居りますなら、隨分心を改めて、何一ついはれぬやうに致しませう」家主「さう〳〵、それでなけりや治らない」トいひながら門口へ出て。「いや〳〵肝心のお布令を言はずに歸らうとした」長兵衞「モシ〳〵そりや昨夜土手の人殺し、其布令でござりませう」「ハア、そんならモウ聞かしやつたか、これは遲蒔唐辛、なんと新しうござらうがな」ト入る。權兵衞「ドレ俺も後まで二階へ行つて」ト上らうとする、長兵衞とめ。權兵衞「イヤ二階は取散らかつて足も踏込まれまいから、奥へ往つて野郎共と酒でも飲んでござるがよい」權兵衞「そんならさうせう、コレおちゑが去狀取るとも取らないとも」ちゑ「後方迄はお前もマア」權兵衞「ドレ二三杯酬らうか」ト唄になり權兵衞奥へ入る、長兵衞思はずおちゑと顏見合はせ、奥へ行かうとするを止めて。ちゑ「モシ待たしやんせ、何ぢやいな其樣に怖い顏ばつかりして、些とは私が心にもなつて見て下さんせ、日外や旅から歸らしやんすと、どういふ事か譯も言はずに、男づくだ世話せにやならぬ人が有る、手前が居ては遠慮故、迎ひにやる迄親許へ往つてくれと遣らしやんして、それから梨もつぶてもなし、父樣は知つての氣質、どうした事ぢやと毎日〳〵聞かれて困るは私一人、惡い事でもした樣に、世間の手前氣の毒故、モウ連立つて來たのもな、長松が顏も見たし、さうしてお前の父樣の二十七年の御年忌も今日ではあり、何やかや氣が氣でなら

無理ぢやござりませぬ」家主「いやモウ聞けば聞く程長兵衛殿が道理だ、これぢや此方も意地むぢいはずに引取らずばなりますまい」権兵衛「なる程さう聞けば娘が悪い。ハテモお主が悪いから、マア悪いになつて居ろよ、サアそんなら此方の言條を立てゝおちゑを連れて行かうから、諸道具はいふに及ばず、夏冬の物を品數揃へて爰へ出しやれ、鐵漿壺と風呂敷包、これぱかりぢや受取るまい」ちゑ「サそりや」権兵衛「俺も此方と縁を斷つて他人になつて、ちつと詮議が二階へ思入。「サア去狀書きやれ」ト長兵衛思入。長兵衛「そんならおちゑを離縁すりや」権兵衛「諸道具そろへた其上に、又金にする手段があるのよ」長兵衛「それぢや滅多に去られぬワイ」ちゑ「置いて下さんすか」長兵衛「手前を置いちや」権兵衛「去狀書くか」長兵衛「サア」三人「サア〳〵〳〵」権兵衛「どうする積りだ」長兵衛「可うござえす、女房を裸にして返したと言はれちや外聞が悪い、塵つ葉一本残さずつけて、去る去らないは後方迄に」権兵衛「そんなら返事の分る迄は、マア矢張り聟舅。こりや大家さんお世話でござりました」大家「ナニサお前、マア〳〵私もひよんな所へ來合はして、關係合にならうかと案じましたが、どうか圓く納まりさうだ、そんならモウ歸りませう、お内儀も是からは心を改めて、小遣なぞも湯水のやうにパッ〳〵と使ひ、また著物なぞも長くして、あの女房は引摺だと言はれる如にせにや、御亭主の氣に入りませぬぞえ」ちゑ「イ

來り、此中へ入る、間違にて踏のめされる。家主「これさ〱どうする〱」トこれにて太郎兵衛を見て。長兵衛「こりや大家さんかえ、御免なさい〱」家主「御免なさいぢやないワナ、大家を踏むは店賃を踏むも同じ事だ」ちゑ「ほんに大家さん、よい所へお出なされました、恥を申さねば理が知れぬとやら、私はこゝの家を出されましてござりますが、何が落度やら知れませぬ故、それを聞きに參じました」權兵衛「お前、譯さへ立ちますれば、引取らないでどうするもので御座りますが、品もなく出されたと言はれましては、この權兵衛が濟みませぬ」大家「こりや如何樣、譯は知らぬが、別れるなら是が缺點だと得心づくが可さゝうなもの、コレ長兵衛殿、何もわしに遠慮はないから、おちゑ殿の惡い所をいつて、去るが可うござらう」ちゑ「大家樣の仰しやる通り、これぢやに依つておかれぬといふ事なら、確かの爲樣もござりまするが、それも言はずに親許へ」長兵衛「モシ大家さん、よい所へお出なされました、マアよくお聞きなさいましよ、まづ女の才に朝起だは、其上に綺麗好で人樣に愛想がよくつて、無駄錢は怪我な事」家主「なる程こりや尤だワイノ」ト感心する。長兵衛「まだ其上に子を可愛がつても、遊ぶ事が大嫌ひ、髮結に髮は結はせず、縫針は手まめで早し、酒を飲まずに長屋歩行した事はなし、何處の國にか此通り人出入の多い俺が内で、つひぞ誰とも一寸でも密會した事のない女房だものを、去るも

細は後からとおちゑを返して今日が日迄、これ俺も坂本ぢや鶉權兵衞だ、娘にや何が缺點だ、間男でもしたか大酒くらひか、但し小盗でもしたといふのか、譯を聞かう、サアそれを聞かう」長兵衞「ハテこなさんも解らない人だ、女房去るによく〳〵な事がなくつて何するもので、疵もつけずに返したは、こりやこなさんへ達引だ、大概そこらは推量して引取つて行かつしやい、譯を言つたら血を血で洗ふ恥かき道具でごんせうぞえ」トこの中おちゑ門口に聞いてゐて思入、ずつと内へ入り。ちゑ「もし先刻から門口に聞いてゐれば、血を血で洗ふ恥かき道具ぢやと言はしやんしたが、何で譯を言へば血を血で洗ふ恥かき道具でござんすえ、サアそれを言はしやんせ〳〵」ト長兵衞に膝をつゝかける。長兵衞「ハテ言はないのが此方の情だワエ」ちゑ「イエ〳〵お前は言はぬが情でも、此方は聞かにやおかぬワイな」權兵衞「さうだ〳〵、それでこそ俺が娘だ、これ長兵衞、サア其譯を言つて聞かしやれ、譯が聞きたい〳〵」長兵衞「サア其譯は」ちゑ「どうで御座んす」長兵衞「サア何でもおかれない譯だ、出て行け〳〵」ちゑ「イエ〳〵聞かぬ中は出やせぬはいな」長兵衞「出ないと言つて去られた家へ、誰が許してうしやアがつた」ちゑ「其去つた譯聞かうと思つて」長兵衞「譯を聞かうもすさまじい、出やがれ〳〵」ト出さうとする、出まいとする、此立廻り皆々宜しく、テンツヽになり向より家主太郎兵衞出て來り、捨白にて直に舞臺へ

出す、これに權八の影映る。八内「泊めて下さい」長兵衞「なんと」八内「鏡の面にあり〳〵と映るは確かに權八」ト權八障子閉きる、兩人屹となり。「今日のみと見るに思ひの增鏡」長兵衞「馴にし影を人に語るな」ト八内二階を目がけ行かうとする、引止めて一寸立廻り。八内「後刻會ひませう」ト唄になり、八内奥へ入る、直に此唄を假つて向よりおちゐ、世話女房の形にて鐵漿壺をさげ、跡より鶉の權兵衞、やつし親爺の扮装にて、布呂敷包を脊負ひ出て來り、花道にて。おちゐ「モシ父さん、私は外に待つてゐる程に、お前マア先へ入つて」權兵衞「合點だ〳〵」トいひながら門口へ來り、鐵漿壺を持つて。「長兵衞宅にか」トずつと入る、長兵衞この中煙草をのみゐる。「オヽ宅にゐる〳〵、此頃から何時來ても終に宅に居た事がない故、今日は留守なら居じかつてゐる氣で來た、よく宅に居たなァ」長兵衞「わしだつて用が有りや留守な事もなくつてさ、よく御座りましたな」權兵衞「噂を聞けばどうか金の要る事が有る樣子だから、娘のおちゐが鐵漿壺を持つて來た、銅壺の前へ直しておきやれ」長兵衞「去つた女房の鐵漿を、なぜ銅壺の前へ直しておくのだ」權兵衞「知れた事だ、おちゐは俺が懸り娘、家藏を持つて居る所から貰ひに來たれど、惣領の權太郎は勘當するし、内へ聟をと思つて居る中、こなたに喰付き貰ひたいと、花川戸で一人の男のいふ事だから、顏を立てゝ諸道具揃へ遣して、子まで出來た間ぢやないか、それに委

しを致してござる、御免なされて下さりませ」長兵衛「何さお前」八内「これは其許へ手土産」ト袱紗に包みし序幕の小柄を出す、長兵衛取つて。長兵衛「他人ぢやあるまいし、何の心遣ひに、此樣な事をして」トいひながら袱紗を披けて見て思入。「表は赤銅七子、丸に井筒の紋散し、此割笄は」八内「覺えが有るか」ト長兵衛懐へ入れようとする、八内とつて。「これは妹への手土産、そこ元へは」ト扇を出して。「祝しましていつか巡り扇の進物」ト扇を遣る。長兵衛「末廣う受納致しまする」八内「誠に花川戸の幡隨長兵衛殿は江戸の男伊達、頼まれた其事は、命にかへても後へは退かぬ頼もしいお人と、世上の噂に引かされ、推參致した其譯をお咄申さう」ト長兵衛側にある鏡を見て。長兵衛「淺草の場末に住む、貧乏人の長兵衛では御座りますが、心は水晶りん此鏡の通り、笑つて對へば笑つて映る、正直な事なら承りませう」八内「忝ない、匿まはつしやれたで御座らう」長兵衛「エ」八内「いやさ男と見かけし拙者が願ひ、どうぞ會はして下され」長兵衛「そりや誰に」トこの中權八二階より窺ひ居る。八内「因州の武士白井權八」長兵衛「何と」八内「匿まつたといふ事は、鏡にかけてつけ込んだ、此笄の持主をお世話なされし長兵衛殿、心を見込みし拙者が願ひ、何と違ひはあるまいがな」長兵衛「違ひました、大違さ、そんな事は先の辻番で聞かつしやい」八内「彌々其許は御存知ないか」長兵衛「わしが心は曇らぬ鏡」ト鏡を

り。八内「長兵衛殿、このお人は何でござる」長兵衛「これかえ、こりや何さアノ此頃おちゐが留守だに依つて、頼んでおいた雇婆々さ」ト出たら目にいふ。八内「如何樣、これでは妹は内に。こりや去らしやつたな、離縁めされたな、まだ身共が當地に居る中、妹が事を承はり、名に負ふ幡随長兵衛殿、不束な者を能くもマア面倒見て下さるよし、遠國へ參つても其許の事、今の今まで。それに怎ういふ事が有つて、そこで妹を去らしやつたか、仲人なしの女房を去つて男といはれるか。トサ若し離別もあつたなら、かう申すで御座らうに、ナニ長兵衛殿、此末とても妹が事、何分お頼み申しまする」長兵衛「エイ〳〵」ト術なきこなし。八内「これはこなさん、妹が留守中何かとお世話でござりませう」ト小紫思入。「ハテ美しい雇婆ア。名は何といひます」小紫「アイ私が名は小紫」長兵衛「アヽこれ小紫ぢやない。小むらがへりがした、そりや先刻から坐つてばかり居た爲だ。ホウどうか降りさうだ、二階の雨戸を繰つておきやれ」小紫「アノ槅子を閉てるのかえ」長兵衛「オヽ二階へ行きや知れるは」小紫「アイ〳〵。申しあなた、寛りとお遊びなんし」ト合方になり、小紫二階へ入る、八内同じく行かうとする、長兵衛立塞り、これよりぢりぢりと兩人宜しく立廻り、トヾ互に顔見合はせ恟りして。八内「フヽ」長兵衛「アヽ」兩人「ハヽヽヽハ」長兵衛「サア一服あがりませ」ト兩人下に居る。八内「拙者と致した事が、初て參つて只今は申過

たな」長兵衛「さればさ、年中役にも立たない用で、とんと内には居ませぬが、何處をどうしてか今日は折よく、やれ〱よく尋ねて下さりました」八内「拙者とても定めしお聞及びも御座らう、前方身持不埒にて親共に勘當受け、憂き艱難の仕方なう、武家方へ若黨奉公、幸せと氣に適ひ勤めます中、旦那にも國詰を仰付けられ、拙者も是非なく倶々に、夫より年月遠國住居、この度所用に就きまして江戸表へ出ましたこそ幸ひ、久々にて親共へも對面と、今坂本へ參りがけ、妹が事も懐かしく、一寸お尋ね申ましてござる」長兵衛「エヽそんならまだ家へも寄らずに」八内「今江戸入致したまゝ、何も緣とはいひながら不束な妹め、定めしお世話勝でござらう」ト此内小紫二階より下りて來て、火鉢へ土瓶をかけ茶を拵へ、八内が傍へ持つて來り。小紫「お茶をお上りなんし」ト茶を出す、八内取りながら思入。八内「こちらへ片づきまして六七年振、始て兄が參つたに。こりや妹めは何處へ參りましたな」長兵衛「おちゑかえ、おちゑは奥に」八内「さういふ奴でござる、奥に居るなら早速に拙者が聲を承り」長兵衛「イエ〱おちゑは奥ではござりませぬ」八内「ヘエお宿には居りませぬか」長兵衛「何さ女房は。宿下り、でもなしそれさお寺へ泊りがけに往つて、それから直に伊勢參りに行きましたのさ」八内「ヘエー」ト思入、小紫煙草を吸付け。小紫「一服お上りなんし」ト出す、長兵衛氣の毒なるこなし、八内合點の行かぬ思入にて取

モシ權八さん、わたしや傍を離れぬ程に、必ず呵つて下さんすなえ」ト寄添ふ。重三「モウ傍へくつついたの。時に今ごろはうそ寒い、權八さんに羽織でも著せなさいな」ト紋附の羽織を出す。權八「これ迄明さぬ身の上も、明せばとても此命」長兵衛「イヤサ命にかけて惚れた日にやア、叉地者より小紫、今日からして樽酒を、醉はない樣に飮ましてくりやれ」ト小紫へ顋にて思入、小紫こなし有つて權八にちやつと寄添ふ、長兵衛あちら向く、重三見て。重三「こつちは本の酒でも飮まう」ト家臺囃子になり重三奥へ入る、ト直に向より若黨八内、旅形股引草鞋三尺がけ大小にて、菅笠を持ち出て來り。八内「道理で賑かな筈だ、明日は三社の祭だな、エヽあそこの肴屋で聞いたが大方此家で有らう」ト門口へ來り。「ちと物を承りたう御座る」長兵衛「アイ何だな」八内「イヤ幡隨長兵衛殿のお宅はこれで御座るかな」長兵衛「ハテ聞馴ない聲だが」ト思入、權八心得二階へ上る。「幡隨長兵衛は俺が事だが、何處からお出でござります」ト門口をあける。八内「ホウ其許が長兵衛殿でござるか」長兵衛「左樣さ、そしてマア お前は何處から」八内「なる程、まだこれ迄お目にはかゝりませぬが、拙者はおちゑが兄でござる」長兵衛「ヘイ左樣なら兼々咄の有つた女房のおちゑが兄貴かえ」八内「左樣でござる」長兵衛「こりやよくこそ、サア〳〵此方へ入らしやりませ」八内「御免なされ」ト入り草鞋を解きながら方々見廻し。「よくお宿でござつ

に氣兼と、お内儀を里へお歸し有つたと申す事承つて、此程よりどうぞ愛でたく元の樣に御夫婦、添うてと申せどもお聞入御座らぬ程、此身になつては猶々氣の毒」長兵衛「これさ〳〵又おちゑが事をいふのかえ、ありや全體こなさんに氣兼をさせまい爲ばかりに里へ預けたのぢやごんせぬ、些とあれには譯の有る事、必ず氣の毒がらないがよい」重三「そんなものさ、殊に長松さんもある事だ、二人の衆もいふ通りにこれ親分」長兵衛「エヽ何の事だ捨てゝ措きやれな、俺が女房の事よりは權八、小紫が轉込んで來ちや破れかぶれ、お主も男だ、是非とも女房に持たずばなるまい」權八「サア」長兵衛「そこだ、今朝お主が出た跡で、吉原の方へは掛合つて遣つた事もあれば、萬更長兵衛を潰しもせまい、大方咄はわかつて來よう、すりやァ天下晴れてお主達は夫婦、これ迄の吉原通ひは小紫といふ者がある故、其小紫を女房にすりやァノ吉原に用はないといふもの、そりやはや尋ぬる品で用も有らうが、其代りに又お主を敵と尋ねる。イヤサ堅い約束した氣の合うた女を引受けても、間睦じく家に居て、外へは出さぬやうにしやれ」權八「お世話の上に小紫まで、其上に言ふに言はれぬ今のお詞。權八承知致しました」ト思入。長兵衛「又小紫も其通りだ、今日よりは大事にして、權八が傍を離れぬ樣、外へ出さないやうに爲やれ」小紫「そりやモウお前が言はしやんせいでも、朝も晩もひつついてゐて、人も笑はうと構はずに。

一卷、ちと手懸がござりまして、それ故所々を」長兵衞「そんなら可いが、モウ晩からあんまり夜歩はしないが可い、大分物騷だといふ事だ、今の湯での咄にや、土手で昨夜人殺があつて、殺した奴は知れねども、確か死んだは上州の絹賣とやらいふ噂」小紫「エ」ト悔り、權八を見る。長兵衞「小紫痛い吃驚、エヽ何が人殺の咄、氣味わるがるも尤、時に權八、聞けば小紫と廓で何か愛想盡しもしたさうなが、小紫が胸を聞けば憎くもない心意氣、俺が挨拶だ不承して遣りやれ」權八「長うつき合ひまする中には、斯樣な事はござります」長兵衞「小紫、これで心が濟まうがな」小紫「イヤモウ日本晴のした樣に、日本晴といへば日本堤の人殺し、お前も曲輪へ通ひなさんす道、必ず氣を注けなさんせえ」長兵衞「馬鹿をいへ、是から廓へ何の用が有つて行くものか、したが權八、お主は歸りに何ぞ噂は聞かなんだか」權八「イヽエ何にも承りませぬ、油斷のならぬ事でござりまする」重三「さうでござんす、何でも斬つた奴は豪勢な手者だといふ評判、それで浪人者を嚴しく詮議するといふ事だ、權八樣も隨分氣を注けなさるが可うごんす」小紫「忌な噂でござんすなア」長兵衞「辻斬か意趣斬か知らないが、何にしろ忌な事だ、お主も浪人だけ沙汰を聞くと大抵案じる事ぢやない程に、マアく當分何處へも出ないが可い」權八「イエモウ御深切な其お詞、忝なう存じまする、不圖した御緣で私をお世話下さる其折から、女房が居ては何か

者だとて遠慮して奥にばかり入つて居るにや及ばないのさ」長兵衛「イヤ〳〵そりやさうしたものぢやない、何と言つても先が吉原、難かしくいふ日にや小紫は關破り、此方へ帶代で殘りの年を貰ひたいと、咄合つて見た所が、先方も溫和しう預けて歸つたものだから、それ丈け此方も達引に、マア解る迄遠慮して遣らにやならない、併しながら長兵衛が宅へ驅落して來た小紫、モウ三浦屋へ返す事ぢやない程に、そこの所は落ついてゐるが可いのさ」小紫「何のそりやモウお前が請合うたといふて下さんした事ぢやに依つて、其事は案じやせぬがな」重三「權八樣を案じるのか」ト小紫思入。長兵衛「ほんに權八殿はまだ歸らずか」小紫「サア今朝出なんした儘ぢやに依つてな」長兵衛「可愛さうに、この樣に驅落をして來たものを、出歩かずと傍に居て。併しあの邪見な所にのろく成つたものだらう」重三「さうさね」小紫「知らぬワイな」ト思入、時の鐘、唄になり、向より權八、著流し一本差、頰被をして邊りへ心遣をして出て來り、直に門口へ來り、內を窺ひずつと入る、この中長兵衛は浴衣を脫いで著物を被る。權八「唯今歸りました」ト門口を締める、小紫見て嬉しきこなし。小紫「ヤア權八樣、戾らしやんしたか、今も今とてお前の事を、よう戾らしやんしたなア」重三「エヽ嬉しがるやつさ」長兵衛「昨夜遲く歸つて今朝も早く、何處をマア歩くのだ」權八「サア外の事でもござりませぬが、豫てお咄申しました彼の眞妙劍の

次郎吉「むくを入れるには小さいね」重三「措きやァがれ」清吉「コレ大三も伊勢孫もよい加減に行かないか」次郎「アイ〳〵」三吉「半助さん、入替の帶を返しなさい」半助「よいよ、明日の祭を終ふと返すは」清吉「祭といや拵へた獅子をちよつぴり舞つて見ようぢやないか」半助「可からう可からう、小紫さんの股倉へ舞込んでやらう」小紫「エヽ、モそんな事は止て下さんせ」重三「どれどれ俺が木遣をやつてやるべい。ヤアヽやるよ」ト兩人ヤアヽと木遣、又家臺囃子になり小紫奥へ行かうとするを先へ廻つて是より獅子を舞ふ、子供も倶々飜をもつて立騒ぐ、小紫いやがり迯廻はる、この中向より長兵衛、浴衣置手拭にて著物を抱へ、下駄がけにて出て來り、直に舞臺へ來りずつと内へ入る、途端に長兵衛が鼻の先へ獅子を突出す、長兵衛思入。長兵衛「エヽ篦坊め何をしやがる」トなぐる、皆々驚き。半助、清吉「ヤア頭だ〳〵」ト狼狽へ獅子を持つて一緒に奥へ入る。次郎「ワアヽイ〳〵」ト囃しながら二人も迯げて向へ入る、ト小紫重三殘る。

小紫「オヽ長兵衛さん」ト重三少し悄氣て居て。重三「親分、茶を進ぜませう」長兵衛「何の事だな、お主迄野郎共と同じ樣に馬鹿〳〵しい、さうして吉原から人でも來たか」トこの中重三思入。

重三「イヽエ今朝來たまんまさ、ナニお前三浦屋でも外の者と違うて、此方さんが挨拶して遣らしやつたものだから、何とも言つて來る事ぢやないのさ、それだから小紫さんも、なんぼ驅落

前もどうしたものだ」ト引分ける。重三「サア〳〵中をよくしろ〳〵、喧嘩する者に此獅子を持せないぞ」ト出來上つた獅子を見せる。次郎「こいつは可い〳〵、明日三社樣の祭に舞ふのか」重三「さう〳〵、今宵は宵宮だから、何でも山の宿から馬道の方へ舞つて行くべい」清吉「若し不吉をつけやアがつたら、構ふ事はない向脛をぶんなぐれ」半助「そりや又眞の事だが、この石佛半助がついて居て指もさす奴があるものか」清吉「又大造な事を吐しやがるは」半助「吐しやがるとは何の事だ」長吉、次郎、三吉「オヽシツシ〳〵」ト犬の如にけしかける。清吉「何をこの猿唐人め」トくらはす。半助「うぬ打ちやがつたな」ト立かゝり兩人喧嘩になる、重三は煙草を呑みながら立て見てゐる、子供囃す、この内家臺囃子になり、奥より小紫女郎の形、しごき帯にて出て來り兩人を止め。小紫「これいなア〳〵待たしやんせ、どうしたもので御座んす、重三さん、お前も又見てゐる事は御座んせぬワイな」重三「何さ打ちやつて措きなさい、男達の家に居るからは、こりや喧嘩を稽古するのだと思ふが可いのさ、併し親分も今に湯から歸るだらう、モウ止にするが可い」兩人「それでもあんまり」小紫「ハテ可いワイな」ト兩人これにてしづまる。「長松さん爰へお出、よい物上げう」ト懐より蒔繪の香箱を出し、長松にやる。重三「何だな〳〵」長松「こんな物を貰つた」ト見せる。重三「アヽよい箱だ、こいつへ金米糖を入れたら可からう」

本舞臺三間の間、上の方數子戸の押入、眞中に暖簾口、其上に立派なる神棚を取附け、納太刀など掛け、下の壁に佛事の進物札澤山に貼つて有り、例の所に門口、ずつと上に二階家を取附け、一面に障子閉切有り、下は黒塀見越の植込、すべて長兵衛内の掛り、爰に長松太鼓を足に引挾み叩き居る、三吉同じく翫弄の附太鼓叩き、治郎吉御用の形、汐吹の面を被り、采配を持ち、ひよつとこを舞うてゐる、此方に石佛半助、清吉兩人蜜柑籠にて獅子を拵へ居る、極樂重三返し前の形にて大俎板の上にて、出刃庖丁にて獅子のばれんを裁つて居る、聖天の囃子、ざんげ〳〵にて幕開く。

半助「念佛目球にする九年母を買つて來たら、切つて貰やアな」清吉「默つて居やれ如在はない、重公、庖丁序にこいつを中から二つにして下つし」ト九年母を出す。重三「オットト承知だ」ト二つに割つてやる、此中子供よろしく有る。三吉「治郎吉殿、俺にもちつと其面を貸して下さい」次郎「イヤ〳〵そして貴樣に出來るものか」重三「手前ばつかり冠つて居ずと、三吉にも貸してやるがよい」三吉「それ見たかな」次郎「何の出來もしないくせに」三吉「出來ないといふ事が有るものか、御用め」次郎「俺が御用なら手前は調市だ」三吉「調市が世話になるものか」ト摑みつく、次郎吉突きのめす、兩人摑合ふ、長松太鼓の鞭にて次郎吉が天窓を叩きながら。長松「御用め御用め」ト散々に打つ、次郎吉泣出す。半助「こう〳〵長さん、止しな〳〵」ト立かゝり。清吉「手

の手疵、すりや今の惡者共が」彌二「愚人ばらが手にかゝり此深傷、ア、、、」ト苦しみ倒れる、八内介抱して。八内「申しお心を確にお持ちなされませ、手疵は淺い、八内でござりますぞ」ト彌一心づき。彌二「八内〳〵」八内「へイ〳〵〳〵是に居りまする、心を確かに氣を丈夫に」彌二「八内。心をこめし此一書、弟權八へ」八内「現在敵の權八殿へ」彌二「屆けてくれい」ト又おちいる。八内「申し」ト寄らうとする、半助、仁藏、うぬとかゝるを、ポン〳〵と見事に斬倒し、彌一を見て合掌する、この仕組よろしく、拍子にてチョン〳〵の。

幕

大詰　幡隨長兵衞内の場

役人替名

一寺西閑心	重太郎
一判人勘八	豐藏
一奴土手助	冠平
一三吉	三助
一傾城小紫	小六
一極樂重三	新藏
一白井權八（二役）	半四郎
一おちゑ親鷄權兵衞	舍丸
一石佛半助	銕藏
一若黨八内（二役）	重太郎
一若イ衆喜助	伴藏
一家主太郎兵衞	門三郎
一長松	駒藏
一樽拾治郎吉	好藏
一女房おちゑ	半四郎
一幡隨長兵衞	幸四郎
一勇み清吉	松兵衞

ねばならぬ武士の表、仇討に出立つより權八は狙はず、却つて遭ふまい〳〵と身を隱すこの助一、それに引かへ權八は、傾城にうつゝをぬかし、寶詮議も上の空、意見もならぬ敵同士、絹賣と姿を變へ、小紫に無理いうて緣斷らせたも、二品の詮議をさせて、白井の家再興させん爲ばかり、委細の事は此遺書に、どうぞ人知れず權八へ渡したい者ぢやなア」ト時の鐘雨車。「又降つて來たか、折惡い持病の癪」ト財布を出し。この樣に冷えるものを懷へ入れてゐた故、誠しやかに道ならぬ然でもない金」ト言ひかけ邊りへ思入、この中敵役四人立聞きて、此時早物半助、彌一が持つたる財布へ手をかける。「コレヤ何とする」半助「さつきに見つけた絹賣彌一」六助「其金こつちへ渡しやがれ」彌一「さては汝等は盜賊だな」仁藏「オヽ、お頭閑心樣の吩咐で」仁右衞門「小紫が身請の手附」半助「きり〳〵此方へ」四人「渡しやがれ」彌一「イヽヤこりや金ぢやない、小紫を騙した贋金ぢや」半助「そんなで行くのぢやない、面倒なたゝんで終へ」ト四人斬つてかゝる、彌一あり合ふ傘にて立廻り、敵役の持つたる一腰をとつて四人と立あり、其身も手を負ひ四人を斬倒す、よき程に向ふより若黨八內、小提灯を提げ旅形大小半合羽にて出て、此立廻の內へ入り、よろしく追散らす、彌一閑心へ斬つて蒐る、八內きつと止めて彌一を見て。

八內「ヤア貴方は若旦那助市樣」彌一「八內か、會ひたかつた〳〵」八內「こりや見ますれば數ヶ所

を振拂ひ。かん「厚顔しい人ぢやな」仲居「ほんにお前も爪ぢやなア、時に雨も小熄んだ、申し仲の町までなりとお出なされませな」かん「お出なされぬと呵られますワイな」ト兩人よつて手を引いて引立てる。彌二「アイタヽヽ」五丁「お手が痛みまするか」彌二「イヤ手では御座らぬ、此間から氣合が惡うて、アイタヽヽ」みどり「お癪でござりますかえ」ト介抱する。彌二「イヤイヤ大事御座らぬ、持病ぢや構うて下さるな、所詮これでは廓へは行かれぬ、どうぞ駕籠など雇うて下されぬか」五丁「そんならどうも仕方がない、私が田町へ往つて」みどり「駕籠雇うて下さんせ」仲居「ほんに折惡いこの雨」みどり「そんなら旦那」四人「お近い内」トさわぎ、禿みどり、仲居お由、藝者かん、傘さし先へ入る、幇間五丁傘ない故。五丁「オヽイ交際のない、待つて下さんせ〳〵」ト追はへ入る、跡蟲の聲時の鐘雨車、彌二跡見送り。彌二「アレ〳〵姦しい衆ではあるぞ」ト思入あつて。「ア誠に人の身の上と水の流れは知れぬもの、白井の惣領、本莊の養子なる助市ともいはるゝ者がこの有樣、實父兵左衞門殿は長光の刀眞妙劍の一巻紛失、それにつき申譯なく其場で切腹、我は實子といひながら本莊家の養子、其騷動の砌より、弟權八を我家へ引取り、寶詮議もするならば、白井の家再興と、思ふ效なき權八が所行、これといふも養父助太夫殿の惡事、露顯せしは死骸の傍に落散りありし密書より、されども弟權八は養父の敵、討た

長松「どうしたと」土手助「忌々しい」重三「長松さん」長松「サア行かう」ト土手の提灯になり、二人は向へ入る、土手助下座へ入る、時の鐘ばた〳〵にて橋がかりより半助、石塔六助、骸骨仁藏、仁右衛門出て來り。半助「彌一が歸り道は大音寺前」仁藏「こゝに待受け騙すに手なし」仁右衛「あれあれ向ふへ確か彌一」六助「必ずぬかるな」四人「さうだ」ト一寸呟き四人稻村の影へ隱れる、ト騷唄になり、橋懸より彌一以前の形、禿みどり相合傘さしかけ、幇間五丁、仲居お由、藝者かんついて出て來り。五丁「申し旦那、雨の降る夜は一入ゆかしと申しまする、早歸りとはどうで御座りまする」仲居「それ〳〵、色に逢ふ夜はしつぽりと、こんな晩が可う御座りますぞえ」みどり「お前方、そんな所ぢやござんせぬ、あれ程花魁の頼み、おかへし申しては叱られますワイなア」かん「ヤヽ〳〵お戻りなされませいな」彌一「貴樣達が其樣におだてゝも、肝心の太夫殿が不承知、この樣に金持の大盡でも、そこに惚れぬが流石は吉原ぢやてな」ト又雨車。五丁「又降つて來ました」彌一「オヽ幸ひの松の下」皆々「チトを休めて參りませう」ト皆々稻村の藁を取つて來て雨を凌ぎゐる、この内騷ぎの三味線。みどり「可笑な形ぢやなア」五丁「悉皆女中霜降をした樣な」彌一「時に此方衆はモウ去んで下され、併し只も去なれまい」ト財布取出して思入あつて。「イヤ〳〵こりやこはされぬ封金ぢやワエ」五丁「申し封金でも大事ござりませぬ」ト來る

以前の形、寺西閑心の紋つきたる小箱提灯さげ出て來り、双方行合ひよけようとして、兎角土手助が邪魔になる故、長松下駄にて提灯を蹴て行過げうとする、土手助思入あつて。

土手助「こりや待て〳〵」重三「奴さん何ぞ用か」土手助「オヽ用がある、この廣い往還をなぜ此樣に提灯へ泥をはね上げた、濟まないぞ〳〵」重三「これ〳〵濟まないといつて夜路の事だ、了簡さつしやい〳〵」土手助「イヽヤ否だ、行當つたのは子供とも思ふが、ついてゐる野郎が、マアうぬが面を」ト重三を見て。「ヤアわりやァ極樂重三だな、うぬよくも廓で酷い目に逢はしたな、濟まないぞ〳〵」重三「これ濟まない〳〵といつてどうするのだ」土手助「オヽ斯うするワ」ト胸づくしを取り一寸立廻つて下へ突据ゑる、長松下駄を脱いで土手助が天窓を打割る。長松「二合半め、覺えたか」土手助「アイタヽヽサア痛いぞ〳〵」トあたまを押へ。「あのコリヤ血が出る、濟まないぞ〳〵。といつた所が先は子供、忌々しいワエ、可いワ、汝には親があらう、サア其親の名を吐せ〳〵」重三「オヽ言はねエでどうするものか、形は小さなちよつぽりでも、是でも江戸の達衆の悴」長松「お父さんは花川戸の、幡隨院長兵衞なれば長松、わるく洒落ると撲き殺すぞ」土手助「ムウ忌々しい、可いワ、俺ではとても敵はない、是から頭へ申上げう、どうするかうぬ覺えてゐろ」重三「オヽいつ何時でも尋ねて來い、金輪奈落ひけはしない」土手助「とはいふものゝ」

る、小紫ハア、と泣落す、此時奥より我笑、半助、仁藏、仁右衛門出で來り。我笑「もし絹屋の彌一は」閑心「そんならアノ」我笑「見屆けましたがアノ」と言はうとする。閑心「ハテ大音に、野暮な聲だぞ」ト思入、ト小紫を顔にて教へ思入有つて。四人「そんならお頭」閑心「サア歸らうか」ト唄になり向へ四人附添ひて入る、淸搔になり小紫思入、奥より太夫禿走り出て來り。此糸「申し〳〵花魁、何かの樣子聞きました、あの彌一さんは裏から直にお歸りなさんしたゆゑ、五丁さんや皆樣が一緒に送つて往てござんすぞえ」小紫「エ」ト吃驚して。「そんならあの彌一さんが、折角身請の手附の二百兩を貰ふ爲、心に思はぬ愛想づかし、いつそ跡追つかけて」ト行かうとする。此糸「申し〳〵お前、それでも廓の内を」小紫「ほんに私は勤の身、廓を出られぬ籠の鳥」此糸「よう御座ります」ト邊りを見て。「金のかたひの此羽織、これを著て大門を」小紫「そんならこなさんが」此糸「權八さんにはチト御恩があれば」小紫「あの後の事を受込んで」此糸「ソレ」ト羽織を著せて手拭を渡す、小紫不調法にかむる。小紫「そんなら必ず」此糸「爰かまはずと御座んせ」トすがゝきになり、兩人よろしく道具まはる。

本舞臺通し土手、後に藪ありて眞中に大木の松の立樹、左右稻村あまた直し、大音寺塘の體、雨車時の鐘、蛙の聲にて道具とまる、ト下座より長兵衛忰長松、極樂重三出て來り、橋懸より土手助

で何とする」權八「合點の行かぬ此懷中」ト權八閑心へ蒐る、閑心振放し扇子にて打つ、ト權八きつとなる、小紫とめ。小紫「コレ權八さん」ト止めるを引廻し立廻り、奥より極樂重三つかつかと出て來て權八を止め。重三「これ權八さん、場所が悪い待つしやれ」ト止める、權八じつとなる。閑心「金銀にあり餘る閑心樣が、奥方になれるを嫌ふとは甚い物好き、なんぼ嫌ひなされても、金といふ色男には、業平樣でも叶ふまいワイ、ハヽヽ、時にそろ〳〵行かうかい」半助「そんなら今夜は」閑心「どうで歸りは大音寺前」半助「駕籠を吩咐けませうか」ト權八これを聞いて思入、小紫の前へ文を出し。權八「呼びに遣した此文は、今で思へば縁のきれ文」ト小紫を見て思入、小紫前なる以前の馬盥を見て。小紫「その馬盥の杜若」トつく〴〵見て。「白いと一緒に活けらるゝを、紫がいやがるワイな」權八「すりや馬盥の」重三「あの杜若を」ト重三馬盥の中を見る、此時彌一の顏映る。「この人影は」小紫「エ」ト吃驚する、權八見ようとする、彌一障子閉す、小紫ちやつと馬盥を引かへす、皆々悄りして。重三「すりや馬盥を打あけて」小紫「どうで落花は縁のきれ目」重三「再び返らぬ此水の」小紫「この紫の」ト杜若を取つて差出す、權八きつと。權八「朱を奪うて」ト花を打ちつける、重三に來いと顏にてする思入、權八花道より來り。權八「すりや閑心が歸路は」重三「エ」權八「サア御座れ」ト唄になり、權八早く向へ入る、重三從いて入

と思の外、いとしい男といふからは、やつぱり白井權八か」半助「イヽヤ若衆は立派に見えたとて、花川戸の食客人、一文なしのほんの素調市」ト小紫だまつてゐる。權八「イヽヤ出來まいものでも有るまい」小紫「何の出來よう、お前の樣なかいしよなしに」權八「ヤなんと」小紫「アイ働きのないお前には、身請は出來ぬといふ事」ト權八きつと成つて。權八「ヤイ小紫」小紫「なんでござんす」ト此時二階の障子明け彌一窺ひゐる。權八「今更いふも愚なれど、去年初めて燈籠の、灯かげにふつと見るよりも、初手は一度か二度の月、長兵衞殿を力にて、漸逢うた閨の戸に、立てし屛風は吉原の、雀形なる比翼塚、思ひの鳥の深き里、それに今夜の心がかりな今の一言、是には何ぞ譯が有らう、サア其譯をいへ」小紫「サア是には深い樣子の」トいはうとして思入、つんとして彼方をむく、閑心こなしあつて小紫の傍へよつて。閑心「コレ小紫、廓の意氣地か知らねども、さう情強にいはずとも、思案しかへて閑心が、御新造樣になる氣はないか、どうだ〳〵」小紫「エヽ知らぬワイなア」ト平手にて閑心の顏をつく、閑心これにて慍として柄に手を掛け、ムヽと立かゝる、この時神妙劍の一卷を落す、小紫手早く取つて。小紫「この卷物は」ト權八見て。權八「そりや慥に」トきつとなる、閑心一卷を手早く取り懷中する、權八つか〳〵と行き、閑心が懷中へかゝる、閑心振拂ひ。閑心「こりや武士の懷中へ手を差込ん

おちつかぬ、サ何の用で」小紫「サ私が身請の事で」權八「ヤ」小紫「あひたう御座んす」ト權八急いたるこなし。權八「シテ其身請は誰が」小紫「サアそれは」ト奧より。閑心「その身請は白柄組の閑心だ」ト合力になり奧より閑心、半物半助羽織を持つて、幇間五丁つき添ひ出て来る、權八見て。權八「ムヽこなさんが聞及んだ、あの小紫へ通はつしやる」閑心「如何にも寺西閑心だ」權八「大方身請は襟につく、白柄組であらうと思つた」ト皆々庭の竹床几へかける。閑心「ヤイ若い者」五丁「へイへ〳〵」閑心「明日迄に相違なく、手附を渡す其證據に、俺が著替の其羽織」半助「金の代りにお頭が、伽羅をとめたる移り香の、よしや男の丹前羽織、明日までの當座の質物」ト羽織を渡す、五丁取つて。五丁「此樣にぷん〳〵と伽羅の薫のお羽織を、明日まで預りまして、これこの通り衣桁へ掛け」ト二重舞臺へ持行き衣桁へかけ。「併し今にもお金の早い方へ、御相談致しますぞえ、ドレ委細を皆に咄しませう」ト奧へ入る。半助「これで落付きました」閑心「どうで勤の盗をして、くつつく愚人夏の蟲、飛んで火に入るざまを見るかへ、其蟲けらのぶう〳〵と、煩くまとふ繩蟲めら」ト權八へ當て。「穢を拂ふはこの香氣」ト側にある香爐を引寄せ香をつぐ。權八「すりやあのいよ〳〵」小紫「わたしが身請は」閑心「この閑心だ」小紫「イヽエ閑心樣ぢやござんせぬ」閑心「ヤなんと」小紫「アイ、いとしい可愛い男の方へ」閑心「ムヽ此閑心

權八さんが居さつしやるなら」禿「つれまして來いせう」小紫「往て來や」禿「はやう連れまして來いせう」兩人「アイ〳〵」ト兩人向へ入る、小紫思入あつて。小紫「いかに勤の習ひとはいひながら、何事も知らぬあの彌一さんを騙して、手附の二百兩、是も何故皆權八さんの偽。とはいへ終に是まで物いひ一つした事もない權八さんへ、心に思はぬ愛想づかし、彼方を念へば此方へ氣の毒、此方を思へば彼方へ笑止、ほんに思へば郭公の、八千八聲であるワイなア」唄「華胥に夢の命毛も、ありたけ縁の濃迄と、ならぬ契の生傳里てと夜めには語とさめ乘ねて。ト此文句にて向より禿二人跡先にて、白井權八著流し大小裏附雪踏にて文を見い〳〵引ぱられ出て來て花道にとまる、この内小紫いろ〳〵科あつて手酌にて酒をつぎ飲んで見て、又煙草盆を引寄せ、莨を呑んでゐる。權八「紫の色によるべの井筒の井の字、夕々の通ひ路を、待乘ねての文での迎ひ、長兵衞殿の思はくで、殿とは廓の花の雨、濡るゝも知らぬ此身にも、色は思案の外ぢやなア」禿甲「サア權八さん」禿乙「早うござんせいな」權八「ハテ行くといふに」唄「ぬれて寐よとの郭公、しばらく空にぞ出でにけり。ト是にて本舞臺へ來り。禿甲「おいらん、權八さんが」權八「小紫、そこにか」小紫「權八さん、お前あの」ト權八の顔を見て。「よう御座んしたなア」權八「そして文で逢ひたいと、呼びに遣した其用は」小紫「サア其用は」權八「樣子を聞かねば氣が

れ、今も見せた二百兩、手附に此方へ遣る程に、親方と相談して、私が妻さんになつて下され頼みます」小紫「取るも憂し取らぬもつらし、と弓に譬ふ古歌の心」彌二「二挺の弓は引かぬといふのか、そりやどう有つても得心は御座らぬか」ト小紫默つてじつとなる、彌一思入あつてずつと行かうとする、小紫とめて。小紫「こりや何處へ行かしやんす」彌二「知れた事、儕がこれ迄いうても、得心なき故思ひきつて」小紫「それでは身請の事も、其二百兩の手附とやらも」彌二「得心なければせう事が御座らぬ、わしや悲しうてならぬもの」小紫「サアそれ程迄に」彌二「すりや聞入れて下されるか」小紫「そしてマア手附の二百兩はえ」彌二「爰に大事に持つてゐるが、小紫殿、身請の上は抱かれて寐ようといふ約束」小紫「アレまだ疑深い」彌二「間夫と名に立つ權八と」小紫「緣を斷りかへ」彌二「手切を見せた其上では、手附所か直に身請」小紫「エヽ」ト思入、又彌一がたく〳〵と震ふ。「ほんに私への寒氣凌ぎ」ト襠を脱いで彌一へ著せる。彌二「こりや忝なう御座る、そんなら二階で、あの心中の樣子をば」トいひ〳〵二階際へ行き思入あつて。「小紫殿、田舍者ぢやと思うて、必ず欺して下さるなや」ト誂への獨吟のめりやすになり、彌一二階へ上る。唄「紫の水にあうたる杜若、開くや花の五丁町、露とこぼるゝ此淚。トこの內小紫思入あつて、文を書く事有つて手を叩く、奥より禿二人出て來る。小紫「これ京町か江戸町に、

みどり「そんなら奥へゐて居ますぞえ」我笑「テモあやかり者奴が」ト唄になり、我笑、みどり、五丁ついて入へ入る、彌一思入あつて。彌二「これ小紫殿、様子を聞いた其上で、私に眞實惚れたのでは御座らぬか、此度の江戸出は先月の十九日、此方の顔を見るより、忽ちぞつと戀風が身に染み、夜半の廿日月戀の一言、路も生得の、亥中の月のおぼろにも、此方の顔がちら〳〵と、見ゆると思ふ戀風に、此身も震ふ初夜の鐘、四つ五つが相圖の時、一夜の契あるならば、思出に死ぬとても、何の厭はう小紫殿、お情を賣つて下されい、これ拜むワイの〳〵」小紫「夏の夜はまだ宵ながら其寒氣、身を震はしての戀病は、よく〳〵の事で御座んせう、それ程迄に在所氣質に思うて下さんす實ゆゑに、私もお前に惚れたれど、抱かれて寐られぬ其譯は」ト邉りを見て。「アノ馬盥」彌二「ナニ寐られぬ譯は馬盥とは」ト合方。「是がどうしませう」小紫「わたしが深う言交はした男といふは杜若」彌二「スリヤ間夫の男は業平風」小紫「花の白いは苗字の白井、間夫の變名は杜若とは比翼の契り權八様、主の姿繪この様に」ト懐より守に入れたる權八が繪姿を出して。「主の似顔を肌身放さず此様に」彌二「すりやどう有つても此彌一には」ト思入。「情が賣れぬとか」ト錦繪を戻す、とつて。小紫「アイ」彌二「まことや傾城傾國とて」と言はうとして。「なる程杜若の言譯、聞入れぬではなけれども、又わしが言ふ事もちつとは聞分けて下さ

ろ、ト咲まぜの杜若を活けよき所へ直す、禿水を入れろ、小紫こなしあつて。

小紫「昔女兄弟住めり、杜若それは三河路、八つ橋に知せもの、水の流れの身盛りなきは、まア眞に果敢ないものぢやなア」ト合方になり、奥より禿みどり彌一を伴れ、我笑ついて出て來り。我笑「おいらん、先刻お前に話したは、主でござります」みどり「ほんに情のあるお客さん、近附になつて下さんせ」我笑「ソレ挨拶を」彌二「オットト承助之助〳〵」トいひ小紫に顔見合はせて、氣の毒さうに俯く。小紫「彌一さんとやら、何かの樣子は聞きました、あんまりお前の深切に、惚れて〳〵惚れたワイなア」彌二「ヤア、」ト悔り。「そりや眞實に」ト小紫を見て。「小紫殿、忝い〳〵」我笑「こいつは飛んだ事になつたワエ」彌二「宗匠樣の働、忝う御座る。小紫殿、早く寐て下されい」ト小紫の手を取つて立たうとする、五ツ時の鐘なる。「今うつ鐘は」五丁「あれは觀音の五ツ時で御座りませう」彌二「エ、」みどり「五時を聞いて、なぜ驚かしやんす」彌二「今打つ鐘は初夜の鐘、諸行無常を告げるといへば、何やらものゝ」トいひ〳〵寒氣立ちたる科にて身を震ひ。小紫「申し痛うお前は震はんすが、寒氣でもするのかえ」彌二「こりや病氣では御座らぬ」みどり「でも其樣に震はんすもの」彌二「こりや小紫殿を戀風ぢや」小紫「エ、」彌二「これ皆の衆、ちと折入つて話したい事があるワ、暫くこゝを」五丁「なる程、こりや心づきませなんだ」

あると、味な心になる奴さ」ト仕方にてする、彌一思入あつて。彌二「さうで有らう〳〵」我笑「そこで襠をひらりとして、店へ腰をかけ、おかさん此間はとだつた一口、つんとして其目許口許の可愛らしいおいらんと一つ寐するとは」ト彌一の顔を見て。「この樣に上州太織の形では惡い、下著は本八丈、嶋ちり小紋ちり、いづれもごり〳〵物の意氣な奴、花魁買の事なれば、羽織は二重の黑仕立、帶は博多銀煙管、越革の莨入、沼田でなしに本薩摩の、國府ですつとやに下り」ト一つ〳〵仕方して。「それから揚屋入、大騷ぎの上座敷は引いて、三つ蒲團の中で大ぎまり」彌二「そこでどうするのぢやな」我笑「そこはいふに云はれぬ命とり」彌二「なる程合點承知の助承知の助」我笑「時に暫く寐しづまると、憎や鷄鐘きぬ〴〵の別れ」みどり「そんなら私が、花魁へ一寸知らして」彌二「小紫殿にあはれる事ならば、たとへ此身は」ト思入あつてじつとなる。我笑「それさへ委細合點で」彌二「ハテ教はつて承知の助〳〵」皆々「ハヽヽ」我笑「サア御座りませ」ト唄になり皆々奧へ入る、チヨン〳〵にて道具返し。

本舞臺正面二間の二重、丸太柱、大和葺の庇、本緣、石の手水鉢、鉢前下草、四つ目垣、下の方へ反橋をかけ、二階へ通ふ九尺の二階、障子開閉、建仁寺垣の蹴込、すべて奧座敷の正面、床違棚、爰に風呂を飾り、小紫側に馬盥に杜若を活けてゐる、禿二人附添ひゐる、靜かなる唄にて道具とま

仲居「さやうさ」ト笑ふ。彌二「こなたは沼田莨、男衆には斜々子の帯地」ト銘々ならべる。仲居「わたしや莨は嫌ちや、男帯でもよい、半襟にするから五丁さん取替へてよ」五丁「イエ〳〵それは私が指名、したが上州斜々子とはちとあやまる」ト言はうとする。彌二「どうぞしましたか」五丁「あんまりお心がつかれて」皆々「嬉しいなア」彌二「扨宗匠様は派手に誂織の上州八丈」ト反物を出す、我笑取つて。我笑「是は本八と思の外、上八とは白米屋の手代でチトにたいでは御座らぬか」彌二「イヤ二分は致さぬ、それで廿三四匁の八丈で御座る」我笑「チト水邊には去嫌が御座りまするな」ト不承〴〵に八丈を取る。彌二「時にお女郎買の御指南はな」我笑「まづ其長髪も剃つて、くこ梳のちよい束ね、仲の町の井筒屋へずつと上ると、内から女郎や若い者が」五丁「申し旦那、ようお出なされました」みどり「それお客ぢや、お莨盆。藝者仲居「アイ〳〵アイ」ト皆々立つて仕方する。我笑「あの樣に大層に囃し上げるが、どうだえ〳〵」ト彌二悅び。彌二「それははや面白い事で御座らう」みどり「それからは、其所へ藝者を聞きにやると、三味線箱をズイと持せて」仲居「かう私等が藝者衆がお店へ參つて、よくお出なさんした、嬉しいなア」我笑「あの通りお定りの挨拶があつて、調子を合せて彈くと、それから」みどり「外に又男の藝者衆が、二組も三組も來て大騷ぎ」五丁「約束の見立迎ひで初會から、花魁が仲の町へ八文字で影向

あの小紫殿をお世話にて、買うて下され、これ頼みます」ト手を突いて頼む、我笑横手を拍つて。我笑「したり。戀病に卷紙ほそる秋の暮。とあるは今ぞ發明致した、したが女郎買は兎角金次第」彌二「サ其金次第は合點なれど、一向不案内の事故、此方の御指南を受けられますまいか」我笑「それは隨分世の中の滑稽を渡世に致す俳諧の業で御座れば、承知の助〳〵」彌二「その承知の助と申す人も、傾城買に要る人で御座るかな」我笑「イヤ是は廓の洒落で、合點だといふ事を承知の助と申す、とかく傍の人も承知でなければならぬ、茶屋揚屋の若い者、女共へ心附か肝心〳〵」彌二「その心附も隨分合點」我笑「それそこが承知の助〳〵」彌二「心づけ承知の助承知の助」ト何か考へる科、我笑奥へ向ひ。我笑「サァお客だよ〳〵」女皆々「アイ〳〵」ト禿みどり、仲居お由、藝者かん、幇間五丁出て來り。五丁「宗匠さん、お客とは〳〵」我笑「それお客は主だ」みどり「あの人は先刻に閑心さんが」お由「邪魔にさんした田舍の衆」かん「あれがお客かえ」五丁「もし難かしさうだぞえ」ト金の仕方する。我笑「これ愚老が承知之助〳〵」トこなし、皆皆呑込ませる、この中彌一風呂敷包より反物貢入いろ〳〵出して。彌二「儕はこの宗匠さんのお世話で、小紫殿を買ふ者、固より上州者で御座れば、持合せたる此反物が、上州織の出來のよい太織一反」トみどりの前へ持行く。みどり「この太織はお由さん、寐間著物でござんすなァ」

包を卸す。我笑「俳諧師を見かけてお願とは、賀の御句か、但し入句の御相談か、神祇か釋教か戀のお句かな」彌二「なる程御推量の通り、其戀故に御覽じませ、浪々に月代さへも剃らぬ戀煩でござる」我笑「エヽ」ト吃驚する、合方、彌一手拭取り長髪の鬘。「ハテ何處も同じ戀の世界、シテ先の女は娘か後家か、月圍ひの藝者か、傾城ならば何も戀煩にもなるまいに」彌二「サア其傾城も傾城、三浦屋の小紫といふ美しいお女郎」我笑「そんならあの花魁に」彌二「恥かしい事ながら惚れました」我笑「それを何も戀病にする事があるものか、金さへ出せば三蒲團の上で、抱いて寐られる事だワな」彌二「されば何時しかふつと此正月、吉原のお女郎の禮を見物、仲の町を道中と聞いたに依つて、どう鞋がけで歩く事かと思うたら、楊貴妃とやらの樣子、美しい顏で錦襴とやら繡やらの著物で歩く姿、中にも紫の衣裳を著はつたお女郎、見るから直に惚れたとこそいへ〳〵、あの女郎の名は何といふと聞けば、三浦屋の小紫と、耳へ入るより恍惚と、跡を慕うてあちこちとする間に、其夜もはや引四つ、又來る月も吉原へ密と來てから、どうぞあのお女郎を買うて見たいと商ひの、細い利分を少しづつ、段々と溜めた金、先刻にも見せた二百兩」ト財布を出し金を見せて。「あゝ何卒小紫殿を買ひたいと、思ひ思うて來て見ても、何にも知らぬ田舍者、サテうか〳〵と身は空蟬の絹賣風情、見れば此方は廓の案内詳しい樣子、

近付ならうか、こんなものかえ」四人「何を野郎め」重三「その息の根が止まつたら」閑心「なんと」重三「引取る旦那の寺西殿」閑心「膳を据ゑるは奥の間で」重三「箸を取るぞよ」閑心「ゆるりと馳走に」重三「預りませう閑心殿」閑心「極樂重三」。「うぬ」ト一人かゝるを投げて。重三「さらばでごんす」ト唄になり重三奥へ入る。四人「モウお頭、どぶさつしやりませ」閑心「これから身共が一思案、是非とも小紫が身請の一埒」半助「さうさへなればお頭の」四人「いよ〳〵奥樣、御新造樣」閑心「エヽおだてるな〳〵」四人「それでも嘘ぢやなし」閑心「さうせう爲の通ふ神、身請の門に錺乗物」四人「その御祝儀にめでた酒」閑心「奥でわつさり」四人「そんならお頭」閑心「サア來やれ」ト淸搔になり、閑心先に四人奥へはいる、引違うて我笑すこし醉ひたる科にて出て來り。

我笑「土手助が腰骨を洗うてやると、燒酎をがぶりとやつたら、豪氣に醉うた。燒酎で虎が泪や千鳥足、アよく叶うた句だ」トよろ〳〵して行かうとする、この内橋懸より彌二出て來て。

彌二「申し〳〵」我笑「エ此方人の事かえ」彌二「イエ〳〵」トかぶり振つて知らぬふりでゐる。

我笑「玉句があらばお附けなさい、執筆いかゞで御座るな」ト又行かうとする。彌二「イヤ〳〵申し」トいひ兼ねて、どうせうかと思入。我笑「ハテきつい繩張な」彌二「ヤ俳諧師とやら樣」

我笑「お句があるかな」彌二「アイ申兼ねましたが、此方を見かけお願ひが御座ります」ト風呂敷

や」禿「アイ〳〵」ト清搔になり、小紫先に禿ついて奥へ入る。敵役皆々「あきれたものだ」此糸「張と意氣地の吉原に、今全盛の小紫さん」みどり「氣隨も曲廓の道具かいな」閑心「小紫が我儘も、遉は江戸の水育」重三「江戸者のはえぬきに」閑心「この閑心が近附の觴くれう」重三「あの儕にかえ」ト閑心盃取上ぐる、閑心重三へ盃を打つける、盃微塵に破れ重三思入。重三「こりや近附の盃を」女形皆々「あの樣に破らしやんしたは」閑心「閑心が盃取上げて一つ飲め」敵四人「よもやそれでは飲まれまい」重三「横に車牽れぬ此場の難題の盃、受けぬも重三が恥辱」四人「飲まねば濟さぬ白柄組」重三「とは云へ碎けし」四人「盃受けぬか」重三「サアそれは」四人「サア〳〵サア」ト重三きつと思入、空を見て。重三「ムウ」ト肥前節になる。「水の面に照る月波を數ふれば。庭の面今照る月を。ト鉢肴を取つて。「此鉢へ一つ注いで下され」みどり「アイ」ト銚子を取つて酒注ぐ、重三一口飲んで閑心に廻す。重三「微塵にわつた盃の返盃」閑心「碎いて捨てし盃の、其難題の鉢肴を、極樂重三が返盃とは」重三「受けたる酒に映つる月、所も直さず此盃、心の返盃閑心殿、一つ受けずばなるまいが」閑心「酒に映りし空の月、璧の盃納めてくれい」重三「そんなら肴に一寸」と閑心へ斬懸ける、立廻りにて懐より一巻隕す、重三見て。「この一巻は」四人「うぬお頭に慮外をなして」ト四人かゝる、立廻り重三しやんとめる。重三「こなさん達に

彌二「ハテお江戸の子供は魂消し」ト彌一入る。土手助「うぬ野郎め」ト又かゝる。閑心「こりや土手助、捨てゝ措け」土手助「デモ腦天が痛くつて」我笑「かうもあらうか。夘月時てんぺん痛む郭公」みどり「なる程俳人さんぢやなァ」我笑「ドレ醫者樣がはりに介抱してやらうか」ト合方になり、我笑土手助を伴れて奥へ入る、時々空に月出て郭公鳴く。閑心「一聲は月が啼いたか郭公。あれを下物にどれひとつ」五丁「それが宜しう御座りませう」女形皆々「サァ閑心樣、一つ呑ましやんせいな」ト閑心盃を取上げる、禿みどり酌する。閑心「何と小紫、今啼いた鳥は郭公、初音を何と面白いか」小紫「アイ珍らしい郭公ぢやから、聞事でござんすワイな」閑心「其郭公も初音の時はよけれども、西も東も耳やかましく聞えては物がない、初めは啼音も賞美すれど、八千八聲啼つくし、血を吐く思ひもしらすたゝけ、されば俳句に、啼つゞけに啼け郭公〳〵、人間も丁度其通り、血を吐く思ひのない中に、覺悟が大事」ト小紫思入あつて。小紫「加茂川に放して見たき都鳥、あゝまゝにならぬものぢや、なァ閑心さん、私をあてつけて鳥や魚の譬、身請身請を口癖にいはしやんしても、たとへ郭公でも鰹でも、まさかの時は死ぬる覺期、命を捨つるとさへ思うてるれば、別に驚く事は御座んせぬ」閑心「なんと」小紫「死骸を身請する氣なら、アイお心まかせ」閑心「ヤ」小紫「啼きつゞけに啼け郭公〳〵」閑心「エヽ汝はなァ」小紫「子供來

寸金財布を取出して。「あの様に怖い男の權柄では、心のたけの小紫殿、モウお女郎買はよしませうワイの」 ト行かうとする、小紫思入あつて。小紫「ハテよう御座んす、情を商ふ流れの身なれば、心意氣で賣る事もござんせう、怖い事はない程に、マア煙草でも呑ましやんせいな」 ト煙草を吸付けて出す、禿煙管を取つて。禿「おいらんので御座んすよ」 ト煙管を差出す、彌一取つて。彌一「これは忝ない」 我笑「ハテ花魁の意氣地といふものは又格別。傾城の親見よがしの鴛鴦の閨、とは蕉門の骨隨ぢやなア。しかし旦那、どうやらあれでは」 閑心「ハテ小紫が忌といはうが、根引にすれば閨の花、そこが白柄組の達前だワ」 重三「イヤ白柄組の閑心殿とやら、外に人も無い様に言はつしやるが、爰にも一人達衆の端くれ、お江戸はえぬき日本橋、土一升に錦升が、子分となつた極樂重三、面を見知つて貰ひませう」 土手助「此奴は大分大束附木と出たが、お旦那に逢うてきつきと吼えるなよ、ドレ近附に土手助が、にぎり拳をやるべいか」 トつかつかと來て重三を捉へる。重三「この二合半め」 ト取つて投げる。土手助「アイタヽヽ、痛いぞ痛いぞ」 閑心「うぬ身共が家來を」 重三「投げても大事ない。相手は子供だ、又二本差であらうが、喧嘩といつちやア五分でも退かない、これが江戸の俠伊達」 土手助「シテまた小僧は」 長松「お父さんは花川戸の幡隨長兵衛、橋場今戸の瓦煙、ちつとけむたい男でごんす」 ト彌一肝を潰し。

りまするな」かん「マア〳〵爰へ」八内「若い者共」四人「ござりませ」ト淸搔になり、皆々本舞臺へ來て床几にかゝる、絹賣彌一はずつと下の方にゐる。閑心「誠や長生殿の内に不老門たる此廓、今宵も降らるゝ花の雨、乾す方もなき袂と思へば若い者ども、一つ飲まうではあるまいか」半助「コリヤお頭のいふ通り、酒と討死と」四人「出かけませうかえ」我笑「酒と討死なら、我等先驅して高名手柄が致したい、時に花魁のお顏が見えぬが」此糸「ほんに花魁、小紫さん」女形皆々「閑心さんが御座んしたぞえ」ト奥にて。小紫「せはしない今行くワイな」ト合方になり、暖簾口より小紫傾城の形、禿二人莨盆長煙管持ち附添ひ出て、眞中の床几にかゝる。此糸「閑心さん、花魁が御座んしたぞえ」五丁「座敷がぐつと浮いて來たてな」小紫「申し閑心さん、あれ程私が譯いふに。情も氣根に通はしやんすなァ」此糸「そんなら私がどの樣に賴んでも」小紫「否といふより外に返事はないワイな」閑心「あはれ蚊が耳の端でぶん〳〵と喧ましい、蚊遣に伽羅でも焚きやれな」六助「アイ」彌二「なる程偉い、小紫さん、貴方にお目にかゝりたさに」トそこへ出る。半助「ヤイ〳〵鄕在め」彌二「わしが事かへ」仁右衛「そこへ出ろ」ト大きな聲にていふ。彌二「へイイ」ト吃驚して坐る。半助「お頭の御執心の小紫殿に、指でもさすと閑心さまの罸があたるぞ」彌二「ハテお女郎は賣物、買生得上州の絹賣彌一といふ者、金にかけたら此通りなれど」ト一

がけ、土手助仲間にて草履を持ち、石塔六助、骸骨仁藏、湯灌場仁右衛門、早物半助、著流し白柄の一本差、誂への丹前仕立の羽織を肩にかけ、香盒香爐など銘々持つて附添ひ出て來る、極樂重三著流し一本差、跡より絹賣彌一、著附羽織雪踏にて風呂敷を脊負ひ出で來り、皆々花道にとまる。

重三「一双の玉手千人の枕、半懸の朱きん萬客裳と、此不夜城の三千櫻切は其の頃の發句にも、闇の夜は吉原ばかり月夜かな、とは三十日の月もあればあるもの」土手助「そこで四角な卵の君へ通ふお供にて若葉土手助」半助「俺がお頭閑心樣のお召かへ、よしや男の丹前羽織」仁藏「東木といふ名香を、焚しめさせて福香の、先もゆかしきお召物」仙藏「男を研く内看版の仁右衛門といふかすり取」六助「おらア何にも白柄組、名も白柄の六助といふめでたい男」此糸「傾城の賢な柳のいとしらしい、男の肌もまだ知らぬ」みどり「禿は綠一葉より」たより「花は紅色見草」我笑「その大盡のお髭の塵、とつて千句の秀逸は、大佛の髭のあたりか若葉かな」重三「見かけは悋な野郎でも、肝の大きな山の宿、出入が來れば待乳山、山谷の船に積込んで、橋場はしたの喧嘩でも、咲せて見せる花川戸」土手助「この野郎め、癡言ぬかすと擲き碎くぞ」此糸「ハテ奴さん、よいワイな」五丁「是はお早い閑心樣、大門から連立つて、揚屋入の此糸さん」みどり「聞えたワイな、此糸さんの取持で、お咄がはつて」たより「それで皆さん打連れて」お虫「一緒にお入りで御座

一骸骨仁藏　百藏　一幇間五丁　岩右衛門
一長兵衛悴長松　駒藏

本舞臺三間の間二重舞臺、向ふ襖一文字庇附軒暖簾、下の方揚縁、青簾垂、井筒屋といふ掛行燈、すべて仲の町七軒茶屋の體、爰に幇間五丁、仲居お由兩人枕拍子取つてゐる、藝者かん、禿たより、同くみどり三味線彈いてゐる、此唄にて幕明く。

ト橋懸向より女郎買の仕出大勢來り行違ふ、此人數捨白にて左右へ分れて入る、舞臺の拍子よろしく有つて五丁枕を取落す。禿、藝者「ツヽイ五丁さんが負け〱」お由「サア一つ飲みなさんせ」五丁「今のは俺が眞の負けだと思ふか」四人「知れた事いなア」五丁「今の負は噓負、有様は一つ飲みたいから、態と負けてやつたのだ」たより「皆さん、あの負をしみを聞きなさんせ」お由「憎い事いうてぢやなア」みどり「そんなら酒は飲まさぬぞえ」五丁「酒を飲ませねば此枕をかうやつて」四人「どうするのぢやえ」五丁「閑心樣のお出まで一寐入やるのさ」ト寐る眞似する。四人「そりやならぬワイな」五丁「あやまつた〱」ト向を見て。「あれ〱向へ閑心樣」みどり「此糸さんも連立つて」四人「オヽイ〱」ト津島の樣な鳴物になり、向より若い者大箱提灯を持ち、跡より太夫衆、振袖新造にて出る、禿二人附添ひ、跡より寺西閑心、五十日羽織衣裝、白柄の大小、下駄

提灯の火にて焼棄てパッと燃え上る、權八これにてほつと思入。長兵衛「これで何にも白井氏」權八「アヽ武士も及ばぬ」ト燃えたる狀の火影に、後へ雲助が影映る、權八きつと見つけ手早く手裏劍を打つ、雲助飛んで下り。三「權八か」ト言はうとするを、權八一刀に斬る、長兵衛見て。長兵衛「そいつも正しく」權八「彼奴等が同類」ト長兵衛提灯を差出し傷口を見て。長兵衛「あつぱれ手の裡」權八「長兵衛殿」長兵衛「權八殿」權八「ゆるりと江戸で」ト血刀を拭ひしやんと納める、ト木の頭。兩人「會ひませう」ト宜しく。

拍子幕

三幕目　新吉原の場　大音寺堤の場

役人替名

一寺西閑心	重太郎
一絹賣彌一	文七
一極樂重三	新藏
一俳諧師我笑	國五郎
一土手助	冠平
一早物半助	紀次
一湯灌場仁右衛門	仙藏
一石塔六助	甚藏
一若黨八内	重太郎
一禿みどり	稲三郎
一禿たより	要
一仲居お由	小雛
一藝者春	禎三郎
一藝者かん	瀧次郎
一傾城小紫	小六
一白井權八	半四郎

に故人になり、わしや二代目の長兵衛、誠に面影ばかりさ、親に似ぬ子の無口生眞面目、洒落といつて一口もない只の氣ほひの、したがいづれも樣のお取立、今度で十度三度目は、親父の致すと間に合の、砂利か鉛か銀流し、見かけは吝な野郎だが、水道の水を飲んだお蔭にや氣が強い、弱い者なら腰を推し、強い奴なら向面、韋駄天が革羽織で、鬼鹿毛に乘つて來ようが、びくともするのぢやごんせぬ、及ばずながら達者の端くれ、阿波座烏は難波潟、藪鶯は京育ち、吉原雀を羽がひにつけて、江戸の男と立てられて、男の中の男一匹、何時でも尋ねてござりまし、陰膳すゑて待つて居ります」權八「御深切の其お詞、然らばお世話なされて、アノ武家方へ」長兵衛「口入致すが俺が商賣、この長兵衛が手先で何なりと」權八「萬事よろしう長兵衛殿」長兵衛「頼まれました權八殿、爰から直に同道して」權八「何から何までお禮は詞に」長兵衛「何さ、そこが江戸子だはな、恩には被せませぬ、サア御座りまし」ト提灯持つて行きかゝり、最前の手紙を拾ひ上げる、雲助の三、樹の上に窺ひ居る。「何だか手紙が落ちてある」ト取上げ思入有つて提灯をたゞみ、其處へおき披き見て。「ナニ〳〵仔細はしかと相分り申さず候へども、老臣本荘助太夫を闇討に討つたるは、因州の武士白井兵左衛門が忰とばかり、實正未だ定かならず」ト權八聞き居て思入、長兵衛ふり返り顏見合せて。權八「アヽ」ト思入、長兵衛持つたる狀を

りまするが、御生國は何れにて何御用にて江戸表へ」權八「サ別して用事はござらねど、繼しき母の讒により、心に思はぬ不孝の汚名、古郷は則ち因州生れ、父の勘氣に力なく、お江戸は繁華と承り、武家奉公を致さんと、仕官の望みに慣はぬ旅、見ますれば其許は江戸表のお方と見え、御深切の其お尋ね、しるべ便りも御座らぬ拙者、お詞に甘へお頼み申す、何卒お世話下さらば忝なう存じまする」ト手を支いて思入。長兵衛「なる程御身分の一通り承つて御尤、殊に唯今の御手練拜見致す上からは、お世話致すまいものでも御座りませぬ。宿無共とはいふものゝ、四人五人の此死骸、こなた樣の難儀にならば、どこ迄も俺がいひ開きして進ぜませう、往來へ見苦しい、犬の餌食に」ト死骸を一々片づけ。「口外は致しませぬ、お若衆樣、お氣遣なされますな」權八「流石は江戸氣の其お詞、つまづく石も緣の端、力と賴む其許の御家名聞かぬ其中に、名告る拙者が姓名は、因州の産にして當時浪人の白井權八と申す者」ト此時木の上にて雲介の三思入。長兵衛「スリヤお若衆は權八殿とな」權八「シテ其許の御家名は」長兵衛「へイ聞かれて何の何某と、名告る樣な町人でも御座りませぬ、したが生れは東路で、身は住馴れた隅田川、流れ渡りの氣散じは、江戸で噂の花川戸、幡隨長兵衛といふ、けちな野郎でござります」權八「エエあの其許樣が、中國まで聞えたる江戸に名高き幡隨の」長兵衛「其長兵衛は私が親父、八ヶ年先

て來る、舞臺へ來りこれを見て。かご舁「ヤア人殺し〳〵」ト駕籠を下の方へ捨置き迯げて入る、權八銘々にとゞめを刺し、鞘を尋ね、燈火のあるを見つけ、つか〳〵と行き白刃を見る、時の鐘になり垂を上げる、幡隨長兵衞半合羽一本差、脚絆ふじくらにて、駕籠の中より樣子を窺ふ、これにて權八白刃を隱し行かうとする。長兵衞「お若えの、待つしやりませ」トこれにて權八思入あり。權八「旅のお方か存ぜぬが、待てと仰せらるゝは手前が事で御座るかな」長兵衞「いかにも左樣、鎌倉方のお屋敷へ、多く出入の儕が商賣、それをかこつけ有樣は、遊山半分江の島の、開帳かけて思はぬ隙取り、どうで泊りは品川と、川端からの戻駕籠、通りかゝつた鈴ヶ森、若いお方のお手の裡、餘り見事と感心致し、思はず見とれて居りました」ト顏見合せて思入。權八「拳も拙き生兵法、お恥しう存じまする」長兵衞「無躾ながら見ますればまだ角髮のお侍、一人旅でござりまするかな」權八「御覽の通り某は勝手存ぜぬ東路へ、中國筋より遙々と、暮に及びし磯際にて、獨旅とか侮つて無禮過言な雲助ども、彼奴等は正しく追おとし、命を取るも殺生と存じたなれど、増長り止む事を得ず、不敵者刀の穢と思へども、往來の人の爲にもと斯る仕合せ、雉子も啼ずば撃たれまいもの、益ない事を致してござる」長兵衞「ハテ大丈夫、斬られた奴等は五六人、貴方樣には只お一人、若年のお手際には憚りながら驚き入りました、シテ中國と仰しや

りませう、マア緩りと煙草でも喫んでござりませ」權八「イヤ〳〵短夜の事、殊に當地不案内の某、急がずばなりますまい、忝なうござつた」と行かうとする。八「申し御若いの、一服のんで御座りませな」權八「イヤ〳〵拙者は煙草は所望でござらぬ」と又行かうとする。八「これさ旅人、貴樣は道を聞いて禮なしに通るのか、其上煙草は所望でない、ナニ又煙草が祭に出やアしまいし、こりや何か雲助だに依つて此火で呑むは汚いのか、嫌ひでも好でも呑まさにやァならないぞ」權八「これは無理を申す男ではないか、こなたが雲助ぢややら何者ぢややら、何の身共が存じて居らう、道を急ぐ故急ぐと申したが何と致した」八「申し〳〵お侍さん、其急がつしやる道は私が敎へて進ぜたよ、それに何だ、忝ないと許りいつて禮だと思ふのか」權八「イヤ身共當所の勝手は知らぬが、此道筋で道を敎へて禮金を取るか」ト此時皆々權八が紋を見て。皆々「四も五もない、紋は丸に非の字だぞ〳〵」トわや〳〵いふ。權八「まて〳〵〳〵、身が紋所が丸に非の字ならば何と致す」皆々「酒手を貰ふさ」權八「そりや又何で」八「たゝんで終ふ」皆々「合點だ」ト禪の勤になり、皆々縫ぐるみの息杖にて打つて蒐る、權八大勢を相手に立廻つて追込み、花道中程へ行きほつと思入、時の鐘凄き合方、これにて月隱れる、これより暗黑の立よろしく、大勢を斬伏せ終刀を刺す、此時向より小田原提灯をともしたる四手駕籠一挺、垂を下し出

錢お願ひ申します」權八「なる程、極の駄賃は六鄕とやらから觀音前といふ所迄五百文の約束、ぢやが夜中といひ是を取つておきやれ」ト二朱包んで出す、辰取つて。辰「旦那、こりや二朱かえ」吉「たつた二朱か棒組」辰「申し旦那さん、たつた二朱や三朱お貰ひ申しませうとて、夜夜中齷齪は致しませぬ、どうぞ今ちつと」吉「酒手を貰へ〳〵」辰「うつちやつておけ、旦那は御如才はないワエ」權八「シテ何程取らうと申すのぢや」辰「私共の駕籠へお乘りなされたからは、お持合せは有ッたけ」權八「何と」兩人「きり〳〵置いて行きやれな」權八「扨は案内知らぬ一人旅と侮り、こりや物取だな」辰「オヽ剽盜だ」吉「そのわんぱうから」と兩人權八を手籠にする、立廻り、此時切られの八起きて中へ割つて入りとめる、大勢も起立ちわや〳〵いふ。八「これ聒しい待て待て」兩人「止めるは誰だ〳〵」八「ハテ俺だ、待てというたら待て〳〵」ト皆々をしづめ。「これはお若衆樣、唯今承つて居りましたが、惡い奴等でござります、嘸お腹が立ちませうが、癇に棒打とやら、マア〳〵御了簡なされませ」權八「これは誰人か存ぜぬが忝なうござる、餘りなる法外故止む事を得ず」八「御尤でござります、二人の奴等は私がどうでも致しまする、必ずお氣遣なされまするな、シテ貴方はどれへお越しなさるのでございますな」權八「なる程、そこ許は所の人か存ぜぬが、これより江戸表へはいか程ござるな」八「エヽ江戸へは僅か二三里もござ

うした」づぶ六「オヽ大坂か、切られも居るな、これ鶴見から跟けて來て、やう〳〵川端で引攫つて來た、何でもしつかりだ〳〵」三「この財布にも二三貫はあると見ておいた」ト財布より錢を大分出す、づぶ六柳行李を明けて見て。づぶ六「小袖が有らア、羽織も入れてあるワ」八「そいつが一ちよい仕事の中だ」新米「イヤ小袖で思出した、今川端で辰や吉がこぢついて居た、彼奴は俺が知つてゐる權八といふ因州浪人、どうして來たか、丸に井の字の小袖を被た若衆、彼奴はしつかりだぞ」三「ムウあれか。ありや俺も頑張つておいたが、あの牛若は實があるぜ」四「高が若衆ならしれたものだ、どんな事をするものだ」づぶ六「金にさへなりや命がけに働くは、味い〳〵」新米「慾氣のない野郎だ、アヽ併し辰や吉が駕籠の仕度、來れば可いが」八「乘らねえまでも爰へ來るは當然だ、例の樣に」ト菰を投げやる。皆々「果報を待たうか」八「ドリヤ仕事にかゝるべい」ト皆々菰を被り寐ころぶ、時の鐘波の音、馬士唄にて向より雲助の辰、吉、四手駕をかつぎ出て來る、駕籠の裡に權八著流し大小にて乘つて居る、舞臺へ來て。辰「サアもしお約束の所まで參りやした」吉「もし早う參りやしたな」權八「然らばこれが觀音前と申す所か」辰「左樣さ、爰が觀音前と申す所でござりやす」權八「やれ〳〵大儀で有つた、殊に夜中といひ勝手不案内な此道筋、あたりは濱邊ぢやな」吉「へイずつと海續きで御座りやす」辰「どうぞお約束の駄賃

さい」飛脚「そんなら道連になつた拔參も」大坂「おかげで爰まで引摺つて來たのよ」飛脚「エヽ」ト恐れ顫ふ。八「サア〳〵脫いで終へ〳〵」飛脚「ナニ脫いで行け、身の程知らぬ雲助ども、こりや此兩腰が目にかゝらぬか、卒爾致すと命がないぞ、奴討はなす奴なれども、急ぎの道故了簡致す、汝等も了簡して通して呉れい」トぶる〳〵顫へながらいふ。三人「聒ましい、ふん剝げふん剝げ」ト三人寄つて丸裸にする。飛脚「アヽこれ〳〵何卒其頭陀袋は許して下さい、拜む拜む」八「やかましう言うと海へぶちこむぞ」飛脚「アヽもう可うござる〳〵、大事な物ぢやが命にかへる寶はない、アヽ裸で道中せざアなるまい」ト波の音になり、大小を引さらへ迯げて下座へ入る。新米「大べら棒め、併し彼奴が大事だと言つた此頭陀の内には、何ぞ有るだらう」八「あけて見ろ〳〵」ト新米見て。新米「措きやアがれ、たつた一分二朱よ」富「三つに割るとたつた二朱宛か」新米「取らないよりは勝だ、モウ何ぞないか」八「何か手紙がある」ト出して見て。「江戶御上屋敷役人中、御國元役人中」富「中に金はないか」ト切られ八披き。八「何々仔細は聢と相分り申さず候へども、老臣本莊助太夫を闇討に討ちたるは因州の武士、白井兵左衞門が悴とばかり。解らない事が書いて有らア」トそこへ棄つる、又波の音になり、向よりづぶ六、三、雲助にてわいがけを引さらへ、組んで出て來り大息ついて。三人「づぶ六ぢやないか、どうしたど

脚、頭陀をかけ荷を脊負て出てくる、跡より新米大坂、伊勢參りの形、雲助の富跟いて出て來り。富「申し〱ちつと許りの駄賃で持せてくんなさい、只の酒代で可うござりやす」飛脚「エヽ執い、こればかりの荷が邪魔になつて道中がなるものか、つくな〱」大坂「申しお旅人樣、さう言はずと酒手をやつて、持たせてお出なさいまし」飛脚「エヽ伊勢參まで同じ樣に、煩い奴等だ、どう有つても頼まない〱」トいひながら舞臺へ來る、大坂先へ廻つて切られ八によき鳥だと知らせる、富飛脚の荷へ手をかけ。富「これ先刻から十四五時も、口の酸うなる程言つて持ちかゝつた此荷物、サア持つて行きますべい」トひつたくる、飛脚びつくりして。飛脚「こいつが此奴が、持たずとも可いと言ふにあた執い、モウ只でも忌だい」ト行かうとする、切られ八さゝへて。八「申し旦那、さう言はずと持たせてお出なさい〱」飛脚「イヤ〱持つて貰はずともよい、身共遠州より江戸表へ急ぎのお飛脚、東海道を股にかけて世を渡る男だ、汝等がこけおどしをくふのでは無いぞ、つくな〱」富「つくな〱も凄まじい、俺等は乞食ぢやねえよ、五十三次を下り上りの荷を當に其日を暮す雲助だよ、かう言出しては否でも應でも其荷は持つて行くのだ」飛脚「ムヽ、こりや何だな、汝等は追剝だな」八「しれた事だ、晝は雲助夜は剽盜、何と精が出ようが」大坂「申し〱かういふ所へ通りかゝつたが不運だ、身ぐるみ脱いで行きな

を鞘に納め思入、足輕この中ぶる〳〵して棒を構へ打たうとする、權八この棒を取つて捨て、顏にて知らせる、足輕心得下駄を直して傘を渡す、權八きつとなる、これより本神樂になり、足輕提灯を持ち顫へながら先に立ち、權八傘をさし悠々と向へ入る。

幕

二幕目　鈴ケ森の場

役人替名

一駕籠かき　二人	一飛脚　一人
一切られ八　新平	一新米大坂　鶴十郎
一づぶ六　萬藏	一とみ　富藏
一三　紀次	一たつ　斧藏
一吉　團兵衛	一白井權八　半四郎
一幡隨長兵衛　幸四部	

本舞臺黑幕、正面題目の石塔、松の木生茂り、舞臺前波板、都て鈴ケ森の體、爰に切られの八、雲助にて焚火してゐる、時の鐘波の音にて幕あく。

八「なる程夜は短くなつたぞ、今日が暮れたと思つたがモウ五時か、併し蚊に責められるより夜の短いも勝かえ、ドリヤ一燻しやつて、可い鳥を待ちませう」と波の音になり、向より屋敷飛

樣助太夫樣」ト尋ね來り死骸へ行當り、科有つて。「ヤヽ、こりやこれ確か深傷の樣子。こりや確かお旦那、扨は今摺合ひしは」ト行かうとして落ちたる小柄に踏かけ、手早く取つて探り見て。「こりやこれ小柄」ト口にくはへ嚴と尻を褰げる、この見得時の鐘にて道具まはる。

本舞臺一面の板塀忍返し、見越の松、雨車、時の鐘にて道具とまる、ト向より足輕、幕明の形にて棒を突き箱提灯を提げ、竹のばつてう笠、安下駄を履き、時廻にて出て來り。

足輕「アヽ降つて來たな、どうか雷も鳴りさうだ、イヤとんだ日和だ」ト行きにかゝる、雷鳴る、下座より袖内仲間にて、蛇目の傘下駄を持ち出て來り。袖内「アヽこいつは時ならぬ雷だ、いやモウ雷はきつい嫌ひだ、それに就けても權八樣は何處へ御座つたやら」足輕「火の廻り」袖内「時廻の衆か、雷は聞かないの」足輕「さうさ、どうか天龍の方が豪氣に光るの」ト雷鳴る、ぱつたり音して板塀より白刃出る、兩人悔りして。袖内「そりやこそ光つた」足輕「アヽ桑原〳〵」袖内「萬歲樂〳〵」ト耳を抑へるとて傘下駄をよき所へすて、一散に向へ入る、足輕顫うてゐる、誂への鳴物になり、塀を切拔き權八すつと出る、足輕これを見て顫ひ居る。足輕「曲者」權八「ムウ」ト白刃を見せる。足輕「アヽ桑原〳〵」ト思入。權八「兄助市の榮えを思ひ、不憫ながらも助太夫殿、自が手にかけて」ト思入あり。「兄者人に討たれなば此身の本懷」ト刀

ば用なき助太夫殿。兄を庇護ひ權八が、こりやモウ一生懸命」ト思入あるそぶりにて寐刃を合はする事有つて。モウ是非に及ばぬ」トしやんと白刃を納める、唄時の鐘にて道具まはる。

本舞臺三間の間、二重舞臺、見附欄干、正面は障子閉切り、内に燈ともしある見得、すべて神職座敷の體、雨車、合方、時の鐘にて道具止まる、ト向より若黨八内、箱提灯を持ち、すた〳〵出て來りよき所にて。

八内「アヽモウ親旦那お立かしらぬ、助市殿をお見送り申して取つて返した神職樣の此お座敷、あゝこれ雨が降つて來る、早くお立になればよいが。賴まう〳〵、アヽ挨拶のないは爰はお座敷、こりや勝手口へ廻らずばなるまい」ト合方にて下座へ入る、ト障子の内にて。權八「すりや何の樣に申しましても、御承引はござりませぬか」助太夫「小癪な事を、若輩者の謂れぬ意見、聞く耳持たぬワ」權八「すりや何うござつても」助太夫「諄いは」權八「是非に及ばぬ」助太夫「おのれ權八、刃向だてば。親同然の某に」トばた〳〵と音する仕組、燈火消えて障子へ血煙立つ、障子かへると内に權八血刀を持ち立身、助太夫の死骸斬倒しあり、權八助太夫が終刀を刺し、刀を拭ふ思入、捨鐘になり下座より八内出て來り。八内「お旦那助太夫樣、是にお出なされますか〳〵」トこの聲に權八思入有つて、摺拔けて下座へはいる。「これはしたり、さて〳〵暗いは、助太夫

が荷擔の事、まだ御存知なき玄蕃樣のゑ、參つても御承知もあるまい、いづれ身共が奥方の御歸館なされた上にて、暮六つ迄に天龍へ」權八「如何さま御道理」助太夫「まだ〳〵言聞かす事樣々有れど爰は途中、また其方荷擔致しくれたで身共も安堵。誠や唐土に」權八「義を結んだは桃園にて」助太夫「爰は牡丹の身の富貴」善平「それは兄弟」助太夫「これは親子」善平「そんならそれが毒藥か」トこれにて助太夫拔討にポンと善平を斬る、權八刀へ思入、助太夫ちやつと隱して。權八「助太夫殿」助太夫「ドレ御歸館を相待たうか」ト唄になり、助太夫思入有つて下座へ入る、權八殘る。

權八「日頃より心良からぬ助太夫殿、助市殿の緣により恩を見せての誓の金打」ト思入、落ちたる狀を見て。「ムウ袋井刑部殿へ、本荘助太夫、この刑部といふは若殿のお附、すりや鎌倉にて」ト封を切つて。「ナニ〳〵かねて約束の通り若殿へ毒藥の儀、首尾よく御計らひなさるべく候、則ち毒藥の儀は、萬事御取持下され候御使者久下玄蕃樣を相賴み御屆申し候、宜しく御計らひ賴入り候以上」ト吃驚して。「扨はいよ〳〵若殿を毒殺なさん隱謀の企、オヽホイ。彼の毒藥もしも露顯の其時は、助太夫殿は自業自得、其邪は情なや助市殿まで思はぬ難儀の事、品多き其中にも君を毒殺。この事兄者人へも申聞けん、打捨措いてはお家の大事」トつか〳〵と花道へ行く、七つの鐘鳴る、權八數へて。「ありや七つの鐘、暮六つ迄は僅か一時、奥方の御歸館あら

牡丹が望で有らうとは」助太夫「牡丹は花の富貴草、花の富貴は身の富貴」權八「ヤ」助太夫「白井の家を大家に取立て、榮華の上にて家國を押領なさん汝が魂」權八「ム、」トこなし。助太夫「見拔いた眼に違ひは有るまい」權八「すりや私が」助太夫「思ひ内にあれば色外に表はれるの道理、兼て此助太夫が思立ち、鎌倉にある若殿の側仕袋井刑部と心を合はせ、あの方にて毒殺なさん手段ぢやはやい」權八「エ、」ト吃驚する。助太夫「サア紛失の一腰も身が詮議なさば手に入るは眼のあたり、白井の家も大身に取立てゝの榮華、悴助市には大事は明さぬ、汝が魂見込んだ故、委細を申して身が片腕、荷擔をしやれこりや權八」權八「すりや助太夫殿には、家國を押領の思召、それに荷擔のこの權八、武士の誓の金打までをムウ」ト思入あつて。「委細畏つて御座りまする」助太夫「すりや得心か重疊〳〵、萬事鎌倉の方へお取持の則ち久下玄番樣、しかし密計の毒藥、相良在に居る卜庵に調合致させ、取りに遣はせし所、玄蕃樣の御出立の間に合はざる故、今夜の泊池田の宿まで、奥方御歸館の上、自身に參つて何かの密談、天龍川の渡船は暮六つ限り、其六つ限に天龍へ參らねば、毒藥を玄蕃樣へお渡し申す事がならぬ故、甚だ身共心急き、と云うて奥方御歸館なければ參られず、種々に心を痛め居るワイ」權八「左樣ならば其毒藥を、暮六つ迄に天龍川を越す玄蕃樣へお渡申す、其お使は私が往くで御座りませう」助太夫「イヤ〳〵汝

ト首にかけた狀箱を出す。助太夫「ア、これ一足の事で立番樣へお渡し申さぬが殘念、大儀で有つた、神職方へ參つて休息致せ」善平「それは有難うござりまする、左樣なら旦那樣」助太夫「往け往け」善平「やれ〳〵大汗になつた」ト善平下座へ入る、助太夫狀箱をあけ。助太夫「ア、これ些とも早く立番樣へ、と云うて奧方の御歸館なければ罷越されず、ムウ」ト當惑の思入、此時權八鳥居より出かゝり思入あつて。權八「助太夫樣、まだ奧方は御歸館ではござりませぬか、私はお先へ」ト行かうとする。助太夫「こりや〳〵權八、些と其方に申聞かせねばならぬ事がある」ト權八戾り。權八「私へ御用とは」助太夫「先刻鎌倉のお客人の御前にて身共が申した事、定めて非義と思うたで有らうが、畢竟汝が爲、必ず惡う思はぬがよい」權八「御厚情の助太夫樣、何しに惡う存じませう、殊に助市殿の緣に寄りますれば、誠に實父とも思ひまする」助太夫「然らば其方に聞かさう、金打しやれ」權八「エヽ」ト權八思入。助太夫「背かぬといふ金打見たい」權八「たとへ非義非道にも致せ、親に返す詞は御座りませぬ、如何にも拙者が心底」ト合方になり金打する。助太夫「適れ速かなる心底、そちも當社へ日參致すが、何か望があらうがな」權八「望と申すは何卒紛失の長光の刀詮議し出し、再び白井の家を立てたい願ひ」助太夫「その長光は身が」權八「ヤ」助太夫「イヤサ何さ見やれ、あの花壇の牡丹、あれが望にて有らうがな」權八「心得ぬ其お詞、この

夫殿、其許の爲と存じ、今日迄は逗留致し、一藥持參とは存じたが、此書狀ではモウ片時も猶豫はならぬ」助太夫「御尤の仰せ、いづれ後より到著次第」辰平「下郎が殘つて何事も御用を聞きたいものなれど、奴とても旦那の御供」玄蕃「只今より出立致すにもせよ、いづれ天龍川の渡津か池田の泊りと存ずれば」助太夫「御旅宿までも持參致すでござりませう、何を申すも打惡く奥方のお供先」玄蕃「跡より屆け召さるゝにも天龍川は暮六限り」助太夫「然らば一藥手に入らば、暮六限り必と彼方へ」玄蕃「相待ち申す本莊氏」助太夫「玄蕃樣」玄蕃「早くさつしやい」助太夫「心得ました」

辰平「いざお立ちなされませう」ト唄になり、玄蕃辰平若い衆向ふへ皆々入る、助太夫殘り。

助太夫「ハテあの善平めは何を致して居る事やら、玄蕃殿出立の前方、彼の一藥を渡したいものぢやが、アゝこれ心の急かるゝ」ト向を見て氣の急く思入、テンツゝになり花道より善平飛脚にて、狀箱を首にかけすた〳〵と出て來り、助太夫に行當り。善平「ハイ〳〵御免なされませ御免なされませ」助太夫「やい〳〵、わりや善平ぢやないか」ト善平、助太夫を見て。善平「ヤア貴方はお旦那」助太夫「待きつて居つたはやい」善平「左樣で御座りませうが、相良表へ參りました所、先にても遠方へお出なされてお不在、兼て御調合もござりました樣子では御座れど、何事を申すも大事のお藥故、お歸りの上にて遣はされましたゆゑ、大きに隙取りました、則ち御狀箱に」

御仁心にて、其儘に御用捨下さるのぢや、有難いと思ひ居らう」 袖内「有難うござりまする」 トこたへ出る。 玄蕃「下郎め、以後の見せしめ」 ト扇にて眉間を打破る。 袖内「こりやしやつ面へ」 トかゝるを止めて。 權八「お詫が濟めば最早參詣。玄蕃樣」 玄蕃「權八とやら」 權八「袖内參れ」 袖内「ムウ」 ト唄になり權八、袖内を伴れて下座へ入る、玄蕃、助太夫、辰平殘る、合方になり。 玄蕃「助太夫殿、あの者は貴殿の御養子、助市とやらの實の弟でござるかな」助太夫「左樣で御座る、生れは因州大江の家中、彼が兄めは拙者養子に致し申せしアノ助市」 玄蕃「すりや其許も權八とは内緣、ハテよい若者を御緣者に持たしやつたな」 助太夫「イヤモウ何、それがそれ片腕にもなる者をと思へども、固意地拗な彼等が親、寂滅させたは殿より預かる備前長光の此刀」 ト懐より一寸出して。「密に盜取つたる所、案の如く白井家の滅亡、權八諸共身が厄介なれば則ち隨身、なんと巧く參つたではござらぬか」 トばた〳〵にて向より侍一人出て來り。 侍「ハツ玄蕃樣へ鎌倉より火急の御狀」 ト書狀を差出す、玄蕃取つて披き見て思入。 玄蕃「こりやこれ鎌倉表より書狀到來次第、身共に立歸れよとの書翰、すりや唯今より出立致さずばなるまい」 侍「急御用故早々御歸宅なさるゝ樣、飛脚の口上でござりまする」 玄蕃「然らば左樣致さずばなるまい」 助太夫「さある時は渡し申す彼の一藥、只今以て手に入らず、ハテ扨殘念な儀でござりまする」 玄蕃「助太

ト又見すまし打つて蒐る、立廻り三味線の白囃子。「こりや丁稚め、中々出來すワエ」權八「これではお相手になりませうか」ト立廻り。玄蕃「イヤ實が有つて面白いワエ」權八「然のみもござりませぬ」玄蕃「ムウ。こりや助太夫殿の仕込と見えて、一傳流の出精が見ゆるワエ」權八「ほんの猿が人眞似とやらで御座ります」トぎつくりとなり立廻の中、玄蕃危くなる、辰平つかつかと行き權八へかゝるを、手酷く叩きのけ、玄蕃が持つたる竹刀を打落し、權八玄蕃を打かうとする、助太夫權八を突退け扇にて打すゑる。袖内「こりや權八樣を」權八「何故打擲召さるゝな」助太夫「何故とはこな不調法者めが、大切なるお上のお客人へ對しての此疎忽」權八「デモお聞の通り試合の一手、勝つたらば慮外の科は赦すとあるお客人の。お詞故、立合ひましたるは身の科をお詫の爲、それに此方の此折檻」助太夫「如何に若年なればとて、今の試合を勝といふは、慮外に慮外を重ぬる呆氣、默りをらう」玄蕃「こりや助太夫殿苦しう御座らぬ、丁稚の勝はほんの紛れ中り、この玄蕃が負と。サ言ふは言ふものゝ、こりや上手の手から水だ、殊に神職の此庭先、こゝの飛石あそこの木の根で躓いたのだ、大行は細瑾を顧みずと、これしきの事大事ない大事ない、ヤイ八權」權八「ハッ」玄蕃「其方の武術に免じ、赦し難き科なれど赦してくれる」權八「有難う存じまする」助太夫「ハテ幸運者め」辰平「俺アどうか醉が醒めたやうだ」助太夫「此場はあなたの

か」 權八「イヽヤ全く左樣では」 玄蕃「左樣に武術を申立て過を顧みぬものならば、寧そ試に身共が相手になつてくれうか」 權八「エヽ」 玄蕃「劍術の相手に」 權八「アノ私を」 助太夫「イヤ〱そりや要らぬもの、申さずとても知れた事、鎌倉家の御家風、武術鍛錬の玄蕃樣と」 權八「どう致して私と、中々以つて」 玄蕃「そりやハヤ此玄蕃は、ぎやつと言うと武家に生れて弓矢鐵砲鑓長刀、刃金の中に育つた身共と權八との試合は、誠に鬼に餓鬼の戯事、併し志が不憫だ、まづ玄蕃が武術鍛錬と謂つぱ、劍術が關口流で槍術が寶藏院流、馬が大坪、弓が日置流、魂が大將で守護神が魔利支天、誠に鬼に鐵棒だが、餘り劍術〱と申す故、一試合致した上、其方が負とならば眞劍でたつた一討」 袖内「エ」 玄蕃「何も驚く事はない、一刀の下に命終るはしれた事、若又千に一つ、イヤ萬に一つ其方が怪我の表裏に勝つたらば、それを詫の種にして科を赦してくれう」 權八「すりや何と仰せられまする、此試合に私めが勝ちましたらば」 玄蕃「まぐれ中に詫の一埒ゆるして呉れる」 權八「そりや有難うござりまする」 玄蕃「幸ひ汝が持つて參つた竹刀をこれへ」 ト袖内、辰平竹刀を直す。 權八「然らば試合の」 玄蕃「一手が百術」 權八「御不足ながら」 玄蕃「しなへのあしらひ」 權八「冥加に叶ひし」 玄蕃「幸運者め」 ト打つてかゝる、權八止める、立廻り白囃子になる。「こりや中々味をやるワエ」 權八「イヤ誠に未熟でござりまする」 玄蕃「所を」

法、それ故身が樣々と申聞かせしが、常からの片意地」ト權八思入有つて。權八「ハ、大切なるお客人樣とあれば、家來が不調法、權八只管お詫申し上げまする」玄蕃「すりや下郎が詫を」權八「ハヽ」助太夫「なり難い下郎めが詫なれど、まづ其家を齊へんと欲する者は其身を治むるの道理で、本國より附添ひ參りし袖内が事なれば、まづ權八、其方がお詫を致すがよい」權八「アノ私がお詫を」助太夫「玄蕃殿にはお役柄にて、鎌倉家の御家臣、お詫を致さうと思へばな、大小を取措いて犬蹲ひに蹲ばつて、恐入つてお詫を申せ」辰平「それ〳〵、其上にて此仲間の辰平にも頭を下げて、丸裸で踊を躍つて平伏しろ、エヽイ」權八「ヤ」トむつとする。玄蕃「こりやヤイ、それが詫言の種であらう、流石助太夫殿は老功の了簡、出來た〳〵」袖内「そりや又あんまり」權八「コリヤ」袖内「ぢやと申して餘りなるお詫の爲やう」權八「ハテ扨聞分のない、大切なるお客人とある故、七重の膝を八重に折つてもお詫申すが貴賤の禮義、それに心のつかぬ無禮者めが。何卒お詫の程偏に願ひ奉りまする」助太夫「さ程に思はゞ客人のお傍へ參り、お足にて踏躙られてお詫を申せ」權八「さそれは」助太夫「但し犬蹲ひか」權八「サア」兩人「サア〳〵〳〵」助太夫「權八お詫致さねばどう致す、助太夫が相濟まぬ」權八「其儀ばかりは」助太夫「出來ぬと申すか」權八「身不肖ながら私も武術の家に生れし白井權八」助太夫「すりや劍術上達ゆゑならぬといふ汝が高慢

下さらず」助太夫「はて扨こいつが」袖内「イヤ〳〵仲間奉公こそ致せ、武家の扶持を戴きまする袖内、曲つた事申しませぬ」助太夫「ヤイ〳〵おのれ常にから。たとへ無理非道でも權八が申すことは、一言にて控へる、身が申す事は常からも聞入れぬ、憎くい奴の」玄蕃「よう御座る、助太夫殿構はつしやるな、身も發足の幸先、神詣の目錄臺碎かれては心がかり、身共自身に召連れて濱名殿の屋敷へ歸り、急度曲事に申付けて見せませう」袖内「エ」ト恟り思入。助太夫「誠に蛙は口故と固意地者、日頃の不屆、身が家來ながら權八が國許より從參つた其方故、不憫を加へおけば增長つて、今更身共が相濟まぬワヤイ」玄蕃「ヤイ下郎め、玄蕃が手を下し濱名家へ召連れ急度成敗、サアうしやアがれ」ト三味線入の拍子になり、玄蕃袖内を引立て花道へかゝる、向より白井權八、竹刀しなへ持ち出て來り、中程にて行合ひ、是を見て驚き思入。玄蕃「往還の邪魔したわつぱ奴、其處のけ」ト行かうとする。權八「ヤそちや家來の袖内」玄蕃「汝が下部か」權八「何故にお侍にはこの狼藉」玄蕃「此奴が慮外」權八「何か樣子は存じませぬが先づ〳〵」ト袖内を引分け推して本舞臺へ來る。助太夫「こりや〳〵白井權八ではないか」權八「貴方は助太夫殿、今日は奥方のお供御苦勞に存じまする」助太夫「こりやそれなるは此度鎌倉よりお登りのお客人」權八「ナニ貴方が、ハッ」助太夫「今日御發足故當社へ御參詣、お初穗の目錄臺をば壞せし不調

玄蕃「其儀は氣遣ひ致されな、密書に添へて毒の一藥」助太夫「アこれ」ト四邊へ思入。玄蕃「密にしかと渡すで御座らう」ト此時向ふにて。奴辰平「イヽヤ了簡しない〳〵」奴袖内「了簡しないと云つてどうするのだ」ト大拍子になり、袖内仲間にて蒲公附の稽古鑓をかつぎ、辰平仲間にて生醉、破れたる目錄臺を持ち、取合ひながら出て來り花道にて。袖内「これ何するのだ〳〵」辰平「どうと言つて鎌倉のお客人様の所へ引摺つて行くのだ」トいひ〳〵本舞臺へ來て。「この折助めが喰ひ醉つて、お客人玄蕃様のお見送のお供を仕りまする、私が持つて參つたお初穗の目錄臺をば、稽古鑓にて突かゝり、壞しましてござりまする、エイ〳〵」ト助太夫見て驚き。助太夫「その下部は身が方に居る權八が召使」袖内「なる程袖内でござりまする、旦那權八様のお迎ひ、毎日此五社明神へ日參故、今日もこれへ參る道にて、大部屋の仲間衆の無體の致し方」辰平「どこに無體、汝が喰ひ醉つて目錄臺を臺なしに、エヽイ」袖内「イヽヤ酒は一向飲めませぬ」助太夫「默らう下郎め、大切なるお客人、玄蕃様をお見送のお供の衆はお上の仲間、それへ慮外致す不屆者め」玄蕃「殊に當社へ參詣の初穗の目錄臺、壞せしは第一不吉の身が心懸り」袖内「イヽヤお旦那助太夫様、何の私が突當つたのではござりませぬ、後方から此方へ」辰平「何を癡言、慮外をした上うぬが勝手を」袖内「勝手とは何を」助太夫「こりやヤイ袖内、控へぬか」袖内「モウ私が酒も

段、祝著に存じまする」玄蕃「身共態々其許に面談致したきは兼ての一件、御上屋敷へ參りし處、奥方の供致され當社へと承り、それ故これへ尋ね參つた」助太夫「御契約の通り御内談の旨御座つて、よくもこれ迄お尋ね下された、其許樣の御執成を以て鎌倉表の首尾も調ひ、兼々御内談仕り置きました濱名領地の家國を」助太夫「アこれ」ト思入あり。「こりや下部大儀で有つた」足輕「へイへイ」助太夫「こりや〳〵其方は神職へ參り御近習へ申さうには、暫く拙者隙取らう間、この由を申達しくりやれ」足輕「畏りました、左樣なら私はモウ御用はござりませぬか、やれ〳〵これで今日の御奉公も濟みました、併し奥樣のお供、お立なさるゝ迄は御社内を嚴しう廻りませう、へイ〳〵左樣なら御免下されませう、ドリヤ廻つて參らうは、火の廻り〳〵」ト大拍子になり下座へ入る、玄蕃思入。玄蕃「イヤナニ助太夫殿、先達て貴殿身共に談じられたる彼の毒藥の」助太夫「アモシ。サ其一藥も、つてを求めて申遣はしてござれども、未だ一藥出來仕らず、さりながら最早使の歸宅致すに程も御座りますまい」玄蕃「その一藥調ひ申せば身共が請取り、鎌倉に殘りある若殿常陸之助に呑ますは此方の胸中にござる」助太夫「萬事あなたの計ひを以つて、三老の手前もよしなに、殊更密事を認めおきましたるこれ此密書」ト手紙を出し。「一藥今にも持參致さば、密書諸共憚りながら、拙者に同心致した御家中の者へお届けなされて下さりませ」

侠詞花川戸

序幕　濱松明神の場

役人替名

一若黨八内　重太郎
一足輕徳三郎
一奴袖内　岩四郎
一本荘助太夫　宗三郎
一久下玄蕃　舍丸
一奴辰平　紀次
一飛善平　其市
一白井權八　半四郎

本舞臺三間の間向ふ淺黄幕、雨覆したる牡丹花壇、後萩垣、石燈籠、飛石、すべて遠州濱松五社明神神職庭先、大拍子にて幕明ける、ト爰に本荘助太夫、麻裃大小、久下玄蕃野袴深編笠羽織、菖蒲革の足輕、六尺棒を持ち、若衆の仲間二人控へ居る。

足輕「へイ〳〵本荘助太夫樣へ申上げまする、貴方樣が此程鎌倉表よりお登りなされたる久下玄蕃樣、今日奥方當社へ御參詣のあなた樣はお供故、則ち下郎奴が此所へお伴ひ申したので御座りまする」助太夫「下部何と申す、すりや彼方が久下玄蕃樣かな」足輕「左樣でござりまする」玄蕃「イヤナニ本荘氏、久々にて逢ひ申した」ト笠を取る。助太夫「これは〳〵、一別以來先は御堅勝の

伊達競阿國戲場

脚本傑作集　下　目錄

は文化の末頃なるべし。

校訂の方針は上巻に同じ。

大正三年九月

校訂者　南　茂　樹

緒言

上巻に次ぎて本巻に収めたるものは、次の五篇也。

俠詞花川戸　「幡随長兵衛精進俎」の改題にして、「平井權八吉原衢」の前身也、正三門下並木五瓶の作。

五大力戀緘　同一作者の筆、初め「島巡戯聞書」と稱し、琉球を舞臺とせるものなりしが、後其初三段を削り、四段以下を潤色して、大いに世の好評を博せり。

いろは假名四谷怪談　江戸作者鶴屋南北の代表的傑作にして、文政八年始めて中村座に上場せるものなり。

與話情浮名横櫛　所謂「切られ與三郎、横櫛お富」の芝居にして、江戸作者三世瀬川如皐嘉永六年の作に係る。

伊達競阿國戯場　千代萩と累の因果物語とをつき合はせたるものにて、作者詳ならず、年代

脚本集

下

